電脳コイル private edition <version 3.00>

此花耀文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
電脳コイル　ｐｒｉｖａｔｅ　ｅｄｉｔｉｏｎ　＞ｖｅｒｓｉｏｎ　３．００＜

【Ｎコード】
Ｎ９３４６Ｍ

【作者名】
此花耀文

【あらすじ】
～三たび、この道の上でふたりは巡り会う～

今より少しだけ未来の２０２Ｘ年。
小学生の間では、ウェアラブルコンピューター【電脳メガネ】が大流行していた。この【メガネ】は、街のどこからでもインターネットに接続し様々な情報を表示する機能を備えた、子ども達になくてはならないアイテムだ。舞台は由緒ある寺社仏閣が立ち並ぶ古都

でありながら、最新の電脳インフラを擁する地方都市「大黒市」。
小学6年生の小此木優子は、その大黒市へと引っ越してきたばかり。電脳空間が壊れやすいというこの街で、優子の飼い犬、電脳ペットのデンスケは早速電脳物質の結晶を見つけてくる。それをきっかけに、優子はこの街の子ども達、高度なスキルを持つ【メガネ】ユーザー達のいざこざに巻き込まれる。そして、優子はもうひとりの”ユウコ”と巡り会う。
反発し合いながらも惹かれてゆくふたり――。それぞれ痛みをともなう過去を抱くふたりのの心の隙間を埋めるもの。新たなる冒険の中で、ふたりはその答えを探し求める。

これは、アニメ『電脳コイル』、そして小説版『電脳コイル』、この2つの時間軸からも独立した3つ目の時間軸に存在する物語。『電脳コイル』のフィールドをそのままに、アニメ、オフィシャル小説と同じスタートラインから、川島奏と此花耀文が独自の解釈を加え、世界観、キャラクター、その他設定の異なる別作品として書き綴ってゆく。原作の魅力を残しつつも新たなる風が吹き込まれた、誰も知らない『電脳コイル』が走り始める……

Prologue

引越しの準備は夜中までかかった。おまけに今朝は7時前に起きて身の回りの整理、その後は引越し屋さんの手伝い、やっと手が空いてお昼を食べたらついうとうとしてしまった。

デンスケが騒ぐのでぼんやりと眼を開け、時計を見たら出発ぎりぎりだったから、それで一気に目が覚めた。タラちゃんに電話するともうみんな駅前で待ってるという返事、大急ぎで家を出ようとして、積み重ねた経験というのは恐ろしい、ついついいつもどおり言ってしまった。

「行ってきまあす」

「ちゃんとお財布持った？」

なんて聞いたお母さんもお母さんだ。だから、

「持ったわよ！　何歳だと思ってるの」

って、それが、海外赴任する両親と祖父母の家に預けられる姉妹の、最後の会話になったのだった。

待っていてくれた学校のみんなと別れの挨拶もそこそこに、京子をほとんど抱えるようにして駅舎を疾走する。出発のベルが鳴り響くプラットホームから列車に飛び込むのと同時に背中でドアが閉じた。

「寂しいなんて思ってる暇もなかったなあ」

口の中で呟きながら空席に腰を下ろす。早速窓に張りついた京子が、

「お姉ちゃん」

指差した窓外に、ちぎれんばかりに手を振って駆けるタラちゃんたちの姿が映った。窓の内側から手を振り返し、声を出さずに口だけを大きく開いて「さよなら」の形を作ったら、急に胸苦しい気分に襲われて、送別にもらったフォトフレームに涙が1滴落ちた。

金沢の最後の思い出になったフォトフレームは、今でも大切に机

の上に飾られている。数え切れないほどたくさんの体験があんな小さな枠の中に収まってしまうのかと思うと、信じられないような、寂しいような、不思議な気分になる。

ほとんど何もしなかった癖に皆につられて早起きしていた京子は、案の定、出発から１０分も経った頃には舟を漕ぎ始めた。

「寝てなさい。大黒についたら起こしてあげるから」

鞄からタオルケットを出してかけてあげると、嫌がって除けようとした手の力もたわいなく抜けて、すぐにすうすうと小さな寝息が聞こえた。小さな体をゆっくり座席にもたせて、固く結わえた髪にいつの間にやらぽつんと乗っていた桜の花びらをそっと除け、さて、と、もうやることがないんだった。

背伸びしてひとつついた息と一緒に気も抜けたのか、急になんだかぼんやりしてきた。元気なのはデンスケだけだ。デンスケはオジジがくれた電脳ペットだから、オジジのところに帰れるのがわかって嬉しいのかもしれない。

背もたれに寄りかかって見るともなく眺めるうちに、田んぼ、林、民家がせわしなく交替する車窓の景色に記憶が重なって、私の小学校生活が順繰りに流れていった。思い出の中の私は大抵楽しそうだ。タラちゃんと一緒の時は特に。大黒でも、タラちゃんみたいな友達ができるだろうか。

しくと心の奥に小さな痛みを感じた。霧のかかり始めた意識にぼんやりした疑問が浮かぶ。

この気持ちは何だろう？　金沢のみんなとの別れの寂しさ？　大黒でのこれからへの不安？　ううん、違う。小さい頃のおもちゃ箱からふいに転がり落ちた鋭い薄片のような、忘却のヴェールの向こうの、切ない思い出。

車窓の向こうとばかり思っていた街の風景の中にいつの間にか自分がいると気づいて、同時に、ああ、これは夢なんだとも納得した。

だって、どこともわからないはずの街を、私はさも自信ありげに歩いていたから。はぐれないように京子と手をつないで、すぐそばにデンスケもいる。迷路のように入り組んだ路地を一心に、どこに向かっているんだろうと思ったちょうどその時、ぱっと視界が開けた。大通りの交差点だ。

「待ってた」

急に近くで声がした。見覚えのある女の子が、私と向かい合って立っている。視線が交わった瞬間、強い感情が心を抜け出したように辺りの景色が塗り替わった。

思い出が身を刺すほどに鋭い光に変わって、あちこちで閃きながら道の上に不思議な幾何学模様を作り上げていく。輝きに誘われるまま、差し出された手を握りしめようと身を乗り出した時、ぐらっと上体が傾いで夢が途切れた。

もう少しで届きそうだったのにな。

電車の中で見た夢を思い出し、持ち上げた手を未練がましく握ったり開いたりしながら、私は駅舎の階段を降りた。もちろん、今の私じゃまだ届かない。それでも、お互いの肌の温度さえ感じられるほどに、あんなに近付いたのは初めてだ。

「必ず会いにいくよ」

呟いて最後にもう1度こぶしをぎゅっと握りしめ、そのまま高く持ち上げて、はぜるように開いた。手を中心に、光る文字の連なりが、所々欠け損じてはいるものの正確な同心円を描き、空間全体を波立たせる。街の喧騒が不意に遠のいて、孤独な、しかし凛とした感情が私を包む。軽くまたたいたその一瞬に、目の前の光景に鮮やかな深みが加わった。

いいぞ、けっこう潜れた。下ろした手をゆるゆると握ると、さっ

き飛び散った光の文字が戻ってくる。私たちの、懐かしいあの夏の思い出の欠片。まだまだ足りないけれど、ここでならきっと一気に残りを集めることができる。

「モジョ……」

肩口に乗せたモジョは、さっきから辺りを注意深くうかがっている。モジョの態度に教えられるまでもなく、確かにこの街の電脳空間はちょっと普通じゃない。今ちょっと呼び覚ましただけで、あちこちに残った古い空間が活性化して、水紋のようにざわめきが広がっていく。

「この調子なら意外と簡単に見つかるかもしれないぞ」

指の腹で軽くモジョの背中をなでながら、周囲をぐるりと見渡す。ロータリーの向こうは、昔からちっとも変わらない小ぢんまりした商店街と、いくつかのデパートが並ぶ大通りがある。ここからは見えないけれど、大通りを進むとすぐ住宅街に入り、更にまっすぐ行けば北の山のふもとに行き当たるはずだ。大黒市は、山々に囲まれた盆地にできた、典型的な地方都市だ。私はこの町に、5年ぶりに帰ってきた。

「モジョ、モジョ！」

地面に飛び降りたモジョが目の前で飛び跳ね、感傷に浸りかけた心を呼び戻した。

「ばか、そう急くな。反応が出るまで体力がもたないぞ」

モジョをたしなめて目を移したぴったりのタイミングで、マップに赤い光が点滅した。線路の高架に沿って進んだ先にある神社の境内だ。

「出たぞ！　モジョ、挟み撃ちだ！　先に行って反対側から追い込め。私はこっちで待ち伏せして捕まえる」

「モジョッ！」

モジョは弾かれたように跳んでいく。片手に乗るくらいの大きさしかないのに、エネルギーの塊みたいなやつだ。頼りになる私の相棒。モジョはライン生産の電脳ペットではない、私のための特別な

オートマトンだ。だから、世界に全部で2匹しかいない。この子と、後もう1匹は――

それで思い出した。モジョの後ろ姿を目で追いかけながら、私は通話画面を立ち上げた。もうすぐここに来るはずの、もうひとりの相棒に電話するために。

第1話　ヤサコとイサコ　A　part

子供たちの噂によると、クラスに同じ名前の子がいた場合、仲良しになるよりもライバルになることのほうが多いそうです。

「えーっ、オジジ、来てないの？」

思わず声が高まって、通行人がこっちを振り返った。

「違うわい。おぬしらが時間どおり来ないから、予定が合わなくなっただけじゃ」

オババの声は怒った様でも詰問調でもなく、淡々と事実を語っていたから、私はかえって言い返せなくなってしまった。確かに、あの変な夢のせいでつい大黒駅を寝過ごして、約束に1時間近くも遅れてしまったのは私のせいだ。出発の時、あんなに急いだのがばあだ。

「タクシーを使っても構わぬが、自腹じゃぞ。歩きで来られない距離でもなかろう」

「仕方ないわ……」

傍らの京子を見下ろすと、

「うんち！」

「もう。あなた、それやめなさいよ。オババに笑われるよ」

でも、元気な返事には少し安心した。

「歩いていくわ。ちょっと遅くなるかもしれないけど」

「いつでもＯＫじゃよ。わしは1日中店番じゃからの。引越しの荷物はとっくにおぬしらの部屋に上げてあるぞい。まったりと来るがよいわ」

「まったく、他人事だと思って。……もしもし、ちょっと、オババ

？」

電話は切れていた。

「オババったら、マイペースなんだから」

ま、いいか。大黒は金沢と比べるとすごく小さい町だけど、そのせいか知らない場所でも親しみ深い雰囲気があって嫌いじゃない。のんびり歩いていくのも楽しいかもしれない。

通りの信号を渡って少し歩いたら、周りはすぐに緑の多い住宅地に変わっていった。住宅地といっても、よく郊外にあるみたいな、同じデザインの家がうん十件も立ち並ぶ味気ないものではない。家を見ても庭を見ても、何世代も前からそこに住んでたんだなあと思わせる、にじみ出る個性っていえばいいのか、ならではのものがある。

「でも、この辺、こんな風景だったかしら」

最後にオジジの家に行ったのはおととしのお盆だから、この道を歩くのは1年半ぶりになる。昔の記憶では、青い空と白い塀ばかりが印象に残っていたんだけれど。

そうか、変わったのは私のほうだ。４年生の終わりくらいから急に背が伸び始めて、今はもう１５０センチに届くくらい。この前来た時から２０センチ近く背が高くなった。それで町の眺めも、前とは別のものになっているのか。

同じ場所を歩いていても、見えているものは人によって全然違うんだな。今だって、京子やデンスケは、私の知らない風景の中にいるんだ。

そう考えると、一緒に暮らしている京子たちが急に珍しいお客でもあるような気がして、何とはなしに隣を見下ろした。頭を突き出すようにして、一心に前へ進む京子はけっこうかわいらしい。デンスケは――

「あれ、デンスケはどこ？」

見回したが、あの愛嬌のある姿はどこにも見えない。

京子がちょっと前に通り過ぎた十字路を指差した。
「そこの角を曲がってどっか走ってったよ」
「えっ！？　何で教えてくれないのよ」
「今教えたもん」
急いで引き返したけれど、十字路の向こうにもデンスケの姿はなかった。
「困ったわ」
デンスケを見つけてからオジジの家に行こうか、それとも一旦荷物と京子を預けてから、改めて探しに出ようか。
移り気な京子は、今はおとなしくしているけれど、デンスケを探すのに時間がかかったらどうなるかわからない。不機嫌な時の京子は誰に似たのか強情っぱりで、下手すると道端に座り込んでてこでも動かなかったりする。
といって見知らぬ町にデンスケを放っておくわけにもいかない。空間の不安定なことで有名な大黒で、悪いウィルスでも拾ってこないとは限らない。デンスケはもういい年で、昔と比べてウィルス耐性が落ちてきている。勝手のわからないこの町に、長く1匹にしておきたくない。
立ちすくんだ背中に、あおんと声が響いた。はっとして振り返ると、悩みの主がしっぽを振りながらこっちを見上げている。
「よかったあ。デンスケ、お前どこに行ってたの」
抱き上げると、デンスケは口にくわえた色硝子みたいなものを私に差し出すようにした。
「何かしら？　きれいねえ」
デンスケが持ってきたのだからもちろん電脳物質だ。日にすかしてゆっくり動かすと、屈折した青緑色の光がぱらぱらと気まぐれな模様を描いた。
「京子も。京子も欲しい」
「えっ。でも1つしかないのに」
どうしよう。京子にあげてもいいけど、ちょっと私も欲しいし、

そもそもこれが何かも気にかかる。簡易ウィルススキャンには引っかからなかったが、家についたらよく調べてみたい。

くうくうとデンスケが誘うような声を漏らした。

「デンスケ、もしかして他にもこれのある場所を知ってるの」

わん、と今度は元気な答えが返ってきた。地面に鼻を近付けておいをかぎ、デンスケはすぐに走り出した。

「行こうよ、お姉ちゃん」

言ったそばから、京子もデンスケの後ろ姿を追っていく。

「あ、ちょっと待って。待ちなさいったら」

荷物を詰めた大きな鞄を肩からさげているから、私はそんなに速くは走れない。2つの影を見失わないように、時々転びそうになりながら必死で駆けた。

オジジの家への道を外れて5分くらい走ったろうか、かげろうの立つようなもわっとした春の陽気の中、重い荷物を持って駆け回ったせいで、寝不足も手伝って頭がくらくらし始めた時、T字路の突き当たりにこんもりと木々の茂った神社が見えた。デンスケが境内に駆け込み、京子が続く。少し置いて私も、鳥居の下にしつらえられた5段足らずの石段を飛び越えた。

鳥居をくぐった途端、空気がそれまでとは全然別のものになったのがわかった。薄暗く、ひいやりと湿って人気のない境内。かきかけた汗が引いていく。

「京子、デンスケ」

大声を出すのがはばかられて、口に手を当てて低声で呼んだ。返事はない。おかしいな、確かにここに入っていったのに。境内には立木がたくさんあって見渡しづらい。京子の声でもしないか、耳を澄ましてみた。

大勢の人々がひそひそと呟く声が聞こえた。

「嘘！」

思わず大声が出ていた。そんなたくさんの人間、ここにはいない。

空耳に決まってる。そう信じこもうとすればするほどに、今しがた聞こえた呟きが、変に現実感を伴って耳によみがえった。日が陰ったのか、辺りの暗さが一層に増した気がする。風もないのに青い葉っぱが2、3枚、目の前に落ちた。

突然腰に何かが跳びついて、「きゃあ」と恥ずかしいくらいに悲鳴らしい悲鳴を上げながら、私は尻もちをついてしまった。

「お姉ちゃん」

「なんだ京子か、びっくりした」

でも見つかってよかった。立ち上がってお尻をさすっていると、京子が片手を前に突き出した。

「これ」

何かを握りしめている。

「なに？」

受け取ろうとして手を伸ばすと、

「うんち！」

「ひえっ」

またも情けない悲鳴を漏らし、私は反射的に手を引いた。京子の手から離れたものは、それでぽとりと地面に落ち、木漏れ日を受けて柔らかな薄紅色に輝いた。

「駄目でしょ、いたずらばっかりして」

しかめっ面で京子を叱りつけながら、落ちたものに目を移す。

「あら、さっきの色違いね」

「デンスケがたくさん見つけたんだよ」

京子の開けてみせた電脳ポシェットには、それぞれ色の違う電脳物質が3つ入っていた。

「それ、お姉ちゃんにあげる」

乳歯が抜けて隙間の空いた歯を見せてにこっと笑う京子の顔を見ると、それ以上怒る気もなくなってしまった。しつけを考えたらきちっと叱らないと駄目なのだろうけど、そんなところは、お母さんと違って私は甘い。

「そういえば、デンスケはどこ？」
「むこう」
指差された先は、古い社務所の裏側だった。それでさっき来た時見つからなかったのか。
「じゃあデンスケを連れて、オジジの家に行きましょ。遅くなっちゃうわ」
「うん」
京子と手をつないで、社務所に向かって歩き出した刹那、ふとすぐ横を何かが行き過ぎたような気がした。最初、風が出てきたのかと思ったけれど、境内の木々の枝は全然揺れていなかった。それでも気のせいとはいえない、何だろう、この感じ。空気が波立って、辺りの景色が刻々と変えられていくような。今目の前に見ているはずの光景が、懐かしい思い出との境をなくしていくような。
突然聞こえたデンスケのうなり声が、取りとめのない思考を吹き飛ばした。
「デンスケ？」
早足で社務所の裏に回った私の目に映ったのは、まず、こっちに背を向けて足を踏ん張ったデンスケ。そのにらむ方向には、見たこともない黒い塊。生き物？　メガネを上げると何も見えないから電脳生物とわかって少しほっとしたけれど、デンスケにとっては危険な相手かもしれない。
「来なさい、デンスケ」
硬い声で言った途端、黒の塊が動いた。丸い2つの光、多分目だ、それが私のと交差して、そのまま真っ直ぐ、心にまで届いたような気がした。
自分でもそうと知らず、思い出の奥深くにしまい込んで、それで忘れたふりをしていた気持ち。光る目は、じっとそこを見つめているようだった。ふいにやましさのような感情が湧き上がって、私は思わず顔を背けた。
わん、とデンスケのとは思えないほど勇ましい鳴き声が響いて、

急いで視線を戻した時には、身を翻した黒い塊が境内を出ようとしていた。

「待って、止まりなさい、デンスケ！」

静止の言葉も聞かず、デンスケも黒の塊を追って鳥居をくぐる。いつの間にか手を離していた京子まで、意外な素早さで神社を飛び出していく。

「ちょっと、待ってってば！　なんでこうなるのよ」

重たい鞄を抱え直してあたふたと境内の外に出ると、はるか彼方を一散に駆けていくひとりと1匹の姿がちらと映って、すぐに見えなくなった。

「一体どうなってるの、この町は……」

泣き言みたいに呟いて深いため息をついた私は、鞄の肩かけをそろそろ痛くなり出した右から左肩に移して、行く当てもないけれど、取りあえずデンスケと京子の消えた方向へ、にわかに重たくなった足を引きずって歩き出した。

第1話　ヤサコとイサコ　Ｂ　ｐａｒｔ

イリーガルを捕まえるには、１種のコツがある。

まず、誰でも思いつくがやっぱり大事なのは、やつらが寄ってきそうな餌を用意することだ。イリーガルの食べ物はメタバグだけど、メタバグなら何でもいいってわけでもない。人間と同じように好みってものがあるのだ。やつらがどんな種類のメタバグに群がり、どんなものは敬遠するのか、それは長年にわたる身銭を切った調査の結果として、重要機密ファイルに保存してある。

次に、イリーガルがどんな場所に現れるのかを知っておくのも大切だ。やつらは古い空間に出現する、もちろんそうだが、特にこの大黒には古い空間なんて掃いて捨てるほどある。闇雲に古い空間を探したって見つかりっこない。やつらが出てきやすいのは、例えば古い神社の床下みたいに空間管理局の手が届かない領域とか、でかいサーバとサーバの境界みたいに、細かい不具合が絶え間なく起こり続けている界面とか、言い方は変だが、安定して異常な場所なのだ。大黒市の一体どこにそんな場所が存在するのか、それも重要機密ファイルに事細かに記されている。

イリーガルが何を食べ、どんなところに居つくのか、それがわかれば、やつらを見つけること自体はそんな難しい話じゃない。しかし、だ。見つかったからってそう簡単に捕まってくれるほど、やつらは甘くない。イリーガル捕獲の第３のポイント、それはどんな罠を設置するかにある。やつらの姿かたち、頭の良さ、力の強さをきちんと考えた上で、捕まえたいイリーガルに最適な罠を仕掛けなければならない。

「でだ、ダイチ。その最適ってのがこれか」

ガチャギリが帽子の下から片目をのぞかせた。

「おう、そうだ。すげえだろ。電脳檻の中にだな、こうやってメタ

バグを仕掛ける。餌につられてやってきたイリーガルがこう、メタバグをがぶっとくわえるとだ、メタバグにつながった紐が引っ張られて、檻の入口が落ちる。どうだ、見事な発明だろう」

「単なるネズミ捕りっすね」

ナメッチが無表情に頭を振る。

「単なるとはなんだよ。俺がこの罠を作るのにどんなに苦労したか。見ろよ、これ全部電脳物質で作ってあるんだぜ。そのためにミサイルをばらしたり――」

「あっ、部室に置いてあったミサイル勝手に持ってったの、お前かよ」

「勝手にとは人聞きが悪いね、ガチャギリ君。有効利用したと言ってくれたまえ」

ガチャギリが立ち上がってこっちをにらみつけた。

「金なんかねえよ。この罠を作るのに小遣いはたいちまったからな。心配すんな、うまくイリーガルを捕まえられれば何倍にして返してやるって」

目先の利益しか頭にない哀れなガチャギリを、俺は優しくさとした。

「そうやってお前はどれだけの金をどぶに捨ててきたか、わかってんのか。最初は食い物の研究のためだからって、せっかく集めたメタバグをそこら中にばらまいて回る、次は住みかを調べるためにいぶり出すとかいって、その辺の草むらとかに手当たり次第にミサイルを撃ち込む、それで今度はこれかよ」

「俺のお小遣いも返してほしいっす」

すかさずナメッチがガチャギリの尻馬に乗る。

「ばか、研究は確実に進歩してるだろうが。もう少しなんだよ」

「うるせえ！　勝手にやってろ。俺はもう抜ける」

ガチャギリが急に背中を向けたので、俺は少し慌てた。

「おい待てよ、どこに行くつもりだ」

「知り合いから電脳戦の助っ人頼まれてんだ。そっちのほうがよっぽど金になるんだよ。ナメッチ、お前はどうだ。こいつと一緒にかないもしねえ一攫千金の夢を見てるか、それとも俺と来て優雅に小学校最後の1年を送るか、どっちがいい」

「え、え、えっと俺は……」

突然話をふられたナメッチは、背をのけぞらせ俺とガチャギリの間で視線を行ったり来たりさせた。俺はぎゅっとナメッチを見つめ返した。

「ナメッチ、迷うような話か。これまで一緒にやってきたこと、思い出してみろよ」

ナメッチははっとしたように俺を見て、力強くうなずいた。

「親びん」

「おおナメッチ、お前はわかってくれるか」

「今までお世話になりました」

つんのめった俺を尻目に、2人はさっさときびすを返す。かける言葉も見つからない薄情な背中を、歯噛みしながら見送るよりなかった。

「くそ、せちがらいぜ」

取り残された俺は、仕方なく1人で罠の設置を始めた。

あいつら、今に見てろ。この罠ですんげえイリーガルを捕まえて、メタバグざっくざくの電脳大金持ちになってやる。その時になってから泣きついてももう遅い。あいつらは俺の豪邸のトイレ住まいだ。いや待て、トイレに誰か住んでたら俺のほうが困るか。じゃあトイレは3つ作って……。

考えているうちに何だかもよおしてきた。9分どおり仕掛け終わった罠がちゃんと動くか手早く確かめてから、俺はその場を後にした。

トイレから出て何の気なしに視線をやった時、置きっ放しだった罠が少し動いたように見えた。まさか。一気に心に火が付く。いや、

落ち着け。こんな簡単に夢が実現するはずない。見間違い……じゃない！　もう1度動いた。確かだ、と思った瞬間にはもう、足が全力で回転していた。公園の木々しか映らないはずの俺の目に豪邸がおどる。

「……あ？」

だがやっぱり現実はそうそう甘いものじゃなかった。罠にかかっていたのは、腹にメタバグを貯め込んだイリーガルではなく、不細工で間抜けそうな顔をした、妙な電脳ペットだ。丸っこい白の体に不釣り合いなでかい頭、目の周りの殴られたような丸いぶちがバカっぽい印象を強めている。

「パンダか？」

違う。黒、というよりは濃い灰色のぶちは、こいつの左目と右耳にしかない。パンダならもっと左右対称のデザインだし、体にも黒いところがあったはずだ。しかし、それじゃ他の何なのかと聞かれても、俺には答えられない。

うーむ、もしかするとやっぱり変なデフォルメのパンダかもしれない。何せ電脳ペットとしてのパンダの人気はすごいものがある。メガネをかけて街中を歩けば電脳犬、猫の次くらいの割合でパンダを見かけるほどだ。ちなみにパンダの次の人気はハムスター、次の次はペンギン。つまり現実に身近な動物か、そうでなければ珍獣が受けるってわけだ。小鳥なんかも人気が出そうなもんだと思いきや、意外にも空を飛ぶ鳥のペットは実用化されていない。数十メートルを超える空中は、高層ビルなんかを除いて空間の整備がきちんとなされていないから、自由に飛び回るものがたくさんいたら不具合なんだろう。

いやいや、電脳ペットの人気ランキングなんてどうでもいいんだった。

「出てこい、ぶさパンダ」

俺は罠の入口を開けて、今適当につけた名前で呼んだ。相手は出てこない。メタバグを意地汚くくわえたまま、ぐるると生意気にも

うなり声を立てている。
「これはお前のための檻じゃないんだよ」
強引に下半身を引っ張ったら、野郎、メタバグを離したが早いか俺の腕に噛みついた。
「わっ、やめろ」
慌てて振り払った拍子に体のバランスが崩れた。引っ繰り返ったちょうどその場所に罠があったのは、今日の俺の不幸度からいったら当り前だったのかもしれない。
「いてて、畜生」
むくりと起き上がって、無残にもばらばらに壊れた檻からメタバグを拾おうと伸ばした手が空をかいた。はっとして見ると、噛みつかれたところがフリーズして、電脳の腕と本物の腕がずれてしまっている。弱り目にたたり目だ。俺は泣きそうになりながら、5桁目に突入したところでようやく止まった有償修復の金額表示を眺めていた。
もう怒る気にもならない。駄目な日は何をやっても駄目だ。さっさと帰って寝ちまおう。
修復が完了した腕の具合を確かめた時、ふと地面に光るものが目に入った。メタバグだ！　罠に使ったのとは違うのがすぐ近くに転がっている。何でこんなところに。ま、いいや。これが今日のささやかな収穫か。
「うわ、ばっちいな」
拾い上げると、何かべとべとした感じのものが手にくっついた。これ、電脳よだれだ。ああそうか、きっとさっきのぶさパンダの口の中にあったのが、噛みついた拍子にこぼれたんだな。
待てよ。どうして電脳ペットがメタバグなんか持ってるんだ。そういえば、罠にかかったのもメタバグを取ろうとしてだ。まさか……
俺は、都市伝説好きのクラスの女子が話していた噂を思い出した。
『電脳ペットの中には何故かメタバグのありかを探し当てる能力を

持ったものがいるんですって。特にメガマスのメガネ市場参入より前に作られたペットには、そんな子がいる率が高いらしいわ。いいわねえ、私たちのペットがそうだったら、すぐにお金持ちになれるわよ、うふふ』

その時は眉唾だと思って聞き流していたが、こいつはもしかするともしかするぞ。見回すと、幸いぶさパンダはちょっと離れたところからこっちの様子をうかがっている。俺は笑顔を作った。

「パンダちゃん、こっちにおいで」

ぶさパンダは毛を逆立ててぐるるとうなった。

「別に嫌なことしないからさ。メタバグもやるぜ」

ポシェットから新しいメタバグを取り出して軽く振ってみせる。ところがパンダのやつ、警戒を解くどころかますますうなりを強くして、2、3歩退いた。

「おいおい、どこに行くんだよ」

体をずらすようにしてゆっくりと進みながら、俺はもう1度ポシェットに手をやった。

もう後1メートルちょっとというところまで近づいた時、ぶさパンダがぱっと身をひるがえした。

「逃がすか！」

俺はポシェットから取り出した得物を素早く投げつける。電脳投げ縄だ。こいつの腕には自信がある。これまでも他校のクラブと戦った時、相手の武器を掠め取ったり、逃げていく敵を引っくくったりしたものだ。

ところが、捕まえたと思った瞬間、ぶさパンダは外見からは想像もつかない動きで機敏に縄をかわした。そのまま真っ直ぐ、公園の出口目指してすっとんでいく。

「待て！」

急いで投げ縄を手繰り、俺も駆け出した。

敏捷な身のこなしに見合って、ぶさパンダのやつ、足も速い。ま

ずいぞ、公園から出た後、住宅地の細道に逃げ込まれたら見失っちまう。

焦って公園を飛び出した俺は、だがそこで急ブレーキをかけることになった。ぶさパンダは何故か逃げもせずそこにちょこんと座っている。何やってんだ、こいつは？　まるで珍しいものでも見るかのように、鼻をあげて空中の1点に顔を向けている。その先にあるものは――

泥をこねて固めたみたいな不格好な黒い球体と、それを覆う透明なゼリー状の膜。カエルの卵を思わせる気色悪いその物体の中心では、郵政局のマークが点滅している。

「キュウちゃん！」

叫びに答えるように、キュウちゃんの真下にメッセージが表示された。

『空間の維持に対する重大な問題を発見しました。フォーマットを実行します』

第1話　ヤサコとイサコ　C　part

春休みっていうのは、気分がいいのか悪いのかよくわからないけれど、いつも何か糸が切れたみたいな、中途半端な感じがする。「休み」っていっても夏休みみたいに長くもなければ、冬休みみたいにビッグイベントが待っているわけでもない。大人たちは忙しそうにしてるからどこかに旅行に行ったりもできないし、おまけに天気まで、はっきりしない薄曇りにもやもやっとした暖かさが漂って、どっちつかずな気分を助長する。

今年も今年であくびをかいてうつらうつら過ごすうちに、最終日の朝を迎えてしまった。行方不明のペットでもいたらもっと活発な毎日になったのかもしれないけど、ここしばらくは世間も落ち着いたものだった。

でもまあこのまま終わらせてしまうのももったいない。お昼を食べたらパトロールでもしようか。そんな軽い気持ちで、その日の午後、陽光眩い春の町を、私は妙におとなびた、落ち着いた足取りで歩いていた。

パトロールったって何をやるでもない。散歩といってしまったら張り合いがないからそう称しているだけだ。午後の早い時間、うららかな日が注いで、町ものどかな日常そのものだ。空間の調子は悪く、その辺をよくノイズが走っているけど、大黒では当たり前。そうそう目くじらを立てるようなものでもない。

「メガシ屋でも行っとくかあ」

私はあくび混じりに呟いた。メガシ屋は私の家から駅のほうに真っ直ぐ行ったところにある、ちょっと怪しい雰囲気の電脳駄菓子屋――というのは表の顔、裏側はもっと怪しい電脳探偵局なのだ。何を隠そう私も探偵局の一員、会員ナンバー八番、フミちゃんこと橋本文恵、その人である。探偵局は頻発する空間異常の調査、連日持

ち込まれる行方不明のペット捜索、その他もろもろ電脳空間についてのご相談なら何でもござれで大盛況……のはずが、さっきもいったとおり最近は事件のない日々が続いて、商売あがったりだ。ま、平和なのはいいことだけど。

用事もないならわざわざ行く必要もないけれど、他の友達の家はひと巡りしてしまった。メガシ屋にはここ1週間ばかりご無沙汰だから、顔くらい見せといてばちは当たらないだろう。

汗ばみそうな陽気に日陰を選んで歩いていると、腰の電脳ポシェットがもぞもぞと動いた。

「オヤジ？　何やってんの」

私の電脳ペット、いや、シモベのオヤジは、いつもならポシェットの中で丸くなっていて、私の命令がなければ出てこないんだけど、どうしたんだろう。

オヤジはきゅうとひと声鳴きながら曲がり角の向こうを指差した。

「どうしたのよ。なんか来るの？」

道路を見やったちょうどその時、裏道から人影が飛び出した。げっ、ダイチ。私の天敵だ。更にそのすぐ後ろに腐った卵みたいな電脳物質が見えた。げげ、キュウちゃん。こいつも天敵パート2だ。

「あっ、フミエ！　助けてくれえ」

ダイチが情けない声で叫んだ。

「ちょ、ちょっと！　来るな！　私は関係ないわよ」

見たくないのについ凝視してしまったキュウちゃんの姿におぞ気をふるいながら、私は今来た道を走り出した。

「待て！　待ってくれ」

ダイチは何故か私のほうに向かって逃げてくる。

「待てるか！　自分で何とかしろ」

「俺はいいから、こいつを逃がしてやってくれ！」

「こいつ？」

私は走りながら振り返った。ダイチは妙ちくりんな電脳ペットを抱えている。

「何よ、そのみっともないペット。あんたの？」
「俺のじゃねえ。勝手に罠にかかってたんだ」
罠？　よくわからないけど、どうせまたろくでもないいたずらをしてたに決まってる。
「事情が飲み込めないんだけど、助けたければ離してあげればいいじゃない。キュウちゃんの目標はあんたでしょ」
「違う！　狙われてるのはこいつなんだよ。こいつ、メタバグを見つける力を持ってるんだ」
「何ですって？」
ダイチがしまったという風に口に手を当てたその時、すぐ後ろでぎゅうんと音が鳴った。
「危ない！　ダイチ、よけて！」
素早くうなずいたダイチが横っとびに飛んだのに一瞬遅れて、フォーマット光線が地面を刻む。
「詳しい説明をしてる暇はねえ。こいつを助けたい。協力してくれ。うまく逃げ切れたら、こいつの拾ったメタバグを半分やるから」
私は迷った。ダイチだけなら勝手にやられればいいけど、本当にこのペットが狙われてるのなら、助けてあげなくちゃ。こんなおへちゃなペットでも、失くしたら飼い主は悲しむだろう。もちろんダイチのいうことも少しは気になる。
「あんた、その約束守るわね」
「守るさ。男に二言はねえ」
「よし！　こっちよ」
私は通りから細い路地に入り込んだ。すぐ後ろからついてきたダイチが面食らった声を上げた。
「おい、行き止まりじゃねえか」
「計算済みよ。伏せて！」
屈みこんだ背中のすぐ上を狙って、私はレンガ壁を放った。一瞬で展開した電脳の壁が道をふさいで、向こう側でキュウちゃんがぶつかったらしい、ごんとくぐもった音が響く。

「ふう、もう駄目かと思った」
ダイチが大きな息をひとつつく。胸に抱えられたペットも同じ動作をしたのがちょっとかわいかったけれど、
「ばか、安心するのは早いわよ。こんな壁、すぐにフォーマットされちゃうわ。あんた、武器は持ってないの？」
油断してる暇はないのだ。
「武器らしい武器はねえ。投げ縄くらいだ」
まったく。男ってやつは肝心な時に頼りない。
「まあいいわ。じゃあ壁が破られたら私がメガビーを撃つから、あんたはキュウちゃんがフリーズしてる間に縄でその辺にひっくくっちゃってよ」
「おう。もっといい手を考えてる時間はなさそうだしな」
ダイチが見上げた先に、既に壁を7割がたフォーマットしたキュウちゃんの姿があった。
「ペットを隠すのよ。私の後ろにいて」
「すまねえ」
私は仁王立ちになって手をおでこに構える。壁のフォーマットを終えたキュウちゃんが目標を探してわずかに前に出た一瞬を狙って、最大出力でメガビーを発射した。光線は見事キュウちゃんの真正面にヒットする。5秒くらい撃ち続けるとキュウちゃんの起動音が止まり、がくっと斜めに傾いだ姿に細かい走査線が走った。
「よし固まった。ダイチ！」
「わかってらあ」
答えと一緒に投げられた縄はきれいな軌道でキュウちゃんを捕えた。逃げられないようにぎゅっと引きしめると、ダイチは手近な電柱に縄の一端を縛りつけた。
「へへっ、これでしばらくは動けねえぜ」
「じゃあ長居は無用ね。早くキュウちゃんの索敵範囲外に出ましょ」
「おう」
私たちはまだフリーズしているキュウちゃんの下をくぐり抜けて、

小走りで通りへ向かった。

「今回はお前のおかげで助かった。礼を言うぜ」

並んで走るダイチが軽く頭を下げるのを見ると、私も悪い気はしなかった。

「あんたももう6年なんだから、少しは子供っぽい悪ふざけなんて慎んだらどうよ」

「悪ふざけなんかじゃねえ。俺たちはイリーガルを研究してるんだよ。そのうち教科書に名前がのるぜ」

と言い放つダイチの横顔は、しかしどうおまけしてもやんちゃ坊主にしか見えない。

「ふふ、言ってろ」

私は少し笑った。確かに、急にダイチがまじめな優等生になってしまったら、それはそれでつまらないかもしれない。変に大人ぶらないで、悪ガキっぽい幼さを素直に出してるほうが、私は――

「っておい、何考えてんだ私は」

「あ？　どうかしたか。顔、赤いぞ」

「うっさいわよ！」

あり得ない。こんなチビで糞ガキの朴念仁。ない。絶対ない。

「頭に血がのぼったんじゃねえの？　春っつっても暑いからなあ、今日。もうキュウちゃんも追いかけてこねえだろ。どこか日陰に行って休もうぜ」

「そ、そうね。でも公園じゃあまたキュウちゃんが来ないとも限らないし、そうだ、丑子神社がいいわ」

キュウちゃんは郵政局の所管だから、神祇局の縄張りである神社には入れない。

「ああ、あそこなら涼しくていいな」

ダイチもうなずいて、ふたりと1匹は線路の高架近くにある古い神社へと向かった。

丑子神社の石のベンチに腰かけ、ずっと抱いていた電脳ペットをダイチが降ろすと、助けてもらったことがちゃんとわかっているのか、逃げようともせずにお座りの姿勢を取った。

「へえ、この子がメタバグを見つけられるなんてね。見た目、ちょっとおへちゃなただの犬だけど」

「犬！？　パンダじゃねえのかよ」

「はあ？　あんたなに寝ぼけてんのよ。どう見ても犬でしょう」

私に答えるように、おへちゃ犬はわんと鳴いた。

「そうか、犬だったのか。道理でパンダにしちゃ変だと思った。ま、どっちにしても今回は世話になった」

ダイチは妙に格好をつける。

「お礼なんかどうでもいいわ。それより出すもの出して」

私は広げた手をダイチに突きつけた。

「ちっ、現金なやつだな。安心しろ、忘れちゃいないぜ。この犬の集めたメタバグの半分だろ」

ダイチは自分のポシェットをもぞもぞやると、私の手のひらにメタバグを1個乗せた。

「……何よこれ」

「何って決まってるだろ、報酬だよ。こいつが見つけたメタバグは2個だからな、きっちり半分だ」

「ちょっと待ってよ、こんなじゃさっきのメガビー分にもならないわ」

「そんなもん俺の知ったこっちゃないだろ。きっちり契約どおり、報酬は渡しました、と」

ダイチはおへちゃ犬を抱いて立ち上がる。

「じゃあな。俺はいろいろ忙しいんだ。今日はこの辺で……もがっ」

顔面にメガビーの直撃を受けて、ダイチは犬を取り落とした。

「あんたがそういうつもりなら、実力でこの犬、もらい受けるわ」

手を伸ばそうとした時、ばしゅっと音がした。反射的に投げたレンガ壁がミサイルの激突で揺れる。

「ずるい！？　さっき武器はないって言ってたのに」
「こいつは非常用だからカウントに入れねえの」
なんて汚いやつだ。さっき一瞬でも信頼感を持ったのはやっぱり大間違いだった。猛然と湧き上がる闘争心を無理に抑えつけ、壁を盾にして数歩後退しながら、素早く周囲に目をやる。と、電脳犬はダイチから離れて神社の入口に近いところにいた。突然の争いにびっくりしたんだろう。
「馬鹿、犬が逃げるわよ」
「あっ、あいつ」
走り出したダイチの後頭部めがけて、私はメガビーを発射する。再び頭部への直撃を受けて、ダイチは見事につんのめった。
「ひ、卑怯だぞ、この野郎」
「その言葉、そっくりそのままお返しするわ」
なおもビームを撃ち続けると、警告音が響いてメッセージが表示された。
『深刻なエラーが発生しました。修復までしばらくお待ちください』
「けっ、いい気味」
これでダイチは落ちた。修復には数分かかるから、その間にゆっくり犬を捕まえればいい。
「俺が見つけた犬だぞお……」
この期に及んで無様に抗議するダイチを私は冷ややかに見据える。
「そうね、ありがと。コイル電脳探偵局ペット捜索係の私が、飼い主が見つかるまで責任持って預かっといてあげる」
その時、きゃんと犬の悲鳴が聞こえ、私ははっと顔を上げた。まさか、キュウちゃん！？
「何よ、あれ」
我が目を疑うとはこういうことをいうのだろう。見上げた先、さっきまで犬のいた位置に、でっかいカプセルが転がっている。今しも、どこからか現れた毛玉みたいな電脳生物がカプセルを持ち上げて、神社の外に走っていく。

「こら、待て」
慌てて後を追った私は、神社を出たところにいた子と正面衝突しそうになった。急ブレーキをかけた拍子に尻もちをつきかけて、危うくバランスを取って体を支える。
「ご、ごめんなさい」
頭を下げたのは、おっとりした感じの知らない女の子だ。大きな鞄をさげているから、もしかしたらこの辺に引っ越してきたばかりかもしれない。
「いいのよ、飛び出したのは私のほうだから」
見回しても例のカプセルと電脳生物は影も形もなかった。
「しまったあ……。あの犬、一体どこに行ったのかしら」
「犬？　それ、もしかして、この子のこと？」
女の子がふいにファイルを広げて、1枚の写真を私に見せた。他でもない、さっきのおへちゃ犬だ。
「あっ、そうよ、そう！　これ、あんたの犬？」
うなずいた女の子の顔に、今では古い型の丸いメガネを通して、優しげな印象とは裏腹の強い意志を持った瞳が輝いた。

第1話　ヤサコとイサコ　D　part

「デンスケを助けて」
初対面の子にいきなりそんな頼みをされたら、誰だって面食らうだろう。事実、橋本文恵と名乗ったその女の子も、この子何言ってんだとばかりに目をむいたし、何より一番驚いていたのは私自身だった。
何故その言葉が出てきたのかは、後で考えてみてもよくわからない。深い意味なんてないのかもしれない。見知らぬ町で電脳ペットと妹を見失い、あまつさえ自分まで迷子になりかけて――私は重度の方向音痴なのだ――、募った不安がそんな形で噴出してしまっただけなのかも。けれど、そう納得しようとすると、必ず何か捉えられてない、割り切れないものが心に残るのを感じる。それまでの私が持ってなかった、そしてこの町で手に入れることになるだろう、とても強い気持ちの核を、そのときの私は霧けぶる未来の朦朧とした予感の中に見いだしていた。
「助けるったって、何をどうやって……」
面食らって泳がせた視線がにわかに見開かれたと思うと、すぐにげんなりと沈み込んだ。
「フミエ、汚ねえぞ！　パンダを返せ」
橋本さんも活発さのわりには背が低くて小さい感じだけど、その彼女の見つめる男子もまたずいぶんちびすけの、一見してガキ大将タイプの男子だった。
「うわあ、またややこしいのが出てきた。それにパンダじゃないって、何度教えれば分かるのよ」
「そんなのどっちでもいいだろ。あいつは俺が見つけたんだ。返せ」
ちびすけ男子は噛みつきそうな勢いだ。
「あんたのじゃないわ。迷子でしょ」
「迷子じゃなくて捨て犬かも知れねえじゃねえか。どっちにしたっ

て、先に見つけた俺に預かる権利があるはずだぜ」
「デンスケは私の飼い犬なの」
放っておいたらふたりはいつまでも言い争いを続けそうだったから、私は無理矢理に割り込んだ。
「あ？　お前誰だ」
男子はそこで始めて私の存在に気づいたようだった。
「聞こえなかったの？　この子がさっきの犬の飼い主なのよ。私は今、この子から正式にペット捜索の依頼を受けたの。だからこれはもう探偵局の仕事よ。部外者はさっさと帰んなさい」
橋本さんはさっきうろたえかけたのもどこへやら、憤然と男子の前に立ちはだかって胸を張った。男子は「この野郎」とか口の中で呟きながら引きかけて、あれ、という表情になった。
「ちょっと待て。捜索ってことは、あの犬またどっかに逃げちまったのか？」
「そ、そうよ。だから私が探すの！　行きましょ、小此木さん」
橋本さんは男子に背を向けると、私の手を取って歩き出した。
「おい、話は終わってねえぞ」
「終わってるわ」
「馬鹿、フミエとじゃねえ。話があるのは、小此木とかいったな、お前のほうだ」
「えっ、私に？」
私は思わず振り返ってしまった。男子がにやりと笑い、橋本さんは舌打ちする。
「お前な、ペットの捜索なら、フミエみたいなずぶの素人よりも、俺たち黒客に依頼しないか」
「へ、ヘイクー？」
「ああ、この俺、沢口ダイチがリーダーの電脳クラブだ。大黒では名の知れた、すっげークールなクラブなんだぜ」
男子――沢口ダイチは自慢げに言った。
「何言ってんの、駄目よ。小此木さんはもう私に依頼したんだから。

それに、私は素人なんかじゃないわよ。コイル電脳探偵局のれっきとした一員なんだから」

慌てた橋本さんが口をはさむ。

「へっ、コイル探偵局なんて、町内の爺さん婆さんの御用聞きクラブじゃねえか。黒客とは比べ物になんねえぜ」

「あんた、もう1回メガビー食らいたいわけ？」

橋本さんの声が低くなり、沢口君は一瞬固まった後でばたばた手を振った。

「ちげーよ。お前は手が早いんだよ。俺が言ってんのは、今回のペット捜索、俺たちのコンペティションにしねえかってことだ」

「コン……何それ？」

橋本さんは眉を八の字にひそめる。

「知らねえのか。コンペティション、勝負だよ。つまり、俺とお前、両方がペット捜索の依頼を受けて、先に見つけて小此木の前に連れてきたほうが勝ちとする。それで、小此木は勝ったほうのクラブに入会するんだ」

「え、な、何で？　何で私が電脳クラブに入んなくちゃいけないの？」

降って湧いたような話の流れに、私は疑問符を連発しながら、隣の橋本さんに目で助けを求めた。

「うん、いいかもしれないわね」

驚いたことに橋本さんまで沢口君の提案に賛同した。

「小此木さんて、電脳スキルとかあんまりないでしょ。大黒の子供って、みんなかなりレベルが高いのよ。自分やペットの安全を守りたかったら、電脳クラブに入っておけば、いざって時に助けてもらえるわよ」

「そう？　そんなものかしら」

私は困ってうつむいた。

「そうに決まってるぜ」

ふたりは同時にうなずいた。さっきまでのいさかいが嘘のように、

このふたり、息が合ってる。そこに微妙なうさんくささも感じて迷ったけれど、しばし考えて、結局私はふたりに従おうと決めた。大黒の子供たちが、空間の不安定さを利用した独特の電脳技術を身につけているって話は、金沢にいる頃からよく聞いていた。ふたりのいうとおり、もういい年のデンスケや、やんちゃ盛りの京子を守ってやっていくためには、私自身電脳クラブに入って、助けてもらいながら自分でも技術を身につけていくのが一番だ。

「わかった。お願いするわ」

力を込めてうなずくと、期待に目を輝かせてうなずき返したふたりは、当てがあるのかないのか思い思いの方向へ身をひるがえし、またたく間にどこかへと消えていった。

電話番号くらい聞いておけばよかったと後悔した時は完全に手遅れだった。ものの10分や20分で戻ってくるなんて甘い考えはさすがになかったけれど、さすがに1、2時間もすればどっちかから連絡くらいあるだろうと、とりあえず神社のベンチに腰かけて、結局待つこと3時間半。ちょっと不安な気持ちが、ものすごく不安にまで膨れ上がった頃に、ようやく戻ってきた橋本さんの、片手でデンスケを抱え、もう片方には京子と手をつないだ姿を見たら、安心感でその場にへたりそうになった。

「あんた、よく残ってたわね。もうとっくにいなくなってるかと思った」

「だって連絡先も何もわからなかったんだもの」

駆け寄ってきた京子をしっかり抱きしめながら、私は答えた。

「妹まで連れてきてくれて、本当にありがとう」

「やっぱりあんたの妹だったのね。この子と、あともうひとりのせいで本当にたいへんだったわよ」

私の胸にデンスケを預けると、橋本さんは大きなため息をついた。

「もうひとりって、沢口君のこと？」

「違うの。わけわかんないメガネ使いがまたひとり出てきてね、デ

ンスケっての？　この子をさらおうとしたのよ」
「えっ、どうして？　どんな子が？」
今日出会ったふたり以外、大黒に知り合いの子はいない。一体誰がデンスケを狙ったというんだろう。
「なーんか、いけすかない女子よ。年は同じくらいなのに命令口調でさ、もうむかつくったら」
「まあまあ、落ち着いて」
膨れ上がる疑問を押さえつけながら、私は半笑いになって橋本さんをなだめた。
「そうね」
橋本さんは案外けろりと機嫌を戻し、
「あんなやつのことなんかさっさと忘れた、忘れた。そうだ、早くメガシ屋に行ってあんたの入会式やりましょうよ」
入会式？　大げさな言葉にふっと笑ってしまった。だけど、時計を見たらもう時間が遅すぎる。
「ごめんなさい。それ、少し待ってもらえないかしら。私、今日この町に引っ越してきたばかりで、まだ新しい家に行ってもいないのよ」
「大丈夫。それくらいわかってるから」
橋本さんは謎のように笑って、さっさと歩きだした。

「わかってるってこういうことだったのね」
時折ぱちぱちとはぜるような音を立てて明滅する電球の下、コイル電脳探偵局の自称「重鎮」ふたりを前にして、私はため息をついた。
「オジジもオババも何歳だと思ってるのよ。探偵ごっこなんて、恥ずかしくないの」
「ごっこなぞではないわ。現にデンスケは帰ってきたじゃろう」
馬鹿にするなと言わんばかりの勢いで返したのは、探偵局名誉局長にして電脳駄菓子屋「メガシ屋」の主人、子供たちからは「メガ

ばあ」と呼ばれる私の祖母、小此木早苗だ。久しぶりに会ったら、昔からのがめつさと怪しい雰囲気がよりパワーアップしているような気がする。

「ばあさんのいうとおりじゃ。わしらは、遊びで探偵局などやっているんじゃない。電脳インフラはまだ数多くの欠点を抱えているから、オジジたちの活動は民間レベルで公共サービスの盲点を補うための役に立ってるんじゃよ」

会員ナンバー一番、祖父の小此木宏文は、かつては電脳技術者として働いており、どこまで本当なのかは知らないけれど、短期間で世界中に広がった電脳メガネによる多重現実空間の開発初期段階から加わっていたという。社会での業績をおいて、私にとっても紳士的で優しくて頼りがいのあるオジジなんだけど、ちょっと理屈っぽいのと、お説教が始まりだすと長いのと、オババをとにかく溺愛しているのとが深刻な欠点だ。

「あんたが小此木って名乗った時に、もしかしてって思ったのよ。それでメガばあに電話してみたらどんぴしゃじゃない」

橋本さんが楽しそうに話す。だったら最初に私に聞いてくれればよかったのに。ここに行きつくまで、すごい遠回りをしてきたような気がする。

「うんうん、フミちゃんはようやったのう。わしの自慢の弟子じゃよ。ヤサコも少しはフミちゃんを見習うがええわ」

「え、ヤサコ？」

橋本さんが不思議そうな顔をした。

「私のあだ名よ。ほら」

鞄に書いてあった名前を見せて、

「ユウコのユウは、優しい、って書くのよ。ユウコって名前の子はけっこういるでしょ。だから、そうやって区別してたの」

「ふうん。じゃあヤサコ、改めてよろしく。私もフミエって呼んでもらっていいわ」

「こちらこそよろしく、フミエちゃん」

「ほれ、子供同士のスキンシップはそれくらいにしといて、入会式じゃ。早う居間へ来んかい」
オババが私たちをせかした。
居間は畳敷きに最近では珍しくなったちゃぶ台が置いてあって、ひと昔前の家族だんらんの構図みたいだった。どこかに引っ込んでいたオババが炊飯器を持って現れる。
「それなあに？　どんな電脳アイテム？」
興味津々で聞いた私に、
「ばかもの。これはリアル炊飯器じゃ。おぬしらもさっさと食器を運ぶんじゃ」
オババの勢いに押されて、私は言われるがままに台所へ向かった。
数分後、ちゃぶ台にはご飯を盛りつけたお皿と、大きなガラスのボウルに鮮やかな緑のサラダ、それとわかめの味噌汁が並んだ。オジジが運んできたステンレスの鍋が中央の空白を満たし、その中身は、ああ、開けなくとも匂いでわかる。京子がびしっと指を突きつけた。
「カレー！」
「そう。オジジの特製じゃ」
思わず頬がゆるむ。この家ではオババが商売で忙しいからオジジが料理当番なんだけど、その腕前は定年後に始めたとは思えない、なかなかのものなのだ。何事も研究熱心なオジジの努力のたまものなんだろう。早速各人の皿に掛け回されたカレーはとろりと濃厚な黄金色にスパイシーな香りがいいアクセントで、そういえば早いお昼から何も入れてなかった胃がきゅうと鳴った。
「ではヤサコの入会式兼夕食を始めるぞい。フミちゃんもあがってお行き」
宣言するなりオババはかちゃかちゃと忙しくスプーンをコップの水に泳がせて、カレーに猛攻を開始した。私たちも負けじと続く。
「おいしいわあ。その辺の食堂なんか目じゃないわねえ」
ひと口食べたフミエちゃんが感心してうなずく。

「そりゃあかわいい孫のためじゃからな。初日からレトルトパックなんてわけには行かないわい」

自分で作ったのでもないのにオババは自慢げに話す。とはいえ私は批判する余裕もなく、皿の上のものをかきこむのに夢中だった。

「今日はいろいろあって疲れちゃった」

お風呂から上がって、まだダンボールだらけの部屋の床に布団を敷いて遠慮なく寝転がると、すぐに頭の中がもやもやし始めた。

「デンスケ」

小声で呼ぶと、部屋の隅っこの匂いをしきりに嗅いでいたデンスケはおとなしく戻ってきて、電脳犬小屋の中で丸くなった。

「えらいえらい」

背中をなでてもらったデンスケは気持ちよさそうにごろごろうなる。犬のくせに猫みたいだ。ついでに頭もなでてやると、くうと甘えた声を出しながら、デンスケは口を開いた。きらりと輝くものがある。

「……鍵？」

白く光る、骨董品みたいに古めかしい形の電脳鍵。どこで拾ってきたんだろう。それに、何に使うものなのかな。家の扉のための鍵は、今ではほとんどが音声認証や網膜認証になっているから違うだろう。何かの電脳アイテムかもしれない。後でフミエちゃんに聞いてみよう。

電脳ポシェットに鍵を入れて明りを消し、私は目を閉じた。まぶたの内側に今日の出来事が取りとめもなく浮かんでは消え、やがてそれは、始まりも終わりもない夢の物語の中に吸い込まれていった。

第1話　ヤサコとイサコ　E　part

人気のない建設中のビルに、耳障りな甲高い足音が反響する。音を出したら気づかれるのはわかってるけど、注意している余裕はない。振り返ればたった今上がってきた階段の周り一面に広がる無数の「郵」の文字。放射状に広がった文字は中心に近づくほどに密度を濃くしてついには真黒になる。と、黒が突然盛り上がった。水かきと吸盤のついた巨大な前足が私にのしかかる。間一髪かわして暗号を投げつけると、鈍重な印象に似合わず素早く引かれた腕の先、半分溶けたコールタールの塊のような真っ黒でぐにゃりとした上半身、その真中で、赤い帽子に笑顔の愛らしい、郵政局のシンボルマークがこっちを見据えた。

「くそっ、どうして。ここはサッチーの巡回経路に入ってないはずだぞ」

大黒市の新型サーチマトン、サッチーは、その巨体と過剰な攻撃性能、そして何より外観のあまりの異様さから、導入後時を経ずして暗号屋たちを恐慌におとしいれた。大黒でのメタバグ採取を主な収入源にしていた暗号屋は、サッチーの配備後、目に見えて数を減らしている。

だが、よく調べて対策を打てばサッチーから逃れる方法はある。例えば、サッチーの巡回ルートは一見ランダムに見えるけれど、実はあるパターンに沿っている。パターンの解析を行えば、サッチーに見つからずに行動するのは簡単なはずだった。だったのに――

「モジョ！」

かちかちいう音と同時に、サッチーの表面に無数の小さな穴が空いた。モジョが攻撃したのだ。

「やめろ、勝てる相手じゃない！」

叫びに無機質な人工音声が重なった。

「電脳破壊活動防止法に違反するオートマトンを発見。削除します」

サッチーの目から発せられたサーチライトのような光がモジョをとらえ、同時に胴体の数か所がへこんで、不揃いにとび出した牙が生えた口になった。声のない叫びを上げるかのごとく、引き裂かれんほどに開かれた喉の奥が青白い光ににじむ。

急いで放った鉄壁にフォーマット光線が当たり、壁はまたたく間に赤熱した。あたふたと逃げてきたモジョを肩に乗せて、手近に見えた非常階段を、一気に1階まで駆け下りた。

大きく息をついたら、肩のモジョも全く同じ動きをしてみせたので、ちょっと笑ってしまった。けれど、落ち着いている暇はない。サッチーは追ってくるし、それにこいつも……。

脇に抱えた電脳犬は、見られていると気づいたのか、手足をもがいて何度目かの抵抗を試みる。そんなふうにされても、電脳ペットじゃ痛くもかゆくもないんだけど。

「もう少しおとなしくしてろ。役目が終わったら放してやるから」

パグかブルテリアでも模したんだろう、丸く潰れた顔は、人によっては愛嬌があると思うのかもしれないが、一般論でいったら変な顔のほうで、そのせいかひと目見た時からあまりいい印象は持ってない……違うな、なんとなく良くない感じを受けるのは、かわいいかわいくないとか、そんなうわっつらの話じゃない。小さい頃こんな顔の生犬に噛まれたことでもあったのかな、思い出したくない記憶のような……

「モジョ、モジョ」

ちっちゃい相棒が肩の上で飛びはねる。そうだ、とにかくサッチーから逃げないと。犬の頭の上に浮かんだ時間表示はもう残り１０分と少ししかない。

「まずいな。このビルを出てる暇はない」

私の行動が迂闊だったのか？　いや、そんなことはない。イリーガルが入り込んだ犬をモジョが連れてきたのが1時間前。放っておいたらイリーガルはペットと同化して回収不能になってしまうから、急いで虫下しの暗号を施した。今日のサッチーの巡回路を確認して、

足跡を慎重に消しながらここまでやって来たのだ。後は虫下しの効果が出るのをゆっくり待って、分離したイリーガルを処置すれば万事うまくいくはずだったのに、どうしてサッチーが現れたんだ？

その時、人の気配を感じて、私は柱の陰に身を隠した。

「ちょっと。本当にこの中にいるの？　いつになったって出てきやしないじゃない」

「大丈夫だ。サッチーが入っていったのが何よりの証拠だぜ」

男子と女子、ふたりの声だ。私はやっと自分の間抜けな失敗を悟った。電脳上は誰にも悟られないように細心の注意を払っていたが、生身はそうでなかった。知らぬ間に後をつけられていたらしい。

「やばいんじゃない？　あのデンスケって犬、サッチーにやられちゃうかもよ」

「待てよ、そう焦るな。デンスケをさらってったやつ、相当レベルが高いぜ。簡単にサッチーにやられたりはしないだろ。出入口はここひとつしかないんだから、待ってれば絶対現れるって」

「わかったわよ、信じるわ。でも、デンスケを見つけたら共同戦線は解消だからね」

「おう。俺はあの女を見つけた、お前はサッチーをおびき寄せた、これで貸し借りなしだ。デンスケを取り戻したら、公平に勝負しようぜ」

ははあ、この犬を探してるのか。話からすると飼い主ではなさそうだが、この町には小学生の電脳クラブがたくさんあるから、飼い主から依頼を受けたそんなクラブの連中かもしれない。犬をさらったのは確かに私だから、その意味で非はあるけれど、サッチーを引きこんでくるなんてのは穏やかじゃない。悪いけど意趣返しをさせてもらおう。

わざと大きく足音を立てながら、私は出口に駆け寄った。ごく近くまで来て初めてふたりに気がついたように急ブレーキをかける。

「お前ら、一体誰だ。そこをどけ」

「どいてもいいけど、その前にあんたの抱いてる犬、返してもらい

ましょうか」
　すばしっこそうな感じの女子が挑戦的な視線を向けた。私はわざとたじろいでみせた。
「なんだと。こ、これは私の犬だ」
「とぼけても無駄だぜ。俺たちは本当の飼い主から頼まれてそいつを探してたんだ。素直に返せばよし、さもなければちょいと痛い目にあうぜ」
　男子の方はすごんでいるつもりか、殊更に声を低くする。
「ダイチ、変な言い方しないでよ。こっちが悪役みたいでしょ」
「うっせえよ、一度やってみたかったんだよ」
　どうやらふたりの呼吸はあっていないらしい。言い争いの間に私は数歩後ろに下がった。
「おい、どこに行くつもりだよ」
　男子のほうが私の行動に気づいた。
「話は終わってねえぜ。犬を返せ」
「返してほしかったら力づくで取り返すんだな」
　言い終わらないうちに私は手榴弾を投げつけた。手榴弾といっても、こけおどしだ。激しい音と煙、後はごく限られた範囲の空間をぐしゃぐしゃに乱す程度。けれど、ここではちゃんと意味がある。ふたりから身を隠すのはもちろん、1階に落ちてきたやつの音を悟らせない、そいつの注意を壊れた空間に引きつける、などなど。
「こら、待ちなさいよ」
　ふたりの足音を背中に、私は脇の廊下に身を隠した。巨大な黒い塊が真横を通り過ぎたのを確かめて、悠々階段に向かう。
　背後でうろたえた声が上がった。
「げ、サッチー！？　なんで戻ってくんの」
「しまった、やつにはめられた」
「電脳治安維持法に抵触するツールを発見。フォーマットします」
　サッチーの無情な音声が響く。
「自分が呼んできたものは自分で片づけてくれよ」

聞こえやしないだろうがそんな風に声をかけ、私は階段を駆け上った。

「ぎりぎりだったな」

一番安全そうな3階の奥の部屋にたどりついて犬を床に下ろすと、分離までの時間はもう1分を切っていた。私は電脳チョークを使って、一番簡単な結界を作った。大きなイリーガルでは壊される可能性もあるが、犬に潜りこめるくらいのサイズならなんとかなるだろう。

犬は引っ繰り返って足をばたばたさせている。虫下しの効果で、体内のイリーガルがもがいているのだ。ちょっとかわいそうになって声をかけた。

「大丈夫だ。イリーガルが出さえすればすぐ楽になる」

その言葉どおり、やがて犬は静かになった。ぽあーっと奇妙な音を立てて犬の腹辺りに、煙とも何ともつかない不定形の黒いものが立ちのぼる。丸くかたまって浮かびあがろうとして、犬の体から完全に分離したイリーガルはぼたりと床に落ちた。

「よし、そのままでいろよ」

電脳ポシェットから鍵を取り出すと、丸いイリーガルの中心部にうっすらと鍵穴が現れた。うまいぞ、こいつは脈ありだ。鍵を更に近づけようとした刹那、

「モジョモジョッ！」

急に騒ぎ出したモジョの様子からはっと気づいて後ろを見た。視界に一瞬映った黒いものがヤモリのように天井を駆けのぼった。くそっ、あのふたり、もうやられた。

「空間の維持への重大な問題を発見しました。フォーマットを実行します」

私は反射的に身をかわしていた。天井に逆さにへばりついたサッチーから発射された光の束が結界を破壊し、犬とイリーガルが正反対の方向に逃げていく。サッチーの動きが止まり、ぐしゃっと潰れ

たみたいな音を立てて背中から床に落ちた。腹の横に突き出た何対もの足が、見る間に背中の側に移動していく。笑顔のシンボルマークが体に沈んだかと思うと反対側から浮かび、完全に前後ろを逆転させて起き上がったサッチーは、すぐに犬を追い始めた。

おかしいぞ。サッチーは常に空間への影響が大きいほうを追うようにプログラムされている。この状況なら当然イリーガルを追跡するはずなのに。

「デンスケこっちよ、早く！」

背後で声が上がり、振り向いた私は愕然とした。さっきの女子だ。あいつ、サッチーをまいたのか？

犬がサッチーの光線を危うくよけながら振り返って、こっちに向かってきた。ありがたくないことにサッチーも反転する。フォーマット光線の発射孔が不気味に輝いた。

「まずい！」

イリーガルはモジョに押しとどめられてまだ近くであたふたしている。このままじゃ犬もろともやられる。

こうなったら最終手段しかない。私は両手を開いて突き出し、そこに全思考を集中させた。

干渉し合う同心円の複雑な模様が半透明の壁となってサッチーに衝突した。そのまま押し戻されそうになるところをサッチーは馬鹿力で踏ん張って、上体をのめらせて壁を突き破ろうとする。ほとんど物理的に近い圧力に私も歯を食いしばって耐えながら、もうひと押し、体中の力をかき集めて暗号を放った。

衝撃をまともに食らったサッチーは各所に亀裂を走らせてがくがく震えながら、それでもまだ壊れない。吸盤を持った薄気味の悪い腕が2度3度と叩きつけられ嫌な音を立ててきしんだところに、更に巨大な胴の体当たりを受け、壁がぐにゃりとひしゃげる。

「もってくれ！」

必死の言葉もむなしく、壁は一瞬白濁した後で物の見事に砕け散った。

万事休す。足の力が抜けてへなへなとその場に崩れた私の耳に、しかしフォーマット光線の音はいつまで経っても届かない。
「モジョ！」
嬉しそうに跳ね回るモジョの姿にやっと事の流れを理解して、倒れたままの姿勢からサッチーを見上げた。
つんのめった状態で動きを止めているサッチーの前に、時折走査線を走らせながら、メッセージウィンドウが浮かんでいる。
『このオートマトンは何らかの理由により機能を停止しています。推定復旧時間：残り３７分』
「――やった」
私はあおむけに転がり、天井を見上げながらほうと息のかたまりををはいた。むき出しのコンクリートが火照った体を冷やして気持ちいい。
「モジョモジョ」
モジョがカプセルをかついで寄ってきた。中にさっきのイリーガルが閉じ込められている。
「よくやった。お手柄だ」
声がかすれているのと、モジョをなでてやるのすら辛いほどに消耗していることに我ながら驚いた。どういう理屈かわからないけれど、電脳世界だけのものであるはずの暗号は、確実に現実の体力を奪っていく。
「お、おい。何だよ、今の」
にわかに聞こえた声に、
「暗号壁だ。空間中に物理結界を作って相手にぶつける。イリーガルを捕えるトラップの応用だ」
頭がぼんやりしていたせいでつい素直に答えてしまい、すぐに悔やんだ。馬鹿か、私は。どうしてぺらぺら暗号のことを喋ったんだ。
「暗号！？　イリーガル！？　お前もしかして『暗号屋』ってやつか」
１階で見かけたちびの男子だ。

「知らないな」
ゆっくりと起き上がって頭を振りながら、私はそっけなく答える。
心の中は忸怩たる思いだが、もちろん顔には出さない。
「知らないわけないだろう。もっと暗号の話を聞かせてくれよ」
「暗号？　何を言っているのかわからない」
「すっとぼけんなよ。なあ、ちっとくらいいいだろ」
しつっこいやつだ。
「それよりお前、犬を探しにきたんだろう。返すよ。もう私の用はすんだから」
言われて男子はきょろきょろと辺りを見回した。
「返すって、どこにもいないじゃねえか」
「ああ、お前と一緒だった女子がさっきそこにいたからな、あいつが連れてったんだろ」
くすりと笑ってみせると、予想どおり男子の顔が真っ赤になった。
「畜生、ブスエのやつ！　俺にばっかサッチーを押しつけやがって」
「まだそう遠くには行ってないだろうなあ」
「待てっ、フミエ！　おいお前、今回のところは見逃してやらあ」
男子は叫ぶなり階段を駆け下りていった。
これで邪魔者は去った。さて、早いところイリーガルの処置をしないと。私は電脳チョークで結界を書き直した。
「モジョ、カプセルを開けてくれ」
やれやれ、とんだ手間を食った。けれど、1日目で収穫があったのは幸先がいいな。
その時に到って、ようやく私は最大の失敗に気づいた。
「鍵が……ない！」
さっき咄嗟に暗号を使った時に落としたのか。慌てて床にはいつくばるようにして調べたが、光る鍵はどこにもない。
それから30分、サッチーが回復するぎりぎりまでモジョと探し回ったが、結局鍵を見つけ出すことはできなかった。せっかく捕まえたイリーガルは通常空間に耐え切れず消滅してしまった。が、問

題はその程度じゃすまない。鍵がなかったら、あの人の元に辿りつくこと自体不可能になってしまう。

落ち込んだ気持ちで電話をかけると案の定がっつり怒られて気分はますます沈み、夜も鍵のことが気になってよく眠れなかったせいで半分ぼんやりと登校した私の転校デビューは、だからあらかじめ最悪が約束されていたようなものだった。けれど、本当の『最悪』はその後に用意されていた。

おばさんと訪れた職員室で、担任の先生に挨拶した時のことだ。他の教師からマイコ先生と呼ばれている若い女の先生は、いわゆる本物の「眼鏡」をかけていて、電脳メガネのユーザーではないと言った。

「だからって、教室でのメガネ使用を禁止するとか、1日のメガネ遊びの制限時間を決めるとか、そんなことはしないわよ。難しくいえば『生徒の自主性に任せる』ってわけです」

教師の中にはメガネを諸悪の根源みたいにとらえている人間もいて、そんなのに当ると必ず目の敵にされる私は少なからず安心した。

「そうですか。この子はメガネ遊びばっかりで、少しは学校の側で止めてもらえるとありがたいんですけど」

おばさんが溜息をつく。文句ひとついわず厄介者の面倒を見てくれるおばさんには感謝してるし、まして嫌いなんてことはないけど、この辺りのお節介な性格には辟易する。

「ま、まあそういった点は各ご家庭で……」

マイコ先生が曖昧に言葉を濁した時、がらりと扉が開いた。

「あら、小此木さん。天沢さん、この子もあなたと同じ、今日から第三小に転入するのよ。転校生同士、仲良くしてね」

紹介されて母親の影から姿を現した女の子の顔を見た刹那、私はハンマーで頭を殴られたような衝撃を覚えた。感情があまりにも激しすぎて、喜怒哀楽のどれを感じたのか急にはわからなかったほどだが、次第に落ち着くにつれて、鋭く、頑なで、たぎるような、ひ

とつの形が結ばれていった。

心はすぐに思いを言葉に変えた。誰もが意識の奥底にしまい込んで、まるで自分だけは持っていないかのように振る舞う、その気持ちの名は、「憎しみ」。

第1話　ヤサコとイサコ　E　part（後書き）

第1話は今回で終わりです。

第2話　第三小電脳戦争　春の陣　Ａ　ｐａｒｔ（前書き）

第2話Ａ、Ｂパートは通常より分量を少なめにして、その分2パート連続でお届けします。
このパターンは今後も時々登場する予定です。

第2話　第三小電脳戦争　春の陣　Ａ　ｐａｒｔ

ネットの噂によると、大黒の子供たちの電脳レベルは、全国でも群を抜いてトップだそうです。

始業式。この言葉を聞くだけでいつも限りなくブルーな気分におちいる俺だが、その日は違っていた。

俺のクラスに転校生、しかも只者じゃないのがふたりも入ってきたのだ。ひとりはメタバグをかぎわける伝説の電脳ペットの飼い主、もう片方は最強のオートマトン、サッチーをひとりで倒した暗号屋。こんな状況で心がおどらないほうが嘘になる。

ところがむかつくことに、ひとりはもうフミエに持っていかれてしまった。あいつ、手が早すぎだ。敵方についてしまった小此木は席までフミエの後ろにくっついて、そっとうかがうと、何だろう、きらきら光る鍵みたいなものをふたりで見ている。ちくしょう、あれもペットに探させた電脳アイテムにちがいない。

これはかなりまずい。このままじゃ黒客はフミエに追い抜かれて弱小クラブになり下がっちまう。やつにこれ以上でかい顔をさせないためには、意地でももうひとりをこっちに引き込まなくちゃならない。

昼休み、席を立って教室を出ようとした天沢の前に、俺は立ちふさがった。

「よう、昨日は世話になったな」

「沢口……君っていったかしら。何のつもり？　仕返しでもしようっての」

油断なく身構える天沢に俺は両手を上げてみせた。

「おいおい、俺はお前と争うつもりはねえよ。それよりちょっと来てほしいところがあるんだ」
「その言葉を信用しろって？　罠じゃない証拠がある？」
「あれ？　お前、もしかして俺に負けるのがこわいのか」
からかってのせようとすると、天沢はしれっと笑った。
「あら、ばれた？　おおこわい」
食えねえやつだ。内心舌打ちしながら、俺は更に軽口を続ける。
「へっ、ミチコさんでも呼んで追い払ってもらったらどうだ」
その瞬間だった。天沢の体が動き、あっと思った時には胸ぐらをつかまれていた。
「貴様！　二度とその言葉、口に出すな！」
教室に残っていた生徒が驚いてこっちを見つめた。
「やめろよ、おい。なに興奮してんだ」
「あっ、す、すまない」
天沢は手を離してきょときょとと視線を泳がせた。この女、何か隠してる。そっちにも興味はあるが、まずは黒客に入らせるのが先だ。
「とにかく来いよ」
低い声でうながすと、天沢はうつむきがちに小さくうなずいた。

先に立って歩きながら、俺はちらちら天沢をうかがった。天沢はじっと黙りこくっている。こいつ、どんな秘密を抱えてるんだろう。
「ミチコさん」っていうのは有名な都市伝説だ。古い空間のずうっと深く、普通のメガネなら壊れてしまうほどの奥に、ミチコさんという名の、電脳空間のヌシが住んでいる。たとえ初めて会った相手でも、そいつの過去をなんでも知っていて、何も言わずとも、そいつが一番望んでいることをかなえてくれるという。
俺はまさか信じちゃいないけど、でももしミチコさんが本当にいたらと思うとちょっと怖い。特に、過去を知ってるってところと、頼んでもいないのに勝手に望みをかなえてしまうあたりを聞くと、

不安でなんだか尻がもぞもぞしてくるくらいだ。

そんなことを考えていると、目的の理科準備室はすぐに見えてきた。

「着いたぜ。ここだ」

厚いカーテンを閉め切った室内は暗く、見通しが利かない。

「あんたが先に入ってくれる？」

「構わねえよ」

俺はわざと背中をさらしながら部屋に入った。中にいたのはデンパ、ナメッチ、４年のアキラと、よし、ガチャギリも来てる。黒客全員集合だ。

「紹介するぜ。例の暗号屋、天沢勇子だ」

「お前、サッチーを倒したってマジか」

机に腰かけたガチャギリが、初対面の相手にいつもやるように、帽子の下からじろりと天沢をにらむ。ナメッチがこれまたいつものように追従した。

「本当ならすごいっすよ。これで黒客はこわいものなしっす」

「なんだと？　沢口、どういうことだ」

「決まってるだろ。お前に俺たちの電脳クラブに入ってほしいんだ。『黒客』ってんだぜ。実力は第三小じゃトップだ」

天沢の目的がなんだろうと、ひとりで一から十まではできないはず。この学校でもまずは協力者を見つけようとするだろうと、俺は踏んでいた。

ところが、俺の予想は見事に外れた。天沢は俺たちを興味なさそうにひと渡り見渡して、すぐに背中を向ける。

「悪いな。あんたたちのガキっぽい遊びにつきあってる暇はないんだ」

ちらと冷たい一瞥とともに、拒絶の言葉が投げつけられた。

「なんだそりゃ。ダイチ、約束が違うぜ」

ガチャギリが荒っぽい手つきで帽子をかぶり直した。怒っている

時の動作だ。まずい。俺は天沢が黒客に入るからと、半ば強引に招集をかけたのだ。

「待てよ、天沢。お前、ここで何かしようとしてるんだろ。助けがいるんじゃねえのか」

「心配ご無用。大体お前たちじゃ足手まといだ」

天沢はもう歩き出している。

「貴様！　調子に乗るな」

ガチャギリの不機嫌が天沢に向かった。音を立てて机から飛び降り、歩み去ろうとする背中に手を伸ばす。

「女だからって容赦しねえぞ」

「ふふ、どうやってしないつもりかな」

ひらりと身をかわして振り向いた天沢の目が光った。ものの例えとかじゃなく、本当に瞳の淵を赤い光が巡ったのだ。ぱしんと音がして、ガチャギリの腕がぐしゃぐしゃに乱れた。

「な、何だよこれ！？」

「なんだもくそもない、これが私の力だ。お前たちとは段違いのな」

天沢はおもしろくもなさそうに言い捨てて、再び出口に向かう。

「昼休みが終わったら、この仕掛けは戻してやる。じゃあな。もう話しかけないでくれ」

すげえ。こんな超絶能力者、やっぱり欲しい。

「ま、待ってくれよ」

「話しかけるなと言ったろ」

情けない話だが、肩越しににらみつけた視線に俺は固まってしまった。

ああ、せっかくの逸材がいってしまう。気ばかりが焦って、でもどうしようもなく、投げやりな諦めが浮かび始めた、その時。

「天沢さん、イリーガルを捕まえようとしてるんだって？　見てほしいものがあるんだけど」

空気を読めないにもほどがある、のんびりした声が聞こえた。デンパだ。手に持っているのは、あっ、俺の秘密ノートじゃねえか。

「これは大黒に現れたイリーガルの記録を、アキラ君に手伝ってもらってまとめたものなんだ。イリーガルに興味があるなら、参考になるんじゃないかな」

天沢の背中がぴくっと動いた。ひやひやしている俺をよそに黙って引き返し、デンパがさし出したノートをひったくって、無言で読み始めた。

しばらくは、誰の言葉もなかった。天沢は素早く視線を動かしながらノートをめくり、その天沢の顔を俺たちは食い入るように見つめていた。

「わかった、お前たちのクラブに入ろう」

2、3分して頭を上げた天沢から出たいきなりの結論は俺を驚かせ、慌てさせ、その後でようやく喜ばせた。

「い、いいのか」

「ああ。このノート、よく調べてまとめてある。ガキの遊びと言ったのは謝るよ。すまなかった」

素直に下げられた頭から垂れて揺れる髪の房を、ガチャギリは呆れ顔で眺めている。が、表情に険しさはない。悔しさよりも天沢への期待が上回ったのだろう。

俺たちの顔をひとりひとり、ゆっくりと眺め渡した天沢がおもむろに口を開いた。

「だが、入会の前に協力してほしいことがある」

俺はにやと笑って切り返した。

「そりゃ偶然だな。俺たちもお前に頼みがあるんだ」

第2話　第三小電脳戦争　春の陣　Ｂ　ｐａｒｔ

「うーん、こんなもの見たことないなあ。ヤサコ、どこで拾ったの」
昨日見つけた電脳の鍵をためつすがめつしていたフミエちゃんが、お手上げのポーズで頭を左右に振った。
「デンスケがいつの間にかくわえてたのよ。いなくなってる間にどこかで見つけたんだろうとしかわからないわ」
教室に差すうららかな春の陽にかざすと、鍵はますますその白い光を強めた。目を射る強い輝きじゃない、受けた光を一旦吸い込んで、ゆっくりと放射するような。見ていると、じんわりと温かい気分になる。
「そうなんだ、全然気づかなかった。どっちにしても私じゃ役に立てそうもないし、後でメガばあか先生に見てもらったら」
フミエちゃんの「先生」というのは私のオジジを呼んでの名だ。高名な電脳技術者の上、電脳医療にもたずさわっていたオジジはご近所からしたわれて、現役を引退した今でも皆からそう呼ばれている。
「あっと、でもメガばあはがめついから気をつけて。なんのかんのいって巻き上げられないようにね」
「うん、わかってる。だから先にフミエちゃんに聞いたのよ」
私が苦笑すると、フミエちゃんもぷっと吹き出した。
「そうだ。私もついていってあげようか。今日は学校も早く終わるし」
「ごめん、今日はちょっと……」
私は誰も座っていない天沢さんの席に目を移した。彼女は昼休みに入った途端、沢口君と何か言い合って、そのままふたりでどこかに行ってしまった。
「ヤサコ、もしかしてあの天沢って子が気になってるの？　やめときなさいよ、あんなわけのわかんないやつ。言ったでしょ、昨日デ

ンスケを誘拐したの、あの子なのよ」
フミエちゃんは主のない机をにらみつける。
「きっと何かわけがあったのよ。せっかく同じ日に転校してきたんだし、名前も同じユウコだし、いがみ合ったりしたくない。私、天沢さんの考えてることが知りたいの」
今朝、職員室で会った時の天沢さんの態度を、私は思い出していた。会うのは初めてのはずなのに、憎らしい相手に再会したとでもいわんばかりの険しい表情。反抗心というよりは、何故天沢さんがそんな顔をしたのか、理由が気にかかった。
そんな私の予想外に強い反論にフミエちゃんは声を詰まらせ、少し考えてから言った。
「仕方ないわね。確かにデンスケをさらった理由は私も気になるし、じゃあ、放課後声をかけましょ。敵か味方かはその時の答えで判断する、と」
「敵味方だなんて、大げさな」
と抑えながらも、一方でそんなフミエちゃんのさばさばした考え方も嫌いじゃない。
その時、ふと机に影が差して見上げると、背の高い、垢抜けた感じの子が、屈託のない笑顔を浮かべていた。
「フミエ、何やってんの。外行こうよ。小此木さんも一緒に」
「ありがとう。えっと……」
「相原愛子。アイコって呼んでくれていいわよ」
「わかった、アイコちゃん」
アイコちゃんはにかっと大きく笑って、窓際の席にいたおとなしそうな女の子を呼びにいった。
「ヤサコ、行くわよ。待っててもどうせ昼休みには戻ってこないわ」
フミエちゃんに引っ張られて、まだ天沢さんの席に未練を残しながらも、私は教室を後にした。
ホームルームが終わって皆が鞄を背負い始めると、私たちは間を

入れず急いで天沢さんの席に向かった。
「天沢さん、ちょっといいかしら」
真っ直ぐこっちを見た瞳に、一瞬朝と同じ憎悪が燃え上がる。耐え切れずに目を伏せた私に、
「小此木優子さんね。話でもあるの？」
返ってきた答えからはしかし、敵対心みたいなものは感じられなかった。驚いて上げた目と目が合って、今度は恥ずかしくてうつむいた。きっと引き締めるような目つきがほころぶと、険のある表情が一変して親しみやすい、むしろ子供っぽいとさえいえるものに変わったのは意外だった。
「私の顔に何かついてる？　それとも、そんな驚かれるほど変な顔かしら」
軽口を叩かれたのにますますびっくりして、私はフミエちゃんと顔を見合わせてしまった。
「あ、あんたが何を企んでるのか知りたくてさ」
作り笑いにおおらかな表情で切り出したフミエちゃんの、けれどその中身はなんだかちぐはぐだ。天沢さんの態度にペースを崩されているんだろう。
「フミエちゃん、私から言うから」
小声で袖を引っ張ると、天沢さんにしっかり向き直って、
「あのね、私たち、お友達になれないかなと思って、それで来たのよ」
「友達……ね」
天沢さんは何故かひとりでくつくつと笑った。
「天沢さん？」
「イサコ、でいいわ。それからあんたはヤサコね」
言うなり立ち上がった。
「ごめん。私、これから用があるの。すぐに終わるから、３０分くらいしたら２階の渡り廊下まで来てくれる？」
「え、ちょっと」

「それじゃ」
たじろいだ答えを背中で受け流して、天沢さんは教室を出ていく。
「何よ、強引なやつね。ヤサコには悪いけど、私、やっぱり好きになれないわ」
フミエちゃんの言葉には険がある。身勝手といえば否定しようのない天沢さんの態度に、私も少しむっとしたのは事実だ。でも一方で、取りつく島もなく拒絶されなかったことや、天沢さんが笑顔を見せてくれたことに対する安心もあった。
「あなたたち、渡り廊下に行くんですって？」
突然背後で声がして、フミエちゃんがびくっと飛び上がった。
「盗み聞きしてしまってごめんなさい。だけど、気をつけたほうがいいわよ」
黒い髪を少し長めに垂らした女の子。外見に変わったところはないのに、何か普通と違う。
「あんた、そのいきなり話しかけるのやめてよ。心臓止まるかと思った」
フミエちゃんは非難がましく手を振り上げる。
「ちょっと気になったものだから。あの渡り廊下はね、いつも空間が不安定なの。なんでもね、その昔、下のベランダをくぐり抜けようとした宇宙人が頭をぶつけて、それ以来空間の乱れが直らないんですって」
「はあ」
木に竹を接いだというか、いかにも小学生らしい、突拍子もない話だ。怖いかといわれれば、ちっとも怖くない。
「だからあなたたちも、あそこに行く時は十分注意してね。じゃあさよなら、うふふ」
女の子は、勝手に喋り終えるとそのまま教室を出ていってしまった。
「もう、なんなのよ、あの子」
げんなりした溜息とともに、フミエちゃんは女の子の去ったほう

を眺めている。
「今の子、誰なの？」
「ああ、マユミっていってね、都市伝説とか怪談とかを好きこのんで集めてる変な子よ。いっつも妙なタイミングで茶々入れてくるんだから」
フミエちゃんは誰もいない空間を見つめて、もう1度溜息をついた。

教室で取りとめのないお喋りをしていたら、30分なんてあっという間に過ぎてしまった。
「そろそろ行こうか」
時計を見た私が立ち上がると、フミエちゃんもしぶしぶといった表情で後に続いた。
教室を出て進むうち、私はおかしなことに気がついた。活発でいつも一番先頭に立つイメージのあるフミエちゃんが、何故か私のすぐ後ろにくっつくように、おっかなびっくりついてくる。
「フミエちゃん、どうかした？」
「えっ。ううん、何でもない」
フミエちゃんはぶんぶん首を振って、その後で小さく呟いている。
「そうよ、何でもないわ。3メートルの宇宙人なんているわけないもの」
「フミエちゃん……もしかしてさっきの話、信じてる？」
「なっ、何言ってんの！？　信じてないわよ、これっぽっちも」
大げさな否定が、言葉とは裏腹の事実を物語っている。
「フミエちゃんって意外と怖がりなのね」
笑いかけた私は、フミエちゃんが不意に見せた真剣な表情に留められた。
「来たわね」
渡り廊下の向こうに立つ天沢さん、ううん、イサコの目が、赤く輝いた気がした。

第2話　第三小電脳戦争　春の陣　Ｃ　ｐａｒｔ

のこのこやってきた小此木優子、いや、ヤサコの姿を認めて、私はほくそ笑んだ。もとより恨みがあるわけじゃない。やつが鍵を持っていたというダイチの情報も、悪意があってじゃなかろう。多分あのデンスケって犬が原因だ。

それでも私はヤサコが憎らしい。理由？　そりゃあいつの、他人の悪意なんて知りません、ってのんきな態度が気に入らないからだ。私から教えてやらなくちゃならない。自分がいつもよくされているとばかり思っていたら、そのうち手痛いしっぺ返しを食らうってことを。

「――イサコ。聞こえてるか、イサコ。返事しろ」

いつの間にか耳元でダイチの声ががなり立てていた。ダイチたち黒客はもう所定の配置について、通信を開きっぱなしにして作戦開始の合図を待っているのだ。

黒客に入会することを決めた時、私はこいつらを使って鍵を探そうと思い立った。それを受ける条件としてダイチに頼まれたのは、ライバルのフミエをぎゃふんといわせたいというもの。子供じみた頼みを、いつもならとても承諾しないところだが、今回は違う。何せダイチは、ヤサコがフミエに鍵を見せているのを目撃したというのだ。つまるところ利害は一致した。ヤサコを誘えばフミエもきっとついてくる。

「天沢だ。そう怒鳴らなくともよく聞こえるよ」

「それならさっさと返事しろよ。フミエと小此木はもう渡り廊下に入ってるぜ。今回の作戦はお前の発案だ。予定どおりやるんなら、指示を出してくれ」

冷静を装いながらダイチはじれている。日ごろ、あのフミエとかいうちびすけからよほどひどい目に合っているのだろう。

「よし、始めるぞ」

短く答えると久しぶりにぞくっときた。たいした相手じゃなかろうとたかをくくっていたが、私の予感はよく当たる。ちょっと気を引き締めていったほうがいい。

「来たわね」

と、だからその言葉には挑みかかるような調子があった。ヤサコとフミエの足が止まる。予定どおりの位置だ。

「イサコ、さっきも言ったけど、私たち友達になれないかな。仲良くしたいの」

偽善者。嘘つき。そんな言葉が急に浮かび上がる。私の中でふつふつとたぎる敵意と同じものを、ヤサコも感じているはずなのに。私はヤサコをにらみつけた。と、意外にも、ヤサコも私をにらみ返す。ばちばちと音が鳴るかのごとく視線が交錯した。その強さたるや、気の強そうなフミエさえたじろいだほどだ。

どうしてか、そんな無言のやり取りが、なんだか楽しくなってきた。それもあってか、私の返事は、

「ありがとう」

戸惑ったヤサコの視線から力が抜けるのを見計らって、

「けど悪いな。私はあんたと友達になるつもりはない」

一際声が張った。

「私はあんたが嫌いだ」

ヤサコがうつむいた。フミエは目を丸くしている。

「用件はすんだかな」

薄い笑いが漏れる。ところが、

「待って」

留めたのはヤサコだった。

「じゃあ私たちは何なの？　赤の他人？」

「い、いや」

とうろたえて答えてしまったのは何故なのか。私は、私がヤサコを憎むように、ヤサコにも私を憎んでほしいと願ったのか。

すると今度はヤサコのほうが微笑んだ。

「それなら私たちは敵同士ね」
私は一瞬呆れて、その後で吹き出した。
「ははははっ、そりゃいいや。そのとおりだ」
痙攣するような笑いに、体がくの字に折れ曲がった。何故おかしいのか、そもそも本当におかしくて笑っていたのかはよくわからない。
ようやく息をついて見上げると、ヤサコは全く笑わずに私を見つめていた。つと気持ちが冷たくなって、私もヤサコに目を据えた。
「お前の用は終わったみたいだから、今度は私の用件を言おう。鍵を返してくれ。あれは私のものだ」
ヤサコは、はっと電脳ポシェットに手をやった。
「お前が持ってるんだろ。さあ」
「返すわ」
ヤサコはポシェットから白いものを取り出した。視線が吸いつく。足はいつの間にかゆっくり進み出していた。
「返すけどその前に教えて。これは一体何の鍵なの？」
胸の前に持っていかれた輝きが両手に覆われる。私は歩みを止めた。
「お前に関係ない。答える必要もない」
必要ないというより、私の大切な物を、ヤサコにだけは絶対教えたくないというのが本心だった。
「ちょっと、そんな都合のいい話ないんじゃない」
フミエが1歩前に進み出た。
「第一これがあんたのものかどうかもわからないじゃない。ヤサコが拾ったものをあんたが横取りしようとしてるだけかもしれないわ。あんたが持ち主だっていう、証拠を見せてよ」
「証拠なんかない」
私は突っぱねた。
「返さないつもりなら奪い取るだけだ。おい、みんな出てこい」
「おう」

回線と現実と両方から同じ声が聞こえた。ダイチ、ガチャギリ、ナメッチ、デンパ。黒客のメンバーが渡り廊下の向こう側に姿を現す。

「き、きったないわねあんた！」

廊下のあっちとこっちを交互に見回しながらフミエが叫んだ。とっさにヤサコをかばって廊下の端に身を寄せたのは、さすが勝負慣れしている。

「汚くなんてないさ。おとなしく鍵を返してくれれば危害は加えない」

「そうだよ。危ないことはよして、イサコに鍵を返したほうがいい」

デンパがでかい体にもかかわらず妙にか細い声で言った。

「いや、抵抗してくれたほうが楽しいんじゃないっすか。黒客とコイル探偵局とどっちが上か、はっきりさせるチャンスだし」

ナメッチが余裕しゃくしゃくで首を振る。

「何を」

さっと手を額に構えたフミエに、

「おっと、交渉決裂でいいのか。この人数で勝負になるかな」

ガチャギリが歯を見せて笑う。フミエはきっとにらみつけたものの、その手は力なく下げられた。自分たちの圧倒的不利を理解したらしい。ダイチには悪いが、私にとっては理想的な流れだ。私だって、いくらヤサコが憎いからって転校初日にどんぱちやりたくはない。何より下手に戦って鍵を壊しでもしたら元も子もない。

「いや」

その時、はっきりした拒絶の声が廊下に響いた。

「ヤサコ！？」

フミエが驚きの表情で振り返る。

「ちゃんとした理由があるならいいけど、こんな卑怯なやり方許せない。鍵は渡さないわ。取り返せるものならやってごらんなさい」

「貴様！」

「待て」

飛び出しそうになるダイチを押さえて、私は言った。
「ヤサコ、それにフミエにも聞くぞ。交渉決裂でいいんだな」
最初、フミエは戸惑い気味にヤサコへ顔を向けた。しかし、ヤサコの表情が全く変わらないのを見ると、困惑が次第に挑戦的な笑みへと変わった。
「いいわ。イサコ、私たちをあなどるんじゃないわよ。黒客なんて目じゃないわ」
言うが早いかフミエはさっきと同じポーズ、メガビーの発射姿勢を取る。電光石火で放たれた碧い光は、しかし私の目の前で四方に弾けた。直径３０センチの、ミニサイズの鉄壁だ。相手の様子を探りながら戦う時には重宝する。
「む、こしゃくなやつ」
フミエは小刻みにメガビーの方向を変えるけど、ふん、これくらい私の敵じゃない。右手だけを持ちあげて、壁を操って攻撃を防ぐ。
「おいダイチ、何やってる」
ぼけっと戦いに見入っていたダイチに檄を飛ばすと、
「お、おうよ」
夢から覚めたみたいな返事が戻ってきた。
「かかれ……おわっ」
突っ込もうとした黒客の前にレンガ壁が立ちはだかる。
「ヤサコ！」
フミエと私が同時に声を上げて、変なハミングになってしまった。
「昨日オババに色々貰ったの」
ヤサコはフミエに力強く微笑んで、
「お小遣い前借りでね」
すぐに情けない顔になった。
「ちくしょう、お前ら馬鹿にすんなよ」
レンガ壁の隙間からダイチの顔がのぞいた。
「駄目だ、飛び道具は使うな。鍵に当ったらまずい」
「ちっ、しゃーねー。壊せ、壊せ」

ばん、ばんと音がしてレンガ壁が揺れる。カンシャクでも投げつけているのだろう。

「それ！」

フミエに加えてヤサコもメガビーを撃ってきた。こっちも左手で壁を作り、ふたつの攻撃をかわす。

「拍子抜けだな。それくらいの攻撃じゃかすり傷も付けられないぞ」

両手で壁を操作しながら私はじりじり間合いを詰めた。最初は少し警戒したけど、所詮はこの程度か。レンガ壁もすぐ壊れる。挟み撃ちにすればひとたまりもないだろう。

「さあどうする。鍵を出せば許してやるぞ」

劣勢を悟ったフミエが唇をかんだ。メガビーを撃ち続けてはいるが、さっきみたいに敏捷に射線を変えてはいない。

「あなたが強いのはわかったわ」

不意にヤサコが攻撃をやめて、ポシェットに手を伸ばした。心の内でにたりと笑って、しかし表情には出さない。

「これが欲しいんで……しょっ！」

いきなりヤサコの手から白いものが放たれた。やや上の方に投げられたそれを、私は危うく手を伸ばしてつかみ取る。バランスを失った体が2、3歩下がった。

「フミエちゃん！」

「よし！」

しまったと思った瞬間、ふたすじの光が身体に命中した。くそ、両手をやられた！　私は床に尻もちをつき、支えを失った鉄壁ががらんと床に転がる。でも、それより！

「馬鹿！　お前ら鍵を――」

動揺で震える指を無理やりこじ開けると、手の中でぐしゃぐしゃに乱れた、白い、これは……骨？

「やあい引っかかった。それ、デンスケのおもちゃ。電脳骨よ」

「いくらあんたでも両手が駄目になってる間はどうしようもないでしょ。残念だったわね」

ふたりがこっちに小走りで駆けてくる。脇を抜けて逃げおおせるつもりか。

「……仕方ない」

起き上がりざま力を放った。モジョにセットされているのと同じ、ごく小さな電脳弾を連続で発射する、電脳軽機銃と私は呼んでいる。威力は強くないが、素早く使えること、音の出ないこと、何よりイマーゴの中では体力の消耗がわずかなことから、一番よく使うスキルだ。

「きゃあっ」

攻撃を食らったフミエが退く。

「フミエちゃん！　大丈夫」

案の定ヤサコもフミエをかばって留まった。

「なめるな」

目を閉じて力を込め、数秒で両腕を修復した。手を握ったり開いたりして具合を確かめながら、ゆっくりと廊下の端に寄り、光学迷彩の電脳布を取り払う。露わになったのは、長さ1メートルはあろうかという電脳の大剣。柄から切っ先までが等幅の広い剣身には、精緻な、しかし不吉な文様が描かれている。

「こんなものを使いたくはなかったんだけどな」

鍵を取り戻す話を相棒に伝えたら、半ば強引に転送されてきたのだ。両手で柄をつかんで持ち上げると、剣の効果か、残酷な感情の芽生えるのがわかった。

第2話　第三小電脳戦争　春の陣　Ｄ　ｐａｒｔ

展開したばかりのレンガ壁はきれいに真っ二つになって消滅した。メガビーは丸い鉄壁の盾に阻まれる。万策尽きて投げつけたカンシャクは指先で弾くように跳ね返されて、私の足元で破裂した。

「おいおい、もうおしまいか。鍵を返さないつもりなら、それなりの遊び相手になってくれよ」

身の丈に不釣り合いな大剣が振るわれるたび、狭い廊下の壁や天井が切り裂かれて派手な音を立てる。元から不安定だった空間のあちこちでエラーが起き始めた。騒々しい警告音を残して砕ける空間を、イサコは軽々と剣を操りながら迫ってくる。

「ヤサコ、やばいわこれ。あいつ悪魔よ」

「褒め言葉かな、それは」

ぎょっとして振り向いたほんの目の前を切っ先が通り過ぎた。はらはらと濃い茶の筋が散ったのは、エラーではない。

「か、髪が。髪が切れた」

もちろん電脳の髪に決まってるけど、間近で見た大剣のリアルな量感と相まって、本物の髪が切られたのと同じくらいのショックだった。うつむいたヤサコの腕をつかんで、私はあたふたと後退した。

「ちょ、ちょっと待って。何かないか、何かないか」

ふらふら引きずられながら、ヤサコはポシェットの中をかき回している。

「よし、この調子で壊しちまえ」

その後ろからも声が聞こえてはっと見ると、黒客の前に張ったレンガ壁にも亀裂が入っていた。まずい、絶体絶命！

「あった、これ！」

ヤサコの放った鉄壁が、間近に迫ったイサコの面貌を覆い隠した。がきんととんでもない音がとどろいて、でも幸い、鉄壁は切れなかったみたいだ。

「卑怯だぞ、出てこい」
声と共にがんがん壁を叩く音が響く。
「はあ、殺されるかと思った」
廊下の隅にへたりこむと、ヤサコも隣に腰を下ろした。
「でも全然ピンチは乗り切れてないわよ」
「そうね」
鉄壁のほうはまだしばらくはいけそうだけど、レンガ壁はもって後2、3分。黒客が押し寄せてくるまでに打開策を見つけられるかどうか。
「もう、一体どうなってるのよ。小競り合いくらいは覚悟してたけど、これじゃまるっきり戦争だわ。『第三小電脳戦争　春の陣』なんていっても過言じゃないわ」
半分やけくそみたく呟くと、こんな状況でヤサコはくくっと笑った。
「何それ、『春の陣』って。じゃあ『夏の陣』とか『冬の陣』もあるのかしら」
「ないわよ！　そんなのあったらメガネがいくつあったって足りないわ」
「あはは、それもそうね」
楽しそうに細められた目が、次の瞬間にはぽとりと落ちるように下を向いた。
「フミエちゃん。ごめんなさい、私のせいで巻き込んじゃって」
「今さらそれはいいっこなしよ」
ぽんぽんとヤサコの肩を叩いて、
「だけど、このままだと全面降伏しかないみたい。ヤサコ、鍵、返してもいい？」
「鍵はいいの。元々イサコのものだったみたいだし」
ヤサコは頭を下げる。表情が見えなくなった。
「でも、私、悔しくて。こんな風にイサコに負けるのが」
肩を震わせて、最後はちょっと涙声だ。私は妙に感心してしまっ

た。

「あんた、おっとりして見えるけど意外と負けん気ね」

「そうみたい。同じこと、タラちゃんにも言われたわ。ああ、タラちゃんっていうのは前の学校の友達」

ヤサコが「タラちゃん」というその口調には、離ればなれになってもまだ固く残る信頼感みたいなものが見え隠れした。私もそんな風に強く信じ合える友達が欲しいなあと、見たらちょうど顔を上げたヤサコと視線がぶつかった。

「よっしゃ」

私は立ち上がってぱんぱんとお尻をはたく。

「私がタラちゃんって子の代わりになれるかはわからないけど、やれるとこまでやってみましょ」

ヤサコも腰を上げて、私たちは向かい合う。

「ううん、タラちゃんの代わりをする必要なんてないわ。フミエちゃんはフミエちゃんだもの」

ヤサコは私より背が高いから、自然と見下ろされる形になる。けれど、昨日なんかはなんとなく私が見下ろしているような気分だった。今はまた違う。ヤサコと私はちょうど同じ目線で話している気がして、それが嬉しかった。

その時、ばきっと嫌な音がしてレンガ壁が歪んだ。

「時間がない！　手っ取り早く作戦をいうわよ」

ヤサコはきっと唇を結んでうなずいた。

「フミエ。散々手こずらせてくれたが、今度という今度はおしまいだ。覚悟しな」

砕けたレンガ壁の向こうから一歩踏み出したダイチは、電脳鉄パイプを私に突きつけた。前に黒客の４人、後ろではまだイサコが鉄壁を叩き続けている。逃げ場なしだ。

「ふん、どうでもいいけどお粗末な武器ね。あんたたちには優雅さってものが足りないわ」

「語るに落ちたな。俺たちはそんなものいらねえ。世の中勝ったやつの勝ちだ。さあさっさと鍵を出しやがれ。返したら、そっちの小此木だけには手を出さないでおいてやる」

悪党面でがなりたてるダイチの台詞は妙に決まっていた。これ以上の交渉の余地はなさそうだ。

「本当にヤサコには手出ししないのね」

「もののふに二言はねえ」

ダイチが深くうなずくと、

「わかった」

と答えて歩き出したのは、私ではなくてヤサコだった。

「フミエちゃん、後ろに」

光の鍵を持った手を真っ直ぐ前に突き出して、ヤサコは早足で進む。ちょっと情けない構図だけど、私はヤサコの影を踏んで歩いた。ダイチもガチャギリ、ナメッチと顔を見合わせると、そろそろと歩き出した。

「ほら、これよ。間違いないでしょ」

黒客の1メートルほど手前で立ち止まったヤサコは、ダイチの目の前に鍵をぶら下げてみせた。

「偽物なんかじゃねえだろうな」

疑り深そうな視線でダイチが訊ねる。私はヤサコの背中から顔を出した。

「だからこうして見せてるんじゃない。調べてみなさいよ」

「お前は黙ってろ。どっちにしろ後でぎたぎたにのしてやる」

ダイチは悪態をついてから傍らを振り返る。

「ナメッチ、ガチャギリ、どうだ」

「確かに形はイサコに渡された写真とそっくりっすね」

画像と鍵を交互ににらみながらナメッチが答える。

「コピー、ってこともなさそうだ。この鍵、検索をかけてもデータがない。それにバージョン情報が検出不能なくらい古いぜ」

「当り前よ、本物だもの。ほら、よく見てみなさい」

皆の視線が集まった瞬間。
ヤサコが鍵を真上に放り上げた。
「あっ」
４人の声が揃って頭が上を向く。
「今よ！」
ヤサコに言われるより先に、私は両手に持ったありったけのカンシャクを黒客の足元に投げつけていた。メガばあ特製のカンシャクが盛大な音をたてながら四方に火花を散らせる。
「うわっ」
文字どおり浮足立った黒客の脇をすり抜けて、私たちは全力で走った。
「汚ねえぞ、お前ら！」
「待てダイチ、まずは鍵だ」
背中でわめき合う声が遠のいていく。
「ヤサコ、早く」
「う、うん」
私はすぐにヤサコを追い抜いた。走る早さなら私のほうが上みたいだ。ヤサコは姿勢がよくない。今度走り方を教えてあげよう。
旧校舎から新校舎への境目を越すと、新しい安全な空間に入ったのがわかって、少しだけ気持ちが緩んだ。ちらりと見ると、ヤサコの表情にも小さな安心が見て取れた。その後ろ、やっと私たちを追いかけ始めた黒客の姿はもう遠い。
「このまま一気に校舎の外まで逃げるわよ」
「ええ」
少し軽くなった声で私たちは言葉をかわし、足にもう1度力を込めた。
それであんまり力んだせいだろうか、ひと足飛ばしに駆け降りた階段の踊り場で、下から上がってきた子とぶつかりそうになってしまった。
「ごめん、急いでたの」

顔も見ないでよけようとした私を、不意に違和感が襲った。
「あら、いいのよ」
聞き覚えのある声に体が固まる。
「フミエちゃん、危ない！」
ヤサコに引っ張られて尻もちをついたすぐ先を、何かが横一文字に通り過ぎた。電脳の剣！
「ちっ、また外したか。この剣、図体ばかりでかくて小回りが利かないな」
「イサコ！？　そんな、どうやって」
立ち上がろうとしたのど元に剣が突きつけられた。
「お前たち、まさか気づかなかったのか」
イサコは苦笑すると、
「黒客ってクラブは何人だったっけ」
私ははっとした。黒客のメンバーは、ダイチにガチャギリ、ナメッチ、デンパ、それに――
「アキラってのはお前の弟だそうだな。ダイチ達がお前らを倒せるか心もとなかったから、アキラに鉄壁を叩くだけ叩かせて、私は1階から回り込んだのさ。どうやら図に当ったみたいだな」
イサコの笑みは勝ち誇ったものに変わった。
「待って、イサコ。鍵は返したでしょ。私たちにはもう用がないんじゃないの」
ヤサコが様子をうかがうように低い声を出した。
「違うな」
ヤサコを見据えたイサコの表情が残酷さを増す。
「お前が言ったんだろう、私たちは敵同士だって。残念だけど、敵は倒さなくちゃならない」
言うなり大剣が横なぎに振るわれた。
「あっ」
攻撃を受けてひるんだヤサコの体が踊り場の壁にぶつかった。
「ヤサコ！」

私は駆け寄った。ものも言わずに背を丸めたヤサコの、腕の画像が乱れていた。

「今のはほんの、さっきのお礼だ」

イサコが剣を構えなおす。ひとつひとつの動作はゆっくりしているのに隙がない。逃げようとすれば、確実に背後からの一撃をくらうだろう。

その時、階上でばたばた足音がして、いくつかの人影が見えた。

「おお、追い詰めたか」

「お前たちは来るな！　私がけりをつける」

鋭く命令すると、イサコが剣を上段に振りかぶった。

「まずはヤサコ、お前だ」

ヤサコは黙ってうつむく。

「ヤサコ！」

私はもう無我夢中だった。どうにもならないとわかっていながら、それでも何かしなかったら気が済まなくて、ままよとばかりにイサコの前に立ちはだかった。

「おやおや、仲がいいんだな。ではお望みどおり、ふたり一緒に終わらせてやろう」

斬撃の姿勢が突きに変わる。イサコのいうとおり、こんなので貫かれたら、一発でメガネはクラッシュだ。ヤサコの体温を背中に感じながら、私は目をつぶった。

ぱしん、と、ごく軽い音が耳に届いた。やられた。電脳戦争だと音も光もやたら派手なアイテムが多いけど、最後はこんなもんか。

「ヤサコ、ごめん」

呟いて目を開けると、あれ？　メガネは壊れてない。体もやられてないみたいだ。ヤサコは目を丸くして前を見つめている。

「何だ、これは」

声のしたほうを見ると、イサコが呆然と剣を眺めていた。柄から手が離れている。なのに剣は落ちない。空間の1点に、まるでそこだけ時間が止まったかのように、電脳の大剣は重々しく静止してい

た。

「フミエ！　今のうちに急いで！」

1階で誰かが叫んだ。一瞬で声の主に思い当って、ヤサコの手をつかむと、私は風のように階段を駆け降りた。

第2話　第三小電脳戦争　春の陣　Ｅ　ｐａｒｔ

「ふう、ここまで来ればひと安心ね。職員室は近いし、他の子の目にもつくから」

正面玄関前に立った3人を柔らかい春の夕陽が包む。大げさに溜息をついたフミエにつられて、転校生の女の子も小さく息を吐き出した。ふたりの姿を見て、いつの間にか僕は笑っていた。忍んだはずの声が漏れたのか、転校生はぱっとこっちを見て、それで急に赤くなった。

素直な子だな、と思った。素直といえばフミエもだけど、フミエみたいに男勝りというか、明け透けで物怖じしないタイプじゃない。普段はきっとおとなしい、誰かの後ろにいるような。

でも、言わなくちゃいけない時には必ず言うんだろうな。何故ならこの子は嘘が下手だから。心と裏腹のことを言えば顔に出てしまうし、自分でそれがわかっている。だから嘘は嫌い、本当のことをはっきり言う。そういう子だ。

「ハラケン、さっきからなにヤサコの顔ばっかじろじろ見てんのよ。失礼じゃない。自己紹介くらいしなさいよ」

「ああ、ごめんごめん」

転校生は湯気が立ちそうなくらいに真っ赤になっている。

「僕は原川研一、今のハラケンってのがあだ名。フミエと同じくコイル探偵局の会員なんだ。これからよろしく」

シャツの襟をめくって会員バッジを見せながら僕は挨拶した。

「いっいえ、こちらこそっ」

慌てた転校生の調子っ外れな叫びが夕方の落ち着いた空気を乱す。下校中の子供が2、3人、こっちを振り向いた。

「あっ、私、小此木優子って言います。探偵局の小此木宏文と早苗の孫です。私のことはヤサコって呼んでもらって構いません。それで、あの、助けて頂いて、どうもありがとうございました！」

言うなり転校生は腰のところで９０度体を折って、これ以上ないほど深々と頭を下げた。これには僕もフミエもびっくりしてしまった。

「ヤサコ、そんなに恐縮する必要ないわよ。探偵局の仲間同士、困った時は助け合うのが当然なんだから」

「フミエにはもう少し感謝してほしいな。これで助けるの何度目だっけ」

フミエは苦い顔をして視線をそらせた。むしろ転校生のほうが、

「ごめんなさい、私が悪いの」

「いや、君はそれ以上謝らなくていいって」

せっかく上がりかけた頭をまた下げたので、僕は慌てて押し止めた。

「それで、今日は一体何があったの？」

ヤサコと名乗った転校生はまだもじもじしている。最初に感じたとおり、どっちかというと控え目な風だし、正直電脳に強そうにも見えない。こんな子が、一体何があってあの黒客とトラブルになったんだろう。

「それもこれもないわよ。話せば長くなるんだけどね」

待ちかねたようにフミエが喋り出す。しまった。帰りに図書館に寄ろうと思ってたのに、ただでさえ口の多いフミエがことさら長くなるなんていうからには、しばらく解放はないとみて間違いない。

「こらハラケン、なにぼけっとしてんのよ。自分で質問したんだからちゃんと聞きなさいよ」

「はいはい」

明日は謝らなくちゃな。優秀だけど延滞には厳しい司書のおばさんの顔を思い浮かべて、僕は溜息をついた。

「――というわけだったのよ」

ようやくフミエの話にひと段落がついた頃には、春の陽は町のシルエットの向こうにすっかり隠れて、そろそろまばらに街灯のとも

り始める時間になっていた。黒客とは会わなかった。取り逃がした僕たちと顔を合わせるのが悔しくて、多分裏門から帰ったんだろう。

「こらお前たち、とっくに下校時間を過ぎてるぞお。さっさと帰った、帰った」

校門から出てきたのは、新学期になっても変わらず面倒くさそうな様子のウチクネ先生だ。竹刀を持っているのは一応昔剣道をやっていたというのだが、その割にふらふら落ち着かない上体が情けない。

「はいはい」

フミエのいい加減な返事に先生の口が開きかけた。

「ごめんなさい、先生。さようなら」

僕は機先を制してふたりを促した。先生は眉間にしわを寄せて、でも何も言わずに校舎に入っていった。

「ヤサコ、初日から災難だったわね。大丈夫？　明日から学校に行きたくないなんて言わないわよね」

フミエがヤサコの肩を叩いた。

「ううん、平気よ、全然。かえって楽しみなくらい」

僕は、ヤサコの答えがフミエを安心させるための嘘かとも思ったけど、その考えは違ってるとすぐにわかった。夕空を見上げた彼女の瞳は輝いていたから。

「イサコは私のこと嫌いみたいだけど、私はイサコが嫌いじゃないもの。っていうより、何でイサコが私を嫌うのか、知りたくなってきちゃった」

フミエは目を丸くし、僕は吹き出した。

「君、強いんだね」

「違うわ、強くなんてないの」

ヤサコの頬が染まって、伏し目がちに僕を見た。

「あの、ハラケンて――」

「そりゃ駄目よ。強くなってもらわなくちゃ」

フミエの遠慮ない大声に、ヤサコの言葉はなよなよとかき消され

た。
「ヤサコもコイル探偵局の一員でしょ。いつだって私が一緒とは限らないんだし、降りかかる火の粉は払えるくらいになってもらわないと困るわよ」
「……何それ。何をしたらいいの」
「まず勉強。そして訓練。でもって実戦で経験を積む。この繰り返しよ」
フミエは急に年上口調で言った。考えてみると、探偵局に入った順ではフミエが一番最後だったから、ヤサコという後輩ができて張り切っているのかもしれない。
「具体的には、まず探偵局の例会が毎週月曜日にあるから、そこで大黒の電脳情報を聞き込んだり、メガネのテクニックを教えてもらったりするわけ。これが勉強」
「うん」
「で、空いてる日にテクニックの上達にいそしむのよ。メニューは、そうね、まずメガビーの素振り１００回。それからレンガ壁を投げる訓練に……」
「ちょ、ちょっと待った」
僕は無理に割り込んだ。
「何よ、ハラケン。話の途中で口出さないでよ」
「メガビーの素振りなんてしても意味ないよ。訓練するなら、普通に運動能力を鍛えるほうがいい」
「偉そうにいっちゃって。いつも図書館とかこもって、ろくに外で遊びもしてないあんたの言葉とは思えないけど?」
フミエは不満そうだ。次の言葉を言おうか言うまいか、僕は少し迷ったけど、行きがかり上しかたがない。
「じゃあ僕もつきあうよ。毎週水曜を訓練の日にしよう」
「本当に？　ありがとう！」
フミエより先にヤサコが答えた。
「なんかヤサコ、私とハラケンで態度が違わない?」

恨めしそうにヤサコを見つめたフミエは、
「まあいいわ。じゃあ訓練は水曜、と。後は実戦だけど、これはもちろん日にちを決めようがないわ。何か事件が起こったらメガばあが招集をかけることになってるの。まあ事件っていっても大抵はペット探しみたいなものが多いけど、時々もっとシリアスなのもあるわよ」
「シリアスって？」
ヤサコが首を傾げる。
「そうね、例えば空間の歪みの原因を探ったりとか、古い空間の発生地点を調べたりとか」
「へえ、そんなこともするのね」
うなずいたヤサコの表情から、少しの不安が見てとれた。
「大丈夫だよ。危ない仕事はもっと年上の会員がやってくれるから」
「探偵局って、他にもまだ誰かいるの？」
「決まってるじゃない。第三小にだってまだ……」
その時、校門の脇から小柄な人影が現れた。
「噂をすればほら、第三小最後の会員だ」
ヤサコとフミエの目が人影に吸い寄せられた。

第2話　第三小電脳戦争　春の陣　Ｆ　ｐａｒｔ

玄関をくぐると野菜を炒める香ばしい匂いが鼻をついて、寂しいような悲しいような気持ちでいた心がちょっとだけ温まった。それに混じって少しだけ、古い木の匂い。年代物の木造家屋には、いろんな匂いがわずかずつ入り混じっている。そういう匂いがほんわりと私の周りに漂って、緩やかに、けれどしっかりと、私を守ってくれるようだ。

「優子や、お帰り」

台所から首だけ出して微笑んだオジジは、すぐにまた夕食の支度に戻る。オババは店番だろう。いつも真っ先に飛んでくる京子も、今日は姿も見えない。お昼寝中かな。昨日は引越し、今日は新しい幼稚園に入園で、いろいろあったものね。

いろいろあったのは私もか。今日だけでも、イサコとの出会いにフミエちゃんとの再会、放課後の電脳戦争。ほんの半日の出来事とは信じられないくらいだ。今のぱっとしない気分は疲れてるせいだろうか。

苦笑が漏れた。違うよね。少しやせ気味で背の高い立ち姿。眉を覆う前髪に少し垂れた目は一見おとなしそうで、頼りないっていう子もいるかもしれない。でも、さっき私を見ていた時の笑い顔は、優しくて、それなのに力強さもあって、包容力っていえばいいのか、気持ちの良い温かさを感じた。だから、本当いうと、ちょっといいかもって思ったんだけど。

気がつくとへっへっと上気した息を吐きながら、デンスケが足にじゃれついていた。

「いつも私のこと考えてくれてるのはあなただけだわ」

抱き上げて柔らかそうな毛に覆われたデンスケの顔に頬ずりした。そのまま子供部屋に入ると、思った通り、京子は組み上がったばかりの2段ベッドの下の段で寝息を立てていた。ランドセルを机に置

いて、でもデンスケは下ろさずに、ゆっくりとベッドの段を上って、枕に頭をうずめた。デンスケがぺろりと頬をなめる。そういえば、小さい頃、デンスケがなめてくれたら不思議と痛みが消えたな。体の痛みと同じように、心の寂しいのも消してくれないかな。

目を閉じると、ついさっきの出来事がまぶたの裏に浮かんだ。

「研一、遅かったのね。待ってたのよ」

校門の影から進み出た女の子は最初にハラケンに笑いかけて、その後で私たちのほうを向いた。

「あなた、転校生の小此木さんね。あっ、もしかしてあなたも探偵局に入ったの？」

興味深そうにのぞきこんだ顔には見覚えがある。そうだ、昼休みにアイコちゃんに誘われていた子だ。確か図書室に行くからって、一緒に遊ばなかったんだっけ。

「私、葦原かんなっていうの。電脳はあまりわからないんだけど、一応探偵局に入ってるのよ」

葦原さんは自分の電脳ポシェットを探って、丸いバッジを取り出した。探偵局の会員バッジ、番号は「七」だ。

「カンナは僕と一緒に探偵局に入ったんだ。だから僕が六、カンナが七、フミエが八で君が九だね」

「４人いればなんとかクラブらしくなってきたわ。この１年、きっと楽しくなるわよ」

フミエちゃんは勢い込んで力こぶなんか作っている。

「あの、私はそういうのはちょっと」

苦笑して手を振った葦原さんに、

「なあに言ってんの。カンナはどうせハラケンにくっついて入会したんだろうけど、世の中そんな甘ちゃんじゃ許されないわよ。カンナにもしっかりメンバーとしての役割を果たしてもらいますからね」

フミエちゃんが厳しく言い渡す。

「ええっ、そんなあ」

葦原さんは弱々しく抗議した。
「大丈夫だよ。ちょうどさっき、水曜を訓練日にしようって話してたんだ。一緒にやろうよ。カンナは家にこもり過ぎだしさ」
「研一がそういうなら」
葦原さんが背の高いハラケンを見上げると、ハラケンは大切な宝物でも守るみたいににっこりと微笑んだ。それで私は、なんていうか、ちょっとがっかりしてしまった。
校門を出ると、自然とハラケンと葦原さん、その後ろに私とフミエちゃんが並ぶ形になった。
「研一の薦めてくれた『光車よ、回れ！』借りてきたのよ。すごく楽しみ」
「あ、借りたんだ。それ、ちょっと長いけど面白いよ。特に龍子がいい」
仲好さそうに話すふたりの背中を見ながら、私はとぼとぼ歩く。
「どうしたのよヤサコ。急に元気なくしちゃって」
フミエちゃんが不思議そうに聞いた。私は声を低くした。
「――あのさあフミエちゃん、ハラケンと葦原さんって、ええっと、その、どういう関係なの？」
「あのふたり？　幼なじみで家が近いから仲がいいのよ。気がつくといつも一緒にいるわね。あんなくっついて、暑くないのかしら。あ、あれ、ヤサコ？　私なんか変なこと言った？」
「……違うの」
私はどどーんと沈み込んでいた。多分そういうことにはうといフミエちゃんですら、これくらいは感じている。明日アイコちゃんに聞けば、１００パーセント明快な答えが返ってくるはずだ。
「がっかりだなあ」
覚えず記憶と同じ呟きが漏れて、私は我に帰った。溜息をついて見回すと、デンスケは我関せず、あっちを向いて丸くなっている。
私は手を伸ばした。

「デンスケ、デンスケ。あなたくらい私の気持ちをわかってよ」
急に胸の上に引き上げられたデンスケは目をぱちぱちまたたかせている。
「もう、この子ったら」
自分でも八つ当たりだとわかっていたけれど、半開きになったデンスケの口に指を突っ込んで、横にぐいと引っ張った。
「わあ、でっかい口ねえ」
わふわふいう抗議の吠え声もよそに、私は思わず感心して口の中をのぞいていた。大きな顔はだてじゃない、ハムスターの頬袋みたいに口の皮は伸縮して、いろんなものが入りそうだ。昨日の鍵とかメタバグも、そうやって口に入れていたのか。
「きゃっ」
中身に気を取られている間に、口の端から電脳よだれがだらりとたれて胸にへばりついた。
「やだ、どうしよう」
起き上がって胸元を見た時、襟の影で小さな光が点滅しているのに気がついた。メガばあの招集だ。何があったんだろう。知り合ったばかりの探偵局のみんなの顔が浮かぶ。それに黒客、最後にイサコ。次の事件でも、彼女と争うことになるのかな。
私はこぶしを握って目の高さに持ち上げた。自分で見ても、はっきり言って非力な、頼りない腕だ。これからの戦いの中で、私はイサコの秘密にたどりつくだけの力を身につけることができるのだろうか。

第2話　第三小電脳戦争　春の陣　Ｆ　ｐａｒｔ（後書き）

第2話は今回で終わりです。次回、第3話に続く。

第3話　他律型オートマトン“イリーガル”　Ａ　ｐａｒｔ

メガマスに削除されたサイトによると、イリーガルが見つかるようになったのは、何年か前に起きた大きな電脳事故の直後からだそうです。

「揃ったようじゃの」

肘掛け付きの座椅子に鷹揚にもたれたオババの隣にオジジがちんまりと座っている。対面するのはフミエちゃん、ハラケン、葦原さん、そして私。椅子ごとくるうりと室内を眺め回したオババの視線が私で止まった。

「ヤサコ、何をやっておる。座布団くらい持ってこんかい」

「いきなり何よ。私オババの召使じゃないんだから」

オババの偉そうな態度にちょっと反感の募っていた私は、思いっきり舌を突き出した。

「どうした優子、ご機嫌斜めじゃな。ま、そんなこともあろうて。ここはわしが」

「あっ、先生は座っててください。僕が取ってきます」

腰を上げようとしたオジジをハラケンが止める。

「いいわよ。私が行くから」

私はさっと立ち上がって居間を出た。

「なんじゃい、最初から文句言わずに行けばいいものを」

「オババ、そう怒るな。嫌なことでもあったんじゃろ」

後ろ手に閉めたふすまの向こうから聞こえる声を、私は頭を大きく振って追い出した。

寝室の押し入れから座布団を４つ引っ張り出して戻ると、話はもう始まっているみたいだった。

「会ったそうなんじゃよ、真っ黒い妙な生き物と」

おおげさなジェスチャーを交えながらオババが話している。
「それって、もしかしてイリーガル？」
フミエちゃんがいぶかしげに言った。
「恐らくそうじゃ。メガネを上げたら見えなかったという話じゃからの」
「見間違いの可能性はないんですか」
ハラケンが慎重に聞く。
「そんなはずはなかろう。トメさんはメガネに老眼鏡を入れておるし、頭もしっかりしておる。それに――」
「トメさん？　去年亡くなったじゃない」
フミエちゃんがオババをさえぎった。
「おろ？　おおすまん、トメさんじゃなくウメさんじゃった」
ウメさんよりオババの頭のほうが怪しい。
「とにかくじゃ、今日の４時過ぎ、学校の近くにイリーガルらしきものが現れた。これは確実じゃ」
「４時過ぎって……」
フミエちゃんと私は顔を見合わせた。私たちがイサコとやり合っていた頃だ。
「その時間、僕たちは学校で黒客と戦ってました。イリーガルは、電脳戦争で生まれた空間の乱れに引きつけられたのかもしれない」
ハラケンが私たちを代表するように口にした。
「うむ。その可能性は十分あるの。じゃがその口調だとおぬしら、イリーガル自体は見かけなかったようじゃな」
「知らない。見てない」
４人が一斉に首を振った。
「さようか。ううむ、仕方ないの」
眉をひそめたオババに、私は思い切って聞いた。
「オババ、そもそもイリーガルって一体何なの？　金沢にはそんなものいなかったわ」
「他律型オートマトン」

それまで黙っていたオジジが急に呟いた。
「たりつ？　な、何それ？」
フミエちゃんが聞き返す。
「恒常性の維持を基本的に外部に依存した志向性電脳体じゃ。発生するのは恐らく古い空間の最深部。大黒に特有の空間の断裂面から、新しい空間に侵入してくるんじゃ」
オジジの言っている意味は半分もわからなかったけれど、何故だか私はどきっとした。もっと質問したくて、でもどう言っていいのか、何を聞きたいのかもよくわからず、私は気ばかり焦らせながら口ごもっていた。
「せ。先生、ちょっと待って。もう少しわかりやすく教えてもらえない？」
フミエちゃんの抗議の声に、半ば独り言のように喋っていたオジジは、はっと我に返ったように私たちの顔を眺めた。
「おお、すまぬ、すまぬ。要は、古い空間の中でしか生きられない電脳生物じゃよ。何故そんなものが生まれるのかはまだ分かっておらぬ」
「そうなの」
フミエちゃんと顔を見合せながら一応うなずいてはみせたものの、さっき生まれた気持ちのもやもやはなくならなかった。
「メガばあ、イリーガルなんて2、3週間に1回くらいは大黒のどこかに現れるじゃない。どうして今回に限って非常招集なんてかけたの？」
フミエちゃんが話題を変えた。
「理由はふたつじゃ。ひとつには、ここ3日で立て続けにイリーガルが目撃されておる」
「確かにそれは変ですね。でも、同じイリーガルが別々に見つかっただけじゃないんですか」
ハラケンはやはり落ち着いている。
「いいや、違う。何故なら外見がまるで別じゃからの。おとといの

はたくさん穴の開いた岩石みたいな形だったそうじゃ。それが昨日のは一番よく見かける丸い頭に足のついたやつ、今日ウメさんが見たのは、三角帽子みたいな尖った頭に足がたくさん生えてたらしいぞい」

「うえ、なんか気持ち悪いわね」

フミエちゃんがむずむず体を動かした。

「それが気味悪いだけではすまんのじゃ」

オババが声をひそめる。

「これが理由のふたつめでもあるんじゃが、今日のイリーガルは危険なんじゃ。ウメさんが傘でぶっ叩こうとしたら反撃を食らって、かわいそうに電脳体破損で修復に8千円もかかったそうじゃよ」

「叩こうとしたウメさんもウメさんだけど」

葦原さんが冷静な感想を告げて、私もうなずいた。

「だけど危ないのは確かだわ。それにここ何日か、空間の不具合が急に増えた気がしない？　もしかしてイリーガルと関係あるのかも」

「フミちゃん、鋭いの。わしらの考えでは、どうも意図的に古い空間を活性化させて、イリーガルを呼び覚ましている連中がおるんではなかろうかと、そう思うんじゃ」

私ははっとして顔を上げた。イサコ。

「それ、心当たりがあるわ。きっと、今日転校してきた天沢勇子って名の転校生のしわざよ」

フミエちゃんが私より先に言う。

「待って、フミエちゃん。まだイサコが犯人って決まったわけじゃないわ」

よくわからないけど、私はイサコをかばってしまう。

「もちろん断定はできないけど、怪しいのは確かだよ」

ハラケンがゆっくりと私を見る。反論できるわけもない。私は押し黙った。

「よろしい、当面のお主らの仕事は決まったの。そのイサコとやらいう転校生を監視するんじゃ。ヤサコもそれで良いか？」

「いいわ。それでイサコの無実が晴らせるかもしれないし」
仮にそうでなかったとしても、イサコがイリーガルを呼び起こすのは理由があるはずだ。見張っていれば、その理由がわかる可能性だってある。
「では皆の衆、頼むぞい」
オババの号令に、皆が強い表情でうなずいた。

第3話　他律型オートマトン“イリーガル”　Ｂ　ｐａｒｔ

玄関のドアを開けると、２匹のモジョがすっ飛んできて足にぶら下がった。

「こら、どきなよ。踏んじゃうぞ」

叱りながらも、屈みこむ私の声は軽い。片手でモジョをあやしながら、もう片方は電脳ポシェットを包むようにしっかりと押さえている。ヤサコを取り逃したのは悔しかったけど、第１の目的は遂げた。これがなくちゃ、あの人に会うことができない。

「イサコ、お帰り」

声をかけられて初めて、廊下に誰かいたとわかった。小さな子供みたいにモジョと遊んでいたのを見られて、私の頬は少しだけ赤くなった。

「ただいま、お兄ちゃん」

お兄ちゃんはいつもの、眼差しだけを柔らかく緩める笑いを私に返した。温かい、この微笑みが私は好きだ。私のお兄ちゃんはこんなに優しく笑えるんだって、誰かれともなく言って回りたくなる。けれど、ことさらにお兄ちゃんの優しさを際立てる心がある翳りに縁取られているのにも、私は気づいていた。どうしてだろう、そうやって笑う時のお兄ちゃんが、手の届かない遠くにいる気がする時がある。

「鍵、見つけたよ」

歩み去る心を引き戻すように、私は急いで電脳ポシェットから鍵を取り出した。

「本当に？　よくやった」

お兄ちゃんは鍵を受け取って、しばらくためつすがめつしてから、

「間違いない。本物だね」

私はほうと大きなため息をついた。それがお兄ちゃんも同じだったから、ふたりで思わず笑ってしまった。

「正直、こんなに早く見つかるとは思わなかったよ。良かった」
その後でお兄ちゃんはにわかに表情を固くして、
「でも、これからは絶対なくしちゃ駄目だ。鍵がなくなったら僕たちは何もできない」
「うん、ごめんなさい」
私は軽く頭を下げた。
「何度も言わないよ。イサコもわかってるだろうから」
「うん」
お兄ちゃんは黙って踵を返し、私はうつむいたままそれに従った。
少し長めに分けたお兄ちゃんの髪が、私の前で揺れている。私とお兄ちゃんが似ているという人は、あまり多くない。私にはその理由がわからない。髪の色も、顔の作りだってよく似ているのに。特に目。そうだ、ほんの少しだけ吊った、引き締まった視線だけは、皆がそっくりだとうなずいてくれる。そう言われたさに、小さい頃はお兄ちゃんの目付きの真似ばっかりしていたものだけど、いつの間にか意識しなくとも同じ仕種をするようになっていた。それこそ、兄妹がよく似ている証拠だ。
「モジョがイリーガルの痕跡を発見した」
「えっ？」
ひとりで思い出に沈んでいた私は、つい聞き返した。
「だからイリーガルだよ。今日も出現したらしい。しかも学校の近くだ」
「今日も!?　2日連続で現れるなんて」
その後で、ふと気づいて聞く。
「お兄ちゃん、何かやったの」
「僕は何もしてない」
覆いかぶせるように答えて、お兄ちゃんは私を振りかえらないまま、自分の部屋の扉を開けた。モジョ達が我先にと駆け入る。その後でお兄ちゃん、最後に私が続いた。
「理由はわからなくとも、イリーガルが現れたのは確かだ。僕たち

はそれを追わなくちゃ」
　ぶうんと小さな音と共にモニターが立ち上がった。詳細な市街の地図に、まるで天気図のように空間の状態が上書きされた、リアルタイムの電脳地図。モジョを使ってお兄ちゃんが作り上げつつある。
「イリーガルは古い空間を本能的にかぎつけて、そっちに向かう習性がある。今日イリーガルが現れた場所に一番近い古い空間は第三小にあるけど、何故かそっちには行ってない。キュウちゃんにでも追われたのかもしれない。モジョが調べた限りでは、イリーガルは一直線に北西へ向かっている」
　イリーガルの痕跡を示す表示は、真っ直ぐ進んで地図の未完成部分を越えていた。
「ここから先は空間の状態がまだわからないから、どうやって探そうか考えているところなんだ」
「それならいいものがあるわ」
　私はポシェットを探った。
「これ、使えるかもしれない」
　黒客のデンパが作った、イリーガルの研究ノートだ。何かと使えそうだから無断でコピーさせて頂いた。受け取ったお兄ちゃんはぱらぱらとめくるとすぐに顔を上げ、
「いいぞ、空間の不具合の発生個所が丁寧に調べてある。ちょっと待って、ノートの情報を地図に書き込むから」
　地図の中に、古い空間を示す赤い点がいくつも書き加えられる。イリーガルの向かった先には――
「ここ」
　ふたりの指が同じところを指した。町はずれのスクラップ置き場。
「本当にあんなところにイリーガルがいるんすかあ？」
　山道の急坂に差しかかって早くも根を上げたナメッチがぼやいた。
「いるさ、私を信用しろよ。それにメタバグも取れるぞ、ざっくざくだ」

「モジョモジョ」
肩に乗せたモジョが、ややオーバーアクション気味に手を広げた
私の動きを真似しながら飛び跳ねた。
「取りあえず信じるけど、お前、何か企んでるんじゃねえだろうな」
ガチャギリが疑い深そうな目を光らせる。
「企みなんかないって。これは私からの、ほんのお近づきの印だよ」
私は流暢に誤魔化した。まあ嘘をついているわけではない。次の
休み、例のスクラップ置き場、こいつらによれば通称「バスの墓場」
にイリーガルを捕まえに行こうと誘った、その言葉自体は本当だ。
裏があるとするならむしろ目標のほうだ。イリーガルを捕獲するの
ももちろんそうだが、その他に、黒客を私たちの側に取り込んでお
きたいというのも、今度の遠征の大きな目的だった。コイル探偵局
とやらいう敵対組織は意外と手強い。正面から当るなら撃破するの
はたやすいけど、この間みたいに姑息な手段を使って妨害されると、
私ひとりでは対応しがたいかもしれない。相手と渡り合えるだけの
人数をまずは確保すべきと、私とお兄ちゃんは結論を出した。
「イサコさん、待ってくださいよお」
随分後ろのほうから情けない呼び声が聞こえた。姉に似て小柄な
アキラが、完全に息の上がったデンパをひいひい言いながら押して
いた。ナメッチも遅れ始めている。
「俺、今日はクッキー焼きたかったのになあ」
ナメッチは妙な文句を言って息をついた。
「ナメッチはな、こんな顔して料理が趣味なんだ。主婦顔負けの腕
だぜ」
「なんだと」
振り返った私がよほど変な顔をしていたのだろう、ガチャギリが
説明してくれた。はあ、こんな情けないやつが。人は見かけによら
ないってのは本当だな。
「けど、どうだ。この辺で休憩しねえか。ダイチも追いついてこね
えし」

遅刻常習犯のダイチは今日も遅れていた。
「仕方ないな」
見回すと、すぐ近くの小さなお社で縁日をやっている。
「あそこでひと休みしていこう」

屋台がいくつか並んだ小さな縁日は、それだからむしろ、普段の生活の延長みたいな親しみがあって、そこにいるだけでなんとなくいい気分だった。黒客の皆も同じだ。一番きついガチャギリでさえ口の端に笑みを浮かべている。いや、その理由はもしかすると、私のおごったラムネのせいかもしれないけど。

昔ながらの瓶入りラムネに口をつけると、分厚いガラスのもったりした感じが優しい。こんな縁日に来るのは、そういえば何年ぶりだろう。あの人は縁日が好きだったから、小さい頃の私はよく連れていってもらった。ちょっとどきどきするような別世界の中を。ふたりで手をつないで。繊細でしっとりしたあの人の手の感じを、私はまだ覚えている。あの事件の後、友達に誘われても縁日に行かなくなったのは、懐かしい記憶をそのままに取っておきたかったからなのかもしれない。

「す、すまねえ。遅れた」
祭りの風景に見とれていた私の背中に声がかかった。振り向くと、ダイチが大きく肩で息をしている。春だってのに額に玉の汗が浮かぶ。まさか、家からここまで全力疾走してきたんじゃないだろうな。
「取りあえずラムネ、買いなよ」
硬貨を放ると、ぱしっと音をさせながら受け取って、
「おっ、ごち。でも遅くなっちまうだろ。俺は飲みながら行くから、すぐ出発しようぜ」
元気なやつだ。瞳が期待に輝いている。

ダイチが来てから意外と皆がてきぱきと動いて、お昼前にはバスの墓場についた。別に特別な指示をしたわけでもないのに、音を上

げないし、歩く速度も落ちない。無理やり従わされているって感じもない。長年のチームワークで沁みついた習性なのか、それともダイチのリーダーシップってやつか。どっちにしても、私はちょっと感心して、心のどこかに頼もしさを覚えたのも確かだ。

「来たのはいいけど、メタバグなんてどこにも落ちてないぜ」

手をかざして眺めたガチャギリが言った。

「あのな、今回はメタバグよりイリーガルが先だろ」

たしなめながらも私はセンサーを確かめた。どうやら近くにイリーガルはいない。後先が逆になるけど、取りあえずメタバグでもいいか。

「モジョ、近くを探ってきてくれ」

肩から飛び降りたモジョが走り去るのを見守ってから、

「じゃあメタバグの見つけ方を教えよう」

私は皆に向かってにこと笑った。

第3話　他律型オートマトン“イリーガル”　C　part

「フミエちゃん、フミエちゃんったら」
ヤサコが忍び声でささやいて、服の裾を引っ張った。
「ちょっと静かにしててよ。今忙しいんだから」
「そんなに奥に行っちゃ駄目よ。ハラケンたちと離れちゃったじゃない」
「大丈夫だって。黒客からだってあんなに遠いもの。それより、メタバグよ、メタバグ。この前の戦いでアイテムを使い果たしちゃったから、補充しておかないと」
軽くヤサコをいなした私は、両手でメガネを覆って地面に顔を近づける。細く開けた指の隙間から見える古い空間が、ちりちりっと薄い紙の破れるような音を立てた瞬間が狙い目だ。顔を隠していた手を素早くのけると、上書きされた新しい空間の端にしわが寄った。古い空間の削除が間に合わずにテクスチャがはみ出してしまったのだ。
「よっしゃ、一丁上がり」
すくい取った空間のしわが手の上で縮こまり、見る間に半透明の結晶へと変わっていく。これでメタバグの完成。思ったよりずっと簡単だ。黒客のやり方の見よう見まねでもちゃんとできる。
「こんな風にしてメタバグができるなんてね。今までは偶然できたのを拾い集めるだけだったけど、これからは違うわ。作りまくるわよ」
「フミエちゃん、目的が違うわ。私たち、黒客を監視するために来たんじゃない」
「うるさいなあ」
私は屈んだまま頭を回してヤサコを見た。
「監視はハラケンとカンナがやってるからいいのよ。ヤサコ、あんた今だけじゃなくて、これからどうなるか考えてみなさいよ」

「これから？」
「そう。このまま黒客がメタバグを手に入れるのを黙って見てたら、黒客ばっかりがどんどん強くなっていくでしょ。そうしたら、イサコが好き放題やっても、私たちは手出しできなくなっちゃうのよ」
「うーん、それはそうだけど」
ヤサコの返事は煮え切らない。
「大丈夫。黒客がイリーガルを呼ぶとか危ない状況になったらやめるから」
私は廃バスの影から頭を出して辺りを探った。
「ちょ、ちょっとフミエちゃん。見つかっちゃう」
「だから大丈夫だって。黒客だってメタバグ探しに夢中だもん。それより、私ちょっと奥のほうに行ってるから、ヤサコはそこであいつらを見張ってて、何かあったら呼んで」
「えっ、どうして」
ヤサコは急に気弱な表情になった。
「奥のほうが空間が古いわ。きっとメタバグがたくさん取れる」
「もう、フミエちゃんったら」
半分諦めたように呟くヤサコの声を背中で流して、私はスクラップの奥に分け入った。

古い空間を検索しながら少しずつ進むと、やがて大きな廃バスが何台も連なった場所に出た。もう何十年も放置されているみたいな、錆びついて穴の開いた車体が並んでいる。木が生えてないせいだろう、さっきまでやかましいくらい響いていた鳥の声も聞こえない。音も動きもない広場。電脳空間ばかりか、現実世界までもその営みを忘れてたゆたっているようだ。心が少しだけ寒くなった。
それにしても、とんでもなく古い空間だった。わざわざメガネを隠さなくとも、素早く視線を動かしただけで空間が震えてメタバグがこぼれ落ちてくる。空間のバージョンは……検索不能！？　こんな場所があるなんて。

「ここ、後でメガばあに報告しよ。探ってみる必要ありね」
私は努めて明るい声で言った。そうでもしないと、薄気味悪さがつのって恐くなりそうだったからだ。頭を振って嫌な感じを追い出してから、私はメタバグを拾い始めた。
１０分もすると電脳ポシェットはメタバグでいっぱいになっていた。すごい。今まで一番多かった時でも、ポシェットのキャパの１割も行かなかったのに。
「ふう、よく働いたわ」
私は年寄りくさく拳骨で腰を叩きながら伸びをした。別に腰が痛いわけでも疲れたわけでもないけど、いつの間にかメガばあの癖がうつっていたのだ。自然とあくびが漏れる。大きく口を開けかけた私は、けれどそのままの姿勢で固まった。
ぺり。
静止した空間のどこかから、小さな音が聞こえてくる。ぺり、ぺり。
「空間の歪みかしら」
ほんのわずかずつ何かが剥がれていくような、もどかしい切れぎれの音。耳を澄ますと、音は錆に覆われたひときわ大きな車体の裏から聞こえてくる。
知らず、足はそっちに向かっていた。
いつもメガばあは私を恐がりだって言うし、もしかするとそうじゃないかなと思うこともないってわけじゃないけど、その時は、神秘的な雰囲気に飲み込まれるみたいに、不思議と恐怖感は湧いてこなかった。
バスの向こうに回り込んだ私は息を飲んだ。
違う。空間の色が違う。まるで古い雑誌の写真のように、セピア色に褪せている。これは私たちの知ってる空間じゃない。
ぺり。今度ははっきりと音が聞こえて、異質な空間の中心に目をやった私は、そこでもう１度凍りついた。
赤、いや黒。もとい、黒の中に赤。そこだけ草も生えてないのっ

ぺりした地面の上に、黒い植物――にしか見えなかった、その時は――が生えている。真っ直ぐ伸びた茎のてっぺんについた大きなつぼみが今しも綻びかけて、内側に真っ赤な花びらをのぞかせている。音は、目に見えるほどの速さで開いていくつぼみの発するものだった。

ぴ、とメガネが聞き覚えのない耳障りな音を出した。もう花といっていいほどに開いたつぼみが、音に反応してぴくんと震える。

『警告。規格外の空間に近づいています。メガネを破損する恐れがあります。今いる場所を至急離れ、サービスセンターに連絡してください』

「もう、こんな時に」

私は目の前に表示されたウィンドウをよけた。

向こうから、花が見ていた。

馬鹿、花が見るなんてそんな。でも、さっきまで空を仰いでいた花は、今確かにこっちへ傾いている。幾重にも重なった真紅の花びらの、燃えるように鮮やかな色合いが私の目を射る。きれい、きれいだけど、あまりにもきれい過ぎてどこか不吉だ。それでも私は視線を外せない。私は不思議な確信に誘われていた。花の赤の、その向こうには、今まで知ることのなかった、そしてこれからも知ることのないはずだった、こことは違う世界が待っている。

花びらを放射状に広げながら、にぶい黄色の花の芯がゆっくりと現れた。抗うこともできず、酔ったように私は引き寄せられる。

不意に肩に何かが触れた。

「ぎゃっ」

全力で振り払った私は勢い余って尻もちをついた。見ると相手も同じように倒れ――ってことは、

「なんだカンナか」

脅かさないでよ、と言おうとした瞬間、ばんと大きな音がした。

「――何？」

おそるおそる音のしたほうを振り返ると、さっき私の立っていた

場所のすぐ後ろにあるバスの車体が真っ黒に文字化けしていた。
「え？　空間事故？　ねえカンナ、これ何だかわかる」
ところがカンナは答えない。カンナの視線は私とまるっきり逆を向いていた。つられて見た先にはさっきの花。芯に無数に開いた穴から、青灰色の煙が立ち上っている。
「今の、一体」
呆然としたカンナの言葉が耳に届いた時、ほんの束の間、じりじり炒られるような不快感が頭を通り過ぎた。正体はわからない。けれど、それを感じた瞬間、私はその場を飛びのいていた。
わずかに遅れて背中に衝撃音が響く。振り向くと、今度は今まで私のいた場所の地面が激しく文字化けしている。
「嘘……何これ」
カンナが呟きながらふらふらと立ち上がった。花びらの何枚かが声に反応して向きを変える。
「カンナ逃げて！　やばいわ」
「え？　――あっ」
ぼやっとしているカンナの腕を無理やり引っ張って、私は走り出した。
「早く、バスの裏に」
飛び込む直前イリーガルのほうを見た時、私の目はやっと攻撃の瞬間を捉えた。花の芯が一瞬輝くと、無数の黒い塊が散弾みたいに飛び出す。私は、危うくバスの影に体を引っ込めた。
「ふう、危なかったあ。何よあれ」
イリーガルの姿が完全に見えなくなるところまで逃れて、私は安堵のため息をついた。植物型イリーガルなら、まさか足が生えて追ってきたりはしないだろう。カンナは夢から覚めたように目をぱちぱちさせていたが、私の言葉を聞くと、
「あれ、ハスの花よ。法事でお寺に行った時見たわ」
妙に冷静に答えた。まだ何が起こったか理解してないか、それとも驚きが大きすぎてかえって無感動になっているのかも。

「ハスだかチューリップだか知らないけど、なんぎなやつだわ。あんなイリーガル、今まで見たことない」
私はもう1度大きなため息をついて、
「でもありがとう。さっきカンナが肩をたたいてくれなかったら、私、メガネを壊されてたかも」
「いいの、気にしないで。私も助けられたし」
やっと感情の戻ってきた顔でカンナは微笑み、その後で、
「だけどフミちゃん、今日はもう引き上げよ。メガばあから連絡があって、サッチーが2機こっちに向かったって。メタバグもイリーガルももったいないけど、サッチーにフォーマットされちゃうわね」
「仕方ないわ。でもカンナ、それを伝えにわざわざこんなところまで来たの？　電話くれればよかったのに」
不思議に思って聞くと、カンナは軽く首を振った。
「やってご覧なさい」
「え？」
言われたとおり指で電話の形を作った私は、すぐにカンナの言葉の意味を悟った。回線がつながらない。周りの空間が古すぎて対応できないのだ。
「私たち、3人でずっとあなたを探してたのよ」
「ご、ごめんなさい。メタバグに夢中になりすぎた」
苦笑いを浮かべるカンナに私は頭を下げた。
「謝るなら私よりヤサコちゃんのほうがいいわ。あの子、一番心配してたもの」
「そうなの」
ヤサコ、いいやつだ。邪険にしてしまって悪かった。申し訳なさで下げた頭が上がらない。
「ひとりで反省してないで、行って謝りましょ」
うつむいたきりの私の頭を、カンナの手がぽんぽんと軽くたたいた。

サッチーが来るとなったら長居は無用だ。さっきの攻撃音を黒客に聞きつけられたかもしれないし、私たちは急いでその場を後にした。

早足で歩きながら、私はふときざした疑問を口にした。

「それにしても、メガばあはどうしてサッチーが来るってわかったのかしら」

「あら、決まってるじゃない――」

答えが急に途絶えた。

「カンナ、どうしたの」

「今、赤いものが見えた気がして」

カンナは不安げに後ろを振り返った。

「ちょっと、脅かさないでよ」

私の声がカンナに輪をかけて不安に震えていたのに、自分でも驚いた。おっかなびっくり私も辺りを見回した。が、怪しいものは見えない。

「考えすぎよ。追いかけてきたりなんてしないって」

わざと軽い口調で流した私は、けれどカンナの顔を見てどきっとした。

「どうしたの？　カンナ、顔色が悪いわよ」

「――来るわ。私、わかる」

カンナは私の腕をつかむと、ぱっと駆け出した。

「わわ、待ってよ」

きりきりきり、と高速で動く機械のような音が、私の頼りない声をかき消した。毒々しい赤が視界の端を過ぎたかと思うと、１０メートルくらい前の、車というよりは錆のかたまりといったほうが近いバスの屋根に、さっきの花が姿を現した。

「嘘！」

黒い茎がぱっくりと割れて、虫みたいに節のある細長い足が何本も伸びている。花がこっちを見て、華奢な足はぐんと突っ張った。

「このっ」

機先を制して、私はメガビーを発射した。赤茶けた風景を碧い閃光が貫く。素早く身を動かしたイリーガルの花には当らなかったけど、ぱりんとガラスでも砕けるような音とともに、足の1本が宙を舞った。

「フミちゃんうまい」

カンナが手をたたいた。バランスを崩したイリーガルはもんどりうって屋根から地面に転げ落ちる。私は駆け寄ってもう一撃を加えようとした。だがイリーガルは素早い。落ちながら体勢を立て直して、地面に着いた時には私に照準が合っていた。

「しまった」

飛びのくのと散弾が発射されるのと、ほぼ同時だった。どっかやられた！　もちろん痛くはないけど、嫌な感じが背中を走り回っていた。

「フミちゃん！」

再び私を狙ったイリーガルの前にレンガ壁を投げながら、カンナが駆け寄った。

「今のうちよ。逃げよう」

「カンナ、すまないわね」

立とうとして急に視界がぐらぐら揺れ、私はひざをついた。

「なっ、何よこれ」

景色が二重に歪んで見える。体のバランスがうまく取れない。

「フミちゃん……体がずれてる！」

慌てて確かめると、損傷の激しい左の二の腕を中心に、電脳体が本当の体から外れかけていた。さらによく見ると電脳の左手は完全に止まっている。でも今それ以上にやばいのは、体の安定が取れなくてうまく走れないことだ。

私はカンナの目を見た。

「あんたひとりで逃げて」

カンナは泣きそうな顔をした。

「イヤ。絶対イヤ。フミちゃんを連れて逃げる」

カンナは屈みこむと私の腕を肩に回した。半分体を預けながら、私はよろよろ身を起こす。すぐに景色がねじ曲がってまた倒れそうになるところを、カンナは必死で支えた。

「駄目。このままじゃふたりともやられる」

カンナは無言で首を振った。私を支える腕の強さは変わらない。きり、と聞き覚えのある音が耳に届いた。レンガ壁を破壊したイリーガルがゆっくりと迫ってくる。足の1本を失って動きは鈍ったみたいだけど、どっちにしてもこれじゃ逃げ切れない。

「カンナ！」

私は強く言い放った。

「私はなにも、私がやられるかわりにあんたを逃がそうとか思ってるんじゃないわ。あんたが先に行ってみんなを呼んでくれれば、私も何とかなるかもしれない。それが一番、ふたりとも助かる確率が高いのよ」

「でも」

「早く！」

カンナは打たれたようにびくっと震えて、その後で唇をかんだ。

「ごめん、すぐ戻るから。その前にこれ。5枚分しかないけど」

私はカンナの差し出したレンガ壁を受け取ると、肩をつかんでくるっと回れ右させた。

カンナは何度も振り向きながら走っていく。けれど、すぐにその姿はバスの向こうに消えた。

「さて、と」

私は自分の装備を確かめた。今もらったレンガ壁が5枚。メガビーの残りは……2秒。はは、笑っちゃう。

とにかくこの2秒でなんとかするしかないってわけだ。よし。

「ほら、こっちよ」

私は体ごとイリーガルに向き直り、ぱんぱんと手を打った。花びらがセンサーのように動いて、花の芯がゆっくりと私を捉える。照準が合った瞬間、

「食らえ！」
私は残りのメガビーを撃った。向こうの照準が正確なら、真っ直ぐ見合ったこっちだって同じはず。けれど。
メガビーはあらぬ方向へ向かって飛び、すぐに力なく途切れた。
「嘘でしょ。なんで」
呆然と手を見た時に理由がわかった。電脳体と実体のずれだ。メガビーを撃つ時、私はいつも右腕がおでこにとんとぶつかる、その感じでタイミングを測っていた。それで、メガネ越しに狙いを定めながら、つい実体を意識して動いてしまった。痛恨のミスだ。
助けが来るまで、後レンガ壁5枚でしのがなくちゃいけない。でも、たとえ来たところで、こんなやつに勝てるだろうか。みんなを巻き込む前に私がさっさとやられたほうがいいんじゃないだろうか。
それからほんの10分足らず、迷いがあったせいか、壁5枚なんてあっという間に使い切ってしまった。よたよたと進んでいた私の後ろで、最後の壁が壊れる音がした。
「ちくしょう、勝手にしろ」
逃げ切れないと悟って、開き直った私は地面にあぐらをかいた。仕方ない、元々私のせいだし。ヤサコやハラケンまで危ない目に合わせずにすんで、むしろよかったんだ。
イリーガルの赤い花がきれいに開いた。
やられたと思った瞬間、後ろから見慣れない光が飛んで、イリーガルはさっと退いた。数式、記号、図形が円になった複雑な模様が地面に広まる。
「ちっ、けっこう素早いやつだ」
振り返らなくてもわかっていたけど、私は後ろを向いて、そこに立つ人影を認めた。
「イサコ！」
「こんなところで会うとは奇遇だな、ちびすけ」
イリーガルに視線を向けたままで言い放ったイサコは、いつもの不敵な笑みを浮かべた。

第3話　他律型オートマトン“イリーガル”　Ｄ　ｐａｒｔ

イリーガルの放った電脳の散弾が目の前で破裂した。文字列が青い光になって弾け飛ぶ。

「うわあ」

フミエともうひとり、葦原かんなとかいうクラスの女子をかばったデンパが悲鳴を上げた。足の画像が乱れている。

「落ち着け、かすり傷だ。お前たちは先に逃げろ」

素早く鉄壁を投げつけながら私は叫んだ。デンパ、フミエ、葦原、それにもっぱら頭脳戦担当のアキラが壁の内側に隠れた。

「フミちゃん、大丈夫？」

壁の向こうから葦原の柔らかい声が聞こえる。ついさっき、その同じ声が私に助けを求めてきた。「天沢さん、フミちゃんを助けて」って。電脳スキルはほとんどなさそうなのにこんなところにいたのは、フミエの友達だからなのだろうか。優しそうな子だ。そういえば前の学校の知り合いには、あんなおとなしいタイプの子はいなかったな。

「イサコ、なにぼけっとしてんだ。もう弾がねえぞ」

車の影からガチャギリが声を上げた。イリーガルの花弁がぴくりと動いてそっちを狙った。慌てて身を翻したガチャギリを機銃のように連続発射された弾が追いかける。いけない、カンナのことなんて考えてる場合じゃなかった。

「よそ見するな。貴様の相手はこっちだ」

思い切り振るった大剣をイリーガルがかわす間に、ガチャギリの姿は見えなくなった。

イリーガルとの戦いは、予想外に長引いていた。カンナの乱入のおかげで、黒客の連中に作戦を伝える前に戦闘が始まってしまったからだ。わかってたことだが、時間が経つにつれてだんだん敵が有利になる。イリーガルの武器が無尽蔵なのに比べて、私たちのほう

には限りがある。
「これ、形勢不利っすよお。もう退却して出直しましょうよ。ねえ、ダイチ親分もそう思うでしょう」
ナメッチが弱音を吐いてダイチのすそを引っ張っている。
「駄目だ。今を逃したらイリーガルは手の届かない古い空間まで戻ってしまう」
大剣を振り回し、イリーガルを引きつけながら私は答えた。
「そんなこと言ったって、勝ち目があんのか」
ミサイルを発射しながらガチャギリが聞いた。声に不安がこもっている。
「ある。信じろ」
「そんな簡単に信じられるかよ」
首をひねりながら次のミサイルのセットを始めたガチャギリに、
「危ないぞ、油断するな」
「なっ」
私の声が届くか届かないかで、いつの間にか再びガチャギリに狙いを定めていたイリーガルの散弾が発射された。バスの影に飛びのいたガチャギリの様子は見えないけれど、今のタイミングじゃあダメージを食らっているだろう。
「イサコ、そろそろ潮時だ。このまま戦ったって勝てねえ」
ダイチが叫んだ。
「まだだ」
私は叫び返しながら、ムチのように足を振り回すイリーガルの攻撃を避けて、ぼろぼろの廃車のボンネットに飛び乗った。そうだ、こっちに来い。
「逃げるならお前たちだけで逃げろ。勝つ方法はある――あっ」
錆びついたボンネットを踏み抜いて上体がバランスを崩し、私は車の向こうに倒れ込んだ。痛みを感じる暇もなく、駆け寄ってくるイリーガルの姿が見えた。
「イサコ！」

ダイチの声と同時に目の前がぱっと光って、私は目をつぶった。
視界が闇の中にあったのはほんの数秒間だけだったはずなのに、目を開けるとまぶしくて少しくらっときた。
イリーガルは私に襲いかかろうとした姿勢のまま、まるで時間が止まったように静止している。地面に伸びた暗号がその周りを囲っていた。
「おい、無事か」
イリーガルの向こうに、ダイチ、ガチャギリ、ナメッチの姿が見えた。
「なんだ。お前たち逃げ出すかと思ったのに、来てくれたのか」
服についた土をぽんぽんと払いながら、私は意外だった。
「そんなの当り前だろ。俺たちゃ仲間なんだから」
「そ、そう」
ダイチがあんまりなんでもなさそうに答えるから、私はかえって恥ずかしくなってしまった。
「それより状況を説明してくれよ。このイリーガル、どうなってんだ」
「あらかじめ罠を張っておいたのさ。このイリーガルは今、完全にフリーズしてる」
見た目にも明らかに、ダイチ達の肩の力が抜けた。
「それならそうと言ってくれりゃいいのに。無駄に緊張したろうが」
「悪いな。作戦を伝える前にこいつが現れたものだから」
私は喋りながら電脳ポシェットを探って、鍵を取り出した。
「あっ、それ、この間の鍵だな。何に使うのかと思ってたんだが」
興味深そうにのぞきこんだガチャギリに、私はにやりと笑ってみせた。
「お前らを焦らせたお詫びにいいものを見せてあげよう。本当はひとりでやろうと思ってたんだけど」
フリーズしたイリーガルに少しずつ鍵を近づける。５０センチくらいの距離になったところで、にわかに地面に描かれた暗号の光が

強くなった。イリーガルの体が震えて、花が鍵のほうを向く。
「だ、大丈夫なんすか。いきなり復活とかしないっすよね」
「わからんぞ」
からかってやると、ナメッチはびくびくとダイチの背中に隠れた。
「人が悪いぜ。脅かすなよ」
ダイチは精いっぱい声を張ったけど、本当はナメッチと同じくどこかに隠れたい気分なのだろう。
私は鍵を握った手を更に前に出した。イリーガルがぱきっと乾いた音を立て、不意に花の真ん中が四角くせり出した。3人が目をみはる。
差し出した鍵に反応して、四角の中心が鍵穴の形に光った。ためらいなく、私は鍵を差し込んだ。具合を確かめて小刻みに動いていた手は、すぐにくるりと上を向いた。
がちゃり。
鍵の開く音がやけに大きく響き渡った。空間の何かが明確に変わった。
「ねえ、何なんですか、それ」
ナメッチがまた首を突き出した。
「見てのとおりさ。引き出しだよ、記憶のね」
鍵を引くと、張り出した四角形の中からひと回り小さな四角が、それこそ引き出しのように引き抜かれた。
「あった。ビンゴだ」
ガッツポーズでもしたい気分だった。いや、ひとりだったら多分していたろうけど、黒客の3人が見ている前ではさすがに気後れがした。
「あったって、一体何が」
その3人が近寄って、黒い引き出しの中から私が取り出したものに目を凝らした。
暗号とよく似た、文字と図形が立体的に組み合わさった不思議な電脳物質だ。

「『パスワード』だ。私はこれを集めてる」
私の手の上で、パスワードは時々形を変えながら、ゆるやかに回っている。
「何故そんなものを集めてる。何の役に立つんだ」
ガチャギリがいぶかしげに聞いて、パスワードに見入っていたダイチとナメッチの表情も警戒の風になった。
「そんなに怪しむなよ。私は純粋に古い空間に興味があって調べてるんだ。それに、金儲けにもなる」
指をわずかに動かすと、まるで応答するかのようにパスワードの一部が整列した。
「よし」
言葉と同時にガチャギリのすぐ隣、何もない空間からメタバグがこぼれ落ちた。
「こっ、これは!?」
「パスワードは古い空間の底からやってきたイリーガルの記憶、まあ地図みたいなものだ。これがあれば、普通のメガネでは到達できない空間の深部にまで行くことができる。逆に古い空間の一部を呼び出すこともな。今のはガチャギリ、お前の横に古い空間を形成したんだ。もちろん耐え切れなくて一瞬でメタバグに変質したけど」
「すげえ」
「もっとやってくれ」
3人は一斉に騒ぎ出す。
「駄目だ。やり過ぎるとパスワードが消耗して使い物にならなくなる」
私はゆっくりとパスワードを電脳ポシェットにしまい込んだ。
「だが、複数のパスワードを集めれば、古い空間に自由に行き来できるようになる。そうすればメタバグも取り放題だぞ」
「取り放題!」
ナメッチが鼻息を荒くした。こいつ、微妙におばさんスペックがあるな。バーゲンとか福袋とかに弱そうだ。

「すごいっすよ。早速帰って次のイリーガルを探しましょう」
「ああ――」
しかしそこで、頭の中を何かがくんと走った。
「だが、簡単には帰れないかもしれない」

第3話　他律型オートマトン“イリーガル”　Ｅ　ｐａｒｔ

「フミエちゃん！　葦原さん！」
デンパとアキラに付き添われて、というよりようよう支えられてやってきたふたりを見つけたのは、僕よりヤサコのほうが先だった。
「ヤサコ……」
精も魂も尽き果てたといった風のフミエがよろけながら近づくのをヤサコがしっかり受け止めた。
「フミエちゃん、どこに行ってたの？　何があったの」
「そ、それが」
「話は後です」
突然アキラが割って入った。
「ハラケンさん、助けてください。黒客が大変なんです」
「えっ」
わけがわからず、戸惑った僕はフミエのほうを見た。
「――行ってあげて」
いつもなら大反対するはずのフミエはうつむいて一言、そう漏らした。
「私たち、黒客に助けられたの。フミちゃんとイリーガルに襲われて、研一を呼びに行く途中で天沢さんと会って、私が頼んだの」
黙り込んだフミエの代わりにカンナが説明した。
「わかった」
答えるなり僕は駆け出していた。
「待って、私も行く。デンパ君、ふたりを連れてここを出て。アキラ君は道案内お願い」
ヤサコがてきぱきと指示を出したので、僕は内心驚いた。
「ヤサコってけっこうしっかりしてるんだね」
追いついて隣を走り出したヤサコに聞くと、
「歳の離れた妹がいたらこんな風になるものよ。ハラケンって多分

ひとりっ子でしょ」
なかなか鋭い指摘をされてしまった。
「でも今はそれどころじゃないわ。アキラ君、黒客はイリーガルと戦ってるの？」
アキラはぶんぶんとかぶりを振った。
「違うんです。さっき入った連絡だと、イリーガルはやっつけたみたいなんですけど」
「そうなの？　それじゃ一体何が」
「今度はサッチーが現れたっていうんです。それも2体」
ヤサコと僕は顔を見合わせた。

サッチーと黒客の間でどんな戦いが繰り広げられたのかは知る由もないけど、僕たちが駆けつけた時には、黒客は防戦一方になっていた。無理もない。サーチマトンの基本スペックは並のメガネ使いが束になっても敵わないレベルだ。ついこの間イサコにやられるまでは、サッチーが中破以上のダメージを被ったことすら、1度もなかったのだ。
廃バスの1台に立てこもって、黒客は最後の抵抗を試みていた。鉄壁は使い切ったのかふたつある乗降口をレンガ壁でふさいで、窓から侵入しようとするキュウちゃんをカンシャクと、初めて見る青い光――多分あれがイサコの暗号ってやつだ――で撃退している。
「イサコ！」
バスの近くに駆け寄ったヤサコが叫んだ。
「ヤサコか！？　貴様、何しに来た」
バスの窓からイサコの顔がのぞいた。すぐに寄ってきたキュウちゃんを、無駄のない動きでフリーズさせる。
「あなたを助けに来た」
助けに来たというよりは倒しに来たといったほうが似合いそうな強い視線で、ヤサコはイサコをにらみつけた。
「助けに？　はっ、片腹痛いな」

イサコも負けずにヤサコをにらみ返す。
「この状況でお前にどうやって私たちを助けられる？　作戦でもあるのか」
からかうように言われて、ヤサコは目をそらした。
「それは……。でも、メガビーは1分あるし、鉄壁だって何枚か持ってる」
「そんなものでサーチマトンに勝てるか！」
イサコがぴしゃりと言ってのけ、ヤサコは押し黙った。
「お前はいつもそうだ。自分だけいい子ぶって、できもしないこと言って。他人に尻拭いさせても平気で」
喋っているうちに感情が激してきたのか、イサコの声は次第に昂ぶり出した。
「その自己満足のせいで他人が泣いてるかもしれないなんて、お前はこれっぽっちも考えてないんだろ」
僕はおかしな気がした。ヤサコとイサコは知り合って間もないはずなのに、イサコの言いようはまるで昔からヤサコを知っているみたいだ。
「構わないさ。お前はそうやって善人ぶって生きてろ」
叫び声が途切れた後で、不思議な静寂が訪れた。言い放ってしまってからイサコは一瞬後悔するような顔をして、それでもヤサコから視線をそらさなかった。言われたヤサコのほうは、胸をつかれたような、それでいて心に刺さったものの正体をつかみかねているような、そんな顔つきをイサコに向けていた。
突然ばきっと音がして、続いて悲鳴が上がった。
「イサコ、駄目だ。もう壁がもたねえ」
バスの乗降口に取りついたサッチーの手がレンガ壁を貫通していた。カエルのように吸盤のついた細長い指が、うねうねとバスの中に伸びる。
「こいつ」
切りつけたイサコの動きを軽くかわすと、吸盤が大剣に吸いつい

た。
「しまった」
持って行かれそうになる剣を追ってイサコの体が前に出た時、もう1枚の壁が吹き飛んで、2体目のサッチーがバスに上体をねじ込んだ。
「ひええ」
「もう駄目だあ」
バスの中は大騒ぎになっている。
「止まれ、止まりなさいよ」
ヤサコはさっきからサッチーにメガビーを浴びせ続けているが、サッチーには全く効いていない。
「ヤサコ、サッチーは僕が引き受けた。キュウちゃんを頼む」
「えっ？」
振り向いたヤサコの額にメガビーのメタタグをぽんと貼って、僕はバスの前に走り出た。
とん、とサッチーの背中に軽く手を置くと、バスに突っ込まれていた頭がずるずる引き出されてこっちを向いた。顔の前に手を突き出して、
「待て」
ひと声かけるとサッチーは嘘のようにおとなしくなった。同じ方法でもう1体の動きも止める。
「ハラケンさん、これって……」
アキラが目を丸くしている。バスの中の4人も同じように、呆然と僕を見ていた。
「ごめん、説明してる暇はない。僕がサッチーを止められるのは1分間だけなんだ。今のうちに早く逃げろ」
「よし。引き上げだ」
一番早く反応したイサコが黒客に号令をかけて、4人はバスから飛び出した。
「ヤサコ、行くよ。サッチーは視界内の異物排除を優先するから、

検索範囲外の、バスの墓場の外まで出れば追ってこない」
「わ、わかった」
7人は同じ方向に駆け出した。
「原川、だったな。1組の」
走り始めてすぐ、イサコが話しかけてきた。
「今日、私たちはフミエとカンナを助けた。その後でお前に助けられた。貸し借りはなしだ」
「OK」
僕が笑うと、イサコもくくっと声を立てた。
「ま、そのうち私たちの貸しばっかりになるだろうけどな」
何か答える前に、黒客の5人は分かれ道を折れて、僕たちとは別の方向に走っていった。
カンナとフミエのところに戻る途中、ヤサコはひと言も口を利かなかった。僕のほうからも何も聞かなかった。ヤサコとイサコがお互いどう思い合っているのか、僕にはわからなかったから。それはもしかすると、本人たちにもわからないことなのかもしれなかった。

第3話　他律型オートマトン“イリーガル”　Ｅ　ｐａｒｔ（後書き）

第3話は今回で終了です。次回、第４話をお楽しみに。

第4話　夢幻へのパスポート　Ａ　ｐａｒｔ

昔の人の言葉によると、全ての道はローマに通ずるそうです。

スポーツなんかやってるとよくわかるけど、人には上り調子、下り調子ってものがある。上りの時は、普段なら絶対勝てない相手をやっつけちまったり、どうしても超えられなかったマイベストを軽く上回ったりする。下りの時は正反対だ。格下相手に苦戦したり、つまらない原因で怪我したり、ろくなことは起こらない。

俺たちひとりひとりだけではなくて、チームとかクラブだって同じだ。何がいいたいかといえば、イサコが来てから、俺がリーダーを務める大黒黒客は上り道に入ったってことだ。

「今日の戦果も上場だな」

幸運の元が笑顔を浮かべながら立ち上がった。広げた手のひらの上から真っ直ぐ、赤と青の複雑に絡み合った、おもちゃみたいに小さな光るはしごが伸びている。

「それもパスワードなの？　きれいだねえ」

デンパが興味深そうにのぞきこんだ。

「そうだ。パスワードを持ってるイリーガルはそう多くないんだけど、２回連続当りなんて運がいいぞ」

「バスの墓場のやつは白っぽかったけど、今日のはカラフルだね」

「ああ。パスワードにもいろんな種類があるんだ。今度見せてやるよ」

「本当かい。ありがとう」

デンパはおっとりと笑ってから、小さく呟いた。

「でもパスワードを取られたイリーガルはどうなるんだろう」

「それもケースバイケースだな。なんともない時も、外見が変わったりする時もあるし、中にはこの間みたいなのもある」

バスの墓場にいたイリーガルは、パスワードを抜き取られると、はらはらと花を散らして朽ちてしまったのだ。
「そう……。あんまりいじめたくはないんだけど」
たった今パスワードを抜き取られたイリーガルに、デンパは不安そうな視線を向けた。
ちょうどその瞬間、イリーガルが脈打つように膨れた。
「何だ!?」
ところが、皆が構えた時には、強い光だけを残してイリーガルの姿はどこにもなかった。
「この子も消えちゃったのか」
デンパはぽつりと言って、それきり黙りこんだ。イサコは声のかけ方に困ったように視線をそらせてごそごそと電脳ポシェットを探ると、パスワードをしまい込んだ。
「アホかお前は。イリーガルなんてウィルスみたいなもんだろ。同情するようなものじゃないぜ。それよりメタバグだよ。イサコ、この間みたいにパスワード使ってメタバグを作ってくれよ」
ガチャギリが割り込むと、イサコはちょっと迷うような様子だったが、すぐに首を横に振った。
「悪い。このタイプのパスワードは私も初めてだから、使い方がよくわからないんだ。家に持って帰って調べてみるよ」
「そんな都合のいい言い方して、お前メタバグを独り占めする気じゃないだろうな」
ガチャギリは帽子から片方だけ見せた疑い深そうな目を光らせる。
「そうっすね。パスワードは黒客の共有財産にしたほうがいいんじゃないすか」
例によってナメッチがガチャギリの尻馬に乗る。イサコは慌てて電脳ポシェットに両手をかぶせた。
「何言ってるんだ。共有財産なんていったって、大体お前たちじゃパスワードの使い方もわからないだろう」
「そりゃそうだけど」

ガチャギリとナメッチは納得の行かない顔をしている。
しょうがねえな。こういう時こそリーダーの出番だ。
「じゃあさ、こうしようぜ。イサコはパスワードの解析が終わったら、俺たちに報酬のメタバグを渡す。それまでは毎日学校にパスワードを持ってきて見せてくれればいい。どうだ」
イサコはちょっと嫌な顔をしたが、しぶしぶうなずいた。
「まあ仕方ないな。その代わり、これからもパスワードは私に管理させてくれよ」
「おう、いいぜ。ガチャギリ、ナメッチもそれでいいだろ」
「ああ。俺はメタバグが受け取れれば文句ねえ」
「ラジャっす」
その時、見張りに立っていたアキラが駆け戻ってきた。
「そろそろ引き上げです。ウチクネ先生が来ますよ」
「よし」
皆と一緒に走り出そうとして、俺はふと足元で光るものに気がついて拾い上げた。
青いメタバグだ。見る角度によって不透明になったり、光を通して輝いたりする。
「おーい、何やってんだ」
廊下の向こうからガチャギリが呼んだ。
「おう、今行く」
イサコに見せたら没収されるかもしれない。取りあえず今日1日は預かっとくか。俺は何の気なしにメタバグをポシェットに入れた。

次の日の放課後、俺はガチャギリを教室に呼んだ。ひとりで来てくれって伝えておいたのに、教室に現れたガチャギリの後ろからデンパとアキラが入ってきたから、俺は焦ってしまった。
「あれ？　今日は何かあったっけ。パスワードの解析はまだだぞ」
案の定イサコが不思議そうに寄ってくる。
「ち、違うちがう。ここんとこイリーガルを追いかけてばっかりだ

ったから、たまには男だけでサッカーでもやろうと思ってさ」
「ふうん、そう。じゃあ私は図書室で本を返して帰るから」
イサコは少しだけ寂しそうな顔を浮かべて教室から出ていった。
後ろ姿がすっかり見えなくなるのを確かめて、俺は小声で文句を言った。
「おい、ガチャギリひとりで来るように頼んだろ。イサコに怪しまれるじゃねえか」
「悪いな。珍しいメタバグの話、ついこいつらに聞かれちまって」
「親分、独り占めはずるいっすよ」
いつの間にか隣にいたナメッチまで恨めしそうに俺を見る。
「そんなことしねえよ。ただ、イサコに見つかると取り上げられるかもしれないからさ」
「お前、リーダーだろうがよ。情けねえなあ」
ガチャギリが呆れたように溜息をついた。言い返せなくて、俺はちょっといらついた。
「うっせえ。とにかくメタバグだよ」
乱暴に電脳ポシェットから引っ張り出したメタバグは、心なしか昨日よりも青が濃くなっている気がした。
メタバグを受け取ったガチャギリは珍しく帽子を取ってメタバグをためつすがめつした。
「へえ、確かに珍しいな。お前たち、これ知ってるか？」
他の3人もメタバグに見入りながら、けれど揃って首を振った。
「やっぱりそうか」
俺も昨日ネットで探したけど、同じタイプのメタバグはなかったのだ。
「ちょっと待ってくれ。一番メタバグの揃えがいい換金サイトを調べてみる」
ガチャギリは大きめのディスプレイを立ち上げて、メタバグを検索し始めた。さすがガチャギリが一番というだけあって画面にはたくさんのメタバグが並んでいるが、今目の前にあるのと似たものは

見つからない。
「うーん、ねえなあ」
「おかしいわねえ」
頭越しの言葉にこっくり相槌を打ってから3秒で俺は飛び上がった。
「フミエ！　何してやがる。部外者はあっち行け」
「他人に知られたくないなら教室以外の場所に行きなさいよ。それにそのサイト、見ちゃいけないやつじゃない。ウチクネ先生に言いつけるわよ」
フミエがまくしたてると、ウチクネが担任のガチャギリが渋い顔をした。
「まあまあフミエちゃん、そう険悪にならずに」
フミエの後ろからついてきたヤサコがあいまいに笑って、
「実はねダイチ君、それとそっくりのメタバグ、フミエちゃんも拾ったのよ」
「えっ？　本当かよ」
「嘘ついてどうすんのよ」
フミエが電脳ポシェットから出した手を開くと、確かに俺のとよく似た、でも赤い色のメタバグが現れた。
「お前、これをどこで？」
「旧校舎への渡り廊下。今朝の掃除の時に見つけたの」
昨日の光景が頭をよぎった。渡り廊下って、俺たちがイリーガルを捕まえた場所だ。
「あれ？　このふたつ、ぴったりくっつくんじゃねえか」
俺とフミエのメタバグを替わりばんこに眺めていたガチャギリが声を上げた。確かに、よく見ると切り口の形がそっくりだ。
ついふたりの手が近づいた、その時。
磁石が引きつけ合うようにふたつのメタバグがくっついて、突然まぶしく輝いた。
「わっ」

間近でフラッシュでもたかれたみたいな光に、全員が思わず顔を覆った。間近で見ていた俺は、光がやんだ後もしばらく目を開けられなかった。

何だったんだ、今の。何度も強くまばたきをした後、涙をこぼしながらようやく薄く開いた俺の目に、きょろきょろ周りを見回すみんなの姿が映った。

「あれ？　ない」

目のふちに涙をためたフミエが手元を覗き込んだ。はっとして見ると、フミエのも俺のも、赤と青のメタバグはどこにも見当たらない。

「そんなバカな」

それからが大騒ぎだった。放課後のこの遅い時間まで教室に残っていた何人かの生徒のいぶかしげな視線を浴びながら、俺たちはばたばたと机の下、引き出しの中はおろか、ごみ箱の底、掃除用具入れの中にいたるまで教室中を捜索したけど、メタバグはついに見つからなかった。

「あんたたち、弁償しなさいよ」

ロッカーに頭を突っ込んでいたフミエが立ち上がった。髪に大きな綿ぼこりを揺らしながら、でもその表情はふわふわしたほこりに全然似合わない険悪さだった。

「無茶苦茶言うなよ。そっちこそ弁償しやがれ」

俺も負けずに思いっきりフミエをにらみつけた。

「何でよ。元々あんたが教室でメタバグを見せびらかしてたから悪いんじゃない」

「呼んでもないお前がしゃしゃり出てきたのが悪いんだろ」

「あんたが」「お前が」

お互い1歩も譲らない。視線が火花を散らした。

「ねえ、ふたりとも。別にどっちが悪いってわけでもないじゃない」

カンナが俺たちの間にするりと割って入った。避けようとしたフミエの頭を柔らかく押さえて、

「フミちゃん、髪にほこりがついてるわよ」
わざとゆっくり指を動かす。タイミングを外されたフミエは、抗議するように荒い鼻息をひとつついて、でもその息はなよなよと頼りなく聞こえなくなって、それですっかりおとなしくなった。
「ダイチ、しょうがないさ。メタバグはまた探せばいいよ」
デンパに肩を叩かれると、行き場を失った俺の闘志ももやもやとかすんだ。
「ほら取れた」
カンナがふいっと吹いた手のひらから、軽い綿ぼこりがくるくる宙を舞った。俺はなんとなく空中を流されるほこりを目で追っていた。
「もういいわ。バカがうつる前に早く帰ろうっと」
いつの間にかフミエはもう自分の席に戻って帰る準備をしていた。負けじと俺もランドセルをつかんで立ち上がる。
「おい、俺たちも行くぞ」
大またで教室のドアに歩き出すと、フミエも慌てて反対側のドアに向かう。
「真似しないでよ」
「お前こそ先回りするなよ」
とげとげしい言葉を交わしながら、一気にドアを開いた。
春の日差しは変わりやすいけれど、春霞っていうのか、もやもやした空気を暖めて照る日は他のどの季節にもないのんびりした気持ち良さで、普段ならあくびのひとつも自然と出てくるってもんだ。だがそんな光景を目の前にして、その時の俺は言葉も出せずに口を開け閉めしていた。
つまり、教室の外には青空が広がっていた。
「廊下はどこへ行った」
間抜けな自分自身の声に押されるように、俺は1歩踏み出していた。
ほこりっぽいコンクリートを踏みしめるじゃりっという音と固い

質感が伝わった。西に傾いた太陽が床を、校庭を、街並みを斜めに照らし出す。ここ、屋上だ。

「ダイチ！　おい、すぐ戻ってこい」

驚くのも忘れて景色を見回していた俺の背中に、妙に焦ったガチャギリの声が届いた。振り向くとガチャギリは腕に真っ黒い何かを抱えている。

「その手のやつ、何だ？　イリーガルでも出たのか」

「バカ、よく見ろ。これはお前の体だよ」

「はあ？　お前なに寝ぼけてんだ。俺はここにいるだろ」

その時、ガチャギリを押しのけるようにハラケンが顔をのぞかせた。

「ダイチ、そっちにあるのは君の電脳の体だけだ。電脳体分離が起きたんだよ」

教室に戻ると皆が同じように、難しい顔をして考え込んでいた。フミエがやってきて俺の肩を叩いた。

「あんたも電脳体分離しちゃったの」

フミエの後ろで、ヤサコとカンナが黒くなった体を椅子に腰かけさせていた。時々ノイズの走る体には『ＮＯ　ＤＡＴＡ』の文字が躍っている。

「一体どうなってんだ、これは」

「だから、電脳体分離よ。電脳の体と本当の体がすっかり分離して、その上感覚が電脳体にくっついていっちゃってる状態。この間私の体がずれたの、あんたも見たでしょ。あれの極端なやつらしいわ」

「マジかよ。電脳体が離れるなんて、都市伝説かと思ってたのに。さっきのメタバグのせいなのか」

呟いた途端、何人かの生徒がきっとこっちをにらみつけた。

「ちょ、この間抜け。余計なこと言うな。教室から出ると電脳体が分離しちゃうから、みんな帰れなくなって困ってるのよ」

フミエが俺の口をふさいだ。

「ってことはこの中で分離を起こしてるのは」
「ダイチ、フミエ、それに僕だけだ、今のところ」
ハラケンが落ち着いた声で答えた。
「とにかく情報を整理して、これからどうしたらいいのか考えようよ」
顔を見合わせた後でため息をついて、俺とフミエはハラケンの後に従った。

「確かだとは言えないけど、この事態はやっぱりさっき消えたっていうメタバグ、それに君たちが昨日捕まえたイリーガルと関係があるんだろうね」
俺たちの話を聞いた後、腕を組んだハラケンは天井を見上げながら言った。
「それって、昨日のイリーガルがまだどこかにいるってこと？」
デンパがどこか安心したような声で聞く。
「うん。というよりは、ダイチとフミエの拾ったメタバグがイリーガルの変化した姿だったんじゃないかな」
「そんなことがあるんすかねえ」
首をひねるナメッチの後ろでアキラが手を上げた。
「それ、本当かもしれません。昨日イリーガルの消えた時と、今日メタバグを合わせた時、同じ光が見えましたから」
「仮にそうだとすると、今の空間異常はイリーガルが引き起こしてるのかしら？　一体何のために」
ヤサコの疑問をハラケンが引き取った。
「多分古い空間に帰りたがってるんじゃないかな。前に小此木先生が話してくれたろ。イリーガルは空間の断裂面から現れるって。きっと今度のイリーガルは自分で空間の亀裂を作る力を持っていて、そうやって古い空間を探しているんだ」
「それならそれでさっさと戻ればいいのに。何が楽しくてこんな、学校中を荒らしてるのよ」

フミエの教室を出た先は用務員室だったそうだ。それにハラケンも、自分の教室を出たつもりが窓から俺たちのクラスに入っていたらしい。校内全体の空間がおかしくなりかけているのだ。

「確かに。イリーガルが古い空間に帰ればこの現象も収まると思うんだけど。何か戻れない理由があるんじゃないかな」

ハラケンの言葉を聞いて俺ははっとした。

「パスワードだ」

「ダイチ親分、それ言っていいんすか」

「非常事態だ。しょうがねえだろ」

小さく袖を引っ張ったナメッチを諭してからハラケンに向き直る。

「イサコのやつ、イリーガルから『パスワード』ってのを抜き取ってたんだ。それが古い空間の地図みたいなもんだ、って話してた」

「そうか、それなら納得がいくぞ」

ハラケンがひざを打った。

「パスワードをなくしたせいで、イリーガルは帰りたくても帰れなくなってしまったんだ。だから空間を滅茶苦茶に切り貼りして出口を探してるんだろう」

「じゃあイリーガルをやっつければ空間も元に戻るのね」

フミエは早くもメガビーの残時間をチェックし始めたが、ハラケンは首を振った。

「いや、話はそう簡単じゃない。単純にイリーガルを倒しただけじゃ、この空間の乱れは治らないかもしれない。そうなったら、空間管理室がサッチーにフォーマットさせるまで待たなくちゃならない。電話はさっきから不通だから、まず空間管理室が異常を察知して、そうしたら学校は文部局の管轄だから空間管理室から郵政局経由で依頼して、その後で文部局から教育委員会の情報技術担当への指示が必要になるんだ。許可を得てサッチーを侵入させるのにかなり時間がかかるし、その上僕たちもフォーマット光線を浴びる破目になる」

「もういい、やめましょ」

げんなりと肩を落としたフミエの後ろから、急にガチャギリがハラケンをにらんだ。
「それにしてもハラケン、妙に詳しく知ってるじゃねえか。そういえばこの間もサッチーを止めてたし、お前空間管理室の回しもんかなんかじゃねえのか」
「ち、違うよ。親戚に空間管理室勤めの人がいるんだ。それだけだよ」
「それだけでサッチーを操る力まで持てるか？」
突っ込むガチャギリに、俺は手を振った。
「おいガチャギリ、後だ、後。今は争ってる場合じゃねえだろ。ハラケン、何かうまい解決策はあるのか」
「あるよ。イサコの持っていったっていうパスワードを返せばいい。そうすればイリーガルはまず空間を正常に戻して、その中から古い空間への帰り道を見つけるはずだから。ただイサコがまだ校内にいるかってことが問題だけど」
「多分大丈夫です。メタバグが消えたのはイサコさんが出ていってすぐだし、イサコさん、図書室に行くって言ってたし」
アキラの言うのを聞くと、フミエは何度か軽くうなずいた。
「仕方ないわね。とにかく手分けしてイサコとイリーガルを探すわよ」

第4話　夢幻へのパスポート　Ｂ　ｐａｒｔ

本当は既に電脳体分離している3人だけで校内を探索しようと思っていたのだけれど、僕の意見にはダイチとフミエをのぞくみんな、本当に全員が反対した。それで結局、アキラを留守番に残して、ヤサコとフミエ、ダイチとナメッチ、ガチャギリとデンパ、そしてカンナと僕が組になって、教室のそれぞれ別の出口から電脳空間に入ることになった。

最初に入った空間に愛着が湧くのかどうか知らないけど、ダイチは屋上へ、フミエは用務員室へと向かっていく。僕も1組の教室に戻ろうかとも考えたけど、窓を抜ける時に電脳体分離したカンナの体が転がり落ちたら大変だからやめて、窓側の一番後ろ、ベランダに出る扉をくぐった。

覚えず息が漏れた。それで、自分が息もつづめるほどに緊張していたんだとわかった。遅れて入ってきたカンナの顔を見たら同じように口を閉じて、それぱかりか目までぎゅっとつぶっていたから、吐いた息はそのまま忍び笑いになった。

カンナは僕が笑っているのに気づくと顔を赤くした。

「何よ、自分のほうが慣れてるからって」

「はは、ごめん」

けれど、カンナの言葉にも軽い気持ちが見え隠れしたのは、ここが僕たちに親しい場所だったからだろう。

僕は深呼吸をひとつした。もちろん電脳体に嗅覚はないし、そもそも呼吸しているのは生身の体のほうだ。それでも鼻腔にひなたくさいような乾いたほこりと少しのかび臭さの、独特の空気が流れ込んだと感じたのは気のせいだろうか。

図書室だった。イサコがまだいるかもしれない。

「やった。私たち当りだったかも」

カンナが僕の前に立った。カンナは僕とふたりだと普段より活発

になる。小さな背中が本棚の向こうに消えてしまう前に、僕は後を追った。

「カンナ、待ちなよ」

「研一こそ急いで」

カンナは小走りにぱたぱたと音を立てた。場所を考えたら本当はNGだけど、場合が場合だし、司書の先生はメガネユーザーじゃないから聞こえないだろうし、まあいいか。

「天沢さん、天沢さん……イサコちゃん。聞こえないの」

第三小の図書室はけっこう大きいし、本の量も多い。背たけよりも高い本棚が何段も連なっている。そんな中でカンナの呼び声は無数に並んだ本たちに吸い取られて、心なしか寂しそうに聞こえた。

「イサコ。どこなんだ、聞こえたら返事してくれ」

僕も呼んでみたけれど答えはない。本棚の間の通路をひとつひとつ見て回っても、姿を見つけることはできなかった。

まずいな。やっぱり帰ってしまったんだろうか。それとも図書室を出たどこかで電脳体が分離して、僕たちと同じように迷路と化した校内をさまよっているのだろうか。

ふと気がつくと、カンナの声が聞こえなくなっていた。

「カンナ？」

耳を澄ませば、カンナの返事の代わりに、ずうっと遠いところから響くような低いざわめきが届いた。何の音だろう。まがまがしい、とまで言ったら言い過ぎかもしれないけれど、聞く者の不安をあおる音だった。

「カンナ？どこ」

ふいと風が行きすぎて僕の言葉をさらった。いや、気のせいだ。電脳体が風を感じるわけない。

顔を上げた僕の目に、異様な光景が映り込んだ。

僕の前には、視界の果てまで連なる本棚と本棚に挟まれた廊下があった。慌てて振り向けば後ろも同じ。いつの間にか、僕は無限の本の回廊に立っていたのだ。

「イリーガルの力のせいだ、きっと」
ひと言ひと言を区切るように、僕はゆっくりと呟いた。
慌てちゃ駄目だ。所詮は電脳世界の話。きっと誰か来てくれる。もしみんなが僕と同じように迷っていても、最悪空間管理室が異常を察するはず。待てばいい。そうすれば必ず解決する。
でも。もうひとりの僕が不意にささやいた。今僕の心は電脳体にある。元の体に戻らないままでサッチーにフォーマットされたら、電脳体と一緒に僕の心まで消されてしまうんじゃないか。
いや、そんなはずはない。落ち着いて出口を探さなきゃ。嫌な考えを振り切って、僕は歩き始めた。
5分ほど進んでも、周りの光景に変化はなかった。2メートル以上ありそうな高い書架にぎっしりと詰め込まれた本がえんえんと続いている。もちろんカンナの姿もない。
空間のバージョンは5．15から5．17の間を行ったり来たりしている。どうやらここは、新しい空間と古い空間の境目にあるらしい。いくら歩いても空間の深度がある程度以上変わらないのは、この回廊が空間の境界と並行して伸びているのか、それともループ構造になっているのかもしれない。どちらにしても、歩き続けても何も起こりそうになかったから、僕は立ち止まった。
他にここを出る方法はないのか。腕を組んで考えるうちに、本読みの修正でつい目がぎっしり並んだ背表紙を追っていた。でも駄目だ、どの本も皆ひどい文字化けを起こしていて、タイトルを読み取れるものさえ見つからない。上の段から1冊ずつ眺めて、中ほどにさしかかってもまともな本はまるでなかったから、半分うんざりして下のほうはざっと目を流すだけにした、つもりだった。
「何だ、これ」
上製本ばかりの本棚に妙に異質な、書類ファイルのようなものが、一番下の段の隅のほうに収まっていた。タイトルは他と同じく読み取れないけれど、ささやくような第六感の閃きを感じた僕は、ファイルに手をかけた。空間の設定によっては背表紙のテクスチャしか

再現されてないんじゃないかと思ってたけど、薄いファイルは苦もなく抜き取ることができた。

中身をめくると、やっぱりほとんどは文字化けしていたけれど、数ページだけまとまって読める部分があった。

「”あっち”についての噂」

その最初の1ページには、小さな文字でそれだけが書かれている。

「古い空間のずっと深くに”あっち”がある」

次のページには太い文字でそう記され、続いて子供たちの間で広まっている”あっち”についての噂話が箇条書きにされていた。別に目新しいものはない。僕もどこかで聞いた覚えのある噂ばかりだ。もちろん、これまでの僕はそんな話を全然信じていなかった。いくらフォーマットしてもいつの間にか現れる古い空間は不思議だし、ものすごくバージョンの古い空間には、今使っているメガネは対応していないのも確かだ。けれど、だからといってそこを神秘の聖域みたいにいうのは、ばかばかしい想像だと思っていた。今までは。

「”あっち”の奥深くにはミチコさんが住んでいる。ミチコさんの正体は誰も知らない。ミチコさんは”あっち”に迷い込んだ子供たちを引き留める」

心臓がどくんと鳴った。まさか、僕がこの本の廊下から抜け出せないのも、ミチコさんの力のせいなんじゃないか。

「ミチコさん自身には”あっち”と新しい空間をつなぐ通路を閉じる力はない。だから、ミチコさんは子供たちをその場に留まらせるために、何でも願いを叶えてくれるという。”あっち”にいる限り、子供たちの願いは何でも、いつまでも叶えられる。だから、”あっち”に入ったきり帰ってこない子供もいるらしい」

ということは、この閉じた廊下はミチコさんとは関係ない。そこには少しほっとして、でもその後の文章が気にかかった。”あっち”にいる限り、どんな願いでも叶えてもらえる。

「”あっち”に入った子供の名前や歳、家族や住所から、心の中に隠された望みまで、ミチコさんは何でも知っている。だから古い空

間にいる時は気をつけなければならない。知らず知らずのうちにミチコさんに招かれているかもしれないから。欲しかったものを見つけたと思って進んでいくうちに、後戻りできなくなってしまうかもしれないから」

再び恐れが、心の中に黒い染みを作った。

「古い空間で耳を澄ましてはいけない。万一ざわめき声を聞いてしまったら、決してその方向に進んではならない。ミチコさんの呼ぶ声に誘われて”あっち”に入ってしまったら、戻ってこられる保証はない」

そう書かれるとかえって僕の聴覚は鋭敏になって、最初から聞こえていた低くどよめく声が、一段と大きくなったような気がした。さらに耳をそばだてれば、意味のないささやきの中からひとつの声が聞こえてくるようでもあった。原川研一、私はあなたも知っている。あなたがどんな暮らしを送って、何が好きで何が嫌いか、あなた自身が気づいていない、あなたの望みも。教えてあげる、あなたの願いは――

「ハラケン、どうしたんだよ！」

いきなり肩を揺さぶられて見上げると、ガチャギリとデンパが僕の顔をのぞき込んでいた。本棚の回廊はいつの間にか消えている。

「ああ、ちょっと変なファイルを見つけて夢中になっちゃって」

「ファイル？　お前の持ってるそれか？　読めるところなんてなさそうだが」

言われて手元を見ると、ファイルは一面の文字化けに覆われていた。

「あれ、おかしいな。さっきまで少しは読めたんだけど」

「ねえふたりとも、多分こっちだよ」

デンパがカウンターのほうを指差した。

「わかった、ちょっと待て」

ガチャギリはデンパに手を上げてから、

「デンパのやつ、イリーガルの声が聞こえるって言うからな、俺は

それにくっついて進んでるんだ。お前も一緒に行くか」
僕は少し迷った。
「ふたりとも、どこかでカンナと会わなかった？　はぐれちゃったんだ」
聞くと、ふたりは首をひねった。
「いや、見かけなかったなあ」
どうしよう。今はイリーガルを探すよりカンナが心配だけど、だからといってカンナを探す方法があるわけじゃない。ガチャギリ達と一緒に行ってもカンナを見つけ出す可能性は同じだ。
「わかった。僕も行くよ」
それでデンパを先頭に立て、僕とガチャギリは並んでその後に続いた。

図書室を出た後は、校庭前の水飲み場、1年2組の教室、会議室を抜けると、見慣れた僕たちの教室のベランダだった。教室の中で暇そうに待っていたアキラが駆け寄ってきたけど、窓が開いているのに音がまるで通らない様子だった。
「状況はどうですか」
アキラはメモ帳を開いて筆談で聞いてきた。
「今イリーガルを探してる。もう少し待ってくれ」
ガチャギリがそう書いたウィンドウを見せると、アキラはがっかりした風で、
「なるべく急いでください」
とだけ書いてとぼとぼと戻っていった。僕たちも顔を見合わせ、溜息をついてデンパのほうを見て、それで固まった。
「おい待て、お前何してる」
デンパはベランダの柵を乗り越えて外に飛び降りようとしていた。
「道がこっちにつながってるんだよ」
デンパは何でもなさそうに言って、ひょいと柵を越えた。
「わっ」

僕たちは慌てて柵に駆け寄った。下に見える校庭の花壇を眺め回したけど、デンパの姿はどこにもない。
「どうするよ」
何でも自分ひとりで決めるガチャギリが、この時ばかりは迷いの視線を僕に向けた。6年の教室は3階だ。生身で飛び降りたら怪我なしではすまない。電脳体だけなんだから大丈夫と理屈ではわかっていても、やっぱり恐いものは恐い。だけど、
「仕方ない。デンパだけ行かせるわけにもいかないし」
僕は覚悟を決めて柵に足をかけた。
「うー、そうだよな。まあいいや、なるようになれ」
言った途端ガチャギリは柵の上に飛び乗って、何故か片手で鼻をつまんで一気に跳んだ。ちょうどベランダの床の辺りでその姿が消える。
「あ、待ってくれよ」
ひとりで取り残されるのが急に心細くなって、僕も急いで後を追った。

だあんと派手な音がして、僕は木の床に転がった。見覚えのある年季の入った床。ここは理科準備室、黒客のホームだ。
「伏せろ」
後ろから伸びた手が僕の頭をつかんだ。一瞬遅れて鋭く空気を切るような何かが頭上を通り過ぎた。すぐ後ろの壁が派手な音をたてながらノイズを走らせる。再び頭の上で音がして、赤い光が退いていくのが見えた。
「見つけた。イリーガルだ」
僕の頭を押さえていたのはガチャギリだった。伏せた姿勢のままでずるずる前に進んで、
「気をつけろ。けっこう強いぞ」
ホーミングミサイル『追跡君』を取り出しながら言う。
「待ってくれ。武器は――」

「わかってるって。完全にやっつけたりはしねえ。足を狙って動きを止めるんだ」
目の前で防御壁になっていた机からわずかに顔を出して、そこでガチャギリの動きが止まった。
「どうした」
「うーん、見てみろ」
言われて僕も、目の高さだけ机の影から顔を出した。
ガチャギリの当惑の原因はすぐわかった。イリーガルに足がない。というよりは全くの不定形だった。半透明の赤と青の線が絡み合って、幾何学的な円筒や紡錘の形を描き出したり、そうかと思うと曲線をするりと伸ばして昆虫や微生物のような形を作ったり。
「とにかくちょっと弱らせりゃいいや」
頭を戻すと手早く照準をセットして、ガチャギリが追跡君を続けざまに2発発射した。机に沿って這い上がったミサイルは、僕の目の高さで90度向きを変えて真っ直ぐイリーガルに向かう。イリーガルはミサイルに気がつかないのか、動きを変えない。
「行け！」
ガチャギリが短く叫ぶのと同時に、イリーガルが止まった。と思った途端赤と青のもつれがほどけて、ぎりぎりで最初のミサイルをかわす。後から来たもう1発は青い側の伸ばした腕にはたかれて窓ガラスに激突した。
「くそ、でもまだあるぞ」
ガチャギリはいつの間に準備したのかもう2発、ミサイルを放った。さらに最初にかわされた1発も旋回して再びイリーガルに向かう。挟み撃ちだ。
イリーガルは前後をうかがうようにくねくねと体を動かせて、今度は球体になって転がり出した。小刻みに方向を変えて逃げ回るが、ミサイルのほうも正確に動きをトレースしてついていく。
「へっ、俺がカスタマイズした追跡君（改）をなめんな」
ガチャギリが余裕の表情で呟いた時、イリーガルが急に向きを変

えたかと思うと、部屋の真ん中にぽんと跳ね上がった。3発のミサイルが一斉に突っ込む。ぱっと眩い光が散った。

「よし！」

ガチャギリにつられて僕も思わず机の上に身を乗り出し、一瞬後に後悔した。目の前にミサイルが次々着弾する。さっきよりもよほどひどい光と音が炸裂した。

きいんと甲高い音が頭の中に響いて、しばらくは視覚も聴覚もなかった。10秒ほどもしてようやく開いた薄目にぼんやりと、ところどころに走査線のよぎる僕の腕が見えてきた。

「ガチャギリ、無事だった？」

「ああ、なんとかな」

ガチャギリの返事はなんだか不貞腐れたようだった。

「イリーガルはどうなったんだろう」

「もうここにはいないよ」

突然足元から声が上がった。デンパは戦いの間ずっと、机の下に隠れていたらしい。

「ミサイルが当りそうになった時に光って消えたんだ。他の場所に行っちゃったみたいだね」

「瞬間移動か。だからミサイルが目標を見失って、俺たちのところに突っ込んできたんだな」

ガチャギリが腕を組んだ。

「デンパ、イリーガルはまだ近くにいるのかわかる？」

「そう離れたところにはいないみたいだけど、もう攻撃はやめたほうがいいよ」

デンパは困った顔で自分の足を指差した。というか足のあるべきところを。デンパの腰から下は消えてなくなっていた。

「げっ、なんだそりゃ！　ミサイルにやられたのか」

「ううん、違う」

慌てたガチャギリのとは裏腹にのんびりした声でデンパは答え、ゆっくり立ち上がった。あれ？　ちゃんと足がある。

「ここに新しい空間の出入り口ができちゃったみたいだね」
デンパは屈みこんで机の下に腕を出し入れした。差し込んだ腕が途中で消える。その先はどこか別の部屋につながっているのだろう。
「きっとあの子は危害を受けるといろんな場所に逃げ道を作っちゃうんだ。これ以上攻撃すると、空間のつながりがもっとぐちゃぐちゃになるよ」
「くそ。じゃあ俺たちにできるのは、せいぜいイリーガルを見失わないように見張るくらいか」
ガチャギリが悔しそうに呟いた。
「とにかく、イサコのパスワードを待つしかなさそうだね」
ガチャギリの背中をぽんと叩きながら僕は立ち上がって、イリーガルの消えた辺りに向かって踏み出した。
どこに空間の穴があるのかわからないのに、後で考えれば実にうかつな動作だった。
瞬間景色が上にスライドして、気がついた時はもう別の場所だった。

第4話　夢幻へのパスポート　C　part

イサコ、イサコ。
あの人が私を最初にその名前で呼んだのは、いつのことだろう？

小さい頃の私は「ユウコ」って名が呼ばれるのを聞くと、たとえそれが知らない人の知らない子を呼んだとわかっていても、「はあい」とかわいげな返事をして走っていったものだ。あどけない私の顔つきを見て「あら、間違っちゃったのね」って、当惑した表情をゆるゆるとほころばせて微笑んでもらえるのが嬉しかったし、中途半端なところで立ち止まってむすっとした当の子供を見てもそこはかとなく気分が良かった。

「ユウコちゃん、そんな誰でも知らない人についていったら、そのうち悪い人にさらわれちゃうよ」

いつものようにどこかの母親にそうして戻ってきたら、あの人はちょっとませたように腕を組んで、そんな風に言った。天を見上げてひと思案して、

「そうだ、『イサコ』がいいわ。あなたの名前はイサコ」

「やだ。変な名前」

私は即座に断った。名前が嫌だったというよりは、遊んでいたおもちゃを取り上げられたような、悔しさと悲しさと寂しさのないまぜになった気分が込み上げたからだ。非難の視線を浴びてもあの人は何も言わず、ただ黙って微笑んでいた。

「やだ」

答えないあの人にもう1度言って小さな腕を振り回すと、にわかに両の脇に温かい腕が回った。あの人に抱き上げられると荒い毛のセーターがごわごわ当たって、でもそれが不思議と恐さを静めて、私はその体に頬をこすりつけた。

「イサコってね、あなたの名前のとおり、勇ましい子って意味なの

よ。私はあなたにそんな子でいてほしいなあ」
弱い心を見透かされたようで恥ずかしくなった私は、うつむき加減に薄茶のセーターへと顔を埋めた。自然と頭の下がったのを了解の合図と取ったのか、
「偉いね、イサコ」
だっこの私を地面に下ろさないままで器用におんぶに抱き替え、神社の石段をゆっくり下った。木々の合間に夕陽が隠れると、うっすらした闇の中で、私はどこの誰でもある「ユウコ」から、他の誰でもない「イサコ」に、少し大人に、少し孤独になった。

イサコ。

「誰？」
起き直ると、目の前に白い霧がなびいていた。
「ここは――」
夢から覚めるとまた夢の中だったような、現実感のない不安に駆られた私だったけど、すぐに思い出した。霧じゃない、カーテンだ。本を返した帰りに急に気分が悪くなって、保健室で寝ていたんだっけ。
まだ頭の後ろのほうがもやっと痛くて思考がまとまらないけれど、歩けないほどじゃない。あまり長く寝ていても迷惑だろうし、帰って新しいパスワードの解析をやらなければならない。ベッドから立ち上がった途端にきくんとこめかみが痛んで、私は片目をしかめたままでカーテンを開いた。
「先生、もう大丈夫……」
声は尻すぼみに小さくなった。
カーテンを開けた先は廊下だったのだ。
「変だな」
驚きが小さかったのは、頭の痛いのが治らずにうまく考えがまとまらなかったのに加えて、さっきの夢で見た記憶が妙にリアルで、

それで今目前に広がる景色にも、頭が夢と現実の区別をつけていなかったせいかもしれない。

少し薄暗いけれど、いつもの学校の廊下だ。歩き出しても、遅い時間のせいですれ違う生徒の姿もなかった。

長い廊下に響き渡る足音は、聞きようによって高くも低くも感じられる。私は小さな子供のように、わざと靴を響かせて歩く。次第に反響が大きくなって、わんわんと虚ろに私を覆い始める。

いつしか音の間が狭くなる。何故とも知れず、切迫感が込み上げる。誰もいない廊下で息が上がる。どうして？　私は何を求めてる？　わからない。わからないのが恐ろしい。私が孤独になっている間に皆が私を捨てていってしまうのではないか。夢とも幻ともつかぬ薄明の境に、ぼやけた輪郭だけを残して消えていってしまうのではないか。

「おかしい。いくらなんでも」

不安が昂じてついに言葉が出た。さっきから進んでも進んでも玄関に行きつかない。まさか、まだ夢を見ているのか？

私はこぶしを作って後頭部を叩いてみた。痛い。ような気がする、よくわからない。

この感じ、どこかで覚えがある。現実でないものに、現実でないとわかっているのに恐怖を感じて、痛くないはずなのに痛みを覚える。そうだ、サッチーにやられた時。

それでふっと憑きものが落ちた。頭を上げてしばらく廊下を観察し、その後で自分の両手に目を移す。廊下にも手にも、同じ間隔で周期的なノイズが走っている。わかった、電脳体分離だ。前にも何度か経験がある。

私の実体はまだ保健室で寝ているのだ。そしてこの廊下は何かの拍子にできてしまった電脳空間の堂々巡り。そうとわかれば対処法はいくらでもある。

私は注意深く景色に目を凝らしながら忍び足で歩いた。永遠に続く空間などあり得ない。どこかで空間の始まりと終わりがくっつい

て、円環になっているはずだ。
　単純な手品のタネはすぐに見つかった。サイズにずれのある部品同士を無理やりに接着剤でつなげたような、不自然な接合面だ。こんな見え透いた罠に引っかかってたなんて、今日の私はやっぱりどうかしている。早く帰って本格的に休んだ方が良さそうだ。
　簡単な攻撃用の暗号を投げつけると不安定な結びつきが連鎖的に壊れて、接合部の先が次第にかすんで白んだ。よし、これですぐ本来つながっていた空間との接続が再設定される。さっきまでの不安な気持ちが急にほとびたせいか、ゆるい息の漏れるのと一緒に肩が下がった。
　その時、明らかになり始めた向こうの空間にふたつの人影が映った。
「天沢さん、イサコちゃんなの」
　声には聞き覚えがあった。
「カンナか」
「うん。ヤサコちゃんもいるわ」
　前に出かけた足が止まり、私はたたらを踏んだ。生硬な言葉が喉につかえたのを無理に吐き出す。
「お前たち、どうしてこんなところにいるんだ」
「迷ったのよ、古い空間で。昨日あなたにパスワードを取られたイリーガルが暴走してるの。さあ、早くパスワードを返して」
　ヤサコが真っ直ぐな足取りで進み出るのを確かめると、どうしてか私の中に劣等感が芽生えて、何故ヤサコたちがパスワードについて知っているのか正すこともできないままに、2、3歩後ずさりした。もちろんすぐに思い留まって前に出たので、ヤサコとお互いの髪がかかるくらいの間近でにらみ合うことになった。
「持ってるんでしょ、パスワード。出してよ」
「出したらどうするんだ」
「決まってる。イリーガルに返して空間をもとに戻すの」
　笑いで口元が引きつる。

「お前にか。はは、できるもんか」
「できるわよ！」
「できないね」
言い放ったまま、私はヤサコを無視して歩き出した。
「カンナ、行こう。私がパスワードを戻すよ」
電脳ポシェットを探って昨日のパスワードを取り出す。深い海か記憶の底を思わせる青の広がりの中に、温かい赤の熾き火が灯る。このパスワードは見るたびに形を変える。ちょっと手放すのが惜しくなるくらいにきれいだ。
「何で私を無視するの」
その向こうからヤサコが私を見た。鈍く透けた青の向こうに輪郭のぼやけた顔の、しかし瞳ははっきりと私を映し込んでいた。
「無視なんてしてないだろ。お前にはできないと言ってるんだ」
私は目をそらして、パスワードを手のひらにすぼめた。
「何でできないってわかるのよ」
「お前、言われないとわからないのか」
こいつと話してるとうんざりしてくる。
「スキルがないだろ、スキルが。どうやってイリーガルにパスワードを返すのか、やり方、わかってるのか」
「そ、そりゃ知らないけど。でも教えてもらえれば」
そのひと言が私の癇に障った。まただ。どうしてそんなに単純に他人の好意を信じる。
「のんきに教えてやってるほど私は暇じゃないんだ。空間を直したいんだろ、お前は黙ってついてこい」
「ヤサコちゃん、せっかくイサコちゃんがやってくれるって言ってるんだから、まかせようよ」
立ち尽くしているヤサコにカンナが歩み寄るのを見ると、なにかまた腹が立って、つい悪態のひとつも口をついた。
「ぐずぐずするな、役立たず」
「役立たずですって」

「ああそうだ。自分の力もわきまえずに他人にばかり頼って、役立たず以外の何だって――」

言い終わる前にヤサコが飛びかかってきた。

「おい！　いきなり何するんだ」

「私にだってできるもの」

ヤサコはパスワードを奪おうと手を伸ばす。本当の体もないのに揉み合いなんておかしな話だが、電脳体同士が干渉して私は壁に押しつけられた。パスワードを持った右手を高く上げてもう一方の腕でヤサコを押し返しながら、ほとんどつま先立ちになっていた。

「やめろ。やめろってば」

「渡してよ、パスワード」

「駄目だ。お前には扱えないっていってるだろ」

暗号を使おうにも近すぎて私の体までダメージを受けてしまう。

「ふたりともやめてよ、ねえ」

カンナは手を出せずにおろおろしている。

「やめ……あっ」

ふたりの腕が重なり、衝撃が走った。ノイズの走った右手からパスワードがぽろりと落ちる。はっと顔を見合わせたその次の瞬間、私たちは同時に手を伸ばしていた。

「私が」

叫んだのがどっちだったのかよくわからない。もしかするとふたりともだったのかもしれないし、それとも本当は何も言葉はなく、心だけに響いた声だったのかもしれない。

ふたつの手がほぼ同じタイミングでパスワードに触れた。

「あっ」

パスワードがこれまで見たこともない輝きを見せて展開した。赤が沈み青が上れば見る間に夕映えの、その暮れるすぐ手前の光が次第に露わになる。夜の際へ今にも消え入りそうにかすむ夕陽がぼうと地平線を焦がす幻のような赤が私の目を、それ以上に心を射抜いた。

「これを、イリーガルに返すの？」
私は黙ってうなずいた。いつの間にか、私たちはは寄り添ってパスワードをのぞき込んでいた。
これはヤサコの力か？　どうしてヤサコが？　ヤサコには、私たちの知らない特別な能力があるのだろうか？
「……やってみろ」
「え？」
「お前がやってみろ」
私はパスワードをヤサコの目の前に突き出した。光の映り込んだ大きな瞳に強い色合いが宿ると、それは私を捉えて大きくひとつうなずいた。

第4話　夢幻へのパスポート　Ｄ　ｐａｒｔ

多分時間はもう5時近いのだろう、景色は次第に薄暗くかげり始めた。黒く伸びた長い影がひとつずつつながって教室を、廊下を、そして私たちを闇のとばりに包み込む。

「イサコちゃん、本当にこっちでいいの？」

先頭を進んでいたイサコに葦原さんが聞いた。振り返ったイサコの顔は、珍しく自信がなさそうだった。

「絶対あってるとはいえない。でも、イリーガルは古い空間に戻ろうとしているはずだから、バージョンの古いほうへ進んでいけば見つかる可能性は高くなる」

葦原さんは納得したような、それでも不安はぬぐい去れないような、微妙な顔でうなずいた。私も少し心細く思ったけれど、かといってイサコよりいいアイデアを考えつくはずもなく、そっと肩に手を添えて葦原さんを促した。

「待て」

いくつか目の教室に入った時、イサコが短く告げて私たちを止めた。

「いたの？」

私と葦原さんは緊張した顔を見合わせた。

「わからないが、気配がある。様子を見てくるから、お前たちはそこの机に隠れてろ」

そう命令っぽく言われると反感もあったけれど、イリーガルとの戦いに一番慣れているのはイサコだ。私たちは黙って机の影に腰を落とした。

イサコは片手に暗号を用意して、そろそろと進んでいく。最小限の体の動きで鋭い視線をくまなく部屋中に送るその姿は、俊敏な肉食獣のように無駄がない。

ちょうど教室の真ん中くらいまで進んだ時、ことり、と小さな音が、私たちのすぐ近くで鳴った。ぎょっとして立ち上がりそうになった葦原さんを押さえてイサコを見ると、こっちには背を向けたまま、じっと立ち止まって耳を凝らしているらしかった。

不意にがたっと、さっきの場所で今度は大きな音がした。同時に、

「止まれ！」

イサコの声が響く。再びしんとした室内で、数秒の間をおいて、

「攻撃しないで。僕だよ」

姿を現したのはデンパの大きな体だった。

「なんだお前か。驚かせるな」

イサコが気の抜けた声で言って、暗号の光が消えた。私たちも立ち上がる。

「ガチャギリはどうしたの？　一緒に行ったんじゃなかった？」

「それが途中ではぐれちゃったんだ」

デンパは申し訳なさそうに頭をかいた。

「私もそうなのよ。最初はフミエちゃんと一緒だったのにいつの間にか離ればなれになってて」

「でもイサコとは会えたんだね」

「そうだ」

当のイサコが答えた。

「パスワードもある。後はイリーガルだ」

「それなら役に立てるよ。僕にはイリーガルの声が聞こえるんだ。イリーガルの居場所まで案内するから、パスワードを返してよ」

「なんだと」

イサコが、そして私たちも驚いてデンパを見つめた。そんなことってできるんだろうか。

「本当だよ。さっきも同じやり方でイリーガルを見つけたし。逃げられちゃったけどね」

「確かに一度は見つけたんだな」

イサコは首をひねると、

「わかった、お前が道案内してくれ」
案外あっさりとデンパに先導役を譲った。
「うん。でもイリーガルにちゃんとパスワードを返すって約束してよ」
「大丈夫だ」
ふたりは歩き出し、私と葦原さんは慌てて後を追った。
新しい空間と古い空間の端境をしばらく進むと、やがて体育館に出た。館内が広すぎるせいか、人の目が届きにくい天井や隅の部分は画像が大きく乱れてちりちりと不規則に音を立てている。
「ここにいるよ」
デンパが突然口を開いた。口調が普段と全く変わってなかったから一瞬聞き流しそうになって、それで余計にぎょっとした。
「ここ？　この中に？」
慌てて見回しても、見通しのいい空間に、イリーガルの姿は見えなかった。
「用具室にいるのかしら」
「待て、動くな」
駆け出そうとした葦原さんを、イサコが鋭い声で止めた。
「用具室のドアをくぐったら別の空間に行ってしまう。イリーガルは、私たちの今見ているこの場所にいるんだ」
「でもここに隠れる場所なんてないわ。もしかして、デンパ君の、その……」
間違いなんじゃないかとははっきり言えないで、私は曖昧に口を閉ざした。
「いや、デンパは正しい。ヤサコ、パスワードを見てみろ」
はっとして手元を見るとパスワードの輝きが明らかに強くなっていた。眺め続けるうちに、私はあることに気がついた。砂鉄の磁石に引きつけられるように、パスワードが時々形を乱して一方向に流れる。自然と引き寄せられる方向に視線が行った時、そこでふと何かが動いたような気がした。同時に、

「そこか」
正確な間をおいて青い光が3つ、何もない床に飛んだ。ガラスの砕けるような音とともに空間がばらばらに割れる。驚いたことに、何もないと見えていた空間の壊れたその向こうに全く同じ空間があって、そこに穴だらけの黒い物体があった。
「あれがイリーガル？」
その姿を見た私は、前にメガシ屋で開かれた作戦会議を思い出した。オババの言ってたイリーガル、その中の「穴の空いた岩石みたいなやつ」ってきっとこのイリーガルだったんだ。
「さすが空間を操るタイプだけのことはあるな。館内の映像をすっかりコピーして自分の周りに張り巡らしていたんだ」
「イサコ、攻撃しないって約束だろ」
デンパが困ったような怒ったような顔で抗議した。
「わかってる。今のは化けの皮をはいだだけだ。さあヤサコ、パスワードを返してくれ」
「う、うん」
今さらになって不安が湧き上がったけれど、正直に言ったらイサコに大笑いされるだろう。幸いイリーガルに攻撃してきそうな様子は見えない。それでも何かあったらすぐ防御できるようにレンガ壁を準備して、私は少しずつイリーガルに歩み寄った。
5メートルくらいまでに近づいた時、イリーガルが動いた。緊張が走ってもう少しでレンガ壁を投げそうになったけれど、すんでのところで思い留まった。大丈夫、少し動いただけだ。ただそれまでの黒っぽい岩みたいな色が、赤と青のストライプに変わり始めた。
そこからは用心深く1歩ずつ進んだ。イリーガルはどんどん変わっていく。赤と青がすっかり分離すると今度は輪郭自体が崩れて2色の線がもつれ合い、やがて分離して赤は上に、青は下にたゆたった。さらに進んで、もう数歩でイリーガルのいる場所へ辿りつこうとしたその時、手の中の暗号がにわかに震えた。かと思うと灰色のかたまりになって浮かび上がったパスワードは、またたく間にイリ

ーガルの本体に吸い込まれた。
「よし、これで戻った」
イサコの声が聞こえて振り向くと、みんなが一斉に駆け寄ってくるところだった。
「空間が元に戻る反動で何が起こるかわからない。結界を作るから、みんな離れるな」
イサコが電脳チョークで床に図形を描き始める。その近くにかたまりながら、私はイリーガルを見た。赤はおぼろな輝きに姿を変え、もう一方の青は闇に沈んでいく。さっきのパスワードはその真ん中に灰色の染みを作っている。
そのままでしばらく待った。ところがイリーガルは全く動かない。空間のバージョンは5．15で古いままだったから、異変も収まっていない。
「おかしい。パスワードを返しさえすれば、古い空間への帰り道がわかるはずなのに」
イサコがいぶかしげな視線をイリーガルに向けた。
「まだ足りないものがあるのかしら」
葦原さんも首を傾げる。
「ねえ、あれ見てよ」
デンパがイリーガルを指差した。さっき返したはずのパスワードはまだ灰色に凝ったままで、時々かすかにノイズを走らせながら揺れている。
「1回無理に取り上げちゃったから、パスワードがうまく戻ってないんじゃないかな。それでイリーガルも帰れないんだよ、きっと」
「だとすると、方法はひとつだ」
イサコの声はこころなし冷たかった。電脳ポシェットから見覚えのある鍵を取り出す。
「こいつをいつもとは逆に使って、イリーガルとパスワードを無理やりにつなげる」
「そんなことして危なくないの」

心配そうな葦原さんに、
「当然イレギュラーな作動が起きるから、イリーガルのプログラムには致命的だ。私たちも危険は危険だが、この結界を出なければ大丈夫だろう」
「駄目だよ、そんなの」
デンパが彼には珍しい大声を上げてイサコの前に立ちふさがった。
「この子を犠牲にして僕たちだけ助かるなんて。イリーガルだって生きてるんだ」
「仕方がないだろう。他に方法はない」
イサコが脇をすり抜けようとするのを、デンパは必死の表情で防ぐ。
「よく考えればもっと別のやり方もあるかもしれないだろ」
「いくら考えたって同じ。どきなさい」
「どかない」
私はいつの間にか、押し問答を続けるふたりからイリーガルのほうへと視線を移していた。高いほうの赤い光は夕焼け空、低いほうの黒に近い青は夕暮れのアスファルト道路のように見える。景色に沈み込むような錯覚に襲われて首を振った時、灰色の染みが人影となって私を手招きした。
誰か呼ぼうと思ったのだけど、イサコとデンパの口論もいつもながら止めに入る葦原さんの高い声もとても遠くに聞こえて、私の言葉は届きそうにもなかった。仕方なく、私はひとりでイリーガルに向かって進んだ。
デンパの言ったとおり、イリーガルも生き物で私たちと同じような心を持っているのだろうか。それなら、今この子は何を考えているんだろう。元の世界へ戻りたいと思ってるのかな。元の世界、古い空間の奥深くってどんなところだろう。
不意に古い記憶が浮かび上がった。記憶といっても現実じゃない、昔よく見ていた夢だ。鳥居のたくさん並んだ、神社か何かの古い階段。そうだ、すっかり忘れてた。私はいつも一気に駆け上がって——

赤が閃いて一瞬視界を奪い、慌てて顔を覆った。目を開けた私は驚いた。私は思い出の光景の中にイリーガルと並んで立っていたのだ。イリーガルは思い出の交錯する半透明の光の形をしていた。

「上りたいのね」

私が呟くと、イリーガルはうなずいたようだった。私にはそう見えた。

「わかった」

イリーガルと手を携えるようにして、私は階段に足を掛ける。夢とは違って1歩ずつ踏みしめるように上ると、イリーガルは少し遅れてちゃんとついてきた。

階段を上がるごとに、心の底に溜まっていた澱が少しずつ溶け出して、気分は軽やかになっていった。そうして、私もこの子と同じようにこの階段の向こうへ行きたいと願っているのだとようやく分かった。

「待って」

足が止まったのは、全く同じ声が下のほうから聞こえたからだ。振り向くと、階段の一番下にイサコがいた。階段にふれるのを恐がるかのように中途半端な姿勢で足を止めて、それでも目ばかりを上に向けて。その瞳は、今までに見たことのない寂しさをたたえていた。

迷いはなかった。

「もうひとりで行けるわね」

言葉で答える代わりに、イリーガルはゆっくりと私を追い越して、階段の天辺へ進む。後ろ姿を見送った後でゆっくりと向き直って、私は階段を下り始めた。

私の降りる姿を認めても、イサコの表情から寂しさは去らなかった。それでも少しだけ目元が細くゆるく、微笑みの曲線を浮かべる。ほっとした途端、表情の全体が薄らいだ。霧が出てきたのだ。視界がどんどん乳白色の霧に覆われる。かき分けるようにして私は進む。次第になんだか、足ももつれる。もう全く何も、自分の体さえ見え

ない。ただ目の前の白い、それだけしかわからない。

ヤサコ。

下のほうから誰かが呼ぶ。

「ヤサコ、ヤサコ。返事して」

保健室だ。白いと思われたのは霧ではなくて、ベッドの前に巡らされたカーテンだった。心配そうにのぞき込んで、私を呼んでいたのはフミエちゃん。

「私、どうしたのかしら」

「あっ、気がついた。よかったあ」

フミエちゃんは大きなため息をひとつつくと、傍らの椅子にどすんと音を立てて座った。

「イサコちゃんとデンパ君が言い合っているうちに、霧が出てきたの。ヤサコちゃんがイリーガルを連れて霧の中に入っていくのが見えて、驚いて止めようとしている間に電脳体が戻ったのよ。ヤサコちゃんだけ気を失っていたから、みんなで保健室に連れてきたの」

葦原さんが説明してくれた。

「ごめんなさい、勝手な行動を取っちゃって」

私はちらりと隣のベッドを見ながら言った。ベッドの主、イサコは私の視線に気づくと、鼻息を鳴らしてあらぬ方向へ目をやった。

葦原さんがくすりと笑う。

「あんなふうにしてるけど、イサコちゃんが一番慌ててたんだから。自分も霧の中に飛び込んでね」

「余計なことを言うな」

あっちを向いたまま、イサコは怒ったような声を出した。

「イサコ」

私は小さな声で呼びかけた。

「え」

思わず振り向いた顔に、

「私たち、さっき夢の中で会わなかった」
「バカかお前は。寝言は寝てから言え」
これ以上ないほどにばっさりと切り捨てられた。言葉に詰まった私に背を向けてとんとベッドから飛び降りたイサコは、
「さよなら」
のひと言だけを残して部屋を出ていく。止めるよすがもなかった。どこからか風が吹いて、残された私たちは主のいなくなったベッドだけを、ただ穴の空くほどに見つめていた。

第４話　夢幻へのパスポート　Ｄ　ｐａｒｔ（後書き）

第４話は今回で終了です。第５話をお楽しみに。

第5話　最後の巨竜　Ａ　ｐａｒｔ

ある作家の言葉によると、戻るべき場所は進むべき道の先にあるそうです。

学校でイリーガル騒ぎがあった日、浮かない気分をもてあまし気味に私は家路に着いた。

せっかく手に入れたパスワードを失ってしまったこと、お兄ちゃんに何て言おう。

状況からいって仕方なかったのだときちんと説明すれば納得してくれないわけじゃないだろうし、むしろ励ましたりいたわったり、私に気を使ってくれるとは思う。でも、心の内で悔しがっているのは兄妹なら見透かせてしまう。そうして、そんな風に内心を押し隠してお兄ちゃんが接してくる時にどんな態度で振る舞えばいいのか、私にはよくわからなかった。本当の思いを知りながらうわべだけで微笑み合うのは嫌だったし、でもお兄ちゃんは私のためを思ってそうしてくれているのだから、本心を言えとやわな心に土足で踏み入るような真似もしたくない。どうすればいいのか決めかねて私は黙りこんでしまい、それでお兄ちゃんも諦めて、遠慮ともなんともつかない距離を埋められず、言葉もかわさない数日を過ごした経験も、これまでにはあった。

玄関の前でついうろうろと惑っていると、ちょろちょろ走り出てきた影がふたつある。モジョだ。２匹が並んで私を迎えるように跳びはねる。うらやましいくらいに仲の良い２匹。ふいと口元のほころんだところに１匹ずつ両肩に乗ってきて、私は肩をすくめて降参の体で玄関の扉を開けた。

「じゃあ次を狙おうか」

まだ詳しい話もしないうちに、お兄ちゃんはあっさりと言った。
私がきょとんとしていると、
「もっと残念がるとでも思った？」
お兄ちゃんは口の端にしわを作って笑った。こんなに機嫌のいいお兄ちゃんは久しぶりだ。パスワードをなくしたっていうのに。
「パスワードひとつくらい、この町でなら取り返せるよ。見てごらん、市内の古い空間がどんどん増えてる」
お兄ちゃんは大黒市の電脳地図を広げる。数日前から時間に沿って追っていくと、町の北西に当る1か所を中心に、まるで夏の空に湧きおこる入道雲のように古い空間が勢力範囲を増していた。
「どうしたのかしら、これ。ひょっとして、電脳空間に何かが起こる前触れ？」
「多分そこまでじゃないと思う。空間管理サーバの部分的に弱い場所に負荷がかかった結果だろう。サッチーが集中的に投入されてるから、後1、2週間もすれば消えてしまうよ」
小学校の空間がめちゃくちゃになっていたのに、帰り道にサーチマトンの1台も見かけなかったのはそのせいか。
「大黒ではこれくらいの異常はざらにあるらしい。ってことは、イリーガルを見つけるチャンスも高いってわけさ。1個なくしたからって落ち込まなくても大丈夫だよ」
「……うん」
お兄ちゃんの言葉に私をなぐさめる気分を感じ取るとやっぱり答え方がわからずに、私は小さくうなずいて床を見た。お兄ちゃんは私の変化には気づかず、間を置かずに続けた。
「ただ気になるのは確かだし、僕は明日ここに行ってみるよ」
「え――う、うん、わかった。私のモジョも連れていく？」
慌てて答えると、
「いいや、僕のだけで大丈夫。それよりイサコにも頼みがあるんだ」
「頼み？　どんな？」
「さっきの話に出てきた、デンパっていったっけ、イリーガルの声

が聞こえる子がいただろ。もし本当なら僕たちのイリーガル探しに役立つはずだ。デンパの能力が本物なのか、本物だとしたら具体的にどんなものか、少し探ってみてほしいんだ」

「わかった。明日からでも尾行を始めるわ」

尾行日和という言葉はないだろうし、あったとしてもあまり気分のいいものじゃないけど、ふと頭にそんなフレーズが浮かんだくらい、その日はデンパの後をつけるのにあつらえ向きだった。空は曇り気味に影が多く、空間にも例の不具合の影響だろう、いつもうっすらと霧がかかっている。その日は黒客の活動日でもなかったので、授業が終わった後は、そろそろひと月を切った修学旅行の話題でにぎわうクラスメイト達を差し置き、すぐに教室を出て1組の廊下を見張った。

5分ほどでデンパが出てきた。ハラケンと話しながら玄関口に向かい、待っていたカンナと落ち合うと3人でおだやかに喋りながら歩いていく。龍安寺がどうとか言ってるのを見ると、こいつらも修学旅行の話題らしい。おめでたいやつらだ。と思いつつ、黒客と探偵局ののんびりした方から数えて3人の会話を聞くうちに、私まで感化されてのどやかに楽しみな気分になってきた。

「モジョ！」

モジョが耳元で震えた。くすぐったいような気分が右肩を駆け抜ける。

「大丈夫だ、仕事を忘れたわけじゃないよ」

軽く撫でてやってから、気を取り直して任務に戻った。

校門を出たところで、自宅の方向が違うデンパは他のふたりと別れた。と、変化が起こった。微笑がにわかにひいて真面目な顔つきになり、後ろを確かめると素早く脇道へ曲がる。

「モジョ、あいつをつけろ」

私の言い終わる前にモジョは飛び出した。精悍な動きでデンパのすぐ後ろまで近づく。その様子をモニターで追いながら、私は見つ

からないようにゆっくりと、デンパと同じ角を曲がった。
デンパは最初南に向かい、鹿屋野神社の隣まで来ると急に右へ曲がって大通りを突っ切り、古い住宅の密集した地域を進んでいく。なじみのない景色の中でこっちが迷子にならないように気をつけながら私も後を追った。
少し暗くなった気がして見上げると、まだ太陽は高かったが電脳霧の密度が増していた。へえ、この辺りは駅から遠くないから空間の安定性も高いだろうと思って、これまで調べてなかったのは間違いだったな。そんなことを考えるうち、デンパは飾り気のない古びた建物に入っていった。
かつては雑居ビルとして使われていたらしい廃ビルだった。窓ガラスは既に破れて室内は半ば雨ざらし、むき出しのコンクリートには無数のひびが入って、黒ずんだ外見を一段と陰鬱なものにしていた。
「モジョ、一旦戻れ。単独行動は危険だ」
この頭にちりっとくる嫌な感じ、古い空間の発生している証拠だ。デンパの目的は相変わらずわからないが、油断だけは決してできない。
つけられているとも知らず、デンパは足音を響かせてビルの中を歩く。階段は上らず、やけに曲がり角の多い廊下を迷いもしないで進んでいくからには、たびたびここを訪れているのだろう。やがてある部屋の前で足音は止まり、きいと小さくドアのきしむ音が聞こえた。デンパが部屋に入ったのを確かめてから、私も小走りに近寄ってドアに耳を当てた。中から声が聞こえる。
「メタバグを持ってきたよ」
デンパは誰かに呼びかけている。顔に似合わず、秘密の取引か？にしては、他に人の気配がないが。
その時、どこか遠くから鳴き声が聞こえた。
鳴き声といっても、他のどの動物に似ているのでもない。まるで霧の彼方に鳴る霧笛のような、幻のように遠く、しかし力強い低音

の声だった。同時に頭の中のちりちりが一段強まった。
「イリーガルか」
ひとりごちた私に、
「モジョ！」
モジョは体を大きくひねってうなずく。
何故こんなところに？　どうしてデンパが？　警戒心は高まったが、疑問を解くためには進むしかない。私は音をたてないようにドアを細く開いて室内に滑り込んだ。
予想よりも大きな部屋だった。もちろん照明はないが、角部屋で壁の二面に窓があるから見渡せないほどではない。デンパは窓とは反対側の暗がりにいた。私には気づいてない。
おおん、とまたさっきと同じ音がして、デンパの目の前の闇に青白い光が二つ灯った。イリーガルだ。しかも……でかい。デンパの身長の2倍くらいはありそうだ。
「まだだ、出るな」
モジョが心配になってイリーガルから目を離したのはまずかった。警戒に満ちたうなる音、誰、とデンパの叫び、耳元でモジョのわめく声、どれが先でどれが後だったかわからない。直感的に危険を悟り、無我夢中で身をかわしたつい鼻の先を真っ黒いものが走り抜けた。間髪を入れずに第2波、さらにその次。後手に回った私には反撃に出る余裕がない。
息つく間もなく来襲を避けながら、目は室内を追った。私を攻撃しているのはさっきのイリーガル。口から黒い水のようなものを飛ばしてくる。デンパがすぐ横で、どうも止めているみたいだがイリーガルは聞く耳もたない。室内に隠れる場所は、くそっ、ない。廃ビルだから当たり前だが、備品の類が全くないのだ。
最前からの頭痛がますますひどくなる。やり返してもうまくいく自信はない。
「モジョ、撤退だ！」
私は窓に向かって走った。外に出て廃ビルの敷地外まで行けば追

ってこられないだろう。
が、駆け出したのと同じくらい急に、私はブレーキをかけざるを得なかった。室内のメガネ越しからは窓がはまっている。無理に突き抜けたら、昨日と同じように電脳体分離してしまう。
「モジョッ」
かたたたた、と連射音が響く。踏みとどまったモジョがイリーガルに攻撃したのだ。が次の瞬間、イリーガルの黒い水がもろにヒットしてモジョは弾け飛んだ。
「しまった！」
弱々しく壁にぶつかったモジョを見た時、怒りに火が点いた。
「こいつ！」
床に落ちる直前のモジョを左で逆手に拾い上げ、体の回転する勢いで、右に0．1秒で作った強力な暗号をイリーガルに投げつける。鋭い音と光が室内を走り抜け、目がくらんだ。喧騒が飽和して全てが真っ白になる。
そして、静かになった。
私は手の中の丸く柔らかいかたまりを両手で包みこみサーチした。モジョはフリーズしているがダメージはないようだった。
「――良かった」
涙の1滴が床に落ちてしみを作ったのを自分に隠すように、素早く振り返った私はイリーガルをにらみつけた。イリーガルはわずかに残像をだぶらせながら、攻撃態勢の途中で固まっていた。
「クビナガ、クビナガってば！　大丈夫？　返事してよ」
デンパはおろおろイリーガルの周りをうろついている。
「慌てなくていい。フリーズしてるだけだ」
ゆっくりとデンパの背を押してどかせ、私はイリーガルの正面に立った。
「じゃあ助けてくれるの」
「それは今からわかる。ちょっと黙っててくれ」
ポシェットからいつもの鍵を取り出す。止まっているイリーガル

の顔の真ん前までに鍵をぶら下げて揺らした。反応はなかった。
「ちっ、本物の迷子か」
私はすぐに鍵をしまい、出口に向かって歩き出した。
「待ってよ、『迷子』って何？」
デンパが引き留める。
「パスワードを持ってない種類のことさ。はっきり言って、私には用がない」
つい振り返って巨体を見上げた。体のあちこちで時折ぱちっとノイズが爆ぜる。図体ばかり大きいのにダメージには強くないらしい。
「本当なら削除しておくところだけど、お前のペットなんだろ。見逃してやるから、しつけはちゃんとしとけ。フリーズは5分もすれば治る」
「ありがとう。あの、クビナガのことは……」
「わかってる。誰にも言わないよ」
私は再びイリーガルに背を向けた。2歩、3歩進んでつい、
「寂しがらないように遊んでやりなよ」
余計を言ったのはその日2度目のミスだった。
「待って」
デンパは不意に張り詰めた声で、
「この子、寂しがってるように見える？」
「え、ええっと、うん、まあ」
あいまいな言葉の見本市みたいに連ねた私に、
「イサコの言うとおりなんだ。この子、近くで迷子になっていたのを連れてきたんだよ」
デンパの口調はしんみりしたものに変わっていた。
「前は仲間と一緒にいたみたいなんだよ。だって、夕陽を見ると誰かを呼ぶような鳴きかたをするもん。きっと友達や家族がいたんだ。だから」
心のどこかに何かがつっかえた。
「僕はいつかクビナガを仲間のところへ帰してやりたいんだ。でき

るよね、きっと」
「う、うん、そうだな。できるさ」
嘘をつく時の私は変に素直になる。

「イリーガルを飼ってただって!?」
帰って事の次第を報告すると、お兄ちゃんはらしくない驚きの声を上げた。
「それでパスワードは？　――いや、言わなくてもわかる。持ってなかったんだ」
黙って頭を下げた私を見て、お兄ちゃんもうつむいた。
「イサコ、寂しそうだね。デンパって子に同情してる？」
私が顔を上げないでいるのを、お兄ちゃんはイエスと取ったようだ。
「でもねイサコ、わかってるだろうけど、イリーガルは単なるウィルスだよ」
「方法はないの？」
お兄ちゃんの説得には答えず、私は質問した。
「ない」
返事はすぐに、無表情だった。私は唇をかんだ。
パスワードのないイリーガル、通称『迷子』は、たとえ運よくサーチマトンの目を逃れても、新しい空間で過ごすうちに少しずつデータを破損し、やがては消えてしまう。
「イサコ、諦めなよ。誰にもどうにもできることじゃない」
その場ではうなずいたけれど、私も知らない本当の心はノーだったらしい。

お兄ちゃんには監視を続けると伝えて、実際そのつもりだった。
それなのに私のやったことといったら、何度も廃ビルを訪れては、光に弱いらしいイリーガルを夕暮れ時に散歩させたり、餌のメタバグを持っていったり、時にはデンパに気づかれないように破損を修

復したり。
　デンパを気遣ってやっていることだと、自分にそう偽っていた。けれど手の上に乗せたメタバグをゆっくりと食む姿を見ているうちに、とても温かいものを感じたのも事実だ。そうしてそうであるほどに、やがて訪れる抗えない時に恐れを抱いていたのも。
「最近クビナガ、元気ないね。どうしたのかな」
　だからデンパのそのひと言は私にとってある種の宣告だった。
「黒客に相談してみよう。原因がわかるかもしれない」
　デンパは不審そうな顔をした。ことメガネに関して、黒客から私でなく私から黒客に相談するなんて、確かにどう考えても変だ。でもその時の私は内心の焦りと不安を押し隠すだけで精いっぱいで、それくらいの判断をつける余裕もなかった。
　何を言えばいいかもはっきりとは決められないまま、翌日の理科準備室に私は一番最後に入った。

第5話　最後の巨竜　Ｂ　ｐａｒｔ

「俺は金にならねえことはやらねえよ」
イサコの話が終わって最初に答えたのはガチャギリだった。
「……助けてもらえないのか」
いつもと違って暗く沈んだイサコの声を背中に受け、ガチャギリは黙って首を振る。
「ちょ、ちょっと待ってくださいよう」
俺たちとガチャギリの間で視線をうろうろさせながら、結局アキラも教室を出ていった。
無理もない。イサコの説明にはいつもの自信も説得力もちっとも感じられなかったんだから。
「お前は行かないのか」
イサコがガチャギリとアキラの出ていったドアを見ながら言った。
「なめられたもんだぜ」
デンパが嬉しそうにうなずいた。こいつのほうがよくわかってる。俺はこれでも黒客のリーダーだ。メンバーが困っているのに見捨てるわけがない。
「ダイチはいざという時に頼りになるんだよ」
イサコは複雑な表情でうつむいた。そりゃあそうだ。今のデンパの言葉、裏を返せばイサコはいざって時に頼りにならないってことだもんな。
「イサコ、そんなに落ち込むなよ」
「ああ、ありがとう」
声は少し落ち着いたけど、顔は上がらなかった。俺はふと思いついた。
「お前、何か他に悩みでもあるのか」
イサコは少し目を上げてこっちを見る。
「実は、モジョの調子が悪いんだ」

「あ、あの時クビナガにやられたから」
デンパが申し訳なさそうに首をすくめる。
「そうみたい。変なウィルスに感染したらしくて、黒いところを水と認識するようになっちゃったんだ」
言われてみると最近イサコはモジョを連れていない。俺は電脳ペットを飼ったことがないからよくわからないが、いつも一緒のペットがいなければ心細いだろうくらいは想像がつく。
「心配すんな。モジョは休ませれば治るんだろ。それまで俺が助けてやるって」
イサコが返事をする前に勢いよくドアが開いた。
「あんたたち、またアホなこと企んでるわね」
また面倒くさいのが出てきた。フミエだ。後ろにヤサコの顔も見える。
「聞いたわよ。イリーガルのブリーダーやってるって」
「ちげーよ！　どこをどう巡ったらそんな噂になるんだよ」
「隠しても無駄。出しなさいよ、イリーガル」
「いねえって。大体どうやってイリーガルを繁殖させるんだ」
「方法はあるんじゃないの」
ヤサコが教室に入ってきた。
「オババが言ってたわ。サーバ同士の境界の管理が二重になってる場所でうまくタイミングを合わせれば、ペットを増やすのは可能だって」
「アホはお前らだ」
突然イサコが顔を上げた。
「今の時代にそんな旧式の境界があるわけないだろ。サーバ境界の重複している場所では、電脳体は最新のサーバにしか認識されないんだ。ちょっとは調べてからものを言え」
落ち込んでいても相手がヤサコだと燃えるらしい。
「みんな、喧嘩しないでよ。イリーガルを飼っていたのは僕なんだ」
デンパが1歩進み出た。

「でも最近調子が悪くて」
「イリーガルを飼うって……？　物好きねえ、デンパらしいわ」
フミエは呆れた顔をデンパに向け、その後で俺を振り向いた。
「それであんたが相談に乗ってたわけ。なんだ、たまにはましなこともするじゃない」
俺は少し照れくさかった。
「ま、まあな。でも今のところ何も思いつかねえけど」
「とにかく、みんなでそのイリーガルのところへ行ってみない？　今日は雨だから、明日にでも」
ヤサコが提案すると、他に名案もなかったから皆がうなずいた。

その日も分厚い雲の垂れこめる天気で、昼前は小雨が残っていた。午後になって雨は上がったけれど、雲は大黒の上空にしっかりと腰を据えて、とても晴れあがりそうにない。現実がこんな日には電脳も似たようなもので、あちこちで発生する電脳霧にサーチマトンも出動台数を増やして大忙しになる。というと俺たちも危なそうに聞こえるかもしれないが、ほとんどは大規模な問題の復旧にかかりきりになるから、子供にとってはむしろ安全なのだ。
デンパの案内で廃ビルに向かう途中、その辺りの事情を見越して、俺は大っぴらにカスタムツールを取り出した。
「その道具、何だ？」
イサコが興味深そうにのぞき込む。
「知らないのか。テクスチャカッターだよ。名前のとおり、刃の部分で空間を切り取るんだ。前に見つけたイリーガルにメタバグじゃなくテクスチャを食うやつがいたからな。デンパの飼ってるやつにも試してみようと思って」
グリップの先に小さな細身の刃がついた見た目だから、カッターというよりは彫刻刀に似ている。作動するとにぶい赤に光る先端部分が滑らかに空間を切っていく。テクスチャのなくなった空間にはぽっかりと黒い穴が残るが、１分もすれば自動復旧で元通りになる。

「それ、違法ツールでしょ。そんなのばっかり持ってると、いつか空間管理室に逮捕されわよ」
フミエが横目でにらんだ。
「いちいちうるせえな。人助けのためだよ、人助けの」
俺はフミエを無視して作業にいそしんだ。

「さて、着いたはいいけど――」
「どう見てもまずいわね、これは」
ヤサコたちに言われるまでもなく、状況が最悪なのはひと目でわかった。廃ビルの隣の空き地に何台も重機が止まっている。外壁には鉄骨が組まれ、作業員たちが盛大な音と火花を散らしていた。
「ねえ、これ見て」
ヤサコの指差した先に看板があった。
「えーと、ビル解体工事、２０２６年5月12日より――って今日からじゃない！　イサコ、気がつかなかったの」
「すまない。見てなかった」
「僕もだ。ここに来る時はいつも、クビナガのことばかり考えてたから」
イサコとデンパはしょんぼりと肩を落とした。
「とにかく、イリーガルを助けなくちゃ」
仕切り屋のフミエが胸をそらせた。
「私たちが工事の邪魔をして注意をそらすから、その間にイサコとデンパがビルに入ってイリーガルを連れ出して」
「よし」
「ああ、わかった」
「いいわね。じゃあヤサコ、行くわよ。ダイチ、あんたはナメッチと行って」
「ラジャっす」
いきなり隣で声が上がったから驚いた。
「ナメッチ、お前いたのかよ」

「いましたよ、最初から。喋ってなかっただけっす」
ナメッチは不満もあらわに抗議する。
「悪い悪い。てっきりいつもみたいにガチャギリについてったのかと思ってた」
「俺はデンパに友情を感じてるんすよ。お互い黒客の底辺っすからね」
「そうか。デンパのほうは何とも思ってないみたいだけどな」
もうイサコと一緒に入口に向かっているデンパを見ながら俺が言うと、ナメッチは裏切られたような顔でうなだれた。
「あんたら、バカ言ってないでさっさと行きなさいよ」
「わかってらあ」
フミエとヤサコが重機のある駐車場へ向かうのを見て、俺たちはビルの裏側へ回った。
「で、どうするつもりっすか。カンシャクでも投げます？」
「その程度じゃすぐ子供のいたずらってばれちまうだろうが。お前、黒客にいるくせに自分たちの能力がわかってないだろ」
「能力？　そんなのあったっけ」
「愚か者め」
俺は久しぶりにイリーガル研究ノートを取り出した。この中には、大黒の電脳インフラの詳細も書き込まれている。
「よし、この辺がサーバ境界だな」
俺は境界らしき箇所を見下ろして立ち、メガネを細かく上下に揺すった。数秒間続けると、空間の見え方にずれが出てくる。メガネを高速で移動させた時、サーバの処理能力によって補正に差が出るからだ。
片手でメガネを振りながら、俺はもう一方の手で地面を指差した。
「ナメッチ、ここからそっちの電柱のところまで線を引いてくれ」
「ラ、ラジャー」
首を傾げながらもナメッチは言われたとおりにする。電脳チョークで、大体3メートルくらいの白線ができた。

「ここでこれが役立つ、と」
俺はさっきのテクスチャカッターを地面に当て、白線に沿って一気に走った。切り裂かれた地面がぱしぱし音を立てる。
「ちょっとメガネ貸せ」
答えも待たずにナメッチのメガネを奪い取り、思い切り振り回す。
「な、何やってんすか。返してくださいよ」
「待ってろ」
取り返そうとするナメッチを抑えつけているうちに、目の前の空間に一瞬ひどいノイズが立った。
「よし」
俺はナメッチのメガネを地面に置くと、自分のメガネの更新をオフにしてビルを見上げた。
「ナメッチ、見てみろ」
「え？」
わけがわからず俺のメガネを受け取ったナメッチは、
「な！？　何なんすか、これ」
メガネを通して見える廃ビルは、現実のものより1メートルばかり浮かび上がっているのだ。
「ふふふ、すげえだろ。まずカッターでサーバ同士のリンクを切って、一番上のサーバ分だけ浮かび上がらせた。その後でメガネを振り回したから、サーバの空間識がずれたってわけだ。お前のメガネをここに置きっぱなしにしとけば、少しはこの状態がもつぜ」
その時、きいんと共鳴音が鳴った。
「ビルの電脳空間に異常が発生しました。空間事故の恐れがあります。作業員の方は速やかにメガネを外し、指示があるまでその場で待機してください」
タイムリーな放送はフミエの声だ。拡声システムをハックしたな。作業員たちはまさか小学生にだまされているとも知らず、慌ててメガネを取ってきょろきょろしている。
「おじさあん、どうしたんすかあ！　そのビル、何かずれてますよ」

突然ナメッチが大声を上げて手を振った。こっちに注目が集まる。
「さあな。ここのところ空間が不安定だから、そのせいだろ。まったく、商売あがったりだぜ」
近くにいたひとりが答えた時、後ろの入口から人影が飛び出した。イサコとデンパだ。メガネのない俺には見えないけど、イリーガルも一緒のはずだ。
「お前たちもこんな日は早く帰れよ。メガネが壊れちまうかもしれんぞ」
「そうしまーす。さようなら」
イサコ達の影が敷地外に消えるのを確かめて、おれたちはぺこりと頭を下げた。

とりあえず近くの神社に難を逃れて、俺たちは頭を寄せた。
「脱出はうまくいったわね。工事現場の人たち、誰もイサコ達に気づいてなかったわ」
「うん、でもクビナガの具合が……」
優しい目をした黒い大きなイリーガルは、今は疲れ切ったようにデンパに寄りかかっていた。イサコが腕を組む。
「まずい。どこかある程度古い空間が残っていて、サーチマトンの手出しができないところに連れていかないと」
「そんな都合のいいところ、あるかしら。サッチーの入れないところといったら、ここみたいな神社に、学校とか、それから個人の家よね。この大きさじゃ誰かの家にかくまうのは無理だし、学校にでも置いておく？」
ヤサコが困った顔でイリーガルを見上げた。
「駄目よ。学校じゃどこにいたって人の目が多すぎるもの。隠すなら神社――そうだ、鹿屋野神社がいいんじゃない」
フミエが提案すると、存在感をアピールしたいナメッチが答えた。
「そうっすね。鹿屋野神社なら学校の真裏だし、拝殿より奥まったところは薄暗くて滅多に人も来ないからちょうどいいっすよ」

「クビナガ、そうしよう」
デンパが胴をさすると、イリーガルは巨体に似合わないかわいい声でくうと鳴いた。

鹿屋野神社の茂みにイリーガルを残して、その日は家に帰った。廃ビルより神社のほうが空間のバージョンが古かったから、もしかするとイリーガルの調子も戻るかもしれない。餌のメタバグだってそれなりにあるしな。

その時はそんな風に考えたのだが、結局甘かったらしい。1週間も経たないうちに、俺たちはそのツケを支払わされることになった。

放課後、最初に俺の前に立ったのはフミエだった。

「まずいわよ。例のイリーガルのこと、もうネットに出てるわ」

フミエの立ち上げたウィンドウは大黒の都市伝説を扱ったサイトだ。一番最近の更新情報に、『鹿屋野神社で謎の電脳生物発見』とどでかいフォントがおどる。よく見るとすぐわきに『か?』と半分くらいの大きさで続いてるけど。

「夕方の神社で変な鳴き声を聞いたって言ってる子もいるわ。3組ではあんまり話題に上ってないけど、かなり噂になってるクラスもあるみたい」

後から来たヤサコが心配そうに声をひそめた。

「うーん、別の隠れ家を探さなくちゃいけないってか? 参ったな」

「ダイチ、ちょっと」

考え込んでいると、別の声に呼ばれた。ハラケンだ。カンナもいる。

「君たち、先週解体工事現場の空間を壊したろ。空間管理室にクレームが入って騒ぎになってるよ。緊急でメガマスから予備のサッチーを借り入れて、監視を強化するって」

「げっ、このタイミングでそれかよ」

サッチーの監視の目をかいくぐってどでかいイリーガルを移動させるなんて芸当、できるだろうか。腕組みして見上げると、今度は

ナメッチと目が合った。
「親分、悩んでるとこ悪いけど、バッドニュースっす。鹿屋野神社が拝殿裏の土地を大黒市に贈与することが決まったって。市有地になったらサッチーが入りたい放題っすよ」
「おい、冗談だろう」
俺は頭を抱えた。と、またも新たな人影が現れる。
「ダイチ、どうしよう。クビナガの具合がますます悪いんだ。これ以上あそこにいさせるわけにいかないよ」
いつもはおっとりしたデンパが必死の顔だ。
「どうも今回はツキがないわねえ。電脳の神様に見放されたのかしら」
フミエが溜息をつく。
「で、どうしよう」
「とにかくイリーガルを動かさなくちゃ」
「でもサッチーに襲われたら」
「どっちにしても鹿屋野神社には置いとけないし」
「だからってどこに連れてけば」
「バス墓場とかどう?」
「駄目。遠すぎるし、この間サッチーにフォーマットされちゃった」
「いっそメガシ屋は? あそこなら古そうだし」
「失礼ね。建物は古いけど空間は古くないわよ」
だんだん誰もが好き勝手に喋り始めた。
「おい黙れ! 黙ってくれ。騒いでたって名案は浮かばねえよ」
みんなが一斉に俺を見た。「じゃあどうするの」と顔に書いてある。だが期待されても、俺にもアイデアはない。
焦って思わず立ち上がりそうになった時、ふと空気の動きが変わった。風の流れたその先には、硬い表情のイサコがいる。真横に結ばれた唇がほころびて、短い言葉が転がり出た。
「ひとつだけ、方法がある」

第5話　最後の巨竜　Ｃ　ｐａｒｔ

イサコの短い説明が終わると、フミエちゃんがささやいた。
「ヤサコ、どう思う？」
私は黙って頭を下げた。いちかばちかの賭け、ううん、それどころか、多分失敗の可能性のほうが大きい。
「危なすぎるような気がする。他に手はないの」
デンパがゆっくりとイサコの瞳を見つめた。イサコは横を向いて小声で答える。
「すまない。ないんだ」
ダイチが首をひねった。
「それ、リスク高すぎだろ。イサコ、お前何か――」
フミエちゃんに口をふさがれて残りはもがもがとしか聞こえなかったけど、何が言いたかったのかはもちろんわかった。
イサコは私たちに何かを隠している。それも、あのイリーガルの生死に関わるような重大な何かを。
「外野は黙ってな」
フミエちゃんはデンパを振り向いた。
「これはあんたが決めることよ」
デンパは唇をかんだ。
「そうするのが、クビナガに取って一番いいことなのかな」
「わからない。でもやらなくちゃ」
イサコと視線を合わせずに言葉を交わした後、デンパはわずかにうなずいた。

「やるなら早いほうがいい。決行は今日だ」
理科準備室に移動して短い作戦会議の冒頭、イサコが宣言した。
「それから、今回の作戦はこれまでと比較にならないくらい危険だ。メガネを壊される覚悟のないやつはやめておけ」

皆が不安そうに身じろぎする。
学校の北西、中津交差点の近くで大きな空間異常が発生している。普通のメガネには危険なほどの空間が断続的に生れているらしい。イサコの提案とは、そこにイリーガルを連れていこうというものだった。空間の特に深いところにイリーガルを放せば、そのまま故郷の古い空間へ帰れるかもしれない。
当然、異常発生地点にはサッチーがうようよしている。その中をイリーガルを連れて進もうというのだから、まともに考えたらほとんど自殺行為ともいえた。
「君は行かないほうがいい」
ハラケンが葦原さんに言う。
「嫌よ。私だって少しは役に立つもの」
「聞いたろ。危ないんだ」
「私も行く」
ハラケンと離れたくないんだろうか、今日の葦原さんは強情だ。
「わかった。じゃあカンナにはバックアップに回ってもらう」
仲裁に入ったイサコは、
「クビナガと一緒に行く人数はしぼろうと思う。大人数じゃ目立つし、とっさの行動が取りづらい。残りは陽動だ。近くで騒ぎを起こしてサッチーの注意をひきつけるんだ」
私たちをひとりひとり見回した。
「まず、私はクビナガと行く。いいか」
誰からも反論はない。
「ぼ、僕も行くよ」
デンパが割り込んだ。
「わかってる。クビナガはお前のいうことしか聞かないしな。ダイチとナメッチはふたりで陽動を頼む。得意だろう」
「おう」
「僕はイサコの組に入るよ。万一の時にサッチーを止められるから」
ハラケンが手を上げると、葦原さんが心細そうな顔をした。

「じゃあ葦原さん、私とフミエちゃんと行きましょ」
声をかけると、
「駄目だ。ヤサコは私と来てくれ」
「えっ」
イサコの冷たい瞳が私をにらんでいる。
「お前、この間イリーガルを古い空間に帰しただろう。あれは本来なら相当な技術がいるはずだ。もしかすると体質的に古い空間となじみやすいのかもしれない」
そうなると葦原さんをひとりにはできないから、私はフミエちゃんと分かれることになる。きゅうっと不安が込み上げて、今さらさっきの葦原さんの気持ちがわかった。
「そうすると、イサコ、デンパ、ハラケン、ヤサコがイリーガルを連れていく本隊。ダイチとナメッチ、カンナと私がそれぞれ陽動ね。人数のバランスはいいけど、イサコ、あんた大丈夫？」
珍しくフミエちゃんがイサコを気づかった。確かに、一番危険の大きい本隊で実戦慣れしているのはイサコだけだ。
「――何とかする」
短い言葉から、私は敏感に不安の揺らぎを感じ取った。そうだ、私だって守られてばかりじゃいけない。
「私だって自分の身くらいは守るわ。足手まといにならないようにする」
「頼む、としか言えないな」
いつもとは違う気弱な返答に広がった波紋は、もしかするとイサコと同じ種類の不安なのかもしれなかった。

学校から鹿屋野神社までの短い距離で、2度キュウちゃんを見かけた。どっちも向こうより先にイサコが気づいて隠れたから追われはしなかったけど、ハラケンの情報は間違っていないみたいだった。
「どうしよう。こんなに警戒されてたんじゃ、中津交差点までたどり着けないかも」

デンパが弱音を吐いた。イサコの作戦の成功失敗にかかわらず、デンパはイリーガルと別れなければならない。本心ではイサコの提案を受け入れられてないのだろう。その気持ちはよくわかる。私だって、デンスケと離ればなれになると知ったら首を縦には振れない。

「駄目だ。こんな機会、今を逃したらいつ訪れるかわからない。やると決めたからにはやらなくちゃいけないんだ」

イサコにもモジョってペットがいるってことは聞いてる。デンパの心がわからないはずがない。強い口調は自分自身の迷いをふっ切るためのものにも思えた。

鹿屋野神社の木立からは、速い流れで進んでいく雲が垣間見えた。空間の調子は悪い。時々メガネの端が真っ白く曇るのは、サーバが処理落ちしているせいだ。

「クビナガ、いる？」

優しさを包み込むように低いデンパの声に、すぐにうおおんと共鳴するような響きが答えた。木影がぬっと立ち上がり、大きなイリーガルが滑らかに進んでくる。イリーガルはデンパの目の前まで来ると、甘えるように頭を下げた。

「まずい。損傷が大きくなってる。一刻も早くもっと深いところに連れていかないと」

イサコが応急の修復を施しながら呟いた。

「先に陽動組がスタートするわね。ダイチ、あんたらは学校のほうへ行って。私たちは駅のほうで騒ぎを起こすから」

「おう」

フミエちゃんとダイチ、ふたつのグループが別々の方向に飛び出した。

ぴったり２０分して、それぞれから電話が入った。どっちも空間を乱すことには成功したらしい。

「すぐ行こう」

イサコが腰を上げた。

「もうかい？　サッチーがおとりに向かうまで、もう少し待ったほ

うがいいんじゃないか」
　ハラケンが止めると、イサコは不安そうに空を見上げた。
「できればそうしたいけど、見てくれ」
　空を覆い隠していた雲が薄くなっている。地面に目をやると、ところどころにうっすら白い染みのぽつぽつと、日かげと日なたが染め分けられ始めていた。
「クビナガは光に弱い。空が晴れる前に交差点まで行くぞ」
「クビナガ、いいかい？」
　デンパが首をなでるとイリーガルはゆっくり頭を下げた。言葉を分かっているのか、それとも心で通じ合っているのかな。それならなおさら辛いだろう。私はデンパの顔をきちんと見られなかった。
　鹿屋野神社の出口で早くも問題が起きた。車道に1歩踏み出した途端、イリーガルがくうとうめいて後ずさったのだ。
「しまった。もうそんなに明るいのか。ダイチのテクスチャカッターを借りておけばよかった」
　イサコが悔しそうにうつむく。今日のイサコは、どこか本調子じゃない。
「黒バグスプレー、持ってるわよ」
　ポシェットからスプレーを取り出すと、
「僕もある。でもこれだけじゃ、中津交差点までもたないな」
　ハラケンが答えてからからと缶を振った。
「メガシ屋にまだ在庫があるはずよ。私取ってくる」
　持っていたスプレーをイサコに渡して、私は交差点と逆方向に駆け出した。
　走る間にも、みるみる空の様子が変わっていった。薄まった雲に夕陽が映えて、見渡す限りが薄い赤に染まっていく。いつもならきれいな光景だと思うのだろうけど、その日の空の赤さは、何か不吉な、心の底を騒がせるものを持っていた。
　鹿屋野神社から家まで10分足らず。体育はいまいち苦手な私に

してはいいほうじゃないだろうか。息を切らしながらお店に駆けこんで、オババに事情の説明もせず、5本あった在庫を全部買って回れ右した。

スプレーの数は、中津交差点までには十分な量だ。少し気分が明るくなったのはいいけれど、それで警戒心も緩んでいた。行きはなるべく細道を進んだのに、帰りは心の急くのに任せて、つい最短距離の通りを選んでしまったのだ。

家の前の道と合流して学校に向かう通りを駆け抜け、鹿屋野神社のほうに曲がろうとした時、目の端にちらっと黒いものが映った。

「サッチー！？　嘘！」

私は慌てた。実は私がサッチーを見るのは、バスの墓場の時以来、まだ2度目なのだ。しかもあの時は私が狙われてたわけじゃなかったし、何より探偵局のみんながいてくれた。どうしよう。

とりあえずサッチーの入ってこれなそうな細い道に折れ、小走りになりながらハラケンに電話をかけた。電波状態が悪くてなかなかつながらない。

何回かむなしいコール音が響いて諦めかけた時、唐突に声が聞こえた。

「ヤサコ！　今どこにいるんだ」

どなり声はノイズ混じりだ。

「メガシ屋の近くよ。スプレーは手に入ったけど、サッチーに見つかったの」

「やっぱりそっちもか。僕たちもキュウちゃんに追われてる。とにかく数が多くて――　あっ」

甲高い音声が声をかき消す。

「ハラケン！？　ハラケン、どうしたの」

「何でもない、大丈夫。ヤサコこそのんびりしてちゃ危ない。サッチーに追いつかれたらひとたまりもないよ」

「安心して。狭い道に入ったから簡単には追ってこられないわ」

一瞬の沈黙の後、再び電話がどなった。

「サッチーを甘く見ちゃ駄目だ！」
「え？」
ハラケンの言葉にどきりとして振り向いた私は息を飲んだ。サッチーがすぐ近くまで迫っている！　吸盤状の腕を左右の壁に貼りつけて地面から浮き上がり、道路幅よりも広いはずの巨体を潰れたゼリーのように歪ませて。
「きゃあっ」
「ヤサコ！　どうした？　ヤサコってば！」
けれど私はもう必死で駆けていたから、ハラケンに答える余裕はなかった。左右を挟まれていかにも窮屈そうな見た目に関わらず、サッチーはすいすい進んでくる。
「やだっ、来ないで」
走りながら一番威力のあるメタタグを探った。キュウちゃんなら自己修復不能なまでに破壊できるレベル。かなりやばい代物だから本当に万一の時以外には絶対に使うなって、オババから釘を刺されていたものだ。
「来ないで！　それ以上来たらメタタグを投げるわよ」
そんなことをしてもサッチーが止まるわけないのはわかっていたけど、一応警告したつもりになって、真っ直ぐ向かってくるサッチーにメタタグを構える。
「それっ」
全力で投げるとほぼ狙いどおり、サッチーのひしゃげた顔の左の辺りにメタタグが命中した。がりがり引っかくような音を立て、黒い皮膚に数字や記号が浮かび上がる。うまくいった、部分的にだけどフリーズしたらしい。
サッチーがのったりと左腕を顔に伸ばした。支えを失った左の胴が壁から滑り落ちた。右手は左とは関係なく動き続けて、半身を引きずりながら私のほうに向かってくる。でも動きは遅い。これなら歩いても逃げられる。
「ごめんなさい」

謝りの言葉を残して数歩駆けた時、ばつん、と分厚い布を裁つような大きな音がした。それを聞いた途端、何かとても嫌な予感が前進を貫いた。それで、私はおそるおそる、振り向いた。

サッチーの顔面は自らの手でそぎ落とされていた。断面から赤黒く枝分かれした電脳物質が無数にとび出してくる。ぶるぶる脈動しながら寄り集まって、いたるところで引っかかり、絡まり、ダマになった部分がいくつもくっついて、次第に新しい体ができていく。むしり取られた体はどろどろに溶け、すぐに地面に消えた。

私は逃げるのも忘れてサッチーを見つめていた。おぞましい気持ちだった。サッチーの再生にとても不吉なものを感じたのもあるけれど、それ以上に自分の行為の結果があまなったのだという、自己嫌悪に似た感覚を覚えていたせいだと思う。だから、動けなかった。

金縛りが解けたのは、すっかり回復したサッチーが私をにらんでからだ。サーチライトのように光るふたつの目が私を照らし出して、それでやっと我に帰った。

フォーマット光線が来る！　反射的に飛びのくと、ポシェットにしまうのも忘れて両腕に抱えていたスプレーのひとつがこぼれ落ちた。

拾う間もなく、光線がスプレーに命中した。缶がぐにゃりと潰れ、次の瞬間弾けた。中身が真っ黒なもやになって飛び出し、そこらじゅうにへばりつく。辺り一面黒のまだらになった。

サッチーは考え込むように頭を下げた。またたく間に体の側面にいくつも穴が開き、一斉にフォーマット光線が発射される。ものすごい速さで空間が修復されていく。

「逃げなきゃ」

私は再び走り出した。何か体が重くて走りづらい。私の体にもスプレーの黒バグがくっついているせいだろうか。嘘、電脳体が重さを持つなんてあるはずがない。

よたよたと走っていると、後ろで雷鳴のようなものすごい音が響いた。気にしている暇はないと思いつつも、つい目がそっちへ向か

う。

屈みこんだサッチーの上半身が縦にまっぷたつに裂けて、巨大な口が姿を現していた。端々の空間はほとんど処理を終え、残った高密度のバグのかたまりをぬめる両腕で絡め取ると、自分の体ほどに広がった口が押し潰すようにかぶさって、バグを丸飲みにしていく。口の端に並んだ小さい歯の列がぞわぞわと波打つごとに、バグがサッチーの体に押し込まれる。気持ちが悪くなって目をそらし、もう後は前だけを見た。

実際に走っていたのはせいぜい5分とかそのくらいだろうけど、本当に、1日中サッチーに追い回されているような気分だった。慣れない細道に入ってしまったせいでもう自分がどこにいるかもわからなくて、とにかく足だけを必死で回していた。当然そのうち息切れがして頭が重くなる。体のあらゆる部分が悲鳴を上げる。全部無視してただ走ったけど、何かにつまずいて地面に投げ出されると、体を起こすこともできなかった。

サッチーはすぐ近くにいる。もう駄目だ。

着信がいくつもあった。ハラケンとデンパ、フミエちゃんも。イサコからもひとつだけある。最新のにリダイヤルするとすぐにハラケンの声が聞こえた。

「ヤサコ？　ヤサコか！？」

荒い息を抑えて、私は訊ねた。

「そっちはどう？　クビナガは無事？　みんなやられてない？」

「両方大丈夫、今のところは。ヤサコはどこにいるの？　早く来てほしい、スプレーがもうなくなりそうなんだ」

「私は無理っぽい」

電話の向こうに一瞬沈黙があった。あっけに取られたハラケンの顔が目に浮かんで、場違いな苦笑が漏れる。

「ヤサコ、どうした？　一体何があった！？」

サッチーの目が光った。

「ごめん」

「ヤサコ！」

空間の具合か、通話が切れた。

第5話　最後の巨竜　Ｄ　ｐａｒｔ

ハラケンの急報を受けてヤサコのもとへ急いだ私とカンナだったけど、現場に着いた時は全てがもう後の祭りだった。
まあ悪いほうではなくて良いほうに転んでだから、結果オーライではあるんだけど。
「フミエちゃん、葦原さん、来てくれたの」
地面に座り込んでいたヤサコがこっちを見上げた。
「お姉ちゃん、親友の危機にずいぶん遅かったですね」
振り向いたアキラがにやにや笑いを浮かべる。このやろ、今度ご飯にジャムかけてやる。
「大体かたはついたぜ」
得意そうに胸を張るガチャギリの後ろで、サッチーの下半身だけがじたばたもがいていた。カンナが目を丸くする。
「な、何これ。あなたたちがやったの？」
「おうよ。こいつでな」
ガチャギリの手にはこの間ダイチが持っていたのと同じ、テクスチャカッターが握られていた。
「ダイチさんがマンションの空間をずらしたやつの応用だよ。地面を現実よりも下げて、サッチーが降りたタイミングで更新したんだ。サッチーは論理結界にはまりこんで動けなくなったってわけ」
愚弟はガチャギリの真似をして貧弱な胸をそらせた。ますますジャムだ。でも、
「あれ？　あんたら、その時いなかったんじゃないの」
「それが、心配になって後をつけてたんですって」
ゆるく笑みを浮かべてヤサコが答えると、ガチャギリは急にうつむいた。
「心配っつーか、考え直したんだよ。イサコに万一のことがあったら俺たちの収入に響くから」

照れてる。意外と純情なやつだ。そのまま黙りこくってしまったので、アキラが後を引き継いだ。
「今日もみんながそろって学校を出ていくから、何かあるって思ったんだ。それでガチャギリさんと会ってたら、偶然ヤサコさんがサッチーに追われてるのを見かけて」
「ふたりとも、本当にありがとう。あなたたちがいなかったら、私、多分メガネを壊されてた」
お尻を払いながら立ち上がったヤサコが丁寧に頭を下げた。
「礼なんていいんだよ。それよりイサコ達が待ってんだろ。早く行ってやろうぜ」
「それがいいです。サッチーもじき復活しますから」
サッチーは破損した身体の切断にかかっていた。芋虫のように不格好な足がじわじわと、自らの胴に食い込んでいく。
「ううっ、いつ見ても気味悪いわね、あいつ。さっさと行きましょ」
ヤサコの体を押すように、私たちはその場を離れた。

しばらく走った時、不意にサイレンの音が辺りに鳴り渡った。みんな、つい立ち止まる。
「何かしら、これ。防災無線？」
「おいおい、大黒は確かに田舎だけどな、そんな古めかしいものはさすがに残ってねえよ」
きょろきょろと見回すヤサコをガチャギリがたしなめる。
「これ、電脳の音声ですね」
アキラがメガネを外して確かめながら言った。その時、サイレンが弱まって放送が始まった。
「大黒市民の皆さん、こちらは大黒市役所空間管理室です。本日、大規模な電脳異常が観測されております。サーチマトンによる一斉駆除を実施しますので、今後2時間はメガネを使用しないか、外出を控えるようお願いいたします」
気の強そうな女の人の声だった。どうしたんだろう、こんな放送

を聞くのは初めてだ。
「警告に従わずメガネを破損された場合の賠償には、大黒市、メガマスともに応じかねますのでご注意ください」
「どういうことだ」
私と同じ疑問を持ったらしいガチャギリが腕組みした。
「確かにここんとこの空間異常はひでえ。でもこれくらい、これまでにもなかったわけじゃねえぞ」
「そうね。どうして今日に限って――」
突然音声に雑音が入って騒がしくなった。
「タマコ！　まずいよ、これ。一体誰に許可取ったんだよ」
今度は男の声だ。それも若い、高校か、せいぜい大学生くらいだろう。
「そんなものいらないわ。大体ね、機能はあるのに使わないなんて宝の持ち腐れなのよ」
「そういう問題じゃないだろ。いきなりこんな放送流したらクレームが殺到するぞ」
「肝っ玉の小さいやつねえ。これくらい脅かしとかなくちゃ、誰もこっちのいうこと聞かないわ。私が担当を任されたからには、がんがんやるわよ」
「極端だよ……あれ？　おい、マイクが入ったままだぞ！」
「あ、しまった。とにかく！　しばらくはメガネ使うんじゃないわよ！」
どすの効いた声で放送は締めくくられた。
「よくわからないけど、とにかくまずそうですね」
アキラが呟く。確かにそのとおりだ。空間管理室って、お役所だけにお役所仕事だったから、サッチーが多少やばくてもこれまでやってこれたのだ。さっきの声みたいなアグレッシブな人が担当になったら、大黒市の電脳クラブは戦々恐々だろう。
「だがいいこともあるな」
ガチャギリがにいっと笑った。

「こんな放送聞いたら、大抵のやつらはメガネを外すだろう。イリーガルが見つかる可能性も低まったってわけだ。俺たちはあいつを”あっち”に帰すことだけに集中できるぜ」
「”あっち”？　それ、何よ」
「なんだフミエ、お前知らねえのか。古い空間の中でも特に深い、検索の効かねえ空間のことを”あっち”っていうんだよ。掲示板じゃ有名だぞ」
「私たち、そんな怪しい掲示板なんか見ないもの。ねえ、ヤサコ」
返事がないので振り向くと、ヤサコはぼやっと突っ立っていた。
「”あっち”って……」
「あれ？　ヤサコも”あっち”、知ってたの」
「え？　ううん、ちょっと聞いたことあるみたいな気がして」
「おい、そんなことどうだっていいだろ。早くイサコ達のところへ行くぞ」
「あっ、うん」
先を走るガチャギリの背中を慌てて追いかけながら、心にはヤサコの顔が残像のようにしみついていた。

中津交差点からそう遠くない、古い民家に三方を囲われた袋小路で、イサコ達は奮戦していた。サッチーが3体、キュウちゃんに到っては１０いくつも集まっている。路地に踏み込もうとするサッチーに、イサコとダイチ、ナメッチの3人が弾幕を張って、なんとか侵入を防いでいた。
「あれじゃ多勢に無勢だわ。ハラケンの『待て』はどうしたのかしら」
遠目に現場を見ながら口にしたヤサコに、
「駄目なの。研一の場合、１度サッチーを止めたら1時間以内は同じ命令が効かないのよ」
カンナが答えた。それじゃ絶体絶命ってわけだ。
「急がないとみんなやられちゃいますよ」

「そうは言ってもな、くそ、これじゃ近づけもしねえぞ。フミエ、いい考えはねえのか」
珍しくガチャギリも焦っている。
「おやおや、さすがの黒客でもお困りってわけね」
私は余裕の笑みをかました。
「フミエちゃん、どうしてそんなに落ち着いてるの？　何かアイデアがあるの？」
「ふふふ」
「おい、笑ってる場合じゃねえぞ」
「そうだよお姉ちゃん」
かまびすしい野次を手で抑えて、私はおもむろに聞いた。
「ねえカンナ、ハラケンがサッチーを止める方法ってなんだっけ」
カンナは狐につままれたような顔をした。
「なんだっけもなにも、『待て』って命令じゃない」
「その『待て』よ。ハラケンの声に反応してるのよね」
後ろ手で密かにモニターを立ち上げてかたかたやる。
「つまりサッチーへの命令は声紋認証になってるのよ」
「な、なに、その声！？」
皆が驚きの声を上げる。私の声はもっと年上の、別の女の人の声に変わっていた。
「それ、さっきの放送と同じだ！」
ガチャギリが一番初めに気づいた。
「声紋とか音声のハックは得意技よ。あの放送って多分サッチーの管理者でしょ。きっとハラケンより威力があるわ」
「さっすがフミエちゃん」
勢いよく背中を叩いたのはヤサコかと思ったらカンナだった。驚いて見つめられて、カンナは真っ赤になった。
「ごめんなさい、これで研一を助けられると思ったら嬉しくなって」
「ははは、カンナはハラケン思いねえ」
ますます赤くなってうつむいたカンナから、私は電脳戦の現場に

視線を移す。
「それじゃ行くわよ」
言うが早いか猛ダッシュで走り込んだ。手近のサッチーにカンシャクをぶつけると、巨体がうるさそうにのろのろと振り返る。さて、いけるか。
「待て！」
声を聞いた途端、目の前のサッチーどころか、その場にいたサッチーとキュウちゃんの全てが硬直した。うまくいった、予想以上の効果だ。
「よし、みんなこっちに来い」
私が歩き出すと、小山のようなサッチーが従順についてくる。なかなかいい気分だ。後はこいつらをなるべく遠くにやる、と。ここは市街地の西側だから、
「あんたたち、東の空間異常をフォーマットしてくること。全部終わるまで戻ってきちゃ駄目よ。わかった？」
サッチーたちは黙って頭を下げる。
「じゃあ、行け！」
オートマトンたちは迅速に命令を執行した。息をつきながら声を戻していると、静かになった路地裏からダイチの顔が飛び出した。
「お、お前がサッチーを追い払ったのか」
「そうよ。余計なお世話だった？」
「いや。すまねえ、礼を言うぜ」
「え」
素直な言葉につと引き込まれそうになった時、ダイチが振り返った。
「みんな、もう大丈夫だ。サッチーは行っちまったぜ」
「本当っすか？」
おっかなびっくりの風情でナメッチが、続いてハラケン、その後でイサコとデンパが左右からイリーガルをかばう形で現れた。イリーガルはデンパにもたれかかって、大分具合が悪そうだ。

「急ぎましょう。もうかなり明るいわ」
ヤサコが雲の切れ間にのぞく夕陽を仰いだ。
「黒バグスプレー持ってきたから、手分けして塗りましょう」
スプレーを1個ずつ手渡して、自分も地面に屈みこむ。
「よし、じゃあ黒客は見張りについて。サッチーが来たら私が止める」
「了解」

中津交差点のすぐ近くにはサッチーが2体へばりついていたから、さっきと同じ方法で追い払った。空間異常の発生地点はもうすぐそこ、のはずだった。
「おかしいな。データ上は目視確認できるほどの異常があるはずなんだが」
イサコがモニターに映った電脳マップを見ながら呟く。
「見た感じ、古い空間はありそうにないけど」
辺りを眺め回していたハラケンが少し申し訳なさそうに言った。
「そんな！　じゃあクビナガはどうなるの？」
デンパが声を上げ、みんながうつむいたその時。
しばらく前に聞いたのと同じ、低いサイレンの音が町全体にこだました。
「空間管理室より全サーチマトンへ。至急中津交差点へ戻れ。ハッカーがいる可能性が高い。全力で排除しろ」
「まずい、ばれた」
私は浮足立ちかけた。が、ひと際大きく響いた鳴き声が焦りを吹き飛ばした。
「クビナガ！？　どこへ行くの」
イリーガルが黒バグを飛び出していた。人気のない道路を滑るように、交差点へ向かっていく。
「しまった。サイレンの音を仲間だと思ったんだ」
イサコが顔を歪めた。

雲間から射す陽も大きく傾いて、灰色がかった影に隠れかけた町で、交差点の周りだけが、行き場を失った光たちのたゆたうように、濃い赤に染まっていた。イリーガルは真っ直ぐそっちを目指していく。

「みんな、止めて！」

デンパの声に慌てて走り出そうとして、でもすぐに足が止まった。イリーガルの体は壊れ始めていた。損傷の大きかった個所から順にノイズが強くなって、一部はもう消えてしまっている。

「駄目だ……」

イサコの諦めたような、それでいてすがりつくような声が、悲しい確信になった。

他のみんなも同じことを考えたようだった。イリーガルを追いかけているのはデンパだけだ。

「デンパ、危ないわ！」

イリーガルが消滅する時に近くにいたらダメージを受ける。けれど、ダイチの手が私を遮った。

「一緒にいさせてやれよ。メガネのひとつやそこら壊れたって、俺たちで修理代くらい持つさ」

黒客の皆が黙ってうなずいた。

イリーガルに追いついたデンパは、最初はなんとか止めようとしているのが体の動きでわかったけど、そのうちに身振りはやんで、ただ一緒に走っている、ううん、そうじゃなく、むしろイリーガルを励まして前へ進ませようとしているように見えた。まるで、イリーガルの帰るべき故郷がそっちにあるとでもいうように。後でデンパは、イリーガルは穏やかに笑っていたと言った。顔面の損傷がそう見えただけなのだろうけど、デンパにとっては確かにそうだったんだと思う。

イリーガルが交差点にたどり着いた時、陽が落ちた。ほんの一瞬だけ、燃えるような赤がイリーガルを、デンパを、そして私たちを染め上げて、その後でふっと暗くなり、気がついたらもうイリーガ

ルはいなかった。
デンパは夕の赤から夜の青に身支度を替えつつある空を少しの間見上げて、それで黙って戻ってきた。泣いているのかと思ったけどそうではなかった。
「みんな、ありがとう」
デンパが静かに言うと、誰かのしゃくりあげる声が聞こえた。
「デンパ、残念だったな」
ダイチが小さく呟いて、
「力になれなくてごめん」
私も頭を下げた。
「ううん、そんなことないよ」
デンパは微笑んだ。
「みんな、クビナガが消えちゃったと思ってるね。違うんだ。クビナガは元いた世界に戻ったんだよ。僕には見えたんだ。クビナガが仲間と一緒に、故郷に帰っていくのが」
私は何も答えられなかった。それはデンパが傷心を自ら覆い隠すために見た幻なのかもしれなかった。けれど、たとえ幻であっても、それはデンパだけの真実でもあった。
しばらく誰も動かなかった。どれくらい経ったか、突然サイレンが鳴った。
「空間異常の収束を確認。緊急出動中のオートマトンは即時任務を中止、帰還せよ。残りも通常のパトロールに戻れ」
さっきの女の人とやり合っていた若い男の人の声だった。どうやら更なる危険は免れたらしい。
「遅くなっちまったな。帰ろうぜ」
「そうっすね。腹も減ったし」
ダイチがわざと明るく言い放って、ナメッチが後を追った。ガチャギリに肩を軽く叩かれ、デンパもこっくりとうなずいて歩き出した。
最後までその場にいたのは、ヤサコとイサコだった。残照という

のか、空気の中に残った薄い光が柔らかくふたりを映して、声をかけたらその温かさが破れてしまいそうだったから、私は何も言わずに待っていた。

「あ、フミエちゃん」

やがてヤサコが、夢から覚めたように言った。

「待たせちゃってごめんなさい。帰りましょう」

「うん」

「デンパの言ったことは本当かもしれない」

突然後ろ姿のイサコが呟いた。

「クビナガは、生まれた場所に帰ったんだ」

「そうね。私もそう思う」

ふっと空を見上げて、ヤサコが答えた。イサコはこっちを見ずに肩でうなずいて、袖口で顔をこすると、同じように上を向いた。

ふたりはそのまま、雲の消えた空に星がまたたくまで、仲良く並んでいた。

何もしないで立っていると5月だっていうのにうすら寒くなってきたから、私は近くのコンビニで温かい缶コーヒーを3つ買ってきた。イサコに缶コーヒーを投げて渡すと驚いたみたいに受け取って、その驚いた顔のままで短く「ありがとう」と呟いて、そのまま回れ右をして帰ってしまった。

コーヒーを飲みながらヤサコと帰る途中、私は思いついて聞いた。

「ヤサコさ、さっきイサコが『クビナガは故郷に帰った』って言った時うなずいてたじゃない。あれ、励ましてたの？」

ヤサコは頬に当てていた缶を離すと、私のほうを見た。

「ううん、そうじゃないの。クビナガが消えた時、夕焼けが見えたでしょ。私、見覚えがあるの。誰か古い友達と、あの光景を見たことがあるような気がして。だからクビナガも、あそこで待ってくれていた仲間と帰っていったんじゃないかなって。私の勝手な思い込みだけど」

メガネを通して見るヤサコの大きな瞳の中に、一瞬だけ、さっき

の赤い夕陽がよみがえったような気がした。

第5話　最後の巨竜　Ｄ　ｐａｒｔ（後書き）

第5話はこれにて終了です。

第6話　かけがえのない夏へ　Ａ　ｐａｒｔ

古い友達によると、幸せな時間はすぐに過ぎてしまうようでいて、本当はいつまでも残っているそうです。

わあわあやっている間に5月も終わり、夏の初めがやってきた。梅雨入りの直前、若葉の緑が目に眩しい。

クビナガの事件でさすがのイサコもへこんでしまうんじゃないかとちょっと心配だったけど、ほんの何日か後にはもう黒客を指図して駆け回っていると、アキラから聞いた。その日もホームルームが終わるとイサコはすぐに席を離れ、ダイチに目で合図しながら教室を出ていった。

「元気なのはいいけどさ、黒客が活発になるのは困りもんよねえ」

イサコの後ろ姿がドアから消えるのを横目に流しながら私は大きく息をついた。ダイチがむっとした顔で席を立って、因縁でもつけにくるかと思ったら、その顔はにやにや嫌らしい笑いに変わって、何も言わずにイサコを追う。

「何よ、あの態度。調子に乗っちゃって」

「フミエちゃん、そうでもないらしいわよ」

ヤサコがいさめた。

「この前の空間異常の時、サッチーが大量投入されたでしょ。それで古い空間がさっぱりきれいにされちゃったみたいなの。イリーガルを探すの、大変なんじゃないかなあ」

「私も心配だな」

アイコが後ろから私の頭の上にあごを乗せてきた。

「ちょ、ちょっと何すんのよ。重いじゃない」

「フミエ、ちっちゃいからちょうどいいのよ。お子様だから」

「なにを！」
立ち上がろうとするとアイコはますますのしかかってきた。
「でも考え方までお子様なのはいただけないわね」
「へ？」
「イサコ、がんばりすぎてるじゃん」
「あ、私もそう思った」
ヤサコが手を打つ。
「授業も真面目に聞いてる感じだし、体育なんかもすごく熱心よね。この間５０メートル走の計測した時、マイコ先生が驚いてたわ」
結構なことだ。私はよくわからなかった。
「それのどこが悪いの？」
「あーあ、だからあんたはお子様だってのよ」
アイコはませた顔して溜息をついた。
「イサコ、焦ってるのよ。あの子って何でも自分で抱え込んで、ひとりで解決しようとするタイプでしょ。自分の悩みを他人に悟られたくないから、ああやって完璧超人のふりしてるんだわ」
「うーん、そういうものかしらね」
正直いって納得できなかったけれど、アイコの声は自信ありそうだし、ヤサコもうなずいている。
「鈍いわねえ。フミエ、そんなだと好きな人に逃げられちゃうよ」
「ちょ、バカ！　そんなのいないわよ！」
思い切り立ち上がったせいで見事にアッパーが決まってしまった。アイコはあごを押さえながらふらふら席に崩れる。
「バ、バカはお前だ……。あご、外れるかと思った……」
「当然の報いだわ。ヤサコ、行くわよ」
振り返りもせず教室を出ると、窓と校舎に切り取られた三角形の青空が私を半分だけ照らした。。
外はいい天気だった。修学旅行が近づいたのが待ち遠しいのもあってか、なんだか時間の経つのが遅くて、けれどその分１日１日の

密度が濃くなっているような気もする。
「まったく、アイコってば何でも恋愛方面に結びつけるんだから。困ったもんだわ」
　両手を頭の後ろで組んで伸びをしながら言うと、ヤサコは苦笑した。
「アイコちゃん、かなり痛そうだったわよ。明日会ったら謝りなさいよ」
「わかってるって」
「本当ね」
　ヤサコは念押しして、その後で笑いを収めた。
「でも、アイコちゃんの言ってたイサコのことは多分当ってるわ。実は私も心配してたの」
「だからって私たちに何ができるっていうのよ」
「何もできないから余計に心配なんじゃない」
　ヤサコは急にうつむいてしまった。見た目柔らかいイメージだから皆からは落ち着いてると思われているらしいけど、友達になってみると、ヤサコはけっこう感情の起伏が激しい子だ。
「じゃあさ、取りあえず情報収集兼何かあった時の準備ってことで、メガシ屋行こうか」
「うん、そうね。そういえば、最近オババの招集もなかったし」
　空間がきれいになったせいなのだろう、ペットの行方不明が減って、ここ2週間くらいは探偵局も閑古鳥だったのだ。
　うまいことにそこでT字路だった。
「じゃあカバン置いてダッシュで行くわ」
　右に行けばメガシ屋、左なら私の家だ。ここから家まで、それでもって回れ右でメガシ屋まで走ると、ヤサコが歩いて家に着くのとぴったり同じ時間なのだ。だから、その日のヤサコの家の玄関には「ただいま」と「お邪魔します」が同時に響いた。
「あら？」

靴を脱ごうとしたヤサコが先に気づいた。
「お客さんかしら」
見ると、薄く墨を溶いたような暗い玄関に、真っ黒いライダーブーツと履き古したスニーカーが仲良く並んでいる。誰だろう。メガばあや先生のお客にしたら若い感じだ。
その時、奥のふすまが開いて先生の顔が突き出した。
「おお、帰ってきたの。ヤサコや、それにフミちゃんもこっちにおいで」
「は、はあい」
私はヤサコと顔を見合せながら、奥の間に向かった。
奥の間は奥といっても本当に奥ではない。ヤサコの家は玄関の真逆がメガシ屋のお店になっているから、奥の間は店舗部分のすぐ隣なのだ。8畳くらいの部屋にこたつがあって、お店の暇な時や冬の寒い日はメガばあは大抵そこにいる。こたつのあっち側と番台とすぐ隣りあった、怠け者設計なのだ。
ところが今日の怠け者席の主はメガばあではなく、小此木先生だった。そして、こっちに背を向けた頭がふたつ。
「いやあ、今日は婆さんが腰痛とかで病院に行っておってな、わしひとりで難儀しておったんじゃよ」
「あるいは私が来ると察して逃げ出したか、ね」
頭のひとつが振り向くと、切れ長のほんの少し吊った目の、鋭い雰囲気を持った女の人だった。こたつに全く似合わない黒のライダースーツも精悍な感じを高めている。きれいだけどちょっと恐い。
「こんにちは。先生のお孫さんに、君は橋本文恵さんだね」
もう片方は最初の女の人と同じくらいの歳の、若い男の人だ。目付きが鋭いのは女の人と似ているのに、丁寧な挨拶の言葉も手伝って、どっちかというと丸い印象だ。それにしてもこの人は、まだ6月頭だってのにどうしてノースリーブのシャツ1枚なのだろう。これまたこたつが似合わないことはなはだしい。
「この子たちは市の空間管理室の非常勤職員でな」

どきっとした。そんな人がどうしてここに。まさか、逮捕される？　ぎくしゃくと首を回すと、ヤサコも隣で硬直している。

その時、お店の前の数段の石段をぱたぱたと駆け上る足音が聞こえて、すぐおもてに影が差した。

「こんにちは、研一来てますか」

カンナだ。

「すぐ来るわ。あんたも上がりなさい」

先生を差し置いて女の人が返事をする。お店の中は暗くてこっちからは表情は見えないけど、カンナがびくっと体を震わせたのはわかった。

「た、玉子さん……」

「カンナ、知ってるの？」

「うん……。この人、原川玉子さん。研一のおばさん」

「お、おばさん！？　ハラケンの！？」

「おばさんおばさん言わないでよ。これでも女子高生なんだから」

なんともリアクションの取りようがわからず、ヤサコと私はただ顔を見合わせた。男の人のほうも、口元の笑いを手で隠しながら言った。

「そして僕は猫目宗助。玉子の同りょ――」

「私のパシリよ」

猫目と名乗ったその人は、所在なさそうに体を縮めた。

「ふたりともコイル探偵局の会員なんじゃよ。玉子が3番、宗助が5番じゃの」

「つ、つまり私たちの先輩ってこと？」

「正確には先輩だった、ね。私は、今はもう会員じゃないから。そして、元先輩の割には後輩の指導が足りなかったのを反省して、今日久しぶりに来たってわけ」

原川玉子はかわいい後輩を順繰りににらみつけた。

その後すぐにハラケンがやってきて、それからのくだくだしいお

説教は取りあえず省略する。要は、空間を乱すな、古い空間を広げるな、街中で電脳戦争をするな、一般人に迷惑をかけるなと、まあこれまでやってきたことをいちいち怒られたわけだ。

「まったく、あんたらには常識ってものがないのかしら」

遠慮ない怒りをぶつけてくる原川玉子に対して、猫目宗助のほうはフォロー役だった。

「まあまあ、僕たちだって小学生の頃は無茶やったろ」

「でもその時はメガばあにお尻ひっぱたかれたわ。最近の子供は、怒ってやる人がいないからつけ上がるのよ」

「そうでもないさ。とにかく落ち着いて」

たしなめつつ、猫目さんは私たちに向き直った。

「君たち、悪いね。この人、かわいがってるペットを壊されたからとさかに来てるんだよ」

「ペット？　あの、私たちが原川さんのペットを壊したんですか」

ヤサコがいぶかしげに聞いた。

「そうよ。何度もやっといて、今さらしらばっくれる気？」

この人のペット？　私たちが何度も壊した？

「サッチーだよ。オバちゃんはサッチーを半分私物化してるんだ」

ハラケンがぼそっと言った。

「何で？」

「かわいいからに決まってるでしょうが」

鼻息荒く原川玉子が返す。私はむしろ、そう言われたことで原川玉子、ハラケンのいうオバちゃんが、通常とは大分離れた感性を持っているんだなと妙に納得して自然とうなずいた。そうか、ハラケンがサッチーを操れるのもこの、オバちゃんの力だろう。

「玉子さん、ごめんなさい。でも私たち、いたずらで空間を壊したわけじゃないの。ちゃんと理由があって――」

「犯罪者ってのは大体そう言うわ」

ヤサコの弁明に、オバちゃんはにべもなかった。

「サッチーの修理、空間の補修、一体いくらかかったか。今のとこ

ろ真犯人はぼかして報告してるけど、事実を正式に報告したら、あんた達すぐにお縄よ」

カンナがぎくりと固まった。やばい、それはさすがにやばすぎだ。

「玉子、小学生相手に脅しが過ぎるぞ」

さすがに先生が止めに入った。

「でも事実よ。電脳治安維持法に照らしたら……」

「馬鹿者、あれはやり過ぎの悪法じゃ。しかも、メガマスが袖の裏で成立させたのがわかっとるから、警察もほとんど見逃して、すっかり有名無実化しとるわい。くそ真面目にあの法律を守っとるのはオートマトンくらいじゃろう」

いつもは優しい先生の顔に朱が差してきた。

「やめよう」

猫目さんが割って入った。

「先生、僕らはなにもお孫さん達を検挙しようとして来たわけじゃありません。ただちょっと釘を刺しておかないといけないと思ったのと、それから――」

「それから？」

私が耳ざとく促すと、オバちゃんが引き取った。

「あんた達に頼みがあるの」

「頼み？」

怒るだけ怒っておいて今さら頼みってのも虫のいい話だ。けれど、オバちゃんの言葉を聞いた途端に反発心は流れて、ただぼんやりした不安が湧き起こった。

「そう。あんた達のクラスに、天沢勇子って子がいるでしょ。その子の目的を調べてほしい」

第6話　かけがえのない夏へ　Ｂ　ｐａｒｔ

ぽたり、と雨が頬を打った。道に沿って伸びる掘割に浅く溜まった水のおもてを、間延びした波紋がふたつ、みっつと泳いでいく。近くにある昔からの染め物工場が流す水は、今は透明だけど昔は赤かったり黄色かったりしたそうだ。大きなひび割れのいくつも入った掘割の壁を横に走る黒いしみだけが、話にしか聞いたことのない過去を、今の僕たちに伝えている。

僕たちはそういう、なかば寂れた工場区画に来ていた。

「イサコちゃんの目的って何かしら。そもそも目的なんてあるのかな」

カンナはトートバッグから赤い折り畳みの傘を取り出し、差そうとしてから一瞬迷って空を見上げ、結局片手にぶら下げた。

「みんなは何て言ってた？」

「ダイチ君は『そんなのねえ』って怒ってたわ。ナメッチは、『世の中には知らなくていいこともあるっす』って」

「収穫なしか」

「悪かったわね。研一のほうはどうだったのよ」

「う、うん。僕も何もわからなかった」

ガチャギリは予想どおり、『知らねえ。知ってても教えるわけねえだろ』と突っぱねてきた。デンパのほうは『僕は何も知らない』そして、『知る必要はないもの。僕は力の及ぶ限りイサコの助けになるだけだよ』。どうやらクビナガの一件からこっち、イサコをすっかり信頼しているらしい。

「駄目じゃん」

カンナは短く呟いて、すっと足を速めた。あれ？　どこかいつものカンナと違う。

「研一、早く来なさいよ」

「あっ、ごめんごめん」

いくつもの雨粒が混じった風が僕とカンナの間を分けて、掘割の水面が騒がしくなった。

「ここよ」

フミエの指差す先に、通り雨の跡をぬれぬれと輝かせるコンクリートの正門があった。町はずれの廃工場。閉鎖はつい一昨年のことだが、管理者がいないのだろう、校内は雑草が生え放題、施錠されているはずの正門も蝶つがいが壊れてだらしなく半分開いている。

「イサコたち、ここでイリーガルを探してるって。確かな筋からの情報よ」

『確かな筋』というのはアキラだろう。かわいそうに、あまりひどいことされてないといいけど。

「でもここ、私有地でしょ。勝手に入って大丈夫かしら」

フミエと一緒に来たヤサコが不安そうに呟いた。

「問題ないわ。どうせ誰も来やしないんだから。それに私有地だからこそサッチーが入り込めないで、古い空間が残ってるのよ」

「う、うん。それはわかってるけど……」

「恐がることないって。万が一の時は空間管理室に頼まれたって言えばいいんだから」

フミエはヤサコの肩をばんばん叩いた。オバちゃんの来訪の目的のひとつ、探偵局への牽制は、見事に逆効果だったといっていい。

「とにかく行ってみましょう。イサコちゃんたち、もう中にいるんでしょ」

カンナが促したけれど、僕にはまだ納得いかないことがあった。

「待ってくれよ。オバちゃんに頼まれたのは、イサコの目的を調べろ、ってことだろ。こんなふうにただつけ回してても意味がないんじゃないか？」

「なによ今さら」

フミエは僕をにらんだ。

「意味はあるわ。何故ならまず第一に、口頭での事情聴取は失敗に

終わったわね」
「確かに。黒客のみんなも、教えないっていうよりは自分たちもイサコの目的なんて知らなかったみたい」
ヤサコがうなずく。
「そのとおり。イサコ本人が口を割るとは思えないから、関係者から事情を聴くって道は消えると」
フミエはそこでひと呼吸置いて、
「じゃあ次の手段だけど、ひとつはネットからイサコのメガネにハックして情報を奪う」
「絶対無理ね」
カンナが言った。
「ええ。そんなことできるなら、あのおっかないオバちゃんがとっくにやってるでしょ。空間管理室にもできないんじゃ、私たちにはとても無理。となると残りは、直接あいつらを見張るよりないってわけ」
「うーん、方法が限られるのはわかったけど、だからって尾行だって、あんまり成果は上がらないと思うけど」
フミエの目がきらりと光った。
「そりゃ、ただ漫然と見張ってたらね」
「フミエちゃん、なんだか考えがありそうね」
ヤサコの問いにフミエはにやりと笑った。
「もちろん。今回は私たちもきっちり目標を定めましょ。イサコの行動そのものより、イサコがイリーガルを呼び出す時に使う暗号とか、電脳ツールを調べるのよ」
「ツールを？　何のために？」
「決まってる。イサコのバックボーンを探るためよ」
「バックボーン？」
ヤサコがおうむ返しに聞き返した。
「考えてもみなさいよ。イサコのこれまでの行動、全部ひとりで仕組んだことだと思う？」

「ダイチたちがいるじゃない」
「あいつらは単なる実行犯よ。私の言ってるのはそこじゃなくて、作戦の計画を練るとか、空間の状態を調べるとか、あのモジョってやつとか電脳ツールのメンテをするとか、そういう裏方の仕事をしてるやつがきっといる、ってことよ」
なるほど。フミエの推測には一理ある。確かにイサコがいくら常識外れの能力を持っているといっても、ひとりで全部は見切れないはずだ。だとすると、
「多分どこかの電脳クラブか、そうでなかったらイサコ並に優秀なハッカーが裏についてるんだわ。それがどこのどいつか洗い出せば、イサコがどんな立場でイリーガルを狩ってるのかもわかる。イサコの秘密にぐっと近づけるわ」
「そうか、それでツールを」
電脳ツールには開発者のくせみたいなものが強く反映される。その辺の事情に詳しい人間なら、ツールを解析すれば、それがどの電脳駄菓子屋で開発されて、どの電脳クラブが使用していたかまで当ててしまう。多分メガばあならそれができるだろう。
「わかったわね。それじゃ、作戦開始！」

黒客を見つけたのは薄暗い構内に入ってすぐだった。T字路の端でイサコが指示を出している。
「今回は深い空間からイリーガルを釣り上げるための大きな仕掛けを作る。お前たちは指定のポイントに暗号を設置してくれ」
ひとりひとり暗号と構内のマップを受け取った黒客の面々は通路を右手に走っていく。最後にダイチとうなずき合ってから、ひとり残ったイサコは、しばらく皆の後ろ姿を見つめた後で、左側の通路へと姿を消した。
「私たちもふた手に分かれましょ。ヤサコ、あんたは私と一緒にダイチを追うわよ。ハラケンとカンナはイサコをお願い」
「私、イサコのほうがいいな」

ヤサコがちょっと文句を言った。
「駄目。あんたとイサコと一緒にすると絶対話がややこしくなるから」
フミエは断定的に答えて、返事も待たずに歩き出した。ヤサコはしぶしぶその後をついていく。
「カンナ、僕たちも」
「ええ」
イサコに見つからないよう間合いを取ってから、僕たちは三叉路を曲がった。

工場の外側はおんぼろだったけど、中に入ってみるとけっこう新しそうだ。
「へえ。最新の設備ね、これ」
制御室らしい部屋をのぞきこんだカンナが言う。
「ああ、カンナのお父さんは電脳技術を使った産業装置の会社に勤めてるからわかるんだね」
「あ、うん……。少しだけ」
カンナは何故かうつむいた。
「それより今はイサコちゃんよ。ほら、見失っちゃう」
僕の言葉を封じるようにカンナは駆け出して、それでもやもやだけが胸の奥に残った。
イサコは工場の奥へ、奥へと進んでいく。やがて一番端の、外に面した窓のところまできて、イサコは不意に立ち止まった。小走りになっていた僕も慌ててブレーキをかけたけど、後ろから来たカンナが一瞬遅れて、ぱたりと足音が響いた。ウィンドウを立ち上げていたイサコの顔がぴくっと動く。間一髪、僕たちは手近にあった部屋に飛び込んだ。
薄暗いその部屋も制御室の一種らしかった。今イサコのいるのが作業エリアなのだろう。そちらに向かって広い嵌め殺しの窓が取られている。ゆっくりと首を伸ばすと、幸いイサコは大して気にしな

かったようで、再びウィンドウに向かっていた。
「見つかってないみたいね」
気がつくとカンナの顔が並んでいた。
「うん、もう少し様子を見てみよう」
「何かツールを使ったら、私、動画を取っておくわ」
カンナはイサコに見えない低い位置でキーボードを叩き始めた。
5分ほど待って早くも監視に飽き始めた時、空気が流れたような気がした。
「研一」
カンナも顔を上げる。気のせいじゃない。
イサコが窓の外を見た。工場の壁に連なって長く伸びた窓からの景色は殺風景だ。錆びついた古い資材の積み上げられた、灰色の壁——いや、その風景が、急速に揺らぎ始めた。
「古い空間だわ！」
窓から濃いオレンジの光が、侵食するように射し入ってくる。照り返しを受けたイサコの目が輝く。
「カンナ、撮影は！？」
「やってる！」
ふたりとも叫び声だ。大勢の人間がざわめくような、気持ちの悪いノイズがあたりに満ちて、普通の声ではお互い聞き取れないのだ。
イサコが喋っていた。口の動きが見えるだけだから、何と言っているのかはわからない。でも言葉を発するイサコの、今までに見たことのない切なそうな表情が僕の心に刺さった。
「見て！　窓の外」
カンナの指差した方向に、一面の山吹色の黄昏の中、無数の影が浮かんでいた。イサコはそっちに向かって話しかけている。影たちは行くでも来るでもなく、かげろうのようにたゆたう。その姿はまるで、僕たちを誘っているようにも見えた。
知らず知らずのうちに僕は立ち上がって、光の回廊に近づいていた。以前電脳体分離した時に図書室で読んだファイルの断片が心に

浮かび上がる。あれが”あっち”？　僕の願いを叶えてくれる？

「研一、ちょっと待ってよ、イサコにばれちゃう」

カンナに引きとめられて、危うく僕は我に帰った。一体何を考えていたんだ？　心のどこかに残った誘惑を振り払って、イサコに注意を向ける。

イサコは全然僕たちに気がつかない。更に何かを言いながら、窓へ向けて手を伸ばすと、影の中のひとつがにわかに大きくなって近づき始めた。イリーガルだ。卵が立ち上がったような楕円形が地面すれすれに浮かび上がっている。

「来い！」

叫び声は僕たちのところまで届いた。イリーガルが窓を乗り越えて室内に入り込んだ瞬間、イサコは窓に向けて暗号を放った。青白い光がぱっと弾けて、つぶった目を開けた時には、”あっち”の光景はもうどこにもなかった。

イリーガルは取り残されたようにたたずんでいた。光の加減か、黒としか見えなかった体にはっきりと模様が現れていた。山吹の光をわずかに残した薄い黄色の楕円の球体に、針金細工のような滑らかな曲線が揺れ動いている。

「鳥――かしら？」

曲線が時折重なって、生き物のような外観になるのだ。有機物と無機物をかけ合わせて骨組みだけを抜き出したような、不思議なフォルムだった。

イサコがにじり寄った。イリーガルはまだ自分の置かれた状況が飲み込めないのか、ふるふる弱く震えている。

イサコの口元に不敵な笑みが浮かんで、右手のひらの上に一瞬で複雑な暗号が組み上げられた。捕獲するつもりだ。

イリーガルが暗号に反応した。卵型の中心が強く輝く。

「無駄だ！」

イサコが叫ぶ。地面に投げつけられた暗号から放射状に青い光がほとばしる。イリーガルは締めつけられたように動かなく――いや

！　すぐに全身の形がぐにゃりと歪んで光の中心からはみ出した。
「何だと！？」
　イサコの慌てた声。すぐに暗号が生成され、２度、３度と床が光る。
「くそ、あいつらしくじったな。仕掛けが完全じゃない」
　罠の中のイリーガルがもがく。暗号が不安定に明滅する。
「止まれ！　止まれというんだ！」
　イサコが数発目の暗号を投げようとした時、イリーガルがまるで太陽のように輝いた。
「きゃあっ」
　カンナの悲鳴が聞こえて、とっさにその体の上に被さった。同時にばしゅっと何かの作動音が聞こえた。
　しばらくは目がくらんで何も見えなかった。１０秒ほど目を閉じてからゆっくりとまぶたを開くと、ようやく屋外から差し込む四角い光が映って、その後でだんだんと目が慣れた。
「カンナ。カンナ、大丈夫？」
　声をかけると、うずくまっていたカンナはゆっくり起き上がった。
「うん、平気。でもさっきの光、何だったのかしら。びっくりしちゃった」
　外をのぞくと、作業エリアにはイサコがひとり取り残されていた。床に座り込んで、両手で目を覆っている。あれだけの光を間近で浴びたんだ、無理もない。光は単なる目くらましだったのか、電脳体に損傷はないみたいだ。イリーガルの姿はどこにもない。
「イリーガルは逃げたみたい――」
「研一！」
　硬い声が僕の言葉に被さった。
「どうしたの？」
　ふりむいた僕にも、すぐにその原因がわかった。
　開け放しだったはずの扉が隙間なく閉じている。
　僕は急いで扉に駆け寄った。取っ手に手をかけて思い切り引いた

けど、ロックでもかかっているのか、扉はびくともしない。カンナとふたりでやっても同じだった。
「何これ。どうしよう」
カンナは泣きそうになっている。
「とにかく別動隊に連絡してみる」
が、電話はつながらなかった。空間のノイズがとんでもなく激しい。
「駄目だ、連絡が取れない」
僕はガラスの向こうに視線をやって、
「仕方ない、作戦は中断だ。イサコに助けてもらおう」
「うん」
やっと立ち上がったイサコは、窓をどんどん叩くと、すぐにこっちに気づいて目を丸くした。何か言っているが、扉が閉まっていると防音効果抜群で、全く聞き取れない。すぐにそうと悟ったらしく、メモを立ち上げてこっちに向けた。
『お前たち、そこで何をしている?』
僕より先にカンナが応じた。
『ごめんなさい。私たち、あなたの行動を調べに来た。でもここに閉じ込められてしまった』
イサコはすぐに扉へ走った。扉についた小窓からのぞくと、キーロックの部分をのぞき込んで調べているらしかった。
『お前たちが来た時は扉が開いていたのか?』
僕は素早くメモを立ち上げた。
『そうだ。イリーガルが光った時に扉が閉じたらしい』
イサコは何事か悟ったらしく、ひとりでうなずいた。上がった顔が明るかったから、僕たちは少し安心した。
『原因はわかった。イリーガルの発光と同時に構内の電位が乱れたんだ。その影響で管制システムが起動したらしい。この扉もそのひとつだが、これくらいなら私の暗号でロック解除できる』
「よかった」

カンナが心底ほっとした顔で言う。僕も『ありがとう。早速頼む』と書いたメモを見せた。が、
『安心するのは早い。扉を開くことができるとは言ったが、開けてやるとは言ってない』
「何だって!?」
『冗談だ。お前たちは助けてやる。ただし、逃げたイリーガルを捕まえた後でだ』
「そんな」
『悪いが、うろちょろ嗅ぎ回ってたお前たちの自業自得だ。少しそこで反省してろ』
最後のメモを残してイサコはぱっと走り出した。無情な背中はすぐに小窓から消えた。
「困ったな」
なかばひとりごとで呟くと、
「待つしかないわよ。イサコちゃんは約束を破ったりしないわ」
カンナは首を傾げ気味にして微笑んだ。
「そうだね」
僕もそれで微笑み返した。

待っていればイサコが助けに来るとわかっていても、なじみのない工場の薄暗い景色は僕を不安にさせた。カンナも同じだったらしい、数日もすれば忘れてしまうような取りとめのない話をふたりで１０分、２０分と続けていた。イサコはまだ来ない。
ふと、話が途切れた。僕が顔を上げるとちょうどカンナも僕を見たところで、目と目がぴったりと合った。
「ちょっと、寒くなってきたね」
どうしてか慌てて視線を外しながら、僕は座っていた長椅子の端に寄った。
「ありがとう」
カンナはすぐに席を立って、僕の隣に腰かけた。いすのクッショ

ンが少しへこんで、わずかに体が傾いだのに、何ていえばいいんだろう、カンナがそこにいるということがすごくはっきりと感じられて、嬉しいような、寂しいような、変な気分になった。

僕は何も喋らなかった。カンナも。

黙って座っていた時間は多分5分足らずのはずだ。それなのに、僕にはとても、とても長かった。いろんなことを思い出して、思い出しつくして、何故だろう、カンナと知り合った頃のことや、そんな昔まで心によみがえった。あの頃のカンナは小さかったな。あれ、今でも小さいか。小さくて、おとなしくて、僕を兄さんみたいにしたってくれる、みんな、昔も今も変わらない。

「こうしてふたりで並んでいるのって、どれくらいぶりかしら」

思い出に沈み込んでいた僕の耳に、不意に今のカンナの声が届いた。

「えっ？」

つい聞き返すと、

「ふたりだけで一緒にいたのってどれくらいぶりか、って聞いたのよ」

「なに言ってるんだい？　ほんの1時間前だってふたりでここまで来たじゃないか」

「そっか、そうだったわね」

カンナはくすくすと笑った。何がおかしいのかよくわからなかったけれど、僕も調子を合わせた。

「最近いろいろあったせいかしら。研一とふたりきりなのってすごく久しぶりな気がする」

「そういわれてみると、僕もだな」

ふたりの時の話題も、探偵局のこと、イサコ達のこと、イリーガルのこと、そんなのばかりで、カンナをカンナとしてよりは、コイル探偵局の仲間として見ていた。今はそうじゃなくて、僕の隣に座っているのは葦原かんなというひとりの女の子だった。

「私、研一にはずうっと甘えっぱなしだったね。反省しなきゃ」

カンナは懐かしむように言った。僕は少し可笑しかった。それで、
「本当にそのとおりだ」
大真面目に答えてやると、カンナは唇を尖らした。
「なにそれ。ちょっとは違うとか言ってよ」
「だって違わないから」
「ひどいの」
僕はくっくっと笑っていた。見ていたカンナもそのうち、つられるように笑い出した。おかしいというよりは、嬉しくて笑っていた。こうしてカンナとふたり、心を通わせて笑っていられることが、本当に、温かい、嬉しいと思った。
「カンナ」
僕はカンナに甘えられるのが幸せなんだ。
「研一」
カンナの言葉がすっと温度を失った。
「今まで言えなくてごめん」
「え、何の――」
「私、この町から引っ越すことになったの」

第6話　かけがえのない夏へ　Ｃ　ｐａｒｔ（前書き）

今回は年末進行にて前倒し掲載いたします。
１月２日はお休みを頂き、次回投稿は１月９日ということで。
なお、９日のＤ、Ｅパートで第６話はおしまいです。

本年もご愛読、ありがとうございました。
皆様、良きお年を迎えられますよう。

第6話　かけがえのない夏へ　Ｃ　ｐａｒｔ

「おっ、ここにもあった」
フミエちゃんが早くも3個目の暗号を発見した。私はといえば、目を皿のようにして探しているのに、まだひとつも見つけられない。
「フミエちゃん、すごいわ。コツでもあるの？」
「そんなものないわ。ヤサコとの違いは、長年の勘ってやつよ」
フミエちゃんは私に余裕たっぷりの視線を送って、すぐそれを暗号に戻した。
「うーん、悔しいけど、イサコのやつやっぱりすごいわ。こんな暗号、先生だって簡単には作れないわよ。ほら」
「へえ、これが」
私はフミエちゃんから受け取った暗号に顔を近づけた。
「そうよ。あっ、あっちにもある」
ポケットに入るくらいの小さな暗号の中に、工芸品のように繊細な模様が隙間なく詰まっている。手を動かすと、わずかな光がきらきら反射して輝いた。きれいだ。
つい見とれて、しばらくの間、いろいろ角度を変えて宝石のようなそれをもてあそんでいた。でもこれ、何かに似ている。
「ねえフミエちゃん、これ、どこかで見たことない？」
返事がない。
「フミエちゃん、フミエちゃんったら――」
フミエちゃんの姿はどこにもない。私だけの廊下にゆるやかな風が流れた。
「どこに行ったのかしら」
ひとりで暗号を追っていってしまったのだろうか。大声で名前を呼ぼうかとも思ったけれど、黒客に聞かれたらまずいからやめた。空間の乱れている場所の常で、電話もつながらない。仕方がないから、ひとりで構内の探索を続けながらフミエちゃんを探すことにし

た。

じりじり低い音が絶え間なく続いている。不安定な空間の乱れが収まらないのだろう。気持ち良くはなかったけれど、私自身の足音もかき消されるから、少し大またで急ぎ足に歩いた。それでもフミエちゃんは見つからない。それどころか、ハラケンや葦原さんはもちろん、黒客の誰かの姿も全然見えなかった。

もしかすると前みたいに知らないうちに電脳体分離して、私だけが古い空間をさまよっているのだろうか。そうじゃないと言いたいけれど、それを確かめる手段はない。

不安になって顔を上げた時、一瞬空間が大きく乱れた。その後でぶうんという起動音のようなものが鳴り渡って、突然照明が点灯した。誰かが工場の動力を再起動したのだろうか。見回すと、「管制室」と書かれたプレートが目に止まった。

扉に鍵はかかっていなかった。細く開けてのぞき込むと、照明は消えていて、人の姿はない。ゆっくりと部屋に入って、窓がないから戸を開けて光を確保してから、照明のスイッチを探した。でも、普通なら扉のすぐ横の壁についているはずのスイッチが何故か見つからない。部屋の中でそれらしきものがあるのは、ものものしい計器類の並んだ管制盤の上だけだ。ものはためしとばかりにスイッチのひとつを押してみると、ぱっと部屋の中に光が散った。

照明じゃない。奥の壁一面に設置されたいくつものモニターが一斉に輝いたのだ。

「工場内の監視カメラだわ」

管制盤のそれらしいボタンを押すと、それぞれのカメラを動かして視野を変えることができた。ちょうどいい。これでフミエちゃんを探してみよう。

１番モニターから順番に動かす。４番目までは何も見つからなかった。閉鎖からそれほど経っていないせいで、まだ荒れたというほどではない工場の内部。それだけに、人ひとりの姿も見えないのがむしろ薄気味悪くなってくる。

５つ目のモニターを回した時、カメラの端に何か映った。はっとして画面を戻す。フミエちゃんじゃない、ふたりいる。ハラケンと、それに葦原さんだ。ハラケンならフミエちゃんを呼び出す方法を知っているかもしれない。管制盤をもう１度眺め渡すと、うまい具合にマイクがある。放送対象をふたりのいる部屋に設定して、マイクを握った。

「ハラケン、葦原さん。私よ、ヤサコ」

モニターを通して見えるふたりには何の反応もない。

「聞こえないの？　返事して」

やはり気づいてないようだ。私はボリュームを最大まで上げた。

『――どうして今まで黙ってたんだ？』

いきなり部屋の中に声が響いて、私は飛び上がった。でも、すぐにそれがスピーカーからのものと分かった。ハラケンだ。私の声をハラケンに届けるはずが、どうかしてハラケンの部屋の音がこっちにつながってしまったらしい。

『３日くらい前に決まったの。その後は言いそびれてて……』

マイクのスイッチを切ろうとした手が止まった。ハラケンと葦原さんは間近で見つめ合っていた。ふたりとも真剣そうだ。ならばなおさら私が聞いてはいけないのだろうけど、手は動かなかった。

『もっと、もっと早く言ってくれれば』

『ごめんなさい。でも先にお父さんだけ行くことになったから、私は多分夏休み明けくらいよ。転校までまだ時間はあるわ』

転校！？　葦原さんが？

『夏休み明け……』

『そう、まだ３カ月もある。修学旅行だって夏祭りだってあるじゃない。ふたりで思い出を作りましょうよ』

ふたりで、という言葉がやけに重く響いた。そのふたりに私は入ってない。

『それでも、そんなのずるいよ』

うつむいたハラケンの頬に光るものが見えた。私はつい、モニタ

ーに顔を近づける。
突然、廊下を人の走る音が聞こえた。慌てて、乱暴に手が動いた。モニターとマイクが切り替わって声が途切れる。
直後、何かが部屋に飛び込んできた。人ではなかった。夕焼けを卵型に閉じ込めたような電脳生物。きっとイリーガルだ。
「待て！」
短い叫びが上がって、廊下にツインテールの人影が現れる。
「ふん、自分から行き止まりの部屋に逃げ込んでくれるとはな。これで袋のネズミ――」
瞬間こっちに見開かれた目は、すぐに嘲笑うように細まった。
「私も間抜けだな。カンナ達がここにいたなら、当然お前だっているはずだ」
すぐイリーガルに視線を戻して、
「邪魔だ。出ていけ」
「いや！」
考えのまとまる前に口から飛び出していた。
「バカ、お前のために言ってるのがわからないか。今からこいつを捕まえるんだ。巻き添えで電脳体を損傷するぞ」
「わかってるわよ」
全然わかってなかったけどそう答え、私は壁を背にして座り込んだ。
「私は動かないわ」
「勝手にしろ」
言葉が届いた時にはもうそこになかったくらいの速さで、イサコはイリーガルの目の前に走った。イリーガルはふっと後ろに下がる。間を置かずにイサコが踏み込んで、振り上げた左手に暗号が輝いた。が、投げるより先に卵の中から黒い針金のような筋が何本も伸びる。
「くっ」
反射的に引いた手には傷を負わなかったみたいだけど、刺し貫かれた暗号は急速にばらけて散った。針金はすぐに卵の中に沈む。と

思ったのもつかの間、今度はイサコめがけて黒い筋が走る。よろけながら危うくかわした体に、間を置かず次の攻撃が迫る。それもくぐり抜けた背中はしかし、管制盤にぶつかった。もう後がない。

また幾本もの筋がほとばしった。が、それはイサコに向かってではなかった。私の投げたメタタグが切り裂かれ、またたく間に消える。イリーガルは素早く向きを変え、再びイサコを襲った。

「イサコ！」

叫んだと同時にぱすっと乾いた音がした。白い光がきらめいて、その後に黒いかけらが舞う。

「ダウンロードに少し時間がかかったな」

イサコの右手にはいつか見た大剣が握られていた。イリーガルも手強いと見たか、途中で切れた針金をするすると体に引き込んで、わずかに後退する。

少し間があって、剣を構えたイサコが1歩進んだ途端、イリーガルの体から四方に黒いものが散った。部屋の一面に広がった黒い針金は、ゆっくりと目標を定めるように、その先端だけ折り返してイサコのほうに向ける。数も多い。さっきまでは3、4本に見えたけど、今イサコを狙っているのは10本以上ある。

イサコは余裕の表情を崩さず、もう1歩踏み出そうと足を上げた。瞬間、黒い針金の全てがイサコに向かって突進した。八方からの攻撃を、きれいに円を描いた剣がなぎ払う。

針金が少し引いた。と思うと、今度は先端がイサコを囲むように回り込む。が、イリーガルの作戦を見越したらしい。イサコの体がぱっと動いた。イリーガルの目前に飛び込んだ体が剣を振るう。一瞬で根元から落とされた針金が風化するように崩れた。

間近に迫ったイサコに、イリーガルは次々と攻撃を繰り出す。それをイサコは軽やかに手首で剣を扱って、雑草でも刈り取るように防いでいる。

剣戟に思わず見とれていると突然イリーガルの足元で何かが破裂した。イサコが右手で剣を操りながら、左手で作った暗号を放った

のだ。山吹の卵がぐらりと傾いで、攻撃が止まる。
「もらった！」
イサコが剣を突き出した瞬間、眩い光が辺りを包んだ。
「きゃあっ」
情けない私の悲鳴に、
「同じ手は食わないぞ」
イサコの声が被さった。ばん、と何かのはぜる音。空間が乱れて激しいノイズが生まれる。大ぜいが叫び合っているような雑音で、何が起こっているのかわからない。
「どうしたっていうのよ」
涙をぬぐって無理に目を開くと、ぼやけた部屋の中にイリーガル姿が映った。すぐ近くにいる。はっとした瞬間、山吹の表面にぽつぽつと黒いものが浮いた。
「危ない！」
後ろから覆いかぶさってきたものに押されて、私の体は振り返ろうとした中途半端な体勢のまま押し倒された。上を向いた視線を幾筋もの黒い縞が横切る。モニターのいくつかに映る映像が乱れた。スピーカーがばりばりととんでもない轟音を吐き出して、すぐに静かになった。
私はしばらくあおむけで寝転がっていた。短い時間で何が起こったのか頭の中で整理がついていなかったのだろう。床に当った背中が冷たくて、でも胸のほうは温かかった。
「いい加減手を離せ」
温かいものが言って、私はようやくイサコの服をつかんでいることに気がついた。着古されて柔らかくなったデニム地の感触。
「助けてくれたのね」
上体を起こしながら呟くと、
「借りを返したまでだ」
きつい目つきでにらまれた。
「もっともお前が暗号札を投げなくても、私はかわしていたけどな。

このお荷物め」
「それなら助けなくても良かったじゃない」
「うるさい。借りは借りだ」
イサコは私に背を向けてお尻を払った。
「お前がいたせいでイリーガルに逃げられてしまった。これはこっちの貸しだぞ」
「ならこの前のデンパのイリーガルは私の貸しよ」
言い返すと背中がびくっと動いて、その後で丸く縮んだ。
「そ、それは――確かにお前のいうとおりだ」
私は首を回してイサコの顔をのぞいた。イサコはすぐに気づいてあっちを向く。反対側に回ると今度はこっちへ。おかしくなってふふと息が抜けた。
「別にいいよ。貸し借りなんてこだわらなくていいっていってるだけ」
イサコは黙ってうなずく。
ふと私は、気になっていたことを聞こうと思いついた。
「イサコ、あの時『クビナガは故郷へ帰った』って言ったよね」
「ああ」
「私もそう思ったの。だってあの景色に見覚えがあったから」
「何だと」
イサコがこっちを向いて、すぐしまったという表情になって顔を背けた。
「やっぱり。イサコも知ってるのね」
「知らない」
「ごまかしたって駄目よ。今、顔に書いてあったわ」
「見間違いだろう。私には顔にものを書く趣味はない」
「もう。くだらない言い訳しないでよ」
私はぐっとイサコに近づいた。
「ねえ、教えて。あなたはあの風景、どこで見たの？」
「知らないと言ってるだろ。しつこいぞ」

イサコは片手で私の目の前を払った。当たりはしなかったけどどきっとして、その後で急に腹が立ってきた。
「そんな乱暴することないじゃない」
イサコは答えない。
「なによ。人がせっかく――」
言いかけてふと言葉が止まった。イサコが冷たい笑いを浮かべていた。
「せっかく、何だ?」
「え、えっと」
「何だろうな。『せっかく聞いてあげたのに』か? それとも、ああ、『せっかく友達になってあげようとしたのに』かな」
私は口を開けたけれど言葉が出なかった。
「お前はそうやって、親切づらして周りの人間をなびかせるのが得意だな」
イサコの笑いはじわじわと広がっていた。
「でも、本当のお前は残酷だ。相手が自分にへつらっているうちはよし、そうでなくなったら簡単に出した手を引っ込めて、困っている相手を見て喜んでいるんだ」
「そんな……そんなこと」
ない、とは言えなかった。

私には古い友達がいる。いや、会わなくなってもう何年にもなるから、いた、といったほうがいいのかもしれない。いつも、神社の階段を上ったところにある古い石碑にもたれて私を待っていた。私をいつくしむような優しさと、私をうらやむような寂しさを目元に浮かべていた、あの人。
握り合っていた、別れることのないと思っていたその手を離したのは。

黙り込んだ私をイサコはじっと見つめていた。ゆっくりと胸を浸

すものがあって、私は次第に苦しくなった。足元がふらついて、思わず手をついた管制盤のボタンや何やに指が触れ、スピーカーががさごそと鳴った。

私とイサコの間には、その苦しいものがいつまでもわだかまっている。それは私が作ったのかもしれなかった。

それでも、そうならばなおさら、その距離を越えていかなかったら、私は永遠にたどり着けない。だから私は呼びかけた。

第6話　かけがえのない夏へ　Ｄ　ｐａｒｔ

『ねえイサコ、私はやっぱりあなたのことが気になる』
スピーカーを通して、狭い部屋にヤサコの声が鳴り渡った。
「何だ、一体？」
カンナから見えないように顔をうつむけていた僕は、頬をそでで
こすって室内を見回した。
『私はお前なんてどうでもいい』
今度はイサコの声だ。
「ヤサコちゃん、イサコちゃん、聞こえる？　カンナよ」
窓のそばにあったマイクに向かってカンナが声を張り上げた。
『嘘よ。私、わかるもの。イサコだって私を気にしてる』
『何だと！　いい加減なことを言うな』
カンナはスルーされている。声は一方通行のようだ。
『いい加減じゃないわ。だってイサコ、私にばっかりきつく当たる
じゃない。意識してる証拠よ』
『それは……、それは、私はお前みたいな曖昧でどっちつかずで、
それでうまくやっていこうなんて人間が嫌いだからだ。お前だって、
私の転校してきた日に言ったろ。私たちは敵同士だ、って』
「カンナ、スピーカーの電源を切りなよ。これって盗み聞きだよ」
「う、うん。でも――」
カンナにはふたりのやり取りが引っかかっているらしい。目の前
にいる僕よりも。
「カンナ！」
強く言うと、
「すぐ切る。ごめんなさい」
マイクの周りを探っていたカンナは、けれどすぐに振り向いた。
「おかしいわ。この部屋の電源は全部オフになってる」
「えっ、そんな」

僕も一緒に探したけれど、確かにカンナのいうとおりだった。結局さっきのイリーガルの影響で勝手に電源が入っているのだと考えるよりなくて、そうだとすれば流れてくる音声を切る方法はなかった。

『違うの。敵って言ったのは、私たちは他人同士じゃなくって、何か関わりがあるって言いたかったのよ』

『そんなもの、なくてもいいさ』

僕はいらいらしていた。今はカンナとふたりで話していたいのに、余計な声が僕たちの間をかき乱す。それにカンナがふたりの会話に興味があるらしいのも、引越しなんて重大なことを打ち明けた後で、僕は裏切られたような気分で、余計にいらだちが増した。

『待って。まだ行かないで。私たちには絶対何かあるのよ。もしかすると、昔どこかで会っていたのかもしれない』

『いや、私がお前に会ったのは転校してきた日が初めてだ』

『わからないわ。忘れてるだけかもしれない。ねえ、試しに、私たちがどこで生まれてどこの学校に通ってたか、どんな場所によく行っていたか話し合ってみない？　私、引っ越したのは初めてじゃないから、もしかすると同じ学校に通っていた時期があるのかもしれない』

『しつこいぞ。関係ないといったらない。人の過去をほじくり返すような真似はやめろ』

ふたりの押し問答が続いている。

『関係あるかどうか、確かめればすむわ。通ってた学校くらい教えてよ』

『絶対嫌だ。じゃあな、私はイリーガルを捕まえなくちゃならないんだ』

『あ、待って』

甲高い足音がだんだん遠ざかった。ようやくだ。これで少しは、僕たちの話ができる。

「ヤサコちゃんとイサコちゃん、どうして仲良くできないのかしら」

ところがカンナの口から出てきたのはそんな言葉だったから、少なからず僕は落胆した。
「あのふたりがそんなに大事なの？」
僕の声には皮肉な調子があったのだけれど、カンナは気づかずに首を傾げた。
「そうよ。だってクラスメイトじゃない」
「ふたりともまだ転校してきてせいぜい２ヶ月じゃないか」
僕は１０年近くも一緒なのに。
「あっ、本当だ」
カンナは驚いたみたいに手を打った。
「あんまりいろいろあったから、ずっと前から知ってるような気がしてた」
もう勝手にしろ。僕はカンナから顔を背けようとした。
「でも良かったわ。転校前に親友がふたりも増えて」
カンナははにかんでいた。それで僕は目が離せなくなった。
笑いとは喜びとか嬉しさ、楽しさを表してるものだとばかり、僕はその時まで思っていた。カンナの顔は初めてだった。笑いを通してカンナの悲しみが伝わってきた。かわいそうに思ったんじゃない。カンナの笑みはとても透明で、それはカンナの悲しい気持ちが本当に心の底から湧いてくる混じりけのないものである証拠で、僕はそんなカンナの近くにいられるのが誇らしくて、そんなカンナの去ってしまうのが悔しくて、けれど種々の感情はすぐに吹き散り、見れば見るほどにただ、カンナの表情はきれいだった。僕は見とれていたのだ。
「研一？　私の顔に何か付いてる？」
カンナに言われるまで、僕はずっと黙ってその顔を見つめていた。
「ううん、何も」
僕はカンナの頭をなでた。カンナは少し驚いた様子で、でも動いたりせず、じっとされるままになっていた。
僕はその時何をしたかったのか。カンナを引き留めたくて、でも

それができないとはわかっていた。結局、僕は無力だった。現実をどうにもできない、それ以前にどうしていいかわからない、カンナの柔らかい髪をなでて、それ以上なにもできなかった。だから時が経つほど僕は惨めになって、それでも手を離せば2度と再びカンナと会えなくなりそうで、ただ行き場を失うように同じ動作を続けた。

「待って」

カンナの視線が急に僕からそれた。頭が動いて手が離れる。

「カンナ――」

「足音が聞こえる」

言われて耳を澄ますと確かに、廊下の向こうからかんかんと正確なテンポで硬い床を踏む音が近づいていた。イサコだ。

第6話　かけがえのない夏へ　Ｅ　ｐａｒｔ

今日は全く、本当にいいところなしだった。
工場の奥、カンナのいる部屋に向かいながら私は思い出していた。
見張られていたのに気づかない、イリーガルの捕獲に失敗する、ヤサコに変な難癖をつけられる、ダイチにバカにされる。
「情けねえなあ」
ダイチの遠慮ない大声が、ついさっきの出来事のように耳によみがえった。
「イサコ、どうしたんだよ。イリーガルを逃がしちまうなんて。お前にもらった暗号は言われたとおり仕掛けたはずだぜ」
こいつら、探偵局に見張られていて、セットした暗号を盗まれたらしいことに気づいてない。よほど言ってやろうかと思ったが、そうすると私がカンナたちに尾行されていたのもばれてしまうから、私はただ頭を下げた。
「すまない、私のミスだ」
「しっかりしてくれよ。町の空間がきれいになっちまったから、俺たちここしばらく無収入なんだぜ」
「ダイチ、それくらいにしとけ」
ガチャギリが間に入った。
「とにかく、イリーガルは逃げちまったんだろ」
「ああ。この工場にはもう反応がない。町のどこかに潜伏しているはずだ」
「じゃあサッチーにやられる前に見つけ出さないとまずいっすね」
「しばらく手分けして探してみましょう」
「修学旅行までに見つかるといいけど」
ナメッチ、続いてアキラ、デンパが話を引き取る。
「おい待てよ、勝手に話を進めるな」
「終わっちまったもんはしょうがねえだろ。正直言って今の黒客は、

イサコにおんぶにだっこなんだ。たまにミスったからってそう責められねえよ」

「そりゃまあそうだけど……。仕方ねえな」

ダイチは不承ぶしょううなずいた。

「それじゃ、今日のところは引き上げるか」

ぞろぞろ歩き出した背中を、私は見送った。

「あれ？　イサコ、早く来いよ」

「悪い、私はちょっとここの空間を調べてから帰る。先に行っててくれ」

「そうか。最近6時を過ぎるとサッチーの動きが活発になるっていうから、あんまり遅くなるなよ」

「わかった」

列の一番最後にくっついていたデンパの後ろ姿が消えてからきっかり3分待って、私は真逆を向いた。

イリーガルがいなくなった後も、構内のシステムはすぐには落ちなかった。カンナはまだ閉じ込められているはずだ。ヤサコ達が先に見つけ出している可能性は低い。あの制御室に行くにはややこしい道のりを越えていく必要があって、地図なしではそう簡単にはたどり着けないからだ。それに、さっきダイチ達と合流した時密かに探ったが、ヤサコとフミエ、どちらの気配も感じられなかった。多分尾行を中断して仲間を探しているのだ。

部屋の前に着くと、案の定扉は閉まったままだった。小窓からのぞきこもうとして、同じようにしていたカンナと目が合った。

「イサコちゃん、助けに来てくれたのね」

「うん。待たせてすまなかった」

何気なく答えてロックの解除にかかろうとして、ふと疑念が頭をもたげた。最初扉越しに話した時は声が届かなかったのに、どうして今は通じた？

はっとして、私は作業場を振り返った。やっぱりだ！　外は曇り

のはずなのに、真っ赤な夕焼けが差し込んでいる。古い空間が消えていない。それどころか制御室まで浸食して、一部を壊している。
カンナの声は電脳空間を通して聞こえているのだ。
「空間の調子が悪いみたいだ。何か異常はないか」
「今のところは大丈夫。早く扉を開けてくれ」
カンナの後ろからのぞいたハラケンの顔が答えた。
「わかってる」
ロックはカードをかざす方式だった。この手の仕組みは、元来独立したセキュリティシステムだったのをメガネの普及後に無理に作り変えたものだから、どこかにひずみがある。そんなウィークポイントを丹念に探してひとつひとつ壁に穴を開け、最後に細く伸ばした暗号を半回転させると、かちんと気持ちいい響きが腕に伝わって、音もなく扉が開いた。
安堵と疲れの表情を浮かべてふたりが出てくる。
「イサコちゃん、ありがとう」
カンナがぺこりと頭を下げた。
「あっ、つながった」
ハラケンが誰かに電話をかけている。多分ヤサコとフミエだろう。私は回れ右した。
「待ってイサコちゃん。一緒に帰らない？」
カンナが呆れるような提案をした。
「おいおい、尾行してたほうとされてたほうが仲良く帰れると思ってるのか？」
「もう済んだ話じゃない。そうだ、それより、イサコちゃんにも伝えておくね。私、夏休み明けに引っ越すの」
「えっ！？」
驚いた。そしてその驚きがあまり大きかったことに、さらに驚いた。カンナが越してしまう。
「だからね、イサコちゃんともたくさん思い出を作っておきたいの。修学旅行とか、夏休みとか、一緒に遊びましょうよ」

「う、うん――」
私たちの計画を考えたら、探偵局に属しているカンナにとても良い答えが返せるわけもなかったのに、ついうなずいていた。
「その第1弾として、今日はみんなで帰る。ヤサコちゃんも一緒にね」
「何だと。どうしていきなりヤサコの名前が出てくるんだ」
慌てて聞くと、
「私の目標だから」
「は？」
「引越しまでにイサコちゃんとヤサコちゃんを仲直りさせるって、目標にしたの。あなた達、けっこう気が合うはずよ」
カンナが1歩前に出て、気おされた私は後ずさった。こいつ、こんなに強引だったか？　それとも、引っ越すと決まってふっ切れたのだろうか。
「だ、駄目だ。私はヤサコのことが嫌いだし、ヤサコも私を嫌ってる。知ってるだろ。ヤサコは私を敵だって言ったんだ」
「嘘。ヤサコちゃんはあなたと話したがってるじゃない。さっきの話、聞いてたのよ」
かっと頭に血がのぼった。
「お前、聞いてたのか」
弱々しい声だった。
「聞いてたっていってるじゃない」
私は二の句を継げなかった。恥ずかしかったのだ。
「イサコちゃん、ヤサコちゃんのいうことには聞く耳持たないって感じだけど、話くらい聞いてあげてもいいと思うわ。別に責めてるわけじゃないし、あなたたちの間に何があるのか知らないから、私にこんなことという権利はないのかもしれないけれど」
カンナは真っ直ぐ私を見ていた。そう気づくと、私はますますうつむいた。
「それでも、ほんの少しだけ、歩み寄ってほしいの。お願い」

壁に背中がついた。追い詰められた獲物のようだった。
「駄目だ！」
叫び声と一緒に、私は走り出していた。
「ごめん」
こっちはカンナに届いたかわからない。
最悪だ。胸の中はその言葉で満ちていた。最悪だ。
あんな風に逃げ出して、カンナを傷つけてしまったろうか。わがままな子と思われたろうか。
カンナは私を大切に思ってくれている。私もカンナともっと仲良くなりたい。それなのに私とカンナの間にヤサコがいる。
みんなヤサコのせいだ。
ヤサコがいつも、いつも私たちの邪魔をするんだ。

第６話　かけがえのない夏へ　Ｅ　ｐａｒｔ（後書き）

第６話は今回で終わりです。次回、修学旅行編をお楽しみに。

第7話　迷宮への修学旅行　Ａ　ｐａｒｔ

あるアンケートによると、子供の頃の旅行は生涯忘れない思い出になるそうです。

ホームルームが終わると私は音を立てて席を立った。
「どうしたの、フミエちゃ――」
ヤサコの言い終わる前に平手で背中をぶったたく。ばちいんと爽快な音が教室に響いた。
「……った……」
「あのね、あんたそんなテンション低くてどうすんの。明日よ。明日から修学旅行なのよ」
「そんなの、たたかないでもわかってるわよ」
ヤサコは背中をガードしながらよろよろ席を立った。
「ヤサコ、まだ準備してないものないでしょうね」
「え、えっと、うん。大丈夫。だと思うけど」
「手ぬるい！」
私はこぶしで机を殴りつけた。クラス中の視線が集まる。
「あんたね。小学校最後の年よ。泊まりよ。2泊3日よ。京都よ。ジャポネーゼ・オールド・ハウプトシュタットよ」
「フミエちゃん、それ何語？」
「知らないわ。そんなことよりね、要はメモリアル！　なのよ。わかってる？」
赤くなったこぶしをもう1度握りしめた時、後ろから肩をたたかれた。
「橋本君、なかなか気合が入っておるね」
アイコ。
「アイコちゃん、助けて。フミエちゃんてば飛ばしすぎよ」

すがりつくヤサコを、アイコはするりとかわした。
「ノーノー、この場合はフミエが正しい」
「ええっ」
「フミエの言ってること本当よ。修学旅行ってすっごいいい思い出になるんだって。それにさ」
アイコはそこで声をひそめた。
「特に今回はカンナのこともあるじゃん。私たちがカンナの思い出をコーディネイトしてあげなくっちゃ」
そうだった。カンナが夏休み明けに転校してしまうって、この前廃工場を探索した帰りに聞いた。カンナにとってこの修学旅行は、私たち以上の大切な記念になるんだ。
「よっし、じゃあさ、これからメガシ屋で修学旅行の過ごし方、作戦会議しない？」
私が提案すると、ヤサコはぶんぶん首を振った。
「メガシ屋は駄目よ。オババに首突っ込まれたら困るじゃない。お土産の催促されるかもしれないし」
「いいじゃん。私、メガばあってけっこう好きだよ。あのたくましさ、女性として見習うべきとこがあるわ」
またもアイコが私についてくれた。ヤサコは見るからに嫌そうな顔をして、
「じゃあせめて私の部屋にしてよ」
「おーし、決定。じゃ、カンナ呼んでくるね」
「待て！」
アイコが私の襟首をつかんだ。
「あんた、やっぱりわかってない」
「何が？」
「カンナよ。見なさい、電話してるでしょ」
言われてみれば、確かにカンナは席で誰かと通話していた。多分ハラケンだろう、カンナは弾む声で話す。くったくのない笑顔。カンナって昔からおとなしくてかわらしいタイプだったけど、最近か

わいさにターボがかかった気がする。ちょっと引っ込み思案だったところがなくなってすごく明るい、毎日が楽しそうだ。

「葦原さん、なんだかきれいになったね」

ヤサコが何故か沈んだ声で言った。アイコはそんなヤサコにちらりと視線をやってすぐ、

「そういうわけ。だからカンナはハラケンとふたりにしといてあげな」

「そういうって、どういう？」

私はまだわからなかったけど、アイコが腕をぐいぐい引っ張るから、仕方なくカンナを誘うのはあきらめた。

「へえ、京都の街って本当に碁盤みたいね」

ヤサコの部屋のじゅうたんに大きな電脳マップを広げて、私たちは早速相談を始めた。

「そうよ、平安時代からそう。すごいでしょ」

「すごい」

ヤサコは素直にうなずいて、

「あら、京都駅って意外と南のほうにあるのね。それで1日目の行先は……」

「龍安寺。その後で仁和寺にもちょっと寄ってホテルね」

アイコの指が地図を京都駅から左上にたどり、その後でぐっと上に寄った。

「このホテルがまた辺ぴな場所よね。山の中じゃない」

「あれ、フミエ、知らないの？　鞍馬山観光ホテル、略してマヤ観。１００年前の創業で、旧華族なんかも泊まってたっていう有名なホテルよ。まさか修学旅行で行けるとは思わなかった」

アイコの瞳に星が浮かぶ。

「ふーん。まさかそんなご大層なところとはね。ま、それはいいとして、次の日がお待ちかね、丸1日自由行動！」

「アイコちゃんも私たちと一緒に回ればいいのに」

ヤサコが残念そうに言う。ヤサコ、カンナ、ハラケンと私は同じコースを回ろうと決めていた。

「残念だけどね、私にはどうしても行きたいところがあるから」

「アイコの行きたいところ？　ははあ、どうせ嵐山とかでしょ」

鋭く指摘してやったつもりが、

「違うわよ。大体２日目のホテルが嵐山じゃん」

「ありゃ、はずれか。じゃあ一体どこ？」

「広隆寺！」

アイコは宣言した。

「あそこの弥勒菩薩をじっくり見て、『美』ってものは何か、その秘訣を探ってくるわ。何つっても１３００年変わらず美しいんだから、並みの美容術なんか目じゃないわよ」

「……あ、そう。まあ適当にがんばって」

「がんばるわ」

相当な入れ込みようだ。

「えーと、それで自由行動の後京都御所に集合して、それで嵐山に泊まって、３日目は嵐山を散歩して帰る、だったっけ」

ヤサコが地図を追いながら聞く。

「そうそう。けっこうスケジュールいっぱいだからさ、ぼおっとしてるとどこ回ったかわからなくなっちゃう。今から気合い入れて、思いっきり満喫するわよ」

「右に同じ！」

アイコも調子を合わせると、ヤサコの顔にようやく笑みが浮かんだ。

「うわあ、楽しみになってきたな」

ヤサコがその気になったのは良かったけど、私はちょっと変に思った。

「ヤサコ、そんな話ホームルームとかで散々やってたじゃない。どうしたのよ」

「う、うん。あんまりよく聞いてなくて」

ヤサコの表情がまた沈む。このごろのヤサコは少しおかしい。そう、あの廃工場以来だ。

「ヤサコ、この間の廃工場で何かあったの？」

「えっ！？　いや、そんなこと……」

ヤサコはオーバーアクション気味に誤魔化そうとして、すぐに腕を下ろした。

「あの――。実は、あし……ううん、あのね、あそこでイサコと喧嘩しちゃって」

「ああ、そうだったんだ」

確かに、ここしばらくのイサコがヤサコを見る視線は、これまでよりさらにきつくなっていた。

「いいじゃない、あんなやつ。どうせ今までだってそんな仲良くしてなかったし――」

「あんなやつじゃないわ」

ヤサコは私をさえぎった。

「そうじゃないのよ」

言葉の接ぎ穂を失った私に代わってアイコがフォローに回る。

「確かに、嫌なやつじゃないわね。でも、なんか1枚壁を立ててるっていうか、私たちに心を開いてくれてないのよね」

「う、うん」

なんかその場全体のテンションが落ちそうになったので、私は急いで次の台詞を考えた。

「でも考えてみれば、修学旅行ってチャンスじゃない？　だってさ、同じクラスなんだから、3日間ほとんど一緒にいるわけよ。逆にいえば、イサコの行動を見張ってられるでしょ」

「そういうことも必要かもしれないな」

突然ドアの向こうから声がした。

「久しぶりね」

「やあ、こんにちは」

入ってきたのはオバちゃんと猫目さんだ。

「メガばあに聞いたらこっちだって言われてね。忙しい時に悪いけど、お邪魔するわよ」
きょとんとした表情のアイコに、
「この人たち、市の空間管理局の人。メガばあのお弟子さんよ」
「『元』ね」
オバちゃんが付け加えて、じゅうたんの空いた一角にどっかと腰を下ろした。
「修学旅行の前とは知らずにすまないね。時間はかけないから」
猫目さんはディスプレイを立ち上げると、壁の前に拡大した。
「これが何かはわかるね。この間君たちが見つけてきた、天沢勇子の暗号だ。で、それを解析した結果がこっち」
別枠のディスプレイには、素人目には何が何だかわからない文字列が連なっている。
「それで、これから何かわかったの？」
ヤサコが質問した。
「わかるにはわかったわ」
オバちゃんは複雑そうな表情でいうと、
「宗助。説明して」
「ああ」
猫目さんの目が光を帯びた。
「橋本さんの提案もあってね、僕たちはこの暗号を調べて、天沢勇子の裏についてる電脳クラブがないか、その当たりの詳細を洗い出そうとした。だけど、どうもそれが難しいんだ」
「難しい？　どうして？　解析ができなかったわけ？」
「いや、解析自体はうまくいった。問題は結果だよ。驚いたことにね、彼女の暗号は既存のどの暗号とも違う、オリジナルのものだったんだ」
「それって、暗号からじゃイサコの後ろについてる人たちはわからないってこと？」
ヤサコが聞くと、

「うん、それはもちろんなんだけど、僕が言ってるのはもっと重要なことだ。天沢勇子、イサコの暗号デザインは独特すぎる。いくらスキルが高いといったって、子供に作れるレベルじゃない」
「相手が小学生と思って甘く見すぎてたかもしれないわね」
オバちゃんが低い声で言った。
「あの、イサコがやってることってそんなにやばいんですか。まさか、逮捕とか……」
アイコが不安そうに訊ねた。
「安心して。現段階でそれはないわ。そもそも空間管理室に逮捕権はないし」
「むしろそうなる前にイサコたちを止めるのが僕らの仕事だ。これからも協力を頼む」
「何かあったら言って。何でもやるから」
私より先にヤサコが答えた。
「ありがとう」
猫目さんは少し考えてから、
「君は『電脳コイル』という言葉を知っているか？」
「宗助！」
オバちゃんが猫目さんをにらみつけた。
「それ以上は禁則事項だ」
「そんなもの、メガマスが自分の都合で決めただけじゃないか」
「だからって、空間管理室がメガマスの援助なしには成り立たないのも確かだろう」
ふたりは私たちを置いて言い争いを始めた。私はどうしてかちょっと不安になって、
「『電脳コイル』って一体何なの？　イサコと関係あるの？」
「あなたたちが知る必要ない」
オバちゃんはたたきつけるように答えると、すぐ猫目さんに向き直った。
「宗助、あんたも必要以上に秘匿情報を流すなら、正式に上部へ報

告するわよ」
　宗助さんは顔をしかめてうつむいた。
「さあ」
　オバちゃんはひざをぽんとたたくと立ち上がって、
「長居しちゃったみたいね。今の話は忘れて、修学旅行を楽しんで」
「待って」
　ヤサコが部屋を出ようとするオバちゃんを追った。
「こんな中途半端で忘れるも何もないわ。ちゃんと説明して。お願い」
　構わずに進むオバちゃんの腕をヤサコがつかむ。と、その腕を引くようにオバちゃんが振り向いた。バランスを乱してよろめいたヤサコの両肩をオバちゃんが押さえた。
「ヤサコ、イサコが心配なの？」
　ヤサコは黙ってオバちゃんの顔を見つめ、やがてそれがゆっくり下を向いた。
「大丈夫。私たちがなんとかするから」
　オバちゃんの目つきが少しだけゆるんだ。
「だから、あんたはイサコの手を握ってて。離すなよ」
　ヤサコは何故かはっとしたようにうなずいて、それでドアが閉まった。

　すったもんだはあったけど、帰ってひと晩寝て起きれば嫌でも修学旅行だ。今朝は大黒駅の向こう側、南口に近い図書館前の広場に集合の予定だった。
　平日に学校じゃないところに行くってだけでわくわくしてくる。いつもより早めに家を出て、駅向こうの道はよくわからないというヤサコを誘った後、途中でばったり出会ったアイコと3人で鉄橋の高架をくぐった。
　ヤサコはオバちゃんとの1件が頭を去らないのか、今日もさえない顔つきだった。

「ねえ、もうイサコのことなんか気にするのやめなよ。修学旅行、楽しまなくちゃ損だよ」
「うん……ごめんなさい」
全然上の空だ。アイコがぷっと吹き出した。
「まったく、ヤサコはイサコにべた惚れね」
「な、何言ってんのよ！？」
ヤサコは耳まで真っ赤になった。
「だって、寝ても覚めてもイサコ、イサコって」
「違うわよ！」
「あれ、それじゃ他に誰かいるのね。当ててみようか、例えば1組の――」
「ちょっと、駄目！　駄目ってば」
「おっ、こいつは図星かな」
逃げるアイコを、いきなり元気になったヤサコが追いかける。放っておけばいつまでも追いかけっこを続けていそうな勢いだ。私は呆れてしまった。
「あんたら……よくそんな好き嫌いとかでそこまで盛り上がれるわね」
「わかんないかなあ」
ひとしきり駆け回って大きな息をついたアイコは、白い歯を見せて笑った。ヤサコのほうは、走り疲れたのかその場にへたりこんでしまっている。
「わかるわけないわよ。ほら、余計な時間くった。さっさと行かないと集合時間、遅れるよ」
「そうね」
ふっとアイコの顔が近づいた。
「あんたもうまくやんなさいよ。チャンスだからね」
「はあ！？」
突き出した私の腕はむなしく空をつかんで、大荷物も軽々とアイコは駆け出した。

「やばいやばい、急がないと遅刻だ」
「おい待て。今のどういう意味よ」
「自分の胸に手を当てて考えてみたまえ」
「むちゃくちゃ言うな！　待て！　止まれ！」
私は地面を蹴った。最初はよろけたけど、うまくバランスを取ってスピードに乗ると、荷物の大きさもそう負担にならない。アイコの背中がぐんぐん近づく。
「うわ、もう追いついてるし。フミエ、体育と電脳以外にも力入れたほうがいいわよ」
「うっさい」
アイコは何度も捕まりそうになりながら、私が手を伸ばすたびするりと身をかわす。気がついたら、追いかけっこしながらもう集合場所まで着いていた。マイコ先生の顔が見えて、残念ながら一時休戦だった。
息を切らしながらマイコ先生に挨拶して3組の列に行くと、ダッシュが効いてまだ半分くらいの集まりだった。
「フミエちゃん、アイコちゃん、おはよう」
手を振ったカンナの近くに腰を下ろす。ダイチとナメッチはまだみたいだ。
「私、緊張して朝早く目が覚めちゃった」
カンナが笑う。私は大まじめで答えた。
「いいことよ。それくらいの気合をもって臨まなくちゃ。そこへ行くとうちのヤサコなんかは――」
その時になって初めて、足りないものに気がついた。
「あれ？　ヤサコ、どこ行った？」

第7話　迷宮への修学旅行　Ｂ　ｐａｒｔ

「ま……迷ったわ」

フミエちゃんがいないと気づいた時におとなしく電話して、その場で待っていればよかったのだ。それが、この前から連続で置き去りにされたのにむやみと腹が立って、自分ひとりで集合場所まで行こうとしたのが大間違いだった。地図のとおりに歩いてきたはずだったのに、何故か周りに田んぼなんかが見え始めて、さすがの私も集合場所とまるっきり違う場所へ来てしまったと認めざるを得なかった。

「地図がおかしいのかなあ。もしかして古いバージョンだったり」

上下を引っ繰り返したり、反転させたりしてみたけど、逆さにしても斜めにしてもわからないものはわからない。困っていると電話が鳴った。フミエちゃんからだ。

「もしもし、ヤサコ、今どこにいるの？」

「それがわからないのよ。駅向こうなのは確かだけど」

「そりゃそうでしょ。具体的にどこ？　バス停とか、目立つ建物とかない？」

「田んぼがある」

その隣には、簡単な木の庇の下にお地蔵さんがまつってある。

「田んぼ？　あんた一体どこの田舎にいるのよ。もう１５分ちょいで集合時間よ」

「どうしよう。電車に乗り遅れて修学旅行に行けなかったなんて一生の恥だわ」

私はほとんど涙声だった。その時だ。

「君、もしかして第三小の子？」

振り向くと、背の低い男子が不思議そうな顔で私を見ていた。男子にしては長めに伸ばした黒い髪。目つきは鋭いけれど、少し丸顔なのと背丈とで、全体の印象は優しそうだ。私と同じように、大き

な旅行用のリュックを背負っている。
「そうだけど、あなたも？」
「うん。道に迷ったんだろ。駅まで一緒に行こう」
「本当に！？」
まさに地獄の仏。私は思わずその子に手を合わせてお辞儀をし、その後でお地蔵さんにも同じようにした。
「ヤサコ、ヤサコ？」
フミエちゃんの声がした。指電話は手の形を崩しても受信はできるが、こっちの声が届かなくなる。
「フミエちゃん、大丈夫。今第三小の子に会ったの。駅まで連れていってくれるって」
「時間は？　間に合うの？」
「あ、えっと」
「ここ、田舎っぽく見えるけど、近道すれば駅まで１０分だよ」
男の子が言った。骨振動通話は聞こえないはずなのに、勘のいい子だ。
「それもＯＫみたい。じゃあね」
「あ、待って。ヤサコ」
フミエちゃんがまだ何か聞きたそうなのを私はすげなく切った。急がなければならないのと、安心したら今さらながらに腹立ちが再燃したのもちょっとある。
「じゃあ行こうか」
男の子は少し笑って歩き始めた。私も後ろに続く。さばさばしているけど、話しにくい雰囲気でもない。友達が多そうなタイプ。同じ６年なんだろうけど、学校で見たことはあったっけ？
「君、３組だろ。僕は２組なんだ」
男の子が言った。そうか、２組には全然知り合いがいないから印象が薄かったのだ。
「私、小此木優子。よろしく」
「えっ」

一瞬、足が止まった。でもすぐまた歩き出し、
「僕は猫目タケル」
「猫目？」
今度は私が立ち止まった。
「あなた、猫目宗助さんの――」
「弟だよ。年は離れてるけど」
タケル君は振り向きもせず、ぽつりと答えた。
裏道をどう進んだか、曲がりくねっていて見通しも利かなかったから、私にははっきりとわからない。集合時間まで5分を切ってさすがに焦り始めた時、いきなり広い車道とぶつかって、すぐ近くに駅が見えた。一気に緊張が途切れた。
「よかったあ。タケル君、どうもありがとう」
「君、兄ちゃんを知ってるんだろ。どんな人だと思う？」
タケル君はお礼に答える代わりに、そんなことを聞いた。
「どんなって……いい人よ。優しいし、親切だし。あんな人がお兄さんだなんて、ちょっとうらやましいな」
「最近は兄ちゃんとあまり仲が良くないんだ」
「えっ、どうして？」
意外だった。雰囲気は違うけど、ふたりとも周囲に好かれるタイプだと思ったからだ。
「兄ちゃんは空間管理室や先生に隠れて誰かと連絡を取ってる。それが誰なのか、何のためにやっているのか、僕にも教えてくれないんだ」
タケル君の口調は寂しそうでも怒っているようでもなく、淡々としたものだった。そのせいで私はどう答えていいかわからなくてな って、足元に視線を落とした。
「気に障ったならごめん。でも小此木さん、僕が言ったこと、覚えておいてね」
タケル君はそこまで言うと、集合場所に向かって駆け出した。追おうかとも思ったけど、どうしてか足が動かなくなっていた。宗助

さん、あんなにいい人なのに、本当に陰で何かしているのだろうか。

タケル君の話は気になったけど、私はフミエちゃんにもハラケンにもそのことを伝えなかった。せっかくの修学旅行ムードを壊したくなかったからだ。それに何かの間違いってことだってある。仕事の上で、誰にも喋ってはいけない情報かもしれない。

帰ったらオジジに相談しよう。それまではうじうじ悩んだって仕方がない。修学旅行を満喫しなくっちゃ。そう決めて、行きの列車の中、私はフミエちゃんとふたりでアイコちゃんも呆れるほどに喋りまくっていた。あまりはしゃいだせいで後半は完全にスタミナが切れ、昨日どきどきしてあまり眠れなかったせいもあって、いつの間にか完全に熟睡していた。

駅から出て点呼、その後クラス別行動のバスに乗っても、眠りすぎた私の頭はまだぼんやりしていた。みんなのお喋りが頭の上を通り過ぎていく。

「いやあ、さすが京都ねえ。大都会だわ」

「フミエ、変な驚きかたするわね。普通京都っていえば、お寺が多いとか、そういうことに驚かない？」

「大黒だって神社ならたくさんあるじゃない。それよりこの人出のほうがすごいわ」

「私は昔東京なんかにも住んでたからあんまり感じないなあ。カンナはどう思う？」

「私も転校組だけど、アイコちゃんと違って幼稚園の頃に越してきたから、大黒以外の町の思い出ってあんまりないの。だからフミエちゃんと同じかな。街だけじゃなくて、お寺とか古い建物もみんなすごく大きく見えるわ。イサコちゃんはどう？」

「えっ――う、うん。まあカンナと同じだ」

イサコは、葦原さんが無理やりに私たちのグループに引っ張り込んできた。ひとつ前の席で葦原さんとアイコちゃんに挟まれて、窮屈そうに座っている。

「ヤサコ、あんたは？　ひとりで寝てないで、ちゃんとコミュニティに参加しなさいよ」
「うん。えーと、私はちょっと懐かしいなあって思うわ」
「何？　お前も京都に来たことがあるのか」
イサコが振り向いた。詰問するような口調だった。
「ち、違うの。私、大黒に来る前には金沢に住んでたから。金沢も、京都よりは小さいけど、古い街と新しい街が一緒になってるのよ」
「イサコ、『お前も』っていうからには、あんたは京都、来たことあるんだ」
フミエちゃんが聞いた。イサコはしまったというように口元に手をやって、
「う……。小さい頃だ。今はもうよく覚えてない」
「やった、良かったじゃん。これでイサコに案内役を頼めるわ」
「そうね。イサコちゃん、よろしく」
「待てよ。覚えてないっていってるだろう」
左右から期待の目を向けられて、イサコはますます身を縮めた。助けを求める視線をダイチ君に送ったけれど、ダイチ君はナメッチ達と騒ぎまくっていて全然気づかない。
「大丈夫。イサコちゃんならなんとかなるわ」
「そうよ。なんとかして」
「へいへい。じゃあ今日のグループリーダーはイサコってことで、よろしく。ほれ、ヤサコもお願いする」
４人が一斉にイサコに向かって頭を下げた。
「お前ら……くそ、好きにしろ。どうなっても知らんぞ」
「修学旅行くらいでどうにかなりゃしないわよ」
イサコが言い返そうとした時、マイコ先生が手をたたいた。
「皆さん、私たちはこれから龍安寺と仁和寺に行って、その後で宿に向かいます。でもその前にひとつ、先生からお願いがあります」
「お願い？」
みんなきょとんとした顔で聞いている。

「これから皆さんのメガネを回収したいと思います。明日の朝までは、メガネなしで過ごしてほしいの。たまにはそんなのもいいでしょ」

「えーっ」

バスの中は大騒ぎになった。

「迷子になったらどうするの」

「電話しなくちゃいけない時は」

「ネットで見学場所の解説を読もうと思ってたのに」

「メタバグ探しはどうすんだよ」

「はい静かに。迷子にならないように点呼を取るし、友達同士グループになって、単独行動を取らないようにすればいいわ。電話は特に必要ないでしょ。おうちの方と連絡を取る必要があるなら、私に言ってくれれば、その時だけメガネを返すわ。それから解説もいりません。そんなものより自分の目で見たほうが面白いわよ。最後に、メタバグとかそういう電脳関係は禁止！　大体、校則でも禁止でしょ」

声は低くなったけれどざわめきは収まらない。みんな頭を下げてしまった。

「先生にメガネを預けてもいいって人は手を上げて。どうしても必要というのなら、強制はしません。でも先生は、みんなにたまにはメガネのない風景を思い出してほしいな」

「私のメガネ、預けます」

一番最初に手を上げたのは、なんとイサコだった。

「イサコ、本気かよ!?」

ダイチ君が目をまん丸くしている。

「ああ、本気だ。そもそもメタバグが取れるのは大黒だけだろ。今日くらいメガネなしでいいさ」

「私も」

葦原さんが勢いよく手を上げた。

「私もいいわ。普段からあんまりメガネって使わないし」

アイコちゃんも続いて、それで私とフミエちゃんも仕方なく手のひらを先生に見せた。

「イサコが使わないっていうなら俺たちだけメガネをかけてても意味ないっすね。ねえ親分」

「あ……ああ」

ナメッチと、少し遅れてダイチ君も手を上げる。クラスでメガネ使いとして知られる子がみんな先生に賛成してしまったから、他の子たちも引きずられ、結局全員が一時メガネを預けることになった。

龍安寺の駐車場で、私たちはぞろぞろとバスを降りた。途端にぽつりと冷たいものが頬に落ちる。

「あら、降ってきたわ」

みんなが慌ただしくリュックから折り畳みの傘を取り出す。フミエちゃんがぼやいた。

「いきなり雨ってのはないわよねえ。どうして6月なんて時期に修学旅行をやるのかしら」

「他の観光客が少ないからでしょ。龍安寺みたいに渋いスポットなら、雨の中ってのも雰囲気あるわよ」

きれいな赤い傘を広げながらアイコちゃんが答える。

「おい、遅れてるぞ。さっさと進む」

嫌がっていた割に、イサコは早くもリーダーシップを発揮している。私たちはクラスの最後尾について緩い勾配の石段を登り始めた。

左右の竹垣の向こうは緑のかすみに覆われて見通しが悪い。勢いを強くした雨にけぶる淡色の境内に開いた色とりどりの傘の花がゆらゆらと石段を進む。メガネを着けているいないで景色の見え方に差があるはずがないのに、なぜかとても新鮮な光景だ。

がっしりしたしつらえの門をくぐってしばらく進むと、左手に大きな池が開けた。

「へえ」

フミエちゃんが溜息とも感嘆ともつかない言葉を漏らした。ハス

がいくつも浮いているのが見えるけれど、花の時期にはまだひと月、ふた月はあるだろう。降り続く雨が水面に無数の波紋を浮かべては消し、空の灰色と池の緑色が曖昧に混じり合っている。浮かれていた心がすうとしぼみ、私の立っている地面も水の中に揺らぐような、でもそれは決して嫌な感じではなく、遠い昔、赤ん坊の頃、温かい誰かの腕に揺られた記憶がよみがえるようだった。

みんななんとなく静かになって本堂に入っていく。

「ここから有名な石庭が見えます」

マイコ先生に案内されて進むと、すぐ左側にそれほど大きくはない庭を臨むことができた。縁側に十数人の人が腰を下ろして、四角く切り取られた空間に見入っている。男の人も女の人も、歳とった人も若い人もみんなして体をちんまりと丸め、雀の子のように並んで庭を見つめているのが妙にかわいかった。

「ここで30分休憩にします。好きなところを見てきていいわよ。ただし静かにね」

マイコ先生が小さな声で言って、みんな無言でうなずいた。

私たちは5人で頭を寄せた。

「好きなところっていっても――」

「とりあえずは石庭よね」

他の子たちも同じで、ほとんどが縁側の空いたところに腰を下ろしている。私はフミエちゃんと葦原さんの間に座った。

縁側の木の板は、たくさんの人の行き来するうちに表面がつるつるに磨き上げられていた。欠けたり、割れたりしたところまで角が削れて丸く、手触りがいい。そういえば私の家にもこんな板張りがある。奥の間の向かいにある、小さな庭を見下ろす廊下だ。

「親近感湧くなあ」

有名なお寺だからって硬くなっていた気分がみるみる溶けて、まるで自分の家の庭を見るように石庭を眺めた。

変な庭だった。幾何学的な直線と曲線が整然とした印象を与える白砂。でもその上に顔を出した島には、わざとそういうのを持って

きたのだろう、いびつな岩と、苔だか雑草だかがちびちび生えている。かっしりとした四角で庭を外から切り離す土壁は、けれどもいつ塗ったとも知れない黄色がところどころ剥がれて、黄と灰のまだら模様だ。

「この庭は誰が作ったかはっきりしてないそうよ。砂の模様も元からあったのか、それとも誰かがどこかでこうさせたのか、わからないんだって」

アイコちゃんがパンフレットをめくる。

「本当は、掃除した時にほうきの跡がきれいだったからたまたま残してたのが、いつの間にかそういうことになっただけだったりして」

フミエちゃんが冗談めかして言うと、

「そういう説もあるわね」

アイコちゃんは真顔で答えた。

「はあ？　なんかありがたみが薄れるわね」

「つまり、そんなことどうだっていいのさ」

くつろいだ声が聞こえて、みんな思わずそっちを見た。イサコは両手を後ろについて、縁側から垂らした足をぶらぶら揺らしながら、薄く開いた目で庭を眺めていた。手を伸ばして向かいの壁を指すと、

「あの土壁だって、あんな模様になったのは誰かが意図したわけじゃないだろ。でもその結果を私たちは見てる。そうして私はそれを気に入ったから、良かったって思う」

「イサコちゃん、ずいぶんリラックスしてるわね」

葦原さんが微笑んだ。

「ああ、メガネがないせいかな」

「え！？　イサコの言葉とも思えないわ」

口にしたのはフミエちゃんだけど、私もほとんど同じことを思った。

「メガネをかけてると絶えず余計な情報が入ってくるからな」

「それならさ、もうメガネなんかやめちゃえばいいじゃん。電話さえあれば、私もやめてもいいなあ」

アイコちゃんもイサコと同じように座り直した。形の良い足がゆっくり弧を描く。

「そうじゃないんだ」

イサコは空を見上げた。

「私にとってメガネは絶対に必要なものだ。それ自体一種の感覚でさえある。でも、たまにはその便利さ、情報の多さに疲れてしまうこともある」

雨は少し強くなっていた。

「例えば……そうだな。ものを見るってことは、私たちに欠かすことのできない感覚だろ。でも、時には目を閉じて音楽を聞くのもいい。メガネのあるなしのどっちが正しいとか優れてるって、そんなことはいえない。どっちもあっていいし、逆にいえば、たとえどっちであっても、今この瞬間私たちが体験している、これだけが現実なんだ」

私は手のひらを持ち上げて、前に伸ばした。吹きこんできた雨粒がぽたぽたと指を濡らす。イサコのいうとおりだった。6月の空にひしめく大気がどうやって雨を降らせるのか、その原因なんか知らない。それでも、雨のしずくは火照った手のひらを湿して心地良く流れていく。そうして今、この変な庭は私たちに親しかった。

龍安寺から出ると、予定どおり仁和寺を散歩してからホテルに向かった。バスで山の懐に分け入って、後で貴船川と聞いた狭い流れを右に左に見ることしばらく。人家が次第にまばらになり、ついにはさっぱり途絶え、更に進んで私たちが本気で心配になり始めた頃、ようやくまた建物がぱらぱらと見え始めた。ほとんどが和風の旅館や料理屋の並ぶ中、昔の洋館のような一風変わった建物の前でバスは止まった。

「うわあ、ここがマヤ観。さすが立派だわ」

ひとりではしゃぐアイコちゃんの後ろで、私たちは微妙な表情を寄せ合った。

「ちょっと恐いわね、ここ」
葦原さんが声をひそめる。ところどころひび割れの入った壁、分厚くて中の見通せないガラスをはめこんだ窓。フミエちゃんが傘を振った。
「雨のせいもあるわよ。早くやまないかなあ」
雨脚はかなり強まっていた。ただでさえ薄暗い山の中がなお暗い。
「天気予報だと明日は晴れるってさ。さ、濡れるから早くホテルに入ろう」
イサコはいつの間にかすっかりグループに溶け込んでいた。でも、私とはバスの中のひと言しかかわしていない。私だけうまく避けられているのは、多分確かだ。
「ヤサコ、ぼけっとしてないで、早く行くよ」
立ち止まっていた私の腕を、フミエちゃんが引っ張った。

ホテルの部屋は、驚いたことに畳敷きの旅館風のものだった。内装も新しくて、外から見た時のようなおどろおどろしい雰囲気は全然ない。1クラスの男子と女子でそれぞれひと部屋ずつの宿泊だった。
「修学旅行生用の大部屋は全部畳なんだって。洋室のほうが気分が出たのに、つまんないな」
アイコちゃんは口を尖らしたけど、私たちはほっと胸をなでおろしていた。
「きれいでいいじゃない。外から見た時と同じに恐かったら大変だもの」
その時、後ろから声がした。
「あら、恐いことならあるわ」
「うわっ、マユミ！　あんた、どうしてここにいるのよ」
「橋本さんたら失礼ね。私も同じクラスなんだから、いて当たり前でしょう」
「恐いことがあるってどういう意味だ？」

イサコが余計なことを聞いた。
「うふふふ、知りたいのね。それじゃ今は時間がないから、夕ご飯の後の自由時間に教えてあげるわ」
「待て。その話、俺たちも乗った」
扉のほうから声がした。ガチャギリだ。他に、ハラケンと黒客の面々の顔も見える。
「今夜は肝試しだ」

第7話　迷宮への修学旅行　C　part

この世には不思議なことなど何もない。お化けだの幽霊だのいうのは大抵、人の心が作り上げたものだ。当人にとっては真実かもしれないけれど、赤の他人が見ればまやかしの類にすぎない。

「肝試し？　なに言ってんのよ。そんなガキっぽいこと、やってらんないわ。ねえ、イサコ」

フミエはガチャギリの誘いを即座に蹴って私に同意を求めた。

「おっ、フミエ、恐いんだろ」

ガチャギリの後ろからダイチの顔がのぞいた。

「バカね。恐いわけないわ」

「恐くないなら、肝試しはやるってことでいいな」

「やらないっつってるでしょ、バカ！」

フミエとダイチは部屋の真ん中に立って、ほとんど顔をくっつけんばかりにして争っている。

「恐いからやりたくねえんだろ」

「恐くないもん」

「なら肝試しで証拠を見せろよ」

「い、や！」

「結局恐いんじゃねえか」

「恐くないってば」

「恐い！」

「恐くない！」

「恐いわよ」

突然、雨粒の混じった風が部屋に吹き込んだ。

「きゃっ」

「ちょっと誰よ。窓を開けっ放しにしたの」

きいい、と細い耳障りな音を立てて、観音開きの窓が揺れている。タイルのように分厚いガラスをはめ込んだ、年代物の木枠の窓だ。

「あれ？　どうしてこの窓だけ古いんだろう」
アイコが首を傾げた。確かに他の窓はみんな新しいサッシなのに、山に面したこのひとつだけが場違いな感じだ。
「おかしいわ」
今度は窓を閉めようとしたヤサコが疑問を口にした。
「この窓、ちゃんと閉まらないわよ。鍵もかからない」
「えっ？　そんな不用心な」
さっきの風で蝶つがいがねじれてしまったのだろうか。窓は見た目にも斜めにひずんで、窓枠に収まらなかった。
「まずいわね」
マユミがゆっくりと窓辺に近寄った。
「橋本さんに沢口君、あなたたち、余計なものを呼びこんでしまったみたい」
「な、なな何よ。余計なものって」
「そ、そ、そうだ。それにどうして俺たちが呼びこんだってわかるんだよ」
マユミは黙って床を指差した。雨のしみが足跡のように点々と、ふたりのところまで続いている。
「あなたたち、見入られたわね。きちんと帰ってもらわないと、大黒までついてくるわよ」
「嘘。やめて。冗談でしょ」
「おい、一体どうすればいいんだよ」
フミエもダイチも半分涙目でマユミにすがりついた。マユミは少し笑って答えた。
「肝試しをやるのよ。やって、山に戻しましょう」

「ねえイサコちゃん。さっきのマユミちゃんの話、本当かしら」
夕飯の席で、カンナがそんなことを聞いてきた。名簿順で決められた席はカンナと向かいで、ヤサコ達とは離れていた。
「芝居に決まってるだろ。マユミは人を恐がらせるのが好きなんだ」

私はアユの焼いたのを頭からばりばりと噛みしだきながら答えた。香ばしい匂いと、ちょっと草のような香りが口の中に広がる。

「でも、窓が開いたのはどう説明するの」

「あらかじめ鍵を外して少しだけ開けておけば、ちょっと強い風が吹いた時にああなるさ。蝶つがいが壊れたのは偶然だ。古かったんだろう」

丸い揚げ物は名物のエビイモだ。からっと揚がった衣に歯を入れると、中身はねっとりとこくがある。

「それに、雨の跡がフミエちゃんとダイチ君のほうに行ってたじゃない」

「風に乗って吹き込んだ雨だから、必ず建物の中に向かって筋になる。ふたりは部屋の真ん中にいたんだから、それで当り前だよ。もし変な方向に跡ができたら、そっちにいた誰かのせいにすればいい」

箸休めは壬生菜の漬物だった。浅い漬かりだから歯ごたえがいいし、ぴりっとした辛みがご飯とも合う。

「窓がひとつだけ古かったのだって変よ」

「わからないか？　あそこからは貴船神社が見えるだろ。なら逆に、神社からもこっちが見えるわけだ。このホテルは伝統と格式が売りだから、宣伝のためにホテルの神社側の壁面だけは古いものを残してあるんだろう。内側はリフォームしたから、中から見ると窓だけ古いのが残ってるように見えるんだよ」

私は甘くて良い香りのする白味噌のおみおつけをすすりながら答えた。

「だけどね、あの」

カンナは少し言いづらそうにしながら、

「みんな、噂してるの。フミエちゃんとダイチ君が口げんかしてる時に、誰か知らない子が『恐い』っていう声が聞こえたって」

「カンナは聞こえたのか」

目の前の顔は一瞬迷ってから、ゆっくりと縦に振られた。

「イサコちゃんは？」

「聞こえた」
カンナは目を丸くしたが、私は構わずデザートの生八ツ橋をほおばった。八ツ橋はやっぱり、ちょっとむせそうになるくらいにニッキのかかったのがいい。最後にしっかり濃いお茶を飲み干すと、じんわりと満足感が広まった。
「厳密には、聞こえたような気がする。マユミが声色を使ったのかもしれない。他の誰かが言ったのが変なタイミングになったのかもしれない。そもそも何も聞こえなかったのに、みんなが聞こえたっていうから聞こえた気になってるだけかもしれない」
「そうかしら」
「よくあることだ。人間の感覚とか記憶なんて当てにならないものさ。先入観とか思い込みでいくらでも変わってしまう」
「ふうん」
やや納得いかない顔ながら、カンナはうなずいて立ち上がった。
「じゃあさ、フミエちゃんにそう言ってあげてよ。大分落ち込んでたもの」
「それは必要ないんじゃないか」
向こうでヤサコ達とご飯をぱくついているフミエを私は見やった。あの食べっぷりならそう心配ないだろう。
「あいつはちょっと元気がないくらいがちょうどいいよ」
カンナがぷっと吹き出して、ふたりはくつくつと笑った。フミエが気づいて、怪訝そうにこっちを見ている。
「さあ、そろそろ引き上げよう」
私は席を立った。
「肝試しの準備だ」

私としてはいつものように黒客とコイル探偵局の対抗が良かったのだが、マユミが反対した。
「だって貴船神は縁切り神よ。男女が一緒に行ったら嫉妬されるわ」
何故かアイコが大きくうなずいた。

「それなら今日は男子対女子ね。男子はダイチ、ガチャギリ、ナメッチ、デンパとハラケン。女子はフミエ、ヤサコ、イサコ、カンナ、それから私も行くわ。夜更かしはお肌に悪いんだけど、今回はフミエのためだ」

「いやあ、アイコって友達がいあるわ。本当にありがとう」

フミエはおおげさに感激してみせ、感謝の意を表した。その後で私を振り返ると、

「あとイサコも一応、よろしく。枯れ木も山の賑わいってね」

「ああ、私もこれでお前と縁が切れるなら安いもんだ」

悪態のつき合いだけど、ぴりぴりした感じではない。昼間一緒に行動していたせいで、少しだけ距離が縮まったようだ。

「ルールはこうよ。最初に男子が出発して、その後１０分経ったら女子が出る。目標はあそこ」

例の壊れた窓の向こう、マユミの指差す先は、貴船神社を更に進んだ山の中だった。

「貴船神社の奥宮から山に入っていく道があるの。そこをしばらく進むとあずまやがあって、ちょうどこのホテルが見えるのよ。明るいうちに確かめておいたわ」

「確かにそれらしい道があるわね」

ヤサコが紙の観光マップを確かめている。今夜まではメガネなしなのだ。

「なあ、けっこう遠いんじゃねえか」

ダイチが珍しく気弱そうに聞いた。

「大丈夫よ。片道せいぜい２０分ってところね。あづまやに着いたらこの懐中電灯を点けるの。区別のために、男子は大きく2回、円を描く。女子は3回点滅させて。合図を確認したら、私がここから同じようにして返すから」

「お前、えらい準備いいな。もしかして肝試しってお前の予定には織り込み済みだったのか」

マユミはガチャギリの質問に答えず、その代わり、にやあと口元

が耳まで裂けそうな笑いを浮かべた。
「なっ、何だよその顔は」
さすがのガチャギリもたじろいでいる。
「うふふ。だって貴船神社よ。みんな、知らないの？」
マユミは私たちの顔を順番に見回した。誰からも返事はない。
「仕方がないわね。話してあげるわ。よく聞いてね」
私を除いたみんなが、吸い込まれるようにうなずいた。
「貴船神社は由来の古い神社なの。当然言い伝えや伝説も多いんだけど、中でも一番有名なもの。誰も知らなかったみたいだから、ずばり言っちゃうわね」
一瞬の間。
「『丑の刻参り』よ」
「えっ、本当に？　あの藁人形に釘とか刺す、あれ？」
ヤサコは驚いたようだった。実は私は知っている。こういうことは下調べが重要なのだ。
「イメージとしては大体そうね。呪いたい相手の髪の毛とか爪を人形に挟んで、神社のご神木に五寸釘で打ち込むの。例えば腕を刺すと、相手の腕が痛んだり、はれあがったり、事故で腕を骨折したりといろんな症状が起きるわけ」
「それが科学的に証明された事例はない」
マユミにばかり主導権を握られるのがなんとなく気に入らなくて、私は口を挟んでみた。
「そうよ。科学じゃなくて呪いだもの」
マユミは軽く笑って受け流す。どうも流れは変えられそうにない。
「ひとつ、お話があるの。時代はわからないけど、場所はまさにここ、貴船神社よ」
誰も何も言わない。それでも無言の、マユミを促す空気があった。
「貴船山を降りてすぐのところに、男が妻とふたりで住んでいた。仕事は牛飼いだった。子供はいなかったけれど夫婦仲は良かった。幸せな生活が続くと思っていたある日、急に不運が訪れた」

ぬるくなったお茶をひと口、マユミはそこで飲んだ。

「体のあちこちが痛むようになったの。最初は左のつま先だった。ちょっと痛むかなと思ったくらいのが、次の日には足を床につけないくらいにひどくなって、働くこともできなかった。外見は何ともないし、医者にかかっても原因不明。結局痛みが引くまで伏せっているしかなかった。

足の具合が治ってしばらくして、今度は右手首が痛み出した。箸も持てないほどの痛さなのに、やっぱり原因はわからない。しかも前は数日で治まったけれど、今度は１０日近くも症状が続いた。

腕の次はひざ、その次は腹。痛みはだんだん強くなり、治るまでの時間も長くかかるようになった。妻は男が寝込むたびに手厚く看病してくれたが、男の目から見ても、次第に疲れが現れてきた。男はいくつもの医者を回ったが、この奇病を治せる者はいなかった。そうするうちに腹から胸、肩と痛みの箇所は上がってきた。

憑き物の類ではないか、といったのは１０数件目に訪れた、かなりうさんくさい医者だった。頭から信用したわけではなかったが、ほとんど耐え難い痛みに悩まされていた男は、藁をもすがる思いだった。それに、痛みの場所が頭まで来た時、もしかしたら死んでしまうのではないかという不安もあった。

もしそうとすれば、男に身近な人間が呪いをかけているかもしれないと医者は言った。身近といっても男に身寄りはない。誰かに憎まれるような覚えもない。まさかと思うが、疑うのは妻しかいない。

夕刻、男は早く眠くなったふりをして、床に忍んだ。夜中になって、人の動いた気配がした。布団の隙間から見ると、妻が部屋を出ていく。男は気づかれないように後を追った。

寝巻のままで家を出た妻はすぐ貴船の参道に入った。真っ暗にうねる道を、妻は通い慣れた道のように歩む。男は何度も遅れたり見失ったりしながら、辛うじて妻の姿を見失わず進んだ。

やがて、男は妙なことに気づいた。妻の横に、いつの間にか黒い塊が並んでいた。ゆったりと足を運ぶ大きな体。牛だ。よく見ると、

男の家で飼っている牛と似ている。立ち止まりもせず、妻の影を踏んでいく。

妻は牛を連れたまま貴船神社の奥宮に入った。境内を真っ直ぐに進んで、手近な木に牛をつなぎ、すぐ近くにあるご神木へ向かう。男は素早く牛のつないである木まで進んだ。間違いなく、男の飼っている一番年老いた雄牛だった。他に隠れるところがなかったので、男はひざを追って座った牛の陰に身を潜めた。

ご神木の前に着いた妻は、懐から何かを引っ張り出した。藁でできた人形だった。その体中に開けられたいくつもの穴を見た時、男はぞっとした。穴は正確に、男の身体の痛んだ場所と同じだったのだ。

妻は人形をご神木に当て、懐から今度は釘と木槌を取り出した。釘を人形の唯一きれいな部分に押し当てた時、男の頭にちくりと痛みが走った。

『やめろ!』

男は思わず立ち上がって叫んでいた。木槌が空中で止まり、そして降ろされる。妻はゆっくりと振り向いた。その顔だけが、暗がりに隠れて確かめられない。

『見たな』

妻の声が、突然足元から聞こえた。男の体はそれで凍りついた。

『見たら死なねばならぬ』

妻が1歩近づいた。月明かりに照らされた影に、確かに角が見えた。

男は必死で体を動かそうとした。が、足が思うように進まず、その場に尻もちをついた。

妻の真っ白い顔がそこにあった。雄牛の体に、顔だけが妻だった。男は悲鳴を上げて逃げ出した。すぐ後ろに女の足音が追ってくる。山道をどう走ったか、何度か転びながらもようやくふもとまで降り、家まで辿り着くと全ての雨戸につっかい棒を渡した。

最後の戸締りを終えた瞬間、だんとものすごい力が雨戸をたたい

た。

『開けろ！』

妻のだみ声、それに獣のような荒い息づかい。夫は必死で雨戸を押さえた。だん、と今度は隣の雨戸がたたかれる。妻はひとつずつ雨戸をたたいて、開いているところを探しているようだった。けれど、閉め忘れはない。

『あなた、開けて』

1周して最初の雨戸に戻ってきた時、また妻の声が聞こえた。さっきまでの荒い声ではなく、いつもの妻のものだった。

『お願い。あの牛が祟ったのよ』

男は思い出した。衰えて役に立たなくなった牛を間引こうと話したのを。病の始まるほんの数日前だった。

『早くして。牛が戻ってきたら殺されてしまう』

妻の思い出がよぎった。戸を押さえる手が弱くなり、やがてつっかえ棒が外れた。

音もなく戸が開いた。妻の顔はやはり見えず、曲がった角を持った影が釘を振り上げた。

翌日、隣人が無残な光景を見つけた。頭を刺された男の死体と、その隣に妻の首だけが転がっていた。納屋では年老いた牛が1頭殺され、妻とは逆に首だけが持ち去られていた。原因の究明は難航し、結局強盗の仕業ということでうやむやになった。

妻の体と牛の首の行方は最後まで知れなかった。けれどその後、深夜の貴船山に、白い着物に角を生やした女が出没すると噂が立った」

マユミはそこまでいっぺんに話すと、長い息をついた。

「話はこれでおしまい」

気味のいい話ではない。誰の顔も、少し白くなっているようだった。

「なんなのよ！？　その話」

重たい沈黙を破ったのはフミエだった。かわいそうに、目のふち

に涙をためている。
「ちゃんと終わってないじゃない！　結局誰が悪かったのよ」
「知らないわ。これはそういう話として伝わってるんだから。実話っていうのは、大概がきちんとした説明のつけられないものよ」
「えっ！？　実話なの」
「だから知らないっていってるでしょ。確かなのはこういう話があるって、それだけ。その先は」
マユミはまた気味の悪い笑顔を浮かべた。
「あなた達が体験すればわかること」
フミエはたじろいで、だが健気にも踏みとどまった、というか開き直った。
「わかったわよ！」
完全に涙声だ。
「私たちがそんなの作り話だって証明してやるわ」

2時間後、私たちは古都の夏の、墨を流したような夜の中にいた。昼間の雨はやみ、どういうわけかむしろ気温が上がったような気がする。
先頭を進むのは私、ほとんど隣りを、コイル探偵局の名誉にかけてというわけか、フミエがついてくる。カンナ、ヤサコ、アイコの3人は少し遅れていた。
山道を登る長い参道の左右には、迫りくる緑を防ぐように、おびただしい数の灯篭がずらりと並んでいた。が、灯りはひとつも点いていない。歩いても歩いても闇の中から際限なく灯篭の現れる光景が、私たちの現実感覚を次第に狂わせていく。だらだら坂を上っているはずが、無限の道を見も知らぬ世界へと下っていくような気分だった。
「イサコちゃん、早すぎるわ。ちょっと待ってよ。ねえ、聞いてる？」
後ろからの声は遠かった。参道は湿気を吸って膨れた夜に覆い隠

され、私とカンナ達を分厚い黒の幕で隔てている。
「こんなことは早く済ませたほうがいいんだ。お前たちこそ急いでくれ」
夜に向かってそう叫び、私は歩調をゆるめずに歩き続けた。3人とは、じきにはぐれるだろう。
「待ってあげたほうがいいんじゃないの」
フミエが不機嫌そうに呟いた。実際には機嫌が悪いのではないだろう。恐くて口調など気にしている場合ではないのだ。
私は答えずに、更に歩調を早めた。諦めてカンナ達のほうに行っていればいいものを、フミエは意地を張って私についてくる。少し厄介だ。
「イサコ、待ってって言ってんの」
もう1度、声がした。今度の言葉の棘は、きちんとフミエの気持ちを表しているだろう。続けて無視しようとしたら、かえってややこしい事態になりそうだ。
「OK。じゃあ神社のご神木のところで待とう」
答えはなかった。
「恐いのか」
「違うわ！　いいわよ、そこで」
今度ははっきりした返事。私はほくそ笑んだ。意地っ張りを逆利用するって手もあるのだ。
神社の中はますます暗かった。時間が遅いせいか灯りの類は消え、社務所も雨戸を閉てて、唯一玄関口のランプはぼつぼつと点いたり消えたり、余計に薄気味が悪い。社殿のほうを見回すと、大人の数人抱えはありそうな巨木にしめ縄がかかっていた。
「あった。ご神木だ」
駆け出した私の後ろから、フミエが慌ててついてきた。
木というのは下から見るとまるで生き物みたいだ。いや、生き物なんだけど、普段の私たちは植物と動物を同じには見ていない。木や草に、けがれのない清浄なイメージを勝手に与えているのだ。こ

うやって繁茂した枝を見上げると、実はそんなことない、餌を求めて貪欲に腕を広げる植物は、何も知らない私たちをからめ取ってしまいそうでもあった。

「大きいなあ」

当り前のことを呟きながら私は木に沿って回った。

「あっ、ひとりで行かないでよ」

案の定フミエは追ってくる。と、目の前に、背丈ほどに張り出した巨大な根があった。根を越えると後ろは見えない。私はそのまま早足で回り込んで、元の位置に出た。

「イサコ？　どこ行ったの、ねえ」

少し前に、根の向こう側をうかがう黒い塊があった。私は音もなく手を伸ばして、肩をふたつたたき、すぐ引き返した。

「いっ！？　い、イサコよね」

「何だ？」

正面から顔を見せると、フミエの表情が硬直した。

「うそ……あんた、今、後ろ」

「えっ？」

私はすっとぼけた表情を作りながら、拾っておいた石を近くの茂みに投げた。がさがさっと予想外に大きな音が立った。

「ぎゃっ」

わかりやすい悲鳴を残して、フミエの後ろ姿はあっという間に闇に飲まれた。

少しだけかわいそうなことをしてしまった。フミエの恐がりは、今日のトラウマで一生治らないかもしれない。が、まあ仕方ない。私はポケットに手をやった。

メガネをかけると風景が少しだけ近くなった。空間の乱れを知らせる低いノイズも、私には親しい音だ。

親しいと感じる理由は、普段よく聞こえているからという他に、その音が目標の近いことを教えてくれているせいもあるのかもしれなかった。

第7話　迷宮への修学旅行　Ｄ　ｐａｒｔ

京都に着く前から、大規模な空間異常が感じられた。どういうわけか近づくごとにそれは縮んで、駅に降りた頃には大黒なら普通に見かけられる程度のものになっていた。しかし、大黒以外の都市では空間異常の発生自体が珍しい。探ってみるだけの価値はあった。

マイコ先生にメガネを預けた理由は簡単だ。私はいつも、万一に備えてメガネのスペアを持っている。私から率先してメガネを渡せば、こういう時の連帯感で他のみんなも続くに決まっている。私ひとりで調べるつもりだった。黒客の協力が得られないのはきついところもあるけれど、探偵局の連中に邪魔されるよりはましだ。

空間のサーチを実行して、半径1キロ以内の異常点を調べる。すぐに出てきた結果は私をうなずかせるものだった。

空間異常の発生場所は、ピンポイントでこのすぐ近くだ。

みんなの目を盗んで調べていた時から、なんとなく感じてはいた。ここの空間異常は、次第に私に近づいてきている。私の持っている暗号と感応しているのかもしれない。これは、古い空間に近いものだから。それとも。

昼にメガネはほとんど感覚の一部だと言った、それは本当だ。メガネをかけると私のもうひとつの知覚が起動する。最近ではそれが強すぎて、痛みに近いものを覚えたりもする。でもそれが体の痛みなのか心の痛みなのか、今の私にはまだわからなかった。今も同じだ。

異常の中心は奇しくも、肝試しの目標に定めたあずまやだった。何故だろう、私の記憶になかったはずの場所なのだけれど、足はまるで知った道であるかのように動く。間もなくあずまやの三角屋根が見え、その下のこじんまりしたベンチに、碧く光るものが座っているのが見えた。

それは明らかに古い空間の内部で発生した、他律性の電脳物体だった。そうであればいつものようにその名を呼べるはずのところを、どうしてか私は躊躇した。

碧い光が立ち上がって、あずまやの出口に立った。今度のは随分小さい。小学校に入りたての子供くらいの大きさだろうか。手を伸ばせば届くくらいまで近づいてから、ポシェットからゆっくりと鍵を取り出した。鍵に吸い寄せられるように、光がわずかに歪む。もっと鍵を寄せると、光の体に一斉にノイズが走って、思わず鍵を持った手を引いた。

「……何をやっているんだ、私は」

いつもどおりにやればいい。相手は生き物じゃないんだから。こんな、ためらいを覚える必要はない。

もう1度鍵を差し上げると、今度は光が内に引いた。かつんと手に衝撃が走るのと同時に、空間が揺らいだ。

「障壁か」

素早く暗号を作って壁にぶつける。が、水面に石を投げたように波立つばかりで、壁にダメージは見られない。威力の大きいものを作っても、結果は同じだった。あずまやの四方が囲われて、中に入ることができない。

「くそっ、相手は目の前にいるのに」

私は唇をかんだ。大黒でなら他にいくらでも手はあるが、こっちにはそんなにツールを持ってきていない。お兄ちゃんに頼もうにも、京都のように空間の整った都市への違法ツールの転送は危険だ。足がつく恐れがある。

どこか壁に切れ目でもないか。私はたたずむ光をにらみながら、目で探った。

ふと、光が明滅した。何故か私にはそれが、人の微笑むように見えた。左の手のひらが温かく感じられて、見ると目の前に立つ相手と同じ色に光っていた。

どこに行ってたの？

私は左手を伸ばした。抵抗なく、手は壁の向こうに吸い込まれる。
危険とは思わなかった。そうではなくて、そこにいるのが当たり前のように、私はゆっくりとその人の待つほうに入った。

目に映るのは人の足ばかりだった。自分が今どこにいるのか、どこに行こうとしているのかもわからない。お兄ちゃんの姿もさっきからなかった。
――ねえ、お兄ちゃんどこにいるの？
――うーん、はぐれちゃったみたいねえ。お父さんたちもいないし言葉の中身とは反対に、なんだか楽しんでいるみたいな声だった。
――えっ、それ迷子じゃない。どうしよう
私はつないだ左手を揺さぶった。
――大丈夫よ、安心して。ほら
この前もらったばかりの私のメガネを、しなやかな手が抜き取った。それまで見えていた地図が消えると、ますます視界に入るのは足ばかりで、ますます心細くなった。
――ねえ、返してよ。ねえったら
――ちょっと待って。えーと
指が何もない場所をかたかたとたたく。拡大、とか表示、とか小声に紡ぎ出される言葉の意味は、その頃の私にはまだわからなかった。
――はい、できた
メガネは少し斜めにかかった。すぐ大きくなるからとかなり上のサイズだったメガネは普段でもよくずり落ちて、私はいつも両手で持ち上げるようにして戻していた。でもその時は手を離すとひとりになってしまいそうで、私は右手だけでずれを直そうとやっきになった。
――ふふふ、メガネは真っ直ぐなのにイサコちゃんの顔が斜めだよ
私のすぐ近くに顔が来て、ゆっくりとメガネをかけ直してくれた。
――地図に光る点があるでしょ。４個固まってるのが信彦君とお母

さん、それに私のお父さんとお母さん、ちょっと横のふたつが私とイサコちゃん。すぐ近くにいるわ
――ありがとう
私はそこをなでるようにした。メガネに指紋がついて少し見づらくなった。
――あっ、今ちょっと見えた！
――何が？
――送り火よ、大文字の。ほら、あっち
指差されても、私の背の高さからは誰かの背中しか見えなかった。
――わかんない。見えないもん
少しむくれて言うと、
――仕方ないな。じゃあ肩車してあげる
――ほんと？
背を向けてしゃがみこんだ肩に、私は遠慮なく飛び乗った。
――ぐっ。イサコちゃん、もう少し静かに乗ってよ
――だって。肩車、肩車
――もう
その頃はずっと年上に見えたものだけど、お兄ちゃんの同級生なのだから私とはふたつしか違わない。肩車をしても大人の目の高さよりは大分下だったが、それでもちらちらと、向こうの山に「大」の字をかたどった明りが灯っているのが見えた。
――きれい。でもちょっと恐い
――恐い？
――うん。悲しくなる
今思えば、光が鮮やかならそれほどに、後ろに控えた山々の暗さが際立って、はかなく感じたのだろう。
――ねえ、手つないで
――だめ。肩車したままじゃ危ないよ
――じゃあ、おんぶして
――イサコちゃん、甘えんぼなんだから

一旦肩から降りて、背中にぺたんと胸をくっつけると、すぐ頭がぽうっとなった。

――眠くなってきちゃった

――まだ寝ちゃだめだよ。まだ旅館を出たばっかりなんだから。ねえ、イサコちゃん

けれど私の両のまぶたは、早くもくっついていた。

――イサコちゃん、イサコちゃん

「いいの。もう寝るの」

自分の声で目が覚めた。あずまやのベンチだ。肩に誰かの手がある。カンナだ。笑ってる。

「くくっ、イサコちゃん、『寝るの』ってかわいいんだ」

顔が熱くなった。

「ばっ、バカ！　夢を見てたんだ」

「イサコちゃんて夢では素直なのね」

「な……大体お前たちが遅いのが悪いんだろ」

私の答えは言い訳になってなかった。

「だってみんなであなたを探してたんだもの。どうせ本人は言わないだろうから私から教えるけど、フミエちゃん、責任感じてたわよ。あなたを置いてきぼりにしちゃったって」

「そうか……」

あいつには悪いことをしてしまった。

「おお。イサコ、先に着いてたんだ」

アイコ、ヤサコ、フミエがあずまやに入ってきた。幸い、ヤサコにはさっきの寝言を聞かれずにすんだらしい。

さっきの光はどこにもなかった。逃がしてしまったかと思いかけた時、ふと光に気づいた。

左手に、波打つような紋様があった。もしかして、パスワード？

「イサコ、何やってんの」

アイコがこっちをのぞきこんだ。

「いや、なんでもない」
ヤサコがホテルに向けて懐中電灯で合図を送っていた。すぐにホテルから返事が戻る。
「良かったあ。これで趣味悪い肝試しも終了ね」
「ノー。まだ帰り道があるわ」
アイコがきっぱり言うと、フミエの笑顔がひくついた。
「帰りは離れずに、5人で一緒に行きましょ」
ヤサコは全員に向けるように言ったが、本当は私ひとりに当てているのは明らかだった。はっきりこっちを見ない迂遠なやり方がいちいち気に入らずに私は横を向いたが、カンナが咎めるような視線を送ってきたので仕方なく頭だけ下げた。
「それじゃ行こうか」
アイコがフミエの背中を押して、みんなぞろぞろとあずまやを出ていく。私も立ち上がると、後ろから袖を引かれた。
「イサコちゃん、メガネを外しておいてね。みんな、まだ気づいてないから」
しまった。私はすぐにメガネを取って、ポケットにしまった。そうしてから疑問に感じた。
「カンナだって探偵局の会員だろ。このこと、ヤサコたちに伝えないのか」
「そうしたほうがいいのかもしれないけど、言わない。だってクラスのみんな、イサコちゃんのこと見直してるもの。一番最初にメガネを返したのがイサコちゃんだったから」
カンナと私は並んであずまやを出た。月明かりで微笑むカンナの顔が照った。
「気遣いはありがたいけど、それはどうかと思うな。みんな私の嘘にだまされてるだけだろ。本当の私は嫌なやつなんだ」
「それも嘘ね」
「えっ」
「イサコちゃんて優しい子よ。多分ヤサコちゃんとも仲良くしたい

と思ってる」
「はは、何を言ってるんだ。あんたの買い被りすぎだよ」
「そうかもしれない。でも違うかもしれない。本当の気持ちなんて、本人にさえわからないものだから」
カンナの言葉はよくわからなかったが、何故だか心に残った。それで、ふたりとも無言になってヤサコ達の後を追った。

山道を降り、貴船神社の境内に入るところでフミエが立ち止まった。
「ここに入らずに帰れないかしら。気味悪いわ」
アイコが首を振った。
「うーん、道はあるかもしれないけど、行きと同じルートで帰るのがいいと思うな。知らないところで迷ったらそれこそ大変よ」
「でも、さっき何かいたのよ。私の背中に触った」
「あれは私だ。すまない」
私はぱっと頭を下げた。
「イサコが!? どうして」
「お前があんまり恐がってるからちょっと脅かしてやろうと思って」
「ちょっとどこじゃないわよ! 心臓止まるかと思ったんだから」
「悪かった」
そこでアイコが助けに入った。
「まあまあ、謝ってるんだし、イサコにもお茶目な一面があるってことでいいじゃん」
「でも」
「許してあげなさいよ、フミエちゃん」
ヤサコにも言われると、フミエはしぶしぶ頭を下げた。
「わかった。まあ今回だけは多めに見るわ」
「よおし。じゃあさっさと行った行った」
アイコに促されて私たちは境内に降りた。
改めて見渡すと、やはり境内は気味のいいものではない。さっき

は目的があったからそっちのほうに考えが行っていたが、もうここにひとりではいたくない。他の皆も同じようで、早足で固まって境内を進んだ。

境内の真ん中くらいまで来た時、先頭を進んでいたアイコが突然止まった。

「どうしたんだ」

「今白いものが見えた」

「じょっ、冗談でしょ。冗談よね」

フミエが白々しい明るさで言った。

突然、手を捕まれた。一瞬どきっとしたが、声は出さずにすんだ。カンナだ。が、なんだか顔つきがおかしい。

「私も見た」

「やめてよ。ふたりで私を驚かそうとしてるんでしょ。もうその手には乗らないわよ」

「本当なの」

カンナが泣きそうな声で答えた。

「見間違いよ、何かの。ねえヤサコ。ヤサコ……？」

ヤサコは微動だにせず前を向いていた。

「あれ」

「えっ」

「あれ」

震える手が指差した向こうで、何かが動いた。白い……人の形？

「ひいいえええ」

フミエが怪鳥のような鳴き声を発して背中にしがみついた。

「バカっやめろ！　何するんだ」

「イサコあんたのせいよ。どうせあんたがメガネで作ったんでしょ」

「言ってることがめちゃくちゃだ。第一お前、メガネかけてないだろ」

「じゃあ何なのよ、あれ」

「知らないってば！」

まさか本物の。いやそんなバカな。
「そうだ、男子だ。あいつらが私たちを脅かそうとしてるんだ」
「男子ならさっき帰ってくのが見えたわ」
いつの間にか後ろに回ったカンナが冷たく言った。
「そうね、男子じゃない。背も高いし髪も長いもの」
「それに何か引きずってる。あれって……牛？」
ヤサコとアイコも背中から交互に顔を出す。
「お前ら、汚いぞ！　何で私に隠れるんだ」
「だってイサコちゃん、そういうの信じてないんでしょ」
「信じてないけど目の前にあるじゃないか！」
「大丈夫よイサコなら。いつもみたくちゃっちゃっとやっちゃってよ」
「何をやれっていうんだ。あいつはイリーガルじゃない」
「しっ、静かに！　気づかれる」
誰かの手が伸びて私の口をふさいだ。
「むっむぐ」
「黙って！」
ずるりと重いものを引きずる音がした。白地に黒のまだらの入った、紛れもない牛の柄。引いているのは長い髪の、大人の女。顔はあっちを向いて見えない。手にきらりと光るものがあった。
「く、釘持ってるよお」
カンナの高い声が思ったより響いて、足音が止まった。気づかれた！
突然白装束が震え始めた。最初は何をしているかわからなかったが、すぐに声が届いた。くつくつと、とぎれとぎれに笑っている。そしてふいにそれが消えた。
「見たな」
「ぎゃあ」
真後ろで４つの声と、靴音がばらばらと鳴った。はは、みんな逃げてしまった。私だけが動かない。というか動けない。膝が笑って

る。
　白装束が近づいてきた。右手に引いていたものを離すと、それはずるっと、まるで死体のように抵抗なく地面に崩れた。
　私はといえば、我ながら呆れたことに満面の笑みを浮かべていた。後で考えると、笑いとは痙攣の一種だというから、恐怖に引きつった顔がそうなったのかもしれないし、それとも、悪意はないという気持ちを必死で伝えようとしていたのかもしれない。
　五寸釘を握った左手が持ち上がる。金縛りにあったように、私は何もできなかった。と、半分開いた口の中に、突然苦酸っぱいような液体が流し込まれた。
「げっ、げほっ」
　液体が気管に入りかけて、私は盛大にむせた。
「何やっとる。飲め」
　聞き覚えのある声。
「マイコ先生!?」
　フミエの裏返った声が深夜の境内に響き渡る。
「あちゃ。酔ってるよこの人」
「いいから飲め」
　光っていたのは飲み物の缶だった。誰だ、釘なんて言ったのは。なんて考えてる暇もなく、再び口に缶が押しつけられる。
「せっ、先生、待って。私小学生だから……うぷっ」
　わらわらと４人が駆け寄ってきた。
「こらっ、教師ともあろうものが何てことを」
　アイコが缶を取り上げて、
「あっ、大丈夫だ。これ、完全ノンアルコールのビールテイスト飲料だよ」
「そうよお。かわいい教え子に飲み物をすすめてどこが悪いっ」
「えっと、じゃあ先生はどうして酔っぱらってるの?」
　ヤサコがおずおずと聞いた。
「うるせえや。ノンアルコールで酔って何が悪いっ」

「原因は不明だけどできあがってるのは確かね」
フミエが腕組みした。
「こっちはウチクネ先生よ」
ホルスタイン柄のかわいらしい、そして強烈に似合わないパジャマを着たウチクネ先生は、これまたどういうわけか目を回して心神喪失状態だった。
「そうそう、ウチクネ。このバカがこんなもん買い込んでくるから」
マイコ先生はウチクネ先生のおでこをぺたぺたとたたいてけらけら笑うと、突然その場に座り込んだ。
「はあ、ここはなんだか温かいや」
「あっ先生、こんなとこで寝ちゃ駄目だよ。風邪ひくよ」
「黙れチビスケ。風邪やらインフルエンザが恐くて小学校教師が務まるか」
「こっ、この酔っぱらい」
フミエはかちんときたようだ。くるりと回れ右して歩き出した。
「いいわ。こんなの放っといて帰りましょ」
「あ、ちょっと」
フミエは止まらない。アイコ、ヤサコ、カンナの3人が何故か一斉に私を見た。
「こういう時はやっぱり優等生よね」
「体育の成績もいいし」
「飲み物をもらった恩義があるし」
「……」
議論の余地はなかった。私は黙ってマイコ先生のところに向かい、その体の下に滑り込んで持ち上げた。
「ぐぐ、重い」
「失礼ね。レディに重いとか言わない」
マイコ先生がぐっと体重をかける。
「うわっ、やめろ。潰れる」
こうして修学旅行1日目の夜は、私たちらしくばたばたと過ぎて

いくのだった。

第7話　迷宮への修学旅行　Ｅ　ｐａｒｔ

僕はかなり後悔していた。

せっかくの修学旅行だっていうのに、昨日1日、ほとんどカンナと話せていない。無駄に日を過ごしてしまったのだ。

朝食の時カンナを見た。探偵局の女子グループにアイコ、まではいいが驚いたことにイサコまで同じテーブルを囲んでいる。強いて無表情をつくろってはいるけれど、特にカンナに話しかけられた時、素直な笑顔がこぼれ出た。

僕ひとりがのけものにされているような気分だ。もう3ヶ月で離れ離れになるっていうのに、カンナは寂しくないのだろうか。廃工場に閉じ込められた時にカンナの表情に現れたと思った悲しさ、あれはカンナの心ではなくて、僕の思いが鏡のように映しだされていただけの、単なる思い込みだったんじゃないか。

「どうしたんだよ、ハラケン」

向かいに座ったガチャギリが不思議そうな顔をしている。

「ふさぎこんでるうちに修学旅行、終わっちまうぜ」

「わかる、わかるぜその気持ち」

あさっての方角から答えたのはダイチだった。

「昨日の肝試しは悔しかったもんなあ。俺たちだってゴールに着いたのに、女子の判定勝ちなんて納得行かねえぜ」

「お前に言えるかよ。山道に入るところで『行きたくねえ』ってガキみたいに木にしがみついてたのはどこのどいつだったっけ」

「あれはその、なんだ。あれだよ、女子が何か仕掛けてこないか見張っとこうと思ってさ。深慮遠謀ってやつだ」

「言ってろ」

ガチャギリはダイチを無視して朝食の残りにかかる。ふたりのやり取りを見ていると、僕も多少は気が紛れた。

「でも判定負けは仕方ないよ。あの白い影を見て僕たちは逃げ出し

ちゃったんだから。ねえ、ハラケン」
デンパに促されて僕はうなずいた。
「まあね。あの時はさすがにびっくりしたよ」
「なんだかんだ言ってハラケンとデンパが一番落ち着いてたっすよね。デンパは怪談に出てきた牛がかわいそうだなんて、そんなことばっかりでちっとも怖そうじゃないし、ハラケンは民俗学がどうこう言い出すし」
ナメッチがダイチの後ろから顔を見せた。
「うん。怪談は民話のバリエーションとして面白かったから。どうこうといえば『どうもこうも』ってのも妖怪の名前だよ」
「本当っすか？」
「うるせえ。妖怪なんかどうでもいい」
ダイチがテーブルをばんとたたいて、握っていた八ツ橋が砕けた。
「なんとか明日までにこの借りを返さねえと、俺のリーダーとしての威厳に関わるんだよ」
威厳なんていうわりに、ダイチはせせこましく八ツ橋のかけらを拾い集めている。
「俺、ずっと考えてたんすけど」
珍しくナメッチが手を挙げた。
「おおナメッチ君。どうぞどうぞ、意見を聞かせてくれたまえ」
「焼き八ツ橋ってどうしてゴマが練り込んであるんすかね。生地が硬いから食感は変わらないでしょ。ニッキともいまいち合わないと思うんすよ。ゴマ、いらなくね？」
「お前、くだらねえことを――」
「その意見には私も賛成だ。メロン味のメロンパンが不要なのと同じくらいにな」
ダイチの突っ込みをさえぎって、今度はイサコが現れた。
「フミエの鼻をあかしたいなら面白いものがある。出発前の準備時間に1組の部屋に集合だ」

自由行動の出発前、やっと返してもらったメガネで地図を確かめたり電車の時間を調べたり、みんな自分たちのことでばたばたしていて、他のクラスの子が来ていても大して気に留められなかった。それでも部屋の隅のほうに座って、イサコは左手を広げた。

「面白いと言ったのはこれだ」

イサコの手には、不思議な渦巻き模様が刻まれていた。

「何すかこれ？　電脳蚊取り線香？」

「アホ。そんなもの何の役に立つんだ」

ガチャギリが手にぐっと顔を近づける。

「これもパスワードなのか」

「多分そう。でも普通と違うんだ。今までに集めてきたパスワードは、古い空間に入り込む補助ツールになるんだけど、これはどうもそんな働きをしないらしい」

成り行きでそこにいた僕もそのパスワードをしげしげと眺めた。どこかで見たことがある。ああ――

「クレタ島の迷宮みたいだね」

「クレタ？」

「うん。ミノタウロスって聞いたことあるだろ。ギリシャ神話に出てくる半人半牛の怪物。それが閉じ込められていた迷宮だよ」

「おい。また牛とか怪物とか、その手の話はもうやめてくれよな」

ダイチがうんざりしたように言った。

「待ってくれ」

イサコの目付きが鋭くなった。

「迷宮――か」

握り込んだ手のひらから、ちりちりと細かい音がして、こぶしの隙間から光が漏れた。

「もう少し……よし、できた」

「何をしたの？」

デンパが小型のリュックに自由行動で使う荷物を詰めながら聞いた。

「データを展開したのさ。迷宮と聞いて、例えばこのパスワードが圧縮された地図なんじゃないかと思って」
再び手のひらを広げると、果たして渦巻きが浮かび上がった。その左右に文字のような記号が現れる。
「何だこりゃ？　漢字の『大』、渦巻き、でまた『大』」
「暗号文みたいだな。地図には見えねえ」
「わかった！」
ダイチがひざを打った。
「この『大』はダイチ、つまり俺のことだ」
「親分……。で、全体はどういう意味なんすか」
「それはこれから考える。とにかく、俺は古い空間に名前を刻まれるほどのメガネ使いってわけだ」
「それならこの渦巻きは、お前の頭がこうだって意味だな」
ガチャギリが指をくるくると回した。
「んだと！？　お前、喧嘩売ってんのか」
「アホすぎて売る気にもならねえよ」
「てめえ！」
争い始めたふたりを横目に、僕は考えていた。
「渦巻き……回転……コイル」
「コイル？　どういう意味だ」
イサコが鋭く聞き返した。
「思いついたことを言ってただけだよ。イサコこそ、なんでそんな言葉を気にするの？」
「いや、別に」
急に声をひそめて誤魔化すと、イサコはぱんと手を打った。
「ダイチ、ガチャギリ、くだらない争いはそれくらいにしとけ。もうすぐ出発時間だ。パスワードの意味は、バスの中ででも考えよう。それからハラケン」
「えっ、何だい」
「お前も今日は私たちと一緒に回るか？　いつも女子とばっかりだ

と飽きるだろう」
「ごめん。僕は探偵局のみんなと行く約束をしてるから」
「そうか……」
妙に残念そうな顔だ。そんなに僕を混ぜたかったのだろうか……いや、違うな。カンナだ。カンナは絶対僕についてくると、イサコはそう思っているのに違いない。カンナと一緒に行きたいなら本人に言えばいいのに、こんなところはイサコも意外と内気だ。
「じゃあお先に。カンナ達が待ってるから」
わざとそう言って立ち上がると、イサコはほんの少しだけ口元を引きつらせた。

「今日、クラス行動は一切ありません。バスで金閣寺まで行ったら、午後4時半に京都御所に集合するまで全部自由です。みんな、楽しんできてね」
ホテルのロビーで簡単に1日の説明を受けた後で、僕たちはグループごとに固まってバスに乗り込んだ。ふたり並びの窓側を開けて僕が座ると、すぐ後ろから乗ってきたカンナは当然のように隣に腰かけて、それでやっと、僕は胸をなでおろした。
バスで20分ほどか、金閣寺の駐車場に降り立った子供たちは、ぞろぞろと拝観受付まで歩いていく。
「自由行動なんだから別に金閣寺に行かなくちゃいけないわけじゃないんだけどね」
「ま、修学旅行の基本ってやつよ」
「ちょっとどきどきするわね」
ヤサコ達は僕とカンナの少し後ろを歩いている。
「ね、研一も金閣寺を見るの、初めてでしょ。楽しみね」
「うん。でも有名な観光地って期待が大きすぎて、実際に行ってみるとがっかりってことも多いよ」
「えーっ。ここまで来てそんなつまんないこと言わないでよ」
文句を言いながらもカンナははしゃいでいる。

「ほら、もうすぐ見えるよ」
カーブした道の先で、急に視界が開けた。すぐ目の前に、教科書に乗っていた写真そのままの光景が広がっていた。澄んだ水をたたえた池の向こうに、北の山々を従えて立つ三層の金の建物。背景は青空。
「すごい、本当に金色ね」
カンナは当たり前のことに感心している。僕のほうは、ただ無言でその景色を眺めていた。
いい意味で、予想とは違っていた。金は確かに目を引くけれど、不思議とけばけばしくない。壁の一面が日に照って真っ白に輝く様子がすがすがしい。
「はは、あれ、かわいい」
カンナの指差した先の屋根のてっぺんで、金の鳳凰が羽を広げていた。
「近くまで行ってみようか」
遊覧道は金閣の裏を回ってぐるりと1周している。残念ながら建物の中には入れないみたいだけど、外見だけでお腹いっぱいという気もした。
砂利道をざくざくと音を立てて進みながら、僕はつい景色に見入っていた。
「研一も気に入ったみたいね」
カンナが楽しそうに言った。
「うん、とても。できれば自分だけのものにしたいくらいだよ」
「えっ。研一、そんなこと考えてたんだ」
足音が止まる。僕は振り返った。
「カンナ、知ってる？　ここ、80年くらい前に放火に遭ったんだって」
「聞いたことあるわ」
「僕はその犯人の気持ちもわかるような気がするな。きっと、他の人には見せたくなかったんだ」

「そうかしら。燃やしたら全部無くなっちゃうのに」
「どうしても自分のものにならないなら消えてしまったほうがいい。そう考える人も世の中にはいるのさ」
「私にはよくわからないな」
カンナはすごく自然に僕の手を取った。あんまり自然すぎて、僕も当然のようにカンナの手を握り返し、でもよく考えると、カンナとそうやって歩くのはもう数年ぶりだった。そうしてそれに思い当った途端、僕は真っ赤になり、それを見たカンナも湯気が出そうに赤くなって、それでも手が離れなかったのは。
いつまでも一緒にいたい。
ふと、燃え上がる建物の姿が見えたような気がした。そうすることで、火をつけた当人は、彼の心の中だけに、永遠に美しいものをみつけたのかもしれなかった。そう、心の中だけに。誰にも邪魔されない心の中だけに、僕の心とカンナの心が、それだけで満ちていたなら。
「研一、どうしたの？　行こうよ」
カンナの手が僕を引っ張った。ぼけっとしていた僕の視界は揺らいで、ちょっと間の抜けた青空が映った。この青空とさっきの幻と、僕にとってはどっちが美しいのだろう。

僕はしばらくカンナに引かれるままになっていた。見たか見ないかで金閣の裏側を通り抜け、そのまま行こうとしてふと、引く力が止まった。
「あれ、イサコちゃんたちじゃない？」
見ると、遊覧道から外れた林の中に、何人かの子供たちが入っていく。間違いない。イサコと黒客だ。
「何をやってるのかしら」
僕は朝のイサコの言葉を思い出した。あのパスワードと関係があるのだろうか。
「つけるわよ」

いきなり背中でフミエの声がした。
「あれっ？　フミエちゃん、今までどこに行ってたの？」
「そりゃあんたたち――」
ヤサコがフミエの前に割り込んだ。
「ちょっと別のところを見てたのよ。それより早くイサコを追いましょう」
「う、うん」
見ると一番後ろのデンパが木々の間に隠れるところだった。僕たちは足を速めた。
イサコ達が入って行ったのは、敷地内の整備のために作られた小道だった。少し進んだところで、イサコが敷地の外を見上げている。
「見てみろ」
黒客も一斉にそっちへ顔を向けた。
「ん？　何だありゃ。遺跡か？」
「送り火だよ。お盆になるとあそこに灯をつけて、『大』の文字を浮かび上がらせるんだ。テレビなんかで見たことないか？」
「あっ」
思わず僕は叫んで、慌てて自分の口をふさいだ。でも待てよ、『大』はもうひとつあった。
「パスワードのふたつの『大』、その1個がこれさ。もうひとつは銀閣寺の近くにある。そこでも同じ『大』の字の送り火をやってるんだ」
そういうわけか。じゃあ、あの真ん中の渦巻は何だろう。
「ハラケン、何か知ってるの？」
ヤサコに言われて、僕はみんなを振り向いた。渦巻きの意味は後だ。
「ごめん、事情は後で話す。ここを出よう。行く先は多分、銀閣だ」
予想どおり、黒客は金閣寺前から東の、銀閣寺行きのバスに乗った。金閣から銀閣に行こうとする他の観光客に紛れて、僕たちも同

じバスに乗り込んだ。
バスの中で僕は今朝の経緯を簡単に説明した。
「こんなところまで来てパスワード集め？　イサコのやつ、たまにはそんなこと忘れて楽しめばいいのに」
フミエがぼやく。
「それを追ってる私たちも人のこと言えないけどね」
ヤサコは苦笑を返した。
「でも、ちょっとミステリーみたいで面白いんじゃない」
カンナが笑う。
バスは京都の街を横断して東へ進み、その後で南へ曲がる。フミエが地図を確認した。
「この先、今出川通りってのにぶつかって、そこを左折したら銀閣寺ね」
「待って」
前を見張っていたヤサコが引き留めた。
「イサコ達、ここで降りるみたいよ」
確かに降車ランプがついている。
「何かしら」
「わからない。とにかくついていこう」
銀閣寺より手前でバスを降りた黒客は、別のバスでそのまま南へ、しばらく行って電車に乗り換え、今度は西へ向かった。「西院」という駅で降りて、今度は北行きのバスへ。
「何これ。このまま北に行ったら、金閣時に逆戻りだわ」
フミエが首を傾げた。
「おかしいわね。ヤサコちゃん、どう思う？」
カンナが聞いた。が、答えがない。
「ヤサコちゃん？　ヤサコちゃん、どうしたの」
「う、うん。ちょっと気分が」
「乗り物酔いかしら。さっきからぐるぐる回ってきたから」
フミエのいうとおりだ。１回転して同じところに戻ってきて、何

の意味があるんだろう。
待てよ、1回転？
「わかった！　コイルだ！」
「コイル！？」
ヤサコとフミエが同時に振り返った。
「そうだ。イサコのパスワードにあった渦巻き模様は、多分道順だったんだよ。金閣寺から始めて、市内を渦巻きを描くように歩き、その後で銀閣寺に行くんだ」
「なるほど、それでこんな意味のない道を進んでたわけね。じゃあ――」
「ああ、僕たちまでイサコに付き合う必要はない。銀閣寺に先回りだ」

第7話　迷宮への修学旅行　Ｆ　ｐａｒｔ

東京とは中心を欠いた大都市である。
昔日本に来た偉い学者がそう言ったそうだ。つまり皇居があるから真ん中が空洞ってことらしい。だが俺がその先生に会ったら、その考えは間違いだと教えてやろう。皇居にはちゃんと人が住んでいるのだ。先生、あんまり広くて緑ばっかりだからでかい空き地だとでも思ったんだろう。
そういう意味では今間近に見る京都御所、これこそは大都市の中の空白ってやつにふさわしい。なんせこの広いお屋敷が、１５０年以上もほとんど留守中なんだから。
「ここが迷宮の中心か」
固く閉ざされた大門の前でイサコが呟いた。
「どうだ、変化は」
「空間はすごく深くなってきてるね」
デンパがのんびりと答える。
「だがそれだけだ。目に見える違いはねえ」
ガチャギリはデンパとは対照的に、少しいらだった声を上げた。
さっきから俺たちは御所の周りをうろうろ歩き回っている。謎の中心近くまで来て、急に手掛かりをなくしてしまった形だ。
「くそっ、この中に入れれば」
イサコは今にも御所の柵を乗り越えて行きそうな勢いだ。言葉が届いたのか、近くの小さな詰所に立つ警官がちらっとこっちを眺めた。
「まずいっすよ。俺たち、怪しまれてるんじゃないすか」
ナメッチが俺の後ろに隠れながら言う。
「うーん、まさか捕まったりはしねえだろうけどな。おいイサコ、そろそろ河岸変えねえか」
「なんだと」

つり上がった両目が俺をにらみつけた。
「昔来た時は入れたんだ。だからきっと中にいるんだ」
「えっ？　よくわからねえよ」
「うるさい。こうなったら」
イサコはちらりと詰所に目をやった。その目のふちが光って、何かが飛ぶ。と、警官のメガネが一瞬ぱっと輝いた。警官は慌ててメガネを外し、引っ繰り返して確かめ、首を傾げてからもう1度かけ直した。
「お前たち、後を頼む」
肩に手を置かれたと思ったら、そのまま体がのしかかってきた。
「うわっ、何だ」
驚いて振り向いた目と鼻の先をイサコが駆け抜けていく。えっ、じゃあ俺が支えてるのは――真っ黒な身体に『ＮＯ　ＤＡＴＡ』の表示。と思ったら見る間に黒い領域が消え、元のイサコの体になる。
「そっちは見かけだけ。ブラフだ」
「お前、自由に電脳体分離できるのかよ!?」
「非常手段だ」
答えたイサコはもう柵の向こうにいた。
「すぐ帰ってくる。そこの警官のメガネには細工しておいた」
「これって、ガチ非合法っすよね」
ナメッチが俺の陰で声をひそめた。
「黙ってろ。取りあえず、今をどう乗り切るかだ」
ガチャギリの視線の先に詰所があった。警官がこっちを不審そうな目つきで見ている。
「おい、ばれてんじゃねえのか」
「違う。単にイサコが気を失ったように見えたんだろ」
「くそ、イサコのヤロー、これは貸しひとつだぞ」
どこかに隠れようかとも思ったけど、余計に怪しまれるだけだ。ならいっそのこと、俺はイサコの体をデンパに預けて、詰所に向かって歩き始めた。

「どうかしたのかい」
こっちより先に、警官のほうが話しかけてきた。怪しむというよりは心配そうな声だったから、少し安心した。
「友達が急に気分が悪くなったって。どっか休むところはないですか」
「そうだねえ。近くには、あっちに見えるベンチしかないけど」
「そこでいい――」
どかんどかんと派手な音が続けざまに響いた。振り向くと、御所の中で閃光が飛び交っている。
「あのバカ、やりすぎだ」
「君、どうした？」
慌てて顔を戻すと、警官は不思議そうな顔で俺を見ている。どうやらこの光も音も、警官のメガネからはシャットアウトされているらしい。
「な、なんでもありません。ありがとうございました。友達はベンチで休ませます」
くるっと回れ右して駆け出そうとすると、
「待ちなさい」
冷や汗が吹き出した。
「な、なんすか」
「今日は日差しがあるから、日射病かもしれない。冷たいものでも飲ませてあげなさい」
飲み物代までもらってしまった。ものすごく罪悪感がある。結局そのお金は後で、きちんと利子をつけ、お巡りさんの健康を祈願しながら近くの神社の賽銭箱に入れておいた。利子分はイサコへの貸しのふたつ目だ。
イサコの電脳体はベンチに移動してから１０分くらいで戻ってきた。ベンチの実体の前に立つと、全身に暗号の模様が浮かび上がる。瞬間、体が光に変わって、反射的に閉じた目を開いた時には、イサコはもう実体に戻っていた。

「イリーガルを見つけたが逃げられた。でも行く先はわかる。銀閣寺だ」

立ち上がろうとして、足が少しふらついた。

「大丈夫かよ。少し休んでいくか」

「心配いらない。早く銀閣寺へ――くっ」

言葉とは逆に、イサコはこめかみを押さえて座り込んでしまった。

「おい、イサコ!?　しっかりしろ」

「心配ないと言ってるだろう」

2、3回行きを整えるともう1度立ち上がる。早足でバス停に向かうのを、俺は少しばかりの、だが得体のしれない不安を感じながら追いかけた。

広い敷地に堂々とそびえる金閣と違って、銀閣寺は街の一番端、高い生垣で囲われた見通しのきかない小路の先にあった。緑の壁が払えて最初に目に飛び込んできたのは、お皿にあけたプリンみたいな形の白い築山だった。

「何だこりゃ？　工事中なのか？」

「すっげー違和感ありますね」

「いや、これは元からあったものらしいぜ。庭園の一部なんだと」

「面白いところだねえ」

「おい、ぐずぐずするな」

イサコは完全に戦闘モードに切り替わっている。頭痛もバスに揺られるうちに治まったらしい。

白砂を抜けると、山から降りてくる勾配をそのまま使った庭が現れた。普通のお寺なんかと違って、ちょっとした山道みたいな順路があったり、そこら中に「マムシ注意」の看板があったり、けっこう変わってる。

「銀閣寺は建物もいいけど、庭まで含めてでちょうど金閣寺と釣り合う感じだね」

「建物は銀じゃねえしな」

「昔は壁になんかきらきらしたものを塗りつけて光らせてたらしいぜ」
「シブハデっすね」
ここを作った足利なんとかは相当ひねくれた性格の人間だったに違いない。
イサコは相変わらず雑談には加わらず、きょろきょろと辺りを見回していた。だが、目の前の登りに連なる山の頂きにあるはずの「大」の字は、木々に遮られてまるで見ることができない。
「イサコ、どうするよ。イサコ？」
「待て」
イサコは顔を向けず、手のひらだけで俺たちを抑えた。
「見ろ。上だ」
指差すほうを見上げると、敷地外の山の中に、碧い光がちらりと過ぎ去った。
「あれは……」
「イリーガルだ」
「人の形をしてた」
デンパが低い声で言った。
「ここで捕まえるか？」
「いや、まだだ」
イサコは手のひらを返して、昨日のパスワードを中空に浮かべた。
「あのイリーガルが現れたってことは、パスワードの道のりを歩き通したはず。次の何かが開ける……」
その言葉が終わる前に、パスワードがきいんと音を立てた。手のひらに、いつもイサコの使うのよりさらに複雑な模様の暗号が構成されている。
「な、何だ、その暗号は？」
「違う、私じゃない。これは、パスワードと暗号炉が勝手に反応してるんだ」
「暗号炉？」

俺が聞き返したのと同時に、パスワードがひと際強く輝いた。見ると、ふたつ目の「大」のすぐ下に、新たな白い線が伸びていく。
「ここは……！」
イサコが駆け出した。
「おっ、おい！　どこに行くんだよ」
「ついてこい。急げ」
短く言い放った姿がどんどん遠くなる。
「ちょっと、待ってくれよ。待てったら」
今日の俺たちはなんだか、イサコの背中を追いかけてばかりだ。

今来た道を引き返し、バス停に戻るすぐ前の川で、イサコは左に折れた。
「あっ、ここ知ってる。『哲学の道』っていう散歩道だよ」
デンパの言うとおり、用水路に沿って植えられた緑の陰を進む、散歩には気分の良さそうな歩道だった。
「イサコ、さっきのパスワードに新しくできた線ってここのことか」
イサコは答えず、早足で道へ入っていく。
「何なんだよ、あいつ」
俺はさすがにいらいらしてきた。
「そう言うなよ、ダイチ。このままイサコについていけば、新種のメタバグとか、そういった種類のお宝にありつけるかもしれねえぞ」
「黙ってついていくだけの価値はありそうっすね」
「うーん……」
イサコは気にくわないが、ガチャギリとナメッチのふたりから止められると、俺としても反論できなかった。
「いいな。じゃあ早く行くぜ。見失っちまう」
ガチャギリが指差した先で、ちょうどイサコが曲がり角の向こうに消えた。
「あっ、まずいまずい」
ナメッチが走り出して、俺たちも後を追いかけた。イサコの曲が

った角まで来た時、
「待って」
後ろでデンパが声を上げた。
「みんな、電脳体分離してる」
「えっ」
俺は慌てて自分の体を見た。
「おい、空を見ろよ」
ガチャギリが言った。見上げると、木々を通して見える空が赤く色づいている。まだせいぜい2時過ぎくらいのはずなのに。
「じゃあここはもう電脳空間の中ってわけか」
俺は周囲を見回した。今通り抜けたばかりの曲がり角のすぐこっちに、鍵穴の形をしたトンネルみたいなものがあって、その向こうは青空、こっちが夕暮れ。デンパは通常空間の側で、情けなくも「NO DATA」表示になった俺たちの体を抱えている。イサコのだけはいつもと変わらず、眠ったように見える。
「おい、イサコ！　俺たちの電脳体、何とかしろよ」
俺が怒鳴ると、もう大分先を進んでいるイサコはうるさそうに振り返った。
「デンパ、これを使え」
暗号のようなものがイサコの手を離れて、デンパのほうに向かった。受け取ったデンパが何やら怪しい手の動きを見せると、3体の黒かった実体の、見た目だけはまともになった。
「悪い。お前はそこで見張っててくれ」
「いいよ。危ないことは苦手だし」
のほほんと応じるデンパにいくらかの不安を覚えつつ前を向くと、もうイサコの姿は消えていた。

「くそっ、イサコのやつ、どこまで行っちまったんだ」
歩き始めてすぐ、早送りするように陽が落ちて、電脳空間は夜になった。さっきパスワードに現れた道を進んでいるはずなのに、イ

サコには全く追いつくことができなかった。
「メタバグも見つからねえな」
ガチャギリがあくび混じりの答えをよこした。最初のうちは夜の京都観光なんて修学旅行じゃできないって興奮してたくせに、現金なやつだ。
「ねえ、なんか変じゃないっすか」
ナメッチが俺の背中でこわごわと呟いた。
「変だって何がだよ」
「音っすよ。なんか声みたいなものが聞こえません？」
「やめろよ。怪談はなしだって、朝も言ったろ」
「いや、俺にも聞こえる」
ガチャギリが息をひそめて言った。仕方なしに俺も黙ると、ざわざわしたノイズを通して、風の鳴るような高い音が切れ切れに聞こえた。
「これもノイズの一種だろ」
「待て。ちょっとずつ大きくなってくるぜ」
ガチャギリの言うとおり、かすれるようだった音は次第にはっきりとしてくる。子供の、女の子の声だ。泣いている？
――ちゃん。どこ……こたえ……おね……ちゃん
「お姉ちゃん」
どこからかはっきりと声が届いた。
「ダイチ、前だ！」
御所、それに銀閣寺でも見かけた光る電脳体が、俺たちの１０メートルくらい前に立っていた。
「やっとお出ましだな」
ガチャギリが1歩踏み出した瞬間、イリーガルがさっと手を上げた。頭の上の空間がぎゅるんと回転して、光が走る。
「やべえ！」
俺はすかさずレンガ壁を投げた。ガチャギリの鼻先に広がった壁は、しかし攻撃が当たった途端大きなひびを走らせた。

「気をつけろ！　強えぞ」
叫びながらガチャギリが飛びのく。1秒も経たないうちに壁が砕け散って、ガチャギリのいた場所はめちゃくちゃに乱れた。
「散れ！　3方から攻撃するぜ」
「おう」
「ラジャっす」
ガチャギリが右、ナメッチが左に走る。俺は真ん中で、ゆっくりイリーガルに狙いを定めた。
「今だ！」
3発のミサイルが同時に発射された。イサコの暗号を除いて、現時点での黒客の最強武器、『追跡君（改）β』だ。さっきのイリーガルの攻撃と同じかそれ以上、レンガ壁なら粉微塵に砕く破壊力がある。
「さあ、どうする。3つ同時じゃよけきれねえぞ」
イリーガルが走り出した。でも子供の足くらいの速さだ。すぐミサイルに追いつかれる。
「なんだ？　あっけなくこれで終わりか」
だが俺はすぐに間違いを悟った。振り向いたイリーガルの手から、小型の鉄壁がふたつ飛ぶ。かわす暇もなく、ミサイルは空中で派手な閃光を放った。だがもう1発ある。
イリーガルの左手が光った。と見る間に光は手から伸びて、大きな剣の形になった。イリーガルはミサイルに向けて体を低くして踏み込み、信じられない速さで剣を跳ねあげる。ふたつに切り裂かれたミサイルは迷走して、それぞれイリーガルの左右で爆発した。
「道具を使う？　普通じゃねえな」
ガチャギリが口元に手をやった。
「あっ」
突然ナメッチが声を上げた。
「親分、ガチャギリ。あの鉄壁と剣、見たことないっすか」
ミニサイズの鉄壁に、電脳の剣？　それは――

「イサコだ！」
俺とガチャギリは同時に叫んでいた。
「ど、どういうことだ？　あのイリーガルがイサコだってのか」
「いや、そりゃ無え。御所と銀閣寺で、イサコとイリーガルが同時にいるの、見かけたろう」
「ま、まさか」
ナメッチの目はいっぱいに見開かれていた。
「イサコのやつ、あのイリーガルに取り込まれちまったんじゃ」
背中に冷たいものを感じた。まさか、あのイサコが、そんなバカな。だがしかし。それに、電脳体分離したままで取り込まれたりしたら一体どうなるんだ。
「に、逃げ――」
待て。俺たちだけ逃げたらイサコはどうなる。
「おいダイチ！　どうする？」
ガチャギリが俺を見た。後ろに下がりかけていた足を、俺は思い切り踏ん張った。
「どうするもこうするもイサコを置いてけるかよ！　まずあいつを倒す。その後でイサコを探すぞ。ありったけのミサイルを用意しろ」
「ラ、ラジャー！」
「へっ、リーダーぶりやがって」
そう言いながらも、ガチャギリの口元には笑みが見えた。ポシェットを乱暴にあさって、数発のミサイルを取り出す。
「準備いいな！　カウント、3、2、1、発射！」
3方から3発、合計9発のミサイルがイリーガルを狙う。イリーガルは少し慌てたように後ろに下がった。新しい鉄壁は出てこない。それなら、2発が壁、1発が剣で止められたとしても、残り6発は防げないはず。
鉄壁が動いた。ミサイルの軌道の目の前に躍り出た壁が体当たりを食らわして、ふたつの爆発が起こった。後7発。とイリーガルは剣を振りかぶって、一番近くのミサイルに投げつけた。剣は目測違

わずミサイルを捕え、３度目の爆発が起こる。だがもうやつに武器はない。

６発のミサイルがイリーガルの間近に迫った瞬間、何かとても嫌な、悪い予感が俺の背筋を駆け抜けた。何だ？　俺はイリーガルを見据えた。

イリーガルの姿はさっきよりも鮮明になっていた。人の形をした光のかたまりくらいにしか見えなかったのが、今では表情さえ読み取れる気がする。その瞳の周りが、ちきちきと断続的に輝いた。

６発のミサイルが、何もない空間で同時に炸裂した。爆風が何故かこっちめがけて飛んできて、俺は思わず体を伏せた。ばりばりっと雷のような音と光で、顔を上げることができなかった。

これはミサイルの爆発だけじゃない。何か別のことが起こった。伏せていたのは多分１０秒足らずだったろう。けれども俺には、ものすごく長い時間そうしていたように思えた。

「ひゃあっ」

ナメッチの悲鳴で俺は我に帰った。ゆっくりと頭を上げると、隣でガチャギリも同じようにしているのが見えた。

「ナメッチ、どうした？　今の爆発でどこかやられたか」

「ちっ違うっす」

ナメッチは真上を見上げている。

「くそっ、イリーガルは――」

前を見ると、イリーガルはさっきと同じ場所にたたずんでいた。

「ナメッチ、どこ見てやがる。イリーガルはあっちだ」

「だ、だって。見てくださいよ、あれ！」

「何だってんだ、一体」

だが、俺もナメッチ同様、上から目が離せなくなった。

京都の夜空が天の川あたりで真っぷたつに裂け、その向こうから太陽がのぞいていた。

第7話　迷宮への修学旅行　G　Part

暑い。

当然のことだけど、電脳体は温度を感じない。だからこの暑さは、はるか後ろに置いてきた私の実体のものだ。時刻は午後3時、盛りを過ぎたとはいえ夏に差しかかる頃、上げ調子の日差しを直接浴びているのだろう。それに京都は盆地だから熱がこもる。何よりこの人出――

人出？　私は今初めて気づいたように夜景を見回した。晴れているけれど星は見えず、夜空は真っ黒く見えた。飽和した人ごみは懐かしい山吹色の街の光に溶かし込まれて、天と地は色でもって好対照をなしている。そのちょうど中間にある山々はうすぼやけた緑から闇の帳に姿を消し、夜空の側に与しようというところが、奇妙な光によってその趨勢を定かならぬものに変えられていた。そして光は、ただのもの珍しさを超えて、私の目を釘付けにした。

送り火、大の字の。私の探していたものの欠片だった。

突然メガネがささやいた。

――高台寺の夜景、加茂の川床、そして五山の送り火。京の夏の夜は様々な印象深いシーンに彩られています。

「あれ、送り火だよ。ほら」

ずっと先のほうで誰かが喋っている。

そうだ。この日は、夕ご飯の後にみんなで送り火を見に出かけたんだっけ。

はるか前を行くふたりに追いつこうと、私は人込みを縫って小走りに進んだ。

どうしてだろう、ふたりは時々立ち止まりながらゆっくりと歩いているのに、いくら経っても距離が縮まらない。送り火だけは次第に近く、大きくなってくる。炎に照らされた肌がちりちりと熱いほどだ。

あまり暑いので私は上着を脱いだ。けれど混雑の中で肌に当たるのは、無数の人々の熱で蒸し風呂のようになったぬるまったい空気の淀みだけで、ちっとも汗が引かなかった。

真昼のように明るい街は、どうしてか記憶の中にあるほどには美しくない。観光客向けに1階の表の壁だけをきれいに塗り直した雑居ビル。年季が入ってきて乗るとぐらぐらと傾く歩道のタイル。ひっきりなしに鳴らされて雑踏の騒がしさに拍車をかけるクラクション。そういう雑然とした要素は知らぬ間に思い出から抜け落ちていたのかというと、そうでもない。ちゃんと全部、覚えている。それなら何故こんな失望というか幻滅を感じるのか――と悩むほどでもない。実をいえば答えは出ている。

私が変わってしまったんだ。例えばさっきの雑居ビル。1階、昼はリーズナブルな定食で客を集め、夜は居酒屋として営業する飲食店。2階、どこかで名前を聞いた企業の子会社の子会社。3階、NPO団体の事務所。思い出の私は、その看板をまるで魔法の呪文のように見ていた。私の知らないどこかでそういうひとつひとつが私の知らない何かの役割を果たして、この世界を動かしているんだと思うと、心は不思議な興奮に満たされた。今はどうか。それぞれが具体的にどんな仕事をしているかなんてもちろん知らないけれど、それが何なのか、今の私はわかっている、あるいはわかったつもりになっている。そうしてたとえそのひとつが抜け落ちたとしても、社会の営みに何の影響も及ぼさないことも知っている。神秘の仮面をはがされた剥き出しのコンクリートはわびしい。こういうの、すれっからっしっていうんだろうか。

細い山道の真ん中でぼけっと立ち止まっていた私の背中に、何かがぶつかった。まだ若い木の実だった。いつの間にか、声は聞こえず、でも騒々しさだけは残っていた。騒がしさの元はセミだ。クマゼミ、アブラゼミ、ミンミンゼミもいる。

歩き出すと頬をたらたらと汗が伝った。最高気温36度なんて日

に山登りなんて、正気の沙汰じゃない。でも、向こうに見えるあずまやまで行くって駄々をこねたのは私だったっけ。坂を下った向こうに見える貴船神社には参拝客が引きも切らないけれど、山道に入ってくる人の姿は私たち以外にない。そうだ、思い出してきた。あんまり人と会わないから、私はだんだん不安を感じ始めたのだ。

「もういいよ、帰ろう」

すぐ近くで小さな子供の声がした。

「駄目よ。あずまやまで行きたいって言ったの、イサコちゃんでしょ」

「だからもういいの」

「よくない。わがまま言わないの」

なんだかとても恐い気分になった。あずまやまで行き着いたら、もう二度と帰ってこられないような。

「いいってば。離して」

強く握っていた手を私はぶんぶん振り回して、無理やりに振りほどいた。

「あっ、走ると危ないよ」

そんな声を背中に受け、実際張り出した木の根っこに足を取られて転びそうになったりしながら、後ろから登ってくるお母さんのところまで駆けた。お母さんはそれで一行を離れて私を神社の境内まで連れていき、背の高い木の陰に隠れて涼しいベンチのところで皆を待った。私はラムネを買ってもらってご満悦で、一気に飲み干した後はげっぷをしながら境内のどんぐり拾いに夢中になっていた。

「こら、勇子」

突然背中から抱き上げられた。お兄ちゃんだった。

「わがまま言ってちゃ駄目じゃないか。お姉ちゃん、ずっとあずまやで待っててくれんだぞ。謝りなさい」

そう聞くと罪悪感が込み上げ、でも目の前で微笑んでいる顔に素直に謝るのがなんだか恥ずかしくて、私は何も言わずに顔を背けた。

「勇子！」

「いいのよ、もう」
優しい声が割って入った。
「ごめん」
私の代わりにお兄ちゃんが謝って、私の体を離す。
「イサコちゃん、行こう」
差し出された手を取っていいのか逡巡しているうちに、お兄ちゃんがその手を取っていた。
「勇子はしばらくお母さんに任せて、僕達で境内を見て回ろうよ」
「えっ――イサコちゃん、いいの？」
私はうつむいたまま、曖昧にうなずくような動作をした。
「ほら、勇子もいいって言ってるから」
「うん。じゃあイサコちゃん、ちょっと行ってくるわね」
私ははっとしてふたりを見上げた。「待って」と言いかけたけれど、結局言葉にならなかった。お姉ちゃんが眩しいような笑みでお兄ちゃんを見たから。ふたりともとても楽しそうだったから。私なんかいなくても。

近くの木で鳴いていたセミの声がちっ、ちきっと途切れて、黒い小さな影が木漏れ日に紛れた。ああ、戻ってきたのか。哲学の道へ。どれだけここにいたのだろう。汗はもう滝のように流れ、シャツがべったりと背中に張りついている。
私はほんの少しだけ目を上げた。考えに違わず、そこにふたりは歩いていた。あれは――そう、2泊3日の旅行の最後の日だ。思い出した。送り火を見たのが最初の晩、貴船神社から高台に登ったのは次の日だ。貴船神社のことはいい思い出じゃなかったから忘れていたのだろう。そして3日目。予定の観光は午前中に終え、お昼も食べたところで、このまま帰ってしまうのも少しもったいなくなってゆるゆるとその辺を歩き回ることにしたのだ。
その時私は変な気分だった。もうすぐ帰りという、お祭りの余韻に浸る心、昨日から続くお姉ちゃんへの反発心、それと相反する後

悔の気持ち。哲学の道に着いた時、みんなが目を離している隙に勝手に駆け出してしまったのもそのせいだ。

もちろん子供の体力だし、おまけに今日も今日とてくらくらするほど暑かったからすぐにばてた。木陰に座り込んで荒い息をついている私を回収に来たのはやっぱりお姉ちゃんだった。お姉ちゃんは何も言わず、私も何も言わず、ふたりは手をつないだけれどその間に少しの距離があった。今見ているのは、そのすぐ後の光景だ。

遅ればせながらの暑さ対策か、ふたりとも麦わら帽子をかぶっていた。真新しい帽子がちょっと恥ずかしかった昔の私は、帽子のへりをつまんでねじったりしている。その時は気づかなかったけれど、よく見るとお姉ちゃんも私と同じことをしていておかしくなった。

今度は何故か声が聞こえなかった。送り火の時と同じように、近づくことができない。「待って」と大声で呼んでみたけれど、こっちの声も届いていないらしかった。その時になってようやく、私の心に焦りが芽生えた。せっかくここに辿り着いたのに、このままなす術もなく見送るしかないのか。

私の存在などお構いなしに、ふたりは次第に遠ざかっていく。どうしても、どうしても私はこの先、ふたりに追いつけないのだろうか。

「待ってくれ」

折れそうになる心を支えるためにもう1度叫び、私はふたりのほうへ走った。空気が粘つくように重たくて、なかなか前に出られない。体をねじ込むように1歩1歩足を進めて、ようやく後ろ姿の5、6メートル手前まで来たところで、見えない壁に突き当たった。

「何だ、これは」

私は電脳障壁を無効化する暗号を生成して壁に放った。が、全く効果はない。効果を発揮する前に、暗号の光は空間に溶け込んでしまう。

それならパスワードは？　私は左手でかすかに発光し続けるパスワードを少しずつ展開し、ついでに暗号を仕込んだ。出来上がった

パスワードはらせん状に巻いた部分が盛り上がり、一種の鍵にも見える。

「これでどうだ」

パスワードを壁に押し当てると、一瞬全体が輝いて見覚えのある幾何学模様が広がった。力を左手に流し込みながらもうひと押しする。腕がゆっくりと壁の中に沈み込む。行ける。

壁の裂け目に体ごと分け入ろうと、左の手の甲に右手を重ねた時、全身が総毛立った。強力な反動が来る！

躊躇はしなかったしている暇もなかった。やっと開いた隙間にミニサイズの鉄壁を押し込み、敵の一撃をやわらげる防御用の暗号を張り巡らす。体はすぐにくるであろう衝撃に備えてぐっと重心を低く構えた。

が、無駄だった。突き返される感じがまず左腕、次いで右腕に伝わり、次の瞬間には体が空中にあった。同じように弾き飛ばされた鉄壁が砕けるのがちらりと映った。

痛みは地面にたたきつけられた後から来た。全身がばらばらになってしまいそうな苦痛が走って、私は身をよじった。けれど幸い、ごくわずかな時間でそれは治まった。

ふらふらと立ち上がった私は目を見張った。空間の裂け目はもうふさがれている。その向こうだ。幼い私が振り向いて、こっちを見ていた。

声が、心に直接響いた。

「私が見せられるのはここまで。後はあなたが見つけて」

「なん……だと」

「わかってるでしょ。あなたはこっちに来ることはできない」

それだけ言って、また前を向く。急に日差しが強くなってふたりの姿をかき消す。

「待て、行くな」

「さよなら。いつかまた、思い出してね」

「待ってくれ」

伸ばそうとした腕は、しかし誰かに捕まれた。
「イサコ、逃げて！　空間が壊れ始めてる」

第7話　迷宮への修学旅行　Ｇ　Ｐａｒｔ（後書き）

長かった修学旅行も後1パートです。どうぞよろしくお付き合いください。

第7話　迷宮への修学旅行　Ｈ　ｐａｒｔ

手首をつかまれたイサコは、ものすごい表情で私をにらみつけた。
「ヤサコ！」
言葉が風になって吹きつけた。比喩ではない。イサコの怒りが電脳空間の何かを動かしたのだ。
「離せ」
「やだ！　見てよ」
私は空いているほうの手で真上を指差した。その途端、ばりっと布を引き裂くような音がして、夜空の裂け目がまた広がった。
「危ない！」
闇が黒い幕になって垂れ下がり、破片がばらばらと落ちてくる。無我夢中でイサコを引きずり倒してその上に覆いかぶさった。イサコはもがいた。
「やめろ、どいてくれ！　私が行かなきゃ駄目なんだ」
「行くってどこに？」
「私の……違う、あの人の……うっ、うるさい！　お前には関係ないだろう」
イサコの言ってる意味は私にはよくわからなかったけれど、行かせてはいけないことはわかった。
「とにかく駄目よ。空間がどんどん壊れてるの。巻き込まれたらどうなるかわからないわ」
「バカを言え。壊れてなんか――」
言葉と抵抗する力が一緒に弱まった。あおむけになったイサコは、崩れていく空をぽかんと見上げている。
「一体どうして夜なんだ？　さっきまで昼だったのに」
「しっかりしてよ。ここに入ってからずっと夜だったじゃない」
「なん……だと」
飛び出しそうなくらいに、ますます目が見開かれる。

「そんな、じゃあ私の見てたものは……。待てよ、もしかしてそういう空間の性質なのか？　私の思い出が、私の望んだとおりに。それなら――止まれ！」

イサコはいきなり手のひらを真上に突き出した。私ははっとしてその向く先を見た――が、崩壊は止まらない。

「ちっ、失敗か。空間自体にがたが来てるんだ。それなら、なんでもいい、なんでも――お兄ちゃん！」

５メートルくらい前の道にノイズが走った。１０歳くらいの男の子の姿が一瞬モノクロで像を結んだ。

「お兄ちゃん！？　あれ、イサコの？」

イサコはしまったというように口をつぐんだ。と、映像が歪んでまたたく間に吹き散った。

「駄目だ、安定しない。どうしてだ？　昨日パスワードを奪ったせいか？」

イサコの左手が光に包まれ、コイル状の電脳物質がくるくると回りながら伸びてくる。けれどそれがすっかり現れた時、イサコの目は自分のではなく、私の右手に釘付けになっていた。

「ヤサコ、どうしてお前が私と同じものを持ってる？」

そう、私の右手では、イサコと同じコイルが輝いていたのだ。

「ダイチ君、大丈夫！？」

「あんた、私以外のやつに勝手にやられんじゃないわよ」

「す、すまねえ」

とダイチ君がフミエちゃんに素直に謝ってしまったほど、その時の黒客はピンチだった。

「クソっ、あいつ、もう俺たちの手に負えねえよ」

ガチャギリの指差す先には光に包まれた小さな人影があった。

「何だ、あの子供みたいなのがイリーガル？」

「ひどいわ。よってたかってあんな小さな子をいじめて」

ハラケンと葦原さんが口々に言った。

「見た目は子供でも中身は違うんすよ。強いのなんのって、イサコ並みっすよ。おまけに空間が壊れ始めるし」
「だったらさっさと逃げなさいよ。もう1匹捕まえたんでしょ。欲張るなっての」
「でも、イサコが」
私は気づいた。
「情けない！　あんた達、イサコひとりに振り回されてんじゃないわよ。大体当のイサコは――」
「いないのよ」
「へ？」
フミエちゃんはきょろきょろと周囲を見回した。
「ダイチ君、イサコはどこに行ったの」
「それが、ひとりだけ先に行って……」
そこで言葉が止まる。ダイチ君はうなだれた。
「先に行って、それでどうしたの？　ねえ」
「く、く、食われちまったんすよお」
ナメッチが悲鳴のように叫んだ。
「食われた！？　そんなバカな」
ハラケンが前に進み出た。
「ナメッチ、現場を見たのか」
「いや、そうじゃなくて、えーと」
答えに困っているナメッチに代わってガチャギリが歩み出た。
「違うんだ。誰もはっきり見たわけじゃねえ。でも、あのイリーガルの戦い方とか武器とかがイサコとそっくりなんだ。だから、もしかするとイサコはイリーガルに取り込まれちまったんじゃねえか、って言ってたんだよ」
「憶測なのね」
いつの間にか握りしめていた手の力が、少しだけ緩んだ。
「どっちにしてもやるべきことは決まってるわ。イリーガルを倒してイサコを助ける、そうでなければイリーガルを倒してイサコを探

す。とにかく早く戻らないと、空間がもたないわ」
フミエちゃんの言うそばから、重いものに潰されかけたように空間がぎしいときしんだ。夜空の割れ目から入った光が街の一部を灰色に照らし出して、どうしてか心が不吉な予感にざわめいた。
「よし、じゃあまずはイリーガルだ。この人数ならなんとかなるかもしれねえ」
「ダイチ君、待って」
引き止めたのは葦原さんだった。
「おかしいわ。あのイリーガル、さっきから攻撃してこないし、それにイリーガルの周りの空間だけ壊れてないのよ」
確かに、イリーガルは攻撃してこないどころか、こっちを見てすらいない。
「あれは多分、空間を修復しようとしてるんだ」
ハラケンが呟いた。
「イリーガルはこの異空間の中でしか存在できないんだろう。もしかして空間が壊れ始めたのは、僕たちが侵入してイリーガルが空間の維持だけに集中できなくなったせいかもしれないぞ」
「それじゃあ、俺たちはイリーガルを攻撃しないほうがいいってことっすか？　でもイサコは――」
「私、行ってみる」
突然、葦原さんが歩き出した。
「待てよ、カンナ」
「研一はそこにいて」
いつになく強い口調で葦原さんは言って、それでハラケンはたじろいだ。私の心も揺れていたけど、けれど思い切って叫んだ。
「葦原さん！」
葦原さんは振り返った。
「私も行く」
答えは、なんだか少し寂しそうだった。
「いいわ」

「ま、待って。じゃあ私も」
慌てて名乗り出たフミちゃんに、葦原さんはくすりと微笑んだ。
「だめ。ふたりまで」
「なっ、なんなのよ」
「ごめん。フミエちゃんは何かあったら助けに来て」
私は謝りながら小走りで葦原さんの隣についた。
いつの間にかイリーガルは少し離れた場所に移動していた。私たちは様子を確かめながら、ゆっくりと歩いて近寄っていった。
最初に口を開いたのは葦原さんだった。
「ねえ、ヤサコちゃんにとって、イサコちゃんって一体どんな存在？」
「う、うん、クラスメイトで、後、その」
「敵同士？」
私は驚いて葦原さんの顔を見た。葦原さんは私ではなく、ずっとイリーガルに顔を向けたままだった。
「私はイサコちゃんと友達でいたいし、みんなにもそうだって言ってる。でも、本当はまだわからないの」
「わからない？」
「例えばイサコちゃんが何か間違ったことをした時、それは違うって言えるかどうかわからない。イサコちゃんに嫌われるのが怖くて、言えないかもしれない」
葦原さんの表情は寂しそうにも、悔しそうにも見えた。何か言わなくちゃと思って、でも言葉にならなかった。
「ヤサコちゃんは言えるようになってね」
「えっ」
「ごめん」
何故か謝ってから、
「それからもうひとつお願い。ヤサコちゃん、まだ私のこと『葦原さん』って呼ぶでしょ。ちょっとだけ寂しいの」
確かにそのとおりだった。わだかまるものがあるから、私は素直

に『カンナ』って呼べないでいた。
「これからは『カンナ』って呼んでくれない？」
それはとても重大な決断にも思えた。そして、葦原さんがそう頼むのは、
「私のわがままなのかもしれない。ごめん」
「カンナが謝ることないよ」
思い切ったつもりもなく、すっと答えが出た。カンナは優しい子なのだ。自分自身の言葉に傷ついてしまうほどに。
今度はカンナがちょっと驚いた顔で私を見て、何か言いかけた時。
「お姉ちゃん」
別の声が聞こえた。幼い、でも間違いない、イサコの声だ。
「あなた、イサコちゃんなの？」
カンナが聞いた。
「お姉ちゃん？」
人影は聞き返した。私たちは顔を見合わせた。お姉ちゃんって、一体誰のことだろう。
「お姉ちゃん、お姉ちゃんだ！」
人影はいきなりこっちに走り出した。私は一瞬身構えて、でも敵意みたいなものが感じられなかったから、すぐに構えを解いた。
「待ってたんだよ」
表情はわからなくても、人影はすごく嬉しそうだった。それでどうしてか、私には人影がイサコだと確信した。そうして私とイサコの中にある何かが重なるのがわかった。
「私たちはあなたのお姉ちゃんじゃない」
はっきりとした口調で、私は言った。
「でも私たちはあなたのために来た。戻ってきて」
人影は走るのをやめ、私とカンナを交互に見た。その後でゆっくりと私に近づき、
「これ」
モミジのような手を差し出した。私が右の手のひらを上に向ける

と、小さな感触が転がった。
「ヤサコちゃん、手！」
イサコのと似た、暗号のような図形が手の上に踊っていた。それがイサコのいる方向へ導いていると、直感的にわかった。
気がつくと、人影はもうなかった。
「行ってくる。カンナ、空間の外で待ってて！」
言葉と同時に、私は駆け出していた。

ここに来るまでのことを手短に伝えると、イサコは深くうなずいた。
「わかったぞ。この空間は2体のイリーガルに支えられていたんだ。それが、私が1体目のパスワードを抜き取ったから不安定になって、残された方も黒客との戦闘で空間の維持に手が回らなくなった。さらにお前がもうひとつのパスワードを奪ってしまった。このままだと空間が決定的に崩壊してしまう」
「イサコ、早く空間の外に逃げよう。ここにいたって、もう何も起こらない」
イサコは唇を噛みしめた。何かをずっと逡巡しているようだった。
「イサコ！　急がないと」
「ヤサコ、頼みがある」
言葉とは裏腹に、イサコはほとんどにらみつけるように私を見た。
「お前のパスワードを譲ってくれ。ふたつあればきっと、この空間を維持できる」
私は返事の仕方がわからず、イサコの顔と自分の右手を交互に眺めた。
「心配することはない。空間が安定したら私も帰る」
「一体どうして？　何のために空間を維持する必要があるの」
「私の大切な場所だからだ！」
イサコは叫んだ。
「いつまでも変わらずにいたいからだ。ずっとここに」

「あなたが？」
イサコは無意識にうなずきかけ、はっと気づいて慌てて首を振った。
「違う。この場所が。ここにいた者たちが」
「わかった」
私は右手をかざした。光が滔々と流れ出ていた。
「手を合わせて」
イサコの左手からも、同じ光が脈打っていた。
イサコが小さく頭を下げ、私も目を伏せた。
イサコの言ったことが本当なのかどうか、イサコの言うようにするのが正しいのか、イサコの言うとおりに本当にことが進むのか、私には何ひとつわからない。けれどひとつだけわかることがあって、そのことをイサコはわかってなかった。
この空間をどうするのか決めるのはイサコじゃない。ここに住むものたちだ。
イサコの左手が私の右手を握った。予想したよりも小さくて、温かい手だった。うつむいたままだったから、その時イサコがどんな表情を浮かべていたのかは知る由もない。私はと言えば、少し寂しそうな微笑みを浮かべていたに決まっている。その笑みには覚えがある。
お姉ちゃん。
光が一瞬すぼまって、その後で眩く辺りを照らした。
耐え切れないほどの奔流の中で、私たちは意識を失った。

ふたつの人影が見えた。仲良く手をつないで、これでやっと、本当に帰るべき場所に帰っていくらしかった。
ふたりは屈託のない笑顔だった。それはあるいは現実ではなく、思い出の中にしかあり得ない類のものだったのかもしれない。
「ありがとう」
誰かが呟いた。

「ヤサコ、ヤサコってば」
だんだん近づいてくる声は、何故だろう、何年ぶりに聞くような気がした。
平和な1日の太陽がそろそろ傾き出す時刻だ。小学生にとっての日々のミッションはこの時点で大分終わりに近づいている。今日はいろいろあって、みんながいろいろやったから、その経験で空気がみっしりと詰まって嬉しいくらいに重たい。その気分も、私は思い出の中からすくい出すようにして感じていた。
「ヤサコ、どうしたの？　起きてよ」
うるさいくらいの声に、私はうっすらと目を開けた。
「フミエちゃんか……何もかも皆、懐かしい」
「あ、あんた、何言ってんの？」
「気分よ、気分」
ゆっくりと起き上がると、哲学の道の前にあるベンチだった。イサコは私より少し早く気がついたらしい、隣で目をしょぼしょぼさせていた。
「ヤサコ、無事だったか」
「うん、イサコも？」
「ああ」
私はイサコの耳元に口を寄せて、ささやいた。
「泣いてるの？」
「ちっ、違う！」
叫んだイサコに、全員の視線が集まる。
「もう大丈夫だ。集合時間に遅れるぞ。急ごう」
イサコはさっさと立ち上がって、振り返らずに歩き始めた。
「なーによあいつ。せっかく助けてあげたってのに、現金なやつね」
私はくすっと笑った。
「まあいいじゃん」
笑いは高い空に溶けた。

あんまり疲れていたせいか、その後の思い出はぼんやりしている。はっきりしているのは、呆れたことに帰りの車内で見た夢だけだったりする。夢の中ではみんな楽しそうで、私も思い切り笑っていた。けれど、夢とわかっていた。夢を現実に持ってくるわけにはいかない。それは寂しいけれど、そういうことなのだ。

イサコもそれはわかっているのだろうか。わかっていてあえて、思い出を探していたのだろうか。イサコがもし夢と現実の夢を選ぶなら、その時私はイサコを止める言葉を持つのだろうか。

第7話　迷宮への修学旅行　Ｈ　Ｐａｒｔ（後書き）

修学旅行編は本話で終わりです。

第8話　ヤサコ、イサコになる　Ａ　ｐａｒｔ

小此木早苗の記憶によると、おれがあいつであいつがおれだそうです。

修学旅行が終わると時間の流れがゆっくりになった。

最終日、電車の窓から眺めた大黒を私は思い出す。どこにでもある地方都市、金沢から引っ越してきた時は味気ない感じさえ受けたのと同じ光景を、その時の私はどこか親しみのある、懐かしいような気分で見ていた。そうして私は、大黒も私の故郷になったと知ったのだ。

「平和ねえ」

いつもの帰り道、私はことさらに声に出して呟いた。

「そうねえ」

フミエちゃんもあくびをかみ殺す。

「あんたたちさあ、この状況で何でそんな台詞が出てくるわけ？」

「えー？」

「えーじゃない。見なよ」

アイコちゃんの指差した先では、電脳空間がエラーを起こしてブラックホールのような穴が空いていた。確かに、オバちゃんの手腕で一時期はきれいになっていた空間の状態が、最近また昔に逆戻り、というよりは更に悪化している。学校でも時々、空間フォーマット工事による通学路の変更の話を聞くし、そういえば朝のニュースで、電脳治安維持法の罰則規定強化が取り上げられていた。

とはいえ、

「いいのいいの。サッチーと空間異常は大黒の華よ。私たちだって、

帰ったらすぐメガシ屋に行ってペット探し業務を始めるんだから。そういう、らしい忙しさまで含めて平和だって言ってんの」

「じゃああれも？」

ふたつほど向こうの十字路を黒客のみんなが走っていくのが見えた。

「ふふん」

フミエちゃんは余裕の笑みを浮かべた。

「今日くらい見逃してやるわよ」

私もフミエちゃんも、修学旅行で共闘してからというもの、なんとなく連帯意識があった。黒客の財布も大分寂しくなってきたろうから、たまには好きなようにやらせればいいんじゃないかと、そんな気分だった。

「よくよくお天気な子ね」

その辺りの事情を知らないアイコちゃんは、呆れ顔で両腕を広げてみせた。

「お天気って言ったら私より、あのふたりじゃないの？　ほら」

今度はフミエちゃんが道路の向こうを指差した。ハラケンとカンナだ。

「おーい、どこ行くのよ」

フミエちゃんはすぐに大きく手を振りながら駆け出した。

「あちゃ。フミエのやつ、デリカシーってものがないんだから」

アイコちゃんと私は苦笑いをかわしてその後を追った。

私たちの姿を見たハラケンもカンナも、なんだかどぎまぎした様子だった。

「や、やあ。何の用？」

「何の用とはご挨拶ね。あんた達を見つけたから声掛けただけよ。悪かった？」

「い、いや、悪くはないけど」

ハラケンはもごもごと答える。

「それで、何やってたの？　デート？」

「そっ、そんなのじゃないよ」
ハラケンはオーバーに手を振って否定した。カンナは何も言わなかったけれど、ハラケンの答えを聞いて一瞬表情を曇らせたのを私は見逃さなかった。
「鹿屋野神社に行こうと思ってたんだ。都市伝説の調査に」
「都市伝説？」
「あっ、それ聞いた」
耳の早いアイコちゃんが手を上げた。
「神社の裏手の階段で転ぶと、幽体離脱するってやつでしょ」
「なんだそれ」
フミエちゃんが言って、ハラケンには悪いけど、私もぷっと吹き出してしまった。噂の中身が、いかにも小学生っぽさの漂うものだったからだ。
「神社に行ってどうするのよ。ハラケンもその階段から落ちてみるつもり？」
フミエちゃんがからかうように言うと、ハラケンはちょっと眉をひそめた。
「違うよ。僕だって都市伝説をまるまる信じてるわけじゃない。ただどうしてそういう都市伝説が生まれたのか、現地へ行って写真を撮ったり人通りを調べたりするんだよ」
「フィールドワークっていうのよ。ちょっと面白そうじゃない」
カンナがハラケンに続く。
「フミエちゃん達もどう？　一緒に行ってみない」
「えっ」
今度はハラケンが、少しだけ非難めいた目付きをカンナに向けた。カンナはそんなハラケンを、笑みを含んだ顔で見上げている。そうか、この誘いは、ハラケンが「デートじゃない」って言ったことへの、カンナのささやかな復讐なのだろう。
「私、行くわ」
私は思い切って言ってみた。言ってみることで自分の心がどんな

風に動くのか、知りたかったから。京都の1件以来、カンナに対するわだかまりみたいなものは消えていたけど、でもハラケンへの気持ちはもちろん変わらなかったから、ふたりと一緒にいる時、果たして自分がどんな感情を抱くのか、自分でもわからなかったのだ。

「ヤサコが行くってんなら、私も行くわ」

「私も」

フミエちゃんとアイコちゃんが答えると、カンナはうなずきながら私に共犯者の笑みを送ってきた。私は微笑み返しながら、それでも心のどこかがちくりと痛むのを感じていた。

鹿屋野神社の裏側は小さな丘になっている。木々の放つ森の匂いと、それから土臭さが混ざり合って、ちょっとした森にいるような気分だ。

噂の階段は、下草を刈り取られた杉林を一直線に貫いてアスファルトの道路に降りる、けっこう勾配のきついものだった。学校には近いけれど、階段が危ないのと、空間が乱れがちなせいもあって、低学年の子供たちには、そこで遊ばないようにという指導が出ているらしい。

「考えてみると、確かにここは都市伝説の舞台に恰好の場所だね」

下側の道路から階段を見上げながら、ハラケンが呟いた。

「ふうん。不気味だからってこと?」

フミエちゃんが聞いた。日の当たる道路から見上げると、杉林の陰になった階段は、上に行けば行くほど暗い。上っていくうちに見知らぬ世界に踏み込んでいきそうな、得体の知れなさがある。

「もちろんそれもあるけどね、他にも都市伝説の発生を満たす条件をいくつも備えてるよ」

思慮深げにうなずいたハラケンの顔は、いつの間にやら学者めいたものに変わっている。

「今フミエの言ったとおり、下から眺めた時の気味悪さがひとつ。それに、低学年は入ってはいけないと言われていることや、階段の

向こうは神域だということから、日常生活とかけ離れた場所だってことがもうひとつ。さらに、そんな場所であるにもかかわらず、ここは僕たちの暮らしと地理的にすごく近いところにある。そういう『身近な異界』にこそ都市伝説が生まれるんだ」

「ふうん」

「へえ」

私とアイコちゃんは、わかったようなわからないような気分で相槌を打った。

「ごたくはいいからさ、取りあえず上ってみよっか」

フミエちゃんが石段に足をかけて、「おっと」とよろめいた。

「気をつけて。苔みたいなのが生えてる。滑るわよ」

「なるほど。実際滑りやすいのも由来のひとつだな」

何度もうなずきながら、ハラケンは階段をどんどん上っていく。

「ちょっと研一。気をつけなさいよ」

私たちも続いて上り始めた時、上のほうから声が響いた。

「そっちだ、そっちに行ったぞ」

「ちっ。せっかく見逃してやったのに、どうしてこんなとこで出くわすのよ」

フミエちゃんが毒づいた。つまり、ダイチ君の声だったのだ。

「どけ！　私が捕まえる」

今度のはイサコだ。遠くのほうでぱっと光が飛び散った。

私は数段上がってみた。まだ、誰の姿も見えない。

「おい、外れたぞ」

「うるさい。お前がどかないからだ」

けれど、声はどんどん近づいてくる。と、今度は階段のすぐ上で暗号が弾けた。

「どうする？」

私は下にいるフミエちゃんを振り返った。

「そうね」

フミエちゃんとアイコちゃんは顔を見合わせた。

「あっ」
突然カンナが叫んで、私の後ろを指差した。
「あれ、イリーガル！？」
「やばっ、どんどんこっち来るわよ」
「まずい、メタタグ、メタタグ」
フミエちゃんがポシェットを探り出す。
「え、えっ？」
私はとっさの判断ができずにうろたえてしまった。
「危ない！　ヤサコ、後ろ、後ろ」
ようやく振り返った視界いっぱいに、黒いものが覆いかぶさる。
「きゃあっ」
私はバランスを崩しかけ、危うく踏み留まった。黒いものは私を飛び越えて、そのまま階段の下に走っていく。道路に出ると右に折れて、すぐに見えなくなった。
「び、びっくりした」
まだ心臓がばくばく言ってる。
「ヤサコ、危なかった――」
カンナの言葉が途中で止まって、目がいっぱいに見開かれた。
「バカ！　どけ、どけっ」
そう言われても、イサコの声は明らかに近すぎた。
私の体は、ちょうど正面からイサコを抱き止めて、そのまま真後ろへ倒れ込んだ。数段しか上ってないけど、頭を打ったらまずいんじゃないか。瞬時にそう思いながら、でも何もできず、私はイサコの顔をのぞきこんだ。
多分私はぼけっとした顔だったろうけど、イサコのほうは必死の形相だった。空中で体をひねるような動作をして、私が下にいたのが入れ替わる。それで、地面にはイサコの肩から落ちた。
衝撃があって、景色がぐるぐる回った。空の青、杉林の緑、下は舗装されていない地面の茶色がめまぐるしく移り変わる。はしばしに明るいクリームの、私の服が映った。イサコのは何故か見えなか

った。
「痛たあ……」
言ったつもりはないのに私の声が聞こえた。気が動転しているのだろうか。ゆっくり息をついて私は立ち上がった。
「ヤサコ、大丈夫!?」
フミエちゃんが駆け寄ってきた。
「うん、私は――」
言い終わる前に、フミエちゃんは私の横を素通りした。
「えっ?」
私は後ろを見た。フミエちゃんやみんなが屈みこんで誰かを見守っている。誰かというのは――そんな!? 私の体だ。何これ、まさか幽体離脱!?
「あんた、何すんのよ!」
フミエちゃんが振り向いて、きっとこっちをにらみつけた。
「え……何って……え?」
「よくも私の舎弟を傷ものにしてくれたわね!」
フミエちゃんはずんずん近づいて、私の胸ぐらをつかんだ。
「フミエちゃん、それ、どういうこと?」
「あんたなんかに慣れ慣れしく『フミエちゃん』なんて呼ばれたかないわ」
「はあ?」
情けない返事をしていると、黒客の面々が階段をどやどやと降りてきた。
「おい、てめえ、何言いがかり付けてんだよ」
何故か私を守るように取り囲む。
「言いがかりじゃないわよ。あんた達が悪いんじゃない」
「黙れよ。ちゃんとよけないほうが悪いんだ」
その時、私の体が起き上がった。
「う……、一体どうしたんだ」
「あっ、ヤサコ、平気? 怪我はない?」

カンナとアイコちゃんがその肩を支える。
「ヤサコ？」
不思議そうにふたりを眺め回し、その後で私は私のほうを見た。
私同士の視線が釘付けになる。
「わ、私がふたり！？」
私たちは同時に声を上げた。そして、どういうわけかその片方はイサコのものだった。
私ははっとして、自分の体を見た。見覚えのある、デニムの上下。
目の前の私も同じようにして、それでもう１度見つめ合った。
「嘘でしょ？」
「嘘だろ？」
そして再び、同時に叫んだ。
「私たち、入れ替わってる！」
「な、なんだってー！！」

第8話　ヤサコ、イサコになる　Ｂ　ｐａｒｔ

例えば悪夢というのがあり、私は時々うっかりメガネをかけたまま寝てしまうことがあるけれど、そうであるとないとに関わらず、とんでもなく悪い夢を見る時には見る。最近一番怖かったのはヤサコのペットに追いかけられるやつで、起きて考えればあんな犬どこも恐ろしくなどないのに、夢の中では捕まったらどうされるかわからないと焦ってとにかく逃げた。巨大なモジョに押し潰されるというのも怖かった。フミエのペットはそもそもが非現実的なせいか、夢に出てくると逆にかわいい。

話がそれた。何が言いたかったかというと、つまり悪夢の悪夢たるゆえんというのは、原則としてそれが怖いかどうかによっているのだ。ところが悪夢的な現実というのは違うと、今回私は初めて知った。それは、圧倒的に恥ずかしいのだと。

黒客の連中やフミエの笑うのにはまだ我慢できた。ヤサコのバカが調子に乗って私の物まねをするのも、許せはしないけれど、恥ずかしさを復讐心に転嫁することで耐えられた。だがなんといってもショックだったのは、カンナが皆と一緒になって笑い転げていたことだった。裏切られた。カンナだけは味方だと思ってたのに。

ちりちり焦げるような音がして、私は我に返った。電脳体の調子が悪い。というのも、元は同じ規格の電脳体にも、使い続けるうちに個人差みたいなものができてきて、実体の癖とか特徴に最適化されているのだ。ヤサコので言えば、つま先が内を向いた歩き方とか、私の大嫌いな女の子走りとかで、そうでない動きを続けると負荷が高まり、最悪エラーを起こしてしまう。それで私は情けなくも内またによろよろと家に帰った。

「ただいま」

「お帰りなさい」

夕食の支度を始めていたおばさんは台所からちらっと顔を出して、

すぐに引っ込めた。おじさん夫婦があまりメガネを使わないことを、今日ほどありがたいと思ったことはない。そのままお兄ちゃんの部屋に駆けこもうとした私をしかし、ふたつの小さな刺客が襲った。

「モジョッ！」

「あっ、こら」

正面から突っ込んできた1体に気を取られて、不覚にも足元がおろそかになった。ぱしっと嫌な音が体を伝い、下を見たのとあおむけに転がったのとどっちが先だったかよくわからない。神社でしたたかにぶつけた肩甲骨が床に当たって、私は飛び上がった。

「モジョ、モジョ」

胸の上によく知った緑の物体が駆けあがってくる。

「やめろ、降参だ、降参」

私は両手を上げた。

「勇子さん、家の中でメガネ遊びはしないでって言ってるでしょ」

台所から声だけが聞こえた。

「はあい」

生返事をした私が起き上がろうとすると、

「モジョ！」

動くな、という意味だろう、攻撃の構えを取る。

「騒がしいな。一体何があったの？」

やっと部屋を出てきたお兄ちゃんが、そのまま固まった。

「君は誰だ？　そこで何してる」

「私よ、イサコ。見てのとおり、モジョに襲われてるの。早く離れるように言って」

「イサコ？」

疑わしげに呟いたお兄ちゃんは、ややあってはっとした顔でメガネを上げた。

「どうしたんだ、それ？　何かのコスプレ？」

「そんなわけないでしょ！　イリーガルのせいよ」

「イリーガルか……」

お兄ちゃんは眉をひそめ、私に背を向けた。
「ちょ、ちょっと。モジョをどかせてよ」
「悪い。プロテクトをかけ直してくるからしばらくそうしていて」
「そんな」
「自業自得だろ」
そう言われれば返す言葉もなく、私はうらめしげにお兄ちゃんの背中を見やりながら床に伸びた。
お兄ちゃんが私を呼んだのは10分ほど経ってからだった。まだ警戒を解き切ってないモジョを刺激しないようにゆっくりと立ち上がり、私はお兄ちゃんの部屋に入った。
私の電脳体から採取したサンプルを顕微鏡のようなツールで観察していたお兄ちゃんは、「ううむ」とおじさんみたいな溜息を漏らして、モニターを立ち上げた。らせん状にねじくれたはしごのような物体が映る。
「間違いない。未知の感染性ウィルスだ」
モニターから目を離し、お兄ちゃんは私を振り返った。
「ウィルス――」
半ば想像はしていたけれど、私の返事はげんなりしていた。ウィルスともなればワクチンプログラムを作るのに時間を食う。それまでの間、私はヤサコの姿で暮らさなければならないのか。いっそメガネを外してしまおうか。
「一応言っておくけど、メガネを外したりしちゃ駄目だよ」
お兄ちゃんはまるで私の心を見透かしたように言った。
「メガネをかけているからこそ、その恰好でいられるんだ」
「えっ？　それならむしろいいじゃない。私はヤサコの姿でなんかいたくないもの」
「じゃあモジョでも構わない？」
「は？　どういう意味？」
「メガネをかけることで、イサコのアクティヴな情報が集積されているから、それがウィルスに対する最低限の防波堤になる。今のま

まなら、絶えずメガネを介して流入する情報と齟齬をきたさないような防御機能が働いて、少なくとも人間の女性以外と映像が交換されることはない。けれどメガネを外したらその限りじゃない。男子と入れ替わるかもしれないし、電脳ペットってこともあり得る。下手すると机とか椅子になってしまうかもしれない」

「う……」

さすがに机と比べたら、ヤサコのほうがまだましだ。

「わかった。それで、ワクチンができるまでどれくらいかかりそう？」

「それなんだけど」

お兄ちゃんは額をかいた。手のひらで目が隠されるそのしぐさは、お兄ちゃんが困った時によくするものだったから、私は嫌な予感がした。

「どうやら僕には難しいみたいなんだ」

「――え？」

「このウィルスには、僕の知らない別系統の技術が相当紛れこんでいる。正直言って、僕には解析しきれないんだ」

「嘘でしょ」

それじゃ私はこの先ずっとヤサコの姿で暮らさないといけないのか。目の前が真っ暗になって、私は床にぺったりと座り込んだ。

「残念だけど本当だ。でも手がないわけじゃない」

お兄ちゃんがキーボードを操ると、目の前に凝った装飾の小さな木箱が現れた。

「これが僕の解析情報。これを明日、あるところに届けてほしい。そこでならきっと、この情報を元にワクチンを作ることができるはずだ」

「あるところって、どこ？」

大体想像がついてはいたけれど、私はあえて聞いた。

「決まってる。メガシ屋だよ」

翌朝のニュースで、大黒での電脳異常が報道されていた。お兄ちゃんの言っていたとおり、メガネを外すことでかえって問題が深刻になるから、可能な限りメガネをかけたままにしておくようにと何度も語られていた。電脳ナビにも異常が出る可能性があるので、大黒市内一帯ではナビ使用が制限されていた。運転のほとんどをナビに頼って、もう何年も真面目にハンドルを握っていなかったドライバーたちは大変だろう。

玄関で靴の紐を結んでいると、誰かが背中のランドセルを開けた。

「イサコ、もしかしてわざと忘れてこうとしてた？」

お兄ちゃんの手の上には昨日の木箱がある。

「……」

私は曖昧に目をそらした。忘れていたのも事実だが、忘れようとしていたのも事実だ。

「敵の総本山に行きたくない気持ちはわかるけど、そうしなかったらいつまでもその姿のままだよ。僕の存在はまだ伏せておきたいし」

お兄ちゃんについてヤサコの前でつい漏らしてしまったことは、まだ報告していなかった。

「ごめん。忘れただけよ」

「そう」

それ以上は聞かずに、お兄ちゃんはランドセルに木箱を入れた。立ち上がると、からからと寂しいような音が背中に伝わった。

夜のうちに雨が降って、止んだのはほんの夜明け過ぎだったらしい。濡れたアスファルトが黒く輝く。空の7割はまだ雨雲が残っていて、遠くではどよんと伸ばされたもやもやの雨の足が、こっちは虹色に輝く。世界はとても淀んでいて、でも不吉なほどに明るい。今日1日の波乱の予感にうずうずしているようだ。

学校に近づくにつれて、異常事態の影響が地味に現れてきた。登校する子供たちの顔ぶれがいつもと違う。つまり、かなりの程度が入れ替わっているのだ。体格などの問題もあるのだろう、年の離れた人間同士の入れ替わりは少ないみたいだが、それでも時たま、ス

ーツにランドセルのサラリーマンというシュールな光景を見かけた。
通りから学校の前に向かう角を曲がったところで、フミエとふたりで歩く私の、つまりヤサコの後ろ姿が目に入った。やや後ろのところで結った髪が歩くたびに揺れるのが思っていたよりかわいらしいので、私はなんだか恥ずかしくなった。この事件が解決したら髪型を変えようか。
「ヤサコ！」
気恥ずかしいのを吹き飛ばすように、私は大声で叫んだ。
「お前、メールちゃんと読んだろうな。メガネを外したりしてないな」
昨日の晩、私はお兄ちゃんから言われた注意をまとめてヤサコに送っていた。
「大丈夫よ。いつもみたく京子に鼻水ひっつけられたり、デンスケによだれ垂らされたりしただけ」
ヤサコは歯を見せて笑い、私は顔をしかめた。
「もう、フミエちゃんたら。私、そんなに汚くしてないわよ」
と言ったのはフミエ自身だった。え、これは――
「あー、つまんないの。そんな簡単にネタばらししなくていいのに」
私は私の映像につかつかと歩み寄った。
「貴様、フミエだな」
「ふぉっふぉっふぉ、引っかかったの。わしじゃよ、メガばあじゃ」
ぎょっとして足が止まる。
「私はカンナよ。イサコちゃん、まだまだ修行が足りないわね」
今度はフミエの映像が言う。私は頭がくらくらしてきた。
「みんな、おはよう」
その時聞こえた声に振り返ると、手を振る女子高生姿の原川玉子と、なんだか釈然としない顔のガチャギリの姿が目に入った。
「あっ、ハラケンとカンナね。おはよう」
私の映像が答える。
「おはよう。ヤサコちゃんとフミエちゃん。それにイサコちゃんも」

「お、お前達、どうしてわかるんだ」
「そんなの簡単よ。男子と女子で一緒に通学してて、私たちに声をかけてくるのって、カンナ達くらいだもん。それにオバちゃんの外見になってるのは、ハラケンと近い子だろうしね」
「私のほうは、ふたり並んでるのはヤサコちゃんとフミエちゃんだろうし、それならそのふたりと言い争ってるのはイサコちゃんだって、すぐわかったわ」
「ご名答。メガばあならもっと腰が曲がってがにまたになってるはずでしょ。イサコは観察眼が不足してるわ」
「何とでも言ってくれ……」
前途の多難さを思い描いて、私は溜息をついた。

教室で皆が自分の席に座ってから、ようやく誰が誰なのか確かめることができた。やはりヤサコとフミエが入れ替わっている。つまり、私の姿に見えるのはフミエで、フミエの外見をしているのがヤサコだ。カンナが玉子で、ダイチがハラケン、ナメッチはアキラだ。アイコは変わってない。マユミは何故か、長い髪に白いワンピースの女になっている。あいつの場合、調子に乗ってコスプレしているだけかもしれない。
他のクラスメイトも、7、8割が入れ替わっていた。外見が変わるだけでそれ以上の被害はないと報道されてたから、皆の顔は不安よりも好奇心に輝いている。小学生は順応力が高い。
マイコ先生が入ってきた。いや、外見がマイコ先生なだけで中身は別人という可能性もあるが、私たちの教室に入ってくるのだから多分本人だろう。
「はい、皆さん静かに」
ぱんぱんと手を打って、日直を見る。起立、礼の号令がかかって、やっと教室に落ち着いた空気がやってきた。
「今日は電脳のほうが大変らしいわね。私はメガネを使ってないからよくわからないけど」

マイコ先生のメガネは素なのだ。
「対策として、午後3時から市内の集中フォーマットがあるそうです。それに合わせて、今日の授業は午前中だけ、給食を食べて下校になります。みんな、寄り道しないで帰ってね。特にダイチ！」
「はいっ」
突然指差されて飛び上がったのはダイチ本人だが、外見はハラケンだ。玉子が苦笑している。
「うーん、フォーマットくらいで元に戻るのかしら、これ。イサコですら防げないのに」
隣の席のアイコが話しかけてきた。
「難しいだろうな」
私は忌憚のない意見を言った。
「私たちの身体情報は、普通メガネや街に設置されたカメラを通してサーバに送られ、それが電脳空間上に再構成される。今回の騒動では、サーバに送られた情報が戻ってくる途中で、古い空間、恐らくはイリーガルを経由しているんだ。そこでウィルスに感染した電脳体同士がランダムに交換される」
「よ、よくわからないんだけど」
「簡単にいえば、どこかにウィルスの親玉がいて、そいつが全てを操ってるのさ。いくら街中でフォーマットをかけても、神社の中みたいな管轄外領域に隠れていれば、イリーガル本体には影響ない」
「じゃあイリーガルを倒せば騒ぎは収まるわけ？」
「一概にそうとは言えない。イリーガルを倒しても、それまでにウィルスに感染していた電脳体は、その時の外見が固定されてしまう可能性が高い」
「つまりイサコはヤサコの姿から戻れなくなるんだ」
「そうだ」
いまいましい。私が吐き捨てるように答えると、アイコはぷっと吹いた。
「それ、面白いじゃん。ヤサコの恰好したイサコもユニークだわ。

いっそ、ずっとそのままでいたら」
「ふ、ふざけるな」
「冗談、冗談」
アイコはそこですっと真顔に戻った。
「で、頼みは何？」
「えっ。わ、わかってたのか」
「そりゃね。イサコが私にここまで情報を漏らしてくれるからには、裏があるだろうって」
私は素直に頭を下げた。
「すまない」
「そんなことしなくていいって。とにかく頼みごとの中身を教えてよ」
「うん」
教室を見回してから、私は答えた。
「今は人目がある。下校時間になったら旧校舎裏へ来てくれ」

第8話　ヤサコ、イサコになる　C　part

朝から空間管理室が本腰を入れてウィルス駆除に乗り出したせいか、お昼ごろまでは入れ替わりも多少落ち着いていた。それでやっと誰が誰だか覚えたと思ったら、給食の時間中にまた入れ替えが起こり始めて、クラスの過半数が再シャッフルしてしまった。その時に、俺もデンパの姿に変わってしまい、今までそのままだ。横幅が大分違うから歩くとかなり違和感がある。ハンサムな沢口ダイチの体は今一体どこにいるのだろうか。

朝、マイコ先生の言っていたとおり、給食を食べると簡単なホームルームがあって、その日の授業は終わりだった。みんな先生の言いつけに従ってさっさと家に帰ってしまい、その後も教室に残ったのは俺とナメッチの他に何人かだけだった。

よりによってウチクネと入れ替わってしまったナメッチはひどくへこんでいる。俺は取りあえずなぐさめたけれど、内心ではうらなりのナスみたいなふたりの顔はけっこう似てると思っていた。

「あんたら、何してんの？」

「別になんにも。イサコがどっか行っちゃって帰ってこないんすよ。マユミこそどうしたんすか」

ナメッチはつい外見で答えたが、マユミの恰好で話しかけてきたこいつはフミエだ。これだけはなんとなく直感でわかる。

「マユミじゃないわ、サダコよ。うふふ」

意味深に笑いながら、イサコの外見の、多分こっちが本物のマユミが教室を出ていく。

「誰よサダコって。ああ、変なのと替わっちゃったわ」

フミエはぼやいた。

「私たちはアイコちゃんを待ってるの」

フミエの隣のオバちゃんはヤサコのようだ。

「お前ら、今日はさすがに休戦中か」

マユミと入れ違いで教室に入ってきたのは、多分ガチャギリであるところのナメッチだ。
「こんなんじゃ、ケンカしようにもできないわよ」
フミエはさらにぼやき、
「休戦ついでにさ、あんた達もメガシ屋に来る？　メガばあと対策を練ろうと思ってんのよ」
「い、いや、俺はちょっと」
ガチャギリは言葉を曖昧に濁した。ナメッチもうらなりの顔をますますひん曲げている。大体俺たちはメガばあが苦手だ。そもそも黒客を立ち上げたきっかけも、メガシ屋に行くと電脳まんじゅうとか余計なものを買わされてたのを、電脳駄菓子屋からの共同購入に切り替えたのが最初だったのだ。
「俺、行ってみようかな」
けれど、俺は答えた。
「えっ、親分マジっすか」
「へえ、珍しいわね」
誘ったフミエまで意外そうだ。
「たまには顔出すのも悪かねえだろ」
がめついのを別にすれば、俺はメガばあがわりと好きだ。黒客ができて敵味方に分かれちまったからご無沙汰してたけど、こんな時くらいいいかもしれない。
その時、教室のドアにまた人影が差した。
「なんだ、じゃああんたに頼んでもらえばよかった」
「あっ、アイコ。どこ行ってたの？　待ってたのよ」
「ごめんごめん。イサコに頼まれごとしててね」
「イサコに？」
アイコは無言でうなずいて、手のひらを上に向けた。細かい模様の刻まれた四角い箱が浮かんでいる。
「これ、今度のウィルスの解析情報だって。これをメガばあに渡して、ワクチンを作るように頼んでほしいって言われたのよ」

フミエが唇を尖らせた。
「無精なやつね、自分で行けばいいのに。で、イサコ本人はどうしたの」
アイコは首を振る。
「さあ？　ひとりで帰っちゃったわよ」
「なんだ、待ちぼうけかあ」
ナメッチが机から飛び降りた。
「親分はメガシ屋に行くんすか」
「ああ」
「じゃあ俺たちは帰るわ。すまねえな、どうもあの婆さんの前だとうまくいかねえ」
ガチャギリは珍しく顔をうつむけたが、ナメッチの姿なので違和感がない。外見もいくらかは内面に影響するんだろうか。
「気にすんな。ワクチンができたら知らせるよ」
「ああ」
「んじゃ、さいならっす」
ふたりは教室を出ていった。軽く手を振って、俺はアイコを見た。
「お前はどうするんだ。その解析情報、黒客を代表して俺が持ってってやってもいいぜ」
「うん……。どうしようかな」
「お前だって油断してると、電脳メロンパンとか買わされちまうかもしれねえぞ」
ふざけて言うと、アイコの目の色が変わった。
「メロンパン！　そういうのもあるのか」
「あ？　なんだよお前、いきなり？」
「う、ううん、別に。とにかく私も行くわ。頼まれたの、私だから」
「わかった」
俺たちはそろって教室を出た。

メガシ屋に着いた面子は、俺、フミエ、ヤサコ、アイコ、それに

途中で一緒になったハラケンとカンナだった。外見はそれぞれデンパ、サダコ……じゃなかったマユミ、オバちゃん、アイコ変わらず、アキラ、ヤサコだ。このシャッフルから想像すると、オバちゃんは今頃フミエの姿でウィルス駆除の陣頭指揮を取っているのだろうか。

ヤサコは店舗の反対側にある玄関から入るように勧めたけど、アイコがどんどん店に入っていくから結局みんなそっちに続いた。

長らくご無沙汰だったメガシ屋の薄暗い店内は、怖いようでいて楽しいようでいて、いわく言い難い独特の雰囲気だ。

「おやおや、お揃いでよう来たの」

去年亡くなった三丁目のトメさんが俺たちを迎えた。もちろん中身はメガばあだ。

「メガばあ、それはいくらなんでも趣味が悪いわよ」

負けずに趣味の悪いサダコが言った。

「趣味でこの恰好しとるんじゃないわい」

「残念じゃがわしらにもこのウィルスについてはよくわからんのじゃ」

奥のほうから小此木先生の声がした。フミエが聞く。

「あ、先生、今日はいるんだ。何でこっちに来ないの？」

「行きたいのはやまやまじゃが、どうにも難しくてのう」

赤い触覚のようなものがちらりと見え、俺は悪い予感がした。

「オジジ、一体どんな姿になったのよ」

ヤサコも俺と同じものを感じたらしい。急に不安そうな顔になると、帳場の向こうへ駆け上がった。そうして驚愕の表情を顔面に固定させたまま、ゆっくりとこっちを向いた。

「ヤサコちゃん？」

ヤサコは口をぱくぱくさせたが、言葉が出てこない。

「何やってんの？　金魚みたい」

「いい線いっとる」

メガばあの言葉とともに、奥の間からゆらありとウナギの神様みたいなのが出てきた。

「リュウグウノツカイじゃよ。昨日見に行った電脳ペットの試作品と入れ替わってしもうてのう」

体長4、5メートルはあろうか。もちろん真っ直ぐに伸びたりもできず、蛇のように長い胴体が空中でとぐろを巻いていた。これはこれでかなりぶっ飛んだ光景ではあるけど、先生自身の映像がこいつの代わりにどこかの電脳プールで水死体のごとく漂っているとしたら、そっちもかなり強烈だ。

「人外のものとまで入れ替わりが始まったのは昼過ぎからじゃ。電脳シャッフルの範囲が見境なしになりつつあるの。こいつも、ほれ」

いつの間にか、メガばあの足元に信楽焼のタヌキが寄り添っている。

「デンスケ!?」

さすが飼い主のヤサコが一発で正体を当てると、タヌキはあうあう情けない声で鳴いた。

「ペットとか無機物と入れ替わる時は、声帯情報だけは保持されるらしいの」

ヤサコはメガばあの話などまるで耳に入ってないように、信楽焼を抱き上げて頬ずりしている。

「デンスケ、かわいそうに。あんたの体はどこに行っちゃったのよ」

「あれじゃ」

奥の間の壁際、メガばあの置物コレクションの中に、招き猫のように2本足で立って右の前足を上げたデンスケの姿がある。

「なんてこと」

ヤサコはよろよろとデンスケに近づいた。あの犬には前に散々な目にあった恨みはあるが、こうなってしまっては俺でさえ憐れを催すってものだ。飼い主にしてみればかなりのショックだろう。

「こんな置物になっちゃうなんて」

ヤサコが手を伸ばした時、ひょこっと右足が下がって、代わりに左が上がった。

「え?」

「うんち！」
デンスケはひと声叫ぶと、ヤサコのまたをくぐって廊下に駆けていった。
「まさにカオスね」
フミエの感想に俺が呆然とうなずいていると、
「ねえ」
急にアイコが袖を引いた。
「メロンパン、ないんだけど」

立ち話もなんだからというので、俺たちは帳場から奥の間に上った。
「とにかく対策を講じるぞい」
上座にどっかと腰かけてメガばあが宣言する。カンナが首を傾げた。
「対策って言っても、ウィルスのこと、わからないんでしょう。何ができるのかしら？」
「それ、私たちに情報があるのよ。ねえ、アイコ……アイコってば」
フミエが呼びかけると、メロンパンがどうこう呟いていたアイコは慌てて顔を上げた。
「うん、そう、そうなんだ――じゃなくてそうなのよ。ほら、これ、イサコに預かったの」
アイコがさっき見せた木箱を取り出した。興味深そうに受け取ったメガばあが箱を開けると、透明なガラス細工のツタみたいなものがするする伸びる。
「ほう、容れ物はなかなか洒落とるの」
どこから持ってきたのか座卓の上に置いてある大きな赤いボタンを小此木先生が押すと、天井板の一部がぱかっと開いて、中から子供が落書きで書いたみたいな、いかにもな機械が降りてきた。中から滑り出したタイプライターを先生が尾びれでたたくと、機械の一部が音もなく開いて中から蜂の巣型のモジュラージャックが現れた。

空中で左右に揺らめいていたツタがわずかに震え、モジュラーに向かって伸びる。
「ほう、ウィルスの解析か。よく調べておるな」
先生とメガばあの間の辺りに昔のテレビのブラウン管があって、俺たちにはよくわからない複雑なプログラムが次々と流れていく。
「ふうむなるほど。このウィルスはどうやら、イサコの技術とわしらのを合わせ持っているようじゃの。解析情報とわしらの調べたことを組み合わせれば、ワクチンが作れるかもしれんぞ」
「それ、治せるってこと!?」
「そのとおりじゃ」
メガばあは自信ありげに言い、俺たちはほっと胸をなでおろしかけた。
ところが、
「待つんじゃ、ばあさん」
先生の冷静な声が俺たちを止めた。
「わしらの解析範囲にイサコの情報を足しても、まだわからぬところがあるの」
「何じゃと」
メガばあが画面をのぞき込む。その顔はすぐに困ったようにしかめられた。
「うむむ、本当じゃ。さっぱり何だかわからぬ領域が残っておる」
「イサコのやつ、データの出し惜しみでもしてるのかしら」
フミエが呟く。
「そんなことない！」
アイコが反論した。
「この箱を受け取った時、今わかる限りのデータは全部渡すって言われたもの」
「その言葉が本当かどうか、信用できるの」
「本当よ！」
「やめるんじゃ」

先生がふたりをさえぎった。
「言い争っても仕方がなかろう。それよりどうやって穴を埋めるか、じゃよ」
「イサコの家に行って、渡してないデータがないか聞いてみようか？」
今まで黙っていたハラケンが提案した。
「だ、駄目よ、そんなの」
何故かアイコが反論する。
「さっきから言ってるでしょ。データに漏れはないって」
「だからそれを確かめに行くんじゃない」
フミエが言うと、アイコは口ごもった。
「そ、それはそうだけど――」
すると、さっきからアイコの様子を見ていたカンナが手を上げた。
「ねえ、イサコちゃんの家には私とあなたで行きましょうよ。それならいいでしょ」
「え、うーん――」
「それなら僕も行くよ」
ハラケンが言うと、
「だめ。ふたりまで」
カンナは前にも聞いたような断り文句を言いながら、いたずらっぽく笑った。アイコは少し考えている風だったけど、
「わかったわ。じゃあふたりで行こう」
「ではカンナとアイコ以外への任務を申し渡そう」
先生が改まって宣言した。
「データの欠落部分を補う方法は他にもある。イリーガルの持っとるパスワードじゃ。皆、イリーガルの捜索に出るんじゃ」
「そういうことなら、黒客のやつらにも手伝わせるぜ。よし、善は急げだ」
「数撃ちゃ当たるじゃ。頭数を増やしてもらえるのはありがたいの」
俺はさっさと帳場を降りて、メガばあの声を背中に受けながら靴

を履いた。
「あんた、たまには役に立つこともするわね」
フミエがすぐ後をついてくる。
「バーカ。俺はいつだって超有能だよ」
軽口をたたきながら店を出ると、混乱のるつぼと化した町が俺たちを出迎えた。

第8話　ヤサコ、イサコになる　Ｄ　ｐａｒｔ

なんかけっこうかっこいいことを言ってメガシ屋を出たダイチに膨らんだ期待は、メガシ屋から数メートルで早々にしぼみ始めた。
「――そういうわけなんだ。ちょっと来てくれよ。あ？　イサコはいねえよ。あっ、おい！　切るな。とにかく命令だ、来いよ。リーダー命令だっつってんの」
「あんた、よっぽど人望ないわねえ」
呆れて言うと、電話を切ったダイチは、きっとこっちを振り向いた。
「おいフミエ、その顔で文句言うなよ。余計に腹立つんだよ」
その顔ってのは今の私の、つまりイサコの顔だ。メガシ屋から出た瞬間にまた入れ替わってしまったのだ。ちなみにダイチはガチャギリの姿だ。このふたりなら、どっちがどっちでもそう変わりない。
「知らないわよ、そんなの。これだって元はと言えばあんたたちのせいでしょ」
「俺じゃねえ。俺は無実だ。イサコのせいだろ」
「どっちにしたって同じ穴のムジナよ」
「うるせえ。俺はイサコとは違うの」
「こりゃ！　おぬしらさっさと行かんかい」
メガばあに怒られて、私たちは慌てて走り出した。
「フミエちゃん、こっちよ」
「あおん」
はにわの馬のような姿になったデンスケを従えて走るヤサコ――今はカンナだ――の手には大黒の地図がある。その中の赤く光る区画が私たちの目指す、イリーガルの潜伏場所だ。イリーガルは鹿屋野神社から移動して、ハラケンの家の近くにいるらしい。
「ちょっと範囲が広すぎるなあ。もう少ししぼりこめないの？」
小此木先生の姿になったハラケンが聞くと、ヤサコは首を横に振

った。
「駄目なのよ。オババが応急で作ったレーダーだから、精度はそれほど高くないの」
「んじゃ手分けして探そうぜ」
闇雲に走り出そうとするダイチの背中を私は引っつかんだ。
「待ちなさいよ。適当に探し回ったって意味ないわ」
「だって他にやりようがあるのかよ」
「4人で潜伏範囲の外周を囲んで、内側に向かって調べていくってのはどうかな」
ハラケンが提案した。
「イリーガルを追い詰めていく作戦ね。いいと思うけど、民家の中にでも隠れられてたら探しようがないわよ」
今度はヤサコが訊ねる
「それは大丈夫じゃないかな。昨日見たけど、けっこう大きいイリーガルだったろ。民家に忍び込んでいたら見つかって大騒ぎになってるはずだ。それがないってことは、少なくとも家の中に入り込んだりはしてないんだと思う」
「いいんじゃないか、それで。なあ、さっさと行こうぜ」
ダイチはどうしても頭より体が先に動く。
「とりあえず現場に移動しようか」

捜索場所に行ってみると、想像したよりは狭い感じだった。手分けすれば、1時間もかからずに調べきれるだろう。と思っていたところへ、
「おーい、みんな……っすよね？」
と曖昧な表情で走ってきた男子は、口調からナメッチだとわかった。
「あら、タケル君と入れ替わっちゃったのね」
ヤサコが言う。
「タケル――ってんだ。2組の男子だったっけ」

「知らなかったの？　猫目タケル君って、宗助さんの弟よ」
「えっ、そうなの」
猫目さんに弟がいることも、私たちと同じ学校に通っていることも知らなかった私はびっくりした。
「他のメンバーはどうしたの？　ダイチが電話かけてたみたいだけど」
「さあ。みんな自分ちも大変みたいだから、付き合ってる暇なんじゃないすかね。俺だって無理やり――」
本音を漏らしかけて、ナメッチは慌てて口をつぐんだ。
「と、ところで皆さん、誰が誰なんすか」
「私、つまりカンナの姿なのがヤサコ。オジジのかっこうしてるのがハラケン。それから――」
私はヤサコをさえぎった。ちょっとからかってやろうと思ったのだ。
「私はイサコ本人だ。やっと自分の電脳体を取り戻す暗号を見つけたんだ。ガチャギリもオリジナルだ」
「おお、さすがはイサコさん」
ナメッチは目を輝かせた。
「で、ダイチ親分は？」
「あ、ああ、あいつはひとりで先にイリーガルを探しにいったぞ」
「なんだ、そうなんすか」
ナメッチは大きなため息をついた。
「ダイチ親分はわがままだから大変っすよ。やっぱりリーダーはイサコさんのほうが似合ってますよね」
私はちらりとダイチを見た。その顔は瞬間湯沸かし器のごとくまたたく間に真っ赤になった。
「んだと、貴様」
「は？　えっ、なんでガチャギリが怒ってんの。ガチャギリだってこのまえ同じこと言ってたじゃん」
「マジか！？　てめえら」

「え、えっと、どういうこと？」
「ごめん」
私はナメッチに向かって素直に頭を下げた。

すったもんだはあったけどナメッチを加えて5人で、私たちは捜索に乗り出した。捜索と言ってもそんなに難しいものじゃない。電柱の影、ごみ箱の中、イリーガルの隠れていそうなところをしらみ潰しに探して回るのだ。あんまり気分は良くないけど、民家の庭もいちいち確認していく。

時々キュウちゃんが巡回してきた時は、そのまま民家の隅っこに隠れさせてもらう。キュウちゃんの数は思っていたほど多くはない。ウィルスの感染範囲が広すぎて手が足りないのだろう。こういうことはいまいち苦手なヤサコやハラケンを心配していた私は、少しだけ胸をなでおろした。

時々市内放送のチャイムが鳴る。
『市内の電脳状態が一時的に悪化しています。現在復旧中ですので、メガネをかけての外出はなるべく控えてください』
間延びした放送音声は、答える者も待たず次々と青空に吸い込まれる。事情を知らない人が見れば、寂しいようなのんびりしたような、不思議な光景だった。

そうやって30分くらい探し続けて、けれどイリーガルの姿も、痕跡らしいものも何も見つからなかった。
「ふわーあ」
噛み殺しもしないで、私は大あくびを天に放った。私の捜索エリアが外れくじだったのか、それともヤサコの探知機自体が間違っていたのか。この調子で後半分。急に面倒くさくなってきた。
「おいこらイリーガル、いるんなら出てきなさいよ」
私はその辺の草むらを思いっきり蹴飛ばした。
ぎゃん、と犬の悲鳴みたいのが聞こえて、黒い塊が飛び出した。
「ひゃあ」

尻もちをついた私の上にイリーガルが覆いかぶさる。
「ちょっ、バカ、やめて！」
私は慌ててメガビーを発射した。が、イリーガルは素早く飛びすさり、そのまま狭い路地に消えていく。
「ま、待て」
飛び起きた私はイリーガルの後ろ姿を追いながら、共通回線を開いた。
「いた！　見つけたわ。場所をすぐ送る」
「了解」
「ラジャー」
すぐみんなの応答があった。
イリーガルはかなり足が速かった。全速力で追いかけても、少しずつ距離が開いていく。けれどそう焦る必要はない。どっちにしてもイリーガルは包囲されているのだ。パスワードの取り出し方がよくわからないけど、電脳荒縄か何かでふん縛ってメガシ屋まで引きずっていけばＯＫだろう。
ハラケンが回線を開いた。
「イリーガルを発見。ナメッチの持ち場のほうに向かってる」
「ひええ、こっち来んな」
「ナメッチ！　無理に捕まえなくていいわ。足止めしてくれれば私たちが行くから」
「ら、ラジャー」
よし。ナメッチが下手を打たなければここで任務完了だ。
現場に駆け付けると、ダイチの姿が見えた。
「なんだお前、もう来たのか」
ダイチは意外そうな顔で私を見た。
「そうよ、来ちゃ悪い？」
「い、いや、そうじゃないけど。まあいいや、イリーガルとナメッチはこの路地の奥だ。袋小路だからもう逃げられねえぜ」
「うまいことやったわね」

私は薄暗い路地をのぞきこんだ。ゆるいカーブになっているせいで奥の様子はわからない。
「よし、行ってみよ」
「え。大丈夫か、ハラケン達を待たなくて」
「大丈夫よ。あんたと私がいれば」
ダイチはちょっと赤くなって頬をかいた。
「ま、まあな」
「いいわね」
私はゆっくりと路地の奥に向かって歩き出した——ところで後ろから肩をつかまれた。
「バカ、危ねえよ」
そう言うとダイチは私の前に出て進み始める。危なっかしさで言ったらダイチのがよっぽどだと思うけど、のど元まで出かけた反発の言葉を私は飲みこんだ。
路地はそう深くないはずだけど、何故かナメッチの声も争う音も聞こえない。
「おーいナメッチ。ナメッチ、無事か」
「ちょっと。もうやられてるんじゃないの」
「縁起でもねえこと言うなよ」
そう答えながらも心配になったのか、ダイチは足を速めた。その時、
「た、助けてくれえ」
向こうからナメッチの声がした。
「おい、どうした」
ダイチが駆け足になる。
「待って」
私が追おうとすると、突然ダイチの足が止まった。
「いたぞ、イリーガルだ！」
黒い塊がのったりと姿を現すのが見えた。
「てめえ、ナメッチのかたき」

ダイチがいきなりミサイルを発射した。
「こら、待てあんた。イリーガル倒しちゃったら意味ないでしょ」
「大丈夫だ。昨日の感触からいって、あのイリーガルはけっこう固え。弱らせてからのが捕まえやすい」
ダイチは自信ありげに言って、次弾を発射する。
「ようし。そういうことなら」
私もメガビーを構えた。
「さっきの借り、返させてもらうわよ」
最大出力のメガビーとミサイルが命中したイリーガルは、きゅうと言って引っ繰り返った。
「あれ？　なんかやっつけたっぽいけど」
イリーガルからは煙が上がっている。
「おかしいな。こんなに弱いわけないのに」
「ええっ。ちょっとちょっと、パスワードまで壊れてたらどうするのよ」
急いで駆け寄ってみると、やっぱりイリーガルはグロッキー状態だった。
「おーい、お前。生きてるかあ」
ダイチがイリーガルの端っこをちょいちょい蹴飛ばすと、
「親分、ひどいですよお」
その声には聞き覚えがあった。
「ナメッチ！？　どうした、何があった」
「どうもこうも、親分にやられたんじゃないすか」
ナメッチによると、イリーガルを追っていたら逆に襲われ、ダイチの声がして助けを求めたらやられたということだった。
「とすると、イリーガルはまだこの奥にいるってわけ？」
だが路地のどん詰まりはもう見えている。イリーガルの隠れられそうな場所はない。
「おかしいわね。イリーガルはどこに消えたわけ？」
「あっ、まさかさっきのお前！」

突然ダイチが叫んだ。
「さっきのって何よ」
「いやだから、さっき路地から出て走ってったろ。てっきりヤサコ達を呼びに行ったんだと」
「そんなことしてないわよ。私がここに来た時にはもうあんたがいたじゃん」
「くそっ、そいつか！」
ダイチはこぶしを振り回した。
「イリーガルのやつ、姿を変えられるんだ。こいつは面倒なことになってきたぜ」
その時、路地の入口に足音が響いた。
「みんな、無事！？」
やってきたのはヤサコとハラケンだ。
「ナメッチがやられたわ。イリーガルも逃げちゃったみたい」
私は唇を噛みしめた。
「そうか、残念だったね。でも一時撤退だ」
「えっ、どうして？」
「オバちゃんから電話で、臨時集中フォーマットがあるって。外にいる者はイリーガルでも人間でも、手当たりしだいにやられるぞ」

第8話　ヤサコ、イサコになる　E　part

「助けてくれえ。置いていかないでくれえ」
イリーガルの姿のままのたのた私たちを追ってくるナメッチの演技は、いや演技じゃないんだけど、とにかく迫真のものだった。
「ばかやろ。お前はもうやられてんだから大丈夫だろ」
「駄目っすよ、自動修復しちゃってます」
「んなもんやんなきゃいいじゃない。何考えてんの」
フミエちゃんは理不尽な怒り方をした。
「とにかくひとりにしないで。サッチーが来る」
「そんなら早く来いよ」
「駄目っす。腰が抜けたあ」
「仕方ないわ」
私は急いでナメッチのところへ走った。
「ヤサコ、そんなの置いてきなさいよ」
「そうも行かないでしょ」
腕を引っ張っても、ナメッチは立ち上がれない。
「くそっ、しゃーねー」
ダイチ君が助けに来てくれた。
「ナメッチ、こりゃ重大な貸しだぜ」
さすがお父さんが柔道の師範だけのことはある、あのちびっこい体で軽々とナメッチを背負い上げ、走り出す。すぐにフミエちゃんたちのところに着いた。背中から降りると、ナメッチはふらふらしつつもなんとか自分の足で立った。
「ダイチ君、やるじゃない」
「ふん、本当はこんな肉体労働はしたくねえんだ。俺は頭脳派だからな」
と答えながらもダイチは得意そうだ。
「あんた、なに鼻の下伸ばしてんのよ」

「ぐっ」
フミエに後頭部をひっぱたかれて、ダイチ君はつんのめった。
「ダイチ、遊んでる場合じゃないぞ。早くメガシ屋に戻ろう」
「遊んでなんかいねえよ」
ダイチ君の様子にちょっと笑いながら家の方向を振り返った私は、ちょうどそっちからやって来る人影に気づいた。
「あれ、イサコじゃない」
アイコちゃんの姿をしたイサコは見る間に近づいてくる。
「お前達――じゃないあんた達、こっちに来ちゃ駄目。危ないわ」
言うなりイサコは空に向けて暗号を放った。はっとして見上げると、キュウちゃんが2機、派手なノイズに歪んでいる。
「イサコ、助けに来てくれたの」
「バカっ、誰がお前なんか。あっ、いや私はアイコ――ってもうばれてるか。どうでもいい、ここは危険だ」
言ってるそばからキュウちゃんが、今度は3機飛んでくる。
「早く逃げろ」
イサコは叫びながら両手で暗号を作って素早く放つ。両側から挟みこむように近づいたキュウちゃんが見事に停止した。だが、
「イサコ、前よ！」
正面から残った1機が迫る。
「わかってる！」
イサコは足で何かを跳ねあげた。例の大剣だとわかったのは、力任せに降り降ろされたそれがキュウちゃんをまっぷたつにした後だ。
円形の断面から半透明の炎を噴き上げながら、ゆっくりとキュウちゃんが地面に沈んでいく。
「すげえ。一撃でフリーズどころか、デバイス自体を破壊しちまった」
ダイチ君が目を丸くした。
「ちっ、壊してしまったか」
当のイサコは何故か唇を噛みしめている。

「イサコ、とりあえずお礼を言っとくわ。あんたのおかげで助かった」
フミエが言うと、
「礼は早すぎる」
イサコは地面をにらんだ。
「緊急信号を受けたサーチマトンが集まってくるぞ」
言われて見ると、ほとんど消えかけたキュウちゃんがぴーぴー音を立てて点滅していた。
「じゃあサッチーの管轄外に逃げましょ。この近くなら、えーと、鹿屋野神社とか」
「駄目だ」
ハラケンが言った。
「オバちゃんから聞いたんだ。鹿屋野神社にイリーガル潜伏の可能性があるから、今回市が神祇局に渡りをつけて、特別に侵入許可をもらったって」
「ちょっとハラケン、オバちゃんにコネがあるんだから、サッチーに私たちを見逃させるくらいできないの」
フミエがぼやいたけど、ハラケンは静かに首を振った。確かに、到底無理な話だ。今のオバちゃんにそんな細かい設定を行っている暇はないだろう。
「退避場所は学校しかないよ」

学校に行く道すがら、イサコの話を聞いた。
イサコによると、カンナとふたりでメガシ屋に向かう途中、複数のキュウちゃんに襲われたという。カンナをメガシ屋に向かわせ、自分は囮になって逃げてきたそうだ。
結局ワクチン開発の新情報は何もなかったらしい。ということは、何がなんでもイリーガルを捕まえないといけない。
学校は、見た目の上では普段と変わらない落ち着きの中にあった。先生達も必要最小限を残して帰ってしまったようだ。外から見た限

りでは、職員室以外に灯りのともった教室はなかった。
「理科準備室に行こうぜ」
ダイチ君の提案に従って、私たちは薄暗い校舎に上がり込んだ。
「なんか嫌な感じ。いつもの学校じゃないみたい」
自分たちの足音以外に物音ひとつしない廊下を見回しながら、フミエが呟いた。
「考えすぎだよ。雰囲気が違うからそう感じるだけさ」
薄気味悪さを振り払うように、ハラケンがことさら明るく答えたが、イサコがすぐにさえぎった。
「いや、そうでもないぞ」
いつの間にかイサコの目の前にモニターが浮かんでいる。
「空間の状態がおかしい。古い空間が増えてきている。もしかすると」
視線を受けて、私は急いでイリーガル探知機を取り出した。
「いるわ！　多分校内よ」
「なんだ、結果オーライじゃねえか。さっさとふん縛ってメガシ屋に突き出すぞ」
ダイチがにやりと笑うと、フミエがうなずいた。
「じゃあ、みんなで一緒に行きましょ。ばらばらになったら、さっきみたく各個撃破されるわ」
「でも、どこから探せばいいんすか」
ナメッチが聞いた。
「まずは2階の渡り廊下だな。あそこが校内で一番空間が不安定だ」
「よし。今度は逃がさねえぞ」
イサコの答えに、ダイチがミサイルのパッケージを破きながら応じた。と、その時、一瞬視界にノイズが走った。
「あれ」
「またシャッフルか」
さすがに慣れっこになってきて、最初は誰も慌てたそぶりはなかった。

が、すぐに重大なことに気がついた。男女比がおかしい。
「みんな、動かないで。ひとりずつ自分が誰か言いましょ。まず、私はヤサコ」
私が言うと、
「げっ」
声を上げたのは私の姿をした誰かだった。
「――私がイサコだ」
肩を落としたイサコに見つめられて、私はやっと自分がイサコの姿になっていることに気がついた。
「えー、俺はナメッチなんすけど」
恥ずかしそうに手を上げたのはアイコちゃんだ。ついに男女の入れ替わりまで始まったらしい。
「んで、俺がお前でお前が俺だな」
「ええ。遺憾ながら」
つまりダイチ君とフミエちゃんが入れ替わっている。そして、
「ハラケンはカンナになっちゃったのね」
「そうみたいだね」
ハラケンは不思議そうに自分の容姿を眺めている。
「わん」
足元の鳴き声に視線を下げると、四つん這いの京子がこっちを見上げていた。

「いた。どんぴしゃだわ」
廊下の曲がり角から向こうをうかがったフミエちゃんが私たちを振り向いた。
「お前、『だわ』とか言うなよ。気持ち悪い」
ダイチ君が顔をしかめた。
「うっさいわね。あんたこそ男言葉使わないでよ。イメージが崩れるじゃない」
「お前はどっちでも変わらねえよ」

「何を！」
「お前たち、今はそれどころじゃないだろう」
イサコが割って入ると、
「あんたはいいわよ。女のままなんだから」
「黙れ。私はこの姿でも十分嫌だ」
「ひどい、失礼しちゃうわね」
抗議した後で、私はふと不思議に思った。
「でも、どうして私たちだけ性別が変わらないのかしら」
「ひょっとして、イサコ、まさか」
何を考えたのか、フミエちゃんが顔を赤らめた。イサコは一瞬きょとんとして、その後でフミエちゃん以上に真っ赤になった。
「バカ！　そんなわけあるか」
「みんな何やってんすか。ほら、イリーガルが逃げちゃいますよ」
ナメッチが呆れたように言う。ナメッチはイリーガルの姿にまでされたから、女子になったくらいではもはや驚かないのだろう。
「よし、旧校舎のほうに追い詰めよう。あっちなら逃げ道がない」
ハラケンの提案にうなずきかけたその時、校内のスピーカーが鳴った。
『所管外地域に対する特例が市教育委員会の承認を受けました。退避してください。なおこのフォーマットによる被害に関してメガマスは責任を負いません。退避してください』
「まずい、サッチーが来る！」
ダイチが叫んだ。
「待て、逃げるな！」
イサコが叫び返す。
「ここで逃げたらイリーガルがフォーマットされてしまう。元の姿に戻れなくなるぞ」
「こうなったら、手っ取り早くイリーガルを捕まえるっきゃないわね」
フミエに言われて廊下の向こうを見ると、旧校舎のほうに向かう

黒いかたまりが見えた。
「追いかけよう」
私たちはばたばたと廊下にとび出した。イリーガルはちらりとこっちを振り返ると、スピードを増して走り始めた。階段のほうに向かっている。
「下には行かせないぞ」
イサコが素早く投げた鉄壁が下り階段をふさいだ。イリーガルは一瞬たじろいで、すぐ3階への階段を上り始める。
「うわっ、なんだあれ」
突然ナメッチが声を上げた。
「おい、よそ見してる暇は――」
たしなめたイサコの声も、しかし途中で止まった。
渡り廊下から見える学校の正門に、サーチマトンが集まっていた。サッチーが全部で4基もいる。けれど、ナメッチの叫びの原因はそれではない。
サッチーの後ろに、ホームベース型の平たい身体にカエルのような手足を生やした、見たことのないサーチマトンが2基並んでいた。サッチーと同じ黒いゼリー状ののっぺりした体。そして何より、その背中に半ば埋め込まれた無数の白い球体。
「新型サッチーか!?」
イサコの叫んだのに気づいたように、サッチー達が一斉にこっちを見た。と思う間もなく、新型のひとつが跳ねた。信じられない跳躍力でまたたく間に影が迫って、べちゃっと嫌な音をたてながら渡り廊下の外側にへばりついた。
「なんなのよ、こいつ」
呆然として見るうちに、窓ガラスを通して見える腹がうごめいて、針で刺したような穴がいくつも空いた。
「伏せろ!」
いきなりイサコが叫んだ。わけもわからずしゃがみこむと、頭の上で閃光が走った。次の瞬間、無数のガラス片が降り注ぐ。映像だ

けだとわかってはいても、頭を覆ったまま動けなかった。しばらくそのままでいると、

「ヤサコ、逃げるんだ」

誰かが私の手をつかんだ。ハラケンだった。言われるままに手を握って走り出す。

「お前ら、早く来い」

上り階段の手前で、イサコが矢継ぎ早に暗号を放っていた。思わず振り向くと、窓ガラスが割れた大穴に新型サッチーの腹部が密着し、その肌を突き破るようにしてキュウちゃんが次々と廊下に侵入していた。イサコの暗号が次々と命中するが、キュウちゃんの数が多すぎて、撃ち漏らしが次第に増えてくる。

頭の後ろで、ぎゅうんと嫌な充填音が鳴った。

「待て！　待て！」

ハラケンが止めるが、すぐまた別のが迫る。とても処理しきれない。

「ハラケン、いいから走って」

次々にフォーマット光線が放たれるのを、ハラケンを引っ張って右に左によけながら駆けた。

「このやろ、止まれ！」

階段までたどり着いたダイチ君が振り返るなり、鉄壁を投げつけた。頭の上すれすれを飛んでいった鉄壁は私のすぐ後ろで展開する。キュウちゃんが玉突き事故のように衝突して、壁が激しく揺れた。

「今のうちに、早く！」

私たちは全力で走ってそのまま階段を駆け上り、3階の廊下に倒れ込んだ。

「全員無事だな」

イサコが階段を3重の鉄壁で覆い、更にもうひとつの階段に向かう廊下も封鎖しながら言う。

「やばかったわね」

フミエちゃんが廊下に向かうのを、

「待って」
ハラケンが止めた。
「外にいるサッチーに見つかったら、さっきみたいに窓を破られるぞ」
「あっと、そうか」
フミエちゃんは慌てて体を伏せる。
「イサコ、あの新型サッチー、お前にも止められないのか」
「残念だが」
イサコは小さくうなずいた。
「キュウちゃん1体1体ならそれほど強くないけど、あれだけの数に来られたら倒しきれない」
「じゃあ俺たち一体どうすればいいんすか。仮にイリーガルを倒したって、ここに閉じ込められてるんすよ」
ナメッチが情けない声を上げた。
「どうにもできないよ。イリーガルをどうしようと、鉄壁を使い切ったら、サッチーかキュウちゃんにやられるだけだ」
「そんな」
私は何か言おうと思ったけれど、考えれば考えるほど、ハラケンの言うことが確かに思えてきた。みんなも同じらしく、誰からも意見は出ない。各々廊下の片隅に座り込んで、誰とも目を合わせずにうつむいている。
イサコだけが階段の前に立っていた。
「あきらめるな。私に考えがある」
「考え？　どんな」
フミエちゃんがいぶかしそうに聞くと、
「後で教える。まずは、パスワードを手に入れよう」
「何よ。今教えてよ」
「フミエ、駄目だ。その暇はなさそうだよ」
ハラケンが階段を指差した。3重の鉄壁が早くも赤熱して溶け始めている。

「私はここで時間を稼ぐ。お前たち、その間にパスワードを頼む」
イサコはポシェットから光の鍵を取り出した。
「頼みたくはないが、ヤサコ、お前に鍵を預ける」
「わかったわ」
私は立ち上がって、手を伸ばした。
イサコの手に触れた瞬間、使命感のようなものが心に伝わった。
私たちは何も言わずにうなずき合った。

第8話　ヤサコ、イサコになる　Ｆ　ｐａｒｔ

外のサッチーから見えないように前かがみになって、僕たちは旧校舎を駆けた。先頭を進むのはダイチだ。
「ダイチ、イリーガルがどこにいるか、あんたわかるの？」
ダイチのすぐ後ろについたフミエが聞いた。
「わかるさ。３階で最大の無法地帯っつったらだな、自慢じゃねえが」
「理科準備室っすよね」
ナメッチが引き取ると、フミエは頭に手をやった。
「それ、本当に自慢にならないからね」
「いいんだ。結果オーライ」
「ったく、こいつは」
まるっきり入れ替わった姿でやっているから、見ているとだんだん混乱してくる。
「ねえ、ハラケン」
ヤサコが呟いた。少し表情が曇っている。
「イサコをひとりにして良かったのかしら。『待て』の使えるハラケンがいたほうが」
「イサコは他人を巻き込むのを嫌うから」
もしかすると言わないほうがいいのかもしれないけれど、結果としてヤサコをだましたくもなかった。
「えっ、どういう意味？」
「確かなことは言えないけどね」
僕は後ろを振り返った。
「あれだけの数のサッチーにキュウちゃん、イサコでも倒しきれないのはわかりきってる。それならできることは、自分が囮になるくらいじゃないか」
「うそ――」

「イサコはイサコなりに、今回の事件の責任を取ろうとしてるんだ」
ヤサコはいきなり立ち止まった。
「私、戻る。私にだって責任があるもの」
「駄目だ。きついこと言うけど、戻ったって君にできることはない」
「そんな」
ヤサコはこぶしを握りしめた。
「ヤサコ、イサコが本当に心配なら、イサコのために今できることをやるんだ」
「できること？」
デンスケがわんと吠えて、ヤサコの胸に飛び上がった。
「あっ、こら」
慌てて抱きかかえたその腕の先に光るものがある。
「これ……イサコの鍵」
「そう。イサコが無事なうちにイリーガルを見つけてパスワードを抜き取る。それが僕らにできる、最善の道だ」
ヤサコは黙って、鍵を固く握りしめた。
「おい、何やってる。いたぜ」
理科準備室をのぞきこんだダイチが押し殺した声で言った。僕はヤサコと顔を見合わせてうなずき、準備室の扉に駆け寄った。
「俺とナメッチが突っ込む。フミエとハラケンは敵が逃げ出さないように入口を固めてくれ」
「私は？　私もダイチ君たちと一緒に行く」
ヤサコが進み出るのを、ダイチが両手で止めた。
「待てよ。いくらイリーガルを捕まえたって、鍵を壊されたら意味ねえだろ。ヤサコは外で待機だ。俺たちがいいって言うまで入るな。おいみんな、それでいいよな」
ヤサコ以外の全員がうなずいた。
「ちょっと、私だって」
「時間がねえ。行くぞ」
「おすっ」

ダイチとナメッチが果敢に教室に飛び込んでいく。すぐにミサイルの発射音が響いた。
「フミエ、僕たちも」
「オッケー」
言うなりフミエも部屋に踏み込む。僕は1歩遅れて、フミエの頭越しに部屋をのぞきこんだ。
室内は閃光と噴煙がめまぐるしく交錯する、ミニ戦場だった。
「こいつっ」
ナメッチの発射した追跡君を、イリーガルは素早く駆け回ってかわしている。
「ナメッチ、誘導弾じゃ駄目だ。障害物が多すぎらあ」
言うなりダイチはキーボードをたたき始めた。視線はイリーガルから外さず、右手だけで猛烈な速さのブラインドタッチだ。
「食らいやがれ」
イサコの使う暗号を小振りにしたような同心円がダイチの前に出現する。と思う間もなく、円の中心から小さな光の弾が続けざまに放たれた。光弾が足に何発も命中し、イリーガルはもんどりうって転がった。
「ナメッチ！」
「ラジャー！」
素早くナメッチの投げつけた電脳縄が、見事にイリーガルの胴にかかった。一瞬で縄は収縮し、イリーガルを縛り上げる。
「やるじゃない、あんたたち」
フミエがほめると、
「へっ、俺たちだって日々進歩してるんだぜ」
ダイチが親指を立てた。
「わん」
入口をふさぐようにして立っていた僕の背にデンスケが吠えた。
それで、僕はヤサコを振り返った。
「ハラケン、入れて。勝負はついたみた――」

「こっ、このっ」
突然ナメッチが声を上げた。はっとして見ると、黒かったイリーガルの姿にノイズが走っている。
「ナメッチ、慌てんな。誰に化けようと、縄は切れねえぜ。武器は持ってないみたいだからな」
イリーガルをにらみながら、ダイチもポシェットから電脳縄を取り出した。
「こいつで身動き取れねえようにしてやる。そうしたらヤサコ、パスワードは頼んだぜ」
「わかった」
ヤサコはイリーガルを見つめたままうなずいた。
「それっ」
ダイチが縄を放った瞬間イリーガルが跳ねた。空中でノイズがはじけ、着地した時には、
「あっ、あいつ俺の姿に」
ダイチに変身したイリーガルは部屋の隅に転がりこんだ。
「まずい、あそこには武器の入った金庫が」
そこまで言って、ナメッチは慌てて口を覆った。ちらりとこっちを見たイリーガルが、唇をぴくぴく震わせた。あれは、もしかして笑ってるのか？　いや、バカな、イリーガルにそんな知能はないはずだ。
「なんだあいつ、開け方がわかるのか？」
金庫に向かって屈みこんだイリーガルを、ダイチがいぶかしげにのぞきこむ。
「親分、それどこじゃないでしょ。金庫破られたらえらいことになりますよ」
その時、金庫から電子音が鳴り響いた。
『認証失敗。やり直してください』
「あれ？」
ナメッチが首を傾げた。

「大丈夫だ。ガチャギリのやつが俺を信じてくれなくてな、金庫はふたり同時じゃないと開けられないようにアップデート済みだ」
「そりゃナイスアイデアだわ」
フミエが手をたたく。
「うるせえ。とにかく、おいイリーガル、もう逃げられねえぜ。おとなしくお縄につきやがれ」
ダイチがすごむ。と、イリーガルはゆっくりと立ち上がってこっちを見た。
「ふん、諦めやがったか」
ダイチが縄を構えた時、
「おかしいわ！」
ヤサコが叫んだ。イリーガルの身体に再びノイズがかかっている。けれど全身ではない。右半身だけだ。
「こ、これ、まさか」
「どうやらそのまさかだね」
ノイズが薄れたイリーガルは、右半分がナメッチ、体の中心できれいに分かれて左がダイチの、いびつな姿になっていた。
ナメッチが思わず取り落とした電脳縄を、イリーガルは素早く引っ張って、縄が外れた。
「じょ、冗談だろ」
「ダイチ、感心してんじゃないわよ。縄、ナワ！」
フミエが叫ぶ。しかし、我に帰ったダイチが縄を投げるより早く、イリーガルが金庫に両手をかざす。
『認証しました』
金庫の扉が開いて、ミサイルのパックが転がり出すのが見えた。
イリーガルは長さの違う両手で乱暴にパッケージを破く。と、放り出されたミサイルが次々に、こっちに向かって来た。
「まずい！」
僕は慌てて身を伏せる。と、こっちに直進してきたミサイルは、空中でいきなり向きを変えた。すぐ隣で目のくらむ光、それから盛

大な爆発音が響いた。
「この野郎、俺たちの武器を！」
ダイチが叫んで、僕も気がついた。狙われたのは床に置いてあった黒客の武器や、ダイチのキーボードだ。
「丸腰にしてからってわけ。やなヤローね」
フミエが憎々しげに呟くと、ダイチが聞いた。
「おい、お前らメガビーは？」
「ごめん、さっきサッチーとやり合った時に全部使っちゃった」
ヤサコや僕も同じだ。これで、立場が逆転してしまったことになる。
「どうします？　一旦逃げますか」
ナメッチが言ったが、ダイチとフミエが同時に首を振った。
「駄目だ。サッチーがもうすぐ来る。間に合わねえ」
「電脳体が多少壊れても仕方ないわ。無理やり押さえつけてパスワードを奪い取りましょ」
そんなことができれば、だけど。イリーガルの前には、金庫からつかみ出されたミサイルが大量に転がっている。
「くそっ、かかれ――」
ダイチが言い終わる前に、ミサイルが一斉に火を噴いた。
「うわあっ」
狭い室内は大騒ぎになった。
「一旦部屋を出ろ！　急げ」
ミサイルの乱舞する部屋の中を皆が出口に殺到する。僕も誰かの背中を追って、無我夢中で廊下に転がり出た。
「全員無事か！？」
「待って、ヤサコがいないわ！」
「えっ」
僕たちは教室をのぞきこんだ。ヤサコは扉のすぐ前に倒れていた。
「ヤサコ！　どうしたんだ、大丈夫か」
無言でうなずいたヤサコは立ち上がろうとして、けれどその場に

しゃがみこんだ。
「あ、足をひねっちゃったみたい」
「ヤサコ！」
走りかけたフミエを、ダイチが羽交い絞めにした。
「バカ、やめろ」
「そうよ、みんな逃げて」
「あんた、恰好つけるのやめなさいよ。イサコの顔でやられるといらつくわよ」
「ごめん」
笑ったヤサコの後ろで、閃光が走る。僕は思わず目を閉じた。
ところが、いつまでたっても爆発音が聞こえない。
「あっ、デンスケ！？」
ヤサコの前に、いつの間にか元の姿に戻ったデンスケが仁王立ちになっていた。まだ火を噴いているミサイルを噛みしめながらイリーガルをにらみつけている。
「デンスケ、駄目よ！　もしイリーガルにやられたら、あなた死んじゃうわ」
ヤサコが言っても、デンスケは動かない。
「私は電脳体が壊れるだけだから。デンスケ、逃げて」
イリーガルが1歩前に出た。ミサイルがひとりでに袋から出て、イリーガルを取り囲むように浮かぶ。さっきのミサイルを吐き捨てて身構えたデンスケに、新手は１０発以上あった。
「デンスケ！」
ヤサコが叫んだ一瞬後、全てのミサイルが一斉に爆発して、理科準備室は真っ白な光に包まれた。
爆発が収まると、目の前にもやがかかったように暗いのを無理に、僕は室内を見透かした。
「ヤサコ。デンスケ」
「大丈夫」
ヤサコの声が聞こえる。良かった。でも、ヤサコが無事ならデン

スケは……
「わん」
「あれ？」
部屋の中には影が、正確にいうなら2．5個あった。デンスケを抱いたヤサコ、固まったように動かないイリーガル。そして、天井近くから斜め下に突き出した上半身。
「イサコ！？」
「ぎりぎり間に合ったな」
次の瞬間、空中にイサコの全身が飛び出した。そのまま動かないイリーガルの前に着地して、様子を調べている。
「ヤサコ、鍵だ。パスワードを引き抜くぞ」
「ちょっと待って。あんた、どこから出てきたのよ」
フミエがヤサコを助け起こしながら聞いた。
「わからないか？　あれだ」
イサコが天井を指差す。
「あっ、ショートカットか」
遅れて教室に入ったダイチが声を上げた。
「そうだ。もうリンクは切ってあるけどな」
「……ってことはお前」
「ああ、電脳体だけだ」
「ちょっと、ふたりだけで納得しないでよ」
フミエが割り込んだ。イサコは面倒そうに、
「ショートカットは知ってるだろ。その名のとおり、3次元空間を無視した直結通路だ。私はサッチーをできるだけ引きつけておいて、電脳体分離してショートカットをくぐってきた」
「そりゃ強引よ。いくらイサコでも、そんなことして無事なわけ？」
フミエが呆れて言った。イサコはわずかにノイズの走る身体を見つめて答えた。
「確かに荒技だけどな。非常事態だ、仕方ない。どうせ見た目はヤサコだし」

「ひと言多いわよ」
むくれるヤサコを横目に、僕は聞いた。
「イサコの実体はどこにあるんだ？　それに、ショートカットを使ったにしても、よく一発でここだってわかったね」
「実体は体育館だ。ほとぼりが冷めたら取りに行くさ。ショートカットの行先は、――え？」
「どうしたんすか」
視線を惑わせたイサコは、ふとデンスケを見た。
「おい、ヤサコの不細工な犬。お前、私を呼んだか」
「不細工じゃないわよ」
ヤサコはますますむくれて、デンスケを抱き上げた。
「お前に聞いてない。――まあいい、多分空間の乱れか何かで直感的にわかったんだろう」
「何はともあれ、みんな無事で良かったじゃない」
「そうだな。サッチーは体育館に閉じ込めてあるから、今のうちにメガシ屋へ戻ろう」

「そういうわけで、いろいろあったけどパスワードを手に入れたんだ」
メガシ屋の小さな庭をのぞむ軒先にふたり並んで、僕は僕に説明していた。つまり、大体予想のついたことだが、カンナの電脳体は僕の姿になっていたのだ。
「お疲れさま。これでやっとみんな、元の姿に戻れるわね」
「うん」
「でもちょっと残念だなあ。研一のふりして研一の家に帰ったり、学校に行ったりしてみたかったのに」
「変なこと言うなよ」
僕の表情は楽しそうだった。それを見て、僕でもあんな風に笑うことができるんだと、見直したといったら変だけど、自信がついたといったらもっと変だけど、とにかく1歩踏み出す気になった。そ

れに、僕は僕の顔じゃないから、たとえ照れる姿を見られても、普通の半分くらいの恥ずかしさですむような気もした。
「カンナ」
「なに？」
「あのさ、来週夏祭りだろ。その、ふたりで一緒に行かない？」
カンナは一瞬目を丸くして、その後で黙ってにこにこ笑いながら僕を見た。僕はだんだん、耳まで赤くなった。もしカンナの姿でなかったら赤くなるどころじゃない。
「こ、答えは？」
「ＯＫ！」
そう答えるとカンナは庭先にとび出して、サンダル履きで器用にくるくるっと回転してみせた。
「カンナ！　僕の恰好でそんなことするなよ。みっともないよ」
「いいじゃん」
「よくないって」
「恥ずかしがる研一ってけっこうかわいいね」
「えっ」
僕ははたと額に手をやった。もちろんメガネがある。カンナは…
…メガネをかけてない！
「ど、どうして」
「ここで待ってる間に、メガばあにメガネを外せるようにしてもらったの」
僕は今度こそ、つま先から頭のてっぺんまで真っ赤になった。

第9話　星物語の夜に　Ａ　ｐａｒｔ

古い童謡によると、お星さまはきらきらと空から見ているそうです。

梅雨が明ければ7月、誰が何といっても夏だ。けれど、青空を映したプールの水はまだ冷たい。

今世紀の初めに続いたという頭のおかしくなるような猛暑は、遅まきながらの環境政策が功を成したか、２０２０年代に入ってからはほとんどなくなった。今日の気温も最高２８度。暑いには暑いけど、真夏の陽気にはまだ遠い。

たまにはメガネを外してぼおっとするのも心地良かった。お兄ちゃんにも言ってないけど、ここのところ、あまり調子が良くない。この前の事件で無理に電脳体分離したせいか、次の日は頭痛がひどくて学校を休んだ。それ以来、変な違和感が続いているのだ。

プールサイドに腰かけてひざから下だけを水につけ、わずかに揺らしながら景色を眺める。罪悪感を感じてしまうくらいに平和だ。校庭の向こうに見える鹿屋野神社の緑がみずみずしい。

私は空に向かってほうとため息をつく。水しぶきが光にきらめいてつかの間の虹を作る。

しぶきは次の瞬間、私の顔面を直撃した。

「ぶわっ！？　だっ、誰だ」

聞かなくても大体わかるが。

「イサコ、なにクールに決めてんのよ。泳げないなら泳げないらしく、あっちでバタ足の練習でもしてなさいって」

「フミエちゃん、そんなふうに言ったら悪いわよ」

フミエをたしなめながら自分も半笑いのヤサコが、いつもながら

私の感情を逆なでする。
「お前ら、いつ私が泳げないと言った」
「だって、あんただけプールに入ってこないし」
「私はお前たちと違って、がつがつしてないんだよ」
「ふっ、負け惜しみ言っちゃって」
フミエは見下したような目つきになった。
「よし」
私は立ち上がって、準備運動を始めた。
「25メートル、勝負だ」
「へえ、あんたから誘ってくるなんて、こりゃ受けなくちゃ嘘ね」
フミエがプールサイドに上がると、
「私もやるわ」
ヤサコもついてきた。
「で、何を賭ける？」
自信満々にフミエが聞く。
「賭け？　いいのか、こっちが勝つに決まってるが」
「はっ、その言葉、そっくりそのままお返しするわ」
「おいイサコ、気をつけろ」
いつの間にかダイチとナメッチが私の隣に立っていた。
「フミエのやつ、ミズムシみたいに速えぞ」
「ちょっと、ミズムシの子はプール禁止よ」
アイコとカンナもやってきた。ギャラリーはそろったようだ。
「ミズムシじゃない！　ミズスマシよ。どうイサコ、怖気づいてやめるなら今のうちよ」
「つまらない冗談だ」
私は余裕の笑みを返してやった。
「だが、そこまで自信があるなら賭けてやろう。私が勝ったら、お前たちコイル探偵局は夏休みまでメガネなしで過ごしてもらう」
「望むところよ。じゃあ私たちが勝ったら、黒客は――」
「一緒に夏祭りに行こうよ」

フミエが考えている隙に、アイコが後をさらった。
「あっ、あんた勝手なこと言ってんじゃないわよ」
「だって、こうでもしないとイサコ、来てくれなさそうだし」
アイコはさらりと受け流す。
「いいだろう。夏祭りだろうがりんご飴だろうが何でもこい。受けて立ってやる」
「お前、何でそこでりんご飴が来る？」
「りんご飴って好きじゃないんだ。甘すぎるだろう、あれ」
「こら、脱線すんな！　メガネ禁止対夏祭りプラスりんご飴で、さっさと勝負をつけるわよ」
フミエは勝手に品目を増やしたが、構わない。これでも私は、水泳大会5年連続学年優勝の経歴の持ち主だ。
私は悠々、スタート台に向かった。

「意外だったわね」
「ああ、完全なダークホースだぜ」
「水泳は自信あるの。これでも『河童のサッちゃん』と呼ばれた人の孫よ」
ヤサコが自慢げに胸をそらし、私は頭を抱えていた。まさかスポーツでこいつに負けるとは。
「イサコ、現実を認めることね。あんたの負けよ」
自分のことでもないくせに、フミエが勝ち誇った声を上げる。
「黙れ。お前には負けてない」
「探偵局対黒客の戦いでは負けだわ。悔しければ、もう1回やってみる？」
「私なら、何度でも受けて立つわよ」
ヤサコはない力こぶを作って見せた。悔しいけど、あれだけの差をつけられたら、何度やっても勝てる気がしない。
「くそ」
「認めるわね」

私は黙って下を向いた。
「ねえ、2対1だったんだし、お祭りかりんご飴かどっちかにしてあげましょうよ」
カンナが助け船を出してくれた。アイコもうなずく。
「そうね。確かに勝ったのはヤサコだけだし」
よく考えると、ヤサコに負けてフミエに勝ったんだから1勝1敗で引き分けのはずなのだが、その時の私にはそんな冷静な思考をするほどの余裕はなかった。
「そんなに言うなら、まあそれでもいいけど――」
「本当だな！　じゃあ夏祭りだ、りんご飴はなし」
「お前、どんだけりんご飴嫌いだよ」
ダイチは呆れて言ったが、私からすれば、好きこのんでりんご飴なんか食うやつの気がしれない。
ともあれ、最悪の事態は回避した。夏祭りっていうのも、最初はくだらないと思ってたけど、カンナたちが一緒なら意外と楽しいかもしれない。

夜になると家の中にいても祭りばやしが切れ切れに聞こえた。いつになく心のさんざめいてベランダに出ると、鹿屋野神社に向かう浴衣姿の親子連れが何組も見えた。
「勇子さん、ちょっと。まだ着付けが終わってないのよ」
背中におばさんの声が飛んできた。
「あ、ごめんなさい」
「イサコも子供だなあ」
ソファでテレビを見ていたお兄ちゃんがくすりと笑って振り返った。言い返そうとすると、
「あら、そんなことないわ」
意外なところから援護の声が上がった。
「このゆかた、とてもよく似合うわよ。大人っぽいわ」
白地に紫の牡丹を染め抜いた柄は私が選んだ。私はいらないって

言ったのに、夏祭りに行くと聞いたおばさんはゆかたを買うと言い張って譲らなかったのだ。
「確かにそうだね。僕もちょっと難しいデザインだと思ってたんだけど、よく着こなしてるなあ」
私はうつむいた。からかわれるより褒められるほうが恥ずかしい。
「おばさん、早く。待ち合わせに遅れるわ」
「わかってますよ」
おばさんは微笑んで、しかし言葉とは裏腹にゆっくりと帯を手繰る。もじもじしていると、電話が鳴った。
「おーい、まだ？　今イサコの家のすぐそばまで来てるんだけど」
アイコだ。
「もうすぐ出ようとしてたところだ」
「じゃあ私、玄関の前で待ってるよ」
「うん、すぐ行く」
「はい。終わりましたよ」
ちょうど電話を切ったタイミングでおばさんが言った。
「ありがとう。じゃあ行ってきます」
「楽しんでらっしゃい」

「ふふ、何それ」
アイコの第一声がそれだったから、私は少なからず動揺した。
「ゆかた、そんなに似合わないか」
「あっ、違うわ。ゆかたはいい感じよ。そうじゃなくてその肩」
言われて見ると、いつの間にかモジョがへばりついていた。いつもの服と具合が違うせいかうまく肩に乗れず、半分襟にぶら下がったみたいになっている。
「仕方ないな。ほら、こっちだ」
帯のすぐ上のあわせを開けてやると、モジョはちょこんと飛び込んで、上半身だけを出した。
「かわいいじゃん、それ」

アイコに指のはらで撫でられて、モジョは照れているようだった。
「今日だけ特別だ」
私は目を上げて、
「それより、アイコのも似合うね」
アイコのゆかたは濃い青に花火をあしらった柄だった。花火となれば普通は色を重ねた華やかな模様になるところを、あえて淡い黄の一色に留め、模様もシンプルに抑えたのが暗い地に映える。しぶい。
「えっ、そう？　いやあ、褒めたって何も出ないわよ」
アイコは妙に嬉しそうに答えて、人の背中をばんばんたたいた。
「あんたに言われると嬉しいわ。私ね、イサコのセンスってかっこいいなあと思ってたのよ、ずっと」
「えっ」
意外だった。
「ほら、なんていうか、いなせ、って感じでさ」
「いなせ？　よくわからないな」
「それでオッケー。イサコの場合、意識してやってないからよりいいのよ。私もね、これからはそういう、シックな感じで行こうと思って」
「はあ」
そこからしばらくアイコに付き合っていたせいで感化されたのか、ヤサコたちと会った時最初に意識したのは、ふたりのゆかた姿だった。ヤサコはヤサコらしい、黄の濃淡で彩りをつけた五弁の花柄、驚いたのはフミエで、淡いピンクに朝顔のかわいい図案だ。
「あんたもゆかたで来るなんて、実は楽しみにしてたんじゃないの」
一瞬抱いてしまった幻想を打ち砕く男勝りの身振りで、フミエはうちわを私の鼻先に突きつけた。
「そうだと言ったら何が悪い」
「え」
「毒喰わば皿までだ。今日は存分に楽しんでやるからそう思え」

「ははっ、それ、いい心がけよ」
アイコが笑った。
「ところで、カンナはどうしたの？　それに男子は？」
「カンナとハラケンは別の用があって神社に直接来るって。男子もダイチのお父さんが町会の役員やってる関係で、手伝い要員に駆り出されてるから、こっちも神社で待ち合わせね」
「じゃあこれで揃ったわけね。行こうか」
皆で神社のほうに歩きだした時、
「おーい」
ちびっこい人影が走ってきた。こいつには町内会のはっぴが良く似合う。
「すまねえな、遅れちまった」
「ああ、来たんだ」
意外と丸いフミエの口調に、私は少し違和感を覚えた。いつもなら、「あんたなんか来なくてよかったのに」くらいは言いそうなものだが。
「ダイチ君、お祭りの準備に行ってるんじゃなかったの？」
「そうなんだけどな、渡しておきたいものがあって抜けてきた」
ダイチはそう言うと、つづりになったチケットみたいなものを懐から取り出した。
「夏祭りのプラチナチケットだ。金魚すくいから射的まであらゆる縁日がただになる、スーパーチケットだぜ」
「それはすごいわ。さすが町会役員のコネ」
アイコが受け取って、ぱらぱらと手繰った。
「女子だけな。他のやつらには秘密だぜ。２０枚あるから、カンナも合わせてひとり４回は使えるぜ」
「レディファーストってわけ。あんた、見た目よりおとなじゃん」
「見た目は余計だ。俺は大黒小児童で一番おとなだぜ」
恰好をつける姿はやはり子供だ。
「イサコ、良かったじゃない」

突然フミエが私をにらんだ。
「これで、お小遣いを気にせず勝負できるわ」
早くも瞳には炎が燃え上がっている。
「フミエ、別に勝負に行くわけじゃないわよ」
アイコがたしなめた。
「あれ、そうだっけ」
「そうよ。今日のメインはお参りなんだから」
「お参り？　っていうと、例のイリーガル？」
「イリーガルだと？」
予想外の言葉に、私はつい声を上げた。
「そうよ、七夕の噂、知らない？」
「いや――」
どうしてだろう。イリーガル関連の噂は、お兄ちゃんが残らず拾い上げているはずなのに。
「どんな噂なんだ、一体」
「それならフミエ、話してあげてよ。私より詳しいでしょ」
「いいけど、はっきり言って信憑性低いわよ」
前置きしてから、フミエは話し始めた。
「毎年七夕の日に鹿屋野神社に現れるイリーガルがいる、って噂なの。そのイリーガルは良いイリーガルで、子供たちの願い事を拾って”あっち”の、ミチコさんのところへ持っていってくれるんですって。だから、7月7日に鹿屋野神社にお参りをすると、ミチコさんが願いを叶えてくれるっていうのよ」
「ミチコ……」
無意識に呟きが漏れた。ヤサコがちらりと私を見た。
「それでね、もしそのイリーガルがいなくなったら、子供たちの全ての願いが叶わなくなってしまうんだって。だから、7月7日にイリーガルを見かけても、捕まえたりしちゃ駄目だって話」
「どう？　けっこう有名な噂なんだけど、イサコ、聞いたことない？」

私はかぶりを振った。
お兄ちゃんが私にこの話を教えなかった理由がわかった。ミチコの名を聞いた時には少しどきっとしたけど、多分ガセネタだ。1年に1回しか現れないイリーガルなんていうわけがない。それにイリーガルは基本的に人混みを嫌う。夏祭りの会場に出てきたりはしないだろう。
今日はイリーガルのことなんか忘れて、お祭りを楽しもう。

鹿屋野神社の近くには交通規制が敷かれて、道の両側に屋台が出ていた。人もかなり多い。
「あっ、いた。カンナ、ハラケン」
フミエが手を振ると、前を歩いていたふたりが振り向いた。
ハラケンも今日はしぶい茶のゆかただ。カンナのは水色に波がゆらめく涼しそうな意匠、ところどころに赤い金魚の泳ぐのがかわいらしい。ふたりはひと足先に祭りを満喫しているらしい。カンナの手には、色とりどりのビー玉のつまった袋がさげられていた。
「これ、輪投げで取ったの。きれいでしょ」
「輪投げか。勝負には悪くないわね」
フミエの目が輝く。
「ふん、輪投げなんて子供だな」
笑ってやると、案の定フミエはきっとこっちをにらんだ。
「何よ！　じゃあ何なら子供じゃないってのよ」
「あれなんてどうだ」
指差すとちょうどいいタイミングで、誰かがコルク弾の鉄砲をぽんと鳴らした。
「ほう、面白い。初戦は射的ってわけ」
ばちばちと視線の火花が散った。

第9話　星物語の夜に　Ｂ　ｐａｒｔ

「惜しかったわね」
「え？　うーん」
「何よ。惜しかったでしょ」
「残念ながら、ちっとも惜しくないわ」
カンナの遠慮がちな、しかし容赦のない言葉が飛んだ。
「５発ずつやって、４対１だもの。フミエちゃんの悔しいのはわかるけど、どう見てもイサコちゃんの圧勝よ」
「まあ当然の結果だな」
イサコは構えていた銃を下ろした。
「１発外したのは失敗だったけど」
「それだって狙いをつけるための最初のやつでしょ。後は全部外さなかったんだから、あんた、只者じゃないわよ」
「僕もそう思う。小学生離れした正確さだよ」
アイコとハラケンが交互に称賛する。
「そう持ち上げるな」
なんて答えながら、イサコは腕を腰に当てて、めちゃくちゃ得意そうだ。
「銃なんてのは照準さえしっかり合わせれば、あとは勝手に当たるもんだ。ほら、こうやって」
イサコはカンナに銃を持たせて、撃ち方を教え始めた。
「体は前傾、銃床はしっかり肩に当てれば狙いが安定する。そうしたら照準を合わせて――、ほら、撃ってみろ」
音を立ててコルクが飛ぶと、すあまのような起き上がり小法師のような、赤い体の珍妙な人形が、こてんと台から落ちて転がった。
「すごい、今まで１度も当たったことなかったのに。ありがとう」
カンナは店の親父さんから人形を受け取ってほほえんだ。
「フミエちゃん、完敗よ」

ヤサコが肩をたたく。
「次は負けないようにしましょ」
仕方なくうなずくと、イサコが余裕の視線をくれた。
「次の種目はお前の好きなものでいいぞ。せいぜい勝てそうなのを選ぶんだな」
これがかちんときた。よせばいいのに負けん気が顔を出して、
「なんですって。あんたなんかにアドバンテージもらう必要はないわよ」
「それはそれは」
イサコは上から目線を崩さず、
「だけど、さっきは私が選んだんだから、次はお前の好きなのでいいさ。公平にっていうのなら、わざと苦手競技でも選べばいい。ほら、あれとか」
と指差した先には、目にも忌まわしい看板があった。
「お化け屋敷か。面白いじゃない」
絶対いやだという心の声とは裏腹の返事を、つい私はしてしまった。
「よし、これで第2ラウンドも決まった」
どうもうまくはめられたような気がしないでもない。
「へえ、お祭りでお化け屋敷なんて、よく作ったわねえ」
「ああ、ヤサコは転校生だから知らないのね。毎年夏祭りにはお化け屋敷が出るの。けっこう怖いって人気あるのよ」
「そうなんだ。アイコちゃんは入ったことあるの？」
「うん、1度だけ。バラエティがあって本格的で、面白かったわよ」
「それ、気になるな。私も行ってみようかしら」
これだ。ヤサコと一緒ならまだ我慢できる。
ところが心に灯ったささやかな火を、アイコは無惨にも吹き消した。
「ヤサコ、お化け屋敷なんて後にしなよ。その前にお参りでしょ」
「あ、そうだっけ」

「そうよ。特に恋のお願いはかなうって評判なんだから」
「恋――」
ヤサコは複雑な表情をした。
「私もお参り、行くわ」
カンナが静かに言う。
「お、俺は恋の願いなんてねえぞ」
突然慌て出したのはダイチだった。辺りをきょろきょろ伺い、
「そうだ、俺たちはあっちを見に行こうぜ」
「うわっ、ダイチ、ちょっと待って」
無理やりハラケンの腕を引っ張って、境内の向こうに走っていく。
「なんだ。あいつらも行けばいいのに。まあいいか、じゃあお参りはヤサコとカンナと――」
イサコは首を振った。
「私は行かないぞ。私は神頼みなんてしない。自分の願いは自分で叶える」
「ふふ、それもイサコらしいわね。フミエは？」
「う、うん。私もお参りに……」
ぽんと肩をたたかれた。イサコが皮肉な笑みを浮かべて私を見つめている。
「……行かない。イサコと勝負をつけるわ」
「あっ、そう。ヤサコ、カンナ、行こう」
「うん」
非情な3人は、振り返りもせずに行ってしまう。
「なにをぼけっと見てる。私たちはお化け屋敷だ」
イサコが黒々と口を開けた地獄のような入口へ、私をいざなった。
「制限時間は２０分だ」
イサコが言った。
「２０分以上いられたら引き分け、それ以下だったら遅く出たほうの勝ち。おい、聞いてるのか」

「なんでもいいわよ。さっさと行きましょ」
私はふてくされて答えた。駄目だ。怖い。無理だ。勝負なんてどうでもいい。目をつぶって全速力で駆け抜けよう。
と思ったのでさえ甘いと、私は入口で思い知らされた。
「おい、何やってるんだ。時間稼ぎのつもりか」
イサコに言われても、足がいうことを聞かない。根っこが生えたように、1歩踏み出すのに全身全霊の力が必要だ。
「ちょっと、あんた引っ張ってよ」
「はあ？　なんで私が」
「引っ張らなきゃあんたの勝ちはないわよ」
「ちっ、20分以上って条件は失敗だったか」
イサコは乱暴に私の腕を引く。
「わっ、待った。速い、速い」
「バカ、普通に歩いてるだけだ」
「だって、ほら、やぶが。なんか出てきそう」
と言った途端、密生した笹の葉の間から、紙のように蒼白な顔の中心に血走った巨大な目玉のついた怪物が飛び出した。
「うわあ」
「おい、慌てるな。一つ目小僧だ。かわいいもんだろ」
何故か足が動いた。制止するイサコを振り切って順路を駆け抜ける。と、古い床の間みたいなところに出た。朽ちかけた仏壇でお線香の煙が揺らめいている。
「ふうん。にわか作りにしちゃよくできたセットだ」
入ってきたイサコに何か言おうとして、私は目をむいた。線香の煙が膨れ上がって、部屋いっぱいに広がったのだ。あたふたと下がると、煙は顔のすぐ近くまで寄ってきて、突然そこに穴が開いた。口だ。ごふごふと異様な笑い声がこだまする。
「ぎええ」
「えんらえんらか。マニアックなところを突いてくるな」
ほとんど四つん這いになって部屋を抜けると、夕映えに沈む古い

町並みだった。うつむきがちの通行人が足早に行き来する。暗くて顔が見えない。

端のほうに子供がひとり、ぽつんと立っていた。迷子だろうか。

「ね、ねえ、ここって怖すぎるわよね」

ひとりでも多く同行者が欲しくて、私は夢中で話しかけた。振り向いた子供は、妙に時代がかった服装に、お皿を両手で持っている。皿の上には豆腐がひとつ。

「な、何、あんた」

子供の舌がにゅるりと３０センチ近く伸びて、豆腐をひとなめした。

「ひええ」

「豆腐小僧だ。お前、そんなものまで怖いのか」

「怖いわよっ」

向かいの門に飛び込む。荒れ果てた廃屋の庭だった。ぼうぼうに生えた草の中に、古井戸がある。かちっと音が聞こえた気がして振り返ると、開け放たれた部屋の中、古いブラウン管のテレビが砂嵐を映していた。

「へえ、いかにもって感じだな」

イサコがゆっくり入ってきて、古井戸に腰かけた。

「あんた、そんな落ち着いてないで、早く出ましょうよ」

「慌てたら２０分経たないだろ。ゆっくりしていこう」

「ばかっ、そんな場合じゃ――」

砂嵐が消えて、画面になにか丸いものが映し出された。

「何？　穴？」

いぶかしく思ううち、穴から骨ばった腕が突き出した。心臓が波打つ。

「イサコ、行こう、行こうよ」

「うるさいな。堪能していかなきゃ損だ。行きたいならお前ひとりで行け」

「そんなあ」

ひとりではとても怖くて進めたもんじゃない。気をもんでいるうちに、画面の中では井戸から上半身を出した髪の長い女が、真っ黒な目をこっちに向けた。

「ひい」

「こ、これはちょっと迫力があるぞ」

女はずるずるとこっちに寄ってくる。

「に、逃げようよ」

「落ち着け。たかが映像だ」

「そんなこと言っても――」

私の言葉は途中で凍りついた。イサコの腰かけた古井戸の淵に、いつの間にか映像と同じやせぎすな手がかかっている。

「イサコ、それ」

「待て。今いいところだ」

テレビに見入るイサコの真後ろに、真っ黒な乱れ髪の女がゆらりと立った。

私はひとりで逃げようとして、しりもちをついた。ひざが笑って立ち上がれない。

「ねえ、ねえってば」

「落ち着かないやつだな。一体何だ」

その時、女の両手がイサコの腕をつかんだ。

「え？」

ゆっくりと振り向いたイサコを、白目のない真っ黒な瞳がのぞきこんだ。

一瞬の沈黙。その後で、

「ぎゃあああ！！」

後で思えば、イサコのこれほどの悲鳴を聞いたのは、後にも先にもこの時くらいだ。とはいえそんなことを考える余裕もなく、置いていかれてはならじと、全力で走る背中だけを追い、やがて並んだ。

あまり慌てていたから、どっちが先に出口をくぐったのかはわからない。気がつくと私たちふたりは、外のベンチで空を見上げて息

をあえがせていた。
祭りばやしと人々のざわめきが耳に届くと、ようやく安心感が胸に広がり始めた。
「ああ、こわかったあ」
「た、確かに、最後のあれは洒落にならん」
安堵の言葉を交わし合うと、今までにない連帯感が湧いてくる。
私たちは間近で弱い笑みをかわした。
と、その時。
「まだ終わってないわよ」
第3の声が耳元で響いて、冷たい何かががっしりと手首を握った。

第9話　星物語の夜に　Ｃ　ｐａｒｔ

夜祭りの喧騒の向こうに、絹を裂く悲鳴が聞こえたような気がして、私は振り向いた。
「ヤサコ、どうしたの」
「今、誰かの声が聞こえなかった？」
「やだ。怖いこと言わないでよ」
カンナが私の手を引いた。
「もしかするとイサコとフミエかも」
アイコちゃんが笑う。
「お化け屋敷、今年はマユミがバイトに入るって張り切ってたからね」
「そうなんだ。私たち、行かなくて良かったかもね」
カンナがいたずらっぽく笑うと、子供っぽい笑い方だけど、それはとても素直で、楽しそうだ。こんな顔をされたら、男の子はこの子のことが好きになってしまうだろうな。
不意に胸が痛んだ。痛みを通じて、はっきりわかった。
私はハラケンのことが好きだ。
「ヤサコは何をお願いするの？」
前を歩いていたアイコちゃんが振り返った。
「え、ええっと。まだ決めてないや」
「駄目じゃん、それ。きちんとお願いしないとばちが当たるわよ」
アイコちゃんはよくわからない理屈を言って、ほおをふくらませた。
「で、カンナは？」
３人で歩き始めてから、カンナはずっと私の手を握っていた。それがカンナの優しさであり、弱さでもあり、私がカンナを大切な友達だと思う理由であり、そう思えなくなる時のある理由でもあった。
私はカンナの手を握り返して、離すことのないようにしていた。

けれど、アイコちゃんの言葉を聞いた時、思わず手に力のこもったのを、カンナも気づいたのは間違いない。
「私も決まってないの」
答えは小さくて、弱々しかった。
「ちょっとふたりとも、真面目に考えてよね」
「そういうアイコちゃんは願い事、決めてあるの？」
沈黙してしまうのがこわくてそう聞くと、アイコちゃんは大きくうなずいてみせた。
「当然、決まってる。そして、当然、教えない」
「何それ」
くすくす笑いが漏れて、少しは気が軽くなった。
「あっ、見えてきた。ほら、あれよ」
「へえ、幻想的ね」
拝殿の近くには夜店はなかった。社務所も灯りを落として暗く、道の両脇に数メートルの間隔で並ぶ古い燈籠の灯だけが、ほのかな光を放っている。にぎやかな参道との対比もあって、静やかで神秘的な雰囲気だ。
音を立てると悪いような気がして、私たちは口数も少なく、ゆっくりと本殿の参列に並んだ。けっこう多くの人が並んでいるけれど、みんな話し声もなく、心の中で自分の願いを確かめているようだった。
私は何を願おう。ハラケンのこと？　それとも別の。別っていったって一体何を祈れば。
考えているうちに、あっという間に順番が来た。カンナと握った手が汗ばんでいた。私から先に手を離した。カンナが私を気づかわないように。そう思ってだ。
鈴を鳴らすと、予想したよりも大きな音が鳴り渡って、何故か心がはやった。財布を探って手に触れた小銭を確かめもせずに投げ入れ、その後で祈った。祈ったというよりただ目を強くつぶっただけかもしれない。それでもまぶたの裏にはハラケンの姿が浮かんだ。

お参りが終わって拝殿を降りた時には、大したこともしてないのに、ひと仕事終えたような気分になって、どっと疲れを感じていた。少し遅れてカンナの降りてきたのが、同じような表情が浮かんでいたのが、後々まで記憶に残った。

アイコちゃんが3人で一番時間がかかった。あまり長いからカンナとふたり、端っこの石造りの腰かけで休んでいると、「おーい」と上気した声がかかった。

「あんたたち、さっさと終わらせちゃったのね。私なんかたくさんあって困ったわ」

「たくさんって、願い事ひとつだけじゃなかったの」

「ひとつですんだりしないわよ。やりたいこと、たくさんあるもの」

私はカンナと顔を見合わせた。ふたりとも、アイコちゃんのバイタリティを見習わなくてはいけないのかもしれない。

「さてと、次は短冊だ」

アイコちゃんは鳥居のほうに目をやった。

「短冊って七夕の？」

「そうよ。ほら、鳥居の隣に大きな竹があるでしょ。あそこに短冊が用意してあるから、みんなで願い事を書いて吊るすのよ」

「なんだ、また願い事？」

呆れて聞くと、

「ノーノー。またじゃない。今のお参りは本気の願掛け、短冊のほうはほんの飾りよ。ほら、さっさと行った、行った」

アイコちゃんは私たちを立たせて、鳥居に向かった。

「よう、やっと来たか」

短冊を配っている町会のテントには、ダイチ君とハラケンが先に着いていた。黒客のメンバーの姿も見える。

「イサコたちは？」

「奥にいるよ」

ハラケンにいわれてテントの中を見ると、イサコとフミエちゃん

がお互いもたれかかるようにして、げっそりとやつれた顔を並べていた。
「あら、珍しいわね。何があったのかしら」
カンナが手を振ると、こっちに気がついたふたりはぱっと離れてそっぽを向いた。
「お化け屋敷はどっちの勝ちだったの？」
「引き分けだ」
「ええ、引き分けよ」
なんだかにべもない。
「ふたりとも、短冊は書いたの？」
アイコちゃんが聞くと、
「私はもう書いたわ」
フミエちゃんは赤い短冊をたもとから取り出した。
「へえ、なんて」
「ずばり、『世界平和』」
「おい」
アイコちゃんがずっこける。
「低学年じゃあるまいし、なんかもうちょっと気のきいたこと書けないわけ？」
「なによ、平和が大事じゃないっていうの」
「いや、そうじゃないけど」
「フミエのいうとおりだ。世の中平和が一番さ」
イサコが珍しくフミエちゃんの味方を、しかも妙に実感のこもった口調で言った。
「じゃあ僕もそうしよう。『地に平和あり。世は全てこともなし』」
デンパ君がいそいそと短冊に書き始めた。
「お前、そりゃ願いじゃなくて詩だろうよ」
ガチャギリ君が突っ込むと、ダイチ君がフォローに回った。
「まあいいじゃねえか。減るもんじゃなし。よし、『さみだれを集めてはやし　最上川』」

「俺も思いついたっす。『赤いつばき　白いつばきと　落ちにけり』」

「『ひかれる牛が辻でずっと見回した秋空だ』」

「あんたら、何の句会よ」

けれど、季節も情景もばらばらの言葉たちが、笹の葉と一緒に、これまたばらばらに揺れている風景を思い浮かべると、心に色取りどりの灯がともるようだった。

「ヤサコもほら、何か書きなよ」

呼ばれて我に帰ると、フミエちゃんが黄色の短冊とサインペンを突き出していた。とりあえずお礼を言って受け取ったものの、一体何を書こう。

やっぱりハラケンのことが思い浮かんだ。それで横を見ると、カンナも何事か一生懸命書き記している。

「イサコは何か書かないの？」

アイコちゃんが聞いたけれど、イサコは首を振った。

「さっきも言ったろ。私は神を頼ったりはしない。文才がないから詩も俳句も書けない」

「ヤサコ、まだ終わらないの」

「えっ」

いつの間にか、イサコ以外は全員が自分の短冊を書き終えていた。

「ごめん、先に行ってて」

「変なところでマイペースねえ」

みんなの後ろ姿を見送って、苦闘すること１０分。ようやく書き上げたのは『デンスケが長生きしますように』とか、なぜこんなに悩んだのかわからないような平凡な願いだった。

速足で竹飾りに向かっていた時、見覚えのあるゆかたが前を歩いているのに気がついた。イサコだ。「書かない」って言っていたのに、どうしたんだろう。

人混みに隠れるようにして見ていると、イサコはやっぱり竹のところに行って、垂れ下がった枝に短冊を結び付けている。風にひる

がえるのをしばらくじっと見つめて、それから急に振り返った。見つかりそうになった私は急いで人の後ろに隠れた。

イサコは何を願ったのだろう。

自分の短冊を結ぶ間も、それればかりが気になった。朱色の短冊が風に閃く様が、何度か見たことのある古い空間の夕陽と、それからもっと心の深いところにある何かを呼び覚ました。

ひょっとするとそれを知るのが怖さに、私はイサコの願いを見ず、古い思い出を置き捨てるようにその場を背にした。

第9話　星物語の夜に　Ｄ　ｐａｒｔ

楽しかった。楽しいはずった。楽しくないわけがないと、僕は何度も自分に言い聞かせ、けれどそうすればするほどに、僕は本当に楽しいのかどうか、僕は何をみんなと喋って笑っているのか、どんどんわからなくなった。ボタンをかけ違えた服のようにちぐはぐな感じだった。それでも見た目の僕は普段と変わりなく振舞っていて、心と体がこんなにもかけ離れたものかと、今さらながらに驚いた。もしかすると、ふたつが完全に分かれてしまっても、心は心、体は体で暮らしていけるのかもしれないと、そんなことを考えもした。

みんなが笹の葉にそれぞれの願いを結びつけている間に、僕は手ごろな場所を探すふりをして、鳥居の裏に回った。念のため１５分くらいも隠れていたのだが、その間、誰かが探しに来る気配もなく、自分で望んだにもかかわらず少し寂しいような、ひがむような、わがままな気分で僕は竹飾りの前に戻ろうとした。

しかし、踏み出しかけた１歩を、僕は急いで戻した。

イサコがいた。願い事を記した短冊を、丁寧に笹の葉へ結びつけている。

何故そんなことをしているかはすぐにわかった。僕も同じだったから。イサコは、自分の願いを決して他人に知られたくなかったのだ。

ひと際高いところに願いを結び終えたイサコは、少しの間、黙って短冊を見つめていた。僕も、目立つ朱色の短冊を眺めた。

風は闇をはらんでゆるやかだった。願いはそんな風の中にひとつ、小さな明かりをともして、そのまま星まで昇っていくようだった。星は輝いて、僕たちを見守っていた。

短冊から目を戻すと、イサコはもういなくなっていた。だが僕はまだ出ていかなかった。人混みの中から、今度はヤサコが現れたのだ。ヤサコもイサコを見ていたらしい。自分の願い事よりも、イサ

コのもののほうに興味がある様子だった。それでも自制して、ヤサコはあえてイサコの願いをのぞいたりすることはしなかった。

僕は違った。

イサコと僕には、何か似通ったところがある。だからこそ、僕たちはあえて近付かず、一定の距離を置いているのだ、きっと。話せば嫌でも自分の短所、見たくないところと向き合わなくてはならないから。イサコも僕も、半ば本能的にそれを知って、お互いの心の膿んだところに触れてしまうのを避けていた。

けれど、それならば、イサコの願いは、僕の手に握りしめられた叶うはずのない願いともつながっているはずで、ひょっとすると、その答えさえも含まれているはずだった。だから、僕はイサコの願いを見た。

『ミチコを助けたい』

短冊には、小さな整った文字でそう書かれていた。何のことかわからない、『ミチコ』って、都市伝説の、あのミチコさんか？　単なる噂の中だけの存在にすぎないミチコさんを助けるって、どういう意味だ？　もしかして、ミチコさんは実在する？　実在するなら、願いを叶えてくれるって噂も本当なのか？　僕の願いも？

答えはない。僕は空を見た。星はさっきまでと同じようにきらめき続けていた。

僕は汗で湿った短冊を竹に吊るして、振り返らずに歩み去った。

テントに戻ると、みんなは地面の上にじかに張ったござに上がり込んで、会話に花を咲かせていた。

僕に最初に気づいたアイコが手を上げた。

「ハラケン、遅かったじゃん。何やってたの」

「おう、お前も入れ、入れ」

ダイチが僕のために場所を開けながら、その辺にあったやかんとコップを取って、だばだばっと麦茶を注いでくれた。いっぱいまで注がれたのが勢い余ってこぼれかけるのを、慌てて口をつける。心

地良い冷たさだった。やかんに氷を入れて冷やしているらしい。こんな麦茶は特別においしい。冷蔵庫で冷やしたのと変わらないはずなのに、どうしてだろう。

喉まで痛いほどに冷たいのを飲み干して息をつくと、フミエが話し出した。

「今、七夕の話をしてたのよ。イサコが知らないっていうから」

「おい、誤解を招く発言をするな。七夕くらい私だって知ってる。年に1回、牽牛と織女が会えるって話だろ」

「そうだけど、じゃあ何で1年に1回しか会えないのよ」

眼前に突きつけられた指に、イサコはいつもらしくなくたじろぐ。

「え――、それは、そういうものだから」

「ほら、知らないじゃないよ。これで私の勝ち、ひとつね。射的は負け、お化け屋敷は引き分け、今のは勝ちだから、これまで五分か」

「お、お前、汚いぞ。そんなお話のひとつやふたつで」

「往生際が悪いわよ。知らないなら知らないって言えばよかったんだもん」

「な……」

「織姫は天帝の娘で文字通り機織りを、彦星は牛飼いをしてたの」

間髪入れずにアイコが話し出した。

「うおっと。あんた、いきなり喋らないでよ」

「私、こういうの好きだから。それでね、織姫と彦星は恋人同士だったのよね。お姫様と庶人ってわけで、お父さんは気に入らなかったみたいだけど、恋は身分を超えんのよ」

口を挟む余裕もなく話を進めてしまうアイコに、イサコは何か言いたそうだったが、結局黙り込んで、抗議の視線だけを寄越した。

僕はカンナのほうを見た。カンナは普段どおりの笑顔で、アイコの話に聞き入っている。僕に気づくと、これも毎日会う時と変わらない微笑をくれて、すぐアイコに目を戻した。

「ふたりがあんまり好き合ってるみたいだし、まあ彦星も働き者だからってことで、天帝もふたりの結婚を許してあげようと言ったの。

ただし、条件付きで。彦星が本当に真面目なやつなのかどうか確かめるために、天の瓜畑の見張り役をしろってね。３日間勤めあげたら、織姫をお嫁さんにしてあげようと言ったの」
「へっ、そんなもん、楽勝だぜ」
「甘いな。天が宇宙なら、大気がないだろう。太陽光線がじかに降り注ぐから、とんでもない暑さだぞ。月面上なら、昼間の温度は１２０度だ」
「そりゃ干上がりますね」
「それ以前に、そんなところで瓜が育つのか？」
「ちょっとあんたたち、話を聞いてよ。とにかく彦星は瓜の番人の仕事を引き受けた。２日間はなんとかやり遂げたけど、イサコの言ったとおり、暑かったんでしょうね。３日目につい、たわわに実った瓜に手を伸ばしてしまった」
「我慢のないやつだわ」
「瓜ってそんなにおいしいのかしら。生で食べた覚えがないんだけど」
「瓜はメロンの親戚だ。暑い日なら、水気があってうまいだろう」
「メロンかよ。さすが天帝だぜ。高級感あるな」
「いや、瓜ってのはもっと庶民にも親しまれた味だった。縄文時代から食べられていたらしい」
「脱線するなって言ってるのに。彦星が瓜の実を割ると、中から水が溢れ出してあっという間に大河となり、織姫と彦星は両岸に隔てられてしまった」
「そんな無茶な」
「はい、突っ込みは禁止。天帝は彦星が見張りの役を果たせなかったことを怒り、ふたりの結婚はなしになってしまったんだけど、お互い泣き焦がれるふたりを見て、１年に１回だけ会わせてあげることにした。これが七夕の起源になった、ってわけ」
「１年に１回だけって、随分ケチなオヤジだな」
「自分の基準で考えるな。星の寿命は、例えば太陽なら１００億年

だ。私たちが死ぬまで毎日会っても、１００億回なんてあり得ないぞ」

「どうしてあんたたちはそうロマンのない方向に行くのかしら」

「ま、とにかくあれね。男ってのは、いつもわがままで、目先のことしか考えられないのよ」

「何を！　女だって同じじゃねえか。彦星にばっかり仕事させて自分は何もしねえから、結局ああなったんだ」

「何よ失礼な！」

「あなたたち、お話よ、お話。けんかするほどのことでもないでしょ」

僕はみんなの話をほとんど聞いていなかった。

織姫と彦星は引き離された。１年に１回きりの出会いなんて、それで他の３６４日が取り戻せるわけじゃない。僕たちは離ればなれになって、もちろん電話とかメールはあるし、たまには会うこともできる。だけど、新しい毎日の中で、思い出に属することはどんどん押し潰されていく。カンナはいつか僕のことを忘れ、僕だってきっと同じだろう。僕が今感じている気持ちを、将来懐かしく思い出すことがあっても、それは感情そのものじゃない。それは今、そしてこれからのことなのに、カンナはいなくなってしまう。自分を誤魔化すために後々なんと結論づけようと、こうしている間にも、僕とカンナの日々は失われていく。

なくしたくない。どうしても失われてしまうのであれば、いっそのこと、今のままで時間が止まってしまえばいい。

風景が遠のいて、みんなの顔の見分けがつかなくなった。話し声も笑い声も、古い記録映画のフィルムでも見ているように、ノイズ混じりで聞き取れない。

空間の不調？　いや、違う。僕のメガネの故障？　それも違う。

答えは簡単だ。

僕は今、カンナのことしか考えられない。
僕は、カンナのことが好きだ。

「さあてと」
フミエが時計を見た。
「8時か。お祭りの終わりまで、まだ1時間あるわね」
イサコが黙って立ち上がる。
「あ、イサコ、逃げる気？　まさか、決着をつけずに逃げようってんじゃないでしょうね」
「いいや」
イサコは多くを語らず、人差し指を夜店の一隅に向けた。
「最も祭りらしい種目で勝負をつけようじゃないか」
「金魚すくいか。あんたにしちゃいい目の付けどころだわ」
フミエは不敵に笑うと、草履を無作法に足で引き寄せた。
「よし、俺は黒客代表イサコを応援するぜ」
寝転がっていたダイチも跳ね起きた。
「ラストバトルっすか。燃えますね」
「おうよ」
ダイチを追って腰を浮かせかけたナメッチとガチャギリのすそを、アイコが握った。
「駄目よ」
「は？」
「あんたらは私と恋占いに行くの」
「な、なんで」
「ひとりで行ってもつまんないから」
「そんなの、ヤサコもカンナもいるじゃないすか」
「ごめん。私、フミエちゃんの応援に行くわ」
ヤサコは顔の前で手を振り、フミエのほうに向きなおった。カンナもうなずく。
「私もやめとく」

「よっし、決まりね。アキラ、あんたも来な」
「は、はい」
アイコはアキラを従え、まだ目を白黒させているふたりを引きずって行ってしまった。

そうして、カンナと僕だけが残った。
「研一、お祭りは楽しめた？」
僕は答えずに、カンナの表情の微妙な移り変わりを、ただ見ていた。
「どうしたの」
僕がカンナを好きになって、僕とカンナがここにいるのは、信じられないほどの奇跡のようだった。
「行こう」
僕はカンナの手を取った。僕のほうからそうできたことが、心にひとつの力をくれた。

第9話　星物語の夜に　Ｅ　ｐａｒｔ

物事何にでもコツというものがあり、金魚すくいだってそれは変わらない。そしてコツさえ押さえてしまえば、大して経験のない人間にだってそれなりの活躍が約束されている。

「フミエちゃん、すごいわ」

「おう、敵ながらあっぱれだぜ」

しかし、フミエのお椀に群れる金魚の数は、じりじりと私のを引き離していた。

「な、何故だ」

「ふっ。イサコも知識だけは仕入れてるみたいね。でも所詮、耳学問ってやつよ」

答えながらもフミエは新しい１匹に狙いをつけている。私は注目した。

狙うのは動きの遅い、水面近くにいるやつ。十分に引きつけて、紙のポイ――金魚をすくう道具の名だ――を近づけてから、後は一瞬。水面と平行にポイを入れて、金魚の頭からすくい取り、紙でなく金属のへりの部分で金魚を跳ねあげる。すくわれた金魚は、幻想的な軌跡を描いてお椀に落ちる。

基本に忠実なフォルム。けれど、ひとつひとつの動作が実に様になっている。つまり、無駄な動きがないのだ。私が同じことをしようとしても、ついどこかに余計が生まれる。フミエのいうとおり、これが経験の差だろうか。

「おや、負けを認めるつもり？」

私の手の動いてないのを見つけて、フミエが自信たっぷりに聞いてきた。

「そ、そんなつもりはない」

勝ち目は薄いとはいえ、ここで引き下がるわけにはいかない。素早く水槽を見定めて、目についたのを急襲した。赤みの薄い、小さ

いやつだ。動きの止まった腹の下にポイを入れて、すくうところまではうまくいった。けれど、獲物は紙の上で予想外に暴れた。無理にお椀に落とし込んだはいいが、ポイには無惨な裂け目が入っている。

「まだだ、まだ行ける」

誰かが何か言いだす前に、私は叫んだ。破れてないほうでうまくやれば、もう1回や2回。

「強情ねえ」

苦笑いするフミエを振り払うように、目の前のきらきらした魚たちにだけ精神を集中する。次第に口やかましく騒ぐ周囲の声が遠くなる。地面から盛り上がるような喧騒も。年代物のスピーカーから流れるざらついたお囃子の音色も。

と、スピーカーとは違う、低い声が耳に残った。つい気持ちが乱れて、私は屋台の立ち並ぶ向こうへ目をやった。

何かが見ていた。

「やめた！」

次の瞬間、私は飛び出していた。

「ダイチ！　金魚は預かっといてくれ」

「おい待てよ！　何で俺が」

「イサコ！　ずるいわよ、負けそうになったからって」

追いかけてくる言葉も、私には届かない。茂みに分け入ると、向かって右、野槌神社のほうにかすかなノイズが残っている。それでも念のために左右を伺いながら、お兄ちゃんに電話する。

「……しもし……イサ……何の用……」

「お兄ちゃん！　聞こえる？　イリーガルが出たのよ」

「……イリ……どこ……今……」

駄目だ。お兄ちゃんの声は、まるで別の星にでもいるかのごとく遠い。イリーガルが妨害電波でも発しているのだろうか。

私は通話を切った。なに、これくらいひとりで片がつく。最近ヤサコたちに引きずられてくだらない日常生活に埋没しすぎた。なま

った腕を磨き直すチャンスだ。
「モジョッ」
襟から毛玉が飛び出した。
「よし、手伝ってくれ。連絡が取れなくなるかもしれないから、あらかじめ作戦を伝えておく。挟み撃ちだ。私は回り込んで野槌神社の境内でイリーガルを待ちうける。お前はうまくそっちに追い込んでくれ」
「モジョ！」
勇ましい返事を背に、私は野槌神社へ急いだ。

祭りのかしましさにむせぶ鹿屋野神社と比べて、野槌神社の小ぢんまりとした境内は、いつもどおりの空気が流れていた。ほおを風になでられると、昂ぶった気持ちが少し落ち着いて、けれどイリーガルを捕えるという決意は鈍らないように、私は深呼吸して心の熾き火に新鮮な風を送った。
イリーガルの気配はない。モジョが思ったより手こずってるのかな。回線を開いたが、案の定不通だった。
境内に立っているのは目立つ。社殿の裏側に隠れようと考えた私は、境内に注意しながら後ずさった。
不意に体が柔らかいものにぶつかった。口に誰かの手が回って、叫びがのど元に押し込まれる。
「黙って。何か来る」
それがヤサコの声だったから、恐怖が急速にしぼんで、辛うじて暴れずにすんだ。私が腕の力を抜くと、ヤサコも手を離した。
「お前、何の用だ」
本気で驚いたのを見られたが恥ずかしさに、抑えてはいてもかなり尖った声だった。
「あなたを追ってきたに決まってるでしょ。イリーガルがいたの？」
「お前に答える義務はない」
「相変わらずね」

ヤサコのほうこそ、相変わらず人をいらいらさせる仕方で笑った。
「でも外れだったかしら。来たのはイリーガルじゃなさそう――」
声はそこで止まった。私も答えなかった。だからその日私とヤサコの交わした、それが最後の会話になった。

ハラケンとカンナだった。

ヤサコと私は同時に身を引いた。隠れるためじゃない、盗み見て良い性質のものと思わなかったからだ。私たちの体は触れた。そうしておかしなことに、ふたりして下がろうとしているのなら下がって当然なのに、私たちは押し合うようにその場に留まった。
「カンナ」
ハラケンの声はほとんど涙交じりに決然と、私はとても不思議だった。どういう心もちであればそんな声が出せるのか。
ひとつ思い出した。昔、歌を歌った時のことだ。古い童謡で、七夕を歌っていた。大人たちは子供らしい、かわいい歌と聴いたろう。私だけ違った。涼やかな夜風に揺れてきらびやかな音楽が、その閃きそのままに、何故なのか理由もわからないままに悲しい。悲しいから涙が出て、私は泣いた。お姉ちゃんにそう言ったら、あの人は笑って、
――悲しいからじゃなくて、きれいだから涙が出るのよ。
と言った。わかるようでいて、やっぱりわからなかった。
でも、今わかった。
「僕は君のことが好きだ」
五色の短冊は、私が書いた。
「私も研一のことが好き」
お星さまはきらきらと、空から見ている。
ふたりは、とてもきれいだ。
でも、私が泣いたのはそのせいだけじゃなかった。
お星さまは美しい。それとも、お星さまの見ている私たちは愛ら

しい。だけど、私がいくら願っても、お星さまの輝きをもみじの手の内に収めることはできない。そうして、お星さまがいくら望んでも、私たちの願いを聞き取ることはできない。

牽牛と織女は年に1回なりと、会って心を通わすことができる。だからあのお話は、ハッピーエンドだ。ハラケンとカンナがどう思っているかは知らない。2ヶ月もすれば離ればなれになってしまうふたりは、重たい別れの予感を胸に、ああして言葉を交わしているのかもしれない、いや、きっとそうだろう。でも私から見れば今、ふたりは本当にきれいだ。星のように。そして、私はそんなきれいなふたりに近づくことができない。遠く、遠い場所から見つめることしかできない。

「私ね」

カンナが言った。

「ほんとは気づいてたの研一の気持ち。ごめんね」

「どうして謝るの」

「だって、気づいてながら何もしなかったから。怖かったの。今の幸せがなくなってしまうのが。私とあなたと他のみんなが変わってしまうのが」

私の胸のうちに、いつかのカンナの楽しそうな顔が浮かび上がった。そうか、あんなカンナの姿はもう見ることができなくなるんだ。ずっとあると思っていたものが不意になくなってしまう、そういう体験を、私は以前にも1度した。

「たとえ変わってしまっても、僕はカンナと一緒にいたいよ。カンナがいなくなるほうが、僕には怖いよ」

カンナは泣き笑いの顔をした。ハラケンが1歩近寄るとそれはほとんど泣き顔に変わった。拒んでいるようにも見えたけど、結局カンナのほうからハラケンの胸に頭をうずめた。

カンナのはもちろん、ハラケンの顔も、長い前髪がたれたのに隠されて見えなかった。見えなかったからこそ、ふたりはそこで、ふたりだけで、満ち足りて幸福だった。もうカンナの引越しのことか、

まるで関係なかった。その時、確かに普通の時間じゃなく何か別のものがふたりの間には流れていた。

いつの間にか、ヤサコの体温が感じられなかった。帰ったのかと思って見回すと、近くの木の影にまだいた。その場を去ろうとしてやはりできなかったようだ。肩を寄せ合うふたりを、じっと見つめていた。

驚いたことに、そうするヤサコの横顔もきれいだった。つかの間、自分だけが誰もから締め出されたような気がして、さっきとは別の意味で泣きたくなったが、どうしてかすぐに消えた。ヤサコのはきれいなのに親しかったからだ。わけがわからず、けれど自然と足はヤサコのほうへ向かって、私は話しかけそうになった。

でも、できなかった。その時私がどんな表情をしていたのかは知らない、確かなのは、ヤサコが私にくれたのは、拒絶だったということだ。

ヤサコは私をにらみつけた。さっきとは違うきれいさ。見つめる強さに、私の心は焼けるようだ。

私が立ち止まると、ヤサコは黙ってうなずきながら背を向けた。野槌神社の奥から学校の裏手に抜ける道だ。鹿屋野神社には戻らないってことだ。

私の足も、自然そっちを向いた。ヤサコとは１００メートルくらい距離を取って、前を行く柔らかい薄黄の浴衣が見えるか見えないかで、背の高いクヌギやナラに囲われた細い道を進んだ。ほとんど使ったことのない寂しい道を歩き続けて、心細さを感じ始めた頃、ようやく舗装道路に出た。

高い壁に囲われた左手は学校の敷地、右手は5階建てのアパートだった。ふたつの壁に区切られた長方形の空に、星が出ていた。

祭りばやしはもう聞こえなかった。学校はもちろん、アパートにも人の姿は見えず、いつの間にかヤサコの姿もなかった。ただ星が光って、その下に私がいた。

学校の裏門に上る階段の端に腰かけて、私がいつまでも星を見ていた理由は、その光の遠さが信じられなくて、じっと見ているうちに、手を伸ばせば届くところまで降りてくるかもしれないと考えたからだった。いや、もちろんそんなことがないとはわかっていた。わかっていたがそういう気分で、またそう信じなければ私は永遠にこの薄暗い街の片隅で誰にも気づいてもらえずにいるのではないかと怖かったからだ。

けれど、いうまでもなく星には手が届かなかった。誰にも気づいてもらえないという恐れが、次第にこの場所から立ち上がることができないという戸惑いに変わり始めた時、温かい感触が胸元に入った。

「モジョ……」

私が勝手に帰ってしまったことをすねているのか、モジョは答えずに体を揺すった。

「くくっ、くすぐったい」

弱々しかったけれど笑いの浮かんだのが、きっかけになってくれた。

私は立ち上がって、光のない道を歩き始めた。

第9話　星物語の夜に　Ｆ　ｐａｒｔ

ビニール袋にぶら下げた金魚たちを気にしながら追いかけたせいで、境内の裏手に入ったとたん、ヤサコたちの後姿を見失ってしまった。

「おいフミエ、あいつらどこ行った？」

同じようにイサコの分の金魚を持ったダイチが、後ろから声をかけてきた。

「わかんない。ふたりとも速いったら」

境内より奥の土地は、鹿屋野神社ではなくて大黒市の管理だ。ハラケンから秘密でもらった空間管理室の資料によると、サッチーやキュウちゃんの重点投入箇所には指定されているけれど、人があまり来ないせいもあってか、空間の乱れはちっともなくならない。

その時も、ぱっと目につくだけで3箇所、空間が大きく壊れている。そのうちのひとつの前で、不自然な光が揺らめいた。

「あっ、見つけた。イリーガルだわ」

「お、お前には渡さねえぞ」

すかさずダイチが捕獲用の暗号を構えた。

「ずるい。私が見つけたんだから」

すかさず放ったメタタグがダイチのメガネに貼りついて、爆竹のように火花を散らした。

「わっ、卑怯だぞ」

電脳の視覚をなくしたダイチは、あらぬ方向へよろめいている。

「油断した方が悪い」

言い捨てて、イリーガルに駆け寄った。

かなり近づいてもイリーガルはこっちに気づかない風だった。ダイチが追ってこないうちに捕まえてしまおうと思って暗号を構えた私だが、振りかぶった姿勢のままで、ついためらった。

その時初めて確かめたそのイリーガルの姿は、夕焼けに立つ人間

の影の形だった。そうして、影なのに夕映えを染ませて懐かしい赤だった。

空間の乱れに向けてイリーガルが1歩、足を入れると、夜の神社の風景に水面のような波が立った。同時に、空間の乱れがイリーガルを中心にして広まる。古い空間だ。バージョンは……5．16！

私たちのメガネではぎりぎりサポート対象外になる、廃墟のような空間。これだけ大きいのは久しぶりに見た。

イリーガルはもう1歩、古い空間の中へ進んだ。とその前に点々と、イリーガルと同じ色の明りが現れた。空間の奥に向かって2列になって、この光景はどこか見覚えがある――そうだ、さっきまでいた鹿屋野神社の参道の、左右に祭り提灯の並んだ景色にそっくりだ。思わず見入った、その先では光がばらばらになって星座のように輝き、中央に神社の拝殿に似た建物があった。

私は立ちすくんだ。何かとても懐かしい空気が、古い空間からこっちに流れ出しているような気がした。

何故か思い出した。去年もおととしもその前も、私は毎年夏祭りに行っている。毎年が変わらないようで、けれどどこかが違う。繰り返す日々を通じて私は今ここにいて、そうして、この子はそれを知っている。ずっと見てきたから。

「何やってんだよフミエ。お前がやらないなら俺が捕まえるぞ」

ダイチの声が聞こえ、私は慌てて振り向いた。

「待って。悪いやつじゃないわ」

「悪くないイリーガルだ？　お前、何言ってんだ。悪い悪くないをどうやって区別すんだよ」

「そ、それは、だってほら」

心にひとつの言葉が浮かんだ。

「七夕のイリーガルよ。そうに決まってるわ。よく見て」

「お前、そんなガキの噂を――」

ダイチの返事は途中で止まった。その目はまっすぐに私の後ろを見つめている。

「ね、わかるでしょ」
振り返った私の視線は黒いものによって遮られていた。
「空間の維持への重大な問題を発見しました。フォーマットを実行します」
「げ、サッチー！？」
「フミエ、逃げろ！」
ダイチが腕をつかんだ。引かれるままに走りながら、私は古い空間のほうを見た。サッチーの体が縦にまっぷたつに裂け、何層にも重なった牙が露わになっていた。サッチーはそのままの恰好でイリーガルに突進する。イリーガルは少女の身のこなしで危うく古い空間に飛び込み、直後にサッチーの巨体が激突した。
「あっ」
衝撃が波紋になって、メガネの画像が一瞬乱れた。思わずつぶった目を開くと、サッチーは古い空間の端に食いついていた。ひびの入った鏡のように空間が歪む。空間の欠片が飛び散るのに混じって、サッチーの砕けた牙が何本か見えた。けれどサッチーは平気だ。口の外側から次々と新しい牙が飛び出し、巻き込むように古い空間を体内に収めていく。
「フミエ、何やってんだ。急げ」
ダイチが再び腕を引っ張った。けれど、
「駄目よ！」
私は半ば無意識に叫んだ。
「このままじゃイリーガルが食べられちゃう」
イリーガルはそれらしい抵抗もなく、後ずさるばかりだ。
「しょうがねえ、諦めろ。イリーガルはまた捕まえればいい」
「あんた、わかってない」
私はダイチを振り切った。
「あいつはオンリーワンなの。代わりはいないのよ」
素早くポシェットをたぐり、サッチーの顔めがけてメタタグを投げつける。郵便マークが乱れて、サッチーは数歩後退し、こっちに

向き直った。
「オートマトンの構造に対する脅威を発見。優先して削除します」
「お前、何か手があんのかよ」
「そんなものないわ」
言うなり、私はダイチの目の前に金魚を差し出した。気おされて受け取ったのを確かめ、
「とにかく逃げ回って時間を稼ぐ」
「だ、大丈夫か」
「知らないわ。あんたは勝手にして」
戸惑い顔のダイチをその場に残して、神社の奥の林に連なる間道へ飛び込んだ。私だけの安全を考えるなら神社に戻ればいいのだけれど、それじゃサッチーはすぐにイリーガルへ目標を戻してしまう。
正直言って、後のことは考えていなかった。とにかくイリーガルを逃がしてやることしか頭になかった。だから、走り出して3秒で失敗に気づいた。だってゆかたに下駄だ。走りづらいに決まってる。サッチーは見る間に迫ってきた。
「たあっ」
かけ声だけは勇ましく、けれど気持ちはかなり切羽詰まって、数少ない強力なメタタグを投げつける。素早く胴体を覆った腕にメタタグが当たって、盛大に文字化けした。サッチーは動きを止め、後退を始める。
「やった」
が、それはぬか喜びに終わった。付け根に光が走ったと思うと、腕自体がぼろりとはがれ落ちる。後に残った穴から新しい腕が飛び出して、サッチーは再び私を見据えた。
それから10分ほども逃げ続けることができたのは、我ながらよくやったといえるかもしれない。足の親指と人差し指の間がすれてじんじん痛い。硬い下駄を踏んでいた足の裏全体も、古いあざのようにじわじわと痛み始めていた。

「ええい、もう勝手にしろ！」
最後のメタタグを使い果たして、私は近くの木に寄りかかった。息が荒い。胸が波打っている。せっかくお母さんに着付けしてもらったのにぐしゃぐしゃになってしまった。
サッチーがずるずる近づいてきた。やるならさっさとやればいいものを、こっちが抵抗できないのがわかっているのか、じっくり狙いを定めているところが嫌らしい。このサッチーはフォーマット光線を使わない。そういうタイプなのだろうか。しかしそうすると私の最期はサッチーに食われるということになる。大黒広しといえども、サッチーに食われたことのある人間は私だけのはずだ。かえっていい自慢になるかもしれない。
手を伸ばせば届くほどに近づいたサッチーが口を開けた。うわあ、やっぱり食われるのか。私は固く目を閉じた。
一瞬の後、めちゃくちゃなノイズが轟音を立てた。やられた。メガばあに言い訳が立たない。イサコにも笑われてしまう。ダイチには――
誰かが身体をさらった。
「おい！　走れ、走れ」
知ってる声にそう言われたので、わけもわからないままとにかく足を回した。しばらくすると石だたみに出て、ふたり分の下駄がからからなった。
「もういい、危ないぞ。止まれよ」
呆れたことに、私は目をつぶったまま走っていた。気がついて目を開けると神社裏の石段だった。
「サッチーは？」
「口の中にミサイルを突っ込んでやったぜ」
ダイチは胸をそらして笑おうとしたけれど、すぐに息を切らした。
「あんた、逃げたんじゃなかったの。それに金魚は？」
「逃げやしねえよ。状況を判断しろっての」
「状況？」

黙って指差された先を見ると、あちこちでキュウちゃんがフリーズしていた。
「サッチーがいたらキュウちゃんもいるに決まってるだろ」
「あんたがやっつけれくれたの」
「ああ。やつら1、2時間は動けねえぜ。金魚はその辺の木の枝に引っかけといた。盗られりゃしないだろ」
「助かったわ」
ダイチはちょっと照れたような顔をして、
「礼は早すぎるぜ。回復したサッチーが来る。やつはキュウちゃんと違ってタフだ」
「まずいわね。私、もう武器がないわ」
「わかってる。俺のほうもミサイル1発しかねえ」
「暗号は？」
「イリーガル捕獲用のやつだけだ。サッチー相手に威力はねえ」
「それって、逃げるしかないってこと？　イリーガルはどうするの？」
思わず詰問調になったのに、ダイチの苦い表情で気がついた。
「ごめん、あんたに責任はないわね。こうしていてもやられるだけなら、逃げるしかないわ」
「待てよ」
「えっ」
「まだ作戦はあるぜ」
私は目をこすった。意外にも、ダイチのはっぴ姿がなんだか頼もしく映ったからだ。

石段の脇で、ダイチはポシェットを引っ繰り返した。投げ縄とかカンシャクとかその他雑多な役に立たないものが転がり出した。
「散らかってるわねえ。たまにはポシェットの中整理しなさいよ」
「今はそんな話してる暇ねえだろう」
ダイチはがらくたの中からミサイルを引っ張り出した。

「ひとつだけなんだから、うまく狙えよ」
ミサイルをぶっきらぼうに投げてよこしながら、それでも心配の素振りはある。
「大丈夫。あんたこそ気をつけて」
「おう」
ダイチはにやりと笑って回れ右をした。木々の向こうにその姿が消えるのを確かめて、石段脇の茂みに身を潜めた。
ものの数分で、カンシャクの派手な音が響いた。それを追うように小柄なダイチ、そしてサッチーの巨体が姿を現した。
「来たわね」
隠れたままでミサイルの発射準備を整え、茂みから手だけ出して、準備完了の合図に親指を立てた。
「よし！」
走ってきたダイチはそのまま石段を駆け降り始めた。追うサッチーが石段を下りる直前で、私は茂みから立ち上がった。もちろん点火したミサイルを片手に。
「あんたの目標はこっちよ」
サッチーは不安定な姿勢でこっちを見た。
「電脳治安維持法に抵触するツールを――」
声はミサイルの発射音にかき消された。我が身を狙われたと考えたか、サッチーは腕で身体を覆い隠した。けれど狙いは低い。
サッチーの足元の空間が音を立てて弾け飛んだ。バランスを失った巨体が石段の下に向かって傾ぐ。芋虫みたいな足が宙に浮いた。
「よし、落っこちろ」
思わず叫んだ時、足が一斉に伸びて、近くの木や石だたみにへばりついた。とてつもない力で身体を引きずり戻そうとしている。細く伸ばされた足からはちきれそうに、筋肉の浮き出る様が見えた。
「まずい」
サッチーの傾きが止まった。うろたえた私とばっちり目が合う。
「電脳治安維持法に抵触するツールを発見。フォーマットします」

「何やってんだ！　逃げろ」
叫び声と一緒に細い何かが飛んできてサッチーの胴体に引っかかった。電脳投げ縄だ。
「それっ」
ダイチは渾身の力を込めて縄を引く。が、サッチーも引き返す。
「おい、手伝ってくれ」
うなずいて、私はダイチの元へ駆けた。
「一斉に引くぞ。細く見えるけどイサコがくれた縄だ。ちょっとやそっとじゃ切れねえぜ」
イサコってのがちょっと引っかかるけど、まあいいや。
「よし、行くわよ。せえのっ！」
全ては電脳のこと。やるといっても「ふり」だけ、だ。だけ、のはずなのに、こんな時、私たちは重さを感じている。突っ張ったふとももにこもる力、細い縄が食い込む手の痛み、腕の筋肉に感じる確かな手ごたえ。
そして唐突に、それは消えた。
目の前を、重量感のある黒い塊が転がり落ちていった。文字化けした記号を壊れたパーツのように散らしながら、踊り場で1回バウンドして、更に下へ。勢いのついた身体はふもとの鳥居を突き破って道路に転がり出し、向かいの民家の塀に激突して止まった。
私たちはしばらくそのままサッチーを眺めていた。身体の数か所から白煙が上り、けれど足の何本かはまだざわざわうごめいていた。時々体全体が揺れ動いて、そのたびに今にも起き上がるんじゃないかとどきどきしたけど、結局そのままだった。
「やっつけた？」
ダイチはかぶりを振った。
「多分致命傷じゃない。けど、しばらく行動不能にはできたみたいだ」
「仲間を呼ばないかしら」
「その心配はねえよ。電波障害が続いてるからな」

言われてみれば、電話はまだつながらない。
「イリーガルの様子を見に行こうぜ」
ダイチが手を差し出した。私はいつの間にか、尻もちをついていた。
「大丈夫。自分で起きられる」
別に拒んだわけじゃなく、そうしないとダイチと対等になれないような気がしたのだ。
ダイチは小さく笑って、ゆかたについた土をはたく私を見ていた。

第9話　星物語の夜に　Ｇ　ｐａｒｔ

「ダイチってば」

時々、フミエはそう言っていきなり俺を呼ぶ。どっちかというと機嫌のいい時だろうか。その後はいつも、少しの空白があるから、「てば」にはきっと続きがあるのだ。だから言葉には少しのもどかしさとはにかむような感覚が混じる。そうしてこれが重要だが、俺はそう呼ばれるのが嫌いじゃなく、そうだからむしろ、その続きは知らないほうがいいような気もしていた。

だからその日も、フミエがそう言って俺の肩をたたいた時、俺はあえて答えはしなかった。ただ何も言わず、少し高揚した気分でフミエを振り返ったのだ。

イリーガルの去った後のこと、神社の闇にぽっかりと浮いた夕方をふたりでのぞきこんでいる時だった。

夕焼けの向こうはただ薄く明るくて何もなかった。もしこの中に入ってしまったら、あまりの何もなさに、自分が誰だかすら忘れてしまうかもしれない。イリーガルはこの中に消えていった。本当にこのどこかに、俺やフミエの願った何かがしまい込まれているのだろうか。それならイサコのも。

そういえばイサコはどこに行ったのだろう。なんだかんだ言ってあいつだって祭りを楽しんでたはずなのに。金魚が証拠だ。最初の１匹をすくい上げた時のあいつの顔といったら。けれど、その金魚は今俺に吊り下げられて、狭いビニールの中を１匹、器用に動き回っている。俺は返すつもりだが、あいつは受け取らないだろう。そうすればこの金魚の生きる道は今夜こうして決まった。俺とフミエとイサコのちょっとした偶然の積み重ねで今金魚があって、多分明日の今ごろには俺の部屋の水槽でプラスチックの壁に鼻をつけているだろう。俺たちの人生だって自分で選び取っているように見えて本当は、そんな見えない何かに操られているのかもしれない。

俺の考えに答えるように突然光が増して、驚く間もなく消えた。
急に底の抜けたような不安を感じた。
「なに考えてんのよ。難しそうな顔して」
フミエが聞いたが、俺は答なかった。
俺たちの知っていることを超えたものがある。見えない力。イサコ。古い空間。全てがつながっているようで、考えれば考えるほどに、鼓動が嫌な感じに高まり出す。
「こら、ダイチ！」
「うおっ」
耳元で叫ばれて俺はようやく我に帰った。
「なんだってんだよ一体。そうがなりたてるなよ」
「だってあんた、さっきから黙りこくって」
フミエはなんだか不満そうだった。そういうフミエを見た覚えのなかった俺は、不思議に思った。
「お前のほうこそどうかしたのか。なんかいつもと違くねえか」
「違くねえわよ」
むきになって反論するのがやっぱりおかしい。
「質問してるのは私よ。授業中でもないのにあんたがぼけっとしてた理由は？」
「ん、そりゃあな――」
思い切って正直に打ち明けてみることにした。
「イサコのことだ」
フミエは一瞬何か言いたそうに顔をしかめ、
「あっそ」
しかし何故か答えはごくあっさりと、そうして俺に背中を向けた。
「あっそ、って……、イサコの何をとかないのか」
「別にないわよ。帰りましょ」
「ま、待てよ」
フミエの後ろ姿が闇に飲まれそうになって、俺は慌てて追いかけた。

その後しばらく会話がなかった。ふたり分の下駄が石だたみを鳴らす音だけが寂しく響いた。

俺はやっぱりイサコのことを考えていた。

やつは強い。俺たちの誰よりも。考えも大人びているし、行動力もある。それは確かだ。でもそうだからといって、心まで俺たちよりも強いのだろうか。金魚すくいの時のあの顔を見たことがなかったのは、つまりイサコ自身が、自分にそんな一面があるってことを知られたくなかったのだ。

イサコのそんな隠された子供っぽさが、いつかあいつにとっての弱点になるかもしれない。もしそうなら、イサコに頼りきりになりつつある黒客も同じことだ。

待てまて、いくらなんでも金魚すくいくらいでそこまで考えるのは深読みのしすぎだろう。こんなことを言ったらフミエに笑われちまう。

フミエ――そこでやっと思いが今この現場に戻ってきて、俺は気づいた。さっきから下駄の音がひとつしか聞こえない。

「フミエ？」

振り返るとちゃんとフミエはそこにいたのでほっとしかけ、けれど、まるで初めて出会った生き物に見入っているような、集中と放心の混じり合った視線が、俺を再び不安にした。

何も言えずに立ちつくしていると、フミエは突然笑い出した。

「あんた、何うろたえてんのよ」

「う、うろたえてなんかいねえよ」

「あっそ」

フミエは1歩近づいた。それで後ずさってしまったのだから、やっぱりうろたえていたのだ。

さっきと同じ距離で、俺とフミエはもう1度向かい合った。

「あのさ」

「なんだよ」

「私たちってなんなのかな」
俺たちはここにいる。風さえもそよがない。
「またね」
フミエはきびすを返した。からから軽い下駄の音が遠ざかり、風の音にまぎれると、俺はひとりで取り残されていたのだった。
俺とフミエは町会の仲でお互い小さい頃から知っていた。けんか友達だった、ずっと。ずっと？　ずっとってのはいつからいつまでだろう。初めて知り合った時から、爺さん婆さんになるまで？　そうだ、勝手にそう思い込んでいた。でもそうじゃないかもしれない。むしろそうじゃない可能性のほうが大きいんじゃないだろうか。じゃあ俺が当然のこととして過ごしてきたこの日常ってやつ、これも本当は、ものすごく奇跡的でものすごく普通じゃないのかもしれない。俺はそんな日々を今までフミエといた。そして、これからは？
これからはどうすればいいんだ？　フミエは何が言いたかったのか。俺はどうしたいのか。わかるようでちっともわからない。闇の中を歩くみたいに。そこに道はあって、俺は道を進めば家に帰れると思ってる。けれど、周りは見えない。家に帰ることができるのか、本当はわかりはしない。
悲しいような、だがとにかくわからない。俺は、闇の中を家に向かって歩き始めた。

半分考え事をしながらぼおっと歩いたせいか、いつか枝道に入っていた。祭りのにぎわいももう遠い学校の裏手から校舎を見上げると、灰色と黒のコントラストが重たくのしかかってくる。けれどその気づまりのどこかに、少しだけ懐かしいような感じがある。俺はつい、その感じのもとを探した。そしてすぐに見つけた。
最初に見た時はそうと思わなかった。それほどに、心細げな後ろ姿は小さな子供のようだったからだ。でもどう見ても、覚えのある紫の重たい花柄は、イサコに間違いなかった。
俺はすぐに駆け寄った。預かりっ放しになりそうだった金魚を返

せると思ったからだ。それなのに足はすぐ止まった。さっきの、懐かしい感じの原因に気がついたからだ。

ささの葉さらさら　のきばにゆれる
お星さまきらきら　きんぎんすなご

歌っているのはもちろんイサコだ。イサコの声は大人っぽいなんて女子が噂しているのを聞いたことがあるが、そういうんじゃない。きっと昔からイリーガルを追って、声をからしていたに違いない。ちょっとのどがつぶれているのだ。だから高い音になるときれいに出すのが難しくて、たどたどしくなる。

五色のたんざく　わたしが書いた
お星さまきらきら　空から見てる

初めて七夕の歌を聞いた5、6歳の子供が、一生懸命大人の真似をして歌っているようだ。そうして俺には、そうやって歌っているイサコがどうしようもなく寂しくてひとりぼっちに見えた。

俺は声をかけなかった。バカみたいにその場に立ちつくして、薄い墨を重ねるように闇に消えていくゆかたを眺めていた。イサコは何度も何度も、同じ歌を繰り返し歌っていた。その姿がすっかり見えなくなっても歌だけが耳について離れなかった。

何故声をかけなかったのかは、俺自身にもよくわからない。フミエのことといい、世の中わからないことだらけだ。今までならそんなわからないことはわからないままに流して、未来のことばかり考えていた。でも、もうそれじゃいけない気がする。

フミエは自分たちってなんなのかと聞いた。それは、俺たちがこれまで、どんな日々を過ごしてきたのか、だから今どうなのか、その後でやっと、これからはどうなのかって、そういうことだ。だから俺は、そろそろわかるための努力を始めなくちゃならない。それ

はつまり、俺が変わるってことだ。俺だけじゃない。フミエのやつもそうだ。黒客も。イサコも。

俺たちはそういう時期に来ている。

第９話　星物語の夜に　Ｇ　ｐａｒｔ（後書き）

第９話はこれで終わりです。今後、どうやら話は大きく動いていきそうですね。

第10話　君につながる道は　Ａ　ｐａｒｔ

ネットの掲示板によると、”あっち”の噂は、メガマスが数年前に起こした事故の後で広まったそうです。

その後で、僕とカンナは毎日のように会った。

僕は、ちょっと滑稽なくらいに必死だった。後から思えば、僕はカンナとのことが記憶の断片に収まってしまう寂しさに耐えきれなくて、カンナと同じ時を過ごすことで刹那的にそこから逃れようとしていたのだ。それでいて、カンナが楽しそうにするのを見るたびに、僕の心はもはや失われゆくものを感じ始めてもいた。

夏休みが近づくにつれて、僕のあせりは高まっていった。毎日毎日の出来事がまるで雲をつかむように現実感をなくして、指の間からこぼれ落ちていくようだった。夏祭りの夜だけが本当で、その後は全て幻のように感じられた。それはもちろん僕の妄想だ。けれど、僕がそう感じるのなら僕にとってはそれが事実なのかもしれない。

カンナを失いたくない。たとえ幻であったとしても、僕はカンナと一緒に過ごしたい。

「ええ、これから待ちに待った夏休みってわけだが、はしゃぎすぎて事故にあったりしないように気をつけろよ。それから電脳空間の不具合も最近特に増えてきるから、異常区域には絶対に近づいたらいかんぞ。わかったな?」

ウチクネ先生が言うと、はあいと元気のいい、しかし中身のない返事が教室に響きわたった。

「よし。それじゃ、今日はここまで」

起立、礼の号令がかかると黄色い喚声が室内を満たす。さっさと出ていく子供は案外少なく、三々五々集まっては、旅行の予定だの遊ぶ約束だの話している。

僕は3組の教室へ向かった。

入口で、ちょうど出てきたアイコと会った。

「あら、ハラケン。ひと足遅かったわね。カンナなら帰ったわよ」

「うん」

知ってる。今日は家族で新しい家を見にいくそうだ。僕の用は、カンナではなかった。

「イサコ、いいかい」

黒客と話し込んでいたいたイサコは、ぎくりとしたように立ち上がった。

「お前、どういうつもりだ」

「イサコ、何かあったのか」

ガチャギリが聞くと、イサコは思いきり眉をしかめた。

「なんでもない。じゃあいいな、3時に中津交差点だ」

まだ何か言いたそうなガチャギリを振り切るように勢いよく立ち上がると、僕を無視して教室の外に出た。僕も急いで追うと、扉の裏に隠れるように、イサコは待っていた。

「ここじゃ人目につく。そうだな、旧校舎の屋上まで来てくれ」

振り返らずに言って、イサコは早足で歩き始めた。少し間を置いてから、僕も屋上へ向かった。

地方都市の大黒には、背の高い建物は多くない。3階建の屋上からは、市内の駅よりこっち側なら一望にできる。夏の正午の太陽に照らされた街は、白っぽく輝いていた。きれいだったけれど人の気配を欠いた、無機質な宝石のようだった。

熱の吸収を抑えるために銀色に塗られた屋上の床を、僕は数歩進んだ。

「あのメール、何故私に送った?」

突然後ろから詰問が飛んだ。イサコは階段室の影に日差しを避け

て、壁に身をもたせて腕組みしていた。その横に、僕の送ったメールが、見せつけるようにこっちを向いていた。メールにはタイトルもない、簡単なものだった。

『ミチコさんについて、君の持つ情報を教えてほしい。交換条件は、僕が知っていることを誰にも漏らさないこと』

「もちろん、君が一番良く知っていると思ったからさ」

僕はつとめて何気ない風を装いながら、でも最後の言葉には自然に力がこもった。

「ミチコさんのことをね」

イサコは苦笑した。

「そりゃ『ミチコさん』の都市伝説なら私も知ってる。だけど、ネットで流れている以上のことはな。大体、あんなものは根も葉もない噂だ」

「そうかな」

僕はイサコの瞳を見つめた。

「じゃあどうして君は僕をこんなところまで誘ったんだい」

イサコは揺らがない。僕を強く見つめ返して言った。

「お前がいかにも、私の秘密を握ってるような書きかたをしてたからだ」

「へえ、やっぱり秘密があるんだ」

「あるさ」

こともなげに言い返されて、僕は少し鼻白んだ。

「電脳空間の不具合個所やセキュリティホール、そういったメガマスの公表していない情報を私はつかんでる。そんなことを教室でべらべら言いふらされたら大変だ」

イサコの口調は、次第に探るような、それでいて高圧的なものに変わってきた。

「ハラケン、ものを頼むなら順序ってやつがあるだろ。そろそろ教えてくれないか、一体お前が私の何を知っているのか」

僕は答えなかった。

「どうした。はったりか」
「ミチコさんは、子供たちの夢をかなえてくれるんだってね」
一瞬、沈黙が流れた。
「そういう噂だな。だから何だ」
「イサコも、何かかなえてほしい願いがあるのかい」
「ない」
答えは即座に帰ってきた。
「もちろん願い、というか望みならある。でも私は他人に頼ったりしない。自分の願いは、自分でかなえるさ」
「その願いが『ミチコさんを助ける』ってことなのかな」
「なん……だと」
イサコの表情から余裕が消えた。僕たちはしばらく、無言でにらみ合った。
「もう1度聞く」
ややあって、硬い言葉が耳に届いた。
「ハラケン、一体お前は私の何を知ってるんだ」
イサコの手には、青白い暗号が光っている。いざとなったらこの場で一戦も辞さないつもりらしい。
「まさか、空間管理室の、原川玉子の差し金か。見そこなったぞ、お前がそんなことをするやつだとは思わなかった」
「違うよ、オバちゃんは関係ない」
僕は両手を上げた。いうまでもなく、イサコと対立するつもりは全くない。
「残念ながら僕が知ってるのは、君がミチコさんを助けたいと考えているって、それだけだ。夏祭りの時、短冊に書いたろ」
「お前、私がそう書いているところを見たのか」
「ううん、それは見てないよ。でも君が竹に結んだ短冊にそう書いてあった」
「勘違いだ」
イサコは断定した。

「私はそんなこと、書いてない」
「見え透いた嘘をつくなよ。僕ははっきり確かめたんだ」
「いや、違う。私は短冊に何も書かなかった。それでも飾りくらいにはなるだろうと思ったから、白紙の短冊だけくくりつけてきたんだ」
「バカにしてるのか」
つい、語調が荒くなった。
「君がそんな態度を取るなら、黒客にこのことを伝えるぞ」
「やりたければ勝手にやれ。そんな曖昧で意味のわからない情報、誰も信じないだろうけどな」
憎々しげに言い放って、イサコは背を向けた。
「じゃあ、さよなら。良い夏休みを過ごしてくれ」
「待てよ」
「もう話すことはない」
「教えてくれるだけでいいんだ。ミチコさんのところへ行く方法を」
屋上がまぶしすぎるせいで暗い穴の底のように見える階段へ、無言の後ろ姿が吸い込まれていく。
「君に迷惑はかけない。僕ひとりで行くから」
びくりと背中が震えた。
「お前、今何て言った」
「え……だ、だから、”あっち”には僕だけで行くから、君には迷惑をかけないって」
「本気で”あっち”に行こうと考えてるのか」
イサコは振り返りもしなかった。
「本気だよ。僕はミチコさんに会って、願いをかなえてほしい」
「やめろ、愚にもつかんことをするのは」
「な……」
「”あっち”はお前が考えているような場所じゃない。それに危険だ。下手をすれば電脳体に修復不能のダメージを受けて、メガネが使えなくなるぞ」

「それくらい覚悟してる」
僕はイサコに歩み寄って、肩に手をかけた。意外ときゃしゃな感じだった。
「僕を”あっち”に連れていってくれ。お願いだ」
「駄目だ！」
手は乱暴に払いのけられ、強い瞳が僕をにらみつけた。
「お前は何もわかってない。”あっち”に足を踏み入れてしまったら、永遠に戻れなくなるかもしれないんだ」
「それでいいよ！」
イサコはあっけに取られた表情になった。口が2、3度動いたが、言葉は出てこなかった。
僕も同じだった。自分の口から飛び出した言葉に、自分で驚いていた。そうして驚きが収まった時、ようやく僕自身が何を望んでいたのか理解することができた。
「帰ってこられなくていい。永遠に”あっち”で、カンナと過ごしたい。カンナだってきっとそれを望んでる」
「バカを言うな。そんなこと、カンナが願うはずがない」
「君こそわかってないんだよ。僕についても、カンナについても。まるで何にも」
驚きの顔は、はっきりと傷ついたものに変わっていった。
「たとえ君が教えてくれなくても、僕は”あっち”へ行ってみせる。どんな手を使っても」
答えはなかった。イサコが僕の言葉にどんなことを感じたのか、それはわからない。何故なら言い終えた時、僕はもうイサコを見ていなかったからだ。僕は泣いていた。
悲しさや寂しさとか、そういうのじゃない。カンナと知り合ってからの楽しかったことやけんかした思い出やそんな気持ちの盛り上がりもなくただなんとなくふたりでいてそれで満たされていた気分やそんな感情が一気にせり上がってきて破裂しそうになった。それが涙になって、次々と滴っていったのだ。

今はこれ以上ないくらい懐かしい、きれいな記憶。けれど思い出すたびに僕のリアルな気持ちはだんだんぼやけて、夕映えに沈む町のように他の思い出と均質になって、心の見知らぬどこかに消えていく。やがては涙も出なくなって、それを僕は「成長した」とかいう言葉にごまかして安心して、カンナのことを忘れていく。

そんなふうには、絶対にさせない。

僕は顔を上げて、空を見た。

その時、思いがけない大きさで、チャイムが鳴り響いた。ちょうど1時だった。

音が人のいなくなった学校を塗り替えて、すぐ空に消えた。それで僕は今まで僕を包んでいた世界の切ないほどに広いのを知って、逆にそれを閉じ込めることにした。

第10話　君につながる道は　Part

調子が悪かった、ってわけじゃない。

やっぱりイサコは金魚を受け取らず、俺は金魚鉢よりは大きい水槽を物置から引っ張り出して、元気はいいけど珍しくもないそいつを飽きもせずに眺めていた。もちろん金魚に惚れこんだわけじゃなく、ただあてどもない考えごとをしてはそれがぷっつり切れて現実に戻ってきた時の、目の取っかかりが欲しかっただけなんだが、後で聞いたら、オヤジ――フミエのペットじゃなくリアルな俺の父親のほうだ――なんかは俺が金魚に取りつかれたとまで思ったらしい。

俺としてはそのほうがシンプルで良かった。だが世の中そうシンプルじゃないってことを、夏祭りの夜に俺はなんとなく気づいてしまったから、そのシンプルじゃない諸々、中でもまあフミエとイサコの範囲なんだが、そっち方面をどうにかしなくちゃならない。けれどその方法がちっとも思い浮かばないからこうやってくさっているのだった。

黒客には何度もイリーガル探しに誘われて、2、3度は断り切れずについていった。で、当然ミスった。イサコの指揮も今ひとつ精彩を欠いていた。どうも歯車がかみ合っていない。

結局この1カ月というもの、ただの1匹もイリーガルを捕まえられていない。

「このままじゃ空中分解だよ」

終業式の放課後、最初に俺のところにやってきたのは、デンパとアキラという珍しい組み合わせだった。

「空中分解」

俺の頭はイメージを追いかけていた。分解といえばばらばら、言葉は出てくる。だが映像にするとなんか重たい。例えばヘリコプター。金属のローターがすぽーんと抜けて。事故。駄目だ、重い。飛

行機。スピード。大惨事。駄目だだめだ。
「ダイチさん、どうしちゃったんですか」
アキラが心配そうに俺の顔をのぞきこんだ。
「言葉ってのは重要なんだよ、お前たちが思ってる以上に」
「え？　何の話？」
何の話って。そういえば、「なになに？　何の話？」ってのは昔フミエがよく使ってた言い回しだ。「同じこと3回も聞かなくってもわかるぜ」ってからかってやったらその後は言わなくなったけど、あれは重くなかった。何でだろう。繰り返せば重くなるのが普通なのに。フミエとデンパの体重の差だろうか。
「ダイチ！　おーい」
俺の目の前で手が振られている。厚ぼったい感じの指だ。
「デンパ、少しはダイエットしろよな」
「な、何だよいきなり」
「ダイチさん、ストレートすぎますよ。デンパさん傷ついてるじゃないですか」
「うっせえなあ」
アキラを見ているとどうしても姉貴を思い出す。俺は席を立った。と、そこにまた影がひとつ、いやふたつ。
「てめえ、わかってんだろうな。今日は3時に中津交差点だ」
ガチャギリが、お供にナメッチを連れて立っていた。
「ああ？　なんだっけ」
「メールだよメール。読んでねえのか」
言われてメールボックスを開くと、今朝の発信でイサコから連絡が届いていた。
『今日は空間の不安定性が高いからイリーガルの捜索に行こうと思う。最近イリーガルの捕獲率が低いから、ミスらないように準備を整えておいてくれ。時間と場所は後で連絡する』
「捕獲率が低い？　なんだ、イサコのくせに甘っちょろい書きかたしやがって。捕獲ゼロだろうが」

「他人事みてえに言うな。中津交差点に3時、今決めてきた。絶対来いよ」
「えー」
「なんだよその女みてえな返事は。来いっつったら来い。お前、リーダーだろ」
「そうだけどさ、なんか気が乗らねえんだよ」
「んだと」
ガチャギリの声が低くなった。
「親分、良くないっすよ」
ナメッチがガチャギリの後ろから言う。
「良くないっすよ、本当。最近の黒客って、あれっす、キョーチョーセーに欠けてません？」
「キョーチョーセーなあ」
俺のせいなんだろうな、多分。このテンションの低さ。
「おい、来るのか来ねえのか、どっちだ」
「行くよ、行く」
とにかく今はそうしなくちゃならないんだろう。俺は答えて、けれどそれ以上は何も言わずに教室を出た。

約束の3時に大分早く、俺は集合場所の中津交差点についた。家にいてもやることは金魚の餌やりくらいだし、遅刻してガチャギリやイサコにやる気がないって怒られるのも嫌だったからだ。
メガネをかけたままだと、中津交差点の周りはいつもどこかにノイズが立っている。空間自体もいまいち解像度が低い。晴れているのにうっすらと雲がかかったような空、霧に隠されたように見通しのきかない町並み。
「おーい、ダイチ」
交差点の向こう側でデンパが手を振った。
「おう」
ちょうど青になった信号を渡りながら、

「早いな。まだ15分もあるぜ」
「うん。僕はいつも行動が遅くてみんなに迷惑をかけるから、なんでも早めにやっておこうと思ってね」
「ふーん。健気なやつだ」
「あっ、いたいた。ダイチさん、デンパさん」
アキラもやってきた。いそいそとポシェットを探りながら、
「ミサイル、改造しておきましたよ。推進力3割増しです。はい、これがダイチさんとデンパさんの分」
電脳マジックで「改」と付け加えられた直進君のパッケージをひとつずつ、俺たちに差し出した。
「へえ、お前、そんなこともできるようになってたのか」
「はい、ガチャギリさんに教わりました。まだ直進君だけで、追跡君の改造は無理ですけど、夏休み中にもっと勉強しますよ」
「あ、ああ」
俺がぐずぐずしている間にも、知らないところでがんばっているやつもいる。頭が下がる思いだ。こうやって黒客を盛り立てようとしてくれてるやつらを見ると、どこからかやる気がわいてくる。
「さっきの話の続きだけど」
声をかけてきたのはデンパだった。けっこう難しい顔をして、俺のことを見つめている。
「ダイチ、どう思う?」
「さっきのてのはあれか、空中分解の」
「うん」
「悪いとは思ってるんだぜ」
俺は腕を組んだ。
「でもなんつーか、集中できねえんだ」
「どうして?」
「そうだな。今までは、イサコが来て、それで黒客が強くなって、そのまま上り続けると思ってたろ。でも最近思うんだ。そうじゃねえのかもって」

「最近本調子じゃないからですか？」
アキラがメガネをずり上げた。
「いいや、そんな単純なことじゃねえよ。なんて言ったらいいのかな。つまり、俺たちはイサコに頼りすぎなんじゃねえかってことだ」
夏祭りの夜のことは言わなかった。それをイサコの知らないところで広めてしまうのは悪いような気がしたからだ。
「頼りすぎかあ。確かにあるかもしれませんけど、イサコさんの能力って僕たちとは段違いですからね」
「そりゃそうだけどよ」
アキラのいうとおり、イサコ抜きの黒客なんて今じゃ考えられない。でも、だからってそれでいいのか。
「よう、今日は遅れなかったじゃねえか」
ガチャギリが姿を現して、話は中途半端に立ち消えた。

イサコは5分ほど遅れてきた。5分の遅れなんてそうそう目くじら立てるようなことでもないから誰も何も言わなかったけれど、俺は引っかかるものを感じた。イサコが時間に遅れるなんてこと自体、これまでになかったからだ。それに、その日のイサコはいつにもまして黙りがちだった。それぞれの持ち場だけを言葉少なに伝えて、自分は空間異常の中心へ向かう。その背中がいつもより小さく見えたのは、俺だけだろうか。
俺の待機場所は、交差点を少し南に下った、駅前の商店街が始まるすぐ手前のあたりだった。待ち伏せする時のいつものやりかたで、通りから1本入った、イリーガルの好みそうな路地裏に捕獲網を張る。仕掛けを終えたら大通りに戻って、後は待ち構えるだけだ。今日はミスしないように網はきっちりと張りつけ、ほころびている部分がないかもしっかり確かめた。電脳網を破ってしまうほどの強力なイリーガルが現れない限りは、それで万全に思われた。
けれど、何にでも計算外ってことはある。そしてそういう計算外は、得てして今みたいな本調子でない時に起きるものだ。

待ち伏せを始めてから３０分くらい経った頃だった。
不意にメガネのつるが振動した。イサコからの緊急連絡だ。
「気をつけろ。イリーガルがそっちに向かった」
「よっしゃ、任せとけ」
「手強いやつじゃないがすばしっこい。逃がすなよ」
「わかってるって」
通話を切って、俺はミサイルを数機、道路に据えつけた。全部使うつもりはない。イリーガルを路地に逃げ込ませるためのこけおどしだ。
５分ほどして、通りを走ってくる黒い塊が見えた。
「来たな。すぐ捕まえてやるぜ」
大きさは猫くらい、にょろりとした長い身体からムカデのような対になった肢が無数に伸びている。背中には足と同じように対になったとげが連なった、見た目気持ちの良くないやつだ。俺の存在には気がつかないらしく、こっちに向かって一目散に駆けてくる。
俺はその辺にあったポストの影に身を潜ませた。１０メートルまで近づいたら飛び出してやる。
イサコの言ったとおり、見た目のわりに足の速いやつだった。体を波打たせながらどんどん近づいてくる。もう後３０メートル、すぐに２５メートル。
俺が身構えた瞬間だった。走ってくるイリーガルの横腹めがけて、見たことのない赤い光が飛んだ。
「あっ」
思わず飛び出しそうになったのを、俺はぎりぎりで抑えた。
光はイリーガルの手前に着弾した。ぱん、と乾いた音とともに道のグラフィックが細かい文字になって弾ける。後はクレーターのように黒い穴になった。暗号の一種だろうか。かなり強力だ。
イリーガルはまだこっちに向かってくる。だが、もう捕獲どころじゃない。新しい暗号の使い手はどこのどいつか、確かめないと。
「待て！」

横道から飛び出した顔は、見覚えがあった。同学年の、名前は確か、猫目タケル。おかしい、こいつがメガネ使いだって話は聞いたことがない。

タケルは赤い暗号をもう1度投げた。が、イリーガルには当たらない。

「くそっ」

キーボードを素早くたたくと、またひとつ光が浮かび上がった。今度のはさっきと少し違う。設計図のような、平たい図形だ。

「それっ」

かけ声とともに、タケルは光を地面に押しつけた。次の瞬間、辺りの地面のそこここで光が走った。

「なっ、なんだこりゃ」

光った後の空間には何も残っていない。すっぽり抜け落ちたような真っ黒な断片に、エラー表示だけがおどっている。

イリーガルもさすがに進みあぐねて、その場に留まっている。タケルはイリーガルをにらみつけた。

「覚悟しろ」

その手に暗号が光ったのと同時だった。イリーガルの頭から黒いものがいくつも撃ち出された。

「わっ」

暗号の光が消えて、すぐに電脳壁が現れた。イサコが時々使うのと同じ、丸いミニタイプの鉄壁だ。けれど遅い。壁に守られる前に反撃をまともに食らい、タケルはあおむけに倒れた。イリーガルのほうはタケルの様子を確かめるように首を振った後、すぐに向きを変え、横道に消えていった。

俺はポストの影から出た。

「おい、大丈夫か」

道路に座りこんだままで腰をさすっていたタケルは、びくりとして顔を上げた。

「俺は3組の沢口ダイチだ。大黒黒客って電脳クラブをやってる」

「知ってる」
その目にはおびえと自信がごちゃごちゃになって現れていた。イサコに似ているなと、根拠もなく思った。

第10話　君につながる道は　Ｃ　ｐａｒｔ

調子が悪い、という言葉で片づけたくはなかった。
イリーガルの捕獲率が目に見えて落ちてきているのは、半分以上が私の責任だ。ダイチがいなくなったのも、その辺を察して不満を持っているのかもしれない。ガチャギリなんかは、
「イサコのせいじゃねえ。最近ダイチのやつがやる気ねえし、それが俺たちにも伝染しちまってるんだ」
なんてらしくもなく取り成してくれるのだが、そんなふうにかばわれるの自体がこれまでにはなかったことで、そこにはやはり私自身の問題があるのだ。
デンパから着信が入った。
「駄目だよ。ダイチ、どこにもいない。イリーガルも見つからない」
「そうか。一旦戻ってくれ。善後策を話し合おう」
通話を切って、着信履歴をもう1度確かめる。ダイチからの連絡はなかった。

「正直に教えてくれ。みんな、私のやり方に対して不満に思っていないか」
ダイチ以外のメンバーが集まった、場所は中津交差点に近い公園で、私はまずそう聞いた。
「ねえよ」
ガチャギリが即座に言い放った。
「ダイチがいなくなったのはやつの問題だろ。お前とは関係ねえ」
「俺もそう思いますよ」
ナメッチが後に続く。デンパとアキラは目配せして、
「僕たちも同じです。イサコさんに対して不満はありません。でも――」
「でも、何だ」

どきりと胸が鳴った。
「不満というよりは心配だよ」
たじたじとしたアキラに代わって、デンパが答えた。
「イサコ、なんだかあせってるように見えるしさ」
「あせって――」
今度は私の言葉がつまった。
「そりゃ言えるぜ。黒客の資金は十分すぎるほどに集まってる。俺たちに挑戦してくる電脳クラブも最近はねえしな。ひと息ついたって構わねえのに、お前はなんか余裕ないんだよな」
「そ、それは、だって、この先何が起こるかわからないし」
我ながらほとんど答えになってない言い訳だった。
「イサコさんのほうこそ、何か悩みでもあるんじゃないすか。俺たちで良ければ相談に乗りますよ」
しまった、やり損じた。みんな、やっぱり不満があったのだ。それも昨日今日のやり方が悪いとかその程度の話じゃなく、私が隠し続けている目的に気づき始めて、私がそれを教えないことにひそかな不安を覚えているのだ。
「私には悩みなんかない」
「隠さなくてもいいんだぜ。俺たちにできることなら力になる」
「大丈夫。本当にないから」
「でもイサコ、ダイチがいなくなったのは自分のせいだと思ったんだろ。やっぱり何か気にしてることがあるんじゃないの」
「それは――」
「それは？」
皆が私に視線を寄せていた。
「それは、だから、私もみんなに悪いと思ってたんだ」
それは咄嗟に出たひと言だったのだけれど。
「悪いって？」
「お前たちをいいように使ってさ。私がリーダーってわけでもないのに」

皆がきょとんとした顔で私を見た。
「すまなかった」
私は頭を下げた。
「ま、待てよ」
急に恥ずかしくなってきた。同時に、罪悪感が込み上げた。私は結局、こうやって嘘を重ねていく。それでいつまでも乾いた地面を見ていた。
皆も戸惑っていたのだろう、しばらく誰からも答えはなかったが、ややあって、
「そりゃ考えすぎだよ」
ガチャギリが声を上げた。
「俺たちはイサコのおかげで十分楽しくやらせてもらってるぜ。こっちこそ悪いくらいだ」
そこで一旦言葉を切って、やや慎重な視線で周りをうかがった。
「いっそ、お前がリーダーでもいいくらいだな」
そのひと言で空気が変わるのがわかった。急いで顔を上げると、皆が虚をつかれたようにガチャギリを見つめていた。
「待ってくれ。別に私は、リーダーの地位を望んでるわけじゃない」
「ああ、わかってる。だが俺は、お前がリーダーにふさわしいと思う」
「ガチャギリ、待ってよ。元々黒客はダイチが作ったクラブだろ。ダイチのいないところでそんなこと、決められないよ」
デンパが慌てて止めると、ガチャギリは意を決したように首を振った。
「それもわかってる。なにも今この場で、リーダーを変えようとは思ってない。ひとりひとり、どうするのが一番いいのか考えてほしいんだ。その後で、そうだな、3日後に集まろう、もちろんダイチも入れて。その時に、これからのリーダーを決める」
「どうしたんだい、さっきからため息ばっかり」

クッションに座り込んで何度目かの息を大きく吐き出した私を、お兄ちゃんがまじまじと見つめた。
「こっちもいろいろ大変なのよ」
「そりゃ悪かったね」
言葉とは裏腹に、お兄ちゃんはどこか楽しんでいるようだった。でもあえて反論はしなかった。黒客は私の問題だから、私がなんとかしなくてはいけない。もちろん、私自身のことも。
私があせっていると言ったさっきのデンパの言葉が、心に重く残っていた。あせったり、いらだったりはするまいと決めていた。ハラケンやカンナとのことだって、それは私の胸の内だけにしまっておくべきことだし、そうできると思っていた。そうしていると自分に言い聞かせていた。だから、黒客のメンバーにそれが伝わっているとわかって、やはりショックだった。
「パスワードも大分集まってきたね」
黙りこんでしまった私を見て、お兄ちゃんは話題を変えた。
「予想以上のペースだ。大黒って場所がよかったのもあるだろうけど、なんといってもイサコの努力があったからこそなんだよ。イサコには本当に感謝してる」
「そんな言い方しないでよ」
お兄ちゃんが私を気づかってくれたのはわかっていたけど、返事はついきつい調子になった。
「あの人のことはお兄ちゃんだけの話じゃないわ。私だってお兄ちゃんと同じ。ふたりが助け合ってるはずでしょ」
お兄ちゃんは口に手をやった。
「ごめん、つい」
「わかってくれればいいの。でも、忘れないで」
あいまいにうなずく顔を横目で見ながら、抱き寄せたひざに顔をうずめた。
気まずい沈黙が流れた。少し経つとお兄ちゃんのキーボードをたたく音が低く響き始め、それで私はますます居所のない気分になっ

た。
　もう自分の部屋に戻ろうと思って、私は立ち上がった。お兄ちゃんはこっちを向きさえしない。そのままドアの前に立った時、
「イサコ、もっと力が欲しい？」
「えっ」
「空間管理室は規制を強化してるし、空間の深いところまで行けばイリーガルの能力も上がってくる」
　お兄ちゃんは私の目を見ずに話し続ける。
「今の私じゃ力不足ってこと？」
「最近時々頭痛がするって、この前言ってたろ」
「うん」
「多分イマーゴの使いすぎだよ。体への負担が大きくなってるんだ」
「そ、そんな！？」
　バカな。まだまだこれからって時に。
「一体どうすればいいの？　何か対策はあるの？」
「ないわけじゃない」
　お兄ちゃんはモニターに向かった。私もつられてのぞき込む。と、モニターわきの空間に特徴的な図形がいくつも浮かび上がった。パスワードだ。
「パスワードはその名のとおり、より深い空間へもぐるための鍵みたいなものだ」
　お兄ちゃんはどことなく翳りを帯びた目で私を振り返った。
「ツールとして使う限りは」
「それ以外の使い道があるの」
「イマーゴと融合させてしまうんだ。そうすれば、これまでより簡単に古い空間へアクセスできる。より強力な暗号を、少ない力で使えるようになる」
　そんな方法があるなんて聞いてない。
「どうして教えてくれなかったの」
　詰問調の言葉の裏には、当然不安があった。お兄ちゃんはそれを

察するような低い声で、
「今までにそんなことをした人間はひとりもいない。どんな副作用が起こるか知れないし、起きた時の対処法もわからない。もしこのことをイサコに伝えたら絶対にやるっていうだろうから、あえて何も言わなかったんだ」
「当り前よ。やる」
お兄ちゃんは答えなかった。
「多少の副作用くらい覚悟してるわ。それくらい、あの人の苦しみに比べたらどうってことない」
「本当にいいんだね。後悔しないね」
選択の責任を私に押しつけて自分は逃れようとする、そんな言い方はずるい。それがお兄ちゃんの弱さだ。でもその弱さだって私が作ったものかもしれないから、私が引き受ける。
「後悔するかもしれない。でも後悔することも覚悟のうち」
お兄ちゃんは弱々しくほほえんだ。
「じゃあすぐにやろう」
小指で軽くキーがたたかれた瞬間、空間に浮かんでいた全てのパスワードがほどけてひもになった。またたく間にパスワード同士は絡みついて、こよりをよるようにひとつの長いひもに、さらに先端部分が尖って鋭い切っ先を作る。刃の先端はぴったりと私の胸に狙いを定めて止まった。
決心するのには時間がかかった。それは、怖かったから。その刃が怖かったのでもあるし、それとも。
「構わない」
私は両腕を広げた。

白刃があやまたずに胸を貫くと、視界が懐かしく閃いた。
光に目が慣れると、別の光景だった。私は無数のきらめいて動くものに取り囲まれていた。それは情報で、情報は記憶で、記憶は心だった。ならば私は今まさにあの人の心に近づいているのであって、

それはもちろんものすごく不安なことでもあったのだけれど、それでも私を幸せな感情で満たした。そうして私は自分が幸せと感じているのが嬉しくてならなかった。そういうものの向こうにあの人がいるのなら、あの人もそう感じていてくれるなら。

意識が明滅する。

「どこだろう」

私は鳥居の並んだ階段に立っていた。記憶にない場所だった。もしかするとミチコお姉ちゃんの。

光はないのに、辺りはしっかり見渡せた。それがなんだか不自然で変な感じだった。早く出たくて見上げると、階段の先から山吹色の光が漏れていた。私は駆け上がった。

階段の先は交差点だった。見覚えのある、どころじゃない。何度も夢に見た、あの交差点。数歩進めばそこに出られるものを、何故か私は鳥居の内側でとまどっていた。

人は何人か歩いていたけれど、みんなイリーガルのように真っ黒で区別がつかない。もしこれがあの時なら。私は交差点の向こうに目を凝らした。

と、すぐ目の前に小さな白いものが現れた。あっと思う間もなくわきを駆け抜け、鳥居を下っていく。

「なんだ、あいつは」

その後姿には見覚えがある気がする。ずっと昔のものにも、つい最近見たような気も。

ぷつぷつと泡の弾けるような声が、交差点のほうから聞こえた。振り向くと、大きな影と小さな影がひとつずつ、こっちをのぞき込むように立っていた。

ここは。彼女は！

「駄目だ、来ちゃ駄目だ！」

私は叫んだ。でも言葉は伝わらない。大きい影が小さいほうに何か言って、こっちに向かってくる。

「来ないで！」
必死で叫んでも声はあいまいに消え失せる。影が入ってきた。夕映えの逆光が途切れて、その顔が露わになる。
「お姉ちゃん」
私は彼女を止めようとしたのか、それとも抱きつこうとしたのか。とにかく両腕を広げて立ちはだかった。
けれど、お姉ちゃんの体はまるで何もないかのように私をすり抜けた。あがくように握った手も空をつかんで、私はその場にへたりこんだ。
止めなくちゃ。私が止めなくちゃいけないのに。そうしなくちゃならなかったのに。
次第に鳥居の形が崩れ、差し込む光も弱くなる。ああ、これで終わりか。私は戻って、今度こそその手を。
「大丈夫？」
ふと、幼い声が耳元に届いた。まさか、あの時の私！？
遠のく景色に私はひとりの、ほんの小さな子供の姿を認めた。
柔らかそうな濃い茶の髪。同じ色の大きな、あの頃から変わらない瞳を、私は知っている。

「イサコ、イサコ、しっかりしろ！」
お兄ちゃんの呼ぶ声に、私はうっすらと目を開けた。思ったより近くに顔があって、少しどきっとした。
泣いた後のようにさわやかだった。それでいて、泣いた後のように苦くこごったものがあった。
「ありがとう。うまくいったみたい」
助けを断ってひとりで立ち上がると、もう夜景になりつつある窓外の景色がひと際鮮やかに映った。
その美しさに見とれながら、そうする自分の傲慢さを、私はこれからも思い続けるのだろう。お姉ちゃんを助け出す日までは。

第10話　君につながる道は　Ｄ　ｐａｒｔ

その前に私がダイチと交わした最後の言葉は何だったのか、どうしても思い出せない。終業式の教室なのは決まっているから、「おはよ」とか「さよなら」とか、軽いどうでもいいものだったに違いない。でも私は思い出したい。私とダイチは一体何なのか、それで少しでも、ほんの少しでも理解したいから。逆にいえば、そうしなければ何がなんだかわからないほどに私とダイチの関係は変わって、今のところ、私はその変わったのに全然なじめてない。

ベッドに寝転がったまま、窓に向かって手を上げる。逆光ではっきりと影ができる。こんなに確かに、私は私なのに、このもやついた気持ちはどうして起きるんだろう。

「あー、あー、あいうえお！」

今度は怒鳴ってみる。おんなじだ。声がすかっと伸びない。

「お姉ちゃん、うるさいよ朝から」

ベッドの下の段からアキラが顔を出す。無理もない、まだ6時前だ。

「あ、アキラ！」

「ぎゃっ」

顔面に枕のクリーンヒットが決まって、アキラはベッドに引っ繰り返った。

「何すんだよ、痛いよ」

「わかってるわよ。でも、あんたが痛くても私は痛くないのよ」

「そんなの当たり前――うわっ」

第2撃は際どくかわされた。

「お母さん、ねえお母さん助けて。お姉ちゃんが凶暴になった」

「ちょっとアキラ、待てってば」

廊下に飛び出し、朝日で暖まった床を盛大にきしませながら、私はやっぱり私の心を探っている。

「フミエ、やめなさい。あんたいくつになったら子供っぽさが抜けるの」

障子の向こうからお母さんの声が聞こえると、自然に足が止まった。怒られるのがいやだったというよりは、このあいまいな気分のまま1日が始まってしまうのが怖かったからだ。

枕を引きずりながら戻った部屋は、朝日でやけに明るかった。布団にあおむけに転がって無理に寝直そうとしたところで、メールの着信音が鳴った。

「誰よ、こんな早くから」

タイトルだけ見てつぶろうとした目は、そこでぱっちりと開いた。メールはダイチからだった。

「何かしらね、『重要な話し合い』って」

ダイチからの呼び出しメールの目的が、ヤサコには本当に想像がつかないようだった。メガシ屋から鹿屋野神社へ向かう道だ。日差しにさらされた道は照り返しで白っぽい。

「ねえ、フミエちゃん」

「あっ、うん。そうね、私もわかんないな」

「そうかあ。フミエちゃんもわからないなら、私になんか絶対無理ね」

ヤサコの何げないひと言が、変に気にかかった。

「どうして？」

「え？　何が」

「どうして私がヤサコよりダイチのこと知ってるって思うの」

「あら、変なこと聞くのね」

ヤサコはきょとんとした顔で私を見た。

「フミエちゃんのほうが私よりずっとダイチ君とのつきあいが長いんだから、当り前じゃない」

「いや、まあそうだけど」

だけどわからないのだ。最近のダイチは。

ダイチの様子がこれまでと変わったのは、夏祭りからこっちだ。あれ以来、私たちはほとんどまともに話もしていない。

私のあの夜の言葉が、ダイチの心に留まっているのだろうか。そう思うとくすぐったいようなざわざわむずむずした気持ちになる。でももしそうじゃなかったら。

「フミエちゃん、どうしたの？　顔が赤いわよ。もしかして日射病かしら」

「だ、だいじょぶだいじょぶ。早く行きましょ」

どっちにしても答えはもうすぐわかる。ダイチは何かを心に決めたのだ。だから黒客の話し合いに私たちを呼んだのだ。

夏休み中は学校が使えないから、鹿屋野神社が黒客の活動拠点になる。空間管理室の体制強化もあって最近ではこの辺りもサッチーの巡回ルートに入っているのだが、黒客はどこからか最新の市の管轄エリア表を手に入れて、サッチーの管理対象外に武器やらツールやらをため込んでいるのだ。生い茂った木々のおかげで夏のわりに涼しいけど、時々蚊のやってくるのはありがたくない。

「私たちはメガシ屋があるからいいけど、黒客はいろいろ大変なのねえ」

顔の横に伸びた木の枝を引っ張りながらヤサコが言う。

「そうなんすよ。武器だって普通の電脳駄菓子屋から仕入れるのは割高だし」

「イサコが来る前は何かあった時の相談役もいなかったしな」

ナメッチとガチャギリが声をそろえるのを聞いていると、ちょっとかわいそうな気持ちにもなった。

と、そこへ、

「お前たちに同情されるいわれはない。同情されたいとも思わないしな」

いつもの斜に構えた声が届いた。イサコはみんなから少し離れた木に寄りかかって、足を組んでいた。

「ダイチ、さっさとすませるぞ。用件を聞こう」
「恰好つけやがって」
もう一方の主役が腰かけていた石から飛び降りる。挑みかかるような視線が交差した。
「俺はな、おかしいと思ってんだよ、最近」
「おかしい？　何がだ。お前の頭か」
「ちげーよ！　ぼけんな」
「ふうん」
いつの間にか隣にいたガチャギリが顔を近づけてきた。
「フミエ。ダイチのやつ、何かあったか」
「ううん、何も聞いてないけど」
「そうかあ。おっかっしいなあ」
ガチャギリは首を傾げる。
「今日のダイチ、それにイサコもか、妙に調子いいぜ。昔のノリに戻ったっつーか」
「そういえばそうね。でもいいことじゃない、元気なのは」
ヤサコはまるで他人事みたいに言う。
「おい外野！　ちょっと黙ってろ」
ダイチはこっちに鋭い一瞥を飛ばしてから、
「おかしいってのはな、最近の俺たちは、なんかつまんなくなっちまってねえかってことだ」
「つまらないだと」
「そうだ。黒客ってのはな、元々好き勝手にメタバグ集めたり、イリーガル追っかけたりしてたもんだろ。それがパスワードって、それがばっかりが目的みたいに目の色変えて」
「それが私のせいだというのか」
ダイチは首を振った。
「違う。俺はみんなに言ってるんだ。なあガチャギリ、ナメッチ、そう思わねえか。もう1回、黒客を昔のもっとゆるくて気楽にやってたころに戻さねえか」

「悪いけど俺の意見は違うな」
ほとんど間をおかずに答えたガチャギリに、皆の視線が集まった。
「実はさ、俺たちも最近変だとは思ってたんだ。でもな」
ガチャギリは親指で帽子の端を持ち上げた。同時に全員のメールボックスが立ち上がる。新着が1通あった。
「その原因はダイチ、お前じゃねえのか」
メールが開いた。
『黒客のリーダーにはイサコがふさわしいと、俺は思う。明後日集まって次のリーダーを決めよう』
「今日、このメールを送ろうと思ってたんだ。ダイチに先を越されたけどな」
息がつまったようになって、言葉が出なかった。他のみんなも黙っている。
「イサコがここに入って、まあいろいろあったけど、プラスのほうが多いだろ」
黒客のひとりひとりの顔を、ガチャギリは眺め渡す。
「思い出してもみろ。イサコが来る前の俺たちは赤字続きで崩壊寸前だったろうが。イサコの力があったから、俺たちはまた盛り返すことができたんだ。これからもそうやってスキルを上げて、資金をためていかなかったらじり貧に逆戻りだ」
私が聞いても、ガチャギリの言葉は事実だと思えた。イサコの来たおかげで黒客がこれまでになくレベルアップしたのは確かだ。
「お前の言ってんのはスキルか」
「まあ、突きつめていえばそうなるな」
「それがおかしいっての」
ダイチは声を荒げた。
「俺たち、大黒で文句なしのトップだぜ。もうがつがつする必要なんかねえだろ」
「お前は甘いんだよ。今トップだからってへらへらしてたら、あっという間に追い抜かれるぞ。自分たちの地位を守りたかったら、こ

れからもずっと最新の技術を手に入れ続けて、スキルを磨いてかなきゃならねえ」

ガチャギリはダイチに詰め寄る。ダイチは身をかわすと、

「暑苦しいぜ。大体スキルったってよ、イサコがいない時はいない時でなんとかなってたろ。何でもかんでもイサコにくっついてけば、それでいいのかよ」

「なんだ。ダイチ、イサコに嫉妬してんのか」

「そうじゃねえ。お前ら、そうやってイサコのいうとおりにしてるだけで面白いのか。いくらトップだって、自由じゃねえと思わねえのか」

「あのなあ、1度トップから滑り落ちた電脳クラブがどんな惨めなもんか、お前も知ってるだろ。すこしくらい不自由だって、黒客の地位を守るにはイサコについていくのが一番なんだよ」

「つまらねえ、卑屈な考え方だぜ。ガチャ、お前にはプライドってもんがねえのかよ」

「そんなもの邪魔なだけだぜ。世の中、力の強いやつの勝ちだ」

「まあまあ、ふたりとも落ち着いてくださいよ」

「そうよ。言い合ってるだけじゃ始まらないわ」

ナメッチとヤサコが言い合うふたりの仲裁に入った。

「とにかくお互いの意見はわかったでしょ。他のみんなはどうなの？　イサコは？」

「お前が仕切るな」

イサコはいつものようにヤサコに突っ込んでから、

「私の考えは、どっちかといえばガチャギリに近いな。私はもっと高度なスキルを手に入れたい。そのために、これからもパスワードを集めていくべきだ」

「本当にそれだけか」

低く落とした声でダイチが聞いた。

「なんだと。どういう意味だ」

「いや、なんでもない」

「ちょっとダイチ君、脱線しないで。イサコの意見もわかったわ。ナメッチはどう？」
「えっ、俺っすか？　俺は、その――、あ、アキラはどうだ」
「うわ、なんですかいきなり。僕だってまだどっちとも」
ナメッチとアキラは答えに迷っているようだ。視線が頼りなくあっちこっちを行き交っている。
「僕はダイチに賛成するよ」
いつもののんびりした声とは違った、はっきりとした口調で言ったのはデンパだ。
「そもそも僕はあんまりイリーガルをいじめたりしたくないし」
「あっ、デンパはダイチ派かあ」
ナメッチにはなんだか安心したような様子が見てとれた。
「なんだ、お前も向こうにつくのか」
「いっいや、まだ決めてはいないっす。でも、ガチャギリやイサコのいうことは確かっすけど、ダイチ親分にはその、なんつーか恩義があるっていうか」
イサコが少しうらやましそうな顔をしたのを、私は見逃さなかった。そう、ダイチの数少ない取り得のひとつは、親分肌で面倒見のいいところなのだ。そういう安心感が、もしかするとイサコには欠けているのかもしれない。
「ふん、2対2か」
ガチャギリが面白くなさそうに言った。
「どうするよ。決闘でもして決めるか」
「ずるいわ。それじゃイサコのほうが勝つに決まってるんだから」
「ず、ずるくはないだろう、実力なんだから。どうしてお前はそう、かちんとくる言い方しかできないんだ。大体お前が仕切るなと――」
「仕切らなかったら今の黒客じゃ何も決められないでしょ。頼りないんだから」
「おい、頼りないとは聞き捨てならねえぞ」
「いや、頼りねえな。だからもっと頼れるリーダーが必要なんだ」

「それはひどいよ。ダイチだって頼りがいがあるよ」
「とはいっても分裂状態なのも確かっすね」
「なんだよナメッチ。お前は一体どっちの味方なんだ」
「だ、だから決めてないってば」
これじゃ収集がつかない。なんか積もり積もったもやもやにいらいらが被さって、せり上がってくるものがあった。だから、
「あんたたち！」
私は怒鳴った。その途端にふっともやが晴れた。
「そんなふうにもめてたら決まるものも決まらないわ。ヤサコまで一緒になって何してんの」
「ご、ごめん」
ヤサコの腕を引っ張ってこっちに寄せると、私は木の枝を拾って地面に線を引いた。
「私が聞いてた分には、黒客は、もうみんなが元の鞘に戻るのは難しいわ。いっそのことふたつに分けちゃえばいいじゃない。元祖と本家とかさ」
「フミエ、お前こそ他人事だとおもって適当な……」
「待ってくれ、ガチャギリ」
イサコはガチャギリを手で制すと、皆の顔を見回した。
「こうなったらそれも考えかもしれない。どうしても意見が違うなら、無理に一緒にいなくたって」
「駄目だ、それだけは！」
叫んだのはダイチだった。下を向いて、見たことのないような真面目な顔をしている。
「俺たちは黒客を、せっかく苦労して立ち上げて、ここまで育ててきたんじゃねえか。ちょっと考え方が違うからって、簡単に分けていいとか、そういうもんじゃねえだろ」
「でも、それじゃまとまらないっすよ」
「わかってらあ。黒客を分裂させるくらいなら、俺が身を引く。イサコ、お前がリーダーになれ」

イサコの目を丸くした表情を見るのは、その時が初めてだったかもしれない。
「ダイチ、本当にいいのか」
「ああ。ただし、俺にもプライドがある。俺は黒客を脱退する」
「そ、そんな。ダイチがやめるっていうなら僕も……」
ダイチは両手を上げて、何かを押し返すような素振りをした。
「待て、デンパ。お前は残れ」
「ええっ!?」
次にイサコのほうを見て、
「脱退っつってもな、一時預けだ。たった今から、俺は黒客をイサコに預ける。だがな、俺は俺なりの方法で力をつけて、きっと戻ってくるぜ。その時はイサコ、お前と勝負して黒客を取り戻してみせる」
「はは、面白い。来るなら来い。こっちはいつでもOKだ」
ダイチの話を聞くうちに落ち着きを取り戻したイサコは、白い歯を見せて笑った。
「その言葉、忘れるなよ」
ダイチはイサコをにらみつけ、その後でこっちに向き直った。
「じゃあ、これからよろしくな」
「へ？　何が？」
満面の笑顔。
「決まってるだろ。同じコイル探偵局の会員としてだよ」

第１０話　君につながる道は　Ｄ　ｐａｒｔ（後書き）

第１０話は今回で終わりです。

第11話　盗むものたち　Ａ　ｐａｒｔ

小此木宏文のレポートによると、イリーガルには元々、姿も形もなかったそうです。

ダイチは時々突発的に頼れるやつになることがあるけど、基本ヘタレだ。その日もメガシ屋が近づくにつれて、

「おい、本当に大丈夫か」

「大丈夫って何がよ」

「あ、うーん、だからさ。今日会っていいのかとか、いきなり敵扱いされないかとか」

「会ったら駄目かもしれないし、入った瞬間にメガビーくらうかもね」

「おどかすなよ」

おどかしてはいない。メガばあのひねくれた性格を思えばそんな可能性は十分ある。けれどそれを言うとダイチのやつ、１歩も進めなくなるかもしれないから、私は謎の微笑ですがるような目つきをかわした。

「うう、俺なんだか緊張してきた。入会を断られたらどうすりゃいいんだ」

「アホ！　今からそんな想像しても意味ないでしょ」

それが今日の訪問の目的だった。成り行きで黒客をやめてしまったダイチを探偵局の端っこに滑り込ませるサルベージ作業だ。

「服装とか、これで良かったのかな。もっといいやつにしとけば……」

「うっさいわねえ。あんたいつもおんなじ恰好なんだから、それでいいのよ。さっさと行くわよ」

ダイチの腕をひっつかんで駆け足になる。

「まっ、まだ心の準備が。おい、フミエ」
「いいからさっさと来い」
メガシ屋の入口をくぐると、土ぼこりと古い家の匂いが混じった、懐かしいような空気が私たちを包んだ。特にエアコンも入れてないのに、しっとりと冷たい感じだ。
「あ、いらっしゃい」
番台からヤサコが首を伸ばした。
「ヤサコ、メガばあは？」
「奥にいるわよ。私は店番。夏休みだからけっこうお客さんが多くって、店を空けられないのよ。オジジも出かけてるし」
「ってことは、俺とフミエだけでメガばあにかけ合わなくちゃいけないのか」
ダイチが情けない声を出した。
「そうよ。どうぞ、ここから上がって」
「ほらダイチ、行くわよ。いいじゃん、ヤサコのひとりやふたり、いたっていなくたって」
「……フミエちゃん。それ、失礼」
とにかく、私たちは帳場の向こうのお茶の間に転がりこんだ。
メガばあはちゃぶ台の向こうで、古い時代劇を見ていた。画面から目をそらさずに、
「フミちゃんかの。ちょっと待ってくれんか。いいところなんじゃ」
ちょうどチャンバラの始まりだった。たったひとり敵の屋敷に乗り込んだ正義の味方が、見事な太刀さばきで悪人を、斬って斬って斬りまくる。
最後のひとりがそっくり返って派手に倒れたところで、メガばあは振り返った。
「さて、なんの用じゃったか」
声は優しいけど目付きがこわい。血刀をぶら下げたまま、剣劇の場から抜け出てきたような雰囲気だ。
ダイチはさっそく縮こまって、私の影に隠れている。とてもこい

つからは切り出せそうにない。仕方ないな。
「メールで送ったでしょ。ダイチを探偵局の会員にしてほしいの。こいつ、黒客を追い出されちゃったのよ」
「追い出されたんじゃねえ。こっちからやめてやったんだ」
威勢良く啖呵を切って、また隠れる。メガばあはそんなダイチに冷ややかな視線を送った。
「追い出されたにせよ出てきたにせよ、信用できた話ではないの」
「な、何だと」
「待ってよメガばあ。何が信用できないの」
デンスケが部屋に入ってきた。飼い主に似たか、相変わらずの空気読まなっぷりで、メガばあに体をこすりつけると、あぐらを組んだ足の上に飛び乗って丸くなった。猫みたいな子だ。
メガばあはデンスケをひとなで、ふたなでしてから、おもむろに口を開いた。
「そもそもじゃな、こやつが黒客を出る時に、わざわざフミちゃんやヤサコを呼びつけとるのがまず怪しい。仲間割れを印象づけるための策略とも考えられように」
「そんなこたねえよ。あれは、しっかりけじめをつけようと思っただけだ」
「うん、私も考えすぎだと思うけど」
ダイチの頭でそこまでは考えつかないだろう。イサコだって、そんな卑怯なやり方はしない。
「それだけではないわ。チビスケ、おぬし、慣れぬ匂いがするのう。ほれ」
デンスケを抱き上げてダイチの前に突き出す。と、デンスケはにわかに鼻をくんくんやり出した。口を開けずにくうと鳴いて、じっとダイチを見つめている。
「そっ、そりゃ俺は滅多にこの店には来ねえからな。デンスケも気になるさ。なあ、フミエ」
ダイチは妙にオーバーアクションで話す。怪しい。これは私の勘

だけど、こいつ、何か隠してる。
答えない私の顔をひと目見てからメガばあは、
「ふん、まあよかろう。おぬしを探偵局に加えてやらんこともない」
「よっしゃ！」
「本当に!?　ダイチ、よかったじゃん」
私たちは思わず顔を見合わせ、その後で照れくさくなって下を向いた。
「まあ待て、ふたりとも。当然じゃが、入会には条件があるぞい」
「え？　条件って」
「おぬしの忠誠心をためさねばならん。方法は簡単じゃ。メタバグ3千メタ分、3日で集めて持ってくるんじゃ」

3千メタといえば、子供にとってはひと財産だ。空間が不安定な、メタバグの生まれやすい場所で1日ねばって、大体5百メタってとこだろうか。ヤサコやハラケン、カンナも動員すれば不可能な数字じゃないけど、場所選びが難しい。黒客や他の電脳クラブの縄張りじゃなく、サッチーの巡回も少なく、それでもって古い空間のできやすいところを探し回るうちに、早くも夕方になってしまった。
「まずいわねえ。今日のうちにいい場所を見つけて、明日とあさってでけりをつけようと思ってたのに」
私はぼやいた。重たくなった足を引きずって帰り着いた家の、机を前にしてだ。
探索スポットが見つからなければそれだけ、メタバグ探しに当てられる時間も限られる。ダイチの探偵局加入も遠のいてしまうわけだ。
「お姉ちゃん、悩みごとなんて珍しいね」
それこそ珍しく、アキラが気遣うような素振りで声をかけてきた。
「何よあんた。他人ごとみたいにいうけど、あんたたちがダイチを追い出すから私たちが苦労してんのよ。あんたにも責任あるんだから」

「で、でもダイチさんとイサコさん、ここのところずっとかみ合ってなかったし、ああなるのは必然の結果だったと思うよ」
冷静に言うのがまた神経に触る。
「なーにが『必然の結果だった』よ。要するに言い訳でしょうが」
私が椅子から立ち上がる前に、アキラはもう背を向けていた。ベランダに飛び出すのをすぐ後から追う。地平線に近づいて形を崩した夕陽が、目をオレンジ色に閉ざした。
「あっ、きれい」
見慣れたはずの町の光景がくっきり朱色と黒に染め分けられて、黄昏なのにみずみずしい。なんだかアキラを追いかける気持ちも消えて、私はそこにたたずんだ。
じっと見つめていると、夕映えは少しずつ面積を減らして、その後を闇が覆っていく。なくなってしまうのはもったいないけれど、この眺めは1日のうちの今しか見られないからこそ、こんなにきれいだと感じるのかもしれない。
ふと、異質なものが目の端に映った。ここから歩いて5分とかからない、土手沿いの空き地だ。そこだけ、朱と黒の景色から隔てられたように白いもやに覆われている。
「電脳霧だわ」
しかも濃い。ってことは、古い空間が大規模に発生しているはずだ。もちろん、メタバグも。

「――ってわけ。灯台もと暗しよ」
「そうなんだ。……よかったわ。さっそく……探しに……」
別に電波状態が悪いわけではない。
「ヤサコ！　ヤーサーコー！　寝るんじゃない」
「……うう。だってフミエちゃん、まだ6時前だよ。ラジオ体操だって7時半からなのに」
「駄目ねえ。早起きは3文の得っていうでしょうが。私なんか、もう家を出てる、っていうかもう目の前に来てるんだからね。この霧

の濃さなら絶対期待できるわ。朝から探せば1日で3千メタ集まるかもよ。――って、ヤサコ、ちょっと、聞いてんの」

「聞いてるような、夢幻に遊んでるような」

「あんたねえ。とにかく、ラジオ体操終わったらこっちに来てね」

「ラジャー。おやすみ」

まったくもう。先に電話したダイチといいヤサコといい、頼りにならないことはなはだしい。ハラケンとカンナも用があるっていうし。

こうなったら私だけでも先に探し始めて、メタバグを集めておこう。

まず最初にメガネを外して、現場をチェックした。特に珍しくもない、草ぼうぼうの空き地だ。ここら辺一帯は、元は古い家が立ち並んでいたのを、再開発計画が持ち上がって一斉に整理したって聞いたことがある。その結果できたのが今私の住んでいるマンションや、近くに立ち並ぶきれいな建売住宅だけど、どうやらこの空き地だけは権利関係でもめて宙ぶらりんのまま放置されていたらしい。一応個人の土地だからサッチーは入ってこられないし、空間の整備もなんとなく後回しにされているのだ。

特に危なそうなものもなかったから、私は空き地に踏み込んだ。生い茂る雑草はほとんどがひざ下までのやつだ。これがセイタカアワダチソウなんかだと、私の場合特に行方不明の危険があるんだけど、その点でもひと安心だ。

草をかき分けて探すこと数分、さっそく最初の1個に出会った。換金サイトで調べると30メタの安物だったけど、とにかくメタバグがあるってことははっきりした。

「よっしゃ、気合入れて探すかあ」

と、見回すまでもなく光るものが目に映った。ほんのすぐそこに、同じメタバグがもう1個落ちている。

「ラッキー」

そいつも拾い上げたら、さらにもう1個。入れ食いだ。もしかし

て、久しぶりの鉱脈発見だろうか。
空き地の奥に進んでいくと、霧がぱちっと音を立てて、ノイズが走った。バージョンはかなり古い、5・18。空き地の入口は5・20だったから、奥まるにつれてバージョンも下がっていくようだ。当然、メタバグも見つけやすくなる。
30分探して、メタバグは7個見つかった。数は十分だけど、どれも大して価値のないやつなのが悔しい。
「もっとレアなのが欲しいわね」
つぶやきながら、私は空き地の奥を眺めた。メガネをかけたままでは霧が深くて何も見えない。ちょっとこわいけど、ハイリスク・ハイリターンってやつか。
メガネのサポート情報を確かめる。大丈夫、メガネが故障するほどの古い空間ではない。
「よし、行ってみるか！」
自分を励ますつもりもあって、私は大声を上げた。風が渡って、草が手招きするように揺れた。
歩き出すとすぐに、古い水道の蛇口に行き当たった。昔、家が建っていた頃の名残だろう。ためしに蛇口をひねってみたけれど、当然水は出なかった。
地面をよく見ると、草の間にところどころ、まっすぐに土地を仕切ったコンクリートの残骸みたいなものがある。
「お邪魔しまあす」
なんとなく気がとがめる思いがして、一応そう言ってから奥に向かった。
意に反して、メタバグはなかなか見つからない。いかにもありそうな雰囲気なのに、おかしいな。もしかして、誰かに先を越されたのだろうか。
突然、すぐそばの草むらががさっと動いた。
「うわっ」
情けなくも、私は尻もちをついてしまった。と、飛び出してきた

のは黒猫だ。こっちを見て赤い口を開け、けれど鳴かずに走っていった。

「び、びっくりした」

心臓がばくばく言っている。そういえば私、お化け屋敷とか苦手だったんだ、ってしまった、いらないことを思い出してしまった。こわいと思えば空間のノイズも草の風になびくのもみんなこわい。

「えーと、一旦戻ってヤサコたちを待とうかしら」

私はそろそろと立ち上がった。けれど後ろは向かなかった。視線が前方に釘付けになったからだ。

「あれ、見たことない」

ほんのりと夕焼けの色で輝く、宝石のようなメタバグだった。急いで換金サイトを調べるが、一致するものがない。

「もしかして、本当のレアもの？」

急にノイズが大きくなった。

「よ、よし。あれだけ拾って帰ろう」

1歩進むごとに足元で歪んだ走査線がざわめく。新しい空間に属する私の体と、古い空間にある地面の間でエラーが起きているのだ。映像が少しだけ不鮮明になった。空間ではなくて、私のメガネのせいだ。サポート対象外の古い空間にかなり近づいているのだろう。けれど、メタバグはもうすぐそこだ。

それ以上は進まないようにして、屈みこんだ私は思い切り手を伸ばした。ぎりぎり届かないのをさらにもうひと踏ん張りして、中指で引っかけてなんとかつかみ取る。やった！

「もらった！」

どうしてか、私の声は私の後ろで響いた。

私はゆっくりと後ろを振り向いた。そして悲鳴を上げた。

悲鳴は聞こえなかった。

第11話　盗むものたち　Ｂ　ｐａｒｔ

着信設定を終えた俺は、ベンチに座る人影に声をかけた。
「すまねえ。話の続きだ」
タケルはほこりっぽい石のベンチから立ち上がって、ズボンについた砂を丁寧に払った。
「まずメタバグだけど、どうだ」
「ごめん。そっちは無理だ」
ひどくあっさりと言い切って、俺の答えも待たずに、
「急に熱心にメタバグ集めなんか始めると、兄ちゃんに怪しまれる。知ってるだろ、兄ちゃんは空間管理室勤めなんだ」
「待て。兄ちゃんってのは、猫目宗助さんだろ。探偵局の会員じゃねえか。どっちにしてもいつかお前のことはばれちまうんじゃねえのかよ」
「ああ。でも、その時期はなるべく遅らせたい。兄ちゃんは立場上、僕が君たちと関わるのを止めようとするはずだ。だから、そうできなくなるまで、つまり、僕が探偵局に欠かせない存在になるまでは、兄ちゃんには気づかれたくないんだ」
タケルは少し寂しそうに語った。俺には兄弟がいないから本当のタケルの気持ちはわからないけど、せっかく兄貴がいるのにうまくやっていけないってのはかわいそうだとは思う。
うつむいて喋る姿がなんか陰気な感じで、こっちにまでくさくさした気分が伝染ってくるみたいだから、それを振り払うように俺は空元気をふりしぼった。
「わかったわかった。わかったからそう景気の悪い顔するなよ。メタバグはなんとか俺たちで集めらあ」
「本当に悪いね。そのかわり、もうひとつのほうは最大限協力するから」
ベンチの上に、俺の渡しておいたツールが並んだ。

「どれも見た目は変わらねえんだな」
「いかにも改造しましたって形だと目立つだろ。最初のうちは普通のツールに混ぜて、ここぞって時に使うんだよ。そうやって、少しずつ使用量を増やしていけばいい」
ミサイルをいじくりながら、タケルは答える。外見は普通のホーミングだが、スピードと小回りが大幅にアップした『新・追跡君（改）β』だ。
「面倒くせえなあ。まあやれってんならやるけどよ。でも、そんなせこい隠し方で大丈夫か。宗助さんが見たら、お前の改造ツールだって一発でばれちまわねえのかな」
「そこは心配ない。これはあくまで、一般に流出してるチートコードから作ったものだから。出所の特定は不可能だよ」
「お前、本当にすげえな」
ひと口にメガネ使いといったって、得意なスキルに応じて、俺やフミエみたいにいつも最前線に出る実戦派もいれば、アキラやデンパのように、積極的に表には出ないで偵察や後方支援、ツール作りを受け持つ補給部隊もいる。俺の知る限り、両方の力を持った最強のオールマイティは、悔しいけれどイサコと認めなくちゃならない。でも、下手するとそんなイサコですら、ツールの開発だけについてなら、タケルに1歩遅れを取っているようにさえ思える。
こんな力を持ったやつが、どうして今まで知られてなかったんだろう。
「電脳クラブに入るのはさ、兄ちゃんが許してくれなくて。そりゃそうだよね、取り締まる側の弟が取り締まられる方じゃ、恰好がつかないよ」
俺の心を読み取ったように、タケルはつぶやいた。
ハラケンとオバちゃんだって似たようなものだけど、タケルの場合、兄貴といろいろしがらみがあるのだ。でも待てよ、そんなやつがどうして急に俺たちに協力する気になったんだ？
だがその疑問が言葉になる前に、電話が鳴った。ヤサコからだ。

「もしもし。どうした、集合は8時半だろ。まだ30分もあるじゃねえか」
「違うわよ！」
ヤサコは半分悲鳴みたいな声を上げた。
「フミエちゃんから何度も電話があったでしょ」
「ああ、あったけどさ。全部無言電話なんだよな。電波状態が悪いのか、なんかの嫌がらせかわかんねえけど、うざったいから着信拒否にしたとこ」
「バカっ！　メール見なさいよ、メール」
ヤサコのやつ、何を慌ててるんだろう。
「わかったわかった、ちょっと待て」
メールボックスを開くと、フミエからの新着メールが10件近く入っていた。
「なんだこれ」
「のんきに構えてる場合じゃないわ。フミエちゃんが大変なの。とにかく急いで集合場所へ来て」
言うだけ言って、電話はぶつりと切れた。
「どうしたの？」
興味深そうにタケルが声をかけてくる。
「悪い、探偵局の小此木ってやつからだ」
「小此木って、ヤサコって子？」
「なんだ、お前知ってたのか」
「あ、ああ。ちょっとね」
タケルは目をそらして鼻の頭をかきながら言った。
「お前、意外と情報早いのな。まあいいや、メールは、と」
とりあえず最初に来たメールを開く。タイトルは……『声が出ない』？　なんだ、あいつ風邪でもひいたのか。
『どうしよう。例の場所でメタバグ探してたらイリーガルがいて、声が出なくなっちゃった』
意味がわからない。イリーガルに驚いて喋れなくなっちまったっ

てことか。気丈なフミエが腰抜かすようなすげえのが現れたんだろうか。

その後のメールはああしても声が戻らない、こうしても無理、とそんなので埋め尽くされていて、最後のやつは『とにかく早く来て』で終わっていた。

「タケル、すまねえ。なんかやべえことが起きてるらしい。俺、フミエんとこ行くわ。お前も一緒に来るか」

タケルは首を振った。

「悪いけどやめとく。君以外のメンバーの前に正体を明かすのは、もう少し先にするよ」

「そうか。じゃあ俺は行くぜ。すまなかったな、朝から」

「こっちこそ」

俺は身をひるがえした。

タケルと話していた時はそれほどでもなかったんだけど、ひとりで走るうちに、俺はだんだん不安になってきた。

まず第1に、声が出なくなったなんて話、今までに聞いたことがない。声紋は認証ロックに広く使われてるくらいユーザーにオリジナリティの高い情報だから、当然セキュリティもかなりがっちりと固められている。並大抵のスキルでいじれるものじゃないのだ。

第2に、フミエの反応。勝気なあいつが、人にすがりつくようなメールを送ってきてるってことが、俺を心細くさせた。これは誰にも言ってないけど、本当の本当、電脳スキルだけなら、フミエは俺より上だと思う。コイル探偵局に入る時、俺の心の中に、フミエに頼る気持ちがなかったといえば嘘だ。それなのに――

集合場所、つまりフミエのマンション近くの空き地には、フミエとヤサコ、それからもうひとつ、この場にそぐわない人影があった。

「マユミ？　どうしてここに」

「どうしてとは失礼ね。橋本さんに呼ばれたのよ、電話で」

俺は急いでフミエに向き直った。

「フミエ、声が戻ったのか」
フミエは首を左右に思い切り振って、金魚みたいにぱくぱく口を開け閉めした。
「声はまだ戻らないの。誰かがフミエちゃんのふりをしてるらしいのよ」
ヤサコがフミエの代わりに言った。
「それでね、マユミちゃん、そういう都市伝説を知ってるんだって」
「ええ」
マユミの顔から笑みが消えた。
「なんだお前。いつものうふふはどうした」
「残念だけど笑ってる場合じゃないの」
思いの外硬い声で、マユミは答えた。
「これも最近ネット掲示板で見るようになった都市伝説なんだけど、『盗むもの』の話。知ってる？」
そこで俺たちの顔を見渡す。誰も応じないのを確かめて、マユミはまた話し出した。
「イリーガルっていろんな形をしてるじゃない。でもそれっていうのは、ほとんどが借り物なんだって。本当は形なんてないものが、ヤドカリが貝殻を借りるみたいに、廃棄された空間の中から自分に合う形を選び取ってるらしいわ」
「それとフミエとどう関係あるんだよ」
「わからない？　借りるっていうところよ。普通のイリーガルはさっきいったとおり、もはや現実世界にはない古い空間から自分の形を見つけている。これならいいわね、別に私たちに迷惑がかかるわけじゃなし。でもイリーガルの中にはそうではない者もいる。今現実に機能しているものからしか、自分の形を作り出すことができない者たちが。それが『盗むもの』よ」
まさか、フミエの声が。
マユミは俺の目を見てうなずいた。
「そう。多分今は、盗み取った橋本さんの声がちゃんと使えるか、

確かめてるんでしょうね。でも、事はこれだけじゃ収まらない。イリーガルが奪うのは声だけじゃない。声がうまくいったら次は体、体の次は心。そうしたらもうおしまい」

「バっ、バカ言わないでよ」

かばうようにフミエの前に立って、ヤサコが声を張り上げた。

「わけわかんないわ。そんな簡単に体を取られたりしないわよ。それに心って何。最悪、体を取られたって電脳だけじゃん。メガネなしで暮らせばなんとかなるわ」

「駄目なの。体をすっかり奪われたら、心は”あっち”に行ってしまうの。掲示板にあった話だと、体を取られた子供は植物状態になって、2度と目を覚まさないって」

「そんな!?」

ヤサコとフミエはおろおろして顔を見合わせた。そんなふたりを見て、俺はなんだか無性に腹が立った。

「バカヤロ、まだそうと決まったわけじゃねえだろ。マユミ、教えてくれ、声を取り戻す方法。あるんだろ」

「イリーガルから返してもらうしかないわね。具体的にどうやるのかは知らないけど」

「知らないって……私たちどうしたら」

ほとんど涙声になるヤサコに、俺は言った。

「おい、泣いてたって始まらねえぞ。まずヤサコ、お前はメガばあに連絡だ。いいメタタグかなんかないか、聞いてみてくれ。それからオバちゃんにも頼む」

「わ、わかったわ」

ヤサコは慌てて電話帳を引っぱり出す。

「それから、マユミ、家に戻って掲示板を調べてくれ。何か有効な情報があったら連絡頼む」

「私は探偵局とは関係ないけれど、橋本さんのためならそれくらい協力するわ。おどかしがいのある友達が減ったらつまらないもの」

マユミはぺろっと舌を出してから、しっかりうなずいて走り去っ

た。
「さて、後は」
俺は大黒市の電脳マップを広げた。空間の情報がリアルタイムで反映され、新しいところは青、古いところは赤の濃淡で示される、かなり精巧な地図だ。これも実は、タケルからのもらいものだ。
マユミの言ったことが正しいなら、イリーガルは必ず、フミエの体を盗みとるために再び現れる。それならば、メガばあやオバちゃんの応援を待って準備万端整えた上で、古い空間で待ち構えたほうがいい。
「どこだ、古い空間の出現地帯は」
フミエが地図の1点に、とんと指を置いた。
前言撤回。準備してる暇はねえ。
四角く真っ赤に染まったそこは、フミエのマンションだった。

第11話　盗むものたち　C　part

マンションのエントランスにはフミエちゃんとダイチ君が待っていた。
「やっと来たな」
「オバちゃんは捕まんなかった。夏期講習みたい。オババに言ったらオジジとも連絡して調べてくれるって」
ふたりの緊張が少しだけゆるんだ。状況の進展はないけれど、オジジとオババへの信頼はあついらしい。
「大丈夫よ。あのふたりが協力したら解決できないことなんてないって」
これまた何の根拠もないけれど、フミエちゃんの不安を紛らすためにそんなふうに言って、いつもよりなお小さく見える肩をたたく。
『ヤサコ、あんた友達がいあるわ』
「いつも頼ってばかりだからね、たまには。それからこれ」
前髪を上げておでこにメタタグを張りつける。
「ウィルスの進行を止めるタグだって。イリーガルに対しては防壁になるはずよ」
感謝の気持ちを表したいのだろうけど、リアクションの取り方に迷った後、フミエちゃんはぺこぺこ何度も頭を下げた。ちょっと気分がいい。ダイチ君もうらやましそうにしている。
しばらく胸を張っていたら、ダイチ君がしびれを切らした。
「おい、お前ら遊んでる暇はねえ。さっさとフミエの家へ――」
フミエちゃんはダイチ君の頭をぽかりと殴った。
「いっ、痛え！　何すんだ」
『遊んでない』
「んなこたわかってるよ。言葉の綾ってやつでだな」
またこぶしを握ったのを見て、ダイチ君は駆け出した。
「とにかく現場だ、現場」

フミエちゃんは腕を振りながら追いかける。待ってよちょっと、と慌てて私も続いた。

玄関までは別段いつもと変わったところもなかった。けれど、ドアを開けた瞬間メガネが警告音を立てた。うおっと叫んでダイチ君がのけぞる。

『侵入しないでください。管理対象外の空間です。メガネに不具合が起こる可能性があります』

真っ赤な文字が目の前に表示された。

「な、なんだこれ。今までは古い空間に入ってもこんなことなかったぞ」

「あ、それ確かオバちゃんが言ってたわ。近頃古い空間が増えすぎてサッチーの処理が間に合わないから、警告機能を付けたって」

「くそっ、余計なことやらかしてくれるぜ」

メールが届いた。ダイチ君がＴＯ、私はＣＣだ。

『ビビった？』

さっきまで泣きそうだったのに、フミエちゃんはだいぶ余裕が出てきた。

「ビビってねえよ！」

ダイチ君が肩をいからせて警告を消去していると、また。

『うそ』

「嘘じゃねえ！　うざってえな、そんなのいちいちメールにすんな」

ダイチ君はフミエちゃんをにらみつけ、大またで玄関に上がり込んだ。

「あ、ダイチ君待って。この先何があるかわからないから慎重にね」

「大丈夫だよ心配すんな――」

がちゃりと大きな音がして突当たりのドアが開いた。ダイチ君、フミエちゃん、私、３人全員がその場に凍りついた。

「あれ？　お姉ちゃん」

ややあってひょいとのぞいた顔はアキラ君だった。

「おい、おどかすなよお前。心臓止まるかと思ったぞ」
ダイチ君は大げさに溜息をつく。
メールが届いた。
『ビビった？』
「うるせえ！　フミエだってビビっただろうが」
『まあ立ち話もなんだから上がってよ』
「スルーかよ」
アキラ君が首をひねった。
「お姉ちゃんたち、コントの練習？」
「コントじゃねえ！」
『コントじゃない！』
ふたりの息は絶妙だ。吹きそうになったけれど、笑ったら絶交されるかもしれないので歯を食いしばった。
「とにかく上がらせてもらうぜ」
真顔に戻ったダイチ君が廊下の奥に進む。
「あっ、どうぞどうぞ」
アキラ君が開けたドアから、私たちはリビングに入った。ざっと見渡したけれど、リビングの様子もいたって普通だ。
私は聞いてみることにした。
「アキラ君。さっき、メガネ変にならなかった？」
「なりましたよ。急に空間のバージョンが下がって、警告が出て。でも、お姉ちゃんが大丈夫だって言うからここにいたんですけど」
「えっ、ちょっと待って。フミエちゃんが言った？」
「ええ」
アキラ君はけげんな顔で私たちを見回した。ダイチ君がもっとけげんな顔で、
「そりゃおかしいぜ。フミエはついさっきまで俺たちと外にいたんだ」
「ええっ！？」
目をまん丸に見開いてアキラ君はフミエちゃんを見つめ、その後

で視線をそろそろと横にそらした。アキラ君の目が向いているのは子供部屋のドアだ。

「だ、だってさっき確かに部屋から『大丈夫よ』って声が聞こえたし。それに、そのちょっと前には玄関で『ただいま』って言ったよねお姉ちゃん。ねえお姉ちゃん」

アキラ君に詰め寄られたフミエちゃんは、うっかり忘れたか本当に言葉がないのか、口をぱくぱくしてばかりだ。

「きっとイリーガルの仕業だ。気をつけろ」

声を低くしたのはダイチ君だ。

「イリーガル！？」

「事情を説明してる暇はねえ。お前たちの部屋を調べるぞ」

言うなりウェストポーチからミサイルを何発も取り出し、何もない空間にほうり投げる。投げ出されたミサイルは空中で回転しながら、ドアの前に進むダイチ君の周りに集まった。

「ねえダイチ君。声を取り戻す方法、マユミちゃんは『イリーガルに返してもらう』って言ってたでしょ。やっつけちゃったらまずくない？」

「わかってら。威嚇だ、威嚇。ミサイルでひるませて、電脳投げ縄で捕まえてやる」

ポーチを探りながらダイチ君は答える。

「それよりお前らも援護、頼むぜ」

「あっ、うん」

私とフミエちゃんは目でうなずき合って、いつでも撃てるようにメガビーを構えた。

「準備いいな。一、二の、三で開けるぞ」

「大丈夫」

「ＯＫですっ」

アキラ君も事情がわからないなりに、ほうきを振りかぶって臨戦態勢だ。声が震えてるけど。

「よし、一、二の」

思わず手に汗がにじむ。
「三！」
ばん！　とダイチ君が扉を開け放つ音。
「わあああっ！」
目の前で何かがなぎ払われた。
「ぎゃっ」
「いやあ！」
これは私の悲鳴だ。何が何だかわからず、床に投げ出されたものに必死でメガビーを発射した。
ミサイルの爆発音。データの壊れる音。空間のきしむノイズ。音が部屋に飽和している。その中に、フミエちゃんの声は聞こえない。半分パニックだったにかかわらず、私の心はどこか冷静に、音の中から人の声を拾おうとしていた。
――ツケテ――
どきりとした。
女の子の声だ。フミエちゃんの？
――ミツケテ――
違う。もっと年下の子の声だ。
――私を見つけて――
今度ははっきりと聞こえた。
――私を見つけて、私を止めて。私の心が寂しがって、ひとりで出ていってしまうから――
この子は。
「誰なの」
知らず知らず、手を伸ばしていた。
――私は――
「やめろ！」
大声が全てをかき消した。我に返ると、ところどころ煙を上げてはいるもののいつもと変わらない部屋、フミエちゃんとアキラ君の姿……あれ？

「ダイチ君は？」
「どけよ」
床が動いた。飛びのいて反射的にメガビーを構えた私に、
「やめろって！　いい加減にやめてくれ」
「なんだ、ダイチ君」
「なんだじゃねえよ。お前ら見境なく撃ちまくりやがって」
ところどころにノイズを走らせながらダイチ君は立ち上がった。
「すみません。僕がほうきを振り回したのがいけなかったんです」
アキラ君が深々と頭を下げる。
『私も早まった。ゴメン』
そう書かれたメモ帳をフミエちゃんもこっちに見せた。
「イリーガルは？」
私はまだ事情が飲み込めていなかった。
「見なかったのか。部屋の奥にショートカットが開いてて、逃げちまったよ。追いかけようとしたらアキラが俺の頭をほうきで殴りやがったんだ。で、すっ転んだ俺にヤサコとフミエがメガビー食らわしたわけ」
「え――そ、それは、ごめんなさい」
「ったく。強力なプロテクトをかけといたからこれくらいですんだけど、普通ならメガネ壊れてるぜ」
お手上げのポーズで首を振ったダイチ君の肩を、フミエちゃんが軽くたたいた。
『そのプロテクト、どこで手に入れたの』
「さっ、さあな。どこの電脳駄菓子屋だったか。それよりもイリーガルだ。家の外には行ってないはずだぜ」
ダイチ君はわざとらしく話題を変えて身をひるがえした。

アキラ君に事情を話してから、４人で手分けして探したけれど、イリーガルは一向に見つからなかった。お風呂やトイレを含めた部屋べやはもちろん、押し入れ、たんす、冷蔵庫に下駄箱までおおよ

そ考えつくありとあらゆるところを調べたのにだ。
　同じところを何度も見て回っているうちに、少しずつ緊張も薄れてくる。部屋に入ってざっと眺めてよしＯＫって、ああこれダメじゃんと思った瞬間に、お腹がぐうとなった。
「そろそろお昼かしら」
　フミエちゃんの家に入った時から、空間のせいか時計がおかしくなって、正確な時間はわからない。
『ちょっと休もうか、お腹もすいたし。リビングへ集合』
　ちょうどいいタイミングでフミエちゃんからメールが入った。やっぱりお昼なんだなと思いながら廊下に出ると、向かいの部屋のドアが開いて、ダイチ君とはち合せになった。
「イリーガル、どうしちゃったんだろうね」
「くっそー、おかしいなあ。古い空間はフミエの家の外には広がってないのに」
　電脳マップを広げながら、ダイチ君も首をひねる。
「変ねえ」
　相槌を打ってリビングへのドアを開いた私を、窓から朱の光が照らした。
「うそっ、もう夕方！？」
　そんなに時間が立った気はしないのに。
　私は窓に近寄った。夕陽は見えない。均一な黄昏が空を染めて、晴れなのか曇りなのかもよくわからない。
「待て、ヤサコ。見ろ」
　ついてきたダイチ君が腕時計を見せてくれた。アナログ時計なんてファッション以外の意味はないだろうと思ってたのに、どこでどんな役に立つかわからない。
「１２時半。やっぱり私たちの感覚のほうが正しいんだわ。じゃあれは」
「古い空間ですね」
　振り返ると、フミエちゃんとアキラ君も後ろから夕焼けを見てい

た。
「そんなバカな。電脳マップが壊れたのか」
『外に出てみよう』
フミエちゃんはメモを見せると振り返って玄関に向かう。私たちは慌てて後を追った。
玄関を抜けた外から見える空も同じ、どこまでも、いつまでも続くような夕映えだ。
「おい、どういうことだよこれ。町中が古い空間に包まれちまったみてえじゃねえか」
予感が心を走り抜けた。
「みんな、一旦リビングに戻って」
「いきなりどうしたんだよ。おい、ヤサコ」
「いいから！」
真剣さが通じたか、半信半疑の顔ではあるけれど、みんなはついてきてくれた。
廊下の奥のドアを開ける時には、予感はほとんど確信にまで育っていた。だから私は驚かなかった。
リビングでは黒々とした体が４つ、「Ｎｏ　Ｄａｔａ」の表示を浮かび上がらせていた。
「電脳体分離してる……」
アキラ君が呆然とつぶやいた。
「つまりここは」
「”あっち”よ」
私は答えた。その声はまるで私ではないようだった。

第11話　盗むものたち　Ｄ　ｐａｒｔ

フミエは落ち込んでいた。
電脳体分離だけなら、これまでにも何回か経験がある。だからそうなったことより、それがフミエの家で起こったことがショックだったんだろう。
「ダイチ君」
軽く背中をつつかれて振り返るとヤサコだった。
「なんだよ」
「励ましてあげて」
「俺が？　どうして」
「友達でしょ」
「お前もだ」
「ごめん、私よくわかんなくて。いつもフミエちゃんに元気づけられるほうだから」
ヤサコはバツが悪そうに答えた。
「お願い」
あいまいに頭を下げて、それでも言いあぐねていると、後ろから背中を押された。
「うおっと」
『なによ』
俺の影がフミエの顔を黒く染めた。電脳体分離してても影ってあるんだな。
「ああ、あれだ」
『だからなに』
「元気出せ。俺がなんとかするから」
フミエは最初ぽけっと俺の顔を見て、次の瞬間無言で笑い出した。
「おっ、おい」
返事もせずに、フミエは体をくの字に折って笑い続けている。

「ヤサコ、何だこりゃ」
困ってヤサコを振り向くと、
「おもしろかったのよ、きっと」
にべもない。俺はますます困ってしまった。すると、ヤサコの手が俺の後ろを指した。
「大丈夫、もう回復したみたい。さすが幼馴染みね」
「へっ？」
フミエは何事もなかったように突っ立っていた。
『何してるの。早く脱出の方法を考えなくちゃ』
俺はからかわれてるのか？
「フミエちゃん、イリーガルはこの世界のどこかにいるはずよ。出る前に探しましょ」
「待ってください。それこそイリーガルの罠かもしれない」
アキラがヤサコを止めた。こいつら、思い悩んでる俺を置いて勝手に進んでしまう。
「私はここでイリーガルを探すべきだと思うわ。たとえちょっと危なくても」
「リスキーすぎますよ」
『ダイチはどう思う？』
珍しく、フミエは自分の意見を言わずに俺を見た。
それがさっきの言葉への答えだと気がつくのに少しかかった。でも気がついたらもう俺の心は決まっていた。
「行こうぜ。イリーガルを探しに」

玄関先から見渡す大黒の町は、さっきと変わらず一面夕焼けに照らされていた。
「探すったってどこを？　イリーガル1匹見つけ出すのに、町中調べ回るんですか」
アキラはイリーガル探索には反対の立場をひるがえそうとしない。
「近くにいると思う。イリーガルの狙いはフミエちゃんなんだから、

離れたりしないはずだわ」
　メガビーの残り秒数をカウントしながらヤサコが答えた。
「でもそれって、お姉ちゃんを囮に使うってことじゃないんですか。危ないんじゃ」
　言いつのるアキラの肩に、フミエが手を置いた。
『私はいい。こんな中途半端のままでいたくない』
「アキラ、イリーガルを探すってのはもう決まったんだ。すまねえが腹くくってくれ」
　我ながら低くて落ち着いた声が出た。それでアキラも、しぶしぶながらうなずいてくれた。
「じゃあまずはこのマンション内を探しましょ。上から行く？　それとも下から」
「下からにしよう。もしイリーガルを見つけたら上に追い立てる。上へ上へと追っていけば追い詰められるぜ」
「わかりました」
　エレベーターに向かって駆け出すアキラに、
「待て、エレベーターはまずい。イリーガルに細工されてるかもしれねえからな。階段からにしとこう」
「さすがダイチ君は実戦慣れしてるわね」
　ヤサコの言葉はお世辞だけでもないように聞こえて、俺はまんざらでもなかった。

　2階まではなんの問題もなく進むことができた。異変が起きたのは1階への階段を降りようとした時だ。
　先頭を進んでいたアキラがあっと叫んで飛びのいた。
「いたか！」
　ミサイルを引っつかんでアキラを押しのける。
　階段の下には何も見えない。
「いないぞ、逃げたか」
　進もうとすると、服を引っ張られた。

「イリーガルじゃないんです。階段のところで視界が変になって」
「なんだと」
「ちょっと待って」
ヤサコがウィルスチェッカーを取り出す。小此木先生のお手製だろう、ラジオにパラボラアンテナがくっついたような、古めかしい見た目だ。
パラボラをアキラに向けて5秒くらいでラジオにくっついた電球が青く光った。
「陰性だわ。ウィルスとかじゃないわね」
『行ってみよう』
間をおかずに出てきたところを見ると、フミエは台詞をあらかじめ準備していたらしい。普段から多い口数をふさがれた分、余計にうずうずしているんだろう。
「よし、俺から行く」
念のためプロテクトのレベルを最大まで引き上げて、俺は階段を1歩降りた。
一瞬で、マンションの景色が消えた。
喉元まで込み上げた叫びを抑え、俺は辺りを見回した。
どうやら、古い洋館らしい。俺がいるのは、広い玄関エントランスに降りるらせん階段の一番上の段だった。
やや薄暗いけれど照明がついているから、見通しは悪くない。人の姿は見えない。もちろんイリーガルも。動くものは何ひとつなかった。
そこまで確かめて、俺は降ろしていた足を上げた。と、さっきまでのマンションだ。フミエとヤサコが顔を並べて俺をのぞき込んでいる。
「ダイチ君、何があったの？　いきなり固まって」
「……見てねえのか」
『何を？』
「ダイチさんもやっぱり変になりました！？」

アキラが勢い込んで訊ねる。俺は少し考えて、ゆっくりうなずいた。

『何があったの？　教えてよ』

「お屋敷があった」

「はあ！？」

「階段の向こうが別の空間につながってる。ショートカットの親戚みてえなもんだろうが」

『私、行ってみる』

待てと止める暇もなく、フミエは階段を駆け降りた。踊り場で折り返して姿が見えなくなる。

「あいつ、慌てやがって」

「もう行くしかないわね」

俺たちもフミエに続いて異空間に飛び込んだ。

『ここ、知ってる』

フミエはらせん階段の下で俺たちを待っていた。

『六角屋敷よ』

俺とアキラは顔を見合わせた。

「ロッカク？　六角形なの？」

事情を知らないヤサコが間の抜けた声を上げる。

「違います。ヤサコさんは転校生だから知らないでしょうが、僕たちの家のあるマンションは昔、『六角』という一族の土地だったんです。六角氏というのは元々大黒を治めていた大名で、明治維新で華族になった名家です。けれど徐々に落ちぶれて、最後はお屋敷とわずかな土地を売って大黒を離れたそうです」

不動産屋の手に渡った屋敷は買い手がつかず、何年もの間朽ち果てるままに放置されていた。「幽霊屋敷」の噂が立って近づく人もいなかったのが、ようやく整地されてその後に建ったのが今のフミエのマンションだ。

「そんなものが今、どうしてここに」

ヤサコの疑問はかえって膨らんだようだ。
「わからないですけど、屋敷が取り壊されたのはメガネが整備された後です。サーバのどこかに屋敷のデータが残っていて、イリーガルがそこを巣にしてるんじゃないでしょうか」
『つまり、イリーガルはこの中にいるってわけ？』
組んだ腕が軽くぶつかってノイズが走った。フミエはいつの間にか俺のすぐ隣にいた。
こいつ、こわがりだからな。
「大きなお屋敷ねえ。ふた手に分かれたほうがいいかしら」
「やめとこう」
「えっ」
どうして、とヤサコはけげんな顔をした。
「ここはイリーガルのホーム、俺たちはアウェイだろ。何が起こるかわからねえし、各個撃破されるとまずい」
「ダイチさんらしからぬ慎重論ですね」
「そうでもねえさ」
我ながらしれっと答える。
声をなくしたとはいっても、ここにいるメンバーで電脳に強いのはフミエと俺だってのに変わりはない。分かれて探索するなら、フミエとヤサコ、俺とアキラの組み合わせになる。それはまずい。
俺はフミエと約束した。だから、フミエがピンチの時は必ずそばにいて、助けなくちゃならない。
「フミエちゃんはそれでいいの？　ちょっと時間がかかるかもしれないわよ」
フミエは少し考えて、おもむろにメモ帳を返した。
『いいわ。ダイチのアホ』
は？　何故アホ？
「……前半と後半がつながらないんだけど」
ヤサコも首を傾げた。
「いいっつってんだからいいんだよ。行こうぜ。こんなとこでうじ

うじしてたら余計に時間の無駄だ」
動揺したのを気づかれないように、やや乱暴に言ってのける。
『了解』
短い言葉の出るが早いか、フミエは俺を見もせず、先頭を歩き出した。さっきの動揺と合わさって、俺はちょっと焦った。
フミエが俺を頼りにしてくれてるのは、単なる思い込みじゃないはずだ。それなのに、フミエの時々見せるわざと突き放した態度。自分に構うなと言われてるような気がする。
もしかして、必要以上に近づくなって意味だろうか。今はしかたないけど、普段は。探偵局への加入だって、俺がそれなりの戦力になるからで、そうじゃなかったら。
それは寂しい。普通に寂しいっていうのからもう1歩、心の奥に踏み込んだように寂しい。
「フミエ」
俺は思わず呼びかけた。
『なに』
「これが解決したら俺は――」
そこで言葉が止まる。
『俺はなに』
「俺は、ええと、探偵局に入る」
「宣言しなくてもわかってるわ」
後ろからヤサコが突っ込んだ。
『そういう言い方するヤツって、大体最初にやられるわよ』
フミエはメッセージを送るのと同時に目の前のドアを開けた。

第11話　盗むものたち　E　part

ドアを開けた瞬間に、黒い物が飛びすさるのが見えた。
待って。
部屋に駆け込む。右と左にひとつずつ、さっき開いたのと全く同じ形のドアがあった。
右、いや左、ううんやっぱり右。もう1度走り出そうとすると、誰かに腕をつかまれた。
「慌てんな」
つかんだのはダイチの手だった。何すんのよ、と言いかけて、もどかしくタイプする。
『離して。今、見えたのよ』
「そりゃわかってる。わかってるけどさ」
ダイチはもどかしそうだった。
「フミエちゃん、待って」
ヤサコがダイチの助けに入った。
「うかつにひとりで進んじゃダメ。罠かもしれない。ダイチ君が最初にいったとおり、ばらばらにならないほうがいい」
しまった。さっきいわれたばかりなのに、もう忘れそうになっていた。
『ゴメン』
素直に言葉が滑り出ると、ダイチは多少ぎくしゃくしながら答えた。
「い、いや、謝るこたあねえよ。慎重に行こうぜ」
無理にカッコつけて、こっちが恥ずかしくなる。
けれど不思議にも、さっきまでそんなシチュエーションが嫌でいつも以上にぶっきらぼうだったのが、その時は笑顔が漏れた。
とにかく慎重に、落ち着いて。

そう思いながら私は左手のドアを開いて、ダイチと並んで室内に踏み込んだ。
「あれ、この部屋ってちょっと変」
後ろからのぞきこんだヤサコが言う。アキラも首を傾げた。
「変っていうより、普通すぎますね。どこにでもある六畳間みたいな」
その時、ヤサコの後ろ、つまり今まで私たちがいた部屋でがたんと音がした。
「なっ、何!?」
「イリーガルだ!」
アキラが弾かれたように取って返す。そしてダイチも。とその時、ドアのへりに沿って小さなノイズが走った。
行っちゃダメ!
理屈より直感が先に来て、私はダイチの体にしがみついた。と同時に、元いた部屋が遠ざかった。扉と扉の間に、突然灰色の霧以外何もない空間が広がったのだ。
「わっ!?」
ダイチはその灰色の中に落っこちかけて、両手で宙をかいた。私はバランスを失いかけた胴に、必死でしがみついた。
「おっ、おい、離すなよ」
言われなくたって離さないに決まってる。
「ダイチ君、フミエちゃん!」
距離にして10メートルくらいだろうか、向こうの部屋からヤサコが叫んでいる。
「ぐっ、ぬぬ」
胴にかかっていた力が抜けた。ダイチはなんとかドアの端をつかんでいた。私が体を思い切り引っ張ると、ダイチは床に転がりこんだ。
「ふうっ、危ないとこだったぜ」
額の汗をぬぐうようにして見ると、ヤサコの姿はますます遠くな

っている。
「ヤサコ、おいヤサコ！　聞こえるか」
「な……に……きこえ……」
まるで電波状態が悪い時の通話のように、ヤサコの声は切れ切れにしか届かなかった。メールもつながらない。ダイチが電話を試したけど、通話不能だった。
そうこうするうちに、霧の濃さが増してきた。ヤサコの姿はやがて影だけに、そのうちにその影さえも消え、ドアの向こうはのっぺりした薄い灰色だけになった。
「まいったな」
ダイチはつぶやきながらドアを閉めた。これでヤサコたちと完全に離れてしまうけど、霧が入ると空間がさらに乱れるから仕方ない。
「こりゃ、イリーガルの術中にはまっちまったぜ」
私がこぶしを握りしめたのに気づいたダイチは、
「けどな、フミエのおかげで助かった。霧の中に落ちたらどうなってたかわかりゃしねえ」
私はぶんぶん頭を横に振った。
『いいのよ』
そうしてこれからどうしようか相談するつもりで見渡した時、部屋の中央を人影がよぎった。ダイチも気づいたらしく、思わずふたり同時に壁際へ身を押しつけた。
「おや、誰かと思ったら橋本さんとこのお嬢ちゃん。いらっしゃい」
ところが人影は、場の緊迫感とはアンバランスな、間延びした声で私たちを迎えた。
「ほれ、そっちに座ってまんじゅうでもおあがり」
季節外れのこたつに入った、人の良さそうなおばあちゃんの顔には見覚えがある。それを思い出した時、私はますます強く、壁にへばりついた。
「ばあさん、フミエの知り合いか？　どうしてここにいるんだ」
そんな私に気づかず、ダイチがおばあちゃんの前に立って、顔を

のぞきこんだ。
「そんなところに立ってたら寒かろうて。こたつにあたってお行き」
おばあちゃんはダイチを無視して言う。
「おかしなこと言うなあ。今、夏だぜ」
『ダイチ、こっち来て』
私は必死でタイプした。
「なんだよ、いま話中だ」
「こたつにあたってお行き」
「ばあちゃん、ここ古い空間だぜ。迷い込んじまったのか」
「はて何のことやら。ほれ、まんじゅうでも」
『ダイチってば』
私はもう気が気じゃなかった。
「フミエ、とりあえず話を聞いとこうぜ」
ダイチがこたつ布団をまくりあげた時、黒いものが飛び出した。
「うわっ」
不意をつかれたダイチがあおむけにひっくり返る。真っ黒なかたまりがその体にのしかかった。イリーガルだ！
私はメガビーを発射した。一瞬ひるんだところを、すかさずダイチが蹴とばす。ダイチの半分くらいしかない小さな体が吹っ飛んだ。放物線を描いてこたつを越え、おばあちゃんにぶつかった――と思いきや、おばあちゃんをすり抜けて床に転がった。
「いつまでも騒いでおらんで、まんじゅうでもおあがり」
何事もなかったように言うおばあちゃんをこれまた貫通して、ダイチの放ったミサイルがイリーガルを追う。ひと呼吸もしない後、予想外の激しい爆発でおばあちゃんがシルエットになった。
数字、記号の破片、畳のかけらが乱れ飛ぶ。半分顔を隠して、私は辛うじてイリーガルを見た。
ダメだ、当たってない。爆発の直前で身をかわされたらしい。
「クソ！」
気持ち悪いことに私の声で叫び、イリーガルは部屋の奥に跳んだ。

襖がひとりでに開いて、薄暗い向こうの景色がその姿を飲み込んだ。
「待てっ」
早くも起き上がったダイチと同時に、私も襖に走った。
「騒々しいのう。さあさ座って、こたつにあたってお行き」
背中に小さな声が響いた。

襖の先は薄暗い廊下だった。小走りで先を進むダイチが振り返る。
「なあフミエ、さっきのばあさん、誰だったんだ」
『トメさんよ。三丁目の』
「トメさん？　どっかで聞いたような」
ダイチは走りながら考え込むように上を見やった。
『覚えてないの？　去年亡くなって、あんたもお通夜行ったでしょ』
「げっ。じゃあ、さっきのは」
今さらになってあたふたするダイチに私は溜息をついた。
『多分録画されてたデータよ。だから同じ台詞ばっかり繰り返してたんだわ』
「な、なるほど」
『でもひとつ、わかったことがあるわ』
「へえ、何を？」
『今度のイリーガルは私たちを引っかけてばっかりで、自分から攻撃してこない。体も小さいわ』
ダイチは手を打った。
「そうか。ということは、イリーガル自体はたいして強くねえ。俺たちふたりでもとっ捕まえることができる」
『そうよ』
「よし、そうとわかったら話は早え。とっとと見つけて、ふん縛ってやろうぜ」
ダイチはいきなり元気が出てきた。現金なやつだけど、こんな時は心強い。
しばらく進むと廊下の行き止まりに着いた。

「おっと、またドアだぜ」
『うん』
私がドアノブに手をかけると、その上にダイチのがかかった。息が止まった。
電脳の手のはずなのに、それは確かに温かい。だから私の手はノブを回しかけたままでぴたりと動きを止め、ダイチも何も言わなかった。
しばらくして慌て出したのはダイチのほうだ。
「い、いやそうじゃねえ、そうじゃなくて。いきなりドアを開けたら危なくねえかと思ってさ」
そうじゃないって何じゃないんだって突っ込みたくなったけど、ダイチが変にかわいく感じられて、それで笑いに紛らしてあげることにした。
『大丈夫。イリーガルはまだ準備ができてないはずだから。早く行ったほうがいい』
「そうか……。わかった、お前が言うなら信じるぜ」
どっちの力でか、ノブがするりと回る。
眩しい光が目に飛び込んできた。
「俺から入る。ついてこい」
ダイチの後から入った部屋は、書斎のようだった。古くて重くて難しそうな本が二方の壁に並び、もう一方は真昼の陽光がさんさんと差し込む窓だ。扉は私たちが入ってきたひとつきりだった。
部屋の奥に、大きな机があった。家具らしいものはそれだけ、だから、イリーガルが隠れているとすればその裏くらいしかない。
「調べてみる。フミエは入口を守っとけ」
ダイチは身を低くして、ゆっくりと机に向かった。
絶対あそこにいるはず。私は身構えた。
「来るぞ！」
ダイチが叫ぶのと、机の影からイリーガルの飛び出すのと、ほぼ同時だった。私はおでこに手を当て、ダイチがミサイルを発射する。

誘導弾をすり抜けすり抜け、イリーガルは狭い室内を駆け回る。
私は狙いを定めたまま、メガビーを撃たずにいた。イリーガルの派手な動きが、こっちを挑発しているように見えたからだ。私をドアから引き離そうとしているのか。そうはいかない。それとも。
「フミエ、気をつけろ！」
ミサイルをぎりぎりでかわしたイリーガルが私を向いた。部屋の隅に寄って、今にも私めがけて突進してきそうな仕種を見せる。茜色の夕陽が、いやが上にもイリーガルの黒さを際立たせた。茜色の。
私はメガビーを撃った。青いまっすぐな光が、こっちではなく窓に向かって飛び出した体をあやまたずに射止めた。
「ダイチ！」
力強い私の声が、私自身から聞こえた。
「よし」
ダイチの電脳投げ縄がイリーガルを捕えた。イリーガルはしばらくばたばたしていたが、観念したかやがて動きを止めた。
「フミエ、よくイリーガルの動きを読めたな。俺はてっきりお前のほうに行くと思ったのに」
ダイチの質問に、私は窓の外を指差した。
「入った時と空の色が変わったから。きっと新しい通路をつないだのよ」
自分の声で話すって、なんて気分がいいんだろう。
「いい勘してやがる。黒客に欲しいくらいだぜ」
けげんな顔で見つめられるまで、ダイチは自分のミスに気づかなかった。
「違う違う、それはものの例えで。それより俺が探偵局に。あっても俺活躍してねえ。もしかして、俺っていらない子？」
自問自答して勝手に落ち込むダイチに、私は声をかけた。
「バカねえ、あんたは十分活躍したわよ。私からメガばあに言っとくわ」
「本当か！？　い、いやそれはいかん。そんな武士の情けはいらね

え」
妙なところで真面目になる、そんなダイチを私はまっすぐ見つめた。
「情けとかじゃない。私は本気で言ってるの」
私ひとりだったら心細くてダメだったろう。ヤサコとでもこううまくいったかはわからない。何故なら。
何故ならの先を考えた時、急に頬が真っ赤になった。
「あ？　フミエ、どうした」
「どうもしないわよ。それよりイリーガル」
強引に話題を変え、縛られて転がっているイリーガルに私は目を向けた。
「元の世界へ戻してよ」
突然本棚ががたがた揺れた。分厚い百科事典のような本が3冊、棚から転がり出た。
身構える私たちの前で本は机に乗って横に並んだ。と、ひとりでにページがめくられて、開いたところに言葉があった。
『戻す』
『だから』
『返して』
「返す？　どういう意味だ」
再びページが繰られる。
『返して』
『赤い』
『宝物』
そこで私はやっと気づいた。
「宝物って、もしかしてこれ？」
私はポシェットを探って、朝拾った夕焼け色のメタバグを取り出した。
『交換した』
『つもりだった』

『体と』
「そんな勝手な！」
私はただ拾っただけと思ったのに。
『だって』
『寂しがったから』
『ミチコさんが』
「ミチコさん？　都市伝説のか？　どうしてミチコさんとお前と関係ある」
ダイチが聞いた。と、今度はさっきより忙しくページがめくられて、
『ミチコさんは』
『心は』
『私は』
さらにそこでまたページが動く。
『”あっち”に』
『住んでいる』
『おしまい』
「おしまいって――」
何、と聞く前に胸のあたりを黒いものがよぎった。いつの間にか縄をほどいていたイリーガルが跳ねたのだ。窓ガラスが粉々にくだけ、私たちは顔を覆った。

細かく砕けたガラスの破片のひとつひとつに、誰かの影が映り込んでいた。破片は無数にあって影も無数だけど、でも影の持ち主はひとりだ。持ち主はひとりだけど、破片はどれも違う形、ちがう閃きで輝いた。ちょうど移りゆく私たちの心のように。

気がつくと自宅のリビングだった。体を起こすと、何かが転がり落ちた。
「あっ、メタバグ」

古い空間が消えた影響だろう、部屋中にメタバグが飛び散っている。
「うるせえなあ」
「何？　どうしたの」
「今何時ですか」
他の3人も同時に目を覚ましたと見え、思い思いに立ち上がった。と、
「うおっ、何だこのメタバグ」
ダイチの叫びを合図に、とりあえずみんなメタバグ拾いに夢中になった。
しばらくして、テーブルの上にメタバグの小山ができた。これだけあれば、ダイチの探偵局加入には十分だろう。
「これで一件落着ね。フミエちゃん、無事ですんで良かったわ」
「本当に、それが何よりだぜ」
そんな言葉をかけられると、私の心の弱いところがゆるんだ。
「みんな、今回は迷惑かけてごめん。それから、力を貸してくれてありがとう」
「なあに、最終的にはフミエが自分の力で解決したんだ」
「ううん、みんながいてくれたからだよ。本当にありがとう」
「お姉ちゃんが素直に頭下げるの、何年ぶりかで見た」
アキラが半ば本気でつぶやいた。

もう夕方近かったけど、心配してるメガばあに声を取り戻したことの報告と、メタバグのお礼に行きたかった。それに、早くメタバグを届けてダイチの加入を正式に認めてもらう必要もあった。
家を出て途中までは3人で歩き、家に寄ってくるというダイチと一旦別れて、ヤサコとふたりになった。
「ねえ」
声をかけてきたのはヤサコのほうだった。
「フミエちゃんとダイチ君ってさ、どう？」

「どうって、そりゃ――」
私の声は再び出なくなった。無言でこぶしを振り上げると、ヤサコはきゃあきゃあ言って逃げ出す。
「ちょ、待てこら」
走りで負けるわけがない。またたく間に私はヤサコを捕まえた。
ヤサコは息を切らしながら、
「だってフミエちゃん、さっきお礼した時、『みんな』って言いながらダイチ君のことしか見てないんだもの」
しまった。うかつだった。
「ヤサコ、それ誰にも言っちゃダメよ。言ったら絶交だからね」
「えっ、そんなあ。せめてカンナとアイコちゃんだけでも」
「バカヤロ！　カンナはともかく、アイコなんかに教えたら音速より早くクラス中に知れ渡るわ」
「仕方ないな」
ヤサコは笑って、でも何故かその笑いは少し寂そうだった。
「私、ちょっとフミエちゃんがうらやましいかも」
「え、なんで？」
「ううん。別に、なんとなく」
ヤサコは空を見上げ、つられて私も同じようにした。
空は透明に抜けるようで、それが透明なら透明なほど、悲しいくらいに夕映えは遠かった。

第１１話　盗むものたち　Ｅ　ｐａｒｔ（後書き）

第１１話はこれで終わりです。次話をお楽しみに。

第１２話　電脳からの物体Ｘ　Ａ　ｐａｒｔ

小此木早苗によると、ラジオ体操は彼女が生まれる前から放送しているそうですが、多分ウソです。

Ａ　ｐａｒｔ

「それ、ホントよ」

青空に振り上げられたアイコちゃんの腕がしなやかな曲線を描いた。

「ラジオ体操の音楽って、７５年前から同じ曲なんだって」

「へえ、７５年。ええと――」

手を休めて考え始めたカンナを、アイコちゃんはちょんと小突く。

「こら。レディの齢は数えない」

「あっごめん」

「そうよ、聞こえてるかもしれないし。オババ、地獄耳だから」

だいぶ見慣れてきた古い瓦屋根を横目に私は言った。町内会のラジオ体操会場はメガシ屋のほんの裏手の、お社の境内なのだ。

「今日、ハラケン来ないの？」

アイコちゃんが聞いた。正確には「今日も」なのだが。

「うん」

カンナの声は心もち小さくなる。

「なんだか、毎日夜遅くまで調べものしてるらしいわ。研一本人は夏休みの自由研究って言ってるんだけど、私にも教えてくれないの」

私にも、という言葉が、つい引っかかった。

「ふーん、変なやつ。お姫さまはここにいるのにもったいない」

そんな私に気づいてか気づかずか、アイコちゃんはにんまりほほえんだ。

「だっ誰よお姫さまって！」
「やだ赤くなってかわいいなあ。もう私がもらっちゃおうかしら」
言うなり、アイコちゃんは本当にカンナを抱き寄せた。
「きゃっ、ちょっとやめてよ。助けてヤサコちゃん」
ふたりにつき合う気分じゃないに決まってたけど、仕方なしに私はアイコちゃんの耳を引っ張った。
「――ほらそこ。真面目に体操する」
「あだだだっ！？　やめ、ちぎれる！」
アイコちゃんはオーバーな悲鳴を上げた。びっくりして離すと、よっぽど痛かったのか両手でしっかり耳を隠して、
「なんなのよあんた。その低血圧と凶暴さのアンバランスは」
「あれ、耳引っ張らない？　オババなんかよくやるんだけど」
「やらんわ！　小此木家の異常な習慣を社会に持ち込むな」
カンナがぽんと手を打った。
「そういえば、フミエちゃんも時々ダイチ君にやるわ。メガばあの影響なのね」
「これだから昭和文化は野蛮だってのよ」
「私たちが今やってるこれも昭和ど真ん中だけどね」
それで話題が一回転した。ちょうど体操も深呼吸になって、朝からいろんなものの混ざったため息をひとつついたところで、背中をたたかれた。
「おはよう。橋本さん、なんとか助かったらしいわね」
振り向くと、黒髪に黒のワンピース、こっちを見つめる黒い瞳。
「マユミちゃん。そうなの、こっちからお礼に行こうと思ってたとこ」
私につられて、アイコちゃんとカンナもなんとなく頭を下げた。
この間の声をなくした事件は、もちろんふたりもよく知っている。
「お礼なんていいのよ。私は知ってる話を聞かせただけだし」
マユミちゃんはそこでうふふと笑って、つと顔を近づけた。
「ところでね、また面白い話を聞いたんだけど。知ってる？　『鹿

屋野神社のエイリアン』」
「何それ。リドリー・スコットの幽霊でも出た？」
アイコちゃんが口を挟む。
「まだ生きてるわ。そうじゃなくて、最近、鹿屋野神社に凶悪なイリーガルが出るっていうのよ。掲示板でもぼつぼつ噂になり始めてるわね」
私は首を振り、カンナも知らないと答えた。アイコちゃんは当然、知らないどころかほとんど興味なさそうだ。
「私としてはマユミのファッションセンスのほうが気になるわ。黒ずくめとか」
「だって夏だもの。うふふ」
いまいちずれた答えを返したマユミちゃんは、なんだかいつもよりテンションが高い。夏だから怪談も入れ食いの時期だろうし、そのせいだろうか。
「そうだ、それ」
そのマユミちゃんのテンションが移ったように、高い声を上げたのはカンナだった。
「久しぶりに探偵局の仕事よ。鹿屋野神社探検、やってみるのもいいかも」
「そうすればハラケンを引っ張り出せるしね」
「ち、違うわよ」
またもやアイコちゃんとカンナの追いかけっこが始まろうという矢先で、別の声がふたりをさえぎった。
「待った。そんなはずはねえっすよ」
「あらナメッチ。久しぶり」
ナメッチはちょっと前まで家族で海に行っていたのだ。
「ちょっと焼けたじゃん。男の子らしくなったわよ」
「ほっ、本当っすか」
ナメッチは一瞬照れたが、すぐ真顔に戻った。
「いやいや、ほめられに来たんじゃないっす。鹿屋野神社にイリー

ガルとか、あり得ないすよ」
「どうして？」
カンナが首を傾げると、ナメッチは鼻息を荒げた。
「決まってるっす。鹿屋野神社は夏休み中の俺たちの本拠地っすよ。イリーガルなんか自由にさせてたら黒客の名折れだし、大体俺たちの誰もそんな噂聞いてないっすから」
マユミちゃんは表情を固くした。
「それは単純に、あなたたちの情報網がお粗末だからじゃないの」
うふふ、とはつないだものの、目が笑ってない。
「な、何だと！　もう1度言ってみろ」
「ええ、何度でも言ってあげるわ。黒客の情報網は穴だらけよ。天沢さんがリーダーになって浮かれてるみたいだけど、案外沢口君のほうが強かったんじゃない？」
ナメッチの日焼けした顔が赤黒くなった。
「こいつ！？　怪談集めしか能のないお前がイサコさんの悪口を言うな」
「怪談じゃないわよ。都市伝説よ」
「どっちだって同じだ怪談女」
「な、何ですってえ！　撤回しなさい」
マユミちゃんもカッとなったらしい。にわかに語気を荒げた。
「誰がするかっての、怪談女」
「まあまあ、ふたりともやめなよ」
見かねて私は仲裁に入った。
「いや、やめねえっす。黒客をバカにしたマユミが謝るまでは」
「そっちこそ都市伝説をバカにすると呪われるわよ」
「やめなってば」
今にもつかみ合いそうになりそうなのを、必死で押し留める。
「ちょっと、ナメッチもマユミも落ち着いて」
「そうよ。こんなとこで喧嘩したって意味ないわ」
アイコちゃんとカンナも加わって、なんとか引き離しはしたが、

言い合いはやまない。
「とにかくイリーガルなんかいねえっす」
「いるわよ」
「もしいたって黒客でのしてやる」
「できるもんならしてご覧なさい。返り討ちにあうのがオチだけど」
「お手上げだわ。どうしよっか、これ」
延々続く泥試合に、人あしらいの上手なアイコちゃんも困惑の表情を浮かべた。
「こうなったら」
カンナがちらりとこっちを見る。
私はため息をついた。
「行くしかないわね。みんなで」
みんなという中にはハラケンはもちろん、イサコも入っているはずで、無意識にそう言ったのが少し嬉しいような、けれど本当にそうなのか確かめようとすればするほど、言葉はにじんで心に墨色のもやを広げた。

第12話　電脳からの物体X　Part

私は墨色のもやの中を歩いていた。分厚い雲で夕焼けから隔てられた街は、日が暮れると急速に色と形をなくして、均質な薄闇に凝っていた。

「寂しい？」

「寂しくないよ」

自然に返そうとするほど、逆に言葉が強張ってくるように感じた。それで私はますます強く、お姉ちゃんの手を握った。私の手は汗ばんでいたが、お姉ちゃんのは陶器のように滑らかで、なのに温かかった。

ふたりは黙って並んで歩いた。暗い中に時々未分化の黒っぽいかたまりがよどんでいて、私は何度か足を取られた。そのたびにお姉ちゃんは手を強く握って私を支えてくれた。

「これは？」

「心よ。私の、そしてみんなの」

目を伏せるお姉ちゃんを、私はまるで映画のように正面から見ていた。

「ここには人の心が集まってくる。でも、私が私でいるためには、受け入れられない心も、こぼれ落ちてしまう心もあるの」

うっかり踏んでしまったそれが、生き物のようにびくんと震えた。慌てて足をどけると、かたまりの一部が動いて、ふたつの光が閃いた。

「ごめんね」

お姉ちゃんはしゃがみ込んで、かたまりをゆっくりなでた。

「動かずに、じっとしていて。眠るのよ」

なでられるうちに、光はぽつぽつと明滅を始め、やがて消えた。

「イサコちゃんにもごめん」

いつの間にか、手が離れていた。

「あなたはもう帰ったほうがいい。そうでないと、私があなたと離れられなくなるから」
突然ふたりの間が遠ざかり、どこからか湧いて出た脈打つ熱い流れが隔てた。
「待って。離れなくていい」
「ダメ」
お姉ちゃんは寂しげにほほえんだ。
「もうすぐ助けにいく。迎えに行くから、待ってて」
口を開いたお姉ちゃんの言葉が届く前に、うねる流れが私を飲み込んだ。視界が暗転し、次の瞬間に明りを感じ、そのまた次に目が開いた。
「モジョッ、モジョッ」
胸の上で毛玉がおどっている。自分の体より大きい時計を抱えて。
時計――
「あっ」
今日もラジオ体操をさぼってしまった。カンナから誘われてたのに。

「でも、正直にいえば行きたくないわ。朝から探偵局の連中に会うのも癪だし」
「探偵局っていうより、メガシ屋のヤサコって子だろ」
図星をつかれて私はつまった。つい乱暴に、ご飯に味噌汁の残りをかけてかき込む。
「こら、もっと味わって食べろよ。せっかくおばさんが作ってくれたんだから」
そのおばさん夫妻はもう家を出て、私とお兄ちゃんだけの朝食だった。
「味わってるわ。こうしたほうがおいしいのよ」
「口が減らないな」
お兄ちゃんは呆れたようにつぶやいて、それから自分も同じよう

にした。
「あっ、なによ自分こそ」
「うん、おいしいね。たまにはこういうのもありか。ところでさ」
目の前にウィンドウが開いた。
「調べておいたよ。例のあれ」
「あれって、『エイリアン』？」
鹿屋野神社にイリーガルが潜んでいることには、しばらく前から気づいていた。だが、私の調べた限りではかなり強そうなやつだったから、うかつに攻撃をかけず、お兄ちゃんに情報収集を頼んでいたのだ。
「うん、そうだ。噂どおりかなり強力らしいよ。空間管理室のサーバにもぐり込んで見つけた情報だと、付近を巡回してたサッチーが1機、行方不明になってる」
「そう……」
サッチーを倒すほどとなると黒客は連れていけない。返り討ちにあうだけだ。あいつらの情報を早めにシャットダウンしておいてよかった。
「今回は僕も行こうか」
お兄ちゃんが私の顔をのぞきこんだ。私は目をそらして、
「いい。私だけで」
気づかいは嬉しかった。
「ひとりで大丈夫か」
「問題ないわ。ここに越して来る前はいつもそうだったし」
でも、イリーガルとの戦いに慣れていないお兄ちゃんが急に現場に出ても、戦力として期待できるかどうかはわからない。
「だけど、今度は相手も強いから」
「今までにも強いイリーガルはいたわ」
お兄ちゃんはしつこく食い下がる。もしかして、私は自分で思っているほどお兄ちゃんに信用されていないのだろうか。
「万一ってこともある。僕がついてたほうがいい」

「平気だったら！　信じてくれないの」
にわかに膨れ上がった不安が語気を荒くさせた。
「信じてないわけじゃない。だけど――」
「だけど何よ！　あの時だってお兄ちゃんいたじゃない。いたのになにもできなかったじゃない」
お兄ちゃんがうつむいたまま立ち上がるまで、私は自分の言葉がお兄ちゃんを傷つけたと気づかなかった。
「わかった。そこまでいうならイサコに任せる」
お兄ちゃんはしぼり出すようにそれだけ言って、背中を見せた。意地のつもりか肩を張った後ろ姿が、謝罪の言葉さえ拒否しているように見えて、私はひと言も喋れなかった。

「そうまでしてひとりで片づけようと思ったのに」
鬱蒼と木々の繁った鹿屋野神社の境内は、午後5時を回るともう夜の雰囲気だった。この時間、普段ならもう人の姿も見えず、おのずと寂しさも盛り上がるのだが、いらだたしいことに今日は違った。
「何故こうなる」
黒客の面子はいうに及ばず、ダイチを含めた探偵局の連中にマユミ、どういうわけかヤサコの妹に、空間管理室の猫目宗助まで姿を見せ、場にそぐわないにぎわいを見せている。
「ごめん、今日、オジジもオババもいなくて。デンスケも連れてきちゃった」
「いいんじゃない。たくさんいたほうが楽しいわ。宗助さんは？」
「僕はお目付け役ってとこかな」
ヤサコやフミエと話していた宗助はそこで話を区切って、こっちを向いた。
「こんにちは」
私は何食わぬ顔で挨拶した。
「やあ。会うのは初めてだね。僕は猫目宗助。空間管理室の嘱託を

やってる」
「天沢勇子です」
それだけ言って、薄笑いの張りついた猫目の顔をにらみつける。
猫目は笑顔を崩さず、
「それだけ？　君には肩書はないの」
「ありません」
「そうかな。僕たちのほうではいろいろ聞いてるけど。黒客のリーダー、暗号使い、大黒最大のハッカー」
「皮肉のつもりですか」
「違うちがう。ひとつ忠告しておきたいと思ってね」
猫目の顔から笑みが消えた。
「空間管理室もそろそろ本気になる。注意したほうがいい」
言い返そうとした時、後ろからヤサコが呼んだ。
「宗助さん、何やってるの」
「何でもないよ。初対面のご挨拶」
振り向いた猫目はもう、さっきの表情に戻っている。
「律儀ねえ。ほら、イサコも来て。グループ分け決めたから」
フミエが手招きした。
「あんたの提案どおり、ふたりひと組にしといたわ。まずハラケンにカンナ、ガチャとアキラ、ナメッチとマユミ」
「ちょっと待った！　俺らペアっすか」
「納得いかないわ」
ナメッチとマユミがそれぞれ抗議の声を上げる。
「そうよ。そもそも事の起こりはあんたらでしょうが。ふたり一緒におんなじものを見て決着つけなさい」
フミエの意見は正論に聞こえた。ふたりは不承不承顔を見合わせる。
ヤサコがフミエの手元のメモをのぞいた。
「それからフミエちゃんとダイチ君……あれ？　私がない」
けげんそうな顔をしたヤサコと目が合った。私も呼ばれてない。

フミエはそんな私たちを交互に見つめ、多少言いづらそうに口を開いた。
「仕方ないのよ。宗助さんと京子ちゃんは留守番だし、アイコは電脳に興味ないって来ないし。だからヤサコはイサコと、ってことで」
「待て！　認めないぞ。やり直しだ」
慌てて叫ぶと、
「イサコちゃんらしくないわね。もう決まったことよ」
カンナがにっこりほほえんで、私をたじろがせた。
「か、勝手に決めるな。そうだ、ひとりで、私はひとりで行く」
「わがままは許しません。ひとりが襲われた時のために、最低限ペアで、って言ったのイサコちゃんでしょ」
「それはだから――じゃ、じゃあ私はこの幼児と行く。ほら幼児、こっちに来い。楽しいぞ」
「お姉ちゃんと行くっ！」
京子はこっちに駆け出した。よし。
「京子ちゃん、おとなしく待ってたらココイルチョコあげよう」
どこから取り出したか、猫目はチョコレートの包みを手にぶら下げていた。
「お兄ちゃんと待ってるっ！」
「ぐっ」
「あんた、往生際が悪いわよ。さっさと行った、行った」
気がつくと、もうほとんどのペアが出発していた。声をかけたフミエも、さっさと回れ右してダイチと並ぶ。
「くそっ、仕方ない。ヤサコ、イリーガルは私が何とかするから、お前は地図でも見とけ」
地図ソフトを起動してヤサコに投げると、私は神社奥への道に向かった。
「あ、ちょっと待ちなさいよ」
それが取り返しのつかない結果を生むとは、その時には想像も及ばなかった。

第12話　電脳からの物体X　C　part

しばらく見ないうちに、濃い緑が間道を覆っていた。僕はカンナの前に立って草を払いながら進んだ。

「研一」

ひと際大きな音を立て、僕は草をないだ。勢い余って手が近くの小枝にぶつかり、引っかき傷を作った。

「研一！」

「……何だい」

僕はまだカンナに会いたくなかった。カンナは僕に反対するに決まっていた。だから僕の手で段取りを終わらせて、反論の取っかかりも与えずに全てをすませてしまいたかった。

「研一、最近どうしたの？　ひとりで家にこもって、何をやってるの」

「言ったじゃないか。夏休みの自由研究だよ」

カンナの詰問口調に、僕はなるべく落ち着いた声を出すよう努力しながら答えた。

「本当に？　自由研究って、そんなに朝から晩まで家にいなくちゃできないほどのことなの」

「本当だよ」

カンナの声が止まった。草を踏む音とヒグラシの鳴き声が遠のいて、手の傷がまるで他人のもののようにうずいた。

「ごめん。信じられない」

僕はカンナのためを思ってやってるのに。カンナと離ればなれにならずにすむなら、こんなこと、すぐにだってやめるのに。

僕は振り返った。ほとんど口元にまで言葉が込み上げた。

でもそれは音にならなかった。カンナの顔を見た瞬間、僕はやっぱりカンナのことが好きだと気づいたからだ。

「信じてくれないならそれでもいい。信じてくれとも言わない」

今は。その時が来ればカンナもきっとわかってくれる。僕たちふたりはいつも一緒で、そうでないなんてことがあってはならないんだ。もし現実がそうなるなら、それは現実の間違いだ。僕がその間違いを正さなくちゃならない。

「研一、どうして本当のこと教えてくれないの」

僕は答えなかった。それがカンナのためだから。カンナと僕にとって一番いい方法だから。

後ろから聞こえていた足音が止まった。

「カンナ？」

「わかった。もう帰ろう」

僕は面食らった。

「帰る！？　な、なんで」

「私ね、不安だったの。ここ何日か、研一、ほとんど会ってくれないから。夏休みまでは毎日一緒だったのに」

カンナはゆっくりと息を継いだ。

「だから、こうやって外で話ができたら、ちょっとは変わるかと思った。でも違うんだね」

僕は答えられなかった。

「ちょっと寂しいな」

カンナはそのまま後ろを向いた。

「カンナ！」

気がつくと僕の体はカンナを追っていた。差し伸べた手がもう少しでカンナの肩に届く。

本当にそれでいいのか。今カンナに触れれば、僕は全てを打ち明けてしまいそうだった。

でも触れなければ、カンナはそのまま僕の知らないところに去ってしまいそうだった。

カンナは振り返ろうとした。

そして、その顔がまだ見えないうちに電話が鳴った。僕は咄嗟に電話を取った。

「あっハラケン！　今どこっすか」
着信はナメッチからだった。
「どこって、ええと、神社の裏の参道に上がる途中だけど」
「やべえ！　そこ、俺たちのすぐ先だ。とっとにかく神社から出て」
「走る？　どうして」
「何でもいいから急げって！　うわっ」
混線するような甲高い信号音が鳴り響いて、僕は思わず耳をふさいだ。が、ナメッチに何かあったかと不安になって、すぐまた呼びかけた。
「もしもし、何があった？　もしもし」
「どうしたの」
カンナはけげんな表情にわずかな不安を浮かべている。
「わからない。ナメッチから電話があって、何か緊急事態らしいんだけど切れちゃって」
とその時、電話の向こうの雑音が急速に弱まった。
「ハラケン、ハラケン聞こえる？」
声はナメッチのものではない。
「マユミか？　ナメッチは？」
「大丈夫、まだね。通話機能をやられただけよ」
マユミの声は冷静だったけれど、走っているのか茂みを踏みしだくような音と、時々荒い息づかいが混じった。
「やられたってどういうこと？　イリーガル？」
「そうよ。いたのよ、すごいのが。あなたたち、私たちの逃げる先にいるの。降りると鉢合わせになるわ。裏参道まで上がって、そのまま神社の外に逃げて」
その時、またも騒音がマユミの声を隠した。
「マユミ！？　おい、大丈夫か」
カンナが無言で僕の腕を握った。騒音は5秒ほど続いて、唐突に消えた。
「マユミ！　聞こえるか。返事してくれ」

数秒の空白。その後で、
「……やられてないわ。ナメッチも」
僕は大きく息をつき、その様子を見てカンナも同じようにした。
「でもごめんなさい。もう電話してる余裕はなさそう。あなたたちも逃げて」
僕が答える前に通話は切れた。
「ねえ、マユミちゃんとナメッチに何があったの」
さっきより不安の色の濃い表情でカンナが聞いた。
「イリーガルに追われてるらしい。それで、もうすぐこっちに来るって」
「大変。どうしよう」
カンナは自分のポシェットを探り出した。
「マユミによれば、相当強いイリーガルみたいだ。だから裏参道まで登って」
「登って？」
僕は夕焼けの薄まりつつある空を見上げた。
「そこで、みんなで迎え撃とうって」

嘘をついたのは、どうしてもイリーガルと接触しておきたかったからだ。
いくら調べても、”あっち”の本質的な情報はほとんど見つからなかった。まるで意図的に隠されているような、いや、実際メガマスや空間管理室によって隠蔽された事実があるのかもしれない。
ネットから集まらないなら、別の方法を探らなければならない。明らかに何か知っているイサコから話を聞きたいのだが、それは終業式の日に手ひどく跳ねのけられた。
それなら後は、イリーガルから直接情報をかすめ取るしかない。
この前フミエに協力しなかったのが悔やまれた。カンナ経由の話では、フミエの家に現れたイリーガルは言葉を使ったらしい。もしイリーガルとコミュニケーションが取れれば。そうでないまでも、

イリーガルのパスワードを解析すれば、新しい事実が見えてくるかもしれない。
「なあハラケン、本当に来るのかよ」
僕とカンナの登ってきた小道を見下ろしながら、ガチャギリがひじで僕の脇をつついた。
「ああ。ナメッチとマユミはそう言ってた」
「又聞きかよ。俺たちの捜索では何も見つからなかったぞ」
ガチャギリが唇を尖らせると、今までマップに見入っていたアキラが顔を上げた。
「空間の状態はかなり不安定です。何かがいるとはいえそうですよ」
「それならそれでいいけどな」
ガチャギリは、今度は周囲をぐるっと見回した。
「イリーガルとの決戦に、肝心のリーダーがいねえじゃねえか」
裏参道に集まったのは僕とカンナ、ガチャギリ、アキラの４人だけだった。
「ヤサコとイサコには連絡がつかないんだ。ダイチとフミエの組は神社の反対側だろ。すぐ行くって言ってたけど、間に合わないはずだ」
「黒客も探偵局も主戦力がいないってことですよね」
アキラの冷静なひと言が、場の空気を固くする。
「まあだからっつって今さら退く気もねえけどな。一体どんなイリーガルが出てくんのか、お手並み拝見てとこか」
ガチャギリが言った時、小道の下のほうでがさがさ音が聞え出した。
「来たらしいぜ。構えろ」
「はいっ」
ガチャギリの合図に応じて、アキラは近くの木の裏に回り込んだ。どうやらガチャギリが正面から受け、アキラが横から奇襲をかける戦法らしい。
カンナに無言でうなずいてから、僕もガチャギリの横でメガビー

を構えた。補給係のカンナは僕の後ろで応急修復ツールを準備している。

最初にナメッチの顔が見えた。

「あっ、ガチャギリ！　ハラケン」

続いてマユミも。

「あなたたち、どうして逃げてない――」

「イリーガルはどこだ！　ここで迎撃するんだ！」

マユミの声をカンナから隠そうと、僕は叫んだ。

「すぐ後ろっすよ！　マユミ、急げ！　追いつかれる」

良く見ると、ナメッチはマユミの手を引いていた。

「よしナメッチ、早く上がってこい。後はこっちが引き受けた」

ガチャギリの足元にはロケットランチャーみたいなものが並んでいる。追跡君の発射装置だろう。

僕は小道へ身を乗り出した。マユミの5、6メートル後ろに、黒い影が見えた。

「犬？」

がフォーマットなのだろう。4本足で、人間のひざ上くらいの大きさだ。異様なのは、体の大部分は黒いもやのかたまりのようなイリーガルの姿なのに、あちこちに犬の身体が継ぎはぎされたようになっていたことだ。モザイク犬とでもいうべきだろうか。

「そいつがイリーガル？」

強いという情報から大型のものを想像していた僕は、少し気が抜けた。相手が犬では、コミュニケーションも無理そうだ。

「ガチャ、頼むっす」

小道を上りきったナメッチとマユミがガチャギリの後ろに転がり込んだ。

「わかった。ハラケン、相手は小せえ。一気にケリをつけるぞ」

ガチャギリがランチャーから一斉にミサイルを発射した。イリーガルはジャンプして初弾をかわす。が、第2弾が避けようのない空中で敵を捕えた。まばゆい閃光が走り、イリーガルは茂みの中に落

ちた。さらにそれを追って、次々ミサイルが着弾する。僕も茂みを狙ってメガビーを発射した。

放たれた8発のミサイルが全て着弾し、僕もメガビーを止めると、辺りは急にしんとした。

「空間の安定度が高まりました」

アキラが木の裏から顔を出した。ナメッチがやや拍子抜けした声で言う。

「ありゃ？　やっつけたんすか」

「なんでえ。たいして強くなかったじゃねえか。やりすぎてパスワードが壊れてなきゃいいけど」

ガチャギリは地面に置かれたランチャーに手をかけた。

「こんなにたくさんいらなかったな。――あれ、動かねえ」

その時、僕は妙なものに気がついた。イリーガルのいた茂みからランチャーまで、細い1本の筋が続いている。これは、まさか。

「ガチャギリ、気をつけろ」

「え？」

次の瞬間、並んでいたランチャーが吹き飛び、空中で四散した。

「うわあっ」

ガチャギリが顔を覆って座り込む。と、茂みでまた何かが動いた。

「ガチャギリさん、危ない！」

アキラがガチャギリにしがみついて、ふたりは引っ繰り返った。すぐその上を、ノイズを散らしながらイリーガルが飛びこえた。

「や、やっぱり生きてた。くそ、食らえっ」

ナメッチが打ったミサイルは、イリーガルに届く前に爆発した。

イリーガルがナメッチのほうを見て、口を開けた。いや、口というか、正確にはイリーガルの顔は4つに割れた。その奥から、人と獣の声が混ざったような悲鳴と、どこかでみた記憶のある光の束がほとばしった。

「ナメッチ！？」

返事はなかった。ナメッチはメガネから白い煙の筋を上げて、そ

の場にへたりこんでいた。
「くそ、ナメッチの仇！　アキラ、ミサイルだ。ランチャーを奪われてもまだ手持ちがある」
「はい！」
ガチャギリとアキラが再び攻勢に移った。ウェストバッグからミサイルを取り出しては次々に投げつける。
ところが、ミサイルはイリーガルに届かない。どれも着弾の寸前で爆発して、本体にダメージを与えていないようだ。
「おいぼさっと見てんな！　お前ら、早く逃げろ！　神社の外へ」
「マユミちゃん。しっかり」
ナメッチの隣で尻もちをついたままのマユミを、カンナが助け起こす。僕もようやく我に返って、マユミを立たせるのを手伝った。先にふたりに石段を降らせ、メガビーを撃ちながら後に続く。
「ガチャ、アキラ。君たちも早く」
「はい――」
振り向いたアキラの目の前に、黒い線が伸びていた。誰かが声を出すより早く、アキラの電脳体がノイズにまみれ、メガネがぼんと音を立てた。
「なんてやつだ。アキラまで」
「ガチャギリ、逃げろ。僕たちじゃかなわない」
「ちくしょう、わかってらあ」
ガチャギリはありったけのミサイルをイリーガルに投げつけた。連続した爆発で空間がきしみ、本体に当たらないまでも、空間のダメージがイリーガルの体に伝わった。それでひるんだ隙を見て、ガチャギリも石段を駆け降り、僕と並んだ。
「なんなんだよ、あいつの強さはよ。イサコでもやべえぜ」
前を走っていたマユミが振り返った。
「今は逃げるしかないわ。神社から出るのよ」
「神社の外まで追ってこないのか？」
「ええ。神社の敷地外で被害を受けたって話はないの」

頭の中を直感が走り抜けた。
「きっと論理結界だ。サッチーの逆で、やつは神社から出られないんだ」
石段のふもとの鳥居は、もう目の前だった。あそこをくぐれば逃げ切れる。
「もうすぐだ。イリーガルはどうした」
僕とガチャギリは同時に振り返った。その視界をふたつに分けて、黒い筋が伸びた。
「カンナ、マユミ、止まれ！　上だ」
「えっ！？」
慌ててブレーキをかけたふたりの前に、黒い針が突き立った。石段の表面が激しく崩壊して、３０センチくらいの穴が開いた。
「しまった、回り込まれた。誰か武器はねえのか。俺はさっきので使い切っちまった」
「ダメだ。僕のメガビーも残ってない」
僕が首を振ると、カンナとマユミもうつむいた。
「そうか」
ガチャギリは落ち着いた声で言った。覚悟を決めたらしい。
イリーガルが下ってきた。ナメッチをやった時と同じように、顔が４つに裂けて、中に発射孔のようなものが見えた。
ガチャギリが僕の腕をつかんだ。
「ハラケン、なんとかカンナとマユミだけでも逃がすぞ。俺たちで盾になるんだ」
「うん」
仕方ない。カンナを守れる可能性が少しでも増えるなら。
「おい女子ふたり。イリーガルが光線を発射したら鳥居に向かって走れ。発射したらだぞ。その前に動いたら、多分あの針にやられる」
「ごめんなさい。元はといえば私のせいで」
マユミが頭を下げると、ガチャギリは首を振った。
「謝る必要はねえ。大体お前たちが助かるかどうかもわからねえし

な」

ナメッチがやられた時の光線から判断して、僕たちが盾になってもほとんど保たないはずだ。

イリーガルの口が緑に光り始めた。それを見たガチャギリが、開き直ったように大声でわめき始めた。

「くそったれ、いよいよ最期か！　しかし気に入らねえなあ、サッチーのフォーマット光線みたいなのにやられるってのはよ」

サッチー。フォーマット光線。逆論理結界。

理屈がつながったわけじゃない。でも気になっていたものが一直線に並んで、僕はそこにひとつの確信を見つけた。それはすぐ、短い言葉になった。

「待て！」

ガチャギリが吹き出した。

「おいお前、気でも――」

「ガチャギリ君、あれ！」

カンナの指差した先を皆が見た。

イリーガルは動きを停めていた。

第１２話　電脳からの物体Ｘ　Ｄ　ｐａｒｔ

探索中止の知らせを受けて神社の表に戻った私とダイチを、宗助さんが出迎えた。
「やられたって？　ナメッチと、アキラも」
「ああ」
宗助さんが振り返ると、イリーガルと遭遇したという面々がベンチに腰かけていた。みんな精も根も尽き果てたという表情でぽかんと空を見上げている。ナメッチとアキラはメガネを外していた。
「予想外の強さだ」
宗助さんは頭をかいた。
「実をいうと、空間管理室では、サッチーの行方不明事件と今回のイリーガルは無関係と思っていたんだ。サッチーを倒せるほどのイリーガルがいるなんて考えられなかった」
「だが、結果としてはいたんだぜ」
ガチャギリが立ち上がった。ハラケンも腕組みする。
「イリーガルの光線、フォーマット光線に似ていた。もしかするとサッチーを取りこんで能力を奪ったのかもしれない。僕が『待て』をしたら止まったのもきっと同じだ」
「そんなことまで――。イリーガルってのは何でもありだな」
感心したようにうなずいた宗助さんに、ガチャギリが見咎めた。
「あんた、ずいぶん他人行儀だな。これだけの被害が出てんのに」
「いや、そんなつもりじゃ――」
宗助さんは言いかけたまま黙り込んだ。
「俺たちはどうなっても構わないのか。それとも、あんたらとしては黒客の戦力が削られたほうがいいってわけか」
「やめなよ。宗助さん、そんな人じゃないよ」
私は止めに入った。私だってそんなによく知ってるわけじゃないけど、メガシ屋で時々会う宗助さんはオバちゃんと違って優しい。

裏表のあるようには見えない。
「そうよ。宗助さんってどっちかっていうと内勤が多いから、あんまりイリーガルについて知らないんだわ。それでつい、あんなふうに言っちゃっただけよ」
カンナが私に加勢してくれた。
「すまない。芦原さんのいったとおりだ」
宗助さんは頭を下げた。
「今回のメガネの修理代は空間管理室で持つよ。危険なことに巻き込んで、本当に申し訳なかった」
「ま、まあわかってくれればいいけどよ」
謝り方はとても真面目に見えたから、ガチャギリもそれ以上の追及はしなかった。
「じゃあ今日はもう撤退ってことでいいのか」
それまで喋ってなかったダイチが、後ろから顔をのぞかせた。
「そうしたいところなんだけどね」
宗助さんは私たちを見回した。
「小此木さんと天沢さんがまだなんだ」
「そういえばあのふたり、ずっと連絡がつかなかったわ。まさか、もうやられちゃったなんてこと――」
カンナが言うと、ガチャギリが首を振った。
「イサコがついてそう簡単にやられるってこともないだろ。もしそうなら、とっくにここに戻ってきてるはずだし」
「それじゃ、ふたりは今もイリーガルと戦ってるのかしら」
「まずいぜ。助けにいかないと」
境内に向かおうとしたガチャギリを、アキラが止めた。
「待ってください。わざわざ助けに行かなくてもいいんじゃないですか。イサコさんなら僕たちの助けなんていらないでしょうし、もしそれでもかなわなければ、どっちにしてもメガネを壊されて戻ってくるんだから」
「お前な、理屈ではそうでも、だからってあいつらを見捨てるわけ

にもいかねえだろ」
　ダイチがすぐに反対した。
「でも、それが一番合理的ですから」
「だから理屈じゃねえって。なあガチャギリよ」
「うーん、そうだなあ。気分としてはダイチに賛成だけど、救援隊が行けば行ったで損害が出るだろうしな。スポンサーの猫目さん、あんたはどう思うよ」
「え？」
　とこっちを見た宗助さんの顔は何故か困惑気味だった。
「え、じゃねえよ。聞いてなかったのか、捜索隊を出すか出さないかって話」
「それは、出さなくちゃならないね」
　宗助さんは断定的にうなずいた。
「だって、京子ちゃんまでいなくなっちゃったんだから」

　石段を登りきった境内に人の気配はなかったけれど、社殿や灯篭には明かりが灯って、わりとにぎやかな感じだった。京子ちゃんがいるとしたら明るい社殿の近くなんじゃないかと思ってみんなが口々に呼んだが、返事の声はなかった。
「ヤサコの妹から目を離したのはあんたの責任だぜ。ホゴカントクシャなんとかってさ」
　ダイチがぼやいた。
「いやあ、本当ごめん。ほんのちょっとの間だったんだけど」
　今日の宗助さんは謝りどおしだ。
「なんか頼りねえなあ。イリーガルが出ても勝負にならねえんじゃねえの」
　容赦のない突っ込みを入れたのはガチャギリである。
「イリーガルを倒すことは二の次だよ。まず京子ちゃん、それからイサコとヤサコを見つけるのが僕たちの仕事だろ」
　冷静に答えたハラケンを入れて、捜索隊のメンバーは5人。メガ

ネの壊れたふたりはもちろん、カンナとマユミも残してきた。
人数は少なくなったけど、ここにいるメンバーはそれなりの精鋭だ。簡単にやられたりはしないはず。
「おい、遅れるな。ばらばらになったら各個撃破されるぞ」
「へいへい」
ガチャギリに促されて私は歩調を早めた。なんだかんだ言って直接イリーガルと対峙してない私たちは余裕がある。その余裕はあんまりよくない種類のものかもしれないけど、もしさっきの対決の場に私やダイチがいたらもうちょっと戦えた、とつい思ってしまうのも事実だ。
「でもよ、今回は楽勝じゃね？　ハラケンの『待て』が効くってわかったんだから、イリーガルの動きを止めて、その間にタコ殴りにしちまえばいいんだろ」
私同様に楽観的観測を抱いているらしいダイチが言った。
「そううまくいけばいいんだけどね……」
ハラケンがあいまいにつぶやいた時、
「しっ、静かに」
先頭を進んでいた宗助さんが足を止めた。
「何かいた！？」
「ああ、多分」
宗助さんは社殿わきの茂みをにらんでいる。気のせいか、そこだけ他より闇が深いように見えた。
「気をつけろ」
ガチャギリが低い声でつぶやいた。私たちはゆっくり散会して、茂みを取り巻いた。
茂みがわずかに揺れる。私たちは攻撃の構えを取った。が――
「うんち！」
茂みから聞こえたのは、もうひとつの目標の声だった。
「なんだ、ガキかよ。脅かしやがって」
ダイチがため息をついて、両腕を広げた。

「おらガキ、こっち来い」
「うんち！」
茂みから出た京子ちゃんはダイチを指さしてひと声叫び、差し出された腕に飛び込んだ。
「こらうんちじゃねえ、ダイチだ」
「ダイチ君、なんだか手慣れてるね。小さい妹でもいるのかな」
宗助さんが小さい笑みを浮かべながら聞いた。ダイチは照れたのか少し赤くなって、
「別にいねえけど、なんか俺、こういう細かいのに好かれるんだよな」
私もなんとなくダイチのそんなところはわかる。頼りがいあるっていうか、お兄ちゃんぽいっていうか。だけどそう意識すると恥ずかしくなってつい言ってしまう。
「そりゃ精神年齢が同じだからでしょ」
「んだと！？」
ダイチが抗議の声を上げるのとほぼ同時に京子ちゃんが叫んだ。
「うんち！」
「うるせえよ。俺はダイチ――」
京子ちゃんの指さす先はダイチの顔ではなくて、参道わきの竹やぶだった。青白い光がふたつ、ちらと垣間見えた。
「やべえ！」
次の瞬間、やぶから飛び出した黒い筋が虹のように湾曲しながらこっちに向かうのが見えた。
「きゃっ」
間一髪飛び退いて私は固い地面に転がった。見ると、石の参道のテクスチャが見るも無残に破壊されている。
「フミエ、大丈夫か」
京子ちゃんを抱いたまま、ダイチがこっちに駆けてくる。その後ろにイリーガルが見えた。犬型と聞いていたけど全然違う。半分起き上ったお餅からイモムシのような足が横向きに飛び出した姿。サ

ッチーそっくりだ。
「私よりあんた、自分の心配して！」
叫んだのは、イリーガルの胸のあたりが鈍く光ったからだ。フォーマット光線が来る！
「ハラケン！」
「待て！」
が、ハラケンの叫んだのより一瞬早く、イリーガルは巨体を揺さぶってジャンプしていた。竹やぶのテクスチャを潰して派手なノイズを立てながら着地したイリーガルの体から、フォーマット光線が発射される。
「うわっ」
ハラケンの体に光の束が命中して、メガネがぱしんとはじけるような音を立てた。
「ハ、ハラケン！？」
ダイチが悲鳴のようにわめいた。
「やられた！　研一君の『待て』は半径１０メートル以内でしか有効じゃないんだ」
宗助さんが唇をかむ。
「君たち、撤退しろ！　京子ちゃんは見つかったし、最低限の目標は果たした」
私は思わず叫んだ。
「待ってよ！　ヤサコはどうするの」
「残念だが君たちじゃ勝負にならない。早く行け、階段の下まで全力で走れ」
「あんたは？」
「僕はここでイリーガルを引きつける。急ぐんだ。時間がない」
「フミエ、行くぞ」
ダイチが私の腕をつかんだ。
「でもヤサコが」
「バカ、この状況で俺たちに何ができるよ。まずガキを守ることだ

ろ」
ダイチの向こう側にいたガチャギリが言う。そうか、3人で京子ちゃんを守って逃げるってことか。
「――わかった」
ヤサコ、ごめん。あんたはイサコに任せた。
私たちは階段を駆け下り始めた。だん、と後ろに何かが落ちる音が響いて、その後でフォーマット光線の充填音が聞こえた。
「振り返るな！　走れ」
ダイチがどなる。
「おい、こっちだ」
宗助さんの声、それに続いて細かい発射音。イリーガルが電子音と人の声の中間の声で吠えた。
私たちは無我夢中で走った。明滅する青い光と赤い光を背中に受けて、後ろから押されるように。後で考えてみるとダイチのやつ、京子ちゃんを抱えてよく全力疾走の私とガチャギリについて来られたものだ。火事場のクソ力ってやつだろうか。
とにかくそれで、私たちはなんとか石段下の鳥居を駆け抜けた。
「京子ちゃん、みんな！　大丈夫だった？」
カンナとマユミが救護班よろしく駆け寄ってくる。
「私たちはなんとか。でもハラケンがやられちゃった」
「そう……」
カンナは一瞬表情を暗くしたが、すぐにほほえんで、
「とにかく京子ちゃんが無事で何よりよ。京子ちゃん、ダイチ君にだっこしてもらったんだ。良かったね」
頭をなでられて、京子ちゃんもにかっと笑った。
「ダイチ！」
「おっ、ちゃんと言えたじゃねえか。ご褒美をやらねえとな。そうだ、ココイルチョコ――」
突然、京子ちゃんはダイチの頭にしがみついた。
「チュー！」

「ぶぷっ！？」
頭の中が真っ白になった。
「あら、京子ちゃんたら」
「ずいぶん大胆なのね、うふふ」
落ち着いた声でコメントするカンナとマユミがとても憎らしかった。
こうして私はいろんな意味で京子ちゃんに先を越されたのだった。

第12話　電脳からの物体X　E　part

私がヤサコを嫌いなのは、あいつのおせっかいなところとか無神経なところとか優柔不断とかおためごかしとか探せば探すだけ出てくるが、結局そういった個々の理由を差し置いて、一番本質的なところは霧の中にあるように茫洋としている。もはや、ヤサコがヤサコだからとしか言いようがないだろう。

そうと割り切ってしまえば私はいちいち理由づけなんかしないでも大手を振ってヤサコを嫌いと公言できるから都合がいいが、でもひるがえってヤサコの立場になってみると、別に悪いことをしたわけでもないのに嫌われるというのも理不尽で、少々気の毒に思わないでもない。で、結局私は最初の前提にもとづいてヤサコに面と向かって嫌いだと何度も言ってはいるものの、そう言った裏につい後ろめたさがこもって心をささくれ立たせる。ヤサコを嫌いだと思うたびに、私自身が誰かから嫌いだと言われているみたいだ。だから近頃はそもそもヤサコの存在を空気みたいに捉えるように心がけて、なるべくいらつかないことにしている。

「おい、まだわからないのか？　一体ここはどこなんだ」

それでもその時は、言葉の端々が隠しきれない棘を含んだ。

「ちょっと待ってよ。今調べてるんだから」

答えながらヤサコは地図をにらんだ。だが、

「ヤサコ――」

「何ようるさいわね。今調べてるってば」

声を荒げるヤサコに、私は憐れみの感情を覚えた。

「お前……逆だ、地図が」

「わ、わかってるわよ」

ヤサコはぱっと地図の上下を引っ繰り返す。

「こうしたほうが見やすかっただけよ」

「違う」

「えっ？」
私はゆっくりと歩み寄り、地図の表裏を逆さにした。
「何故気づかない？　地名が鏡文字になってたろうに」
「そ、それは、だって、地図見てたんだもん。字なんか見ないわよ」
しどろもどろの言いわけをするヤサコの手から地図を取ると、
「おかしいおかしいと思っていたが、お前はサルだったんだな。さようなら。動物とはここでお別れだ」
くるりと回れ右して歩き出すと、ヤサコの犬がくうくう鳴きながらじゃれついてくる。私は犬を抱き上げた。
「そうか、お前もあんなサルとは一緒にいたくないか」
犬は尻尾を振った。
「ちょっと、どこ行くのよ」
「戻る。私は地図が読めるから」
「私だって読めるわ」
ヤサコのふくれた声が背中に届いた。続いて土を踏む足音。
「嘘をつけ！　ついて来るな」
早足になると、後ろの靴音もそれにならった。
「ついて来るなったって、あなたが地図持ってるんだから」
「ったく、お前はどっちでも変わらないだろう」
犬が身じろぎして、地図が揺れた。
「おっと、あんまり暴れるなよ」
抱え直そうとすると、犬はますます両足をばたつかせた。
「どうしたんだ？　サルでもご主人様のほうがいいか」
少しだけ嫉妬に近い感情を覚えながら、私は犬を降ろした。しかし犬はヤサコの元へは戻らず、前を見つめて低くうなった。
「霧！？」
その時になって、辺りを濃い電脳霧が取り巻いていることにようやく気づいた。
「デンスケ、来なさい！」
ヤサコの鋭い声が飛ぶ。犬はすぐに身をひるがえし、ヤサコの胸

に収まった。ヤサコは不安そうに周囲を見回して言った。
「イサコ、早く帰らないと」
「待て、今はダメだ」
すぐにも駆け出しそうなのを、私は止めた。
「空間のバージョンが低すぎる。下手に動き回ると電脳体分離するぞ」
「え――。じゃ、じゃあ一体どうしたら」
「落ち着け。霧は一過性のものだ。しばらくここで待って、少し空間が回復してから戻るしかない」
「そう」
ヤサコはもう1度周りを見渡した。霧はさらに濃い。視界は１０メートルもないくらいだった。
「仕方ないわ」
デンスケを両腕で抱いて、ヤサコは座りこんだ。

そのまま３０分も待っただろうか。日はとうに落ちて神社の林は真っ暗に近かった。霧はなかなか去らず、電話やメールは当然通じずに、私たちにできることといえばただ待つより他になかった。
時々唐突にがさりと茂みを分ける音が聞こえて、私の心臓は早鐘を打った。不安がのど元にまで込み上げてそれを抑えつけるたび、背伸びしてるけど自分はやっぱり小学生なんだなと、寂しいような、一方でどこか安心したような、おかしな気分が心を染めた。
「お前はどうして私を追ってくるんだ」
そんな言葉が出たのは、そういう私の弱さゆえだったのかもしれない。
ヤサコは笑った。心の内を見透かされたようで、私はくだらない質問をしてしまったことを後悔した。
「追ってきてほしい？」
「バ、バカを言え」
「デンスケ、お行き」

地面に降ろされた犬は、まっすぐ私の目の前まで歩いてきた。伸ばしかけた手は中空で一旦ためらって、けれど結局その小さくて温かくて柔らかいものを持ち上げた。

「デンスケを抱いてるとね、なんだか安心するのよ」

やっぱり不安感が外に出ていたらしい。悔しいけど、だからといってデンスケを離す気にはならなかった。

「私の家、共働きだから、昔はひとりでお留守番することが多かったの。それでオジジがひとりでも寂しくないようにって、デンスケをくれたのよ」

確かに、デンスケの丸まっちい体を抱きしめていると、不安とか恐れとかが溶けて流れ出し、その代わりに何かもっときれいなものが閃くのが見えるようだった。

「夜寝る時もデンスケと一緒だった。そうするとね、時々会えたの」

ヤサコはそこで少し口ごもった。

「会えたって、何に」

先を促すとヤサコははにかんだ。

「笑わないでね。『夢のお姉ちゃん』」

「夢、か」

夢なら私もよく見る。

「私、こんな霧の中を歩いてるの。それで、ああ寂しいなあ、誰かに会いたいなあって思うと急に視界が開けてね、夕暮れの公園なのよ」

公園は私たちにとって全くの別世界だった。よくお兄ちゃんとお姉ちゃんと3人で、暗くなるまで遊んだ。夕方になると帰らなくちゃならないのが寂しくて、手を引かれながら私は幾度も振り返った。夜の公園を私は知らない。だから夕映えの公園は、きっと永遠につながっているのに違いないと、幼い私は信じていた。

「そこにいつも同じお姉ちゃんが待っててね。お姉ちゃんっていっても私とひとつかふたつくらいしか違わないみたいなんだけど、その人が、いつも私を見て少し悲しそうな顔をするの」

それはきっと、「お姉ちゃん」も誰かを待っていたからに違いない。彼女の待つ相手はヤサコではなかったのだ。

「でもすぐ笑顔に戻って、『遊ぼう』って言ってくれるの。楽しかったなあ。時々デンスケも一緒で」

デンスケはヤサコの言葉がわかっているかのように鼻を鳴らした。

「それで最初の質問の答えだけど、あなたの雰囲気ってそのお姉ちゃんと少し似てるのよね。だから何か、あなたのことって他人事と思えなくて」

お前に心配されるほど落ちぶれちゃいない、くらいは、普段なら答えていたろう。でも私は何も言わなかった。ヤサコの言う「お姉ちゃん」とは誰か、彼女は本当に私に似ているのか。

もしそうなら、それは少し――嬉しい。

その時、デンスケが突然震えた。どうしたと聞くまでもなく、私にもその意味がわかった。

霧の向こうに人型が見える。ただの人ではない。異様に伸びた後頭部、背中に張り出した幾本もの突起、そして長い尻尾。

「リドリー・スコット……」

ヤサコがわけのわからないことをつぶやいた。

「おいヤサコ、気をつけろ。こいつが噂のヤツだ。かなり強いぞ」

言い終わったほとんどその瞬間に、人型の尾が伸びた。

「来たな！」

デンスケを左手でしっかり抱えながら右手でミニタイプの鉄壁を投げつける。繰り出された尻尾の先が壁を突き刺した。貫通こそしなかったものの、壁は見る間に赤熱する。やはり強い。デンスケをかばいながらじゃ勝てないかもしれない。

私は振り返った。

「ヤサコ、デンスケを――」

「伏せて！」

ヤサコが半分悲鳴のように叫んだ。反射的に身をかがめると、青い光が頭のすぐ上をかすめた。

「フォーマット光線!?　何故イリーガルが」
伏せたまま地面を転がってあおむけになり、光線の元へ暗号を連続で3発投げつける。2発はかわされたが、ひとつは手応えがあった。
「このっ」
ヤサコがメガビーを撃つと、影はひるんだように乳白色の霧の中へ消えた。
「イサコ、大丈夫?」
あおむけのままの視界にヤサコの顔が映った。
「安心しろ。ダメージはない。こいつもな」
小脇のデンスケを、私は差し出した。
「だが、デンスケは預かっててくれ。自由に戦えない」
「ええ」
ヤサコがデンスケを受け取ろうとした時。
ヤサコの頭上を影がよぎった。
「ヤサコ上だ!」
片手でヤサコを突き飛ばし、もう片方でデンスケをかばう。激しい電子音が耳元で響いた。委細構わず起き上がりイリーガルの位置を目で追う。枝々をサルのように伝うイリーガルの姿を捉え、暗号をお見舞いしようとしたところで、腕の痺れに気がついた。
「しまった……。意外にダメージが大きい」
右腕の肘から先はノイズだらけで、使い物にならなかった。左にはデンスケがいる。
今の攻防でヤサコとは距離が開いてしまった。立ち姿が霧に紛れる寸前だから、7、8メートルはあるだろう。
イリーガルに立ち向かうには、デンスケを離して左手で戦うしかない。けれど、もしデンスケが1匹でいるところを狙われたらひとたまりもない。私がヤサコのところまで走ってデンスケを預け、その後でイリーガルと戦う。それしか方法が思いつかなかった。
「ヤサコ、デンスケを頼む!」

どなりながら、目隠しに鉄壁を2枚、イリーガルに向かって投げた。壁はふたつともミニタイプだ。フルサイズのは使いにくいと思って日頃持ち歩いていなかったが、私のおごりだったか。耐久性の高いフルサイズのがあれば、戦い方もまた違ったろうに。

「イサコ！」

ヤサコがこっちに駆け出した。私もヤサコに向かって走り――かけたところで、頭上で嫌な響きが聞こえた。

「いつの間に……！？」

イリーガルは私の真上にいた。必死で飛びのいて、私はまたもや固い地面に転がった。

イリーガルの伸ばした尾が地面の直前でストップし、こっちを向けて直角に折れ曲がった。

間に合わない。

デンスケ、ごめん。

私はデンスケを胸元に引き寄せて思い切り抱きしめた。ごうんと重い音が響き、目の前で緋色の輝きが爆ぜた。

「イサコ！？」

すぐ近くで、切迫したヤサコの声が聞こえる。

「何やってる。お前は逃げろ。私はやられた」

デンスケも、とは言えなかった。

「やられてないわ！　それよりその光……」

「え――」

振り返ると、地面に倒れた巨大な鉄壁がイリーガルの尾を挟んでいた。ヤサコがやったのか。

イリーガルはきしんだ叫びを上げながら尾を引きぬこうともがいている。

そして、私の胸元ではさっきの緋色がまだ光っていた。

「何だ、これは？」

胸元からこぼれ落ちた電脳の鍵とデンスケの首輪が触れ合って、光を発していた。

「その光は」
背中越しに手が伸びた。ヤサコのだった。
私はその時、何かしら運命的なものを感じていた。私とヤサコはふたりで、同じひとつの。
お姉ちゃん。
ヤサコの手が触れた瞬間、光は数倍にも増した。霧がますます深まる。
不意に扉が開いた。ような気がした。何を言ってるんだ、私は。扉なんてどこにもないのに。
「扉が……」
ところが、ヤサコも同じことをつぶやいた。
どこからか、夕映えが照らしていた。禍々しくて美しかった。
その時、イリーガルが震えた。と、見る間に体が膨れ上がる。元の姿の数倍にも巨大化したその姿は、まるでサッチーだ。そう思った次の瞬間にはサッチーの体型は崩れ、わき腹からさっきのイリーガルの尻尾、無数の触手、犬の頭、その他何だかわからないぐじゃぐじゃしたものが出たり入ったりした。
「どうなってるの!?」
ヤサコの疑問に答えるように、イリーガルの頭上にメッセージが表示された。
『規格外の空間です。損傷の恐れあり。強制退去します』
イリーガルの撃ったフォーマット光線が頭をよぎった。
「はっきりとはわからないが、このイリーガルはサッチーを取り込んでいたらしいな。空間のバージョンが下がりすぎたせいで、サッチーがアンマッチを起こして強制分離されかけてるんだろう」
やがて小さな破裂音が鳴って、サッチーのアラームを残して何も聞こえなくなった。
「ねえ、これ」
ヤサコが草むらにかがんで、何かを拾い上げた。
片手に収まるくらいの銀色の円盤だった。表面に時々煙のように

何かの映像が浮かびかけて、また元の銀色に戻る。
「パスワードだ。それが出てきたってことは、イリーガルは消滅したらしい。あっけなかったな」
私はヤサコに背を向けた。
「待って。いらないの、パスワード？」
欲しい。本当をいえば、のどから手が出るほど欲しかった。
パスワードはもう少しで揃いそうだ。
「それはお前が拾ったものだ」
でも、私は振り返らなかった。もう残りふたつかみっつか、必ず私の手で揃えて見せる。それだけが、私がお姉ちゃんにできることなのだから。

霧は消え、月明りの道だった。

「お姉ちゃん」
ヤサコと別れて大分たってから私はそう、口に出した。
ヤサコもお姉ちゃんを知っている。今日初めて知ったはずなのに、どうして私は驚いていないんだろう。
もしかして、前にカンナについて思ったのと同じように、私とお姉ちゃんの間をも、ヤサコは阻んでいるのだろうか。だから私はヤサコを嫌うのだろうか。
木々の間を抜ける光は道と、そしてそこを歩む私をまだらに照らした。どれだけ進んでも光と闇は交わらなかった。
それを私はとても寂しく感じた。握りしめた手の中で、汗が冷たく湿った。

第１２話　電脳からの物体Ｘ　Ｅ　ｐａｒｔ（後書き）

第１２話は今回で終りです。

第１３話　立体駐車場のヌシ　Ａ　ｐａｒｔ

昔の哲学者によると、私があなたの心を知ることは、絶対にないそうです。

オバちゃんから電話があったのは、長い夏の夕方が終わって、夕飯の匂いが台所から流れ始めた頃だった。
「研一、そっちに行ってない？」
切迫したその声に、私は悪い予感を覚えた。
「来てないけど……」
「そうか。すまない」
そのまま通話を切ろうとするオバちゃんを、慌てて止める。
「待って。ハラケンに何かあったの？」
「ああ」
電話の向こうの声は、少しためらうような間を置いた後で言った。
「昼過ぎに出かけたきり、まだ家に戻ってないんだ」
私は時計を見た。７時１５分だった。
「大丈夫よ」
反射的に言葉が出る。
「ちょっと遅くなってるだけだわ」
「そうだといいんだが」
「大丈夫だってば」
私はことさらに明るく繰り返して、さらに続けた。
「カンナにはもう連絡を取った？」
「ああ、もちろん」
もちろんという答えは予想以上に心に響いた。会話に不自然な間が空くのを、自分でもどうにもできなかった。

「ヤサコ？」
「ううん、なんでもない。私、フミエちゃんに電話して探しに行ってみる」
「――もう暗いから、気をつけてな」
子供は家にいろとは、オバちゃんは言わなかった。それだけオバちゃんは私たちを信頼してくれているし、逆に言えばハラケンを私たちと同じに信頼できなくなりかけているのかもしれなかった。
「何かあったら電話して」
「ああ」
電話を切ると、私は台所に向かった。
「ごめん。私、ちょっと出かけてくる」
オババはみそ汁の味を見ながら答えた。
「どうかしたかいの」
「ハラケンが帰ってないんだって。心当たりを探してみる」
言い捨てるようにひるがえした背中に声がかかる。
「待つんじゃ」
どきりと肩が震えた。
「い、嫌よ。行くからね」
「バカモノ」
すぐ後ろで声がして思わず振り向くと、どんな早わざか、ラップに包んだおにぎりがふたつ、オババの手に乗っている。
「腹が減っては戦ができんじゃろ。途中で食っていくんじゃ」
「あ、ありがとう」
「ひとつはフミちゃんのじゃからな」
どこまでも察しのいいオババなのだった。

カンナはオバちゃんの知らせを受けてすぐに家を出たそうだ。それで私はフミエちゃんと、いつも学校に行く時に待ち合わせる通りの角で落ちあった。
「なんかさ、ここで会うと学校のこと思い出さない？　グレーな気

分っていうか」
大げさなため息をつくフミエちゃんにおにぎりを渡しながら私は言った。
「フミエちゃん、夏休みはまだ半分残ってるんだから」
フミエちゃんは「あんがと」と軽く頭を下げ受け取って、
「半分ないわよ、もう残り18日だもん。あーあ、憂鬱よねえ」
「気が早いなあ」
私が呆れていると、フミエちゃんは不景気を払うように首を振った。
「ま、いいわ。とっとと食べて、ハラケン探しに行こ」
近くのバス停のベンチで私たちはおにぎりを食べた。異常にすっぱい自家製梅干し入りで、口が曲がりそうになったけどおいしかった。
「さあ行こうか」
指についたご飯粒まできれいに食べ終えてフミエちゃんは立ち上がった。
「ちょっと待って。ダイチ君は？」
私はてっきりフミエちゃんがダイチ君を誘ってくると思っていたのだ。
「ん、別に声かけてないわよ。ヤサコが連絡したかと思った」
「あれ？」
マンションにイリーガルが現れた事件以来、フミエちゃんとダイチ君の距離はかなり縮まっている風だったんだけど。
「何よヤサコ。人の顔見てきょとんとして」
「あの、ダイチ君て――」
「はあ！？」
フミエちゃんは近くの家に聞こえるくらい大きい声を出した。私は思わず身をすくませた。
「ううん、なんでもないなんでもない。早く行きましょ」
どうもふたりの間に何かあったらしい。ここは触らぬ神に祟りな

しとして、後で情報の早いアイコちゃんにでも聞いてみよう。
「ヤサコ、探す場所思いつく？　ハラケンがいそうでオバちゃんがまだ行ってないところって言えば、やっぱ鹿屋野神社かな」
「それはないと思う。鹿屋野神社ってこの時期黒客が根城にしてるでしょ。さっきガチャギリ君にメールしたんだけど、今日はハラケンを見てないって」
「ふうん。じゃ、学校は？」
「どうかしら。休み中でも当番の先生と宿直の警備員さんがいるのよ。夜まで居続けるのは難しいんじゃないかな」
だからこそ黒客も拠点を移さなければならないのだ。
「えー。でも他に思いつかないわよ」
「そうねえ」
サッチーが入れる場所なら、既にオバちゃんが探しているはずだ。そうなってくると残りは、神社、学校など、管轄官庁の違う公共機関関係だけど、これはダメっぽい。後は、もしかして私有地？
「ねえ、廃ビルとかでガードのゆるいところ、知らない？」
フミエちゃんは腕を組んだ。
「うーん、前に廃工場でやり合ってからこっち、どこもがっちり警備してんのよね。事故なんか起きたら責任問題だから」
「駅南に『空中庭園』って大きいビルがあるじゃない。あそこは？」
「あーダメダメ。ネットでメタバグの宝庫とか噂が立ってるけど、入口のセキュリティが固くって死屍累々って聞いたわ」
「そうだったの」
他に心当たりはないかふたりで考えたけれど、結論は出なかった。
「やっぱ、とりあえず学校に行ってみない？　他に思いつかないよ」
フミエちゃんが提案した。
それしかないか。私は天を見上げた。
その視界の隅に移る影。
「……立体駐車場」
「え？」

「駅裏の立体駐車場よ。あそこ、完成したけどオープンはしてないでしょ」
私は駆け出していた。
「それ、あるかも。オープン前なら警備も手薄だし、人もいないし」
フミエちゃんの靴音がすぐに私のを追った。

結果から言って、私のカンは珍しく大当りだった。駐車場の入口についたちょうどその時、街灯の影からハラケンが現れたのだ。
私より早く、フミエちゃんが大声を上げた。
「ちょっとハラケン！　あんた今までどこほっつき歩いてたのよ。みんな心配して探してんのよ」
「ああ、ごめん」
ひざや袖口を砂ぼこりで汚して、髪にクモの巣まで引っつけたハラケンは、どうかすれば再び街灯の向こうの闇に消えていってしまいそうに見えた。だから私はついその腕を取りそうになって、けれどハラケンの服に触れた途端何かの後ろめたさが込み上げ、一番汚れていた左の袖口を、それでもしっかりとつかんだ。
フミエちゃんが電話をかけ出した。
「カンナ？　見つかったわよ。うん、ハラケンの家の近く。これからヤサコとふたりで送るわ」
「カンナが探してるの」
ハラケンは少し眉をしかめた。
「危ないな。こんな遅くに」
「ちょ、お前がそれ言うか」
フミエちゃんがハラケンをにらむ。
「それに私たちの立場はどうなんのよ。カンナと同じようにあんたを探してた私たちは」
「ごめん。迷惑かけた」
ハラケンは素直に謝った。
「イリーガルを探してたんだ。夏休みの自由研究のために。でもや

っぱりイサコなんかとは違うね。全然見つからなくてさ」
寂しそうに笑いながらクモの巣を払うハラケン。
私はひとつの確信を持った。
「まあいいわ。どうせ後でオバちゃんから大目玉だろうしね。ヤサコ、帰ろ」
「う、うん」
歩き出すと、私の手はとても自然な感じにハラケンの服から離れた。どちらからそうなるようにしたのか、いまだにわからない。

その後は、ハラケンの家に行ってオバちゃんへ身柄を引き渡し、民家の入り組んだ細い路地をフミエちゃんと歩いた。
「なんなのかしらねあいつ。カンナといられる時間だってもうそんなにないってのに、自由研究なんかにうつつを抜かしてられるかしら」
「フミエちゃんならどうする？　もし好きな人が遠くに行っちゃったら」
「え、私？」
フミエちゃんは軽く胸をたたいた。
「私は大丈夫よ。離れる心配ないから」
と言った後で宵闇を透かしてもわかるくらい顔を真っ赤にして、
「いや違うからね。そうじゃなくて、そういう人いないから心配ないって意味だからね」
私はちょっと笑ってしまった。それと一緒に少し安心した。
「まあそういうことにしといてあげるわ」
「なっ、なによ。そのちっとも信じてませんって態度」
「信じてるわよ」
「いや信じてない！　ヤサコのくせに生意気な」
「ってちょっと待った。何よその構え。メガビーは禁止だから」
「うっさい、問答無用」
きゃあきゃあ騒ぎながら歩いたら、あっという間に通りにぶつか

った。
フミエちゃんと手を振って別れ、しばらく家のほうに歩いてから、反対方向へ歩く後ろ姿の振り向かないのを確かめて、脇道に飛び込んだ。
少し遅くなるとオババに電話で告げ、ひとりでさっきの道へ戻る。ハラケンは嘘をついている。私はその嘘の正体を確かめに行く。

空は晴れていたが、月はなかった。にぎやかなフミエちゃんと離れてひとりで歩くと、夜の町がこんなにも昼間と違うものかと、今さらながらに不安を感じた。そうして、不安は次第にひとつの暗がりに宿る。ハラケンを見つけた、立体駐車場だ。
隣家の塀とぴったりくっついているかと思った駐車場の壁だが、近づくと、人ひとり何とか通り抜けられるくらいの隙間があった。私はハラケンの汚れた服装を思い出した。
「デンスケを連れてくれれば良かったかしら」
何に役立つってわけじゃないけど、こんな時デンスケがいてくれるとわけもなく頼もしい。
少し迷ったけれど、結局私は暗い隙間に分け入った。途中廃材みたいながらくたに足を取られて転びかけたり、隣家から伸びた大枝に視界を阻まれたりしたけど、なんとか向こう側に抜けることができた。
「ここ――別世界？」
そんな言葉が自然に出てくるほど、駐車場の裏側は外界から隔離された場所だった。駐車場の向かい側は駅舎の事務所のような建物、両隣は民家。事務所と民家の一方には窓がない。もう片方の民家には大きな木が繁っていて、２階に窓があるのが辛うじてわかる程度だった。
多分１０坪もないその空間の真ん中に私は進み出た。日当たりが悪いせいか、ところどころに数センチくらいの雑草がかたまっているだけで、がらんとした感じだ。

不意に風が動いた。違う。風はない。風ではなく、がさがさ、ひそひそと音がする。

突然電話の着信音が空き地中に響き渡って、私はあたふたと発信元を見た。フミエちゃんだ。あちゃ、単独行動がばれたかな。

「もしもしフミエちゃん？　どうしたの」

『脅かすつもりはないから』

「え、なんて？」

フミエちゃんの声には間違いなかった。けれど妙に弱々しくて遠い。雑音も激しい。

『脅かすつもりはないから、ゆっくり後ろを見て』

「フミエちゃん？　フミエちゃんよね」

そうでないとなかば確信しながら、自分に言い訳するように私は繰り返した。

当然のように答えはない。半べそで私は振り返り、そのままへなへなと崩れ落ちた。

闇に暗い駐車場の壁に、それよりなお黒く浮かび上がった丸い影。黒の中でひと際輝く、黄金色の猫の瞳。

『人に会うのは今日ふたり目だ』

ふたり目。ハラケン。私は悲鳴を飲み込んだ。

「あ、あなた、イリーガル？」

『そう。もう通話を切っていい』

声は電話を通してではなく、イリーガルのいるほうから聞こえた。もうフミエちゃんのじゃない。何人もの男女が一斉に喋っているような、何重にも重なった、遠近感のつかみがたい声。

『あなたは何を求めてきた』

それは例えば、ふた昔くらい前の機械のような声だった。抑揚はきちんとあるし、よく聞けば言葉の調子から感情も聞き取れたのだけれど、どうしてもある特別の個人とは感じられない。

「求めるって、どういう意味？」

『望みだ。最初に来た子供は、私に自らの望みを告げた。あなたは

そうしないのか』

望み？　何のために？　まさか、このイリーガルが子供の望みを叶えるっていう『ミチコさん』？

「あなた、ミチコさんなの？　望みを叶えてくれるの？」

イリーガルは目を細め、体を揺すった。笑っているらしい。

『第1の質問については、ミチコは私ではないが、私はミチコであるとも言えるしないとも言える。だがあなたたちの考えに照らすなら、私はミチコではない』

「え？　わからないわ」

得体の知れないイリーガルと対等の口が聞けた理由は、やっぱり「誰か」と話している気分がしなかったからだろう。相手の命令口調も年齢性別のわからない言葉遣いも、そういう不自然な感覚のせいでまるで気にならなかった。

『理解できないだろうが理解させる言葉を私は持たない。だから私はミチコではないとだけ理解しろ』

全然わからなかったけれど、聞くだけ無駄ということのようだ。私はうなずいた。

『第2の質問については、私自身に望みを叶える力はない。だが望みの内容によっては、それを叶える方法を知っている。故に聞こう。あなたの望みは何だ？』

望み。私の望み。

ハラケン。オジジにオババや京子、それにデンスケ。フミエちゃん、アイコちゃん。カンナ。ダイチ、黒客。

イサコ。お姉ちゃん。

『何故他人のことばかり考える。私には、私の望みは私の存続としか理解できないのに』

見上げると、片方しかない猫の目が私を見つめていた。

『人間とは面白い。己の欲望ばかり口にしながら、いざとなると他人を思う。先ほどまでいた男子とて結論は同じ』

私はそこでやっと自分の目的を思い出した。

「あなた、ハラケンに会ったの？」
『会った。そして望みを聞いた』
「ハラケンの望みって、何？」
イリーガルの瞳が細まった。
『それをあなたに伝えることを彼は望まない』
「あ、ちょっと」
瞳はさらに細く、カミソリの刃のように細まる。
『私はいつもここにいる。また来なさい。あなたの望みを持って』
「待って」
私は焦って変なことを聞いた。
「そ、そうだ。あなたの名前は」
『名前』
イリーガルはくつくつ全身を揺すり、
『さっきの子供は、駐車場のヌシと呼んだ』
ほとんど1本の筋になっていた金色の光が上下からすうと消えて、
闇が残った。

第13話　立体駐車場のヌシ　Ｂ　ｐａｒｔ

「うーむ」
俺は手で電話の形を作ったり解いたりした。眼鏡は律義に通話モードと待ち受けモードを切り替え続ける。
こっちから電話するべきか。でも何て言ったらいいんだ。
最近フミエから連絡がないのだった。
原因は京子の例のアレとしか考えられない。あの日を境に、なんだかんだ1日に1回は話してたのがぷっつり途絶えたのだから。
「クソッ、ヤサコのやつ！　妹のしつけがなってねえ」
やつ当たりだとわかっちゃいるけど、誰かに当たらずにはいられない。フミエに電話するふんぎりがつかないなら、いっそヤサコに文句言ってやるか。
さっきから開きっぱなしの電話帳の、フミエからひとつ下を選んでコールする。3コール目で相手が出た。
「あっ、ダイチ君」
「ようヤサコ。今日はお前の教育方針についてだな」
「聞いて。イリーガルが喋ったのよ」
「そうだイリーガルだ違うよ妹だよ。って待て、お前今何つった？」
「イリーガルよ！　イリーガルが喋ったの」
俺は時計を見た。
「おい。寝ぼけるには早えぞ」
電話の向こうでため息が聞こえた。
「フミエちゃんも同じこと言った」
「言うだろそりゃ」
「でも本当なのよ。口で言ったって信じてもらえないのはわかってる。見に来てよ、すぐ近くだから。駅の近くの立体駐車場よ」
「ああ、わかったわかった。明日な」
さらにまくしたてようとするヤサコを適当にあしらって、俺は電

話を切った。
　イリーガルが喋る。そんなことあり得るのか？
「あり得ねーだろ」
　つぶやいて椅子の背中に寄りかかる。イリーガルなんてウィルスだろが。ウィルスが言葉なんか話すか。
　待てよ。ウィルスってのはそもそもプログラムか。プログラムってものは、プログラム言語だかなんだかよくわからないけどそういうものでできてるはずだ。そうならば、イリーガルはそもそも言葉なんだから、言葉を使って当り前か？
　よくわからなくなってきて俺は電話帳を繰った。行き当たったのは、用心して番号以外のデータを全て空白にしてある相手だ。
「もしもし？　どうしたんだい、こんな時間に」
　相手はすぐに出た。歩きながら話しているのか、声の合間に足音が混ざる。
「タケルか。久しぶりだな。実はちょっと教えてほしいことがあるんだ」
「う、うん、わかった。ちょっと待ってて」
　言葉が途切れ、足音が早まった。やがてばたんと音がしたのはドアを閉めたのだろう。
「お待たせ。用件をどうぞ」
「おい、何か取り込み中だったか。都合が悪ければかけ直すぞ」
「ううん、大丈夫だよ。自分の部屋に戻っただけ。資料が揃ってるからね」
「それならいいけど」
　宗助さんを避けたんだな。
　俺はひとりっこだからわからないが、兄弟がいるってのもけっこう大変らしい。フミエしかり、ヤサコしかりだ。あっ、ヤサコには妹のことで電話したのに、結局ひと言も話せなかった。
「どうしたの？　黙りこんで」
「なんでもねえ。こっちのことだ。それより聞きたかったのはだな、

言葉を喋るイリーガルなんているのか、ってことだ」
「喋るイリーガル！？」
タケルは予想外の大声でどなった。
「お、おい、なんだよ。何か知ってんのか」
「あ、ごめん」
タケルは電話の向こうでぶつぶつつぶやいていたが、やがて、
「喋るイリーガルっていうのは都市伝説の掲示板で見たことあるけど、まさかって思ってた。ダイチ、見つけたの？」
「違う。ヤサコが見たってうるせえんだ」
「ふうん。またヤサコか」
しばらく沈黙が続いた。ややあって我慢しきれなくなった俺が何か言おうとした、そのちょうど同じタイミングでタケルが聞いた。
「それで、見に行くつもり？」
「ああ。俺も何かの間違いじゃねえかと思ってるんだが、ヤサコがうるせえし、もし本当だったらビッグニュースだしな。で、お前は？」
「まだダメだ」
タケルは即答した。
「まだ宗助さんに認めてもらえねえってのか。俺はもう十分世話になったと思うんだがな」
「もう少し。もう少しだけ待って。そうすれば――」
タケルがあまり確信があるような言い方をするから、俺は少し引っかかった。
「そうすれば何だ？」
「い、いや、別に。とにかく空間管理室の動きに気をつけて」
歯切れの悪い返事だったが、もしかすると宗助さんから口止めされていることでもあるのかもしれない。俺はそれ以上突っ込まなかった。
「もし本当にイリーガルがいたら、どんなやつだったか特徴を教えてよ」

「OK。明日、朝飯食ったら速攻で行って確かめる」
「うん」
タケルは慌ただしく電話を切った。

宣言どおり翌日の午前中、俺は立体駐車場を目指していた。ただし、フミエとふたりで。
「朝っぱらから呼びつけて何かと思ったら、昨日のヤサコの話？」
フミエは口を尖らした。
「た、探偵局として確かめておくべきだろうが、こんな事件は」
「そうかしら。喋るイリーガルって、そんなに珍しい？」
俺は驚いてフミエの顔を見た。
「珍しいだろ。これまでいなかったじゃねえか、そんなやつ」
「いたわよ。半分喋ったのなら。前、私の家に出たやつ」
「ええっ！？　そんな話、聞いてねえぞ」
「言うほどのことじゃないもん。コイル探偵局はイリーガル研究会じゃないもん」
フミエはなんだかふてくされて言った。
「お前、なに怒ってんだ？」
「怒ってないわよ」
フミエはつんとしてあっちを向く。どう見ても怒っている。
「いきなり呼び出したことは謝る」
だけどそれはわざとだった。そうでもしてちゃんと会って話さないと、このままずるずると夏休みが終わってしまいそうな気がしたのだ。
「怒ってないってば」
にべもないってのはこのことか。それならむしろ、単刀直入に行ってみるか。
「もしかしてこの前の京子のことなら、それもすまねえ」
「はあ！？」
フミエはきっとこっちをにらみつけた。

「あれはあんたが謝る話じゃないでしょ！　大体どうして私があんなちっちゃい子と比べられなくちゃいけないのよ！　そもそも怒ってないわよ！」
「え――だから、それはその」
俺がしどろもどろになっていると、フミエはきびすを返した。
「こんな言い合いするのもアホらしいわ。さよなら」
言い捨てると、こっちの返事も聞かずに走り出す。見とれるような瞬発力でまたたく間に遠ざかった姿が、メガシ屋へ向かう角を曲がって消える。
残された俺は間抜け面をさらして立ち尽くしていた。それほど長い間ではないつもりだったが、本当は長かったかもしれない。
突然背中をたたかれた。
「うおっ！？」
俺はのけぞって危うく転びそうになった。
振り返るとハラケンだ。
「お前いつからそこにいた！？」
さっきのフミエとのシーンを見られたかと、俺は慌てて聞いた。
「今だけど？　ダイチこそ、朝から道の真ん中で何やってるの？」
どうやらハラケンは何も見なかったようだ。俺は深いため息をついた。
「俺はイリーガルを探しに行くんだよ。ヤサコから連絡なかったか？　喋るイリーガルを見つけたって」
「ヤサコがそんなことを！？」
変な驚き方だった。まるで、喋るイリーガルよりも、ヤサコがそれを知っていたことが意外だとでもいうような。
「ハラケン、お前何か知ってるのか？」
「いやネットで、掲示板で読んだんだ。いたんだね、そんなイリーガルが」
どことなく怪しい受け答えだが、タケルも同じことを言っていた。
「お前も行くか？　すぐ近くらしいけど」

「ごめん、今日は別の用事があるんだ。駅南の友達に会いにね」
「へえ」
駅南の第一小と俺たち第三小は宿命のライバルだから、あんまり友達同士の行き交いはない。
「気をつけろよ。その友達はいいやつかも知れねえけど、途中で第一小のやつらに絡まれたりしねえようにな」
「ありがとう。装備はひととおり持ってるから大丈夫だよ」
じゃあ、と軽く手を上げて、ハラケンは立ち去ろうとした。
「あ、ちょっと待ってくれ」
「え、何？」
「お前さ、この間のアレ、見てたよな」
「アレ？」
「アレっつったらアレだよ。ほら、ヤサコの妹が」
「ああ、アレ」
ハラケンは目をそらした。
「アレってそんなにショッキングだったか」
「え、うーん……。そりゃみんなはびっくりしたけど、京子ちゃん、ふざけてただけだろうし、まあ人によるって言うか」
ハラケンは考え込んでいる。
「お前はどうよ」
「ええと、僕はそれほど驚かなかったけど」
「違えよ。お前とカンナはどうかってこと」
「ああそれは」
そこでハラケンは硬直した。顔に血が上ったかと思うと突然振り返り、さっきのフミエに負けない早さで走り去っていく。
俺はまたも取り残された。ハラケンとカンナがどうなのかは、純情な俺にはわからなかった。
仕方なくひとりで、俺は立体駐車場に向かった。
それにしても妙な日だ。なんかかみ合わねえ。フミエもハラケン

もそうだし、ヤサコも。ヤサコはどうしてハラケンに連絡してないんだ？　そういえば、カンナにはどうなんだろう。

俺の電話帳にはもちろんカンナの番号もある。だが、メールならともかく、直接電話したことはこれまでになかった。

結果から言うと、カンナとは話さなかった。電話をしなかったんじゃなく、つながらなかったのだ。

「らしくねえな」

ハラケンと一緒ならともかく、カンナひとりで電波の通じない場所にひとりで行くなんて、普通なら考えづらいことだ。一体どこへ行ったんだ？

だが、疑問はすぐに解けた。

ヤサコに言われたとおり、立体駐車場の狭い隙間を抜けて向こうに出た時、近くに人影が見えた。幸い濃い電脳霧に紛れて向こうは気づかなかったらしい。俺は再び隙間に身を隠した。

「望み」

カンナの声だった。

『そうだ。人は面白い。群れれば同じことしかなさぬのに、ひとりではそれこそ、人の数だけ違う。我々はひとつであっても皆違い、ばらばらであっても皆同じなのに』

もうひとつの、いや、ひとつと言って正しいのかわからない、大勢の人間が一斉に喋るような声がカンナに答えた。

こいつがイリーガル。本当にいたのか。

「あなたは研一の望みを叶えたの」

『叶える方法を教えた。だが、その中身は教えられない』

「わかってるわ」

決然とした言葉が俺を驚かせた。カンナがそんな口調で話すのを見たことがなかったからだ。

「私の望みを言う。研一が幸せになることよ」

一切のためらいを見せず、カンナははっきりと言い切った。

『抽象的に過ぎる。だがいっそいさぎよい』

イリーガルは笑うような泣くような声で言った。
「研一に教えたなら私にも教えて。私の望みを叶える方法を」
しばらく返事がなかった。
「どうしたの。答えられないの」
「彼を止めることだ」
俺は思わず飛び出しそうになった。答えたのは、聞いたことのない女子の声だったからだ。
「今の声！？」
カンナも驚いたらしい。
『私だ』
イリーガルは淡々と答えた。
『だがいいのか。彼を止めれば、彼はあなたから遠ざかるかもしれない』
「それは私の望みと関係ないわ」
カンナはあくまで決然と言い放った。
「研一が幸せになるなら、私は離ればなれになったって、嫌われたって構わない」
俺は。
俺はフミエのために、同じことを言えるだろうか。
『今のは私らしくない質問だったようだ』
「ありがとう」
カンナの晴々とした声が聞こえた。
「あなたのおかげで決心がついた。私、やってみる」
はっと気がついて、俺はこっそり来た道を戻り、そのまま家に帰った。

ひとりの部屋で、俺は金魚に餌をやった。そして遠さということを思った。そしてそういう遠さを乗り越えるカンナの、野蛮なほどの勇気を思った。そしてそういう勇気を俺も持たなくちゃならないと思った。

第１３話　立体駐車場のヌシ　Ｃ　ｐａｒｔ

傾き始めた陽を受けて黄金色に光るうろこ雲が、高くから僕を見下ろしていた。
空が高い。季節はひと足先に秋だ。
地面に目を戻すと、そっちは春だった。みずみずしい若草の床が、可憐な花を散りばめている。
僕は深呼吸した。かび臭い、冷たく湿った空気が胸を満たした。
「調整不足かな。それに、匂いはどうしようもないな」
僕はメガネを外した。空も緑もいっぺんに姿を消して、殺風景ながらんどうの空間だけが残った。
時間は限られている。なすべきことは山積みだ。
「ハラケン」
僕は振り返った。
そのなすべきことのひとつが、いぶかしげな瞳でこっちを見ていた。
「こんなところに呼び出して、一体何の――」
「君たちのためだ」
自分でも予期しなかった太い声がのどから出たことに、僕は自信を感じた。

その日はそっちの用事で潰れてしまったから、１日おいて、僕はヌシ様のところへ出かけた。今の僕の相談相手になってくれるのはヌシ様しかいない。
『よく来た』
ヌシ様は喜んでいるようだった。
「話相手でも欲しかったの？」
僕が聞くと、ヌシ様は目の近くに生えた小さな手を振って否定の身振りをした。

『話相手なら増えた。あなたを知っているという女の子がふたり』
「ふたり？」
ヤサコのことは知っている。もうひとりはフミエかな。
『ふたりともあなたのことをとても心配していた。どちらの言葉も私の理解を超えているから、とても興味深い。私は3日前に生まれたばかりだから、理解の外にあることだらけだな』
「3日前！？　知らなかった。もう何年も生きてるのかと思ってた」
『少なくとも私がこの姿を取ってここにいるのはそれだけだ』
「でも、その割にヌシ様はいろんなことを知ってるね」
『生まれた後で経験と知識を習得するあなたたちとは違う。情報としての知識を私は生まれつき持っている。もちろん、特に経験的な知についてはわからないことも多いがな。だから私はあなたたちと話す』
「僕以外の子たちとも？」
『ああ。誰であれ会話は刺激的だ。もっともあなたが一番話しやすいがな。あなたの考えは一番、私の知るところに近い』
言っている意味がよくわからなかったが、とにかく僕は話を戻した。
「僕以外のそのふたりに、僕や僕の望みを教えた？」
『あなたが来たことは伝えた。伝えない理由がない。だがあなたの望みは教えなかった。彼女たちにそれを伝えることは、あなたがあなたの望みを遂行する妨げとなる』
「ありがとう」
とりあえずお礼を言うと、ヌシ様はまばたきした。
『感謝の言葉というものも面白い。純粋な無駄のはずだが面白い。あるいはそれがあのふたりの理不尽な言動の根幹かもしれぬ』
「ふたりはヌシ様に何を言ったの」
『おとという会ったひとりは私をミチコかと聞いた。あなたが最初に言ったのと同じように。そして望みを問うと、他人のことばかり考えて、結局ひと言も口にしなかった』

ヤサコ、だろうか。
『他人の中にはあなたも含まれる。そしてそれと同じほどにもうひとりの、まだ会わぬ子だ』
ヌシ様の口調に、僕は違和感を感じた。
「ちょっと待って。口にしていないはずなのに、どうしてヌシ様にその子の考えがわかるんだ?」
『イマーゴというものを知っているか』
ヌシ様は逆に聞き返してきた。
「う、うん。頭の中で考えたことを直接電脳空間にフィードバックする技術だろ。僕の知ってる中にもひとり、それらしい力を使う子がいる」
『知っているなら話が早い。一昨日会ったその子供にはイマーゴの素養があった。だから、本人は気づいていないが、彼女の思考は時おり、勝手に私のほうへ流れ込んできた』
「思考が流れ込む? そんなことがあるのか」
『思考や感情が個人のものと信じているあなたたちにはわかりづらいかもしれない。だが、私には当り前のことだ』
僕はにわかに居心地の悪さを感じた。
「それじゃ、その、ヌシ様には僕の心の中もわかってるの」
ヌシ様は体を大きく揺らした。笑っている。
『己の思考を読み取られるというのは、人間にとっては不安だったり気味が悪かったりするようだ。他人のそれはなんとかして知りたがるのに』
僕の顔は少し赤くなった。
『だが安心していい。さっき素養と言ったが、電脳空間と個人の相性というものがある。あなたの心は、私にはほとんど伝わっていない。ただ強く願う思いと、その源である子の面影を除いて』
「カンナのことはわかってたのか」
『ああ。そして昨日私の会ったもうひとりというのもその子だ』
ヌシ様はさらりと言ったが、それを聞いた僕の体は震えた。

「カンナが！？　カンナが来たの」
『そうだ』
「教えてくれ。カンナは一体何を願ったんだ」
『それはできない』
ヌシ様は金色の目をゆっくりと閉じた。
『先ほども言った。あなたに彼女の望みを伝えることは、彼女が望みを実現する妨げになる』
「妨げ……」
心が冷えるのを感じた。
カンナが僕と同じように、僕と一緒にいたいと思ってくれているのなら、その望みは決して僕のそれの妨げになんてならないはずだ。
でも、カンナの願いは違う。
どうして。僕のことを好きだって言ってくれたのに。どうして違うんだ。
僕は長い間黙っていた。ヌシ様はそんな僕を見つめて、じっと待っていた。
最初に僕は、カンナを身勝手だと思った。でもその後で、自分はもっと身勝手だと悟った。
僕はヌシ様を見上げた。
「ひとつ教えてほしい」
ヌシ様はうなずいた。
「僕は、僕の望みを叶えるために、他人の心を傷つけてもいいんだろうか。誰かを思いやらなくてもいいんだろうか」
『何が他者のためであり、何が他者を傷つけるか。それこそ最も恣意的な判断だ。あるいは他者を測ることそのものが傲慢かもしれない』
「え？」
『私に言えるのは、結果として世界は強者が作るということだ。あなたが強ければあなたは勝つ。それが道理というものだ』
僕は息をついた。

ヌシ様の答えは、僕の心の底のわだかまりには届いていなかった。けれど、そのわだかまりに届く答えはないのだと、ヌシ様は僕に教えてくれた。

「ならば僕は全てを犠牲にする。ヌシ様、多分あなたさえも」

『それは面白い。実に面白い』

ヌシ様は心底愉快そうにまばたきを繰り返した。

第13話　立体駐車場のヌシ　Ｄ　Ｐａｒｔ

角を曲がったところでヤサコと会った。
「あら、イサコ」
「ん、ああ」
あいまいな返事とセットで、なんとなく隣に並ぶ。
「どこに行くの」
ヤサコが聞いた。
「話す必要はない。いつものイリーガル狩りだ」
返事の前半と後半が矛盾している。間抜けなことに、後で思い出すまで私はそれに気づかなかった。
「へえ偶然。私もイリーガルのところに行くのよ」
ヤサコはなんでもない世間話のように言った。
「そうか」
私も思わず聞き流しそうになってから、
「なんだと！？」
「困るわ。あなたたちには伝えないように注意してたのに、どこから漏れたのかしら」
ヤサコはマイペースを崩さない。
「じゃあ、『喋るイリーガル』ってのはお前が見つけたのか」
「みんなに連絡したのは私だけど、最初に見つけたのはハラケンよ。イサコは誰から聞いたの？」
「私はついさっきガチャギリからメールをもらって、すぐ来た。他は都合が着かなくて私だけ――」
私は慌てて口を閉じた。何を余計なことまで喋ってるんだ。
「イサコ、お願いがあるの。そのイリーガル、ヌシ様っていうんだけど、そっとしておいてくれない？」
「パスワードを取るなって意味か」
ヤサコはうなずいた。

私は、なるべく素っ気なく聞こえるように注意しながら返事をした。
「まずお前の言ってることが本当か確かめて、それ次第だ」
「疑い深いわね」
ヤサコは唇を尖らせた。

ヤサコの案内に従って立体駐車場のわきをすり抜け裏側に出ると、見知らぬ世界が広がっていた。
言葉もなく回りを眺め回す私に、ヤサコは少し得意そうに胸を張った。
「すごいでしょ。こんな場所があったなんて」
「ああ」
半分上の空で私は答えた。
ひそひそと言葉を交わす音が、そこかしこで聞こえた。だが耳をすますと、それは規格外の空間が起こすノイズに変わっていく。視界の端に夕映えと映ったものも、まっすぐに見直せば電脳霧が真昼の陽光に反射するだけだった。
身体の浮つくような、強いて言えば、電脳体分離した時の感覚に近い。だがそれほど確かではない。
ここは現実と”あっち”と半分ずつつながった、中途半端な空間なのだった。
『その中途半端の主が私というわけか』
思考そのものに割り込んでくるような声があった。
「お前が『ヌシ様』か」
『その名、だんだん気に入ってきた』
振り向くと、直径2メートルくらいの球体に、猫と似た黄金の目、それに枯れ枝のような細い片腕を付けたおかしなイリーガルが、駐車場の壁から半身を出していた。
「話をしたいならきちんと出てきたらどうなんだ」
私が言うと、

『残念ながらそうもいかない。私はこのまま動くことができない。半分は駐車場にめり込んでいるのかもしれないし、別の空間にいるのかもしれない。ことによるとそもそも半身しか存在しないのかもしれない』

「ややこしいやつだ」

『口の減らないやつだ』

「な、なんだと！」

今までそんなふうに言われたことはなかったので心外だった。ましてイリーガルから。

ヌシ様は私に構わず、ヤサコのほうを見た。

『ヤサコ、今日は望みを持ってきたか』

「それが、困っちゃったのよ」

ヤサコは情けない顔をしてみせた。

「私にも望みはあるわ。すごく大切な望み。でも、それが叶ったら、その望みと同じくらい大切な別の子が悲しむの」

『ならばあなたの望みが叶い、かつその子も悲しまない、万事都合よく進むよう望めば良い』

ヤサコは吹き出した。

「ヌシ様、意外と世間ずれしてるわね。オババと同じくらいの齢だったりして」

その後で真顔に戻って、

「でも、それ違うと思う」

事情を察していたわけではないのに、その言葉は私の心に刺さった。

「だってそんなことあり得ないもの。もしそうしようとするなら、私かカンナが幻を信じなくちゃならない。嘘を信じるのなんてイヤ」

カンナ？

『何が現実で何が虚構か、見分けるのも己の心にすぎぬ。幸福と虚構の幸福と、どこに差がある』

「わからない。わからないけど違うと思うの」

今度はヌシ様が笑い出した。空間のきしむような、奇妙な笑いだった。

『違うと言えるほどにあなたは強く、違うと言えるほどにあなたは幼いな。あなたはどうだ、イサコ』

突然お鉢が回ってきて私は狼狽した。

「ちょ、ちょっと待ってくれ。つまり、本人が幸せならそれが幻でもいいか、ってことだな」

『ああ』

「そうよ」

何故かヤサコまでが一緒になって聞く。くそっ、こいつと一緒にいるとロクなことがない。

「私は」

お姉ちゃんのことが頭に浮かぶ。考えないようにしているけど、どうしようもなく心に巣食った恐れ。

お姉ちゃんはもうとっくにいないのではないか。私がやってることは、幻を追ってるだけなんじゃないか。

私は目を閉じた。もし幻なら。お姉ちゃんが存在しないのなら。

違う。お姉ちゃんはいる。

「私も幻の幸せなんかいらない。ヤサコと同じだ」

『いや、ヤサコとは真逆だ』

ヌシ様は言った。

『いらないとしか言えないほどにあなたは弱く、いらないとしか言えないほどにあなたは賢い。前置きが長くなった。あなたの望みを叶える方法を教えよう』

「イサコの望み、わかるの？　何も言ってないのに」

ヤサコは驚いた様子だったが、私は動じなかった。このイリーガルは強い感情を読み取る。恐らくはイマーゴを介して。

『パスワードがいるな。最低2個。確実さを求めるなら3個。そのうちひとつはここだ』

ヌシ様は細い指で自分の体を指した。

「え――？」

『私の持つパスワード、これは少々特別だ。簡単に言えば、これがなければあなたの望みは叶わない。私を壊して持っていくか？』

「ダメよ！　そんなことしたら、ヌシ様死んじゃうわ」

ヤサコが慌てて止めた。

『死？　イリーガルにヒトと同じ意味での死はない。我々の意識は”あっち”から上り、上った道のり自体を核として寄り集まる。道のり、すなわちパスワードを失えば、意識は再びばらばらに潰えて”あっち”に去るだけのこと』

「それでも消えることに変わりないわ。イサコだってそんなことしないわよね。ねえ――」

ヤサコの声は途中で止まった。

私は暗号を構えていた。

私は、私の望みを幻にしないために、ヌシ様と戦わなければならなかった。

第13話　立体駐車場のヌシ　Ｅ　Ｐａｒｔ

戦いは突然で、最初、私には何が起きたのかわからなかった。
すまん。
イサコの口がそう動いた。音は聞こえなかった。つい今までヌシ様のいた場所で、暗号が炸裂したから。
激しい音と光で私は反射的に顔を覆った。爆発は数秒で収まった。
「ヌシ様！」
立体駐車場の壁は半壊している。ヌシ様のいた辺りは壊れた空間がモザイク状に重なっていた。私は振り返った。
「イサコ！　何するのよ！」
「黙れ！」
イサコは私より大きな声でどなった。
「どこだ！　わかってるぞ、お前は遠くには行けない」
返事の代わりにイサコの足元が盛り上がった。――と思った瞬間には、体は地を蹴っている。
「遅い！」
肩から地面に転がりながら、イサコは鉄壁を投げた。一瞬遅れて黒いくさびのような弾丸が壁にぶつかる。
『ほう、私がここを出られないと、いつ気がついた？』
どこからかヌシ様の声が聞こえた。
「お前の話を聞いてれば推測はつく。お前は、完全に”あっち”と切れた空間には出ていけないんだろう。だから、古い空間が残っているここにしかいられない」
『そのとおりだ』
「ならば、もうひとつ気づいたことがある」
イサコはそう言ったきり、何故か黙り込んだ。ヌシ様も答えない。
その沈黙が一番不安だったのは、多分私だ。
「イサコ、やめて。そうまでしてパスワードを奪う必要があるの」

「黙れと言ったろう」
イサコはうつむいたまま答えた。
「黙らないわ。ヌシ様は特別なのよ」
「特別でも無駄だ」
「無駄？」
『さすがだな。そこまでわかっていたか』
ヌシ様が姿を現した。さっきまでいたすぐそばの壁の上だ。
「気づいたと言ったのはそれだ。私たちがここに来ることで、空間は更新される。古い空間は少しずつ消えていくはずだ」
私は胸に冷たい予感を覚えた。
「古い空間が消えるって、ヌシ様が生きられなくなるって意味？」
『生き死にというのは正しい表現ではないが、あなたの考えはおおむね正しい』
「わかったか。どちらにしても消えてなくなる結果だ」
「そんな」
私は納得いかなかった。
「何か方法があるはずよ。そう、例えば、ヌシ様に”あっち”へ帰ってもらうとか」
『それはできない』
ヌシ様は即座に否定した。
『”あっち”へ戻るためにはパスワードを忘れなければならない。私の場合、身体構造を破壊せずにパスワードを取り出すのは不可能だ』
「で、でも他にも何かあるはず」
『ない。イサコの目標と私の目標は異なる。だから争い、勝ったほうの目標が優先されるのが正しい』
「そんなこと言ってヌシ様、勝つ自信あるの？」
『ない』
「ちょっと、そんな簡単に」
『私のほうが弱いから恐らくイサコが勝つ。それが道理だ』

「ものわかりのいいやつだ」
冷淡な声が響いた。
「わかってないのはお前だけだ。そこをどけ」
「イヤよ！」
『どくべきだ。ヤサコは私たちの利害に関わらないから』
「もう！　あなたまで何言ってるのよ」
振り向いてヌシ様に言い、また前を見た時、イサコの影はなかった。
「警告はした」
耳元で声がして、次の瞬間、体が浮いた。
視界に薄ぼけた青空が映った。その後で衝撃。空が四角に閉じる。
イサコに突き倒されたと気づくまで、少し時間がかかった。
腰が痛い。思い切り地面にぶつけたようだ。
周りは４枚の鉄壁で覆われていた。外から激しい電脳のノイズが聞こえる。イサコとヌシ様が戦っているのだ。
「どけてよ、これ」
弱々しい声だ。当然、返事はない。
ひどい。私だけ除け者にするなんて。
小さい子みたいなやっかみの感情が浮かんできたのに、自分でも苦笑してしまう。
昔、学校で仲間外れにされた経験がある。まだタラちゃんとも知り合う前の話だ。その頃のことは、今でも思い出したくはない。
ばしんと大きな音がして、私は飛び上がった。鉄壁の１枚が震えている。流れ弾が当ったのだろう。
余計なことを考えている暇はない。私はポシェットを探って、メタタグを取り出した。メガビー１分。鉄壁１枚なら、なんとか破れるだろう。すぐおでこにメタタグを張りつけて、鉄壁の１枚に向けて発射した。
撃ち続けると、壁はわずかに赤く熱を持ち始める。もどかしい。
外では相変わらず激しい応酬が続いているようだ。ヌシ様、１分、

1分だけ耐えて。
壁が焼き切れるまでの時間は、私には1分が10分にさえ思える長さだった。でも、外のイサコたちには、同じ1分が10秒くらいに感じたかもしれない。
外に出た時、ヌシ様は追い詰められていた。駐車場裏の空間はほとんどが大小の傷を受け、ヌシ様はわずかに残った壁面から動けないようだった。
「手間をかけさせたな」
イサコは私のほうをちらと見て、けれど何の動揺もなく言い放った。
「だがもう終わりだ。お前を解体して、パスワードをもらうぞ」
イサコはジャケットの内側から鍵を取り出した。鍵の放つ白い光がすうと1点に結集して、ヌシ様の体を照らした。
『ほう、それが鍵か』
自分の置かれている立場にも関わらず、ヌシ様は興味深そうにイサコの手元を見つめた。
『それは親愛か、それとも後悔か』
「後悔？」
イサコは言葉に詰まった様子だった。が、すぐにそれとわかる感情、つまり怒りが見て取れた。
「黙ってパスワードをよこせ」
イサコは鍵を構えてヌシ様に1歩近づいた。
「待って！」
私はヌシ様の前に走り出た。
「やめて。お願い」
「そこをどけ」
「そうだ」
私はポシェットを探った。
「この前、鹿屋野神社で見つけたパスワードがある。これと交換にして」

イサコは首を振った。
「ヌシ様のパスワードは替えがきかない。交換はできない」
「ダメ！」
今度は簡単に押しのけられないよう、私は両足を踏ん張った。イサコは呆れたように私を見た。
「何故そんなにイリーガルに肩入れする」
「だって話せたし。ヌシ様だって生きたいと望んでるし」
「勘違いするな。イリーガルは生き物じゃない」
「それならペットだって同じじゃない。考えてみてよ。ここにいるのがヌシ様じゃなくてデンスケだったとしても、あなたはパスワードを奪うの」
「ああ」
イサコは何の感慨もなくうなずいた。
「仮にそれが私のペットでもな」
私は答えなかった。イサコが平静なのか、それとも平静を装っているだけなのか、私にはわからなかった。けれど、彼女が私にそう答えるのを選ぶ限り。
「それじゃあなたは私の敵だわ」
メガビーはまだわずかに残っている。
「最初に会った時にも言った」
イサコはゆっくりと鍵をしまい、暗号を構えた。
その時、ぱき、と小さな音がした。
『ヤサコ。いずれにしても、もう体が保たないらしい』
はっと後ろを見ると、ヌシ様の体を斜めに横切って、大きな亀裂が入っていた。中から赤い光が漏れている。ヌシ様は亀裂に腕を入れ、光の源を取り出した。
『これが私のパスワードだ』
夕陽そのもののような丸い、赤い光だった。いや、その中に影が見える。
私はパスワードに触れた。光が視界を覆い尽くした。

私が迷子になったのをデンスケが見つけてくれたのか、逆に迷子になったデンスケを私が見つけたのか、よく覚えてない。どっちにしても、私は小さいデンスケを両腕に抱えて、うろ覚えの道を急いでいた。

もう夕方だった。迫るように大きな太陽がこわかった。

腕の中のデンスケが急に暴れて飛び出した。

「デンスケ！」

私は叫んだ。

私はお姉ちゃんの胸にすがって泣いていた。お姉ちゃんは優しく頭をなでてから私の体を離す。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

隣に立っていた、私と同じくらいの女の子がささやくように言った。でも、歩き出したお姉ちゃんには聞こえてないようだ。もしかすると、わざと聞こえないように小さな声で言ったのかもしれない。

大人がたくさん集まって垣になっていた。

「この子が急に倒れて――」

「救急車は――」

小さい私には何が起こっているのかわからない。帰ってきたデンスケは、まだ体の端々に黒い糸切れのようなノイズがついていて、時々身震いした。

大丈夫、これくらいならオジジがすぐ直してくれる。私は、今度は逃げられないようにデンスケを強く抱きしめて、人の輪から離れる。

振り向くと、さっきの子が、少し大きい男の子のそでを握って立っている。よく似た顔だ。兄妹だろうか。

女の子の顔には不安と後悔と、わずかにそうではない別の感情が混じり合っていた。私は、これが彼女の望んだ結果なのだと思った。

それは全て、昔のことだ。夕陽とともに沈んでいく。
本当にそう？　沈んだ次の日の朝の日差しは、昨日とは違うものなの？　あなたにそう言えるの？

光が揺れて、私は我に帰った。
パスワードをつかんだイサコが、私をにらみつけていた。その姿が、さっきの女の子に重なる。
感情が込み上げてくる。それが怒りで、そしてイサコに向けられたものであると理解するのに時間がかかった。
「あなたは――」
イサコは私をさえぎって叫んだ。
「お姉ちゃんに何をした！」
「え……」
「今わかった。思い出した。お前のせいだったんだ。お前のせいでお姉ちゃんは」
突然、ばんと爆発音が響いた。
『逃げろ。空間が壊れる』
声のした方を見ると、亀裂から砂のようなものをこぼしながら、ヌシ様が真上を指差していた。
「ヌシ様！」
『私はどうでもいい。それより上を見ろ』
ヌシ様の言うとおり見上げると、立体駐車場の壁が二重にブレていた。片方は普段と変わりなく立っているが、もう一方は今にも崩れそうに傾いでいる。
『駐車場を構成する空間には、古い空間が巻き込まれていたらしい。私が消えて古い空間がなくなったら、駐車場の電脳構造が崩壊するぞ』
「イサコ、パスワードをヌシ様に戻して」
イサコは黙って首を振り、私に背中を向けた。

「イサコ！」
『もう手遅れだ。あなたも逃げろ』
私はどきりとした。たくさんの人のものが重なっていたヌシ様の声が、今はふたり分くらいに減っている。
すぐ近くに巨大なコンクリートの欠片が落ちた。もちろん電脳のものだけど、地面にぶつかって破片が飛び散り、体が揺れた。
『何をしている。急いで』
「ヌシ様――」
私は目を閉じて後ろを向き、そして走り出した。
逃げる途中、狭い道に繁った雑草に足を取られて2度ほど転んだ。激しいノイズに混じって、爆発音や衝撃音が時々響いた。
そんな中で空耳だと他人は言うかもしれない。けれど、私には確信がある。
崩れゆく世界の中で、私はヌシ様の声を聞いた。

立体駐車場の電脳空間事故は、新聞の地方欄に載るくらいのニュースになった。駐車場のオープンは3ヶ月遅れるそうだ。
この頃、オバちゃんと宗助さんがよくやって来る。オジジから漏れ聞いた話では、空間の異常がいよいよ激しくなってきたしい。メガマスではそれを単なる不調ではなく、電脳テロではないかと疑う声が出始めているそうだ。
ダイチ君とカンナの姿も、お店でよく見かけるようになった。お茶の間に上がり込んでオババと話し込むこともある。私は特に呼ばれなければ入っていかないから、何を相談しているのかは知らない。
ハラケンは来ない。町中で姿を見かけることもない。
私はフミエちゃんと毎日、学校のプールに通っている。フミエちゃんが最近あまり喋らなくなったのを除けば、変わり映えのしない毎日だ。でも、変わらないと信じていたいだけかもしれない。
私はヌシ様の最後の言葉が忘れられない。

「これから何があっても、イサコを守って。あなたはイサコより、多分私より強いから」

第１３話　立体駐車場のヌシ　Ｅ　ｐａｒｔ（後書き）

第１３話はこれでお終いです。次回をお楽しみに。

第１４話　空中楼閣の決戦（前編）　Ａｐａｒｔ

歴史の本によると、戦いの当人は、自分が戦う理由を知らないか、知ったつもりで間違っているかのどちらかだそうです。

お盆を過ぎると、日差しが少しだけ弱まる。真夏と言い切れない８月はなんとなく憂鬱だ。だからといって、７、８、９月と猛暑が続いたという昔に戻ってほしいわけじゃないけど。

プールサイドにぺったりとお尻をつけると、タイルの熱が冷えた体にじんわりと伝わって気持ち良かった。私はそのまま寝転んで、行く夏を惜しむように空を見上げた。

青空は吸い込まれそうに高い。薄いうろこ雲がゆっくり流れる。プールで騒ぐみんなの声や、鹿屋野神社の林から響くアブラゼミの合唱がふと遠くなる。目を閉じると、まぶたの裏に赤みづいた残像がぼやける。

「ぎゃっ！？」

私は飛び起きた。無防備をさらした体に突然冷たい感触があったからで、すぐに水とわかったし、ついでに犯人の目星もついたけれど、残念ながら悲鳴を上げる前にそこまで理解することはできない。

「へえ、ヤサコの『ぎゃっ』はレアよ。いつも『きゃあ』とかおとなしいのに」

「もったいない。メガネかけてたら録音できたのにね」

水の上でにやにや笑いを浮かべているのはフミエちゃんとアイコちゃん、驚いたというか呆れたことにカンナまで加わっていた。

「あんたたちねえ」

言葉ではそう言いながら、私は少し安心していた。カンナやアイコちゃんと一緒のせいか、最近ふさぎこみがちだったフミエちゃんが、いつもの調子に戻っていたからだ。

「抜け駆けで日焼けしようったってそうはいかないわよ」
そういうアイコちゃんのほうがよほど日焼けしている。お盆の間に家族でバリに行ってきたそうだ。
「そうだ、帰りに私んち寄ってきなよ。お土産あるから」
「バリ。うらやましいことで」
フミエちゃんが首を振った。
「思い出した。私、イサコにも水かけたわ、7月に。あーあ、私の夏はイサコに始まってヤサコに終わるのか。なんてドメスティック」
「ドメスティックというよりサディスティックよ」
私はプールに入りながら言った。同時に目で辺りをうかがう。やっぱりイサコは来ていない。ハラケンも。
「でも、楽しみね。写真とか、動画もあるんでしょ」
「オフコース。ガムランの演奏ばっちり撮ってきたわよ。よかったなあ、あれ」
カンナはことさらにはしゃいで見せ、アイコちゃんも乗っている。
「ヤサコも行くでしょ」
フミエちゃんが水を向けた。
「うん」
だが、その約束は延期になった。
私、フミエちゃん、カンナ、3人のメガネに同じ伝言が入っていた。オバちゃんからだった。

メガシ屋には久しぶりに探偵局のメンバーが揃って、お茶の間は満員だった。ハラケンも来ている。オジジだけはメガマス病院のシステムエラーとかに呼ばれて留守だったけど。
最初に口を開いたのはオバちゃんだった。
「今日集まってもらったのは他でもない。最近の不具合発生についてメガマスの方針が決まったわ」
「最近？　空間の調子が悪いのはもう2ヶ月以上だろ。ずいぶん悠長な最近だな」

ダイチ君が冷やかすように言った。オババが首を振る。
「7月の報告が8月に本社に届いてすぐ対策が打たれたんじゃな。大企業病のメガマスにしたら早いほうじゃ」
「それとも、メガマスもあらかじめそんな自体を想定してたか、だね」
宗助さんがダイチ君とは別の種類の皮肉を交えて返した。
「この際どっちでもいい。問題は今よ、今」
オバちゃんが断ち切るように言った。
「だが、今は過去の積み重ねでできてる」
宗助さんは食い下がる。
「うるさいわね。あんたと禅問答やってる場合じゃない」
言うなり、オバちゃんは私たちのほうを向いた。
「メガマスはセキュリティレベルの引き上げを決定した。施行は3日後よ」
座がどよめいた。
「レベルはどうじゃ？」
すかさず聞いたのはオババだ。
「一般フォーマットはこれまでどおり。レベル2よ」
「なんじゃ」
私には何のことかわからなかったけど、オババは少し警戒を解いたようだった。
「安心するのは早いわ。今回レベル3が見送られたのは、メガマスが法務局に借りを作りたくなかっただけよ。この前の駐車場みたいな事例の再発を受ければ、法務局からメガマスへフォーマットの申し入れが不可避となる。向こうから頭を下げさせる形でレベル3のフォーマットを実施する準備を、メガマスは整えてるわ」
フミエちゃんが首を傾げた。
「何？　よくわからないんだけど」
「レベル3のフォーマットっていうのは、これまでのサッチーより1段階上、神祇局、文部局、厚生局の所轄、さらに私有地にまで立

ち入って、物理フォーマットを行うものだ。実施の判断は法務局、実行はメガマスが受け持ってる」

宗助さんの説明を、オババが引き継いだ。

「メガマスは早くフォーマットを実行したいんじゃが、法務局にフォーマットの指示を出してくれと頼むのは癪だと考えちょる。それよりも、もう少し待ってればまた事故が起こって、放っといても法務局側でフォーマット指示を出さざるを得なくなるというわけじゃな」

オバちゃんはうなずいた。

「くだらないパワーゲームだけど、おかげであんたたちは助かったみたいね」

「助かった？　どうして」

フミエちゃんが聞く。

「レベル3のフォーマットが実施されれば、あんたたちや黒客の持ってる暗号もパスワードも、全部規制の対象になるわ」

「そんな――」

ハラケンがつぶやくように言った。

「原川君、大丈夫だ。そうならないように、僕たちが徹底的に古い空間をフォーマットして、事故を抑える」

宗助さんは私たちひとりひとりの顔を見て言った。

「だが、君たちにもしばらくの間、目立った行動は控えてほしい」

「待ってくれよ。それ、探偵局の活動をやめろってことかよ」

ダイチ君が慌てて聞いた。オバちゃんと宗助さんは顔を見合わせ、ふたりしてうなずいた。

「どのくらいの間だよ？」

「何とも言えないが、少なくとも夏休みの終わり、多分9月いっぱい」

「9月!?　それじゃ」

続きを言う代わりに、フミエちゃんはカンナを振り返った。カンナの引越しは9月の中旬に決まったと聞いている。

「仕方ないわ」
みんなの視線を浴びたカンナは、けれどいつもの穏やかな微笑みを返した。
「探偵局の活動ができなくたって、メガネ自体が使えなくなるわけじゃないし、ましてみんなと遊べなくなるのでもないしね」
「すまない」
オバちゃんは頭を少しだけ下げて謝った。
「他のみんなも、いいかな」
宗助さんが部屋の中を見回す。目が合って、私は黙ってうなずいた。カンナがいいって言ってるんだから、私に反対する権利はない。
しばらく答えはなかった。ところが、宗助さんが軽く息をついて、結論が出そうになった時、声が上がった。
「ちょっと待って」
ハラケンだった。
「僕たちはいい。でも黒客はどうするの」
「もちろんそれも考えてる」
オバちゃんが答えた。
「探偵局の休止を確かめた上で、イサコに伝えるつもりだった。イサコだって、これまで集めたパスワードを失うのと比べたら、1ヶ月くらいの活動停止のほうがましと考えるはずだ」
「それはわからないよ」
ハラケンは首を振った。
「空間の乱れは、イサコが積極的に起こしたものでもある。休止は一時的なものだけど、その間に古い空間がなくなってしまうとしたら、イサコは応じないかもしれない」
「それで今持ってるパスワードまで危険にさらすとしてもか」
宗助さんが聞く。
「イサコは自分のスキルに自信を持ってる。たとえフォーマットのレベルが上がっても、切り抜けられると判断するんじゃないかな」
「イサコがどんなに強くても、レベル3のフォーマットには対抗で

きない。説得するしかない」
　再びオバちゃんが答えた。
「説得できるの？」
「できるできないじゃない。するしかないんだ」
「難しいかもしれない」
　私は思わず口を挟んだ。オバちゃんはいらだちを隠さずにこっちをにらんだけど、言わなくちゃいけない。
「理由はわからないけど、イサコはパスワードを集めるのに必死になってる。今、中断させることができるとは思えない」
　立体駐車場で突き飛ばされた時の胸の感触がよみがえってきた。イサコは同じ強さで、オバちゃんの頼みも拒否するだろう。
　オバちゃんは露骨に顔をしかめた。
「難しくても、他に方法がないんだ」
「でも」
　できない、という言葉は口からこそ出なかったけれど、みんなに伝わった。
　結論は出ない。でも、イサコを放っておくわけにもいかない。
「方法ならあるよ」
　ところが、突然救いの神のような台詞が降ってきた。
「これ、見て」
　ハラケンだった。メールを開いて、みんなのほうに向ける。差出人を見て驚いた。イサコからだった。文面はシンプルだ。
『お前たちコイル探偵局には長い間邪魔されてきたが、そろそろ決着をつけたいと思う。期日は3日後、場所は駅南の空中庭園。負けたほうは、勝ったほうがいいと言うまでメガネの使用を止める。返事がなければ、探偵局は黒客を恐れて逃げ出したとみなす』
「何よこれ！？」
「果し合いか！　いい度胸だぜ」
　フミエちゃんとダイチ君がほぼ同時に声を上げた。
「イサコがこんなメールを――」

「疑うの？」
知らぬ間につぶやきの漏れていたのを、ハラケンににらまれて初めて気づいた。
「ううん、そうじゃないの」
私の心の内に湧いた鋭い感情は、あえていうなら寂しさだった。やっぱりイサコは、私より自分の目的を選ぶのだろうか。
「私、イサコちゃんに聞いてみる」
カンナが電話をかけた。が、すぐ困った顔でこっちを見た。
「おかしいわ。つながらない」
手分けしてイサコ、それに黒客の他のメンバーにも電話したけれど、誰も出なかった。
「古い空間に入ってイリーガル狩りをしてるんだろ。詳しいことは知らねえが、やつらも切羽詰まってきたな」
ダイチ君が低い声で言い、ハラケンもうなずいてから続けた。
「話を戻すよ。イサコからの『果し合い』、黒客を止めるのにはちょうどいいと思う」
「なるほど、俺たちが勝って、イサコたちのメガネを取り上げりゃいいのか。確かに都合がいいぜ」
「でも勝てるわけ？　イサコに」
フミエちゃんが、当然みんなが抱いた疑問を口にした。
「それこそ、勝たなくちゃならないんだ」
「そうだ。簡単に負けやしねえ」
ハラケンの答えにダイチも同調した。が、今度はオバちゃんが反対した。
「ダメだ。果し合いなんかやって空間を壊したら、ますますフォーマットの可能性が高まる」
「それもＯＫだよ」
ハラケンは自信ありげに言った。
「イサコの指定した場所は『空中庭園』だ」
「あれ？　そこ、ガードが厳しくて入れないはずじゃなかった？」

フミエちゃんは首を傾げた。
「そうだ。でもイサコは入口を突破する方法を見つけたんだろう。オバちゃん、隠そうとしても僕は知ってるよ。空中庭園の内部は、空間の乱れがひどすぎて放置エリアになってるね。僕たちが多少壊したところで、空間管理室は関知しないはずだ」
オバちゃんは顔をしかめた。
「ケンちゃん、待って。あなたが危ない橋を渡る必要はない。これは私たち、空間管理室の仕事よ」
「オバちゃん、今はそういう話をしてる時じゃないだろ。黒客を止めるために、僕たちは僕たちでできることをするよ」
「ケンちゃん――」
「ヤサコ、おぬしはどう思うんじゃ」
オババが不意に聞いた。
私は迷っていた。イサコと戦って勝てるのかと聞かれたら、この前の立体駐車場が思い浮かぶ。私は本当に、手も足も出なかった。でも。でも、このまま何もせず、オバちゃんに全部任せるなんてできっこない。かと言って、例えば私が説得に行っても、イサコが応じるはずがない。イサコのあの、拒絶の言葉。
「やるべきだと思う」
だけど、私はイサコをつなぎとめなくちゃならない。そうしなかったら、私とイサコはどんどん離れて行ってしまいそうな気がした。
「さようか」
オババは言葉少なにうなずいて、いつの間にかひざの上にいたデンスケを抱き上げた。
「皆、どうじゃ。果し合いを受けるべきと思うかの」
「だからダメだって――」
「玉子と宗助は黙っとれ。これはわしら大人の問題じゃないからの。さあおぬしら、果し合いに賛成なら手を挙げて見せい」
ハラケン、ダイチ君、私、少し遅れてフミエちゃんも手を挙げた。
「カンナ、おぬしは？」

カンナは不安そうな目つきでハラケンを見て、それから答えた。
「私はみんなに任せる」
「よーし、それなら満場一致だぜ！」
ダイチ君が威勢のいい声を上げた。
「よろしい、では果し合いは受ける、に決定」
「ちょっとメガばあ」
「玉子、黙れと言ったのがわからんか。こやつらの決めたことじゃ、尊重せい。それにのう、おぬしらにはやることがあるじゃろう」
「一般フォーマットの強化ですか」
宗助さんが聞くと、オババは大げさにかぶりを振った。
「それだけじゃなかろう、痴れ者が。ペットじゃよ、電脳ペットの保護じゃ」
「あっ」
オバちゃんと宗助さんは顔を見合わせた。
「ペットの保護？　どうしてそんなもの、わざわざ改めて言うのよ」
フミエちゃんが聞くと、オババは大きなため息をひとつ、ついた。
「実は5年前にも似たような空間の障害があってのう」
「聞いたことがある。『大黒市における空間の重大な不具合』っていう事件だね」
ハラケンが言うと、オバちゃんと宗助さんは、何故かふたりとも気まずそうにうつむいた。
「そうじゃ。その時にな、電脳障害で生まれた空間の裂け目にたくさんのペットマトンが引き込まれて、行方不明になってしまったんじゃ」
「今度はそうならないように気をつけるわ」
オバちゃんが下を向いたままで言った。
「頼むぞ。それからおぬしらも、しばらくはペットを外に出さんようにするんじゃ。よいな」
「わかった」
答えながら、オババの両腕にしっかりと抱きしめられたデンスケ

を、私は見つめていた。

「なんかさ、すごい急展開ね」

緊急会議がお開きになった後、私はフミエちゃんとカンナと3人で、アイコちゃんの家に向かっていた。

「私たちも、のんびりお土産もらいに行ったりしてていいのかしら」

フミエちゃんはどこかそわそわして落ち着かない。

「別にいいんじゃない？　他にやることがあるわけでもないし」

果し合いまで3日しかないのだから、改まって準備する暇もない。当面のやることと言ったら、オババがボーナスでくれたメタタグのチェックくらいだ。

「だってさ、こうしちゃいられないって感じしない？　軍事教練とかしなくていいのかな」

「軍事教練？」

私はつい吹き出してしまった。

「やだフミエちゃん、大げさすぎるわよ」

「大げさじゃないわ、戦いなのよ。ねえカンナ」

「えっ……う、うん」

カンナが沈み込んでいるのに私は気がついた。声をかけようとした時、全員の電話が同時に鳴った。

「あ、メールだわ」

「ダイチ君からね」

タイトルは『集合』とだけあって、ダイチ君の家の近くにある小さな神社に急いできてほしい、という内容だった。神社はちょうどアイコちゃんの家に行く途中にあったので、相原家訪問はまたもや後回しになった。

神社に入ると、ハラケンとダイチ君、それにもうひとり、小柄な人影が見えた。

私は驚いた。その人影が、見知った人物だったからだ。

「あなた、タケル君じゃない。どうしてここに？」
「詳しい話は後だ。大事なことがふたつ」
ダイチ君が割って入った。
「ひとつ目。タケルは今度の果し合いの助っ人として探偵局に加わることになった」
「ええっ！？」
思わず左右を見た。フミエちゃんもカンナも目を丸くしている。
「騒ぐな、まだひとつ残ってる。果し合いの前に、タケルが新しいスキルをくれるって言うんだ」
「スキル？」
タケル君はそこで1歩前へ出た。
「そうだ。君たちに教えてあげる。イサコにも対抗できる、暗号の技術をね」

第１４話　空中楼閣の決戦（前編）　Ｂ　ｐａｒｔ

ヌシ様からパスワードを奪って以来、私はヤサコのことを思うたび、ある言葉を思い浮かべるようになった。

それは、裏切り者、というのだ。

「裏切り者」なんて大げさで時代がかって、恥ずかしい、似合わない形容なのかもしれない。それでも私の心にはそうと言わざるを得ない黒い雲のような感情が湧き上がって、それが情けなくて悲しくて、なおさらヤサコへの憎しみが募った。

ヤサコは、私とお姉ちゃんを３回裏切った。

１回目はお姉ちゃんの、あの時だ。ヤサコはお姉ちゃんを私から引き離して、私の知らないところに連れて行ってしまった。善意でヤサコに声をかけたお姉ちゃんを突き落とした。

２回目の裏切りは、あろうことか、今のヤサコがそれを忘れていることだ。忘れてのうのうと幸せに暮らすばかりじゃなく、「夢のお姉ちゃん」なんて自分に都合のよい幻に作り変えて、本当のお姉ちゃんを思い出そうともしないことだ。

ヌシ様からパスワードを奪った後、私は帰ってお兄ちゃんにその夕陽のようなのを黙って渡して、部屋に戻って枕に頭をうずめた。当時は、自分は寝たいのだと考えていたが、今思い出せばどうしたって泣こうとしていたに決まってる。でも、涙は出なかった。ヌシ様のことやお姉ちゃんの思い出の上に、ヤサコの言葉、ヤサコの行為が被さって、私の心を麻痺させた。だから私は残った感情をかき集めて、ヤサコを憎んだ。

３回目――３回目は、本当はなかった。私はそう思いたい。でも、蠱惑的に暗い布団の中で、３回、３回もとつぶやいたのは私の声だった。

３回目のそれは、ヤサコの私に対する裏切りだ。

お姉ちゃんを突き放したその手を、ヤサコは私に伸ばした。本人

が気づいてないとか、そんなの問題じゃない。私はその手を――

ヤサコは私の敵だ。カンナとの間にも、お姉ちゃんとも、私が伸ばそうとする手をヤサコが阻んで覆い隠そうとするなら、私はそれを敵と呼んで引きちぎるまでだ。だってそうするのが一番、悲しいくらいに心地良いじゃないか。

「兄だ」

玄関口に迎えたお兄ちゃんをそうとだけ紹介して、私は後ろも見ずにリビングへ向かった。

「やあ、初めまして」

私に続いて入ってきたガチャギリは面食らった様子で頭を下げた。

「い、いえいえこちらこそ。お噂はかねがね……聞いてねえぞ、おいイサコ」

「言ってない」

私はやはり振り向かずリビングに入る。2匹のモジョがちょんちょん跳んできて肩に乗った。指であやすと小さい目を猫のように細める。

「ふふ」

残念だが、こいつらを果し合いには連れていけない。電脳戦でやられても人間はメガネが壊れるだけだが、こいつらは消えてなくなってしまうからだ。オートマトン禁止の案は探偵局側も飲むだろう。同時にそれは、可能性は低いが探偵局側がサッチーを投入するケースの排除にもつながる。

ソファに腰かけた時、廊下のほうから声が近づいてきた。

「やっぱり兄妹だな。イサコとよく似てますね。お兄さん、高校生ですか」

「おいおい、僕はまだ中学2年だよ。君たちとふたつしか違わない」

「へえ、落ち着いて見えるから、俺ももうちょっと上かと思いました」

話しながらリビングに入ってくるナメッチと目が合った。
「イサコさん、お兄さんがいるなら紹介してくれればよかったっす」
私はナメッチを無視して言った。
「今日は果し合いの話題だ」
私はダイチから送られてきたという古風な筆書き仕様の「果し状」をつまみ上げた。
「受けるに決まってるだろ」
血気盛んに言ってのけたのはガチャギリだ。
「探偵局のやつら、何を勘違いしてんだ。ダイチのひとりやふたりくっついたとこで、俺たちに勝てるわけねえ」
私は口の端で笑った。
「どうして今さらそんなものを受けなくちゃならない」
「え……」
お兄ちゃんを除いた全員の動きが止まった。
「イサコ、お前は反対だってのか」
直接質問に答えず、私は逆に聞いた。
「果し合いを受けるメリットは？」
「んなもん決まってるだろうがよ。お前、果し状の中身を読んでねえのか」
「『大黒黒客の名をかたるお前たちには長いことはらわたの煮える思いだったが、ここらで白黒はっきりつけようぜ。期日は3日後、場所は駅南の空中庭園。負けたほうは、勝ったほうがいいと言うまでメガネの使用を止める。返事がなければ、偽黒客はコイル探偵局を恐れて逃げ出したとみなす』」
文面は諳んじられるほどに読み返していた。ガチャギリは帽子から片方だけ出した目をけげんな形に歪めた。
「わかってんなら文句はねえだろ。共闘することもあったけどな、コイル探偵局と俺たちは敵同士だ」
「また、敵、か」
くつくつとひとりでに笑みがこぼれ出る。

「何だお前？　どうして笑ってんだ」
「別に。とにかくガチャ、お前の考えはこうだ。探偵局は敵だ。だからやつらにメガネを使わせなければ、その間にメタバグをいくらでも集められる」
「僕もガチャギリさんに賛成です」
小柄なアキラが、自分の存在をアピールするように手をまっすぐ上げた。
「イサコさんも知ってるでしょうけど、空間の乱れが多くなった影響で、一時少なくなってたメタバグの量も回復してきてます。探偵局に口出しされずに僕たちで大黒のメタバグ市場を押さえれば、黒客は今後もトップの地位を守り続けられます」
ガチャギリが手を打った。
「そうか。俺たちが卒業しちまったら、現メンバーはアキラ、お前ひとりしか残らねえもんな」
「ほら、イサコさん。反対のやつはいないっすよ」
取り成そうとするナメッチに首を振って、私はまだ発言のないデンパに顔を向けた。
「お前はどうだ」
デンパはいつもと同じようににっこり微笑んでから答えた。
「僕もみんなと同意見だよ。果し合いはやるべきだと思う」
「へえ」
私は少し驚いた。ダイチを慕っているデンパは、果し合いに反対するだろうと考えていたからだ。
「デンパ、いいのかよ。ダイチをやっちまうことになるんだぜ」
「ダイチはしぶといから、そう簡単にはやられないよ」
デンパはにこやかな顔のままで、敵か味方かわからないようなことを言った。
「どっちが勝つかわからないけど、僕はダイチを信じてる。裏切りはしないよ。ダイチが果し合いをやるって言うなら、きっとそれに見合う意味があるんだ。そのために、僕は全力でダイチと戦う」

そんなふうに他人を丸きり信じてしまえるデンパが、私はうらやましい。同時に紙で切ったような薄い傷が心に後を残すのも感じて、口をつぐんだ。ガチャギリは黙りこくった私を返事に窮したと取ったのか、たたみかけるように言った。

「どうだイサコ、お前以外全員果し合いに賛成だぞ」

私が答えるより先に、お兄ちゃんが余計な口を出した。

「イサコ、強情を張ってちゃダメだよ」

「違うよ……。強情じゃないよ」

口調も語尾も曖昧な尻切れトンボで、我ながら説得力のない返事の見本みたいだ。

「だったら果し合いを受けない手はない。パスワードももうすぐ揃いそうだしね」

心臓がばくんと鳴った。

「それ――！」

「パスワードが揃う？　どういうことですか」

アキラがほんの少し頭を下げて、うかがうように私を見た。

「イサコからは、パスワードの効能を古い空間にもぐるためだけとしか聞いてないかい？」

「はい」

「お兄ちゃん！」

場もわきまえず、つい私は言った。黒客の連中が目を丸くしたが、気にしてる余裕はなかった。

「パスワードを集めることでより深い空間に到達できる、これは確かだ。でもそれはあくまで手段だよ。目的は別のところにある」

「お兄ちゃん、ダメだよ」

私は気が気ではなかった。

「イサコ、いつまでも隠しておく必要はないよ。どっちにしても見つければ山分けだ」

「ダメ、ダメってば……山分け？」

きょとんとした私に、お兄ちゃんは目配せしてみせた。

「僕たちの目的は、古い空間の奥にあるという『キラバグ』を見つけることだ。『キラバグ』っていうのはね、メタバグが通常空間に触れて変成した古い空間のかけらなのと同じように、最古の空間と古い空間の接触で生じた、空間の化石だと言われてる」
「そ、それって価値はあるんですかい」
お金の話に近づいた途端に、ガチャギリは鼻息を荒くした。
「もちろん。普通のメタバグの百倍、千倍」
「千倍！」
ガチャギリとナメッチは丸く開いた目を見つめ合った。

客たちが帰ると、濁った中古の空気にまみれた部屋全体がくたびれて見えた。が、中でも特に古物じみて見えたのは、他ならぬこの私だろう。
「イサコのクラスメイトをだますのは、僕だって気が引けるさ」
私が抗議する機先を制して、お兄ちゃんは喋り出した。
「けれど今回はやらなくちゃならない。パスワードがもう少しで揃うっていうのに加えて、これだ」
お兄ちゃんの前に大黒市の電脳マップが立ち上がった。マップは電脳の乱れをさざ波のように表す。時系列で確かめると、ここ数週間で空間は大幅に乱れていた。
「最近の空間異常、これは僕たちのやったことじゃない。僕たちの知らない誰かが、メガマスにアタックをかけているんだ」
「誰かって誰が？　一体何のために？」
思わずつぶやいた私に、お兄ちゃんは首を振った。
「わからないさ、まるで。だが、確かなのは、おかげで僕たちはかなり動きやすくなっているってことだ」
お兄ちゃんはまっすぐ私を見つめた。
「今を逃しちゃいけない。メガマスの目が正体不明のハッカーに向いている間に、パスワードを揃えてしまおう」
私は目をそらした。簡単にはうなずけなかった。

見知らぬ第三者の存在を、そこまで当てにしていいものだろうか。こっちが舞台に上がったのを見計らって、向こうは降りてしまうのではないだろうか。

その不安もまた無根拠なものだ。けれど、それは私の心に根を張った一種の確信だった。

「イサコ？　どうしたんだい」

不思議だ。ずっと同じものを見てきた兄妹なのに、お兄ちゃんの心には、謎のハッカーへの疑いなどまるでないようだった。

「わかった。お兄ちゃんの言うとおりにする」

私は折れた。このまま行けば平行線なのは目に見えている。

「ありがとう」

お兄ちゃんは笑って見せ、私も同じようにして答えた。それで少しほっとして、でもほっとしている自分が好きではなかった。

「それから、次の戦いには僕も参加するよ」

嫌悪感と戦っていた私は、お兄ちゃんの言葉に無意識にうなずいて、その後でようやく聞き返した。

「えっ？　どうして」

「そりゃそうさ。今後の行方を決める大事な一戦だからね」

当り前のように言い切るお兄ちゃん。

「だ、大丈夫よ。コイル探偵局くらい、私ひとりで対処できる」

「念には念を、だよ」

「でも、今までお兄ちゃんはずっと後方支援だったじゃない」

「急に前線に出られても足手まといってわけかい」

「違うよ。そうじゃなくて」

「そうじゃなくて？」

そうじゃなくて、私は不安なのだった。

お兄ちゃんは、私ひとりじゃ力不足だと思っているのだろうか。

でも、そう聞いたら、お兄ちゃんはまた笑って違うと答えるだろう。そうして、私はまた何も言い返せなくなる。

私はうつむいた。お兄ちゃんはそれを肯定と取ったらしく、よし、

とひと言つぶやいてリビングを出て行った。

私はしばらくそのままで、淀んだ空気を呼吸していた。その淀んだ場所からの出口というのが急に遠のいた気がした。

第１４話　空中楼閣の決戦（前編）　Ｃ　ｐａｒｔ

果し合いの通知が届いた次の日の朝、僕は空中庭園へ向かった。

タケルのいう「暗号」の訓練は１０時から。その前の時間で決戦場所の下見を提案したのだけれど、女子たちはラジオ体操があるからと断ってきて、結局僕とダイチ、それにタケルの男子３人が空中庭園に集まることになったのだ。

錆の浮き始めた「立入禁止」の看板の前に着いたのは約束の３０分前、７時を少し回った頃だった。ふたりを待たずに僕は看板をくぐり、広い敷地に入った。

「空中庭園」は、電脳都市大黒のイメージを観光に利用しようと、大黒市、それに、その頃電脳メガネの製造開発を手掛けていたコイルス社、コイルス社に事業協力していたメガマスが出資して建造した、一種の巨大テーマパークだ。地上３０メートルの高さに設置された直径１００メートルのバカでかい円形ホールを、中心に１本と外縁に３本、合わせて４本の支柱で支える。

８年前の開設時は全国からお客が詰め掛けて、当初見込みを上回る入場者数を数え、その年の大黒駅の利用客は記録的な数字を示したという。が、目新しさが去った２年目からは客足は激減、今度は大黒財政史上記録的な大赤字をたたきだした。そもそも窓ひとつない電脳のテーマパークをどうして莫大な建築・維持費のかかる高架建築にしたのか、市議会での追及が始まると、お約束のように建築業者の選定、運営団体の資金管理にまつわる怪しいネゴシエーションが明るみに出て、おまけに建物自体が２０１５年に改正された法規に適合してないことまで発覚し、大騒ぎになった。

わずか３年半で閉鎖に追い込まれた「空中庭園」は、今では「電脳市政のあだ花」などというタイトルでまれに週刊誌を飾るくらいの、巨大な廃墟と化している。

というのが、オバちゃんから聞いた情報だ。

円形ホールへの入口は1ヶ所しかない。円の中心に設置された支柱の下に設置された来場者受付だ。当然今はシャッターが降ろされている。庭園内部がメタバグの宝庫だという噂が立った頃、シャッターを破って侵入を試みた豪の者がいたが、内部にあったメガマスの電脳障壁にやられて引っ繰り返り、すぐ捕まったらしい。それ以来、「空中庭園への侵入は不可能」というのが、大黒の電脳クラブの常識だ。

だが、いつの時代にも、常識というのは破られる宿命を持っている。

僕は、シャッターの閉まった受付の裏に回った。建物のくぼみに隠れて見えづらくなった一角に、従業員用の通用口がある。

正攻法がダメなら裏手から、誰でも考えつく方法がこれまで試された形跡がないのは、この通用口の形だろう。ドアノブや鍵穴、蝶つがいなど、そこが扉であることを示すものは何もない。ぱっと見、スリットの入った壁の一部だ。けれど。

僕はスリットに近づいて、果し合いのメールに添付されていた電脳錠をかざした。

『暗証番号を入力してください』

目の前にメッセージと、入力ボックスが浮かぶ。教わったとおり「４４２３」と入力すると、ほとんど無音でドアが開いた。同時に内部の照明が起動する。目の前に受付事務室のドア、その横に、飾り気のない鉄の螺旋階段が見えた。僕は階段を上り始めた。

この階段も従業員兼非常用のものだ。一般来客は普通エレベーターを使う。電脳錠と暗証番号の二重防護は破られまいとたかを括ってか、表口に設置された障壁の類は一切ない。

邪魔するものなく、ただしやや息切れしながら階段のてっぺんまで上り、待っていたドアを開くと、がしゃんと大きな音が響いた。

「メインスイッチが入ったな」

まず照明が付き、いくつかの武骨な建物以外に何もない円形の室内を照らす。次に、壁のほうから順に情景が再現されていく。模造された景色は、淡い青の空の下に若葉と花の繁る、初春の眺めだ。決戦なんて言葉とは程遠い平和なこの風景の中、僕らは若々しい緑の草を踏みにじり、可憐な花を散らして戦うのだろうか。そう考えると、後ろめたいような気分が込み上げる。もっとも電脳の草花を踏みつけにしたところで、枯れたりはしないのだけれど。

「早かったね」

景色に見とれていた僕は、突然背中へ浴びせられた声に飛び上がった。

「タ、タケル君」

「タケルでいいよ。それに、ダイチも来てる」

「よう」

「ああ、おはよう」

タッチの差だったようだ。僕は胸をなでおろした。

タケルは屈みこんで、こぶしで強く地面をたたいた。ぼすっとへこんだみたいな音がする。床は、子供が走り回るのを考慮してだろう、ウレタンのような素材でできていた。

「閉鎖から4年半だっけ。設備の故障はないみたいだね」

「実は俺、1度も来たことないんだよな。外は円いのに、中から見ると四角なんだな」

ダイチは頭をかきながら、物珍しそうに辺りを見回している。

「それは残念だったね」

タケルの声に強い実感がこもっているのが、僕は少し気になった。

「タケルく……、タケル。ここに何か思い入れでもあるの」

「ここはね、僕の父さんが設計した電脳空間のプロトタイプなんだよ」

「なんだって!?　タケルのオヤジが!?」

ダイチが目を丸くした。

「そう。父さんはコイル・コイルス社の技師だった。今普及してい

るメガマスの電脳空間も元は父さんの基本設計によるものなんだ。ここは、異なった設計の電脳空間を展開して、改善や改良に取り組むための実験施設を兼ねていたのさ。空中に作ったのも、エラーが起きた場合に周りに影響が及ばないためだよ」

僕は笑顔を作った。

「良く知ってるんだね。ここについて実戦で役立つ情報はないかな？　黒客に1歩リードできる」

タケルは少し寂しそうにかぶりを振った。

「悪いけど、それはないよ。計画が進むうちに、どうせ作るなら商業ベースでって意見が強くなって、父さんの目指していた実験空間のアイデアはあいまいになって行ったんだ。最終的に父さんの考えがどこまで採用されたか、僕にはわからない」

僕は息をついた。

「残念、アドバンテージは取れずか。でも」

タケルの顔を正面から見すえる。確かめておかなければならないことがもうひとつあった。

「空間管理室の力を借りるなら、かなり有利になるだろうね」

タケルの目は一瞬戸惑ったように左右し、すぐに怒りの色に染まった。

「兄ちゃんのことなら的外れだ。僕は兄ちゃんと関係ない。兄ちゃんは敵だとさえ思ってる」

「ハラケン、タケルの言ってることは確かだぜ。俺は前からこいつと付き合ってるけど、宗助さんと裏でやり取りしてる形跡なんてない」

ダイチもタケルに加勢した。

「わかった。ごめん、タケル。今のは無しにしよう」

「いや、わかってくれればいい。兄弟っていうんだから、疑われて当然だしね」

タケルは意外と子供っぽい笑みを浮かべた。思わず僕も笑みを返す。

単純なダイチがうまく誤魔化されている可能性もなくはないが、今日のところは良しとしよう。

その日、その後は、3人でホールの中を見て回り、地図を作った。僕たちが上ってきた階段はホールの中心で、そこから南と北にひとつずつ、電脳ではない本物の建物のビジターセンターがある。ここが両チームの拠点になるだろう。他はほとんど平坦な地形だけれど、ところどころに立ち木や小屋、せせらぎなどがあって、電脳戦上の障害物をなしている。遮蔽物に身を隠して撃ち合いながら相手の拠点を目指す、というのが基本的な戦い方になりそうだ。

ひと通り見回ると、9時過ぎになった。タケルの暗号訓練の準備があるから偵察はここまでにして、その場を後にした。

駅の北に出てふたりと別れると、久しぶりに何かをやったという実感が湧いて、少しだけ朗らかな気分になった。どうしよう、一旦家に戻って朝ごはんでも食べようか。

出し抜けにメールの着信音が響いた。メガばあからだ——僕だけに？

『ハラケン、話したいことがあるんじゃが、今から来られるかの』

「何の用ですか」

メガシ屋の薄暗い土間に1歩踏み込んで、番台の黒い影が誰か確かめもせずに僕は言った。

「なに、そう身構えなさんな」

番台の影はのんびりと言いながら立ち上がり、後ろの障子を開けた。

「カンナ！？」

座敷でひとり、おずおずと座っていたカンナは、決意と後悔の半分ずつ入り混じった目で僕を見た。

その時僕がどうしたかというと、場違いにも笑ってしまったのだ。何故って、僕はカンナのことが大好きだと、改めてわかったから。

カンナは僕を信じたくて、でも信じ切れなかったのだろう。だからメガばあに相談した。カンナの後悔は僕を信頼できなかった後ろめたさと、そういう自分への自己嫌悪だ。

じゃあ決意は？　それは、カンナの、何と言えばいいのだろう――そう、僕を守ろうという意志だ。それがたとえ僕を裏切ることになっても、たとえ僕に嫌われても、カンナは僕を守りたいのだ。

いつも僕の後ろをついてきて、僕の真似ばかりしていたカンナの、6年になっても身長はフミエの次の次くらいで、4年からこっち急に伸びた僕とずいぶん差のついてしまった小さいカンナの、どこにそんな強いものが隠されていたのか。それが本当に愛らしくて、その気持ちが僕に向けられていることが嬉しくて、だから僕は笑ってしまったのだ。

「カンナがの、不安だと言いよるんじゃよ。おぬしが何を考えておるかわからんとな」

メガばあの表情は逆光でよくわからなかった。

「のうハラケン。おぬし、今度の果し合いで何を企んでおる？」

口調は柔らかだが、ぐっと斬り込んでくるような凄みがあった。

メガばあに嘘はつけない。そして、カンナに嘘はつかない。

「言えません」

だから僕はそう答えた。

「言えぬじゃと」

メガばあの影から妖気が走り、後ろのカンナは泣き出しそうな顔で僕をにらんだ。

「カンナ！」

僕はメガばあを通り越して呼びかけた。

「僕はカンナのことが好きだ」

「な？　おぬし何を――」

「だから、引越しまでにやらなくちゃならないことがある。カンナが幸せになるために、ううん、僕がカンナを幸せにするために」

「研一」

カンナは僕の名を呼んだきり、次の言葉に詰まっていた。僕には彼女がどういうかわかっていたけれど、あえて言わずにカンナを待った。

「信じていいの」

胸に冷たい感じがあった。

「信じてくれ」

「メガばあ、もういい」

カンナの目から涙がひと筋だけこぼれた。

僕はもしかすると、カンナの涙を止める方法を知らないのかもしれなかった。そうでも、僕は止めなければならないと、その時はそうとばかり考えていた。

第１４話　空中楼閣の決戦（前編）　Ｃ　ｐａｒｔ（後書き）

Ａ、Ｂパートでは「前編」と入れるのをうっかり忘れており、申し訳ありません（先日修正しました）。探偵局と黒客の運命をかけた一戦はじっくりと描いていくつもりですのでご期待下さい。

第１４話　空中楼閣の決戦（前編）　Ｄ　ｐａｒｔ

果し状が届いてからの日々はあっという間だった。
というのは嘘だ。忙しい時間を後で思い出して見るといろんな体験があって、とても何十時間の間の出来事とは信じられない。特に今回は、タケルから特訓と暗号のレクチャーを受けるというイベントがあったからなおさらだ。結局私には暗号は無理だったけど。
タケルによると、暗号を使えるかどうかはスキルより体質の問題らしい。カンナはともかく、私たちを差し置いてヤサコだけが暗号を覚えることができたのはそのせいだと。でも、そう教えられても、今まで電脳関係ではヤサコの先輩のつもりだった私としては、微妙に悔しい結果だった。
そしてもうひとつ、長い3日間を忘れられない時間にする出来事は、決戦の前の夜に起こった。

ダイチから電話があったのは夜の8時過ぎだった。私はすぐに取った。
「もしもし」
「おう、久しぶり」
夕方までタケルの特訓で一緒だったんだから、久しぶりもない。
「何か用」
「つれねえな。お前、今暇か」
「暇じゃないわ」
「そ、そうか。じゃあ仕方ねえ」
性急に電話を切ろうとするので私は慌てた。
「ちょっと待ってよ。用があったんじゃないの」
「あるにはあるんだけど、忙しいなら後でいいし」
「忙しくないわよ」
自分がどうしたいのかというと、ダイチから連絡をもらえたのは

結局嬉しかった。と同時に不安でもあった。何が不安なのかわからないのがますます不安を助長した。でもダイチの声を聞いているだけなら楽しかった。それならその時間がもう少し長く続いてもいいと思った。

「会いたいなら時間、作るわよ」

だからそう答えたのだ。

「そうか」

ダイチの声は目に見えて明るくなった。

「なら、そうだな。丑子神社まで来てくれねえか。時間は取らせねえから」

「OK」

電話を切ると私は5分で支度を整えた。

「ごめん。小此木先生の勉強会行ってくるわ」

ここ数日、夜まで続いた特訓を私はそう言い訳していたのだ。

「あんた、こんな時間に。先生に迷惑かけるんじゃないわよ」

「はーい」

お母さんの小言は背中で流して、スニーカーに足を通した。

私は上気していた。家から丑子神社まで走り通してきたからというものあるだろうけど、理由はそれだけではないはずだ。胸は騒いで次第に不安よりは期待が勝る。だから、ダイチがどんなことを言ってきても、その期待の勢いでもって答えられると思った。

早い鼓動が耳に届き、いつからか音楽が頭に響いていた。いつかテレビでやっていたのをたまたま聴いただけのうろ覚えだけど、そのこじんまりと楽しげなメロディは脈拍に合わせて幸せな反復を続けていた。

ダイチは神社の脇のベンチにひっそりと座っていた。私を見るとゆっくりと立ち上がり、申し訳ないような笑みを浮かべた。

「すまねえな、遅くに」

「いいわよ」

ダイチの姿を見ても音楽が鳴りやまないことに私は感謝しつつ、その次の言葉を待った。

「考えてみりゃ、いろいろあったよな、俺たち」

ダイチは下を向いて、ありもしない石ころを蹴とばす仕種をした。音楽はテンポを落とし、楽器から楽器へメロディを引き継ぐ。

私は黙ってうなずいた。

「これからもあるんだろうな、いろいろ」

その言葉は青い芽のように心に根づいたから、私は笑ってもう1度うなずいた。頭の中の音楽のテンポが落ちてメロディが繰り返される。少しずつそれは遅くなって、懐かしい思い出と同じだけの距離を描く。

「お前はこれからも同じなのがいいか？」

「えっ」

予期しない質問に、私はダイチの顔を眺めた。不意にメロディが予期しないラインを描いてさっきまでと離れた道に歩み出す。次から次へと引き継がれ、めくるめく景色になった音のうねりが、私の知らない未来を描き始める。

「俺は違っていいと思う。つまり、俺はお前が好きだ」

私は答えられない。ダイチの質問を予想していなかったわけでも、答えが見つからなかったわけでもない。ただ音楽は頭の中に全奏で鳴り渡って、私は言葉を失っていた。流麗なままに音楽は力強さを増して、過去も未来も輝かしさの中に包み込むような強奏で、突然終わった。

終わるとほの暗い神社とダイチと私しかなかった。そのことに私はにわかに慌てた。

「好きって――」

「好きは好きだ。前からそうだった。けど言えなかった。けどもう言わなくちゃ嘘だから言った」

ダイチが言えなかったのは、ダイチと私の過ごしたこの時間がものすごく大切なものでそれを壊したくなかったからだ。それを私と

同じようにダイチも感じていることが、私には嬉しかった。同時に、ダイチの口からそれを言わせてしまったことが悔しかった。私だって同じように感じていたのに、私からは何も言うことができなかった。ふたりは無限に循環する旋律のようにいい友達で、そこから踏み出すのが怖くて、私はずっと決められた自分の役割を演じてきたのだ。

だけど私は嬉しかった。ダイチと一緒に踏み出したいと思った。

「まだ、待って」

けれど、口から出た言葉はそれだった。

私は踏み出そうとして臆病になった。だから、ダイチと私は釣り合わないのかもしれなかった。そしてやっぱり怖かった。何が何だか分からなくなって視界が歪み、まとまりのない言葉の断片ばかりが頭をよぎった。

「待ってて！」

叫びながら、いつの間にか私は暗い道を走り出していた。

第１４話　空中楼閣の決戦（前編）　Ｅ　ｐａｒｔ

一夜明ければ雌雄を分かつ決戦の朝である。だからといってことに早起きしたりもなく、いつもどおりの朝を過ごしてから、そこだけいつもと違って、お兄ちゃんと私は一緒に家を出た。

今となってはお兄ちゃんの存在を秘密にしておく意味もなくなったから、これまで屋外で会うことを避けてきたのももう解禁だ。そう思うと晴れがましい気分にさえなったのだから、我ながらうかつだったものだ。

けれど、それも無理ない。この時点で、私は黒客の負けの可能性を全く予期していなかった。

ヤサコ、フミエ、ハラケン、それにダイチを足したくらいなら、私ひとりでも楽に勝てる。カンナははっきり言って戦力外、問題は後のひとりだが、こっちにはお兄ちゃんがいる。

最初に果し合いに加わると聞かされた時には、自分がお兄ちゃんに信頼されてないのかと思って落ち込んだりもしたが、いざこうしてふたりで歩けば、思い浮かぶ大黒に来る前にふたりで残した戦果の数々、お兄ちゃんは一番頼れるパートナーだった。運動能力や暗号のスキルを含めた純粋な力では私のほうが先に立つが、情報面でのサポートやとっさの判断、作戦指揮能力でお兄ちゃんを超える人間はそうはいない。

だからこの戦い、万にひとつの負けもない。

「イサコ、油断するな」

だが信頼の相手は、いつになく鋭い視線で私を射た。

「わかってるわ。でも、勝てる戦いよ」

お兄ちゃんは黙って首を振った。

「不確定要素はある」

「不確定要素？　猫目タケルのこと？」

「ああ」

確かに突然現れたタケルという伏兵には、最初私も動揺した。だが、タケルの電脳クラブでの経歴については、ネットの関係ありそうな部分はかなり洗いざらいにさらったのだが、通り一遍のものより他には見つからなかったのだ。

お兄ちゃんは、私の顔を見ただけで何が言いたいかわかったようだ。

「兄の宗助と組んで、行動の痕跡を消したのかもしれない」

「その可能性もあるけど」

だが、もしそうなら、タケルは空間管理室の手駒だということになり、そこからタケルの最大戦力を推し量れる。つまり、空間管理室の最大戦力であるサッチーと同レベルということだ。本当にタケルがサッチー並みの力を隠しているとして、確かに強敵だが、それでも今の私ならひとりで倒せる。

大黒に来たばかりの頃より、私は格段に強くなった。お兄ちゃんはひょっとするとそれをわかってないんじゃないだろうか。なら、お兄ちゃんに知ってほしい、見てほしい、私の力を。

「油断はするなよ」

お兄ちゃんは繰り返した。心に赤く熱するものがある。わかった。油断なんてしない。今日は全力で、コイル探偵局をたたき伏せる。

決戦場となる空中庭園には、ひと足早く探偵局のメンバーが集まっていた。

「貴様ら、早く来て小細工でも仕掛けてたんじゃねえだろうな」

いつになくテンションの高いガチャギリが仕掛けると、

「るせえ！　俺たちがんなことするわけねえだろ」

いつもどおり頭に血の上ったダイチがどなり返す。

「ふたりとも押さえておけよ。どっちにしろこれから好きなだけ暴れるんだから」

なだめにかかったのはハラケンだった。ふたりの鼻息が収まるのを見計らって地図を広げる。

「メールでやり取りしたからわかってるとは思うけど、ルールを確認しよう。まず、果し合いの参加者は6人ずつ」
ハラケンはそこで少し顔を上げ、全員がうなずいた。
黒客のメンバーはお兄ちゃん、私、ガチャギリ、ナメッチ、デンパ、アキラだ。
対して探偵局は、ヤサコ、フミエ、ハラケン、カンナ、ダイチと助っ人のタケル。
「フィールドはこの空中庭園の中だけ。外へ出ようとした者は、階段の扉を開けた時点で無条件に失格」
それも前に決めたとおりだ。
「対戦の方式は殲滅戦。つまり、どちらかの全てのメンバーがメガネを壊されるか、それとも降伏のフラグを立てるかまで続く。勝った側は、負けた側が集めてきたパスワードを全て差し出した上で、勝った側が許すまでメガネの使用をやめる」
改めてそれを聞いた瞬間、場の空気が緊張に包まれた。勝ちには大きい、負けには辛い条件だ。今日1日の勝負でそれが決まる。
「いいね」
ええ、ああ、うん、と人ごとに違うが、同じ決意のこもった返事がぱらぱらと返された。
ハラケンはその決意を自分にも確かめるようにうなずいた。
「よし。じゃあそれぞれの拠点に分かれよう。対戦開始は１０分後だ」

緑濃い草を駆け足に踏み散らし、私たちは黒客の拠点、南のビジターセンターへ向かった。ビジターセンターなどと言っても、大部分の備品は撤去されて、今はむなしい白壁を背に、ひびの入ったガラスの扉と、いくつかのテーブルやいすが散乱するだけの場所だ。
「最後にフィールドの確認だけしておこう」
お兄ちゃんはそんなテーブルのひとつに、お互いひとつずつ配られたマップを広げた。

「空中庭園内の構造物は、中央の支柱部分と、それぞれの拠点がある南北のビジターセンター以外、全て電脳物質だ。だからと言って壁に飛び込んだりしたら一発でメガネが壊れるけどね」
デンパが不安そうに両手で自分のメガネを覆った。
「庭園は1辺約70メートルの正方形だ。ちょうど真ん中に支柱、南北の角にビジターセンターがあるのはさっき言ったとおり。東側はどちらかというと平地が多いけど、小屋と土壁がいくつかある。西側は立ち木の密度が濃いな。視界が利きづらい。それと北のビジターセンターのすぐ西は池だ」
「池に入ったら敵から丸見えの狙われ放題。僕たちは東から攻めるしかないってわけですね。陣取りで不利になったな」
腕を組むアキラの頭を、ガチャギリが小突いた。
「生兵法だぜ。逆に敵は東から追い詰められたら逃げ場がねえってことだ」
「それなら提案っす」
ナメッチが両手を上げてアピールする。お兄ちゃんが返事がわりに微笑んだ。
「敵が足並みを整える前に急襲しちまうってのはどうすか。スタートと同時に全力ダッシュ。東回りで敵の拠点を目指すってのは」
「いいね。その作戦は敵の行動範囲を大きく狭める、同時に敵の取れる作戦も限られたものにしてしまう」
お兄ちゃんはうなずいて、私を見た。
「イサコはどう思う?」
「気がついた?」
私は聞いた。
「えっ? 何を」
「太陽の昇る早さ。ここ、3時間もすれば陽が落ちる」
だから、勝負などすぐに終えてお兄ちゃんと夕映えの景色を見たいと思った。

第１４話　空中楼閣の決戦（前編）　Ｅｐａｒｔ（後書き）

第１４話はここまでです。次回からの後編はいよいよ決戦です。

第15話　空中楼閣の決戦（後編）　Ａｐａｒｔ

母によると、小さい頃の私は、とろいわりに時々信じられないことをやらかしたそうです。

違和感に気づいたのは走り出した後だったから、今さら強襲を中止するわけにはいかなかった。だが放っておけば必ず痛みが来る。私はトップギアに入ろうとしていた身体の運動をわずかに留め、できた余裕で自分の体の感じを探った。

痛みが来るのは胸か、頭か。胸だったらまずい。走れなくなる。頭痛なら、これまでの経験上、なんとか耐えて戦いを続けられるはずだった。

幸い、だったのかどうか、兆候に身を固めた次の瞬間、針で突かれるような鋭い頭痛が襲った。

「くっ」

「イサコ、どうした？　攻撃か」

「違う。つまずいただけだ」

ついよろめいてしまったのを気合で立て直す。

「気をつけて！　敵が来てます」

前を見ていたアキラが叫んだ。私は痛む頭を右手で握りつぶすほどにつかみ、左右に目をやった。

目標、敵拠点までの道のりの3分の2を、私たちは走り切った。少々不足だが仕方ない、後は押し込むか。

「戦闘開始だ、散れ」

指令を受けてそれぞれが手近な物影に飛び込む。私も目の前の小屋の壁に身をそわせた。

拠点までの大体３０メートルに、障害物は多い。６人の敵がどこ

に潜んでいるのか、簡単にはわからない。
自分では冷静なつもりだが、やはり身体は興奮しているのか、脈がやけに大きく響いた。が、逆に頭痛のほうは退いていく。よし。
私は小屋から身をひるがえし全身をさらし、敵のいそうな場所めがけて暗号を数発打ち込んだ。わざとひと呼吸その場で待ち、息を吐いたタイミングで少し前の小屋に隠れる。一瞬遅れていくつかの光の筋が、さっき私の射た場所を貫いた。そっとうかがうと、前方の土の盛り上がりの向こうに栗色の髪の揺れるのがわずかに見えた。
「ヤサコの位置を確認した。集中砲火を浴びせろ」
メッセージと地図を送ると、間髪入れず黒客の攻撃が始まった。ヤサコの隠れた土山は激しく乱れて、やがてばらばらの記号に砕け始めた。泡を食って背中を見せるヤサコの姿が、今度ははっきりと視界に入った。
「お前が1番とは幸先がいい」
破壊力の高い暗号を精製し、その背中に狙いをつける。初速を上げるための暗号エンジンが、まっすぐ伸ばした手の先に4個展開した。
「消えろ！」
無意識に転がり出た自分の言葉に驚く暇もなく、暗号の弾丸がヤサコの背に伸びる。もらったと思った瞬間、ヤサコの目がこちらを見た。握られていた手がぱっと開き、鉄壁がヤサコの身を隠す。直後に暗号が着弾した。壁は暗号に耐え切れず、赤熱しながらまっぷたつに裂け、弾け飛んだ。
「ヤサコは！？」
だが確認する余裕はなかった。ヤサコのいた場所より少し前から、猛烈な攻撃が始まった。フミエとダイチか。
味方もすかさず撃ち返す。敵味方とも遮蔽物に身を隠したまま、激しい撃ち合いが始まった。
私はあえて攻防に加わらず、道順を探った。ここで無駄な銃撃に戦線を膠着させるつもりはない。こういう時の常道として、敵に見

つからぬよう単独で肉薄し、奇襲をかける。
強襲がホールの中央をやや迂回した形で行われた結果、電脳の銃撃戦が一番激しい地帯はやや端に寄った。この状態なら、手薄なのはむしろホール中心部、敵拠点の真ん前だ。心理的にも、正面からの奇襲攻撃は予測しづらいだろう。
作戦は決まった。私は身をかがめ、隠れ場所を探しながらゆっくりと移動し始めた。
5分ほどかかって道のりを半ばまで進んでも、撃ち合いは全く勢いを弱めなかった。緒戦だからお互いに勢いってものがあるのはわかるけど、少し撃ちすぎだな。短期に勝負をつけるつもりではあるが、無駄弾は避けたいところだ。急がなくては。
次の物影に移ろうとした時、予想外に近距離で誰かが動いた。私はもう動き出していた体を押し留め、息を止めてそっちをうかがった。
ダイチ、フミエの位置は把握してる。ヤサコもさっきの場所から大きく移動できてないはずだ。ハラケンと、一緒にいるだろうカンナの位置は特定できてないが、メガビーの弾幕の厚さから考えて、攻撃に加わっているのは確かだ。
ならば目の前にいる相手はひとり。猫目タケルだ。
「ちょうどいい」
探偵局の中で唯一実力のわからない相手を量るチャンスだ。込み上げる緊張感は、私にとってむしろ心地良い。
じゃり、と足音がした。わずかに頭を伸ばすと、真横5メートルくらいを黒客の拠点に向けて進むタケルの姿がはっきりと見えた。
タケルは私と同じく、迂回攻撃を考えているようだ。このまま行かせれば、ガチャギリたちが十字砲火にあう。
私は手の中に暗号を作り上げた。さっきヤサコを攻撃したものと比べるとやや弱いが、ぐずぐずしていればタケルの姿が視界から消えてしまう。狙いを定め、私は暗号を撃った。
「わあっ」

タケルの横腹で何かが赤く輝いた。タケルは慌てて手近な物影に飛び込み、そのまま足音が遠ざかった。

「なんだ、今のは」

戦いの渦中にもかかわらず、私はしばらく動けなかった。

暗号は確かにタケルに命中した。だが、その体で光ったものは私の知らないものだ。もしかして、私やお兄ちゃんの使っているのとは違う、未知の暗号？

「目標を変更する。タケルを追うわ」

私はお兄ちゃんに通信を送った。やはり、タケルは何かの能力を隠している。どんな力を持つかこの目で確かめるか、あるいは力を発揮する前に倒してしまわなければならない。

今の攻撃でもうこっちの位置は割れている。さっきより大胆に、私はタケルの逃げたほうへ進み始めた。

銃撃戦はまだ続いているが、ガチャギリたちがやや優勢に前進を始めていた。探偵局のほうは弾切れか、反撃が弱まっている。やはり、探偵局の通常戦力はさほどの脅威ではない。タケルさえ倒せば――

タケルのことばかり考えて、私は体をさらしすぎたようだった。左前方に小さな光が見え、次の瞬間衝撃を感じた。

「ちっ」

私はすぐそばの立ち木の影に身を滑らせた。メガビーだ。ダメージは大したことない。

ダイチたちはガチャとの交戦で手いっぱいだ。とすればヤサコ、それともハラケンか。

「足止めを食らってる暇はないな」

ぐずぐずしていればタケルに逃げられる。ならば。

私は圧縮しておいた剣を取り出した。さらにミニサイズの鉄壁をひとつ、目の前に浮かべる。弱い暗号を作って、メガビーの発射地点に投げ込むと、同時に全力で駆け出した。強襲突撃だ。

断続的にメガビーの攻撃を浴びたが、鉄壁を操って受け止め、な

んなく近づいた。相手の隠れた背の低い木立を剣で横になぐ。木々はあっという間に記号のかたまりになって霧消した。その向こうで、声もなく地面に伏せたのはハラケンとカンナだった。
「お前たちか……。降伏しろ」
ハラケンはともかく、カンナを傷つけたくはない。
ふたりは無言で私を振り返った。
「聞こえなかったのか。メガネを壊されたくなければ降伏しろ」
「イヤ」
答えたのがカンナだったので、私は驚いた。カンナはゆっくりと、庇うようにハラケンの前に立った。
「カンナ、どいてくれ。今の私たちは敵同士だ」
「イサコちゃんこそ、敵なんだから私を撃ったら」
「バカを言うな。お前を傷つけたくない」
カンナは泣きそうな目で私をにらんだ。
「私は違う」
私は言葉に詰まった。
「私は研一を守る。そのために必要ならイサコちゃん、あなたを傷つける」
「カンナ――」
傷つける、という言葉が頭の中で何度もこだました。
今度もそうだ。
私は戦いたくないのに。カンナと一緒にいたいのに。私の思いはいつも伝わらない。カンナだって、お兄ちゃんだって、お姉ちゃんだって――
ハラケンの手が動いて、私は我に帰った。慌てて壁を動かしたのと同時にぱんと音が響き、猛烈な煙が視界を閉ざす。
「クソッ、目くらましか」
「イサコ、何やってんだ。お前の姿、敵から丸見えだぞ」
ガチャギリから通信が入った。私は身を伏せた。
「すまない。ハラケンたちを見つけた。位置を知らせる」

「ラジャーっす。でも、こっちもヤサコを見失いました。気をつけてください」
「わかった」
ナメッチの応答に短く返信して、私は小走りに進んだ。ハラケンの姿は前方に見え隠れしている。おそらくタケルと連携しているのだろう。
さっきの動きからいって、タケルは恐らく私の右手に潜んでいるに違いない。妙にこっちに姿をさらしているところからすると、ハラケンが囮になって私の不用意な攻撃を誘い、タケルに攻撃させる作戦だな。
そうは行くか。私はあえてハラケンに攻撃せず、影から影へと、右に向かって移動した。ハラケンはこの際無視していい。当初の目的どおり、あくまでもタケルを追う。
「早く尻尾を見せろ」
口の中でつぶやきながら側面移動を続ける。ハラケンから断続的な攻撃があったが、私を見失ったようだ、見当外れの方角を向いている。
かなり右手に移動したと感じた時、草陰にシャツの端が見えた。
「いた」
タケルは私に気づかず、ハラケンの攻撃するほうを注視している。チャンスだ。
「今度は逃がさないぞ」
剣をしまい、強力な暗号を精製する。さらに追加のエンジンを組み込んだバレルを伸ばし、貫通力を強化する。トリガー発射式の、言うなれば暗号狙撃銃だ。
タケルを仕留めれば後は烏合の衆、この一撃は今日の勝敗に重要な意味を持つ。私は身を伏せ、狙いを定めた。
タケルはわずかずつ動いている。
「もう少しだ。もう少し姿を見せろ」
もうちょっとでタケルの姿が完全な射程に入る。白いシャツはも

うはっきりと見える。さらに髪。そして顔。指がトリガーにかかった。

タケルの顔がこっちを向いて、笑った。

「何！？」

全身の体温が下がった。気づかれてる！　慌ててトリガーを引く。どん、と腹に響く発射音がして、しかしタケルは飛びすさった。同時にすぐ近くで着弾音が3つ。胸に強烈な痛みが走った。

「しまった！」

伏せ撃ちの体勢を取っていた私は、とっさの動きができなかった。鉄壁を目の前に作るのが精いっぱい。

再び着弾があった。今度はふたつ。幸い体には当たらなかったが、狙撃銃がばらばらに吹き飛んだ。

「タケルじゃない」

ようやく私は気がついた。攻撃は正面のタケルからではなく、ハラケンのいる方角からでもない。まさか、ヤサコ！？

新手の攻撃は、短いスパンで続く。狙いは正確ではなく、周りの空間が次々に乱れた。

私はなんとか立ち上がり、ヤサコのいそうな辺りに暗号を放ちながら後退を始めた。が、それはかなり難しかった。

タケルが反撃を始め、私は十字砲火にさらされていた。鉄壁を何枚用意しても、強烈な攻撃ですぐ溶解してしまう。さらに、ハラケンからのメガビーも私の足を鈍らせた。ヤサコとタケルへの応戦に追われて、ハラケンの攻撃にはほとんど対処している暇がない。威力は大きくないが、時々メガビーの直撃を受け、じわじわと耐久力を削り取られた。

不用意、うかつ、後悔の言葉ばかりが心に浮かびあがる。バカ、そんなこと後でいくらでも反省できる。それより、今ここを切り抜ける方法だ、それを考えなくちゃ。

だが、名案は何ひとつ思い浮かばない。

絶体絶命。そうとしか言えなかった。

第15話　空中楼閣の決戦（後編）　Ｂ　ｐａｒｔ

「すごい！　いけるわ」
カンナが興奮した声を上げた。上気して朱の乗ったほおがきれいだ。と、つい余計なことを考えてしまうのを、僕は頭を振った。
目前で予想もしていなかった光景が展開されていた。イサコが押されている。
「研一、何やってるの。援護射撃！」
カンナが背中をたたく。そんなことをいうなら自分で攻撃すればいいとも思うのだが、カンナは今回、後方支援係の意味合いが強く、メンテナンスキットばかり買いこんでいたから、メガビーは最低限しか持っていないのだろう。
「う、うん」
僕はメガビーを撃った。面白いように当たる。ヤサコとタケルの攻撃に手いっぱいのイサコは、僕の攻撃にはほとんど無防備だ。
「ほら、もっと。もうちょっとでイサコちゃんを倒せるわ」
「わかってるよ」
メールを打ちながら僕は答えた。
「わかってるならメールなんか後にしてよ」
カンナは口を尖らす。
「そうも行かないさ。今は僕よりもヤサコのほうが攻撃力が高い。イサコの正確な位置をヤサコに伝えるのが先だ」
「そんなものかしら」
「そんなもんだよ」
メールを送り、僕はもう1度イサコを見た。
イサコはぎりぎりのところで暗号攻撃を防いでいた。黒客は援軍を出そうとするはずだが、ダイチとフミエががんばっているせいで、今のところ前進は難しい。
「膠着してるな。手を打たないとまずい」

僕はカンナを振り返った。
「そう？　かなりこっちが有利に見えるけど」
カンナは首を傾げる。
「今はね。だけど、もうすぐ黒客が攻めてくるだろう。イサコを失ったら一気に不利になることくらいわかってるだろうからね。そうしたら、ダイチとフミエのラインが危ない」
僕が言った途端、黒客のほうから数発の暗号が飛んできた。ここまでは届かなかったけれど、カンナはびくっと首をすくめた。
「いくらヤサコが暗号を使えるようになったっていっても、急ごしらえなことは否めない。次の一手を考えないと」
「何か作戦があるの」
「ああ」
僕は強くうなずいた。
「まずダイチとフミエを後退させる」
「えっ！？　どうして。せっかくイサコちゃんを倒せそうなのに」
「イサコを倒すより黒客の攻勢のほうが早いはずだ。みすみすダイチとフミエを失うより先に、ふたりを退かせる」
「それで」
カンナは納得いかない表情だったが、とにかく先を促した。
「ダイチのラインが消えれば、黒客は必ず前進してイサコと合流する。そこが狙い目さ」
「狙い目って？」
「1ヶ所に集まった黒客が反撃を始める前に、僕たちが周りを囲んでしまうんだ。包囲戦ほど防御側に不利な戦いはない。いくら黒客の火力が高くても、それを有効に使う前に倒すことができる」
「ふうん」
カンナはわかったようなわからないような顔でうなずいた。
「僕のほうが実戦経験が長いんだから、その辺はまかせてくれ」
「いいけど――」
「よし」

カンナが不満を口にする前に、僕は作戦をメールした。

僕の送った作戦はこうだ。

まず、ダイチとフミエは左後方、僕たちとは反対の、今ヤサコのいる側へ後退する。同時にヤサコはイサコの正面へ移動し、タケルと合流する。さっきカンナに語ったとおり、イサコは真後ろへ移動を始めるだろうし、黒客は前進してイサコを助けようとするだろう。結果として、黒客は正面にヤサコとタケル、両側面にダイチたちと僕ら、3方に敵を抱えて包囲される形になる。

素早くメールで打ち合わせた結果、ダイチとフミエが最初反対したが、そのふたりが挟み撃ちに遭うのを危惧したヤサコが僕に賛成し、タケルもヤサコに同調したため、作戦は決行されることになった。

「移動しよう」

ヤサコが攻撃を止めたのを確かめて、僕はカンナの手を取った。カンナは何も言わず、僕の手をつかみ返した。少し汗ばんだ、柔らかい手のひらの感じだった。

「暑い？」

「ちょっとだけ」

ここに集まった時には東の山並みから姿を現したばかりだった太陽は、いつの間にか中天からの木漏れ日となって僕たちを照らしていた。ホールの内部では実際よりも時間の進行が早いことに、僕はその時ようやく気がついた。

陽の当たり具合でグラデーションとなって移り変わる緑の中を、カンナの手を握ったままで走り抜ける。足取りは軽い。戦いの緊張感さえいつの間にか快い刺激に変わり、昂揚した充足感が僕を満たしていた。カンナもそうだったに違いない。手と手を通じて、僕たちはこの昂ぶった気持ちを共有していた。

「大丈夫だ」

何が、とも聞かずにカンナはうなずいた。

「僕と一緒に行こう」
根拠もなしに、全てがうまくいくような気がしていた。あるいは今僕が感じている世界が既に僕の願ったことそのもので、僕とカンナはいつまでもこうしてふたりで走り続けているのかもしれなかった。
だが、それはもちろん僕の妄想だ。そう知らせてくれるおせっかいな現実は、唐突に僕たちの前に現れた。
「また会ったな」
声は、僕たちのすぐ後ろから聞こえた。
「イサコちゃん！」
カンナの声が応じ、手が離れた。と思った瞬間、温かいものが背中を押す。
2、3歩つんのめった僕が振り返ると、カンナは両手を大の字に広げてイサコに立ちはだかっていた。
「何のつもりだ、カンナ」
冷静なイサコの言葉の裏に秘められた感情は、僕にも読み取れた。だから、カンナの答えには嬉しさというよりも痛々しさが先に立った。
「私は研一を守る」
思ったとおり、イサコの表情にははっきりと傷ついた色が現れた。だが、すぐにそれを覆い隠す強い言葉で、
「お前には守れない」
イサコの手に暗号が輝くのを見ると、今度はカンナがひるんだ。
「お前がいくら望んでも、力の差は歴然だ。つまらない怪我をする前に降参しろ」
「い、イヤよ！」
むきになって言い返すカンナを無視して、イサコは僕を見た。
「ハラケン、お前から説得してくれ。カンナを傷つけたくはないだろう」
「カンナ、もういい」

僕は素直にイサコの言うとおりにした。
「もういい？　それ、どういう意味」
「言わなくたってわかるだろ。カンナの気持ちは十分わかった。イサコには勝てない。降伏してくれ。後は僕たちでなんとかする」
それでカンナは僕に従ってくれるだろうと思っていた。僕とカンナはお互いをすっかりわかりきっているものと、だからカンナは僕の意を汲んでくれるに違いないと。
それはやはり、僕の、いわば傲慢な気持ちだったのだろうか。
カンナは答えなかった。黙って僕を見つめ、僕はだから今の言葉がカンナを傷つけたのかと一瞬たじろいだ。だがそれは誤りだとすぐに知れた。カンナの表情には、子供のような疑問が浮かんでいたのだ。それに答えるすべどころか、カンナの感じた疑問が何だったのかすら、僕には理解できなかった。
僕が戸惑っている間に、カンナの顔から疑問の風は引いた。
「研一、あなたの気持ちはわかった」
「それじゃ、降伏してくれるのか」
カンナは笑って、けれど首を横に振った。
「おかしいのね。私は研一が好きで、研一も私が好きなのに、気持ちが一方通行になっちゃうこともあるんだから」
「え？」
「イサコちゃん。私、やっぱり戦うわ」
イサコはメガビーを構えたカンナをにらんだ。
「やめろ、カンナ」
「やめない」
短い答えと同時にカンナはメガビーを撃った。が、イサコの暗号が一瞬早く光線を止める。
「さすがイサコちゃん。やるわね」
メガビーを止めたカンナは姿勢を低くしてカンシャクを投げつける。イサコは鉄壁で攻撃を防ぎながら言う。
「カンナ、最後の警告だ。攻撃をやめろ。やめないならお前のメガ

ネを壊す」
「望むところよ」
カンナは再びメガビーを構えた。
「カンナ！」
叫んだのは僕かイサコか、それともふたり同時か。
ぱっと光が流れた。流れたというのは本当に碧い閃きが水のように流れ、僕はきれいだとすら思ってしまった。でも流れとは流れて消えるもので、たとえ流れが悠久の昔から存在しても、瞬間瞬間に流れ下るそのものはほんのわずかなきらめきにすぎない。だから僕がきれいだと思った根底は、悲鳴のような僕の寂しさだったのだ。
視界が暗転し、再び明るくなった時、困ったみたいな顔でほほえむカンナがいた。
「ごめん研一、負けちゃった」
カンナの手の上には煙を上げるメガネが乗っていた。
「痛ぶりたくはない。だから1度で片を付けた」
うつむいたイサコの表情は見えなかった。
「メガネは完全に破壊した。修理には時間がかかるだろう」
心臓がどくんと鳴った。
「ハラケン、次はお前だ」
だが、失策を反省するゆとりもなく、イサコの瞳の縁が輝いた。攻撃が来る！　間一髪、僕はその場を飛びのいた。
「研一、逃げて！」
破壊された空間のノイズに混じって、カンナの声が聞こえる。用意しておいた鉄壁を数枚投げつけて、僕は駆け出した。
「何だ、これは！？」
イサコの声。鉄壁は対暗号用に特化したものだ。そう簡単には破れない。逃げ切ることはできるだろう。
だが、カンナのメガネを壊されたのは痛恨のミスだった。誤算を取り戻す方法を、なんとか考え出さなくてはならない。
かなり長い間走り続け、気がつくと、ヤサコから通信が入ってい

た。
「ハラケン、今どこにいるの？　イサコはどこ？」
自分の場所を確かめると、フィールドのかなりはずれまで来ていることがわかった。僕はヤサコに、自分の位置情報とカンナが脱落したことを伝えた。
「そう、カンナが。残念だったわ。私たちは――」
ざっとノイズが入って通信が乱れる。
「ヤサコ？」
激しい雑音が散発的に響いた。それに隠れて誰かの叫ぶ声が聞こえるが、誰なのか、まして何を言っているかはわからない。
「どうしたんだ、ヤサコ！」
遠くに赤い光が走った。ヤサコの暗号だ。と、今度は大きな爆発が立て続けに3回。見事な枝を張った桜の木が根元から倒れて、花の代わりに記号の欠片を散らした。
唐突に通信のノイズが切れた。
「こちらタケル。黒客主力と交戦中！　こっちは僕とヤサコしかいない。援軍を頼む」
黒板を引っかいたような高音が走って通信が切れた。
「すぐ行く！」
僕は走り出した。
カンナのことは一旦忘れなくてはならない。今この戦いが、僕の力を必要としていた。

第１５話　空中楼閣の決戦（後編）　Ｃ　ｐａｒｔ

ドームの中のほとんどが電脳だけでできているというのは、戦いにいつもと違う効果を付け加えていた。木や草、建物のような障害物が、攻撃によって消滅してしまうのだ。敵から丸見えでは身を守れないから、本格的な撃ち合いが始まると、戦いはお互いに移動しながらのものになった。それが、チームワークに優れた黒客にはプラスに、実戦慣れしてない私たちにはマイナスに働いた。

「黒客のやつら、どこにいるんだ。ヤサコ、見える？」

木陰から向こうをのぞいていたタケル君が振り返った。私は首を左右に振った。

「ごめん、私にもわからない」

私たちが今相手にしているのは多分、イサコ以外の黒客全員。多分というのはそのはっきりした人数すら私たちには把握できていないからだ。

「イサコはカンナを倒した後、ダイチたちと交戦中。ハラケンからその後連絡は？」

私は再び首を振らざるを得ない。

「まだ来ない」

すぐ来ると言ったはずのハラケンは、待てど暮らせど到着しなかった。その間に戦局は少しずつ悪化している。

草の間から顔をのぞかせると、傾きかけた太陽の光が目に飛び込んで、私は思わず手をかざした。

「ヤサコ、危ない！」

タケル君の手が腕を引っ張った。間一髪、あおむけに倒れた頭の上をミサイルが通過する。すぐ後ろで爆発音が起きた。

「クソ！」

タケル君が暗号を放つ。草陰から放たれたレンガ壁がそれを防いで四散した。乱れる空間の向こうに、腰をかがめて走り抜けるナメ

ッチの姿がわずかに見えた。
「黒客のやつら、ばらばらに分かれて連絡を取りながら進んでるな。このままじゃ、包囲するはずが逆にされることになる」
「移動しましょ」
私はタケル君のすそを引いた。
「今のでここの位置もはっきりばれちゃったわ。集中攻撃を受ける前に他の場所へ」
「うん」
私たちはなるべく草深い方に向かって、並んで進み始めた。

「予想外に苦しい戦いになったな」
私たちから見て右手、つまりフィールドの東側に向かって進むと、草の丈が高くなり、その中にぽつぽつと、土を固めた粗末な壁の残骸が見え始めた。古い町の遺構か何かを気取ったものだろうか。あんまり気持ちのいい場所じゃないけど、隠れ場所には適していた。
うまくふたりの全身を隠してしまえる壁の裏手に腰を降ろして、私は味方に現在位置をメールしていた。単調なキーをたたく仕種を繰り返しながら、心は歯噛みしたいような焦りと、でもそうしたらいいのかわからない不安でねじくれていた。きっとタケル君も同じことを考えているはずで、でもそれを言葉に出そうとすれば不満のぶつけあいになってしまいそうだから、メールを送った後も、私はしばらく変わり映えのない送信履歴を眺めていた。タケル君の言葉はそんな時のものだったから、私の返事はいくらか強張っていた。
「ごめん。私の戦い方が下手で」
私が手に入れた「暗号」は、威力だけならメガビーはもちろん、黒客のミサイルとさえ比べ物にならない。うまく使えば、イサコとだって互角の勝負が望めるほどだ。けれど、こんな時ものをいうのが単純な攻撃力だけじゃないということを、私は身をもって思い知らされていた。
「いや、別にヤサコを責めてるわけじゃないんだ」

タケル君は慌てて手を振った。
「戦い方っていうなら、僕だってさっぱりだよ。電脳戦なんて知識だけで、これまで1回も体験したことがなかったから。やっぱり頭だけじゃダメだね」
「あら、タケル君って、こういうの初めてだったの」
私は少し驚いて聞いた。宗助さんの弟だというのもあって、てっきり実戦経験豊富なのだろうと思っていたのだ。
「うん。残念ながら」
私の言葉の中にいくらかの失望感が混じっていたことを敏感に察したのだろうか。タケル君は苦笑して頭を下げた。
「電脳クラブへの参加は、そもそも兄ちゃんから禁じられていたからね。父ちゃんがコイルスで技師を務めていたから、スキルだけは手に入れたけど」
「そうだったの。あなたの暗号もお父さんから教わったの」
「それはちょっと違うな」
タケル君は寂しそうに首を振った。
「まず、僕の使ってるのは暗号じゃない。それに似た力を複製した消耗品だよ」
タケル君はポシェットを探ると、小さなカードのようなものをいくつか取り出した。
「これを電脳体に埋め込んで使うんだ。君たちのメタタグみたいなもんだね。前にも言ったけど、暗号を体得できるかどうかは体質的なもの。僕も兄ちゃんも無理だった。その意味では、ヤサコがちょっとうらやましいな」
笑顔がなおさらに寂しげだった。
「後ね、父ちゃんから『教わった』っていうのも、本当は違うんだ。僕がまだ小さい頃、父ちゃんはいなくなってしまったから」
「いなくなった!?」
「うん。6年前、メガマスがコイルスを買収したろ。同じ頃に、父ちゃんは失踪した。いまだに行方がわからないんだ」

「ごめんなさい」
自分の質問のうかつさに気がついた私は頭を下げた。
「思い出したくないことだったでしょ」
「いいんだ、僕が話したいから話してるだけだよ」
タケル君の視線は懐かしい昔とも遠い将来ともつかないどこかを見つめていた。
「僕は父ちゃんの残した技術を調べて、そこから失踪の原因と、できるなら今の父ちゃんの居場所をつかみたいと思ってる。実をいうと君たちに暗号のスキルを伝えたのも、誰かが暗号を獲得することで、新しい手がかりが見つからないかと考えたからなんだ」
タケル君は私に向き直った。
「僕のほうこそ、ヤサコを僕の目的に巻き込んでしまってすまないと思ってる」
「そんなことない。暗号のことはすごく感謝してるわ」
私もまっすぐ、タケル君のほうを向いた。
「それより、お父さんの話、何かできることがあったら私たちも協力する。うちのオジジ、えっと、だから私の父方のお祖父さんなんだけど、けっこう有名な電脳技術者だったのよ」
「うん。それは兄ちゃんからも聞いてる」
「あっ、そうか」
言われてみれば宗助さんは探偵局の会員なんだから、知らないわけがない。
「あら？　でも、宗助さんからは今のお父さんの話、1度も聞いてないわ」
「だろうね」
タケル君は両手を膝の上で握りしめた。
「兄ちゃんは今、空間管理室にいる。父ちゃんを失踪に追いやったメガマスの側にだ。おまけにそこで、父ちゃんの設計した実験空間の痕跡を抹消しようとしてるんだ」
「実験空間って？」

「都市伝説で”あっち”って呼ばれてる空間があるだろ。僕は確かめたことがないからわからないけど、きっとそれだと思ってる」
「”あっち”！？」
「ヤサコ」
タケル君はいぶかしそうに眉根を寄せた。
「何か知ってるの」
「わからない。わからないけど、現実とは違う空間を見たことはある。古い空間の奥で……」
「それだ！」
タケル君は私の肩をつかんだ。
「『古い空間』って呼ばれてるものは、元々コイルスが整備して、メガマスに更新されてない空間のことなんだ。父ちゃんの実験空間は、当然古い空間のどこかに隠されているはずだ」
「ま、待って」
頭の中に様々な出来事が行き来する。夕映えの世界、ミチコさんの噂、お姉ちゃんのこと、それに――
「イリーガルは？　イリーガルって、”あっち”で生まれたものでしょ。それもあなたのお父さんの作ったものと関わりがあるの？」
「いや」
タケル君は私から手を離して、両腕を組んだ。
「それは違うはずだ。僕の調べた限り、”あっち”にオートマトンを置いた形跡はないんだ。そんなものがいつの間にできたのか、あるいは実験空間が根本的な変異を起こしたのか」
「もしかすると、宗助さんは”あっち”がお父さんの作った空間とは違う、危険なものになってしまったから、それを封じ込めようとしてるのかしら」
「違うよ、そんなの！」
タケル君は叫んで、その後ではっと気づいて自分の口を覆った。
その後に小声で続けて、
「違う。違わないにしても間違ってる。わけもわからずに危険だか

ら消してしまおうなんて乱暴だ。メガマスはこのことを公表して、社外の力も借りて調査すべきだ。そうすれば、父ちゃんだってきっと戻ってくる」

最後のほうには声が歪んでいた。

「タケル君――」

どう言っていいかわからず私がつぶやいた時、隠れていた土壁の一部がぱっと光って崩壊した。

「しまった、気づかれた」

今できたばかりの裂け目から私は身を乗り出した。隠れる誰かの頭がちらりと映る。瞬間、目の前の空気が凝る感触があった。意識の流れに逆らわず、眼前の空間に力を集中して、一気に放つ。赤い光が草むらの陰に飛んだ。

「げっ！？」

悲鳴でガチャギリ君だとわかった。メガネを壊すほどではなくとも、かなりのダメージを与えるのには成功したらしい。もう一撃と行きたかったけれど、盛んな反撃が始まったので、鉄壁を投げてから身を隠した。

「ヤサコ、今の」

タケル君が目を丸くして私を見ている。

「ふふ、やるでしょ。たまには」

「それより、手も使わずに暗号を撃つなんて」

「え、暗号ってそれくらい普通なんじゃない？　イサコだってやってるし」

私はそれが不自然だとは思っていなかったから、タケル君の驚きのほうが理解できなかった。

「違う。僕の教えたのは、手の上に暗号を作り出す、後はその投擲だ。それは、暗号生成プログラムを埋め込むことで、本来いちいちプログラミングが必要な事項を特定の動作で代用するものなんだ。それを君は、何もない空間の上で行った」

「よくわからないけど、ショートカットをさらにショート化したみ

たいなもの？」
　激しい敵の攻撃で鉄壁が赤く溶けかけている。私は腰を浮かせながら聞いた。
「それどころの話じゃないよ。だってそれは、空間を自在に操ってるようなものだ。待てよ、ひょっとして、父ちゃんのノートにあった、意思と空間の直接接合……」
　焼けただれた鉄壁が崩れた。
「ごめんタケル君、その話は後にしましょ」
　手近な隠れ場所はと見ると、太い幹の古木と、物置小屋が目についた。
「私たちもふた手に分かれたほうがいいわ。私があの木の後ろに行く。タケル君は小屋の裏に回って」
「わ、わかった」
　タケル君は私を追って立ち上がった。すぐにも駆け出そうとすると、タケル君の手が肩にかかる。
「待って、ヤサコ」
「何？」
「必ず勝とう。それで、勝ったら暗号もパスワードも、僕に預けてくれないか。フォーマットの目をかいくぐる方法があるんだ」
「わかったわ。約束する」
　私は手を差し出した。タケル君はちょっと照れたように服の裾でごしごし手をぬぐって、その後でふたりは握手を交わした。

第１５話　空中楼閣の決戦（後編）　Ｄ　ｐａｒｔ

私はかなりいらだっていた。
ヤサコの意外な善戦、カンナのメガネを壊してしまったこと、それでいてハラケンを取り逃がした失態、全て計算違いだ。
「正面突破はきついぜ。一旦戻る」
ガチャギリからの連絡にはきついノイズがざあざあ入っていた。
かなりのダメージを負ったらしい。
「そろそろ僕が出よう」
今までもっぱら後方支援に回っていたお兄ちゃんからそんな通信が入ったのは、戦い全体が膠着状態に陥ってしまっているのを危惧してだろう。下手に長引いて空間の破損がひどくなれば、敵味方双方のメガネにも悪影響が現れる。私たちにとって、本当のヤマはこの勝負の後だ。前座の段階でメガネを故障させては、今後の戦略にも響いてくる。
「私が行く。まだ待機してて」
でも私はそう応答した。お兄ちゃんの実力は、最後の最後まで未知数にしておきたい。そのほうが、探偵局に対する牽制になる。
「だけどイサコはそろそろダメージが溜まってきたんじゃないか。そろそろ前衛を交代する頃合いだろう」
「大丈夫。この程度の損傷、これまで何度も体験済みだから。まだ戦える」
私は少しだけ、かたくなになっている。それは、ヤサコとの勝負は自分でつけたいと思うからかもしれない。それともそうでなく、もっと考えたくない理由があるのかもしれない。
「デンパ君に応急メンテのキットを渡してある。一旦下って回復してくれ」
お兄ちゃんの返信を見た時、心が暗くなった。
もういい。無視して出よう。

「イサコが出るなら、俺とナメッチが援護する」
誰かのメールが私たちのやり取りに割って入った。発信元を見ると、ガチャギリだ。
「ガチャギリさん、危ないです。さっきの攻撃で消耗してるでしょう」
アキラが止めにかかった。そういえば、最近このふたりは仲がいい。
「付け焼刃のヤサコなんかに簡単にやられるかよ。安心しとけ」
返信が来たのと一緒に、目の前のやぶの陰からガチャギリの姿が現れた。
「おい！」
私は思わず声をかけた。
メガネの一部がブラックアウトしていた。予期していたより深刻なダメージだ。
「ああ、これか」
しかしガチャギリは黒く変わった部分を指でもてあそびながら答えた。
「何でもねえ……ってわけでもねえけど、行けるところまで行くさ」
「バカ、戻れ。なんならリタイヤしても構わない。戦い続けたらメガネを壊しかねないぞ」
「かまわねえよ、メガネの1個やそこら。バックアップを取ってねえ俺だと思うか？　修理代だって、これまでお前にもうけさせてもらった分がある」
まったく普段のガチャギリらしくない答えは、私を当惑させた。
「お前、どうした？　熱でもあるんじゃないのか」
「おかしいか」
ガチャギリは歯を見せて笑ったかと思うと、急に真剣な表情なって声を潜めた。
「だがな、俺に言わせりゃおかしいのはお前のほうだ。どうしてそう突っ走る？」

「突っ走るだと？」
「ああ」
帽子の縁を押さえて深くかぶり直しながら、ガチャギリはうなずいた。
「ダイチのバカはさ、あいつバカなんだが、まあバカはバカなりにっつうか、いや、バカだからこそ、お前の意図の斜め上を突っ走ったりするんだよな。それがある意味、お前の抑えにもなってたんだ」
「抑え？」
話の見えない私は、ガチャギリの言葉を間抜けに繰り返した。
「そうだ。俺なんかから見てるとな、お前は放っておくと、ひとりで抱えきれないものをどんどん背負いこんでいっちまうみたいで」
「よくわからない」
正直に答えると、
「わからねえのがお前の長所かもな」
ガチャギリは再び笑う。とその時、ナメッチが姿を見せた。
「３人そろったぜ。行こうか」
話の中身を理解したとはいえないが、ガチャギリにはガチャギリなりの決意のようなものがあって、私には覆せないらしかった。私は黙ってうなずくと、フィールドの向こうに目をやった。

３人で進み始めてほんの2、３分か、敵の姿を最初に見つけたのはナメッチだ。
「まっすぐ前、ヤサコっす！　気をつけて」
私たちは身を伏せた。ヤサコはまだこっちに気づいてないらしく、攻撃は飛んでこない。
「ヤサコがいるってことは、近くにあのタケルって野郎も隠れてるな。ダイチとフミエ、それにハラケンの位置はわかるか？」
ガチャギリがナメッチに聞いた。
「ダイチたちはしばらく前に拠点のほうに向かうのを見たっすけど、今はどうだか。ハラケンは全然っすね」

ふたりの視線がこっちを向くより先に、私は首を振った。
「私にもわからない」
「どうする？　このままヤサコに突っ込むか？」
ガチャギリが目を光らせた。
「囮かもしれないっすよ」
ナメッチが渋い顔をする。
「だが、そうじゃなきゃチャンスだ。ヤサコのやつ、攻撃力は高くても防御は前とたいして変わらないみたいだからな」
ガチャギリは言いつのる。しかし、そういうヤサコだからこそ囮に仕立てやすいとも考えられる。
私はガチャギリの顔を見た。心なしか、ディスプレイの稼働領域が狭くなっている気がする。こいつは、こんなになってまで私を助けようとしてくれた。
「攻撃はしない」
だから、私はそう答えた。
「ここで無茶をしても敵の思うつぼだ。戻って作戦を練り直す」
「俺のことを思ってか」
ガチャギリは不満そうにつぶやいた。
「そうさ」
私は笑って見せた。
「お前は戦力だからな。危険を冒して戦うより、少しでもメガネを直して、もっと役に立ってくれ」
「人使いが荒れえな」
ガチャギリは立ち上がって背中を向けた。その背中に宿った感情を、幼い私は読み取ることができない。だからすぐ後を追おうとした。
「イサコ！」
名前を呼ばれるのと同時に景色が転がった。視界をよぎる誰かの手。赤い光。背中に衝撃を感じて一瞬直撃かと焦ったが、すぐ土の上に横倒しになったのだと気づいた。

ばん、と嫌な音がした。すぐ近くで誰かのメガネが壊れたのだ。
続けてまた光。私は半ば反射的に、鉄壁を何枚か展開した。
ナメッチが腰を落とした姿勢で駆け寄ってくる。顔のメガネは傷ついたようには見えない。ならば。
「すまねえな」
ガチャギリは真っ黒になったメガネを外した。
「役に立てなかったみてえだ」
「謝るのはこっちだ。私を助けて自分のメガネを」
「まあ気にするな。かたき討ちは頼んだぜ」
「ああ」
その場を去っていくガチャギリに、多くは答えられなかった。もちろん乱戦が始まっていたこともあるし、それに私は唐突にあることに気がついたのだ。
鉄壁に隠れて私は暗号を撃ちまくった。ヤサコと思しき正面の相手はわずかにひるみ、しかしその後で前に倍する攻撃をかけてきた。側面からも新手の敵が加わる。ダイチだ。
「ひええ」
ナメッチは情けない悲鳴を上げながらも、どんどん破られる鉄壁を補充し、隙があれば攻撃し、しかも意外と的確に敵の位置を捉えている。
ダイチのミサイルが着弾した瞬間、私は声をかけた。
「ええっ！？　何すかあ！」
聞き返すのには答えず、私は暗号を撃った。

第１５話　空中楼閣の決戦（後編）　Ｅ　ｐａｒｔ

「ガチャギリをやったか」
私のすぐ後ろに立って戦場の様子を観察していたダイチがつぶやいた。その言葉には、どことない寂しさがにじみ出ている。敵を倒したなら喜べば良さそうなものだけど、それがほんのしばらく前までの仲間だとわかっていれば、複雑なものがあるのはよくわかる。
「そうね」
あまり細かくは突っ込まず、私はそれだけ答えた。
「これでお互いひとりずつ脱落ね」
「そのひとりをさ、もう少し増やしてみねえか」
「えっ」
思わず振り返ると、ダイチの顔は寂しさの模様でなく、不敵な笑みが浮かんでいる。
「見た感じ、黒客はふた手に分かれてる。イサコは前衛だな。兄貴のほうは多分後ろだ」
「うん」
最前線から暗号を撃ちまくってくる相手がイサコだろうとは、簡単に想像がついた。
「イサコのやつ、最初っから前線に出ずっぱりだな。いくら強いっつっても、大分削られてるはずだ」
「じゃあイサコを集中攻撃しようっていうの？」
「ちっちっ」
ダイチは生意気に立てた指を振る。
「今の戦い方じゃ、イサコは倒せねえよ。ぎりぎりのところまで追いつめても、最後の最後で逃げられちまうだろ」
「それじゃあどうしようってのよ」
話の先が見えない私は、いくらかいらいらしてきた。
「つまりイサコを倒すには、逃げ道をあらかじめ潰しとくのが先決

ってことだ。俺たちは兄貴を狙う」

激戦はいつになっても衰える気配がなかった。ガチャギリを失ったとは思えないほどの火力で暗号を放ち続けるイサコを、少し離れた後ろから黒客の後衛が援護している。対するこっちはヤサコとタケルがイサコの正面から応戦している。さらにその横手に陣取った私たちが、ミサイルの断続的な攻撃を加えている――

「ように見えるわ、これ」

「だろう」

自慢げに答えるダイチの手には、丸い電脳のワームホールが光っている。ショートカットだ。

「俺たちの元いたところにショートカットの片割れを設置してだな、もう片方から適当にミサイルを撃ち込んでれば、敵には俺たちがあそこにいるように見えるのさ。電脳戦でよく使う手だ」

「さすが、悪知恵が働くわ」

私は半ば呆れ、半ば感心して言った。

「ほめ言葉と受け取っておくぜ」

ダイチは再び胸を張る。

「まあ、ガチャのやつがいたらばれたろうけど」

「イサコは強すぎるからこんな姑息な手段取る必要ないもんね」

「姑息な、ってのが引っかかるが、言ってること自体は間違いじゃねえ。この辺は要領っていうか、駆け引きの問題だからな」

そんなことを言いあっているうちに、うまい具合に黒客の裏手についた。生い茂った草の裏手からそっと前を除くと、予想に違わず、黒い頭が3つ見える。デンパ、アキラ、それからイサコのお兄さんだ。

「攻撃がぶれないように先に相手を決めておくぞ。俺はデンパを狙う。お前は？」

「え、ええっと……アキラ」

「お前の弟だったのが運の尽きだな」

ダイチはかなり失礼なことをさらりと言うと、反論を待たずに駆け出した。私もメガビーとミサイルを準備してアキラの背後に回る。勝負はほとんど一瞬だった。死角からの打撃で大部分の耐久力を失ったふたりは、抵抗らしい抵抗もできないままにメガネから白い煙を上げた。

苦い表情で両手を上げるふたりを目にも留めず、ダイチは叫ぶ。

「よし、このまま兄貴だ！」

イサコのお兄さんは逃げようともせず、身をすくめている。実戦経験が少ないのだろうか。かわいそうな気もしたけど、そこは決闘だ。私はメガビーを、ダイチはミサイルを、同時に発射した。

着弾と同時にざあっと画像が乱れて、お兄さんの姿はノイズにまみれた。

「やった！」

ダイチがガッツポーズを作る。

「意外とあっけなかったわね」

屈んだままのお兄さんに向かって歩き出す。お兄さんはまだ動かない。電脳体は半分がた壊れて、ところどころ向こうが透けて見える。向こうが――

「まずい！」

私とダイチが顔を合わせたのと、青い光の走ったのとほぼ同時だった。反射的に飛びのいたが、嫌な感じが半身に走った。

第2撃は、ダイチが投げた鉄壁にぎりぎりで阻まれた。私は大体の見当で攻撃のあったと思しき場所にメガビーを撃ちこむ。敵はひるんだらしく、身をひるがえす姿がちらりと見えた。自然とその場に座り込みそうになるのを、ダイチが腕を引っ張った。

「油断するな」

身をかがめた姿勢で、立ち木や茂みの多い場所を縫うように、ダイチは素早く移動する。私は腕をつかまれたままにその後へ従った。

断続的に着弾があって、私はやっとダイチの意図を理解した。攻撃元は1ヶ所ではない。イサコのお兄さん以外にも、誰かが私たち

を狙っている。
「一体誰が？」
三方を草に覆われたやぶの中に逃げ込んで、私たちはもう1度顔を合わせた。
相手のひとりは、間違いなくお兄さんだ。多分、攻撃を受けた瞬間に事情を察して、ダミーの身体を置いて自分は隠れたのだろう。判断の速さ、ダミーを作る手際はさすがイサコの兄というだけある。
でも、もうひとりがわからない。
「攻撃はフィールドの端の壁のほうからだった。正直ノーマークだぜ」
「アキラかデンパ、ってことはないわよね」
ダイチは首を振る。
「いや、それはねえ。ふたりのメガネは確かに壊れてた」
「じゃあナメッチ？」
「うーん、そうとも思えねえんだが。でも、可能性を考えるとそれしか残らねえんだよな」
ダイチは腕を組む。その腕がひどく損傷しているのに、ようやく私は気づいた。
「ダイチ、大丈夫？　かなりやられてるみたいだけど」
「お前もな」
言われて自分の身体を見ると、確かにダイチと似たり寄ったりだ。
「きっついな。メガネの耐久力、ほとんど限界だぜ」
私は通信の回線を開いた。
「ヤサコ、ハラケン、聞こえる？　こちらフミエ」
「あっ、フミエちゃん――」
応答するヤサコの声は近くなったり遠くなったりした。加えて激しいノイズ。どうやらイサコとの応酬は続いているらしい。
「タケル君がやられちゃったの」
「なんだと、あいつが？　ヤサコ、お前見たのか」
ダイチが横から聞いた。

「ううん。でも、メガネを外したタケル君が、『ごめん、やられた』って言って、壁のほうに歩いていくのは見たわ」

壁のほう――

「ヤサコ、ナメッチはそっちにいる？」

「多分。イサコ以外にも攻撃してきてる相手がいるから」

私は今日何度目かダイチのほうを向き、お互いそろそろ見飽きてきた疑惑の表情を眺め合った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9346m/

電脳コイル private edition <version 3.00>

2011年11月27日02時47分発行